

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

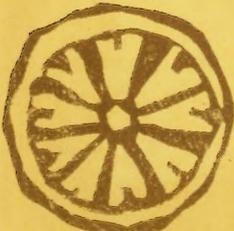
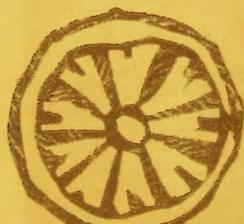
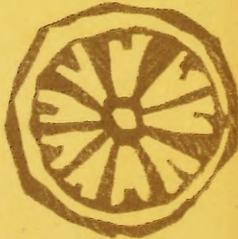
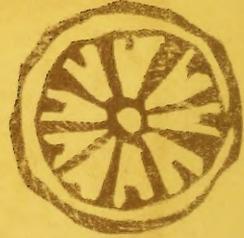
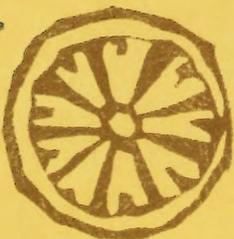
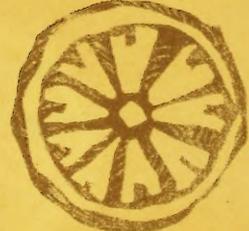
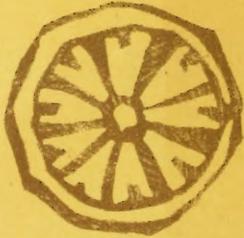
---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

EL                    Tripitaka. Japanese. 1927  
1411                Kokuyaku daizokyo  
T8J3  
1927  
v.17

East Asia





國譯大藏經

論部  
第三卷

BL  
1411  
T8J3  
1927  
V.17



目次

卷の第四十四

●第一問、須菩提が、幻人は智度を學して、佛となることを得るや、不やと問ひし理由如何(三) ●第二問、幻人には心識なし、如何が功德を行すと云ふや(三) ●第三問、佛、須菩提の間に對し、直答せずして、反問し給へる理由如何(四) ●第四問、受想行識は、幻の如くにして、異ならずといふ理由如何(五) ●第五問、識は是れ六情、六情は是れ五蘊なりと説く理由如何(六) ●第六問、十二因縁中の處處に皆五蘊あり但識の六情に五蘊ありと説く理由如何(六) ●第七問、須菩提が、「新發大乗意の菩薩の智度を説くを聞いて、驚怖せざるべきや」と問へる理由如何(七) ●外因縁の義解(一) ●第八問、恐怖せざるは、色の無常等の種種相を觀するが故なり。然るを今「一切種智相應の心もて、諸法を觀するが故に恐怖せず」と説く理由如何(一) ●菩薩の方便の義解(二) ●善知識の義解(三) ●惡知識の義解(五) ●第九問、佛は已に菩薩の字を破し給へり、今何ぞ菩薩の句義を問ふや(二) ●第一〇問、菩薩の句義とは何ぞや(三) ●第一一問、句義は鳥の虚空を飛ぶを以て明かにするに足る。然るを今之を廣説するは何故なるか(三) ●第一二問、我・乃至知者、見者等ば云何が淨なりや(三) ●第一三問、須菩提が、先づ世間の法を問ひ、然る後に出世間の法を問ひたる理由如何(二) ●世間の善法の義解(五) ●沙門の義解(五) ●婆羅門の義解(五) ●善念の義解(五) ●不善法の義解(三) ●無記法の義解(三) ●正憶の義解(三) ●第一四問、如を無爲といふ理由如何(七)

卷の第四十五.....二九—五七

◎摩訶薩の義解(三)◎第一問、是の十五心の中を、八人と爲す理由如何(三三)◎第二問、今また不動を説くは何故なるか(三六)◎第三問、舍利弗の智慧は、佛のそれと懸に殊れり。然るを舍利弗が「我も亦説かんと欲す」と願へるは何故なるか(三六)◎第四問、舍利弗が、説般若の主たる須菩提に問はずして、富樓那に問へる理由如何(四七)◎第五問、大莊嚴とは何ぞや(四九)◎第六問、但だ布施波羅蜜多の中にのみ、六波羅蜜多を生ずと説き、餘の波羅蜜多の中には、但五を生ずと説く理由如何(五〇)◎第七問、佛が布施を説いて、初門と爲し給ひし理由如何(五二)◎第八問、富樓那が、一波羅蜜多の中に、諸の波羅蜜多を生ずるをば、大莊嚴となせる理由如何(五二)◎第九問、六度の中、若し逆に説かば、應に智度の次に禪を説くべく、若し順に説かば、應に布施波羅蜜多を説くべきなり。然るを今但だ四無量心中に六度を行す(五三)◎第一〇問、四禪の中には種類の功德あり、皆六度を行すべきなり。然るを今但だ四無量心中に六度を行すことを説くは何故なるか(五五)◎第一二問、菩薩は五神道に住して、廣く衆生を度す。今それ之を説かざるは何故なるか(五五)◎第一二問、一切種に、四念處、乃至十八不共法を修する理由如何(五六)

卷の第四十六.....五八—八七

◎第一問、六度の外に尙ほ莊嚴すべき法ありや如何(六六)◎第二問、須菩提が、是の如く説きし理由如何(七〇)◎第三問、佛は須菩提に般若經を説かんとを命じ給ふ。然るに今須菩提が大乗を問ひ、佛も亦それに答へ給ひしは何故なるか(七〇)◎第四問、然らば何故に初めに大乘を説かざりしか(七三)◎第五問、但だ六度を説いて大乘と名くる理由如何(七三)◎第六問、爾らば十八空、百八三昧等を説いて、大乘と名くるは何故なるか(七六)◎第七問、六度を説けば、何故に多からず、少なからざるか(七六)◎第八問、佛は何故に、布施度の種種相の中、但五相のみを説き給ひしか(八〇)◎第九問、若し果して爾らば、但一切智相應の心を説けば、則ち足るにあらずや(八〇)◎第一〇問、一切智に應ずる心と、廻

向との相異如何(八〇)●第一一問、但十善戒を説くは何故なるか(八二)●第一二問、有所得を以て、諸の善法を集むるす  
 ち、尙ほ難し。何に況んや無所得を以てするをや(八四)●第一三問、十八空の後に必らず、常に非ず、滅に非ざるが故  
 にとあり、其の義如何(八五)●第一四問、十八空、已に諸法を攝せば、更に四空を説くは何故なるか(八六)●第一五問、佛  
 は三相を以て無爲法を説き給へり。然るを今云何ぞ無相といふや(八六)●第一六問、如法性實際は、已に無爲の中に  
 攝せり。然るに今更に之を説くは何故なるか(八六)●第一七問、眞如、法性等を過ぎたるを他法空となす理由如何(八七)

卷の第四十七.....八八—二五

◎百八三昧を釋す(九四)●第一一問、佛が此の中に於て四無礙智を説き給ひたる理由如何(一〇〇)●第二一問、三種の三昧を  
 皆金剛といふ理由如何(一〇三)●第三一問、此はこれ肉眼の見る所なるか、禪定の見る所なるか(一〇五)●第四一問、若し爾ら  
 ば云何が常邊に墮せざるか(一一〇)●第五一問、佛は多く諸の三昧を説き給ひしに汝は何故に但諸法のみを説くか(一一四)

卷の第四十八.....二六—四六

●第一一問、四念の中には、種種の觀あり、何故に但だ十二種の觀を説くか(二二九)◎四諦觀の義解(二三〇)●第二一問、智處  
 を説かずして、念處を説く理由如何(二九)●第三一問、若し菩薩、三十七品を修せば、何故に涅槃せざるか(二三)●第四  
 一問、略説すれば五百の陀羅尼門、廣説すれば無量の陀羅尼門あり。今それ字等の陀羅尼門をば、諸の陀羅尼門といふ  
 理由如何(三三)●第五一問、陀羅尼を知れば、二十の功德を得る理由如何(三四)◎印度の日月歳節に關する説明(三四)

卷の四十九.....二七—四七

●第一一問、佛は何故に發趣大乘を答へずして、發趣地を答へ給ひしか(二五)●第二一問、此の中、何をか十地といふや  
 (二五)●第三一問、是の菩薩は、未だ一切智を知らず、其の味を得ずして、云何が能く深心を得るか(二五)●第四一問、捨

相に種種あり、佛は何故に、但出世間の施のみを説き給ひしか(一五〇)●第五問、四種の口業、即ち惡口、兩舌、綺語、妄語との中、但實語のみを説く理由如何(一六〇)●第六問、菩薩は何故に、初地に住して、但十事のみを行ずるか(一六〇)●第七問、忍辱の相に種種あり、何故に但だ不顧不惱のみを説くか(一六〇)●第八問、世に代りて罪を受くるものなし、何を以てか是の願をなすや(一六七)●第九問、惡師を尊重すべき理由如何(一六八)●第一〇問、生死の中に厭はざる種種の因縁あり、但二因縁を厭はずといふ理由如何(一七〇)●第一一問、菩薩は怨親平等なり、何故に共に住すべからざるや(一七〇)●第一二問、聲聞辟支佛は何を以て彼岸に到るや(一七五)

卷の第五十.....171—104

●第一問、因見とは何ぞや(一八〇)●因見の義解(一八二)●第二問、佛が此の中に但自相のみを説き給ひし理由如何(一八二)●第三問、若し衆生を念ぜずんば云何が能く佛界を淨むるや(一八三)●第四問、七地の中に、佛眼を得と説く理由如何(一八五)●第五問、佛は已に須菩提の問へる所を知り給ふ。今それ更に稱して答へし理由如何(一九〇)●第六問、色は有形にして見るべく、時は無形にして但名のみあり。如何ぞ近を遠となし、遠を近となすことを得んや(一九七)●第七問、此乘は佛法なるか菩薩の法なるか(一九七)●第八問、先には一ならざるが故に合せずといひ、今これを一相なりといふは何故なるか(一九六)●第九問、六度には道俗あり、俗に空を説くは可し、而も道に空を説けるは、何故なるか(一九九)●第一〇問、先には是の乘には勝る所なく去るべき所なしといひ、今又此乘は住する處なしといふは何故なるか(二〇〇)●第一一問、二種の不可得ば云何が不可得なるか(二〇三)●第一二問、一切法の本末不可得ならば人に於て何の利益ありや(二〇四)

卷の第五十一.....205—135

●第一問、佛は須菩提の所説を讚せずして、更に大乘を説き給ひし理由如何(二三)●第二問、眞如、法性等を無と名くる理由如何(二三)●第三問、三十二相已後、大乘の勝出を説かざる理由如何(二三)●第四問、一切世間は十方六道の衆

生なり、然るを獨り諸の天人阿修羅に勝出すと説くは何故なるか(三二四)●第五問、龍王經によれば、龍にして菩薩の道を得たりといふ。何故に之を惡道といふか(三二四)●第六問、無爲法たる虚空の無色無方なるは即ち可なり有爲法たる大乘を虚空と等しいといふは何故なるか(三二七)●第七問、虚空の所有なきが如くといへば便ち足る。然るに今何故に種種の相なしと説くか(三二八)●第八問、虚空は廣大無邊なるが故に、一切の物を受容すといはずして、而も所有なきが故に、受容すといふ理由如何(三三〇)●第九問、心王心所も亦質なし、何を以てか一切の物を受けざるか(三三二)●第一〇問、汝は我が問意を取り違へたり。我は何故に虚空は無邊廣大なるが故に一切の物を受くといはずして、所有なきが故に受くといふやと問へるにあらずや(三三三)●第一一問、汝は先に虚空の相は受なりといへり、今何を以てか無なりといふか(三三三)●第一二問、若し色に因るが故に虚空の相を現せば然る後の相も虚空にありや如何(三三四)●第一三問、若し一切法是の如くならば、即是れ虚空なり。然らば何故に復た虚空を以て喩とするか(三三四)●第一四問、若し實に虚空なくんば、云何が能く無量無邊阿僧祇の衆生を受くるか(三三五)●第一五問、諸法は現に來去して見るべきなり、云何が不動の相にして來なく、去なしと言ふか(三三六)●第一六問、身の動く處ある、是を名けて去ると爲す。已に去り、未だ去らざる中は、身の動くこと無し。去る時、身動けば、即ち去ることあるにあらずや(三三六)●第一七問、若し去る時、二の去らば何の咎ありや(三三六)●第一八問、何故に三世及び三世の等の中の檀波羅蜜多是不可得なるか(三三六)

卷の第五十一.....三六一

●第一問、菩薩、菩薩の字は不可得なるは、上に已に説けり、然るを今更に説くは何故なるか(三四〇)●第二問、衆生及び五蘊の法の畢竟不生なるを解するは是れ菩薩にあらずや(三四一)●第三問、我と菩薩とは是れ一物なり。今それ我を以て菩薩に喩ふる理由如何(三四二)●第四問、舍利弗は空、無我の義を知れり、何を以てか事に問を致すや(三四五)●第五問、五蘊和合して菩薩あらば、五蘊は有にして、菩薩は無なるにあらずや(三四六)●第六問、若し五蘊空ならに、即ち是れ菩薩にあらずや(三四六)●第七問、心王心所は無形にして不可見の故に、無邊なりと言ひ得べきも、色は有形にして

可見なり、云何を無邊と言ふべけんや(三五) ●第八問、何を以てか、未後に色乃至一切種智は、無二法數に入ると説く  
p(三六)

卷の第五十三.....二六二—二八九

●第一問、重て菩薩の善、智度の義、諸觀の義を説く理由如何(三三) ●第二問、不生は宜しく上品の竟に問ふべし、今  
品に之を問ふは何故なるか(三六) ●第三問、無生即無二は既に説けり、今重て之を問ふは何故なるか(三七) ●第四問、  
菩薩は結未だ盡さず、未だ佛道を得ず、智慧淨ならず、云何が畢竟淨なりと言ふや(三九) ●第五問、五種の菩提とは  
何ぞや(四〇) ●第六問、聲聞道には委しく斷結の義を説き、辟支佛及び菩薩に、種種の行あることを説かざる理由如何  
(四一) ●第七問、須菩提は已に種種の理由を以て、不生の法を説けり。今舍利弗が更に不生法の生、生法の生を問へ  
るは何故なるか(四三) ●第八問、佛は須菩提を以て解空第一と説き給へり。然るを今舍利弗が須菩提を説法第一と讃  
するは何故なるか(四六) ●第九問、色乃至一切種智を淨うするは、即ち是れ菩薩道を淨うするなり、何を以てか更に  
問ふや(四八) ●第一〇問、無上菩提、これ即ち菩薩道なり、今それ更に此を問ふは何故なるか(五一) ●第一一問、般  
若波羅蜜多を行する者は誰そ(五二) ●第一二問、此の中の念は是れ大悲の念を離れず、何を以てか畢竟の念を離れず  
といふか(五六)

卷の第五十四.....二九〇—三二七

●第一問、初品の中に、已に佛、殊勝の光明を放ち、諸天大に此の間に集まると説けり。然るを今日後更にこれを説  
くは何故なるか(五三) ●第二問、若し是の人任へずんば、上人は更に上法を求むべしと言ふは何故なるか(五五) ●第三  
問、五蘊に但十五種の惡のみなりや、更に他の惡ありや如何(五六) ●第四問、十五種の過罪の中多く八種を説いて、  
餘の七種を説くこと少なきは何故なるか(五七) ●第五問、中間に諸法は互に相因縁たり、潤益し、增長すと云へる理由

如何(三六)●第六問、若し初發心の廻向の時、菩提心なくんば、何の所に廻向せんか(三九)●第七問、如住の義を説かずして、不住の義を説く理由如何(三七)●第八問、須陀洹果等の無爲の相に住すべからざるに、何等の次第ありや(三八)●第九問、二乗は小なるが故に住すべからず、佛の福田に住すべからざる理由如何(三九)●第一〇問、菩薩は初發心より六度を修行し、六度を行するが故に法位に入り、法位に入るが故に不退位に住すべし。然るに今何を以てか皆住すべからずといふや(三九)●第一一問、受想行議の名字なく、布施波羅蜜多の名字なく、佛の名字なきを如何にして信じ得んや(三二)●第一二問、般若を説くの語は平易なりと雖も、幽旨玄遠なり、云何が了ることを得んや(三四)

### 卷の第五十五.....三七一三五二

●第一問、上に已に夢幻の如く、聽く者なく、説く者なしと説けり。然るを今復た何等の人が、須菩提の意に隨つて法を聽く者を用ふべきと問ふ理由如何(三八)●第二問、化人には心王心所なく、聽受する事能はざるなり。何ぞ説法を用んや(三八)●第三問、法の涅槃に勝るものなくんば、若し法あり、涅槃に勝るとも、復た幻の如く夢の如しと説く理由如何(三九)●第四問、從來全く説く所なかりし阿難が、今突然須菩提に代りて説けるは何故なるか(三四)●第五問、智度には所有なく、一定の法あるなし、云何が四種の人これを信受して、非法なりと言はざるや(三四)●第六問、諸の大弟子此の義を問へるに須菩提が諸の天子に答へたる理由如何(三五)●第七問、華臺の端嚴なるは、是れ誰の力なるか(三三)●第八問、佛、須菩提を讚じ給へる理由如何(三五)●第九問、若し是の如く一切法を學ぜずんば云何が一切智を學するや(三五)●第一〇問、十八空を以て諸法の空を説かずして、但内空外空を説くは何故なるか(三六)●第一一問、上來已に智度を明かにせり、然るを今帝釋が何の處にか般若を求めんと問へるは何故なりや(三九)●第一二問、佛說中に求めよといはずして、須菩提の所說中に求めよと言へる理由如何(四〇)●第一三問、無受相と如との相異如何(四〇)●第一四問、如來の眼耳智慧等を用つて知見し給ふに何の答ありや(四三)●第一五問、眼を以て見ることを得るも、餘想は取ること能はざるにあらずや(四四)●第一六問、若し如來を以て如來を知ると言はば無窮の過に墮するにあらずや(四四)

●第一七問、五蘊の因縁の故に如来あるべく、若し五蘊なければ、則ち如来なきにあらずや(四四) ●第一八問、五衆如中に如来如なく、如来如中に五衆如なき言ふ理由如何(四五) ●第一九問、若し如は即ち是れ法相ならば、重たて説くは何故なるか(四六) ●第二〇問、五蘊中の色蘊を無形無別なりと説く理由如何(四六) ●第二二問、須陀洹の人なる帝釋が、深般若を問へる理由如何(四九) ●第二三問、無邊は廣説し、大及び無量は略説する理由如何(五五)

卷の第五十六.....三五三—三七九

●第一問、佛が四部の衆を觀じ已りて、帝釋に告げ給ひしは何故なるか(五七) ●第二問、佛が釋提桓因といはずして、攝尸迦と言ひし理由如何(五六) ●第三問、何者をか魔といひ、何故に菩薩を惱まし、云何が便を得るか(五九) ●第四問、魔の力は甚だ大なるに、肉身の菩薩は道力尙少し、云何が便を得ざるや(六〇) ●第五問、菩薩は三解脱門所謂る空、無相、無作に住するが故に、便を受くべきにあらずや(六一) ●第六問、餘處には菩薩摩訶薩といひ、今善男子善女人といふは何故なるか(六一) ●第七問、魔の便を得ざる理由を説くに、但空を談じ、人の便を得ざるを説くに、四無量心を説するは何故なるか(六三) ●第八問、此の天は發心して、而も般若を聞かざる理由如何(六三) ●第九問、二乘は一切衆生の福田なり何故に初發意の菩薩に如かざるか(六七) ●第一〇問、先に已に魔及び魔民等の般若を破壊せんと欲するを説く、今復た重説するは何故なるか(六七) ●第一一問、世間の波羅蜜多は正道にあらず、然るに佛が是の中に説き給へるは何故なるか(七九)

卷の第五十七.....三八〇—三九七

●第一問、般若を受持するも、現に戰鬥中にて傷き、失命するものあり、佛の言説は事實と相違するにあらずや(八〇) ●第二問、受持し讀誦する功德は倍すべし、然も此の中には、書寫し供養するのみを説けり。云何が之を信すべけんや(八三) ●第三問、佛已に種種に般若の功德を讃歎せり。今それ帝釋が舍利供養の功德と般若の功德とを校ぶるは何

故なるか(三六)●第四問、鬪浮提の人は福德を貪る、何故に智度を供養せざるか(三九)●第五問、信を壊せざると疑なきと、決了すると、何の差別ありや(三九)●第六問、疑なきと、決了すると何の異ありや(三九)●第七問、須陀洹が智度乃至一切種智を學して、彼岸に到る理由如何(四〇)●第八問、是の塔は、實塔なりや、假塔なりや(四〇)●第九問、智度の相、若し一切の諸觀滅し、言語の道斷へ、不生不滅にして、虚空の相の如くならば、何故に般若世に在れば、三寶滅せずと言ふか(四六)●第一〇問、若し三寶の中に一切の善人善法を攝し盡さば、何故に般若世に在れば世間に十善道乃至一切種智ありと言ふや(四七)

卷の第五十八.....三九六—四三六

●第一問、讀般若の時、阿修羅退出せば、何故に常に般若を誦して、兩陣相對せしむることを中止せざるや(四〇)●第二問、般若を大明咒と名くる理由如何(四〇)●第三問、已に横死せざることを説き、今また更に之を説くは何故なるか(四四)●第四問、重ねて人の便を得る、と能はざるを説く理由如何(四五)●第五問、直に還らず、佛を遶りて去るは何故なるか(四九)●第六問、佛は初より常に六度の名を説き給へり。然るを今阿難は何故に稱説し給はずといふか(四四)●第七問、佛が不二の因縁を答へずして、還つて不二を以て解し給へる理由如何(四二)●第八問、帝釋は何故に佛は受持般若の功德盡きすと説き給へりと言ふや(四二)●第九問、現當二世の功德は深重にして、書持は供養の輕微なり。云何が二世の果報を得るや(四七)●第一〇問、天上にも般若あり、諸天來至すれば、何故に其の膽力を増すか(四三)●第一一問、般若を説く者は、皆諸天の甘露味を得て、其をして樂説せしむるや否や(四三)●第一二問、諸佛沙門等の愛重に然るべきも、父母の愛念は何ぞ論するに足らんや(四四)●第一三問、人身は内に不淨を以て充たざる、外のみ清淨なるも何の益かあらんや(四五)●第一四問、諸佛を供養するは、智度を供養するに如かすといふ理由如何(四六)

卷の第五十九.....四三七—四五二

●第一問、佛が舍利を以て經卷に對校し給へる理由如何(四三) ●第二問、舍利弗は、帝釋の世諦の故に智度を取ると言へるを知る。然るを今何が故に難するか(四三) ●第三問、一切の説法者の中に佛と等しきものなし、云何が行者は但般若を受持し讀誦するのみにて、佛と等しきことを得るか(四七) ●第四問、諸寶珠の中に於ける摩尼珠の位置如何(四八) ●第五問、四百四病の中に一切の病を攝す、何を以てか眼病癩病等を別説するか(四九) ●第六問、若し般若に是の如き功德あらば、舍利は是れ五波羅蜜多、乃至一切種智の住處なるが故に、供養を得と云ふ理由如何(四九) ●第七問、有爲法爲無法の相を説く理由如何(四九) ●第八問、樹蔭花泉等に差別無しと云ふ理由如何(四五) ●第九問、般若を讀誦し正憶念するは難く、般若の經卷を書寫して他に與ふるは易し、其功德は等しかるべからず、云何が勝れたりと言ふや(五五) ●第一〇問、若し福德佛心にあらば、佛は何ぞ芥子の如く身を碎き、人をして供養せしめ給ひしか(四五)

卷の第六十.....四五二—四七〇

●第一問、受持し、讀誦し、説くを解せず、但正憶念を解するは何故なるか(四六) ●有所得の義解(四六) ●第二問、人をして無上道を發し、不退轉を得せしむることの、般若を施す功德に如かざる理由如何(四六)

卷の第六十一.....四七一—五〇六

●一切衆生と共にの義解(四七) ●自調の義解(四七) ●自淨の義解(四七) ●自度の義解(四七) ●第一問、實に一切衆生を度せず、一切衆生を度するが故に勝ると云ふ理由如何(四五) ●第二問、求道の人にして自ら功德を作さず、但心に隨喜を生ずる理由如何(四七) ●第三問、見は顛倒の根本たり、而も初得道の人の見顛倒なきは、見諦道斷なるを以てにあらざるか(四七) ●正廻向の義解(四八) ●第四問、新發意の菩薩の怖畏し、恐懼するなきや否やは已に問答せり。然るを今復之を問ふは何故なるか(四八) ●第五問、所廻向の法は未來世にあり云何が滅盡すと云ふや(四八) ●第六問、欲界の中の二處の天及び梵天は多くの天と俱なるに、餘の四天は何故に伴侶なきか(四八) ●第七問、正廻向に就て再問する理由如

何(五四) ●第八問、解脱に二種あり、何故に一切法は解脱と等しといふか(五五)

卷の第六十一..... 五〇七 五三五

●第一問、五度は應に五百人を以て喩とすべし、何を以てか乃ち百千を説くか(五四) ●第二問、檀波羅蜜多にも亦眼あり、然るを眼なきに喩ふるは何故なるか(五四) ●第三問、帝釋は已に一切法の合せざるを知れり、然るに今但一切種智の合せざるを問へるは何故なるか(五六) ●第四問、云何が佛心の合するが如くなるや(五六) ●合せず散ぜずの義解(五二) ●菩薩の般若波羅蜜多と共に他の四波羅蜜多を行する理由(五三) ●第五問、先に色等の諸法は有力と作さず、無力と作さずと説き、今更に色等の諸法の力は成就せざるが故に、智度の力も亦成就せずと説くは何故なるか(五三) ●第六問、今復菩薩は發意せず幾時にして幾佛を供養するや云云と問ふ理由如何(五三) ●第七問、餓鬼の中に生ずるを説かざる理由如何(五三) ●第八問、舍利弗が五逆罪と破法と相似たりといふ理由如何(五三) ●第九問、舍利弗が是の人の受くる身の大小を問へるに佛答へ給はざりし理由如何(五三)

卷の第六十三..... 五六一 五六一

●第一問、口業は是れ法を破せば身口業を攝すといふは何故なるか(五七) ●第二問、已に破法の因縁を説く、今それ須菩提が再問するは何故なるか(五六) ●第三問、佛説中に魔事を益する理由如何(五四) ●第四問、先に色の不淨無常を觀じて、身念處を得と説き、今反つて果淨なるが故に、因も亦た淨なりといふ理由如何(五四) ●第五問、三毒は不淨垢穢なりとば、佛の常説なり。今それ嫉妬等淨なるが故に、色等も亦た淨なりといふ理由如何(五四) ●無明淨なりとの義解(五八) ●第六問、若し五逆罪等を犯すも般若を信せば成佛すべきや。又持戒精進等を修するも般若を信せば地獄に墮すべきや如何(五八) ●得の義解(五九) ●著の義解(五九) ●第七問、須陀洹果乃至佛道は自相空なりと説く理由如何(五九) ●無相無念の義解(五九) ●第八問、常に畢竟清淨なるが故にと言ひ、今、畢竟空無始空と言ふは何故なるか(五九)

卷の第六十四.....五六一—五六五

●第一問、無礙と相違するを礙と爲さば帝釋が更に礙を問ひし理由如何(五五四) ●心相を取るの義解(五五九) ●第二問、佛已に須菩提の無礙を説くを讃す、今復た更に微細礙相を説くは何故なるか(五六四) ●第三問、麤なる礙相を取ると、細微の礙相を取ると區別如何(五六五) ●第四問、若し心より生ぜずば、五蘊の中の識蘊は是れ心なるか(五六七) ●第五問、色等の罪法は不淨苦なりと觀すべきも、如何が餘の善法を不淨苦なり等と觀ぜんや(五七〇) ●不淨苦の義解(五七〇) ●色等の具足不具足の義解(五七〇) ●礙無礙の義解(五七〇) ●希有の義解(五七三) ●第六問、云何にして是の大青莊嚴を知るや(五七〇) ●第七問、一事を再説する理由如何(五七三) ●第八問、上の諸天は今更に來れりや(五八〇) ●響も聲も二とも空なる所以を論ず(五八四) ●第九問、小菩薩が凡夫法を虚となし、學法を實となす理由如何(五八四)

卷の第六十五.....五六六—六一五

●第一問、般若を受持して、眼耳等を病まざる理由如何(五六八) ●第二問、諸天が不淨の人の身を隨逐して、般若を求め聞く理由如何(五六八) ●第三問、般若を第二の轉法輪と云ふ理由如何(五六九) ●第四問、今の轉法輪と初轉法輪とは得道の人數、大に相違あり、何故に大を以て小に喩ふるか(五九四) ●第五問、須菩提の有法空の故に云云の問に對して、佛は還た何故に空を以て答へたまひしか(五九五) ●第六問、諸法空ならば、何を以てか般若を讃じて、摩訶波羅蜜多と言ふか(五九五) ●般若波羅蜜多を無邊波羅蜜多なりと讃する理由(六〇〇) ●第七問、上に智度の法性常住なるを説き、今却つて無常を説くは何故なるか(六〇二) ●第八問、若し爾らば、佛が無爲法は破壊なきの相と説き給ひし理由如何(六二二) ●第九問、般若を以て般若を讃する理由如何(六三二)

卷の第六十六.....六一六—六三六

●第一問、若し先世に毀せば應に地獄に随つべし、何の緣あつてか、復た般若を聞くことを得ん(六三三) ●第二問、六度の各々に住せずして、自ら其の行を習ふ理由如何(六三四) ●第三問、已に菩薩の甚深を行ざざるを智度を行すと言く。今、舍利弗が復た甚深を説くは何故なるか(六三五) ●四攝法の解釋(六三六)

卷の第六十七.....六三七—六五九

◎菩薩摩訶薩の義解と大功徳の意義(六三九) ●第一問、地は是れ堅相なり、何を以てか性と云ふや(六四〇) ●第二問、天眼を以て見ると爲すか、將た佛眼を以て見ると爲すか(六四一) ●第三問、佛眼所攝の天眼は實と爲すか、將た虚妄となすか(六四二) ●第四問、佛眼所攝の慧眼を以て衆生を見る理由如何(六四三) ●第五問、未來世を見ること如何にして可能なるか(六四九) ●第六問、北方の末法の衆生は漏結未だ盡きず、佛は何故に此の罪惡の人を見知り念じ給ひしや(六四七) ◎親近諸佛の義解(六四五)

卷の第六十八.....六六〇—六八三

◎煩惱魔の義解(六六三) ◎五蘊魔の義解(六六三) ◎死魔の義解(六六四) ◎天子魔の義解(六六四) ◎魔の意義(六六四) ●第一問、五蘊魔の中に他の三魔は攝せらるべし、今それ四魔を説くは何故なるか(六六四) ●第二問、魔が行道者を惱亂する理由如何(六六五) ●第三問、樂説卒に起るは何故に魔事なるか(六六五) ●第四問、經中に但滋味を得ざるのみを問ひ、餘の事項を問はざる理由如何(六六六) ●第五問、般若經の中にも三十七品、三解脱門あり、然るに之を二乘經と名くるは何故なるか(六六七) ●第六問、六度乃至無上道を樂説するを不如法と言ふ理由如何(六七〇) ●第七問、畢竟空にして無所有なる智度は書寫し讀誦すべからず、何ぞこれに魔事あらんや(六七〇) ●第八問、五蓋、心を覆ふが故に説くことを欲せずんば、何故に師とたるか(六七〇) ●第九問、若し受持すること能はずんば、何を以てか聽者と名くるや(六七六) ●第一〇問、二人の内一人は十二頭陀を以て戒を莊嚴する能はざる理由如何(六七七)

卷の第六十九 . . . . . 六八四—七二〇

●第一問、人或は般若を書持し、讀誦するも、行すること能はずして、戒を犯すこと能はざるべし。若し信ぜざれば、云何が従つて法を受くるや(六九) ●第二問、弟子は應に師を供養すべし何故に師は施すこと能はざるか(六九) ●第三問、師に陀羅尼なくして、師を爲る理由如何(六九) ●第四問、弟子の師より法を受けざる理由如何(六九) ●第五問、若し遠國にして離多ければ、何を以てか自ら去らざるや(六九) ●第六問、六度に似たるを魔事とする理由如何(六九) ●第七問、若し菩薩、佛身を見れば信心清淨なり、云何が魔事といふか(六九) ●第八問、須菩提の四問に對して、佛は但三答を與へ給ひし理由如何(七〇) ●第九問、餘經には五蘊破壞を説き、此の經には五蘊無生滅を説く理由如何(七〇) ●第一〇問、諸法實相畢竟空の中には、心王心所を分別することなし。佛は如何が其の心を知り給へるか(七〇) ●第一一問、苦し心は見る可らずんば、佛は何を以てか如實に不可見の心を知ると説き給ひしか(七〇)

卷の第七十 . . . . . 七二一—七四二

●第一問、靈魂實有説の邪見は則ち可なり、世間實有説の邪見なる理由如何(七二) ●第二問、死後去るが如きあり、去るが如き有るに非らず、去るが如き無きに非ずの四句を説く理由如何(七二) ●第三問、諸天子が般若の相を問へる理由如何(七三) ●無相の相の義解(七三) ●無作の相の義解(七三) ●第四問、心所法は相を知る、何故に知らずと云ふか(七三) ●得の義解(七三) ●佛は作人を知るの義解(七三) ●不繋の義解(七三) ●第五問、色の不生なる理由如何(七三) ●智度は世間の相を示すの義解(七三) ●佛は世間の空を示すの義解(七三) ●第六問、云何が是れ獨立なるや(七三) ●斷見外道の例(七三) ●常見外道の例(七三) ●大事の義解(七三) ●不可稱の義解(七三) ●無量事の義解(七三) ●無等等の義解(七三) ●佛陀の義解(七三) ●如來の義解(七三) ●自然人の義解(七三) ●一切智人の義解(七三) ●第七問、比丘尼及び菩薩の道を得る者少き理由如何(七三)

卷の第七十一……………七四二—七七八

●第一問、已に數數智度の甚深の因縁を説き、今復た重ねて説くは何故なるか(七四七)●第二問、五波羅蜜多は各相を異にす、今それ智度の中に五度を含受すといふ理由如何(七四八)●第三問、諸の賢聖の智と斷とは無生法忍ならば何故に如かずと云ふか(七五〇)●第四問、二乗の智斷を菩薩の無生法忍といふ理由如何(七五〇)●第五問、須菩提の新學の所行如何を問へるに對して、佛が菩薩の久行する微妙の事を以てし給ひし理由如何(七六一)●第六問、苦し依止處なくんば何故に依止を説くか(七六一)●第七問、上には諸事の中に略説し、今趣中に廣説する理由如何(七七〇)●第八問、未だ無生法忍を得ず、如何が三毒を離るといふか(七七二)●第九問、智度は趣に非ず、不趣に非ず。今それ須菩提が般若の行者は何處に趣き去るやと問ひし理由如何(七七二)●第一〇問、深般若波羅蜜多を解する菩薩を衆生の歸趣する處と爲す理由如何(七七三)●第一一問、未だ一切智を得ざる菩薩は、如何にして能く願するか(七七七)

以上



# 國譯大智度論

## 卷の第四十四

(二) 幻人無作品第十一を釋す。

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「若し當に人あり言ふべし、問うて、幻人、般若波羅蜜(多)を學せば、當に薩

婆若を得べきや不や。幻人、禪(那)波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、

尸羅波羅蜜(多)、檀(那)波羅蜜(多)を學し、四念處、乃至十八不共法、及び一切種智

を學せば、薩婆若を得るや否やと、我れ當に云何が答ふべきや」と。佛、須菩提に告

げ給はく、「我れ還た汝に問はん。汝の意に隨つて我に答へよ。須菩提よ、汝が意に於

いて云何。色と幻と異り有りや不や。受想行識と幻と異り有りや不や。須菩提言さく、

「不なり、世尊よ。」佛の言はく、「汝が意に於て云何。眼と幻と異り有りや不や。乃至意

と幻と異り有りや不や。色乃至法と幻と異り有りや不や。眼界乃至意識界と幻と異り有

りや不や。眼觸乃至意識、眼觸因緣生の受、乃至意觸因緣生の受と幻と異り有りや不や。須菩提言く、「不なり、世尊よ。」

「汝が意に於て云何、四念處と幻と異り有りや不や、乃至八聖道分は幻と異り有りや不や。」不なり、世尊よ。「汝の意

に於いて云何、空・無相・無作と幻と異り有りや不や。」不なり、世尊よ。「須菩提よ、汝の意に於て云何、檀(那)波羅蜜

【一】此の品の目的は、幻人は虚なれば般若を學するも、佛とならず、菩薩、般若を學して佛となるは、實なるが故なり。されば幻人と菩薩と、二者別あるべしとの疑を解き、善知識とを辯するにあり。この品名を、或は「幻人品」、或は「幻學品」とも稱す

「多」と幻と異り有りや不や。乃至十八不共法と幻と異り有りや不や。「不なり、世尊よ。」須菩提よ、汝が意に於て云何、阿耨多羅三藐三菩提と幻と異り有りや不や。「不なり、世尊よ、何となれば、色は幻と異ならず、幻は色と異ならず、色は即ち是れ幻、幻は即ち是れ色なり。世尊よ、受想行識は、幻と異ならず、幻は、受想行識と異ならず、(受想行)識は、即ち是れ幻、幻は、即ち是れ(受想行)識なり。世尊よ、眼は幻と異ならず、幻は眼と異ならず、眼は即ち是れ幻、幻は即ち是れ眼なり。眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受も亦是の如し。世尊よ、四念處は眼と異ならず、幻は、四念處と異ならず、四念處は、即ち是れ幻、幻は、即ち是れ四念處なり。乃至、阿耨多羅三藐三菩提は、幻と異ならず、幻は、阿耨多羅三藐三菩提と異ならず、阿耨多羅三藐三菩提は、即ち是れ幻、幻は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。」佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何。幻に垢あり、淨ありや不や。」不なり、世尊よ。「須菩提よ、汝が意に於て云何。幻に生あり、滅ありや不や。」不なり、世尊よ。「若し法、生ぜず、滅せず、是の法、能く般若波羅蜜(多)を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」不なり、世尊よ。「汝が意に於て云何、五受陰假名は、是れ菩薩なりや不や。」是の如し、世尊よ。「汝の意に於て云何、五受陰假名に、生滅垢淨ありや不や。」不なり、世尊よ。「汝が意に於て云何。若し法假名字のみあり、身にあらず、身業にあらず、口にあらず、口業にあらず、意にあらず、意業にあらず、不生不滅、不垢不淨、是の如きの法、能く般若波羅蜜(多)を學せば、薩婆若を得るや不や。」不なり、世尊よ。「菩薩摩訶薩、若し能く是の如く、般若波羅蜜(多)を學せば、當に薩婆若を得べし。(そは)所得なきを以てなり。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、應に是に如く、般若波羅蜜(多)を學せば、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。幻人の學するが如くなるべし。何となれば、世尊よ、五陰は、即ち是れ幻人、幻人は、即ち是れ五陰なりと知るべければなり。」佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於て云何。是の五陰は般若波羅蜜(多)を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」不なり、世尊よ。何となれば、

是の五陰の性は所有なし、所有なきの性も、亦得べからざればなり。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、夢の如きの五陰、般若波羅蜜(多)を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」不なり、世尊よ。何となれば、夢の性は所有なし、所有なきの性も、亦得べからざればなり。汝が意に於いて云何、響の如き、影の如き、焰の如き、化の如き五業、般若波羅蜜(多)を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」不なり、世尊よ。何となれば響、影、焰、化の性は所有なし、所有なきの性も得べからざればなり。六情も亦是の如し。世尊よ、識は即ち是れ六情、六情は即ち是れ五衆なり。是法は、皆内空の故に不可得なり、乃至無法有法空の故に不可得なり。」

論

問うて曰く、(一)須菩提は、何を以ての故に、是の事を以て佛に問ひ上りしや。「若し人、幻人は般若波羅蜜(多)を學して、佛と作ることを得

るや不や」と問はば、應に答へて、「得ず」と言ふべし。幻人は虚誑にして、本末あること無し。是の事は答へ易し。何を以ての故に、佛に問ひ上りしや。答へて曰く、上品に、佛は舍利弗に答へて、甚深の空義を「説きたまへり」。須菩提、是の念を作さく、「諸法は一相にして分別なし。若し爾らば、幻人及び實の菩薩は、異なること無けん。而も菩薩は諸の功徳を行じて、佛と作ることを得、幻人は實なくして、但人の眼を誑はし、佛と作ることを能はず」と。問うて曰く、(四)幻人は功徳を行すること能はず。心識なきを以てなり。云何が行ずと言ふや。答へ

- 【一】 第一問、須菩提が、幻人は智度を學して、佛となることを得るや、不やと問ひし理由如何。
- 【二】 幻人とは、幻師の奇術變化に現はるる人をいふ。
- 【三】 第二問、幻人には心識なし、如何が功徳を行すと言ふや。
- 【四】 幻人は功徳を行すと言ふや。

て曰く、實には行せずと雖も、人の見るに、行するに似たるが故に、名けて行と爲す。幻人の飲食、財物、七寶を以て、出家に布施し、持戒、忍辱、精進、坐禪、說法する等の如きは、無智の人は、是を謂つて行すと爲す。是れ幻なることを知らざるなり。須菩提、是の念を作さく、「若し佛の説きたまふが如くんば、諸法は一相にして所有なく、但是れ虚誑なり。幻人及び實の菩薩、乃至佛は、等しうして異なること有ること無し。幻人も亦た幻に佛と作り、六波羅蜜「多」を行じ、魔兵を降し、道場に坐して、佛道を成じ、光明を放ち、法を説いて、人を度するが如きと、實の菩薩の實道を行じて、佛と作ることを得、衆生を度すると何の差別があるし」と。佛の言はく、「我れ還た汝に問ふ、汝が意に隨つて我に答へよ」と。

問うて曰く、佛は何を以てか直答せずして、還つて問ひ、意に隨つて答

【五】 第三問、佛、須菩提の問に對し、直答せずして、反問し給へる理由如何。

へしめたまひしや。答へて曰く、須菩提は空の智慧を以て三界の五衆、皆空なりと觀じ、心に厭を生ず。諸の煩惱の習を離るるが故に能く總相「を以て」諸佛の法の空なることを知ると雖も、猶貴ぶ所ありて佛法は幻の如く所有なきとを觀ずると能はず。是を以ての故に方に喩説したまはく、「汝、五衆の空を以て、證と爲すが如し。諸佛の法も亦爾なり。汝は世間の五衆を觀じて空と爲す。我が佛法を觀するも亦爾なり」と。是の故に問ひたまはく、「須菩提、汝が意に於て云何。色は幻と異なると有りや不や。幻は色と異なると有りや不や。乃至受想行識も亦是の如し。若し異ならば汝は應に問ふべし。

若し異ならずんば是の間を作すべからず」と。須菩提言く、「異ならず」と。

問うて曰く、若し色の幻と異ならざるは爾るべし。幻人には色あるが故に、云何が受想行識は幻の如くにして異ならずと言ふや。答へて曰く、幻人には喜樂憂苦の相あり無智の人は見て謂らく、受想行識ありと爲すと。復次に、佛は譬喩して、五受衆の虚誑なると幻の如きを知らしめんと欲し給へり。五受衆は幻と異なると無しと雖も、佛は解せしめんと欲したまふが故に爲に譬喩を作りたまへり。衆生は謂はく、「幻は是れ虚誑なり。五受衆も有なりと雖も、幻と異なると無し」と。是の故に、須菩提は、一心に籌量して五衆と幻と異ならざるとを知る。何となれば幻人の色の肉眼を誑はして能く憂喜苦樂を生せしむるが如く、五受衆も亦能く慧眼を誑はして貪欲、瞋恚、諸の煩惱等を生せしむ。幻は少許の咒術に因りて物事を語言するを本と爲し、能く種種の事、城郭、廬觀等を現するが如く、五受衆も亦、先世の少許の無明の術の因縁を以て、諸の行識名色等の種種あり。是を以ての故に異ならずと説く。人の幻事を見て、著心を生じ、其の生業を廢し、幻滅する時、悔を生ずるが如し。五受衆も亦是の如く、先業の因縁の幻により、今の五衆を生じて、五欲を受け、貪瞋を生ず。無常の壞する時は、心に乃ち悔を生ずらく、「我は云何が是の幻の五衆に著して、諸法實相を失するや」と。佛、須菩提に樂説門を問ひたまへり。故に答へて言はく、「幻と色と異ならず」と。若し異ならずんば、是の色は即ち是

【六】第四問、受想行識は、幻の如くにして、異ならずといふ理由如何。

れ空にして、不生不滅の法中に入らん。若し不生不滅ならば、云何が般若波羅蜜「多」を行じて、作佛することを得ん。須菩提、是の念を作さく、「若し爾らば、菩薩は何を以ての故に、種種に道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を求むるや」と。佛、其の念を知りて、即ち答へたまはく、「五衆は虚誑なり、但假名を以ての故に、號して菩薩と爲す。是の假名の中には、業なく、業の因縁なく、心なく、心數法なく、垢なく、淨なし。「そは」畢竟空なるが故なり」と。佛の言はく、「菩薩は、應に幻人の如く、般若波羅蜜「多」を行すべし。五衆は即ち是れ幻人と異なること無く、先世の業因縁に従つて、幻業出づるが故に、是の五衆も亦、佛を成就することを得ること能はず。何となれば性は所有なければなり。餘の夢、化、影、響等も亦是の如し。

問うて曰く、何を以ての故に、識は即ち是れ六情、六情は即ち是れ五衆なりと説くや。答へて曰く、是の識は十二因縁中の第三事なり。是の中にも亦色あり。亦心數法あり。未だ熟せざるが故に識の名を受け、識より六入を生ず。是の二時は俱に五衆あり。色成するが故に五情と名け、(一)名成するが故に意情と名く。六情は五衆を離れず。是を以ての故に識は即ち是れ六情なりと説けり。

問うて曰く、(二)若し爾らば、十二因縁中の處處に皆五衆あり。何を以てか、但だ識の六情に五衆あ

- 【七】心とは、心王のこと。
- 【八】第五問、識は是れ六情、六情は是れ五蘊なりと説く理由如何。
- 【九】色は、人間構成の物質的成分なり。
- 【一〇】名は、其精神的成分。
- 【一一】第六問、十二因縁中の處處に皆五蘊あり但だ識の六情に五蘊ありと説く理由如何。

りと説くや。答へて曰く、是の識は今身の本なり。衆生は現在法の中に於て多く錯れり。名色は未だ熱せず、未だ能くする所あらざるが故に説かざるなり。六情は苦樂を受けて、能く罪福を生ずるが故に説く。其の餘は十一因縁なり、故に五衆を説く。

復次に、佛は、五百歳の後、學者の諸法の相を分別すること各異なり、色法を離れて識を説き、識法を離れて色を説くことを知りたまひ、是の諸見を破して、畢竟空に入らしめんと欲したまふが故に、識中には、五情なしと雖も、而も識は即ち是れ六情なりと説き、六情中には、五衆を具せずと雖も、而も六情は即ち是れ五衆なりと説きたまへり。

復次に、先世には、但心ありて、六情に住し、種種の憶想分別を作すが故に、今世の六情、五衆の身を生ず。今世の身より種種の結使を起し、後世の六情、五衆を造り、是の如く展轉す。是の故に識は即ち是れ六情なり、六情は即ち是れ五衆なりと説く。是の法は内空中に不可得なり、乃至無法有法空中にも不可得なり。

釋

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、新に大乘の意を發せる菩薩は、般若波羅蜜(多)を説くを聞き、將に驚き怖畏する」と無かるべきや。」佛、須菩提に告げたまはく、「若し新に大乘の意を發せる菩薩は、般若波羅蜜(多)に於いて方便なく、亦善知識をも得ずんば、是の菩薩は、或は驚き、或は怖き、或は畏れん。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ

方便なる。菩薩、是の方便を行ぜば、驚かず、怖かず、畏れざるや。」佛、須菩提に告げたまはく、菩薩摩訶薩あり、般若波羅蜜多を行じ、薩婆若に應ずる心もて、色の無常相も、是れ亦不可得なりと觀し、受想行識の無常相も、是れ亦不可得なりと觀す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多の中の方便を行すと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、色の苦相も、是れ亦不可得なりと觀す。受想行識も亦是の如く薩婆若に應ずる心もて、色の無我相も、是れ亦不可得なりと觀す。受想行識も亦是の如し。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、色の空相も、是れ亦不可得なりと觀す。受想行識も亦是の如し。色無相の相も、是れ亦不可得なりと觀す。受想行識も亦是の如し。色無作の相も、是れ亦不可得なりと觀す。受想行識も亦是の如し。色寂滅の相も、是れ亦不可得なりと觀す。乃至識も亦是の如し。色の離相も、是れ亦不可得なりと觀す。

乃至識も亦是の如し。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多の中の方便を行すと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を行じて、色の無常相も、是れ亦た不可得なりと觀す。色の苦相、無我相、空相、無相相、無作相、寂滅相、離相も、是れ亦た不可得なりと觀す。受想行識も亦た是の如し。是の時、菩薩は是の念を作す、我れ當に一切衆生の爲に、是の無常の法を説くも、是れ亦た不可得なるべく、當に一切衆生の爲に、苦相、無我相、空相、無相相、無作相、寂滅相、離相を説くも、是れ亦不可得なるべし」と。是を菩薩摩訶薩の檀那(波羅蜜多)と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛心を以てせず、色の無常を觀するも亦不可得なり。聲聞辟支佛の心を以てせず、識の無常を觀するも、亦不可得なり。聲聞辟支佛の心を以てせず、色の苦、無我、空、無相、無作、寂滅、離

を觀するも、亦不可得なり。受想行識も亦是の如し、是を菩薩摩訶薩の不著の尸羅波羅蜜多と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛心を以てせず、色の無常を觀するも亦不可得なり。聲聞辟支佛の心を以てせず、識の無常を觀するも、亦不可得なり。聲聞辟支佛の心を以てせず、色の苦、無我、空、無相、無作、寂滅、離

を觀するも、亦不可得なり。受想行識も亦是の如し、是を菩薩摩訶薩の不著の尸羅波羅蜜多と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の般若波羅蜜(多)を行じて、是の諸法の無常相、乃至離相に於いて忍欲樂する、是を菩薩摩訶薩の眞菩提波羅蜜(多)と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、薩婆若に應ずる心もて、色の無常相も亦不可得、乃至離相も亦た不可得、受想行識も亦是の如しと觀じ、薩婆若に應ずる心もて、捨てざる息まざる、是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、聲聞辟支佛の意、及び餘の不善の心を起さず、是を菩薩摩訶薩の禪(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、是の如く思惟す。色を空するを以ての故に、色は空ならず、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識も亦た是の如し。眼を空するを以ての故に、眼は空ならず、眼は即ち是れ空、空は即ち是れ眼なり。乃至、意觸因縁生の受も、受を空するを以ての故に、受は空ならず、受は即ち是れ空、空は即ち是れ受なり。四念處を空するを以ての故に、四念處は空ならず、四念處は、即ち是れ空、空は即ち是れ四念處なり。乃至、十八不共法を空するを以ての故に、十八不共法は空ならず。十八不共法は、即ち是れ空、空は即ち是れ十八不共法なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、驚かす、畏れず、怖かざるなり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ、菩薩摩訶薩は、善知識に守護せらるるが故に、是の般若波羅蜜(多)を説くを聞きて、驚かす、畏れず、怖かざるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の善知識とは、色の無常も、亦不可得なるを説き、是の善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。受想行識の無常も亦不可得なるを説き、是の善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須

善提よ、菩薩摩訶薩には復た善知識あり、色の苦も、亦不可得なりと説き、受想行識の苦も、亦不可得なりと説き、色の無我、受想行識の無我も、亦不可得なりと説き、色の空、無相、無作、寂滅、離も亦不可得なり、受想行識の空、無相、無作、寂滅、離も亦不可得なりと説き、是の善根を持して、摩訶辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。須菩提よ、是は菩薩摩訶薩の善知識と名く、須菩提よ、菩薩摩訶薩には復た善知識あり。眼の無常、乃至、離も亦不可得なりと説き、乃至、意觸因縁生の受の無常乃至離も亦不可得なりと説き、是の善根を持して、摩訶辟支佛に向はしめず、但一切智に向はしむ。是は菩薩摩訶薩の善知識と名く、須菩提よ、菩薩摩訶薩には復た善知識あり。四念處法を修するに、乃至離も亦不可得なるを説き、是の善根を持して、摩訶辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。須菩提よ、是は菩薩摩訶薩の善知識と名く、乃至、十八不共法を修し、一切智を修するも、亦不可得なるを説き、是の善根を持して、摩訶辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。是は菩薩摩訶薩の善知識と名く。」

論

問うて曰く、(二)須菩提は何を以てか此の疑を生ずるや。(即ち)佛に問ひ上りて言く、新發意の菩薩は是を聞きて將に恐怖すると無きや」と。

答へて曰く、有る菩薩の般若波羅蜜(多)を行する者は、但五衆の法を空すること無く、亦般若波羅蜜

〔多〕を行すること能はずと聞く。是を以ての故に疑を生ずらく、「誰か當に般若を行すべき」と。是の

故に佛に問ひ上れり。佛の言はく、「若し菩薩は、内外の因縁を具足せずんば、當に恐怖あるべし」

と。(二)内の因縁とは、正憶念なく、利き智慧なく、衆生中に於いて、深き悲心なく、内に是等の如き

【二】 第七問、須菩提が、「新發大乘意の菩薩の智度を説くを聞いて、驚怖せざるべきや」と問へる理由如何。

【三】 内外の因縁を具足せざる者は恐怖あり。

【四】 内因縁の義解。

方便なきなり。(一五) 外の因縁とは、中國の土に生ぜざれば、般若波羅蜜(多)を聞くことを得ず、善知識の能く疑を斷する者を得ず、是等の如き外の因縁なきなり。内外の因縁和合せざるが故に、驚怖畏を生ず、今須菩提は是の方便を問ふ。佛答へたまはく、「一切種智相應の心もて、諸法を觀するも、亦諸法を得ず」と。

問うて曰く、(一六) 方便して、色の無常等の、種種の相を觀すること有るが故に、怖畏せず、今何を以てか但薩婆若相應の心(を以て)、諸法を觀するが故に、恐怖せずと説くや。答へて曰く、菩薩は先來但諸法の空を觀じ、心麤なるが故に著を生ず。

今憶想分別して、佛意の如くに觀じ、衆生の中に於て、大悲を起し、一切の法に著せず、智慧に於て所得なく、但衆生を度せんと欲し、無常、空等を以て、種種に諸法を觀じ、亦是の法を得ず。是の如く、諸法を觀じ已りて、是の念を作さく、「我は是の法を以て、衆生を度し、顛倒を離れしめん」と。是を以ての故に、心著せず、定んで實有の一法を見ざるなり。譬へば、藥師の諸藥を和合し、冷病には熱藥を與ふるに、熱病の中に於ては、藥にあらざと爲すが如し。二施の中にては、法施大なるが故に、是を檀波羅蜜(多)と名く。五波羅蜜(多)も亦是の如く、義に隨つて分別す。復次に、(一七) 菩薩の方便とは、十八空の故に、色をして空ならしむるにあらす。何となれば是の空相

【一五】 外因縁の義解。

【一六】 第八問、恐怖せざるは、色の無常等の種種相を觀するが故なり。然るを今一切種智相應の心もて、諸法を觀するが故に恐怖せず」と説く理由如何。

【一七】 菩薩の方便の義解。

を以て、強ひて空ならしめざるを以てなり。色は即ち是れ空なり。是の色は本より已來、常に自ら空なり。色相は空なるが故に、空は即ち是れ色なり。乃至諸佛の法も亦是の如し。(一)善知識とは、人を教ふるに、是の智慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せしむ。菩薩は、先に無常、空等の諸觀を知れり。今は唯廻向を説くを異と爲す。

釋

須菩提、佛に白して言さく、「云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行するるとき、方便なく、慧知識に隨つて、是の般若波羅蜜(多)を説くを聞き、驚き怖畏するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は一切智を離れたる心も、般若波羅蜜(多)を修し、是の般若波羅蜜(多)を得。是の般若波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀(那)波羅蜜(多)を念じ、皆得皆念す。

【一八】善知識の義解。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は薩婆若を離れたる心もて、色の内空、乃至無法有法空を觀じ、受想行識の内空、乃至無法有法空を觀じ、眼の内空、乃至無法有法空を觀じ、乃至、意觸因縁生の受の内空、乃至無法有法空を觀じ、諸空に於て所念あり、所得あるなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行して、薩婆若を離れたる心もて、四念處を修し、亦念じ、亦得。乃至十八不共法を修し、亦念じ、亦得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行するるとき、方便なきを以ての故に、是の般若波羅蜜(多)を聞いて、驚き怖畏す。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、惡知



復次に、須菩提よ、惡魔は、辟支佛の身と作り、菩薩の所に到りて、菩薩に語つて言く、善男子よ、十方皆空なり。是の中なかに佛ぶつなく、菩薩ぼつなく、聲聞しやうもんなしと。是かの如ごときは魔事まじまさい魔罪まじまさいなりと説とかず教せへず。當まに知るべし、是これ菩薩摩訶薩ぼつぼつまかの惡知あちち識しなることを。

復次に、須菩提よ、惡魔は相尙、阿闍梨の身と作り、菩薩の所に到りて、菩薩道を離るることを教へ、一切種智を離るることを教へ、四念處ねんじよ、乃至八聖道分はつじやうだうぶんを離るることを教へ、檀だん、那な、波羅蜜はらみ、乃至十八不共法ふじやうふくはふを離るることを教へ、空くう、無相むさう、無作むさに入ることを教へ、是の言ごんを作なす、「善男子よ、汝なんなんこ、是の諸法しよほふを修念しゆねんして、聲聞の證しやうもんしやうをを得よ、阿耨多羅三藐三菩提あうたらかみきさほだいを用もちつて何にか爲せん」と。是かの如ごときは、魔事まじまさい魔罪まじまさいなりと説とかず教せへず。當まに知るべし、是これ菩薩の惡知識あちちなることを。

復次に、須菩提よ、惡魔は父母の形像と作り、菩薩の所に到りて、菩薩に語つて言く、子よ汝は須陀洹果しよたわんくわの爲ための故ゆゑに、勤しんめて精進しやうじんし、乃至阿羅漢果あらかんくわの證しやうあんの故ゆゑに勤しんめて精進しやうじんせよ。汝なんなん、阿耨多羅三藐三菩提あうたらかみきさほだいを用もちつて何にか爲せん。阿耨多羅三藐三菩提あうたらかみきさほだいを求めば、當まに無量阿僧祇むりやうあそうぎの生死しやうじを受け、手てを截せち、脚あしを截せち、諸しよの苦痛くつうを受うくべしと。是かの如ごときは、魔事まじまさい魔罪まじまさいなりと説とかず教せへず。當まに知るべし、是これ菩薩の惡知識あちちなることを。

復次に、須菩提よ、惡魔は、比丘の形像と作り、菩薩の所に到り、菩薩に語つて言く、眼がんの無常むじやうは、可得かた得とくの法ほふなり。乃至至意しじの無常むじやうも、可得かた得とくの法ほふなり。眼がんの苦く、眼がんの無我むが、眼がんの空くう、無相むさう、無作むさ、寂滅じやくめつ、離りも、可得かた得とくの法ほふなりと説とき、乃至至意しじも亦また是かの如ごとし、有所得うしよとくの法ほふを用もちつて、四念處ねんじよを説とき、乃至、有所得うしよとくの法ほふを用もちつて、佛ぶつの十八不共法ふじやうふくはふを説とく。須菩提よ、是かの如ごときは魔事まじまさい魔罪まじまさいなりと教せへず説とかず。當まに知るべし、是これ菩薩の惡知識あちちなることを。知り已おほつて當まに之これを遠離えんりすべし。釋しやくして曰いはく、先まには略りやくして方便ほうべん無なきことを説とき、今いまは廣ひろく方便ほうべん無なきことを説とかんと欲ほつす。所謂しゆゑ



一切種智相應の心を離れて、般若波羅蜜(多)を行じ、是の般若波羅蜜(多)の定相を取る。五波羅蜜(多)、乃至諸佛の法も亦是の如し。自ら方便無ければ、又惡知識の教を得るが故なり。

復次に、惡知識は、大に利益を失し、種種に人を壞る。是の大惡の因縁の故に、佛は更に種種の

因縁(を以て)惡知識の相を説きたまへり。惡知識とは、人をして、六波羅蜜(多)を遠離せしめ、或は罪福の報を信ぜざるが故に、遠離せしめ、或は般若波羅蜜(多)に著するが故に、「諸法は畢竟空なり。汝は何の行ずる所ぞ」と言ひ、或は小乘を讚歎して、「汝は但だ自ら老病死の苦を免れよ。衆生は何ぞ汝が事に豫らん」と。是の如き等の種種の因縁もて、教へて遠離せしむ。是を惡知識と名く。

復次に、惡知識は、弟子を教へて、魔は是れ佛の賊なるを覺知せしめ

す。魔とは、欲界の主にして、大力勢あり、常に行道の者を憎む。佛の威

力大なるが故に、魔は能くする所なく、但能く小なる菩薩を壞り、乃至、佛の形像と作り、來りて菩薩の六波羅蜜(多)を行ずるを壞す。或は讚歎し、開解し、論說し、聲聞に應ずる所に隨つて、經法を學ぶ。或は佛身と作りて、來りて之に語つて言ひ、「汝は佛を得るに任へず」と。或は、「眼等の一切の諸法は空なり。何ぞ是の阿耨多羅三藐三菩提を用つて(何にか)爲ん」と説く。或は辟支佛身と作り、或は、「十方世界の中に、三乘の人は空なり。佛道を求むる者は、但空名のみ有り。汝、云何が佛と作らんと欲するや」と説く。或は教へて、菩薩の三十七品を遠離せしめて、聲聞の三解脱門に入ら

【一九】 惡知識の義解。

しめ、「汝、是の三門に入らば、實際に作證し衆苦を盡くすとを得。汝が勤めて精進するは汝が四果を得んが爲の故なり。何ぞ阿耨多羅三藐三菩提を用つて〔何にか〕爲ん」と。或は 和尙、阿闍梨、父母と作り、來り教へて、佛道を遠離せしめ、「空しく當に是を受けば、手脚耳鼻等を截つて以て求むる者に與ふべし。若し與へずんば、則ち佛意を求むることを破し、若し與ふれば、則ち是の辛苦を受けん」と。或時は阿羅漢の比丘と作り、服を被ひ來りて爲に説く、「眼は是れ定んで、無常相、苦、空、無我相、無作、寂滅、離なり、乃至、諸佛の法も亦是の如し」と。有所得を用つて相を取り、憶念分別して説く。是等の如く、種種無量の魔事を教へて、覺知せしめざる。是を惡知識と爲す。遠離とは其の利益なきを以てなり。輕語の人の、轉來りて親近し、則ち人を害するが如し。惡知識は復是に過ぎたり。何となれば是の賊は、但能く今世の一身を害し、惡知識は、則ち世世に人を害す。賊は但能く命を害し財を奪ひ、惡知識は、則ち慧命の根を害し、佛法の無量の寶を奪ふ。知り已らば、急に當に身心を遠離すべし。

三三三、句義品第十二を釋す。

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩の句義と爲すや」。佛、須菩提に告げたまはく、「句義無き、

【二〇】 和尙 (ウパティドヤヤ) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (百)

【三一】 阿闍梨 (アチヤールヤ) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (百)

【三二】 此の品の目的は、句義即ち定義條件を説いて、般若を示すにあり。

是れ菩薩の句義なり。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提の中には、義處ある無く、亦我無ければなり。是を以ての故に、句義無きは、是れ菩薩の句義なり。須菩提よ、鳥の虚空を飛んで、跡あると無きが如く、菩薩の句義の所有なきこと、亦是の如し。須菩提よ、譬へは夢中見の所は、處所なきが如く、菩薩の句義の所有なきこと、亦是の如し。須菩提よ、譬へは、實義あること無きが如く、焰の如く、響の如く、影の如く、佛の所化の如く、實義あること無し。菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、譬へば幻人の色に、義あること無く、幻人の受想行識に、義あること無く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、譬へば幻人の内に、義あること無く、乃至法に義あること無く、眼觸乃至意觸因縁生の受に、義あること無きが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、幻人の内空を行する時、義あること無く、乃至無法有法空を行するに、義あること無きが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、幻人の四念處、乃至十八不共法を行するに、義あること無きが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀の色に、義あること無きが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀の、受想行識に、義あること無きが如く、是の識、有ること無きが故に、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、佛眼に處所無く、乃至意に處所なく、色乃至法に處所なく、眼觸乃至意觸因縁生の受に、處所なきが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須

須菩提よ、佛の内空に、處所なく、乃至無法有法空に、處所なきが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、佛の四念處に、處所なく、乃至十八不共法に、處所なきが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、有爲性の義なきが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、不生不滅の義に、處所なきが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、不生不滅の義に、處所なく、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、不作、不出、不得、不垢、不淨に、處所なきが如く、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、佛に白して言さく、「何の法か、不生不滅の故に、處所なく、何の法か、不作、不出、不得、不垢、不淨の故に、處所なきや。」佛、須菩提に告げたまはく、「色は不生不滅の故に、處所なく、受想行識は、不生不滅の故に、處所なし。乃至不垢不淨も亦是の如し。入界は不生不滅の故に、處所なく、乃至不垢不淨も亦是の如し。四念處は不生不滅の故に、處所なく、乃至不垢不淨も亦是の如し。乃至、十八不共法は不生不滅の故に、處所なく、乃至不垢不淨も亦是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、四念處の淨の義は畢竟不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、淨の中の我は、不可得なるが如き、我は所有なきが故に。乃至淨の中の知者見者は不可得なり、知者見者は所有なきが故に。須菩提よ、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも亦是の如し。須菩提よ、譬へば日の出づる時は、黒闇あること無きが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する

時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、譬へば劫燒くる時、一切の物なきが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、佛戒の中には破戒なし。須菩提よ、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。須菩提よ、佛の定中に、亂心なく、佛の慧の中に、愚癡ある無く、佛の解脫の中に、不解脫なく、解脫知見の中に、不解脫の知見なきが如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきも、亦是の如し。須菩提よ、譬へば佛光の中には、日月の光現れず、佛光には、四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵衆天、乃至阿迦尼吒天の光現せざるが如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩の句義の所有なきことも、亦是の如し。何となれば、是の阿耨多羅三藐三菩提、菩薩、菩薩の句義、是の一切の法は、皆合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相なればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、一切法の無礙の相の中に、應當に學すべく、亦應當に知るべし」と。

【三】第九問、佛は已に菩薩の字を破し給へり、今何ぞ菩薩の句義を問ふや。

論 問うて曰く、(三)上來、佛は須菩提の與に種種の因縁もて、菩薩の字を破したまへり。今何を以つてか菩薩の句義を問ふや。答へて曰く、須菩提は、菩薩の字を破せるも、佛は破し給はず、言く、「菩薩の字は本より已來、畢竟空なり。但五衆の中の數にして、假りに菩薩と名く。而るを衆生は、假名を以て、實と爲す」と。佛の言はく、「假名は實なし。但諸の法數の和合に従つて名と爲す」と。復次に、諸佛の法は、無量無邊不可思議なり。須菩提は、菩薩の字の空に因りて、般若波羅蜜(多)の相を説き、今、佛の菩薩の字義を説きたまふを聞き、是に因りて般若波羅蜜(多)を説かんと欲する

なり。

復次に、應に問ふべき因縁は無量無邊なり。所謂、佛の音聲に六十種の莊嚴ありて、能く諸天をして専ら聽かしめたまふ、何に況んや人をや。但音聲のみすら、人をして聞かんことを樂はしむ。何に況んや、大利益の義を説きたまふをや。須菩提は佛より是の事を聞き、未だ意を發さざる人をして、當に阿耨多羅三藐三菩提を發さしむべし。意を發すとは、未だ六波羅蜜〔多〕を行せざるを、當に行せしむべし。行者にして、清淨ならざれば、當に清淨ならしむべく、清淨の行者は、當に阿鞞跋致に住し、衆生を成就し、佛法を具足し、乃至一生補處ならしむべし。是等の如き、種種無量の因縁利益の故に、佛は、須菩提を以て、問主と爲し、一切の十方世界の、在會の衆生に語りたまへり。佛、須菩提に告げたまはく、「句義無きは是れ菩薩の句義なり。阿耨多羅三藐三菩提には處る所なく、亦我なく、名なく、名なく、是の中に於て、依止する處なし。即ち是の法は空にして、我なく、名〔なく〕、得道の者なし」と。佛、須菩提に示したまはく、「若し汝、我なく、我所なしと知らば、阿羅漢を得る者なり。菩薩も亦是の如く、阿耨多羅三藐三菩提の中に於て、我なく、我所なし、譬へば鳥の虚空を飛ぶに、足跡あること無きが如く、菩薩の句義も亦是の如し。諸法を行するに、虚空の中には、依止し著する處なし。是の故に、菩薩には句義無しと言ふ。

問うて曰く、何等か是れ菩薩の句義なるや。答へて曰く、天竺の語法は衆字和合して語を成し、

【四】第一〇問、菩薩の句義とは何ぞや。

衆語しゆご和合わがふして句くを成なし。(二五) 菩提ぼだいを一字いちと爲なし、(二六) 提だいを一字いちと爲なす。是この二合にがうせざれば則すなはち語ごなく、若もし和合わがふすれば、名なけて菩提ぼだいと爲なすが如ごとし。秦しんには「之これを」無上むじやう智慧ちゑと言いふ。(二七) 薩埵さつたは、或あるは衆生しゆじやうと名なけ、或あるは是れ大心だいしんなり。無上むじやうの智慧ちゑの爲ための故ゆゑに、大心だいしんを出いだすを名なけて(二八) 菩提ぼだい薩埵さつたと爲なし、願ねがつて衆生しゆじやうをして、無上むじやう道だうを行なせしめんと欲ほつす。是これを菩提ぼだい薩埵さつたと名なく。

復次またつぎに、此この品ほんに佛ほとけ及び佛ほとけの弟子でしは、種種しゆじゆの因縁いんねんもて、菩薩ぼさつ摩訶薩まかさつの義ぎを説とけり。菩提ぼだいも一語いちご、薩埵さつたも一語いちごにして、二語にご和合わがふするが故ゆゑに、名なけて義ぎを爲なす。若もし名字みやうじ語句ごくを説とけば、皆同一事みなどうじにして所在しよざいなし。今須いましゆ菩提ぼだいは「何なんの定相ぢやうさうの法ほふを以もつてか菩薩ぼさつと爲なすや」と問とふ。句義くぎとは、天竺てんぢくに(二九) 波陀はだと言いひ、秦しんに句くと言いふ。是この波陀はだに種種しゆじゆの義ぎあり。後のちの譬喻ひやうの中なかに説とくが如ごとし。

問とうて曰いはく、(三〇) 但鳥ただとりの虚空こくうを飛とぶを以もつて、句義くぎを明あきらかにするに足たれり。何なにを以もつてか種種しゆじゆに廣ひろく説とくや。答こたへて曰いはく、衆生しゆじやうの聽取ちやうしゆするは、種種しゆじゆにして同おなじからず。義ぎを好このむ者ものあり、譬喻ひやうを好このむ者ものあり。譬喻ひやうは以もつて義ぎを解げすべく、譬喻ひやうに因よれば、心則こころすなはち樂著がやうぢやくす。人ひとの生うまれてより端正たんじやうなるに、加くふるに嚴飾こんじきを以もつてすれば、其その光瑩くわうやうを益ますが如ごとし。此この譬喻ひやうの中なかには多おほく譬喻ひやうを以もつて義ぎを明あかす。後のちに説とく所ところの如ごとし。所謂いはゆる、夢ゆめの如ごとく、影かげの如ごとく、響ひびきの如ごとし。佛ほとけの化けしたまふ所ところの如ごとし。

- 【二五】 菩提ぼだい
- 【二六】 提だい
- 【二七】 薩埵さつた (五等ごとう)
- 【二八】 衆生しゆじやう
- 【二九】 波陀はだ (Patala)
- 【三〇】 第一だいいち問、句義くぎは、鳥とりの虚空こくうを飛とぶを以もつて明あかにするに足たる。然しかるを今いま之これを廣説くわうせつするは何故なにゆゑなるか。
- 【三一】 縮藏しゆくざうには、瑩やうを榮さかすに作なれり。

きは、是の事は虚誑なること、先に説けるが如し。菩薩の義も亦是の如く、但耳に虚誑不實を聞くべし。是を以ての故に、菩薩は自ら高うすべからず。法性、法相、實際等の句の如きも、定義あること無し。幻人には五衆、乃至諸佛の法なし。佛には、五衆、乃至一切法無きが如く、有爲法の中には、無爲法なきが如く、無爲法の中には、有爲法なきが如く、無爲法の不生不滅等の諸法の中には、不生不滅の相なく、亦異相なく、三十七品に清淨の相なきが如し。何となれば、人あり、是の三十七品の相に著すれば、即ち是れ結使なればなり。我、乃至知者、見者の淨相は、不可得なるが如し。

問うて曰く、(三)我、乃至知者、見者等は、云何が淨なるや。答へて曰く、種種の我の相を求覓するに不可得なり。是を我は淨なりと名く。第一義の中には、淨なく、不淨なし。譬へば、臭き死狗を洗ひ、乃ち皮毛、血肉、骨髓、都べて盡くるに至れば、是の時は、狗にあらす、脂にあらす、淨と言ふことを得ず、不淨と言ふことを得ざるが如く、我、乃至知者、見者も、亦是の如し。無我、空の智慧を以て、我相を求むるに、不可得にして、是の時、我あるにあらす、我なきにあらざるなり。日出づれば、闇なく、劫盡くる時は、一切の物なきが如く、佛の五衆の戒中には、破戒は不可得なるが如く、日月、星宿、眞珠等、諸天、鬼神、龍王の光も亦是の如く、是の般若波羅蜜(多)の、智慧の光中に入れば、則ち現せず。是の譬喩に因りて、諸の

【三】第一二問、我、乃至知者、見者等は云何が淨なりや。

菩薩を教へ、當に一切法を學して、相を取らざるべし。所得なきが故なり。

經

須菩提、佛に白して言さく、世尊よ、何等か是れ一切法なる。云何が一切法の中に、無礙の相を應に學すべく應に知るべきや。佛須菩提に告げたまはく、「一切法とは善法と不善法、記法、無記法、世間法、出世間法、有漏法、無漏法、有爲法、無爲法、共法、不共法なり。須菩提よ、是を名けて一切法と爲す。菩薩摩訶薩は是の一切法、無礙の相の中に、應に學すべく、應に知るべし。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか世間の善法と名くるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「世間の善法とは、父母に孝順し、沙門、婆羅門に供養し、尊長に敬事し、布施福處、持戒福處、修定福處、勸導福事、方便生の福徳、世間の十善道、九相(即ち)服相、血相、壞相、膿爛相、青相、嗔相、散相、骨相、燒相(乃至)四禪、四無量心、四無色定、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念安般、念身、念死、是を世間の善法と名く。

何等か不善法なるや、他の命を奪ひ、與へざるを取り、邪淫、妄語、兩舌、惡口、非時の語、貪欲、惱害、邪見、是の十不善道等、是を不善法と名く。何等か記法なるや、若くは善法、若くは不善法、是を記法と名く。何等か無記法なるや、無記の身業、口業、意業、無記の四大、無記の五衆、十二入、十八界、無記の報、是を無記法と名く。

何等か世間法と名くるや、世間法とは五衆、十二入、十八界、十善道、四禪、四無量心、四無色定、是を世間法と名く、何等か出世間法と名くるや、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空解脫門、無相解脫門、無作解脫門、三無漏根(即ち)未知欲知根・知根・知已根、三三昧(即ち)有覺有觀三昧・無覺有觀三昧・無覺無觀三昧、明解脫、念、慧、正憶念、八背捨、何等か八なるや、内に色相ありて、外に色を觀る、是れ初背捨なり。内に色相なくして、外に色を觀る、是れ二背捨なり。淨背捨の身もて證を作す、是れ三背捨なり。一切の色相を過ぐるが故に、有對の相を滅するが故に、

一切の異相念ぜざるが故に、無邊虚空處に入る、是れ四背捨なり。一切無邊虚空處を過ぎて、一切無邊識處に入る、是れ五背捨なり。一切無邊識處を過ぎて、無所有處に入る、是れ六背捨なり。一切無所有處を過ぎて、非有想非無想處に入る、是れ七背捨なり。一切の非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入る、是れ八背捨なり。(乃至)九次第定なり。何等か九なるや。欲を離れ、亦惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂ありて、初禪に入る。諸の覺觀を滅して、内清淨なるが故に、一心に覺なく觀なく、定生喜樂ありて、二禪に入る。喜を離るるが故に、捨を行じ、身樂を受く。聖人は能く説き、能く捨念行樂し、第三禪に入る。苦樂を斷するが故に、先に憂喜を滅するが故に、苦ならず、樂ならず、捨念淨く、第四禪に入る。一切の色相を過ぐるが故に、有對相を滅するが故に、一切の異相念ぜざるが故に、無邊虚空處に入る。一切の無邊虚空處を過ぎて、一切の無邊識處に入る。一切の無邊識處を過ぎて、無所有處に入る。一切の無所有處を過ぎて、非有想非無想處に入る。一切の非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入るなり。復出世間の法あり。內空、乃至無法有法空、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、一切智、是を出世間の法と名く。

何等をか有漏法と爲す。五受衆、十二入、十八界、六種、六觸、六受、四禪、乃至四無色定、是を有漏法と名く。何等をか無漏法と爲す。四念處、乃至十八不共法、及び一切智、是を無漏法と名く。何等をか有爲法と爲す。若し法の生、住、滅、欲界、色界、無色界、五衆、乃至意觸因緣生の受、四念處、乃至十八不共法、及び一切智、是を有爲法と名く。何等をか無爲法と爲す。不生、不住、不滅、若くば樂盡き、瞋盡き、癡盡き、如、不異、法相、法性、法位、實際、是を無爲法と名く。何等をか共法と爲す。四禪、四無量心、四無色定、是等の如きを共法と名く。何等をか不共法と名く。菩薩摩訶薩は、是の自相空の法中に於て、著すべからず、動ぜざるが故なり。菩薩は亦應に一切法の不二の相を知るべし、動ぜざるが故なり。是を菩薩の義と名く。

論 問うて曰く、(三) 須菩提は何を以ての故に、先づ世間の善法を問ひ、後に出世間の法を問ふや。

答へて曰く、先づ麤を問ひ、後に當に細を問ふべく、先づ世間の相を知りて、後に則ち能く出世間の相を知る。(四) 世間の善法とは、有罪有福の果報に、今世、後世あり。世間あり、涅槃あり、佛等の諸の賢聖には、今世、後世、及び諸法實相の證あることを知る。所謂、父母に孝順なる等より、乃至十念に至る。(五) 如法に物を得て、沙門、婆羅門に供養し供給す。(六) 沙門を

名けて、出家求道の人と爲し。(七) 婆羅門を名けて、在家學門の人と爲す。是の二人は、世間に於いて、爲し難きを能く爲し、衆生を利益するが故に應當に供養すべし。尊長とは、叔伯姉兄等なり。恭敬供養は、是れ一切修家の法なり。布施、持戒、修定、觀導は、初品の中に説くが如し。方便して福德を生ずとは、懺悔し、隨喜し、佛を請じて久しく住し、涅槃せず、法輪を轉ずるが如き、空を行すと雖も、空に著せず、還た諸善を修行するが如き、是等の如きは、方便して諸の福德を生ずるなり。十善道、乃至四無色は、先に説くが如し。(八) 十念の中の八事は、先に説くが如し。(九) 善念とは、善業の因縁を思惟し、分別して、其の心を制伏するなり。

復次に、涅槃は是れ眞の善法にして、常に心を繫けて涅槃を念ず、是れ善念なり。身念は、即ち是

【三】 第一三問 須菩提が、先づ世間の法を問ひ、然る後に出世間の法を問ひたる理由如何。

【四】 世間の善法の義解。

【五】 沙門の義解。

【六】 婆羅門の義解。

【七】 十念とは、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念安般、念身、念死なり。

【八】 善念の義解。

れ身念處なり。【元】善法と相違する、是を不善法と名く。【四〇】無記法とは、所謂、威儀心、工巧心、變化心、及び是の身業、口業を起す善、不善の五衆を除いて、餘の五衆及び虚空、【四一】非數緣滅等なり。世間の法とは、五衆、或は善、或は不善、或は無記、十二入の八無記の四三種、十八界の八無記の十三種、十善道、四禪、四無量心、四無色定なり。是の善法は、凡夫の人も、能く成就することを得るが故に、又自ら世間を出づること能はざるが故に、世間の法と名く。出世間とは、三十七品、三解脱門、三無漏根、三昧なり。先に説くが如し。明、解脱とは、明は【四二】三明、解脱は、【四三】有爲解脱と、無爲解脱となり。念とは、十念、慧とは、十一智慧なり。【四四】正憶とは、諸法實相に隨つて觀じ、身法に隨つて觀するが如き、一切善法の本なり。

復次に、八背捨、九次第定、十八空、十力、四無所畏、十八不共法は、先に義の中に廣く説くが如し。是の四念處等は一心に道と爲るが故なり。又八背捨、九次第定等は、凡夫の人の得ざる所にして、名けて出世間と爲す。念、慧、正憶には、二種の世間と、出世間と有り、雖も、此の中には、出世間のみを説く。右漏

【元】 不善法の義解。

【四〇】 無記法の義解。

【四一】 非數緣滅とは、又非智緣盡といふ。無爲法の一。新に非擇滅無爲といふ。智慧の法數によるに非ず、只諸法の能く生ずる緣の起らざる爲に諸法の盡滅に歸するをいふ。

【四二】 三明。智の法を知ること顯了なるを明といふ。佛にありては三達といひ、羅漢にありては三明といふ。一に宿命明、二に天眼明、三に漏盡明なり。

【四三】 有爲解脱とは、阿羅漢の無漏の眞智をいふ。

【四四】 無爲解脱とは、煩惱の惑障を斷盡したる涅槃をいふ。

【四五】 正憶の義解。

出世間のみを説く。右漏

法とは、五衆等、四禪、四無色定なり。無漏法とは、世間にあらず、是れ四念處、乃至十八不共法なり。有爲法には、略して 三相を説く。所謂る生・住・滅にして三界の繫なり。及び四念處、乃至十八不共法は、無爲法と爲すと雖も、作法なるを以ての故に、是を有爲法と爲す。有爲と相違するは、是れ無爲法なり。

復次に、三毒等の諸の煩惱を滅し、五衆等は次第に相續せず、法相、法性、法住、實際等の如き、是を無爲法と名く。

問うて曰く、色は如色にして、如を離れず、如は色を離れず、色は是有爲なるに、云何が如は是れ無爲なりや。答へて曰く、色に二種あり。

一には凡夫の肉眼もて、憶想分別する色、二には聖人の心の知る所の色にして、實相、如、涅槃なり。凡夫の人の、知る所の色を名けて色となす。

是の色は、如の中に入れ、更に不生不滅なり。有爲の如きは、是れ五衆なりと雖も、而も種種の名字あり。所謂十二入、十八界、因縁等なり。無爲法に三種ありと雖も、亦種種に名字を分別す。所謂る如、法相、法住、實際等なり。共法とは凡夫、聖人の生ずる處、入定の處を共にするが故に、名けて共法と爲す。不共法とは、四念處、乃至、十八不共法なり。菩薩は分別して、此の諸法の各々の相を知る。是の法は、皆因縁の和合より生ずるが故に無性なり。無性なるが

【四六】 三相とは、一に解脫相、生死の相なきをいふ。二に離相、涅槃の相なきをいふ。三

に滅相、生死涅槃の相無く、而も其の無相もまた無なるをいふ。即ち非有非無の中道なるを言ふ。

【四七】 第一四問、如を無爲といふ理由如何。

【四八】 二種の色。

故ゆゑに自性じしやうくう空くうなり。菩薩ぼさつは是こゝの無障礙むしやうげの法ほふの中なかに住すまして動どうせず。「そは」不ふ二入にふの法門ほふもんを以もつて、一切法いつさほふに入いつて動どうせざるが故ゆゑなり。

# 卷の第四十五

## 摩訶薩品第十三を釋す。

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何を以ての故に、名けて摩訶薩を爲すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩は、必定衆の中に於て上首たり、是の故に名けて摩訶薩と爲す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等をか必定衆と爲して、是の菩薩摩訶薩は、而も上首たるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「必定衆とは、性地の人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、初發心の菩薩、乃至阿鞞跋致地までの菩薩なり。須菩提よ、是を必定衆と爲す。菩薩は上首たり、菩薩摩訶薩は、是の中に於いて、大心を生じ、壞すべからざること、金剛の如く、當に必定衆の爲めに、上首と作るべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の大心を生じ、壞すべからざること、金剛の如くなるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、應に是の如きの心を生ずべし。我れ當に無量生死中に於いて、大誓もて、莊嚴すべし。我れ應當に一切の所有を捨つべし。我れ應當に心に一切衆生に於て等しうすべし。我れ應當に三乘を以て、一切衆生を度脱して無餘涅槃に入らしむべし。我れ一切衆生を度し已りて、乃至一人も涅槃に入る者あること無けん。我れ應當に一切諸法の不生の相を解すべし。我れ應當に純ら薩婆若心を以て、六波羅蜜(多)を行すべし。我れ應當に智慧を學して、一切法を了達すべし。我れ應當に諸法一相の智門を了達すべし。我れ應當に乃至無量相の智門を了達すべし。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大心を生じて、壞すべからざること、金剛の如しと名

【一】此の品は、摩訶薩の義を辨じて、不動なること金剛の如しと示すを眼目とす。或は金剛品ともいふ。

く。是の菩薩摩訶薩は是の心中に住せば、諸の必定業中に於いて、而も上首と爲る。是の法は所得なきを用つての故に。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に是の如き心を生ずべし。我れ當に十方の一切衆生、若くは地獄の衆生、若くは畜生の衆生、若くは餓鬼の衆生に代つて、苦痛を受け、一一の衆生の爲に、無量百千億劫、代つて地獄の中苦を受け、乃ち是の衆生を無餘涅槃に入るに至るべし。是の法を以ての故に、是の衆生の爲に、諸の勤苦を受く。是の衆生は無餘涅槃に入り已つて、然る後に自ら善根を種ふ、無量百千億阿僧祇劫に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の小心を生じて、壞すべからざること、金剛の如く、是の心中に住して必定業の爲めに、上首と作ると爲す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、大快心を生じ、是の大快心の中に住して、必定業の爲めに、上首と作ると。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の大快心なるや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、初發意より、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、染心、瞋恚心、愚癡心を生ぜず、惱心を生ぜず、聲聞辟支佛心を生ぜず。是を菩薩摩訶薩の大快心と名く。是の心中に住して、必定業の爲めに、上首と作り、亦た是の心あることを念ぜず。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に不動心を生ずべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「云何が不動心を名くるや」と。佛の言はく、「常に一切種智心を念じ、亦た是の心あることを念ぜざる、是を菩薩摩訶薩の不動心と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、一切衆生の中に於いて、應に利益安樂の心を生ずべし。云何が利益安樂の心と名くるや。一切衆生を救済して、一切衆生を捨てず。是の事も、亦た是の心あるを念ぜず。是を菩薩摩訶薩は、一切衆生の中に於いて、利益安樂心を生ずと名く。是の如く、須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて必定業の中に於いて、最も上首たり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應當に欲法、喜法、樂法の心を行ずべし。何等か是れ法なるや。所謂、諸法の實相を

破らざる、是を名けて法と爲す。何等をか名けて欲法、喜法と名くるや。法を信じ、法を忍び、法を受くる、是を欲法、喜法と名く。何等をか樂法と名くるや。常に是の法を修行する、是を樂法と名く。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、必定業の中に於いて、能く上首と爲る。是の法は、所得なきを用つての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、内空乃至無法有法空に住し、能く必定業の爲めに上首と爲る。是の法は所得なきを用つての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、四念處の中に住し、乃至十八不共法の中に住し、能く必定業の爲に上首と作る。是の法は、所得なきを用つての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、如金剛三昧、乃至離著虚空不染三昧の中に住し、必定業に住して上首と作る。是の法は、所得なきを用つての故なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の諸法の中に住して、能く必定業の爲に上首と作る。是の因縁を以ての故に、名けて摩訶薩と爲す」と。

- 【一】 摩訶(マハー)
- 【二】 薩(サツ)
- 【三】 薩(サツ) 薩(サツ) 薩(サツ)
- 【四】 發心とは、菩提心を發すなり。無上菩提を願求する心なり。

論

釋して曰く、須菩提は已に佛に從つて菩薩の義を聞き、今摩訶薩の義を問ふ。摩訶とは、秦に大と言ひ、薩とは秦に心と言ひ、或は衆生と言ふ。是の衆生は、世間の諸の衆生の中に於いて、第一最上なるが故に、名けて大と爲す。又大心を以て、一切法を知り、一切衆生を度せんと欲する、是を名けて大と爲す。復次に、菩薩なるが故に、摩訶薩と名け、摩訶薩なるが故に、菩薩と名く。發心を以て、無上道と爲すが故なり。復次に、菩薩摩訶薩の義を讀する品の中の如く、此の中

に應に廣く説くべし。

復次に、佛は此の中に自ら摩訶薩の義を説きたまへり。衆生に三分あり。一には正定にして、必ず涅槃に入り、二には邪定にして、必ず惡道に入り、三には不定なり。正定は衆生の中に於て、當に最大なるが故に摩訶薩と名く。大衆とは、佛を除いて餘の一切の賢聖なり。所謂、性地の人なり。是れ聖人の性中に生ず、故に名けて性と爲す。小兒の貴家に在りて生じ、小にして未だ能くする所あらずと雖も、後に必ず大事を成せんことを望むが如し。是の地の煖法より乃ち世間第一法に至る八人は、見諦道と名けて、十五心の中に行ず。

問うて曰く、是の十五心の中は、何を以てか名けて八人と爲すや。答へて曰く、思惟道の中には、智を用ふると多く、見諦道の中には、見を用ふると多し。忍智は忍に隨ふ、所以は何ん、忍の功大なるが故なり。

復次に、忍智の二事、能く斷じ能く證して、八忍の中に住す、故に名けて八人と爲す。須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の義は、先に説くが如し。初發意の菩薩とは、有人の言く、「初發意とは、無生法忍を得、阿耨多羅三藐三菩提の相に隨つて發心する、是を初發意と名け、眞の發心と名け、了了に諸法實相を知り、及び心相を知り、諸の煩惱を破するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心に隨

- 【五】 衆生の三分——(一)正定、(二)邪定、(三)不定。
- 【六】 摩訶薩の義解。
- 【七】 性地の人とは、十地の修行位の第二地の人なり。見思の惑を伏して朦朧として法性の空理を望見するをいふ。
- 【八】 第一問、是の十五心の中を八人と爲す理由如何。

ふが故に、顛倒せざるが故に、此の心を名けて、初發心と爲す」と。有人の言く、「諸の凡夫の人は、諸の結使に住すと雖も、佛の功德を聞いて大悲心を發し、衆生を憐愍して、我は當に佛と作るべしと。此の心は煩惱の中に在りと雖も、心尊貴なるが故に、天人に敬せらる。轉輪聖王の太子は、初めて受胎する時、諸子に勝り、諸天・鬼人皆共に尊貴するが如く、菩薩の心も亦た是の如し。結使の中に在りと雖も、諸天神通の聖人に勝るし」と。

復次に、菩薩は初發心、乃至、未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざるも、授記ありて法位に入る。無生法忍を得るとは、阿鞞跋致に名く、阿鞞跋致の相は、後に當に廣く説くべし。是の如き等の大衆を、當に上首と作すべきが故に、摩訶薩と名く。是の菩薩は、一切の聖人の主たらんと欲するが故に、大心を發して、一切の苦を受け、心の堅きこと金剛の如し、不動なるが故なり。金剛心とは、一切の結使煩惱も動かす能はざる所なり。譬へば、金剛山の、風の爲に傾搖せられざるが如し。諸の惡しき衆生、魔人來りて意に隨つて行せず、其の語を信受せず、瞋罵し、謗毀し、打撃し、閉繫し、斫刺し、割截すれども、心變異せず。有は來りて頭目、髓腦、手足、皮肉、筋骨を乞ひ索むれば、盡く能く之を求むる者に與へ、意に猶ほ厭ふこと無く、更に瞋恚し、罵罵するも、爾の時、心に忍びて動せず。譬へば、牢固の金剛山は、人の來りて躪撃し、毀壞し、諸の蟲來りて、齧めども、虧損する所なきが如し。是を金剛心と名く。

【九】 金剛心の義解。

復次に、佛は自ら金剛心の相を説きたまへり。所謂菩薩は、應に是の念を作すべし。「我は一月、一歳、一世、二世、乃至千萬劫世、大に誓ひて莊嚴すべからず。我は應に無量無數無邊世の生死の中に、一切衆生を利益し度脱すべし。二には、我は應に一切の内外に、所有する貴重物を捨つべし。三には、一切衆生の中に、等心にして、憎愛なけん。四には、我れ當に三乗の如を以て、一切衆生を度脱すべし。五には、是の如きの衆生を度し已りて、實に度する所なく、而も其の功なく、此の中に心亦悔いず、没せざらん。六には、我れ應に一切法の不生不滅、不來不去、不垢不淨等の諸相を知るべし。七には、我れ應當に清淨無染の心を以て、六波羅蜜〔多〕を行じ、薩婆若に廻向すべし。八には、我れ應當に善く一切世間の所作の事、及び出世間の應に知るべき所の事、皆通達し了知すべし。九には、我れ應當に諸法一相の智門、所謂一切諸法の畢竟空を解了し、一切諸法を觀すること、無餘涅槃の相の如く、諸の憶想分別を離るべし。十には、我れ應當に諸法の二相、三相、乃至無量相の門を知り、通達し明了なるべし。二相とは、一切法に二種あり。若くは有なると、若くは無なると。若くは生ずると、若くは滅すると。若くは作なると、若くは不作なると。若くは色と、若くは無色と等なり。三門とは、若くは一と、若くは二と、若くは多となり。三より以上は、皆名けて多と爲す。若くは有と、若くは無と、若くは非有非無と、若くは上と、若くは中と、若くは下と、若くは過去と、若くは未來と、若くは現在と、三界、三

【一〇】 二相の意義。

【一一】 三門の意義。

法、善と不善と無記と等の三門あり。四門あり、五門あり。是の如き等の無量の法門に、皆通通無礙にして、是の中に心悔いず、怯へず、疑はず、信受し、通達無礙にして、常に息まず。諸の煩惱及び其の果報、及び諸の障礙の事を滅して、皆敗壞せしむること、金剛實の能く諸山を摧破するが如く、是の金剛心の中に住して、當に大衆に於いて、而も上首と作るべし。不可得空を以ての故なり。不可得空とは、若し菩薩、是の如き大心を生ぜば、金剛の如くならん。而も憍慢を生ずる者は、罪凡夫に過ぎたり。是を以ての故に、無所得を用ふと説く。諸法は定相なく、幻の如く、化の如し。

復次に、(二三) 心金剛の如しとは、我當に三惡道に墮せる、所有の衆生に代りて勤苦を受け、一一の衆生の爲の故に、代りて地獄の苦を受くべし。乃至、是の衆生は、三惡道を

【二三】 如金剛の義解。  
【二三】 大快心の義解。

出でて、諸善の本を集め、無餘涅槃に至り已りて、復た一切衆生を救ひ、是の如く展轉して、一切衆生盡く度し已りて、後當に自ら爲に諸の功徳を集め、無量阿僧祇劫にして、乃ち當に佛と作るべし。是の中に心悔いず、縮まず、能く是の如く、衆生に代りて、勤苦を受けて、自ら諸の功徳を作し、久しく生死に住して、心悔いず、没せず、金剛地の能く、三千大千世界を持して、動搖せざらしむるが如し。是の心の牢堅なるが故に、名けて金剛の如しと爲す。(二四) 大快心とは、牢固の心ありと雖も、未だ是れ大快ならず。馬の大力ありと雖も、而も未だ大に快やかならざるが如し。衆生の中に於いて、二種の等心を得るが故に、欲染の心を生ぜず。若し偏愛あれば、則ち

是れ賊と爲り、我等の心を破る。佛道の本の爲に、常に慈悲心を行す、故に瞋心あること無し。常に  
 語法は因縁和合の生にして、自性あること無きを觀するが故に、則ち癡心なく、衆生を愛念するこ  
 と、赤子よりも過ぎたるが故に、惱心あること無く、衆生を捨てず、佛道を貴ぶが故に、聲聞辟支  
 佛心を生ぜざるなり。

問うて曰く、(一四) 若し心牢固なること金剛の如くんば則ち是れ不動なり、今何を以てか更に不動心を  
 説くや。答へて曰く、或る時は復た牢固なりと雖も、心に猶ほ増減あり。

樹は牢固なりと雖も、猶ほ動搖すべきが如し。(一五) 動に二種あり。一には、  
 外の因縁によりて動くこと先に説くが如し。二には、内の因縁によりて動

く、諸の邪見、疑等なり。若し常に一切の智慧、佛道を憶念せば、我れ當  
 に是の果報を得べきが故に心動せず。

復次に、(一六) 菩薩は、應に種種の因縁もて、衆生を利益すべし。飲食、乃至佛樂、もつ  
 常に衆生を捨てず、苦を離れしめんと欲す。是を安樂心と名く。「而も」亦た是の心あるとを念せず。

復次に、菩薩の樂法を名けて、上首と爲す。法は諸法の相を破壊せざるなり。諸法の相を破壊せ  
 ずとは、法として著すべき無く、法として受くべき無きが故なり。謂ゆる不可得なり。是の不可得空

は、即ち是れ涅槃なりと、常に信受し忍する、是を名けて欲法と爲し、常に三解脱門を行するを名け

- 【一四】 第二問、今また不動を説くは何故なるか。
- 【一五】 二種の動。
- 【一六】 安樂心の義解。

て、樂法と爲す。

復次に、菩薩は是の十八空の中に住して、十八意行に隨はざるが故に、罪業を起さず。四念處、乃至十八不共法に住して、諸の煩惱を滅し、諸の善法を集むるが故に、能く上首と爲る。

復次に、菩薩は、金剛三昧に入り、等心にして、快樂を受け、世樂を厭うて、善根を増長し、智慧、方便の故に、大聖衆に於いて、而も上首と爲る。若し能く大を爲す者は上首と作す、何に況んや小なるものを。是の故に名けて摩訶薩と爲す。

【七】斷見品第十四を釋す。

經 爾の時に、慧命舍利弗、佛に白して言さく、「我も亦た摩訶薩たる所以を説かんと欲す。

と。佛、舍利弗に告げ給はく、「便ち説け」と。舍利弗言さく、「我見、衆生見、壽見、命見、生見、養育見、衆數見、人見、作見、使作見、起見、使起見、受見、使受見、知者見、見者見、斷見、常見、有見、無見、陰見、入見、界見、諦見、因緣見、四念處見、乃至十八不共法見、佛道見、成就衆生見、淨佛世界見、佛見、轉法輪見、是の如き諸見を斷ぜんが爲の故に、而も爲に法を説く。是を摩訶薩と名く」と。須菩提、舍利弗に語つて言く、「何の因緣の故に、色見は是れ見なりや。何の因緣の故に、受想行識、乃至轉法輪見は、是を名けて見と爲すや」と。舍利弗、須菩提に語らるく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、方便なきが故に、色に於いて見を生ず。有所得を用つての故なり。受想行識、乃至轉法輪に於いて見を生ず。有所得を用つての故なり。是の中、菩薩

【七】此の品には二の異名あり。(一)樂説品と、(二)斷諸見品となり。舍利弗等が、佛説に次で、衆生利益の爲に説くが故に、樂説といひ、諸見を斷するを説くが故に、斷諸見といふ。

摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以て、諸の見網を斷じ、而も爲めに法を説く。そは無所得を用つての故なり。

問うて曰く、(二八)は五百の大阿羅漢を將ゐて、阿那婆達多龍池に到り、遠離の樂を受け、自身及び弟子の本業の因縁を説かんと欲したまふに、而も舍利弗在らず。佛は目連をして、之を命せしめたまふ。

時に目連は神通力を以て祇洹に到る。時に舍利弗は衣を縫へり。目連に語つて言く、「小しく住し、衣を縫ひ訖るを待ちて當に去るべし」と。目連は催足すらく、「疾かに去れ」と。時に目連手を以て衣を摩するに、衣は即ち成り竟れり。舍利弗、目連を見て、其の神通を貴び、即ち腰の帶を以て地に擲ち、語つて言く、「汝、此の帶を舉し去れ」と。目連、兩手を以て、帶を舉するに、地を離すこと能はず。即ち諸の深き定に入りて、之を舉するに地は爲に大に動きしも、帶は猶ほ地に著けり。時に憍陳如、佛に問うていはく、「何の因縁を以てか、地は大に震動するや」と。佛の言はく、「目連、甚深の禪定に入つて、大神通力を作し、舍利弗の帶を舉するに、而も舉すること能はず」と。佛、諸の比丘に告げたまはく、「舍利弗の出入する所の禪定は目連乃至、「諸聖」も其名だも識らず。佛の入り給ふ所の禪定は、舍利弗乃至、「諸聖」も其名だも識らず」と。舍利弗の智慧は、佛「の智慧」と懸に殊なれり。何を以てか、我も亦た説かんと欲するが故に説くにあらや。答へて曰く、舍利弗は、大衆の中に於いて、其の智慧高心を顯さんと欲するが故に説くにあら

【二八】 第三問、舍利弗の智慧は、佛の夫と懸に殊なれり。然るを舍利弗が「我も亦説かんと欲す」と願へるは何故なるか。  
【二九】 舍利弗、目連の二聖、互に神通力を現す。

す。舍利弗は、佛を逐うて法輪を轉ずる人にして、廣く衆生を益す。是の摩訶薩の義は益する所甚だ廣し。是の故に、佛説き已りたまへば、舍利弗は次に説くなり。

復次に、多くの人は、舍利弗の語を信樂す。何となれば宿世の因縁を以ての故に、多く菩薩の心を發せばなり。佛は大慈悲心を以ての故に、吾我的心及び習の根本を已に抜き、又法愛已に斷じたまふが故に、是の如き種種の因縁の故に聽く。舍利弗の言く、我見及び知者、見者、佛見、菩薩見、諸の衆生見等、及び有無、斷常等の邪見、五衆、乃至諸佛の法の轉法輪等の諸法の見、是の菩薩は能く是の三種の見を斷ずるが故に、當に大衆の中に於いて説法すべし。是の三種の見は、無始の世界より來た、習著して骨髓に入れり。須菩提、是の念を作さく、「佛は説きたまはく、五衆等、乃至諸佛の法は、是れ菩薩の行なりと。何を以てか、諸見を斷ずるが爲の故に、法を説くや」と。是の念をなし已つて、舍利弗に問ふに、舍利弗答ふらく、「方便なき菩薩は、般若羅波蜜〔多〕を行せんと欲し、色を觀じて定相を求め、色の一相を取りて色見を生ず。此と相違するを名けて方便ありと爲し、是の菩薩は色を觀ずと雖も、妄見を生ぜず、而も能く諸の邪見等を斷ず」と。

經

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我も亦た摩訶薩たる所以を説かんと欲す」と。佛の言はく、「便ち説け」と。須菩提言さく、「世尊よ、是の阿耨多羅三藐三菩提心、無等等心は、聲聞辟支佛の心と共ならず。何となれば、是の

切智心は、無漏にして不繫なるが故なり。是の一切智心は、無漏不繫の中にも、亦た著せず。是の因縁を以ての故に、摩訶薩と名くしと。舍利弗、須菩提に語るらく、「何等をか菩薩摩訶薩の無等等の心は、聲聞辟支佛の心と共に著せずしと。須菩提、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、法に生あり、滅あり、増あり、減あり、淨あるを見ず。舍利弗よ、若し法に生なく、滅なく、乃至垢なく、淨なくんば、是の中に聲聞心なく、辟支佛心なく、阿耨多羅三藐三菩提心なく、佛心なきなり。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の無等等の心は、聲聞辟支佛の心と共に著せずと名くしと。舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提の説くが如し、一切智心は、無漏心にも、不繫心の中にも著せざるなり。須菩提よ、色にも、亦た著せず、受想行識にも、亦た著せず、四念處にも、亦た著せず、乃至十八不共法に至るも亦著せず。何を以てか但是の心にのみ著せずと説くや」と。須菩提言く、「是の如し、舍利弗よ、色にも亦た著せず、乃至十八不共法にも亦た著せざるなり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「凡夫の人の心も亦無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり。諸の聲聞辟支佛の心、諸佛の心も、亦無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり」と。須菩提言く、「是の如し、舍利弗よ」と。舍利弗言く、「須菩提よ、若くば色も亦無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり。受想行識も無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり。乃至意觸因縁生の受も無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり」と。須菩提言く、「爾なり」と。舍利弗言く、「四念處も亦た無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり。乃至十八不共法も亦た無漏不繫なり。〔そは〕性空なるが故なり」と。須菩提の言く、「爾な繫なり。〔そは〕性空なるが故なり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提の説く所の、空、無心の故に、是の心に著せずとするが如く、須菩提よ、色は無なるが故に、色に著せず。受想行識、乃至意觸因縁生の受は無なるが故に、受に著せず。四念處は無なるが故に、四念處に著せず、乃至十八不共法も無なるが故に、十八不共法に著せず」と。須菩提言く、「是

の如し、舍利弗よ、色は無なるが故に色中に著せず。乃至十八不共法も無なるが故に、十八不共法中にも著せざるなり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、阿耨多羅三藐三菩提の心、無等等の心、聲聞辟支佛の心と共にならざるを以て、是の心あることを念せず、亦た是の心に著せず、(それ)一切法は所有なきを以ての故なり。是を以ての故に摩訶薩と名く」と。

論

釋して曰く、須菩提、説いて「言く」、「摩訶薩の無等等心は、是の心に於いても亦た著せず」と。著せずとは、是の菩薩は發心より已來、法の定相(乃ち)若くは生じ、若くは滅し、若くは増し、若くは減じ、若くは垢づき、若くは淨きことあるを見ず。是の心は畢竟空にして、是の中に心相あること無く、心相は諸相にあらず、「それは」畢竟清淨なるが故なり。是を以ての故に、聲聞心、辟支佛心、菩薩心、佛心なし。須菩提の貴しと稱する菩薩は、是の如く、心も亦た美にして、菩薩は是の心にも著して、亦た尊貴と爲さず。舍利弗よ、須菩提を難せんと欲して、是の言を作さく、「但一切智心のみ無漏不繫なるにあらず、菩薩は自ら高くすべからず。何となれば凡夫の人の心も、亦た無漏不繫なり。性は常に空なればなり。聲聞、辟支佛、佛の心も無漏不繫なるが如く、是の凡夫の人の心も、實の相性は空なり。空も相性空なれば清淨にして著せず。先に説ける陰雲は、日月を翳ふるも、日月を汗すこと能はざるが如し。又諸の煩惱は實相に與して、常に性空なれば、心相、異なること無し。但凡夫地の中に住すれば、是れ垢、是れ淨なり。聖人の地中に住すれば、無相の智慧を修するが故に、

分別する所なく、但衆生を憐愍するが故に、復た説くことありと雖も、心に著する所なし。獨り凡夫の人の心のみ無漏不繫なるにあらす、五衆乃至十八不共法も亦た是の如し」と。須菩提は然可す。又舍利弗の言はく、「是の心は無なり。心相は空なればなり。色の中に著せず、色相は無なるが故なり。亦た乃至諸佛の法に著せざるも、亦た是の如し」と。須菩提言く、「是の如し」と。是を以ての故に、菩薩は、能く諸法の性の常に空、不可得空、畢竟清淨なることを觀す。是を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提心、無等等心は、聲聞辟支佛心と共に、是の心あることを念せず、亦た是の心に著せず、能く疾く阿耨多羅三藐三菩提に至ると説く。

【一〇】大莊嚴品第十五を釋す。

爾の時に、富樓那彌多羅尼子、佛に白して言さく、「世尊よ、我も亦た摩訶薩たる所以を説かんことを樂ふ」と。佛の言まはく、「便ち説け」と。富樓那彌多羅尼子言さく、「是の菩薩は、大に莊嚴す。是の菩薩は、大乘に發趣す。是の菩薩は、大乘に乗る。是を以ての故に、是の菩薩を摩訶薩と名く」と。

舍利弗、富樓那に語つて言く、「云何が菩薩摩訶薩の大莊嚴と名くるや」。富樓那、舍利弗に語るらく、「菩薩摩訶薩は、分別して、爾所の人の爲の故に、檀那、波羅蜜(多)に住し、檀那(那)波羅蜜(多)を行ぜず。一切衆生の爲の故に、檀那(那)波羅蜜(多)に住し、檀那(那)波羅蜜(多)を行ふ。爾所の人の爲の故に、尸羅波羅蜜(多)に住し、尸羅波羅蜜(多)を行ぜず。屬提波

【三】此の品には種種の異名あり。富樓那尊者、摩訶薩の義を説くが故に、富樓那品といひ、或は又大莊嚴を説くが故に、大莊嚴品といひ、又は富樓那の妙辯を振へるより、辯才品ともいふ。

羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、一切衆生の爲の故に、般若波羅蜜(多)に住し、般若波羅蜜(多)を行ふ。菩薩摩訶薩は大莊嚴は、衆生を齋限して、「我れ當に若干人を度すべく、餘人を度せざらん。我れ若干人をして、阿耨多羅三藐三菩提に至らしめ、餘人を至らざらしめん」と言はず。是の菩薩摩訶薩は、一切衆生の爲の故に、復た是の念を作す、「我れ當に自ら檀(那)波羅蜜(多)を具足し、亦た一切衆生をして、檀(那)波羅蜜(多)を行ぜしむべし。自ら尸羅波羅蜜(多)、厲提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)を具足し、自ら般若波羅蜜(多)を具足し、亦た一切衆生をして、般若波羅蜜(多)を行ぜしむべし」と。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、所有る布施、薩婆若に應ずる心もて、一切衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩、檀(那)波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、聲聞辟支佛地向はず、舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩、檀(那)波羅蜜(多)を行する時の、尸羅波羅蜜(多)大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、是の、諸の施法に於いて、信忍欲(樂)す。是を檀(那)波羅蜜(多)を行する時の、厲提波羅蜜(多)大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、勤修して息ます。是を檀(那)波羅蜜(多)を行する時の、毗梨耶波羅蜜(多)大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、心を攝して聲聞辟支佛の意を起さす。是を檀(那)波羅蜜(多)を行する時の、禪(那)波羅蜜(多)大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、諸法は、幻の如く、施者を得ず、施物を得ず。受者を得ずと觀す。是を檀(那)波羅蜜(多)を行する時の、般若波羅蜜(多)大莊嚴と名く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、諸の波羅蜜(多)の相を取らず、得ずんば、當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の大莊嚴なりと。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、一切衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、諸法を信忍欲(樂)す。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜(多)を行する時の、廣提波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、勤修して息まず、是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜(多)を行する時の、毗梨耶波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、聲聞辟支佛の心を受けず。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜(多)を行する時の、禪(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、一切法は、幻の如しと觀し、亦た是の故あるを念ぜず。〔そは〕無所得なるを用つての故なり。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜(多)を行する時の、般若波羅蜜(多)と名く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)を攝す。是を以ての故に大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、一切衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)と爲す。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)を攝す。是を以ての故に大莊嚴と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、屠提波羅蜜(多)を行する時、聲聞辟支佛の心を受けず、但菩薩若の心のみを受く。  
是を菩薩摩訶薩、屠提波羅蜜(多)を行する時の、尸羅波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、屠提波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、身心精進し、休せず、息せず。是を菩薩摩訶薩、屠提波羅蜜(多)を行する時の、毗梨耶波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、屠提波羅蜜(多)を行する時、心を一處に攝し、苦事ありと雖も、心を散亂せず。是を菩薩摩訶薩、屠提波羅蜜(多)を行する時の、禪(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、屠提波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、諸法は空にして、作者なく、受者なしと観じ、若し呵罵し、割截する者あるも、心は幻の如く夢の如し。是を菩薩摩訶薩、屠提波羅蜜(多)を行する時の、般若波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、身心をして憍怠ならしめず。是を菩薩摩訶薩、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、始終具足し、清淨に戒を持す。是を菩薩摩訶薩、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時の、尸羅波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、忍辱を修行す。是を菩薩摩訶薩、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時の、屠提波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、屠提波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、心を攝し欲を離れて、諸の禪定に入る。是を菩薩摩訶薩、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時の、禪(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、一切諸法の相を取らず、相を取らざるに於いても、亦た著せず。是を菩薩摩訶薩、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時の、般若波羅蜜(多)と名く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)を攝す。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、定心に布施し、心をして亂れしめず。是を菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて持戒し、禪定力の故に、破戒の諸法入ることを得せしめず。是を菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、尸羅波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、慈悲定の故に、諸の惱害を忍ぶ。是を菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、屠提波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、禪に於いて味ぜず、著せず、常に増進を求めて、一禪より一禪に至る。是れを菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、毗梨耶波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、一切法に於て、依止する所なく、亦た禪に隨つて生ぜず。是を菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、般若波羅蜜(多)と名く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)を攝す。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、内外の所有、受惜する所なく、與者受者及び財物を見ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、持戒破戒の二事を見ざるが故に、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時の、尸羅波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、訶者、罵者、打者、殺者を見ず。亦た是の空を用て能く忍辱するを見ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時の、辱提波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、諸法の畢竟空を觀し、大悲心を以ての故に、諸の善法を行す。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時の、毗梨耶波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、薩婆若に應ずる心もて、禪定に入り、諸禪の離相、空相、無相相、無作相を觀す。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時の、禪(那)波羅蜜(多)と名く。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、諸の大莊嚴の菩薩をば、十方の諸佛は歡喜して、大衆中に於いて、稱名讚歎すらく、某の世界の、某の菩薩摩訶薩は、大莊嚴し、衆生を成就して、佛世界を淨むと。

釋して曰く、(三)富樓那は、上の二大弟子の、摩訶薩の義を説くに、而も佛の可して、「善哉」と言ふを聞き、又富樓那は、「佛は大衆の中にて、法師の上なり」と讚歎し、復た摩訶薩の義を説かんと欲して、佛に白して言さく、「我も亦た説かんと樂ふ」と。佛、即ち聽許したまへり。

問うて曰く、(三)須菩提は、般若波羅蜜(多)を説くの主なり、舍利弗は、應に須菩提に問ふべし。今

【二】富樓那 (Purāṇamitrayānīputra) 摩訶薩の三義の中の第一、大莊嚴を説く。  
【三】第四問、舍利弗が、説般若の主たる須菩提に問はずして、富樓那に問へる理由如何。

何を以てか乃ち富樓那に問へるや。答へて曰く、此の二人は、同じく是れ婆羅門にして、俱に母の字を以て名と爲す。此の二人は、佛法の中に俱に大なり。舍利弗は、智慧の中にて大なり。富樓那は説法して、種種に莊嚴し、衆情を牽引して、説法の中にて大なり。是の故に二人は等等なり。故に佛前に於て共に論せり。又富樓那は、先に已に舍利弗と共に論議して、善く能く相答へき。(三) 七車譬喻經の中に説くが如くんば、「彼等は」已に共に親厚を爲し、好く共に理を論せり。須菩提は是の因縁なし。又富樓那は摩訶薩の義を説く。是の故に應に問ふべし。云何が乃ち須菩提に問はん。説く所の摩訶薩の義とは、所謂是れ人の大莊嚴なり。人の遠く行くに、重く資糧あるが如く、又賊を破るに、諸の器仗を備ふるが如し。是の菩薩も亦た是の如く、魔人煩惱の賊を破せんと欲するが故に、六波羅蜜(多)を行じて、以て自ら莊嚴す。是の人は無量劫より來、生死に住して、諸の福德智慧を集め、以て資糧と爲し、三種の乗中、大乘に趣かんが爲の故に、發心して六波羅蜜(多)を行じ、是の大乘に乗せり。舍利弗、富樓那に問ふ、「聲聞辟支佛も亦た道に趣く、何を以てか大莊嚴と名けず、而も但菩薩の大莊嚴のみを説くや」と。富樓那答へて曰く、「聲聞辟支佛は布施等の六事を行すと雖も、量あり、限あり、自ら爲に身を度し、及び餘の衆生の度す可き者を度す。是の故に大莊嚴と名けず。菩薩は度する所を分別せず、齊限せず、若干の衆生の爲の故に、布施乃至智慧もて是の念を作さず、「我は若干の人を度して、三乗を得せしめ、若干の人

【三】 七車譬喻經の所説。

をして、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、若干の人を度すると能はず」と。菩薩は是の莊嚴を作し、一切衆生をして、盡く大乘に入つて作佛せしむ。菩薩は大莊嚴を行じて、自ら檀(那)波羅蜜(多)を行じ、亦た一切衆生をして檀(那)波羅蜜(多)を行せしむ。乃至般若波羅蜜(多)も亦た是の如し。

問うて曰く、(四)云何が六莊嚴と名くるや。答へて曰く、衆生を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三

菩提の爲の故に、諸の善福功德を行ずる者なり。略して是を説かば、六波羅蜜(多)なり。富樓那の次第説の如し。若し菩薩、一切智慧の爲の故に、檀(那)波羅蜜(多)を行せば、是の福德は一切衆生と共にあり。其なりとは、此の布施の福德、我と及び衆生と共に等なるなり。我は此を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。廻向とは、此の福德に於いて、人王、天王、世間の禪定の樂を求めず。衆生、乃至涅槃の爲にも、亦た此の果報を持たんことを求めず、盡く衆生を度せんが爲の故に、佛法を求むるなり。是の如き等の相、是を檀波羅蜜(多)の大莊嚴と名く。是の菩薩は、布施を行する時、若し諸の辟支佛、阿羅漢の大神通を現じて、漏盡くることを得、涅槃に入るを見るも、中に於いて貪らざる。著せず、一心に佛道を修す。是を檀(那)波羅蜜(多)もて、尸羅波羅蜜(多)を生ずと名く。布施の時人あり、惡口し罵詈し刀杖もて毀害し乞に應せざる所の者にして、而も強ひて乞ふも嗔らず悔いずして諸法の相中に入る。所謂畢竟空なり。是を檀(那)波羅蜜(多)もて屬提波羅蜜(多)を生ずと名く。布施を行する時、財物を和合し彼を守護し施して、身心に

【四】第五問、六莊嚴とは何ぞや。

懈おこたらず息やすまざる、是これを檀だん〔那〕波羅蜜〔多〕もて、毗梨耶波羅蜜〔多〕を生しやうずと名なく。布施ふせの時とき、一心しんに佛ぼつを念ねんじ、諸佛しよぶつの法ほふを念ねんじ、聲聞しやうもん辟支佛びやくしふつの心こころをして入いらしめず。是この布施ふせに因よりて即すなはち禪定ぜんぢやうに入る。是これを檀だん〔那〕波羅蜜〔多〕もて、禪波羅蜜〔多〕を生しやうずと名なく。布施ふせの時とき、菩薩ぼさつは是この念ねんを作なさく、「施者せしや、受者じゆしや、財物さいぶつの因縁いんねん、和合わがふして生しやうずるが故ゆゑに、自性じしやうなく、自性じしやうなきが故ゆゑに、空くうにして幻まぼかしの如ごとく、夢ゆめの如ごとし。衆生しゆじやう空くうなるが故ゆゑに、受者じゆしやなく、施者せしやなく、法空ほふくうの故ゆゑに、財物さいぶつなし」と。是これを檀だん〔那〕波羅蜜〔多〕もて、般若波羅蜜〔多〕を生しやうずと名なく、若もし菩薩ぼさつ、一切智いっさいちの爲ための故ゆゑに、諸しよの波羅蜜〔多〕の相さうを取とらず、而しかも能もろく諸しよの波羅蜜〔多〕を行ぎやうせば、是これは菩薩ぼさつの大莊嚴だいじやうげんと名なく。此この中なかの一い波羅蜜〔多〕は、遍あまねく諸しよの波羅蜜〔多〕を生しやうず。此この經きやうの中なかに自みづから其その義ぎを分別ぶんべつするに、古こ今こんの語異ごことなり、義ぎ不ふ了れうなるが故ゆゑに、助たすけて分別ぶんべつして説とき、論議ろんぎ門もんを開ひらく。餘よの五波羅蜜〔多〕も、亦また應まさに是かくの如ごとく、義ぎに隨したがつて説とくべし。

問とうて曰いはく、(三)何なにを以もつてか但ただ檀だん〔那〕波羅蜜〔多〕の中なかにのみ六波羅蜜〔多〕を生しやうずと説とき、餘よの波羅蜜はらみつも亦また答とがなし。六波羅蜜〔多〕は、一い時じにあらす、一い念ねんの法ほふにあらす、無量劫むりやうこつの中なかに、六種しゆくの功德とくどくを集あつめ、和合わがふするを名なけて六波羅蜜〔多〕と爲なす。先まづ小せうを生しやうじ、後のちに中ちゆうと大だいとを生しやうずるに、何なんの答とがか有あら

【三】第六問、但だ布施波羅蜜多の中にのみ、六波羅蜜多を生ずと説き、餘の波羅蜜多の中には、但五を生ずと説く理由如何。

ん。一切の諸法は、皆初は小にして、後は大なり。是を以ての故に、諸の餘の波羅蜜〔多〕も各各應に六を生ずべし。

復次に、一切の諸佛は、説法する時檀〔那〕波羅蜜〔多〕を初門と爲したまふ。經中に説くが如くんば、佛は常に初に衆生の爲に布施を説き、持戒を説き、生天を説き、五欲の味を説きたまふ。先づ世間の苦惱、道德の利益を説き、後に爲に四諦を説きたまふ。是を以ての故に初に檀〔那〕を説くなり。

問うて曰く、佛は何を以ての故に、檀〔那〕を説いて、初門と爲したまひしや。答へて曰く、衆生を攝する法は、檀〔那〕に過ぎたるは無し。大小貴賤、乃至畜生は、檀〔那〕皆之を攝す。乃ち怨家に至るまで、施を得れば、則ち中人と爲り、中人にして施を得れば、則ち親善と成る。諸佛の三十二相、八十隨形好、諸の功德の具足、所願意の如くなるは、皆布施に依つて得らる。寶掌菩薩等の如きは、七寶を手中より出だして、衆生に給施し、又能く衆生をして歡喜し、柔輒にして涅槃を得るに任ふ可からしむ。是の如き等の義の故に、檀〔那〕波羅蜜〔多〕を初と爲す。

問うて曰く、富樓那は、何を以ての故に、一波羅蜜〔多〕の中に、諸の波羅蜜〔多〕を生ずるをば、大莊嚴と爲すと説きしや。答へて曰く、是の波羅蜜〔多〕は、各各別に行すれば力勢少し、譬へば、兵

【六】 第七問、佛が布施を説いて、初門と爲し給ひし理由如何。

【七】 第八問、富樓那が、一波羅蜜多の中に、諸の波羅蜜多を生ずるをば、大莊嚴となせる理由如何。

八未だ集まらざれば、則ち戦力なく、若し大軍都て集まりて莊嚴し、器仗を執持すれば、則ち能く敵を破るが如し。菩薩も亦た是の如く、六波羅蜜(多)を一時に莊嚴し、能く諸の煩惱、魔人の賊を破し、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得。是を以ての故に、一波羅蜜(多)の中に、諸の波羅蜜(多)を具すと説く、十方の諸佛の名を稱へ、讚歎し、衆生を成就し、佛世界を淨むることは、先に「既に」説けるが如し。

經

慧命、舍利弗、富樓那彌多羅尼子に問ふ、「云何が菩薩摩訶薩は、大乘に發趣するや」と。富樓那、舍利弗に語る、「菩薩摩訶薩は、六波羅蜜(多)を行する時、諸の欲を離れ、諸の惡不善の法、有覺有觀にして、離生喜樂あり、初禪に入り、乃至第四禪の中に入る。慈、廣大無二無量なるを以て、無怨無恨、無惱の心行、一方、二三四方、四維上下に通滿し、一切世間に遍す。悲、喜捨の心も亦た是の如し。是の菩薩は、禪に入る時、起つ時、諸禪無量心、及び支なば、一切衆生と共に薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩の禪(那)波羅蜜に於て、大乘に發趣すと名く。是の菩薩摩訶薩は、禪無量心に住して、是の念を作す、「我れ當に一切種智を得て、一切衆生の煩惱を斷するが爲の故に、當に法を説くべし」と。是を菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、檀(那)波羅蜜(多)と名く。若し菩薩摩訶薩は、婆若に應ずる心もて、初禪を修し、初禪に住すれば、二三四禪も亦た是の如し。餘心、所謂聲聞辟支佛心を受けず。是を菩薩摩訶薩、禪(那)波羅蜜(多)を行する時の、尸羅波羅蜜(多)と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、諸禪に入れば、是の念を作す、「我れ一切衆生の煩惱を斷ぜんが爲の故に、當に法を説き、是の諸心に忍を欲樂すべし」と。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜(多)を行する時の、廣提

波羅蜜(多)と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、諸禪に入れば、諸善根、皆薩婆若に廻向し、勤修して息ます。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜(多)を行ずる時の、毗梨耶波羅蜜(多)と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心にて、四禪及び支に入り、無常相、苦相、無我相、空相、無相、無相、無作相を觀じ、一切衆生と共に薩婆若に同向す。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜(多)を行ずる時の、般若波羅蜜(多)と名く。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の、大乘に發趣すと名く。

復次に、菩薩摩訶薩は、慈心を行じて、是の念を作す、「我れ當に一切衆生を安樂にし、悲心に入るべし。我れ當に一切衆生を救濟して、喜心に入るべし。我れ當に一切衆生を度して、捨心に入るべし。我れ當に一切衆生をして、諸漏の盡くることを得せしむべし」と。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の、檀(那)波羅蜜(多)と名く。

復次に、菩薩摩訶薩は、是の請禱、無量心もて、聲聞辟支佛地に向はず。但薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の、尸羅波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、四無量心を行じて、聲聞辟支佛地を貪らず、但忍んで薩婆若を樂欲す。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の、廣提波羅蜜(多)と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心にて、四無量心を行じ、但清淨の行を行す。是を菩薩摩訶薩、四無量心を行ずる時の、毗梨耶波羅蜜(多)と名く。

復次に、菩薩摩訶薩は禪に入り、無量心に入る時、亦た禪に隨つて、無量心生ぜず。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の、方便般若波羅蜜(多)と名く。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩の、大乘に發趣すと名く。復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、大乘に發趣して、一切種四念處を修し、乃至一切種八聖道分を修し、一切種三解脱門、乃至十八不共法を修す。是を菩薩摩訶薩の、大乘に發趣すと名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩、内空の中の智慧、無所得を用つての故に、乃至無法有法空の中の智慧、無所得を用つて

の故に、是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、一切法の中に、亂ならず、定ならざるの智慧あり。是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、大乘に發趣するに、常にあらず、無常にあらずるの智慧、樂に非ず、苦に非ず、實に非ず、空に非ず、我に非ず、無我に非ざるの智慧あり。是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。無所得を用つての故なり。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩の智は、過去世に行かす、未來世に行かす、現在世に行ぜず、亦た三世を知らざるにも非ず。是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。無所得を用つての故なり。

復次に、菩薩摩訶薩は大乘智に發趣し欲界に行かす、色界に行かす、無色界に行かす、亦た欲界、色界、無色界を知らざるに非ず。無所得を用つての故なり。是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。

復次に、菩薩摩訶薩は、大乘智に發趣するに、世間法を行ぜず、出世間法を行ぜず、有爲法を行ぜず、無爲法を行ぜず、有漏法を行ぜず、無漏法を行ぜず。亦た世間法、出世間法、有爲無爲、有漏無漏法を知らざるに非ず。無所得を用つての故なり。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩大乘に發趣すと名く。

【一六】第九問、六度の中、若し逆に説かば、應に智度の次に禪を説くべく、若し順に説かば、應に布施波羅蜜多を説くべきなり。然るを今乃ち禪を説くは何故なるか。

論

問うて曰く、(一六) 六波羅蜜(多)の中、若し逆に説かば、則ち應に般若波羅蜜(多)を説き、次に禪

を説くべし。若し順には應に先づ檀(那)波羅蜜(多)を説くべし。今何を以てか乃ち禪波羅蜜(多)を説

いて首と爲すや。答へて曰く、大莊嚴を發すれば、衆生の能く破壞する者あることなし。若し菩薩に

禪定心なく、未だ欲を離れざれば、餘の波羅蜜(多)を行すと雖も、則ち壞し易し。禪波羅蜜(多)を行

すれば、能く慈無量に入り、是の時能く壞する無し。説くが如くんば、慈三昧を行すれば、刀も傷く  
ること能はず、水火も害せず、亦た神通力ありて、種種に變化し、能く大莊嚴を發す。佛の説きたま  
へるが如し。「鳥に兩翼なければ、飛翔すること能はず。菩薩に神通力なければ、大莊嚴を發すること  
と能はず」と。禪〔那〕波羅蜜〔多〕の中に入れば、能く慈無量を生じ、五神通の故に、物能く傷くると  
無し。是を以ての故に、今此の禪〔那〕波羅蜜〔多〕を説いて首と爲す。

問うて曰く、(元) 四禪の中に種種の功德あり、皆六波羅蜜〔多〕を行すべき  
なり。今何を以てか但四無量心の中に六波羅蜜〔多〕を行するとを説くや。

答へて曰く、四無量心は、無生相を取りて、衆生を縁す。菩薩は常に衆生  
の爲の故に道を行す。是の四無量等の中には、慈悲心あれば、能く衆生を  
利益す餘の八背捨、九次第定等には、是の如き利益なし。

問うて曰く、(三) 菩薩は五神通に住して、能く廣く衆生を利益す。何を以  
ての故に説かざるや。答へて曰く、(三) 大悲は是れ菩薩の根本なり。又五神

通は先に已に説き、後にも當に説くべし。四無量心は未だ説かざるが故に今説くなり。若し菩薩の但  
四無量心を行するは、大乘に發趣すと名けず、六波羅蜜〔多〕の和合の故に、名けて大乘に發趣すと爲  
す。四無量心は、六波羅蜜〔多〕を生ず。富樓那は此の中に自ら因縁を説けり。

【元】 第一〇問、四禪の中には  
種種の功德あり、皆六度を行  
すべきなり。然るを今但だ四  
無量心中に六度を行すること  
を説くは何故なるか。  
【三〇】 第一問、菩薩は五神通  
に住して、廣く衆生を度す。  
今それ之を説かざるは何故な  
るか。  
【三二】 摩訶薩の三義の中の第  
二、大乘に發趣すの意義。

問うて曰く、三云何が一切種に、四念處、乃至十八不共法を修するや。答へて曰く、二種あり。信行性と法行性となり。信行性は無常、苦を觀じ、或は但無常を觀じ、或は但苦を觀ず。法行性の人は、空と無我とを觀じ、或は但空を觀じ、或は但無我を觀ず。菩薩は衆生を度するが故に、一切の門、皆修し皆學す。

復次に、大乘を發する者は、十八空を以て、十八種の法を破し、亦た是の十八種の空の智慧を捨つ。復次に、若し菩薩は、諸法の常定を觀するも、亦定相を取らず。是を定まらず、亂れざるの智慧と名く。

復次に、常樂の顛倒に墮せんとを畏るるが故に、諸法の常樂等を觀せず。斷滅に墮せんことを畏るるが故に、無常等を觀せず。復次に、若し菩薩、三世、三界中の智慧もて、觀せず、行せず、相を取らずんば、皆虚誑なりと知りて、無明に墮せず。

復次に、世間、出世間の中は、亦た智に非ず、不智に非ず。智に非ずとは、空なるが故なり。定相なきが故なり。畢竟清淨なるが故なり。不智に非ずとは、無常、苦、空等を觀じ、般若波羅蜜〔多〕の中に入るが故なり、智を行せざるに非ず。行せずとは、見を遮し、法愛を斷じて、依止を離るるが故なり。智に非ざる無しとは、是の中に愚癡なく、凡夫に異なるが故なり。又行者は、戒を持し、禪

【三】 第一二問、一切種に、四念處、乃至十八不共法を修する理由如何。

定ちやうじゆを修しゆし、諸觀しよくわんを習なふ。云何いかにんが智ちに非あずと言いはんや。佛ほとけ、「利衆生經りしゆじやきやう」の中なかに説とき給たまへるが如ごとし。  
『行者ぎやうじやは諸法しよほふを捨すてて、亦またた慧みに依え止しせず、亦またた分別ぶんべつする所ところなし、是これを決定けつぢやうぢ智ちと爲なす。』

# 卷の第四十六

## 乘乘品第十六を釋す。

經

爾の時、慧命、舍利弗、富樓那に問ふ、「云何が菩薩摩訶薩は大乗に乗すと名くるや」と。

富樓那、舍利弗に答へて曰く、

「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、檀(那)波羅蜜(多)に乗するも、亦た檀(那)波羅蜜(多)を得ず、亦た菩薩を得ず、亦た受者を得ず、無所得を用ての故なり。是を菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)に乗すと名く。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)に乗じ、般若波羅蜜(多)に乗するも、亦た般若波羅蜜(多)を得ず、亦た菩薩を得ず、無所得を用ての故なり。是を名けて、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に乗すと爲す。是の如く舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩は、大乘に乗すと爲す。」

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は摩訶衍の一心、薩婆若に應じ四念處を修す。〔そは〕法壞するが故なり。乃至、一心は薩婆若に應じ、十八不共法の法を修す。法壞するが故に是れ亦た不可得なり。是の如く、舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩は、大乘に乗すと名く。

【一】此の品の名を或は乘大乘品ともいふ。蓋し此の品に於いて、摩訶薩の三義の中の第三、大乘に乗すの意義を闡明にすればなり。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、是の念を作す、「菩薩は但名字のみあり、衆生は不可得なるが故なり」と。是を菩薩摩訶薩は、大乘に乗すと名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は是の念を作す、「色は但名字のみ有り、色は不可得なるが故なり。受想行識も但名字のみ有り、識は不可得なるが故なり。眼は但名字のみ有り、眼は不可得なるが故なり。乃至意も亦た是の如し。四念處は但名字のみ有り、四念處は不可得なるが故なり。乃至、八聖道分も、但名字のみ有り、八聖道分は不可得なるが故なり。内空は但名字のみ有り、内空は不可得なるが故なり。乃至無法有法空も、但名字のみ有り、無法有法空は不可得なるが故なり。乃至十八不共法は、但名字のみ有り、十八不共法は不可得なるが故なり。諸法の如は、但名字のみ有り、如は不可得なるが故なり。法相、法性、法住、法位、實際は但名字のみ有り。實際は不可得なるが故なり。阿耨多羅三藐三菩提及び佛は但名字のみ有り、佛は不可得なるが故なり。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩は大乘に乗すと名く。

復次に、舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩は、初發意より已來、菩薩の神通を具足し、衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り、諸佛を恭敬し供養し、尊重し讚歎し上り。諸佛より法教を聽受す。所謂菩薩の大乘なり。是の菩薩は此の大乘に乗じ、一佛國より一佛國に至り、佛世界を淨め衆生を成就するも、初より佛國想なく、亦衆生想も無し。此の人は不二法の中に住して衆生の爲に身を受け、其所應に隨つて、自ら其の形を變じて之を教化し。乃至一切智まで、終に菩薩乘を離れず。是の菩薩は、一切種智を得已りて、法輪を轉ず。聲聞、辟支佛及び天龍、鬼神、阿修羅、世間、人民の轉ずること能はざる所なり。爾の時、十方如恆河沙等の諸佛は、皆歡喜し稱名し、讚歎して、是の言を作す。「某の方、某の國の某の菩薩摩訶薩は、大乘に乗じて一切種智を得、法輪を轉ず」と。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩は、大乘に乗すと名く」と。

**論**  
釋して曰く、富樓那は三事を以て摩訶薩を明す。上に已に二事を説けり。今第三事の大乗に乗することを問ひ、富樓那答ふ。有人の言く、「菩薩は直に内外の物を布施すれば、吾我の相を破する

能はざるも、是を大莊嚴と名く。若し能く吾我の相を破して、衆生空に入れば、未だ法空に入らざるも、是を大莊嚴を發すと名く。衆生空に因りて法空の中に入り、檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行じて、三事、〔即ち〕施者、受者、財物を見ず。若し能く是の如くなれば、是を大乘に乗すと名く。餘の波羅蜜〔多〕も亦是の如し。是の菩薩は、雜心ならざるを以て、諸の煩惱及び二乗の意を離る。〔そは〕薩婆若の爲の故なり。四念處を修行し、修相も亦た不可得にして、畢竟清淨なるが故なり。是を大乘に乗すと名く。乃至十八不共法も亦た是の如し。

復次に、若し菩薩は、一切法は假名字なり、名字の和合の中に於て復た名字あり、一切の世間、若くは出世間は、皆是れ假名なりと知れば、是を大乘に乗すと名く。

復次に、菩薩は大莊嚴を發し、菩薩の神通を具足す。菩薩の神通を具足するが故に、衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り、經る所の諸國に、七寶の蓮華を雨らして、諸佛を供養し上り、三惡道の衆生を抜き、身を變ずること無數に、各各諸佛の前に至り、大乘法を聽受し、化して諸佛の前より、大乘の相に趣き、此の大乘に乗じて、一佛國より一佛國に至り、衆生を成就し、佛世界を淨め、衆生相を生せず、佛國相を取らず、不二入の地中に住し、諸の衆生の度すべき所の者に隨つて之を化度し、衆生の爲の故に身を受け、常に大乘に乗じ、初より休息すること無し。是の菩薩は大乗に乗じ、佛と成ることを得て、法輪を轉ず。諸の聲聞、辟支佛の轉ずること能はざる所なり。何に況ん

や、餘の小凡夫をや。十方如恆河沙等の世界の諸佛は、是の菩薩を讚歎して、「某の方、某の國、某甲菩薩は、大乘に乗じて成佛し、法輪を輪じたまふ」と。是の如きの相を名けて、大乘に乗ずと爲す。復次に、大乘を畢竟清淨の六波羅蜜(多)と名く。菩薩摩訶薩は大乘に乗ずる時、五神通を以て自ら莊嚴す。菩薩は是の乗の中に住し、一時に身を變ずること、無數にして、十方世界に到り、諸佛を供養し上り、衆生を度脱す。是の菩薩は、常に諸佛を離れず、乃至佛道を得るも、常に此の大乘に乗す。

三 無縛無脫品第十七を釋す。

經

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、何等か是れ大莊嚴にして、何等の菩薩が能く大莊嚴するや」と。佛、須菩提に語りたまはく、「菩薩摩

訶薩の摩訶衍の大莊嚴は、所謂檀(那)波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)の莊嚴なり。四念處の莊嚴、乃至八聖道分、內空莊

嚴なり。乃至無法有法空、十力なり。乃至十八不共法、及び一切種智の莊嚴なり。身を變ずること佛の莊嚴の如く、光明

遍れく三千大千世界を照らし、亦た東方如恆河沙等の世界を照らす。南西北方、四維、上下も亦復た是の如し。三千大千世

界六種に震動し、亦た東方如恆河沙等の諸の世界を動す。南西北方、四維上下も亦復た是の如し。是の菩薩摩訶薩は、檀

(那)波羅蜜(多)、摩訶衍の大莊嚴に住し、是の三千大千世界を變じて瑠璃と爲し、化して轉輪聖王と作り、衆生の欲する所

【二】此の品名は或は莊嚴品ともいふ。先に富樓那、大莊嚴等の摩訶薩の三義を説けども、須菩提これを決定せんことを求めしため、佛自ら大莊嚴の義を説き給ふなり。

に隨つて、食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、衣服、臥具、華香、環珞、搗香、澤香、房舍、燈燭、醫藥(等)の種の須ふる所、盡く之に給與し、與へ已りて爲に法を説き、所謂六波羅蜜(多)の法に應ず。衆生にして、是の法を聞く者は、終に六波羅蜜(多)を離れず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。是の如く、須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍大莊嚴と名く。須菩提よ、譬へば、工幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道中に於て、大衆を化作し、前に於て食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、乃至種種の須つ所、盡く之に給與するが如し。須菩提よ、意に於て云何。是の幻師には實に衆生ありて、給與するものあるや否や。」須菩提言さく、「不なり、世尊よ。」須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦た是の如く、化して轉輪聖王と作り、種種具足し、食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、乃至種種の須ふる所、盡く之に給與し、施す所ありと雖も、實に與ふる所なし。何となれば、須菩提よ、諸法の相は幻の如くなるを以てなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)に住し、現に轉輪聖王の家に生じ、十善道を以て衆生を教化し、又四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を以て衆生を教化す。是の法を聞く者は阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是の法を離れず。譬へば、幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道中に於て、大衆を化作し、十善道を以て、教化して行ぜしめ、又四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を以て、教化して行ぜしむるが如し。須菩提よ、汝が意に於て云何。是の幻師は、實に衆生ありて、教化し、十善道、乃至十八不共法を行ぜしむるや否や。」須菩提言さく、「不なり、世尊よ。」須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦た是の如く、十善道を以て衆生を教化して行ぜしめ、乃至十八不共法を行ぜしむるも、實に衆生の、十善道、乃至十八不共法を行すること無し。何となれば、諸法の相は、幻の如くなるを以てなり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は廣提波羅蜜(多)に住し、衆生を教化して忍辱ならしむ。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、

須菩提、是は幻師の弟子の、四衢道の中に於て、化して大衆と作り、  
大莊嚴あり、若し一切衆生、來りて罵詈訕、刀杖をも傷害するも、菩薩摩訶薩は、此の中に於て、一念の怨をも起さず。  
亦た一切衆生を教へて、此の忍辱を行はしむ。譬へば幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道の中に於て、化して大衆と作り、忍辱を行はしむるが如し。餘は上に説くが如し。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、毗梨耶波羅蜜(多)を行ぜしむ。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、毗梨耶波羅蜜(多)を行ぜしむるや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、身心精進にして、衆生を教化す。譬へば幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道の中に於て、化して大衆と作り、教へて身心精進を行ぜしむるが如し。餘は上に説くが如し。是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、禪波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、禪波羅蜜(多)を行ぜしむ。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、禪波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、禪波羅蜜(多)を行ぜしむるや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、諸法の等の中に住して、法の若くは亂、若くは定を見ず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、禪波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、禪波羅蜜(多)を行ぜしめ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に禪波羅蜜(多)を離れず。譬へば、幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道の中に於て、化して大衆と作り、教へて禪波羅蜜(多)を行ぜしむるが如し。餘は上に説くが如し。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、般若波羅蜜(多)を行ぜしむ。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に住し、一切衆生を以て、般若波羅蜜(多)を行ぜしむるや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、法の此岸、彼岸を得ることある無し。是の如く、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の中に住し、

一切衆生を教へて般若波羅蜜(多)を行ぜしむ。譬へば幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して大衆と作り、教へて般若波羅蜜(多)を行ぜしむるが如し。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、十方如恆河沙等の世界の中に、其應する所に隨つて、自ら其の身を變じ、檀波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)に住し、亦衆生を教へて、檀波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)を行ぜしむ。是の衆生は、是の法を行ひ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是の法を離れず。須菩提よ、譬へば、幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して衆生と作り、教へて六波羅蜜(多)を行ぜしむるが如し。餘は上に説くが如し。是の如く須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、薩婆若に應する心にて、是の念を生ぜず、「我れ若干人を教へて、檀(波羅蜜)多)に住せしめ、若干人を教へて、檀波羅蜜(多)に住せしめ、乃至、般若波羅蜜(多)も、亦た是の如し」と。是の念を生ぜず、「我れ若干人を教へて四念處に住せしめ、若干人を教へて、四念處に住せしめ」と。乃至十八不共法も亦た是の如し。亦た是の念を生ぜず、「我れ若干人を教へて、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、一切種智を得せしめ、亦た若干人を教へて須陀洹果、乃至一切種智を得せしめず。我れ當に無量無邊阿僧祇の衆生をして、檀那波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)に住せしめ、乃至十八不共法に立たしめ、無量無邊阿僧祇の衆生をして、須陀洹乃至一切種智を得せしむべし」と。譬へば幻師、若くは幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して大衆と作り、教へて六波羅蜜(多)に住し、乃至一切種智を得せしむるが如し。餘は上に説くが如し。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く」と。

釋して曰く、上に富樓那は、大莊嚴、及び大誓莊嚴の相を發することを説けり。今須菩提は是

の念を作す。「富樓那は未だ一切智を得ず。大莊嚴を説くと雖も、或は當に錯あるべし」と。是の故に佛に問ひ上りて定を取れり。佛、須菩提の爲に檀波羅蜜「多」の大莊嚴、乃至一切智を説き給へり。是の諸の善法の果報の故に、菩薩の大神通力を得、出家好道の衆生の爲の故に、化して佛身と作り、大光明を放ちて、十方世界を照らし、大地を震動し、衆生をして、發心して善法を行せしめ、其の應する所に隨つて、爲に法を説いて、三乗を得せしめ、在家好樂の衆生の爲に、轉輪聖王と作り、三千世界を變じて、悉く瑠璃と爲し、障礙せざるが爲の故に、七寶の車に乗り、身より光明を放ちて、諸の寶物を雨らし、衆生の須ふる所に隨つて、皆充足せしめ、然る後、爲に菩薩の法を説く。菩薩は大乘の中に住して、二施を以て衆生を利益す。所謂、財施と法施なり。衆生は聞き已つて、六波羅蜜「多」、乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是の法を離れず。菩薩は是の變化の中に住すと雖も、亦た諸法の中に於いて、著相を生ぜず。亦た自ら高からず」と。須菩提は是の念を作す、「菩薩は能く是の如き大事を作す。又諸漏未だ盡きざるが故に、云何が諸法に於いて著せず、亦た高心を生ぜざるを得んや」と。是の中に、佛自ら譬喩を説きたまはく、「若し幻師の四衢道の中に於て、種種の物を化作し、人の須ふる所に隨つて、悉く能く之を與へんに、須菩提よ、意に於いて云何。是の幻師は實に與ふる所ありや不や、受くる者あり、用ふる者ありや不や」。須菩提言とく、「是は但虚誑にして、實に有る所なし。」佛の言はく、「菩薩も亦た是の如く、佛身、轉輪聖王と

作り、財と法とを以て、衆生に施すと雖も、亦幻師の實に與ふる所なきが如し。何となれば諸法の相は、畢竟空にして、幻の如くなればなり」と。餘の五波羅蜜「多」も亦た是の如く、義に隨つて分別す。復次に、檀「那」波羅蜜「多」、尸羅波羅蜜「多」の因縁の故に、人中の富貴轉輪聖王と作り、餘の波羅蜜「多」は、或は梵王と作り、或は法身の菩薩と作る。

問うて曰く、三波羅蜜「多」の外、更に何の法ありてか莊嚴すべきや。答へて曰く、諸の功德は皆六波羅蜜「多」の中に攝す。有人言く、「別に智波羅蜜「多」及び方便等あり」と。十方如恆河沙等の世界の中に於いて、度すべき所に隨つて、種種の因縁を作し、法を説いて、衆生をして六波羅蜜「多」に住せしむ。

復次に、決定誓願を名けて、大莊嚴と爲す。所謂る、菩薩は是の念を作さず、「我は若干人を度して檀波羅蜜「多」に住せしめ、餘人を度すること能はず」と。乃至十八不共法も亦た是の如し。亦た是の念を作さず、「我は若干人をして、須陀洹果を得せしめ、若干人をして、須陀洹果を得せしむること能はず」と。乃至佛道も亦た是の如し。「我れ當に悉く無量阿僧祇の衆生をして、諸の功德の中に住し、檀「那」波羅蜜「多」、乃至一切種智自ら立たしむべし」と。幻師の如しとは、先に説くが如し。是を大莊嚴を發すと名く。

【三】第一問、六度の外に尙ほ莊嚴すべき法ありや如何。

【四】決定誓願を大莊嚴と爲す。

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「我れ佛に聞き上る所の義の如くば、菩薩摩訶薩は大莊嚴なきを大莊嚴と爲す。(そは) 諸法の白相は空なるが故なり。所謂色と色相は空なり。受想行識と識相は空なり。眼と眼相は空なり、乃至意識と意相は空なり。色と色相は空なり、乃至法と法相は空なり。眼觸と眼識相は空なり、乃至意觸と意識相は空なり。受相は空なり。乃至意觸の因縁もて生ずる受と、受相は空なり。乃至意觸の因縁もて生ずる受と、受相は空なり。世尊よ、檀(那)波羅蜜(多)と檀(那)波羅蜜(多)の相は空なり。乃至般若波羅蜜(多)と般若波羅蜜(多)の相は空なり。内空と内空の相は空なり。乃至無法有法空と無法有法空の相は空なり。四念處と四念處の相は空なり。乃至十八不共法の相は空なり、菩薩と菩薩の相は空なり。世尊よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、大莊嚴なきを大莊嚴と爲すことをしと。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝が言ふ所の如し。須菩提よ、薩婆若は作法に非ず、衆生も亦た作法に非ず。菩薩は、是の衆生の爲に、大莊嚴す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、薩婆若は作法に非ず、是の衆生も亦た作法に非ずして、菩薩は是の衆生の爲に大莊嚴するや」と。佛、須菩提に語りたまはく、「若しは不可得の故に、薩婆若は作に非ず、起法に非ず。是の衆生も亦た作に非ず、起法に非ず。何となれば、須菩提よ、色は作に非ず、不作に非ず。受想行識も作に非ず、不作に非ず。眼は作に非ず、不作に非ず。乃至意は作に非ず、不作に非ず。色乃至法、眼觸乃至意識、眼觸乃至意識、眼觸因縁生の受乃至意識因縁生の受は作に非ず、不作に非ず。須菩提よ、我は作に非ず、不作に非ず。乃至知者、見者は、作に非ず、不作に非ず。何となれば、是の諸法は、畢竟不可得なるが故なり。須菩提よ、夢は作に非ず、不作に非ず。何となれば(そは)畢竟不可得なればなり。幻、響、影、焰は作に非ず、不作に非ず。何となれば(そは)畢竟不可得なればなり。須菩提よ、内空は作に非ず、不作に非ず。(そは)畢竟不可得なればなり。乃至無法有法空は、作に非ず、不作に非ず。(そは)畢竟不可得なればなり。須菩提よ、四念處は作に非ず、

不作に非ず、そは畢竟不可得なればなり。乃至十八不共法は、作に非ず、不作に非ず。何となれば是の法は皆畢竟不可得なればなり。須菩提よ、諸法の如、法相、法性、法住、法位、實際は、作に非ず、不作に非ず。〔そは畢竟不可得なればなり。〕  
 須菩提よ、菩薩は作に非ず、不作に非ず。〔そは畢竟不可得なればなり。〕薩婆若及び一切種智は、作に非ず、不作に非ず。〔そは畢竟不可得なればなり。〕是の因縁を以ての故に、須菩提よ、薩婆若は作に非ず、起法に非ず。是の衆生も亦た作に非ず、起法に非ず。菩薩は、是の衆生の爲に、大莊嚴するなり。爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「我れ佛の所説の義を觀するが如くば、世尊よ、色は縛なく、脱なし。受想行識も縛なく脱なし」と。爾の時、富樓那彌多羅尼子、須菩提に語るらく、「色は是れ縛なく、脱なく、受想行識も是れ縛なく、脱なし」と。須菩提言く、「是の如し、是の如し。色は是れ縛なく、脱なし。受想行識も是れ縛なく、脱なし」と。富樓那彌多羅尼子、須菩提に問ふ、「何等の色が縛なく、脱なきや。何等の受想行識が縛なく、脱なきや」と。須菩提言く、「夢の如き色は、縛なく、脱なし。夢の如き受想行識は、縛なく、脱なし。響の如く、影の如く、幻の如く、翳の如く、化の如き色受想行識は縛なく、脱なし。富樓那彌多羅尼子よ、過去の色は縛なく、脱なし。過去の受想行識は、縛なく、脱なし。未來の色は縛なく、脱なし。未來の受想行識は縛なく、脱なし。現在の色は、縛なく、脱なし。現在の受想行識は、縛なく、脱なし。何を以ての故に縛なく、脱なきや。是の色は、所有なきが故に、縛なく、脱なきなり。受想行識は、所有なきが故に、縛なく、脱なきなり。離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛なく、脱なきなり。富樓那よ、善の色受想行識も、縛なく脱なし。不善の色受想行識も、縛なく脱なし。無記の色も、縛なく、脱なし。無記の受想行識も、縛なく脱なし。世間、出世間、有漏、無漏の色も、縛なく脱なし。受想行識も亦た縛なく、脱なし。何となれば、所有なきが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛なく脱なきなり。富樓那よ、一切の法も、亦た縛なく脱なし。〔そは、所有なきが故なり。離の故なり、寂滅の故なり、不生の故なり。富樓那よ、檀(那)波羅蜜(多)は、

縛なく、脱無し。尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)は、縛なく、脱無し。所有なきが故に、離の故に、寂滅の故に不生の故に、縛なく脱なきなり。富樓那よ、内空も亦た、縛なく脱なし。乃至無法有空も亦た、縛なく脱無し。四念處は、縛なく脱無し。乃至十八不共法も、縛なく、脱無し。所有なきが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛なく脱なきなり。阿耨多羅三藐三菩提は、縛なく、脱なし。一切智、一切種智も、縛なく脱なし。菩薩も、縛なく、脱無し。佛も、亦縛なく、脱無し。所有なきが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛なく、脱なきなり。富樓那よ、諸法の如、法相、法性、法住、法位、實際、無爲法は、縛なく脱無し。所有なきが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛なく脱なきなり。富樓那よ、是を菩薩摩訶薩の無縛無脱と名け、檀(那)波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、四念處、乃至一切種智は、縛なく、脱無し。是の菩薩摩訶薩は、無縛無脱の檀(那)波羅蜜(多)中に住し。乃至無縛無脱の般若波羅蜜(多)に住し、無縛無脱の四念處に住し、乃至無縛無脱の一切種智に住し、無縛無脱にして、衆生を成就し、無縛無脱にして、佛世界を淨め無縛無脱にして諸佛を供養すべく、無縛無脱にして、當に法を聽くべく、無縛無脱にして、諸佛終に離れず。無縛無脱にして、諸神道終に離れず。無縛無脱にして、五眼終に離れず。無縛無脱にして、陀羅尼門終に離れず。無縛無脱にして、諸三昧終に離れず。無縛無脱にして、當に道種智を生すべく、無縛無脱にして當に一切種智を得べく、無縛無脱にして法輪を轉じ、無縛無脱にして、衆生、三乘に安立す。是の如く、富樓那よ、菩薩摩訶薩は無縛無脱の六波羅蜜(多)を行す。當に知るべし、一切法は縛なく脱なきことを。(そは)所有なきが故なり。離の故なり。波疲の故なり。不生の故なり。富樓那よ、是を菩薩摩訶薩の、無縛無脱の大莊嚴と名くと。

釋して曰く、須菩提は言ふ、「我れ佛に聞き上れる義の如くば、大莊嚴なきを大莊嚴と爲す。

何となれば自相空なるが故なり」と。

問うて曰く、須菩提は何を以て是の如く説くや。答へて曰く、佛は、「大莊嚴を發するの義は、甚深にして、得難く、解し難し」と説き給へり。會中の衆生は、是の事を聞いて、心或は没没す。是の如き莊嚴は、畢竟空にして、亦た神通力を以ての故に、一時に能く遍ねく、十方恆河沙世界に至る。可適の衆生は、「これは是れ聖主の事なり。我等は云何が能く知らん」と言ふ。是を以ての故に、須菩提は説けり、「大莊嚴を發するは、深きに非ず、難きに非ず、但大莊嚴の自相は空にして、行じ易く得易きを發するに非ず。色と色中の定相は不可得なり、乃至十八不共法も亦た爾なり。若し菩薩、能く是の如く、諸法の空、寂滅の相を知りて、本願を捨てず精進す。是の故に、大莊嚴を發すと名く。是は得難きに非ず」と。佛、須菩提の所説を證するが故に言はく、「是の如し」と。作法は皆是れ虚誑なるが故に、薩婆若は作法なしと言ふ。衆生も畢竟空なるが故に亦た作法なし。佛説きたまはく、「作者、不可得なるが故に一切智は作相に非ず。衆生、不可得なるが故に、作者は不可得なり。作者、不可得なるが故に、薩婆若は作に非ず、起相に非ず」と。

復次に、色も亦た能く作る所なし、法は空なるが故なり。乃至諸佛の法も亦た是の如し。須菩提等は謂く、「諸法の中に定まれる作相あること無し。幻の如くにして、實事なしと雖も、而も來去の相

【五】第二問、須菩提が、是の如く説きし理由如何。

あり」と。是を以ての故に佛は、「幻の如く、焰等の如く、作相なし。〔そは〕畢竟不可得なるが故なり」と説き給へり。是の時、聽者は是の念を作す、「十八空は能く一切法を破す。則ち是れ用あり。是れ則ち實と爲す」と。謂つて、「作あり」と言ふ。是を以て佛の言はく、「内空は所作なし。乃至無法有法空より、十八不共法に至るも、亦た所作なし」と。若くは謂く、「今十八空は有爲、虚誑、無實なるが故に、作なかるべきも、如法性實際は、是れ眞實の法にして、應當に作あるべし。何となれば一切の有爲法は、各各共に無爲法に因り。亦た有爲の與に因と作ればなり」と。佛の言はく、「如法性實際法住法位も、亦た無作なり」と。又謂く、「菩薩と佛と一切種智とは、是れ實法にして能く所作あり」と。是の故に佛の言はく、「是の法も亦た、畢竟空なるが故に、亦た所作なし。作相は因縁生なればなり」と。行者念じて言はく、「佛法は甚だ難く、甚だ希有なり」と爲す。諸法は都べて作なく、縛なく、解なき者なり。我等は云何が當に苦より脱することを得べき」と。是の故に須菩提、佛に白して言さく、「我れ佛の所説の義を知るが如くば、五衆は、縛すること無く、解くこと無し。若し畢竟空にして作者あること無くば、誰か縛し、誰か解かん。凡夫の人の法は、虚誑にして、不可得なるが故に、縛に非ず。聖人の法は、畢竟空にして、不可得なるが故に、解に非ず。夢等の如き五衆、及び三世の五衆、善、不善等の五衆、一切

【六】 菩薩摩訶薩は、縛せず、解せず。蓋し實に煩惱ありて、人を縛して、墮落せしむるにもあらず、又實に無漏法ありて、人をして煩惱の縛を解脱せしむるにあらざればなり。

法も亦た是の如し。乃至實際等も亦復是の如し。「そは」所有なきが故に、離の故に、不生の故に、縛すること無く、解くこと無きなり。是を菩薩摩訶薩の不縛不解と名く。菩薩の道は是の道中に住し、諸の煩惱に牽かれて、凡夫の中に墮せざるが故に不縛と言ひ、諸の無漏法を以て、煩惱を破せざるが故に不解と言ふ。衆生を教化し、佛世界を淨め、乃至五神通、五眼、諸陀羅尼、三昧門は、終に佛を離れず、及び衆生を三乘に安立するも、亦た縛すること無く、解くこと無し。何となれば諸法は、所有なきが故なり、離の故なり、寂滅の故なり、不生の故なり。畢竟空なるが故なり。是等の如き因縁、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴相を發すと名く。所謂不縛不解なり。

摩訶衍品第十八を釋す。

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なる。云何が當に菩薩摩訶薩の、大乘に發越することを知るべき。是の乘は何の處にか發し、是の乘は何の處にか至り、是の乘は當に何の處にか住すべき」と。佛

須菩提に告げたまはく、「汝は何等か是れ、菩薩摩訶薩の摩訶衍なるやと問ふ。須菩提よ、六波羅蜜(多)は、是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。何等か六なる、檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)なり。云何が檀(那)波羅蜜(多)と名くるや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心を以て、

内外の所有を、共に一切衆生に布施し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。無所得を用つての故なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶

【七】此の品名は或は問乘品ともいふ。先に摩訶薩を辯じて、大莊嚴、發趣大乘、及び大乘乘とす。今此の品には、謂ゆる大乘の法相住位等を詳にし、大乘は即ち般若なりと力説す。



〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。聲の聲とするは空なり。香の香とするは空なり。味の味とするは空なり。觸の觸とするは空なり。法の法とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を外空と名く。何等をか内外空を名くるや。内外法は内の六入外の六入に名く。内法の内法とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。外法の外法とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を内外空と名く。何等をか空空と爲すや。一切法は空にして、是の空も、亦た空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を空空と名く。何等をか大空と爲すや。東方の東方とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故に、何となれば性として自ら爾ればなり。南西北方、四維上下の南西北方、四維上下とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を大空と名く。何等をか第一義空と爲すや。第一義空とは涅槃に名く。涅槃の涅槃とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を第一義空と名く。何等をか有爲空と爲すや。有爲法とは、欲界、色界、無色界に名く。欲界の欲界とするは空なり。色界の色界とするは空なり。無色界の無色界とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を有爲空と名く。何等をか無爲空と爲すや。無爲空とは名けて無生相、無住相、無減相と爲す。無爲法の無爲法とするは空なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を無爲空と名く。何等をか畢竟空と爲すや。畢竟とは諸法の至竟不可得なるに名く。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を畢竟空と名く。何等をか無始空と爲すや。若し法の初來處は、不可得なり。〔そは〕常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば、性として自ら爾ればなり。是を無始空と爲す。何等をか散空と爲すや。散とは諸法の無滅に名く。〔そは〕常に非ず、滅に非ざるが故なり。

何となれば性として自ら爾ればなり。是を散空と爲す。何等をか性空と爲すや。一切の法性、若くは有爲法性、若くは無爲法性、是の性は聲聞辟支佛の所作に非ず、佛の所作に非ず。亦餘人の所作にも非ず。是の性の性とするは空なり。(そは)常に非ず、滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を性空と名く。何等をか自相空と爲すや。自相とは色の壞相、愛の受相、想の取相、行の作相、識の識相に名く。是の如き等の有爲無爲の法は、各自相空なり。(そは)常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば、性として自ら爾ればなり。是を自相空と名く。何等をか諸法空と爲すや。諸法は色受想行識、眼耳鼻舌身意、色聲香味觸法、眼界色界眼識界、乃至境界法界意識界に名く。是の諸法の諸法たるは空なり。(そは)常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を諸法空と爲す。何等をか不可得空と爲すや。諸法を求むるに不可得なり。是の不可得は空なり。(そは)常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を不可得空と名く。何等をか無法空と爲すや。若し法の無なる、是れ亦た空なり。(そは)常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を無法空と名く。何等をか有法空と爲すや。有法とは、諸法の和合中、自らの性相あるに名く。是の有法は空なり。(そは)常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を有法空と名く。何等をか無法有法空と爲すや。諸法の中法なきと、諸法和合の中自らの性相あると、是の無法有法は空なり。(そは)常に非ず滅に非ざるが故なり。何となれば性として自ら爾ればなり。是を無法有法空と名く。復次に、須菩提よ、法の法相とするは空なり。無法の無法相とするは空なり。自法の自法相とするは空なり。他法の他法相とするは空なり。何等をか法の法相とするは空なりと名くるや。法とは五衆に名く。五衆は空なり。是を法相空と名く。何等か無法の無法相とするは空なりと名くるや。無法は無爲法に名く。是を無法の無法相とするは空なりと名く。何等をか自法の自法相とするは空なりと名くるや。諸法は自法空なり。是の空は、智の作に非ず、見の作に非ず。是を自法の自法相

とするは空なりと名く。何等をか他法の他法相とするは空なりと名くるや。若くは佛出でたまふも、若くは佛出でたまはざるも、法住、法相、法位、法性、如、實際、此を過ぐる諸法は空なり。是を他法の他法相とするは空なりと名く。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

論

問うて曰く、是の經を名けて般若波羅蜜(多)と爲す。又佛は須菩提に命じて菩薩の爲に般若波羅蜜(多)を説かしめ給へり。須菩提は應に般若波羅蜜(多)を問ふべく、佛も亦た應に般若波羅蜜(多)を答へたまふべきなり。今須菩提は、何を以てか乃ち摩訶衍を問ひ、佛も亦た摩訶衍を答へ給ひしや。答へて曰く、般若波羅蜜(多)は、摩訶衍の一義にして、但名字異なるのみ。若し般若波羅蜜(多)を説くに、摩訶衍を説くも咎なし。摩訶衍とは佛道に名く。是の法を行ずれば、佛に至ることを得。〔是の法とは〕所謂六波羅蜜(多)なり。

六波羅蜜(多)中、第一に大なるは、般若波羅蜜(多)なり。後品に、佛、種種に大因縁を説きたまふが如し。若し般若波羅蜜(多)を説けば、則ち六波羅蜜(多)を攝す。若し六波羅蜜(多)を説けば、則ち具に菩薩道を説く。所謂初發意より、乃ち佛を得るに至る。譬へば、王來れば必ず營從あり。從者を説かずと雖も、當に必ず有ることを知るべきが如し。摩訶衍も亦た是の如く、菩薩の初發意の所行は、佛道を求めんが爲の故なり。修習する所の善法は、隨つて衆生を度すべし。説く所の種種の法とは、

【八】 第三問、佛は須菩提に般若經を説かんことを命じ給ふ。然るに今須菩提が大乗を問ひ、佛も亦それに答へ給ひしは何故なるか。

【九】 大乘と般若とは、異名にして同義なり。

所謂（二〇）本起經、斷一切衆生疑經、華手經、法華經、雲經、大雲經、法雲經、彌勒問經、六波羅蜜  
 〔多〕經、摩訶般若波羅蜜〔多〕經なり。是の如き等の無量無邊阿僧祇の經は或は佛の説、或は化佛の説、  
 或は大菩薩の説、或は聲聞の説、或は諸の得道の天の説なり。是の事の和合するを、皆摩訶衍と名  
 く。此の諸經の中にて、般若波羅蜜〔多〕は、最も大なるが故に摩訶衍と説き、即ち知り已つて般若波  
 羅蜜〔多〕を説く。諸餘の助道法は、般若波羅蜜〔多〕と和合すること無ければ、則ち佛に至ること能  
 はず。是を以ての故に、一切の助道法は、皆是れ般若波羅蜜〔多〕なり。後品の中に、佛、須菩提に、  
 「汝が説く摩訶衍は、般若波羅蜜〔多〕と異ならず」と語り給ふが如し。  
 問うて曰く、（二一）若し爾らば、初に何を以てか先づ摩訶衍を説かざるや。  
 答へて曰く、我れ上に般若波羅蜜〔多〕を説くは、最大なるが故に、應に先  
 づ説くべし。又佛は意に摩訶般若波羅蜜〔多〕を説かんと欲して、大光明  
 を放ちたまふに、十方の諸の菩薩は、各自ら佛に、「今何を以てか是の光明あるや」と問へり。諸佛  
 は各答へて言く、「娑婆世界に佛あり、釋迦牟尼と名く。般若波羅蜜〔多〕を説かんと欲す」と。彼の  
 諸の菩薩、及び諸の天人は和合して來る。舍利弗、佛に問ふ。「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、一  
 切法を知らんと欲して、般若波羅蜜〔多〕を修行するや」と。又佛は初品の中に、種種に般若波羅蜜〔多〕  
 の功徳を讀じて、「若し是を得んと欲する者は、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と〔言へり〕。是の如

【二〇】本起經、法華經等の諸經  
 の中に、般若最も大なれば、  
 大乘と名くと説けり。  
 【二一】第四問、然らば何故に初  
 めに大乘を説かざりしか。

き等の因縁あるが故に、應に初に般若波羅蜜〔多〕を説くべし。佛、須菩提に命じたまはく、「汝は諸の菩薩の爲に、般若波羅蜜〔多〕を説け」と。須菩提は謙して言く、「菩薩は空にして、但名のみ有り」と。後に言く、「能く是の如く解了して菩薩の相を知れば、即ち是れ般若波羅蜜〔多〕を行するなり」と。既に是を知り已つて、菩薩の句義を問ひ、次に摩訶薩の義あり。摩訶薩の義中に大莊嚴の摩訶衍あり。勇夫の種種の器械の莊嚴ありと雖も、快馬に乗らずんば、則ち能く爲すこと無きが如し。是の大乗は、天竺の語に摩訶衍と名く。諸佛は法愛を斷するが故に、又般若波羅蜜〔多〕の義を明すに、異なること無きが故に、佛は訶したまはず。是を以ての故に、須菩提は、更に異名を作りて、摩訶衍を問ひたてまつれり。

【三】 第五問、但だ六度を説いて大乘と名くる理由如何。

問うて曰く、(三) 摩訶衍の序中に説くが如くば、初發心より乃ち佛道に至るまで、佛道の爲の故に、一切の善法を集むるを、皆摩訶衍と名く。今何を以てか、但だ六波羅蜜〔多〕を説いて摩訶衍と爲すや。答へて曰く、先に説くが如し。般若波羅蜜〔多〕は、則ち六波羅蜜〔多〕を説く。六波羅蜜〔多〕を説けば、則ち一切の善法を攝す。是を以ての故に、應に是の問を作すべからず。諸の善法は多し。何を以てか但だ六波羅蜜〔多〕を説かんや。

復次に、摩訶衍は、初發心に願を作すより、乃ち後の方便等の六波羅蜜〔多〕に至るまでなり。是の諸法は、名けて波羅蜜〔多〕と爲さずと雖も、然も義は皆六波羅蜜〔多〕中に在り。如し初發心に願を作

すは、大悲等の心力大なるが故に、毗梨耶波羅蜜〔多〕と名け、小利を捨て大乘を取るを、般若波羅蜜〔多〕と名く。方便は即ち是れ智慧なり。智慧は淳淨なるが故に、變じて方便と名く。衆生を教化し、佛世界を淨むる等は、皆六波羅蜜〔多〕の中に在り、義に隨つて相攝するのみ。

問うて曰く、(三)若し爾らば、後に何を以てか更に十八空、百八三昧等を説いて、摩訶衍と名くるや。答へて曰く、六波羅蜜〔多〕は、是れ摩訶衍の體なり。但後に廣く其の義を分別す。十八空、四十二字等の如きは、是れ般若波羅蜜〔多〕の義なり。百八三昧等は、是れ禪波羅蜜〔多〕の義なり。是を以ての故に、初に六波羅蜜〔多〕を説けり。

問うて曰く、(四)何を以ての故に、正しく六波羅蜜〔多〕を説けば、多からす少からざるや。答へて曰く、佛を法王と爲す。衆生の度すべきに隨つて、或時は略して一二三四を説き、或時は廣く説きたまふ。賢劫經の八萬

四千の波羅蜜〔多〕の如し。

復次に、六道の衆生は、皆身心の苦惱を受く。地獄の衆生の如きは、拷掠の苦あり。畜生の中に、相殘害するの苦あり。餓鬼の中には、飢餓の苦あり。人中には欲を求むるの苦あり。天上には受くる所の欲を離るる時の苦あり。阿脩羅道には鬪諍の苦あり。菩薩は大悲心を生じ、六道の衆生の苦を滅せんと欲するが故に、六波羅蜜〔多〕を生ず。是を以ての故に、六波羅蜜〔多〕を説けば、多からず

【三】第六問、爾らば十八空、百八三昧等を説いて、大乘と名くるは何故なるか。

【四】第七問、六度を説けば、何故に多からず、少なからざるか。

少からざるなり。

問うて曰く、(二五)檀〔那〕波羅蜜〔多〕に種種の相あり。此の中に佛は何を以てか、但だ五相を説きたまひしや。謂ゆる薩婆若に相應する心を用つて内外の物を捨て、是の福を一切衆生と共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。無所得なるを用つての故なり。何を以てか大慈悲心、諸佛を供養したてまつること、及び神通、布施等を説かざるや。答へて曰く、(二六)是の五種の相の中に一切の布施を攝す。薩婆若に相應する心もて布施すとは、此の佛道を縁じ佛道に依るなり。内外を捨つとは、則ち一切の煩惱を捨つるなり。衆生と共にすとは、則ち是れ大慈悲なり。廻向すとは、此の布施を以て但佛道を求めて餘報を求めざるなり。無所得なるを用つての故には、諸法の實相たる、般若波羅蜜〔多〕の氣分を得るが故なり。檀〔那〕波羅蜜〔多〕は誑に非ず、倒に非ず、亦た窮盡すること無し。

問うて曰く、(二七)若し爾らば、則ち五種の相を須たすして、但薩婆若相應の心を説けば、則ち足らん。答へて曰く、此の事は爾るべし。但衆生は、云何が薩婆若に應ずる心の布施の義なるかを知らざるを以ての故に、是の故に四事を以て、其の義を分別せり。薩婆若に應ずる心とは、菩薩の心を以て佛の薩婆若を求め、縁と作し、念と作し、心を繫けて、是の布施を持し、薩婆若の果を得んと欲し、

【二五】 第八問、佛は何故に、布施度の種種相の中、但五相のみを説き給ひしか。  
 【二六】 五種の中に一切の布施を攝す。  
 【二七】 第九問、若し果して爾らば、但一切智相應の心を説けば、則ち足るにあらすや。

今世の因縁、名聞、恩分等を求めず、亦後世の轉輪聖王、天王の富貴の處を求めず。衆生を度せんが爲の故に、涅槃を求めず、但一切智等の諸佛の法を具せんと欲す。「そは」一切衆生の苦を盡さんが爲の故なり。是を薩婆若に應ずる心と名く。内外の物とは、内は頭腦、骨髓、血肉等の捨て難きに名くるが故に、初に在りて説く。外物は、國土、妻子、七寶、飲食等なり。一切衆生と共にとは、是の布施の福德の果報を、一切衆生と共に用ふるなり。譬へば、大家の穀を種ゑて、人と共に食するが如し、菩薩の福德の果報は、一切衆生、皆來りて依附す。譬へば、好果の樹には、衆鳥歸り集るが如し。廻向とは、是の福德の邊は餘報を求めず。但阿耨多羅三藐三菩提を求むるなり。

問うて曰く、(一八)先には薩婆若に應ずる心と言ひ、後には廻向と言ふ。何等の異ありや。答へて曰く、薩婆若に應ずる心は、諸の福德の因縁を起さんが爲なり。廻向とは、餘報を求めずして、但佛道を求むるなり。

復次に、薩婆若相應の心は、阿耨多羅三藐三菩提に應ずるが爲の故なり。施は先に義を説くが如し。薩婆若を主と爲せば、一切の功德は、皆な薩婆若の爲なり。(一九)佛を讚じ上るの智慧に二種あり。一には、無上正智を阿耨多羅三藐三菩提と名く。二には、一切種智を薩婆若と名く。無所得を用ふとは、般若波羅蜜(多)の心を以て布施し、諸法實相に順じて、虚誑ならざるなり。是等の如くに、檀

【一八】 第一〇問、一切智に應ずる心と、廻向との相異如何。  
【一九】 二種の讚佛の智慧。

〔那〕波羅蜜〔多〕の義を説く。

問うて曰く、(一〇)尸羅波羅蜜〔多〕は、則ち一切の戒法を總ぶ。譬へば、大海の衆流を總攝するが如し。所謂不飲酒、中食を過ぎず、杖を衆生に加へざる等、是の事は十善中に攝せず。何を以てか但十善を説くや。答へて曰く、佛は總相に六波羅蜜〔多〕を説きたまへり。十善は總相戒と爲す。別相には無量の戒あり。不飲酒と中食を過ぎざるは不食の中に入れ、杖を衆生に加へざる等は、不瞋の中に入れ、餘道は義に隨つて相從ふ。戒は身業、口業に名づけ、七善道の所攝なり。十善道は初後に及ぶ。如し心を發して、殺さんと欲し、是の時方便を作して、惡くし、鞭打し、繫縛し、斫刺し、乃至死に垂んたらしむるは、皆初に屬し、死して後、皮を剥ぎ、食噉し、割截し、歡喜するは皆後と名く。命を奪ふは、是れ本體なり。此の三事の和合するを、總べて殺不善道と名く。是を以ての故に、十善道を説けば、則ち一切の戒を攝することを知る。復次に、是の菩薩は、慈悲心を生じて、阿耨多羅三藐三菩提を發し、布施して、衆生を利益し、其の須ふる所に隨つて、皆之を給與す。持戒して、衆生を惱さず、諸苦を加へず、常に無畏を施すは、十善道を根本と爲す。餘は是れ衆生を惱まさざるの遠因縁なり。戒律は今世に涅槃を取るが爲の故なり。婬欲は衆生を惱まさずと雖も、心繫縛するが故に、大罪と爲す。是を以ての故に、是の戒律中には、婬欲を初と爲す。(三)白

【一〇】 第一二問、但十善戒を説くは何故なるか。

【三】 白衣とは、出家の著る黄衣に對する語にして、在家の代名詞なり。日本にては、白衣は僧侶の平服なれども、印度にては、俗人の服なり。

衣には、不殺戒、前に在り、福徳を求むるが爲の故なり。菩薩は今世の涅槃を求めず、無量世中に於て、生死に往返し、諸の功徳を修し、十善を舊戒と爲し、餘の律儀を客と爲す。

復次に、若し佛、好世に出でたまへば、則ち此の戒律なし。釋迦文佛の如きは、惡世に在すと雖も、十二年の中は、亦た此の戒なし。是を以ての故に、是れ客となることを知る。復次に、二種の戒あり。有佛の時は、或るは有り、或るは無し。十善は佛あるも、佛なきも、常に有り。

復次に、戒律中の戒は、復た細微なりと雖も、懺悔すれば、則ち清淨なり。十善戒を犯せば、復た懺悔すと雖も、三惡道の罪を除かれず。比丘、畜生を殺せば、復た懺悔することを得と雖も、罪報は猶ほ除かざるが如し。是の如き等の種種の因縁の故に、但十善業道を説く。亦た自ら行ひ、亦た他に教ゆるを名けて、尸羅波羅蜜(多)と爲す。十善道は、(三)七事は是れ戒、(四)三は守護と爲すが故に、通じて名けて尸羅波羅蜜(多)と爲す。餘の波羅蜜(多)も、亦た是の如く、義に隨つて分別す。初品の中に六波羅蜜(多)の論義を廣く説けるが如し。是の經を般若波羅蜜(多)と名く。般若波羅蜜(多)は、捨離相と名く。是を以ての故に、一切法中、皆無所得を用ふるなり。

【三】好世とは、具さには好世の淨土といふ。煩惱の垢薄く壽命長く、一切の果報勝れて國土清淨なり。之に反して煩惱盛んにして、壽命短く、果報劣り、國土穢れたるを五濁惡世の穢世といふ。

【三】七事とは、身の三業、即ち不殺生、不偷盜、不邪淫と、口の四業、即ち不妄語、不飲酒、不說過、不綺語となり。

【四】三とは、意の三業、即ち不慳寶財、不瞋恚、不謗三寶なり。

問うて曰く、(三五) 若し有所得を用つて、諸の善法を集むることすら、猶尙難しと爲す。何に況んや、無所得を用つてするをや。答へて曰く、若し是の無所得の智慧を得れば、是の時、能く善行を妨げ、或は邪疑を生ず。若し是の無所得の智慧を得ざれば、是の時、妨ぐる所なく、亦た邪疑を生ぜず。佛も亦た、心に著して相を取り、諸の善道を行することを稱(讚)したまはざりき。何となれば虚誑にして、世間に住し、終に盡に歸すればなり。若し心に著して善を修すれば、破する者則ち易し。若し空に著して悔を生ずれば、還つて是の道を失す。譬へば、火を草中に起すに、水を得れば則ち滅し、若し水中に火生ずれば、則ち物能く滅すること無きが如し。初めて習行し、心に著して相を取り、菩薩の福德を修するは、草に生ずる火の滅を得べきこと易きが如く、若し實相を體得せる菩薩の、大悲心を以て、衆行を行すの破り得べきこと難きは、水中に生ずる火の能く滅する者なきが如し。是を以ての故に、無所得の心を用つて衆行を行すと雖も、心も亦た弱からず、疑悔を生ぜず。是を略して六波羅蜜(多)の義を説くと名く。廣説は初品の中の如し。一一の波羅蜜(多)に、皆十八空を具足すとは、六波羅蜜(多)の中に、般若波羅蜜(多)の義を説き、諸法に著せざるなり。所以は何んとなれば、十八空を以ての故なり。十八空の論議は初品の中の如し。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、十八空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし」と。彼の義は應に此の中に廣説す

【三五】 第一二問、有所得を以て、諸の善法を集むるすら、尙ほ難し。何に況んや無所得を以てするをや。

べし。

問うて曰く、(三) 十八空の、内空等の後に、皆「常に非ず滅に非ざるが故に」と言ふ。此の義云何。答へて曰く、若し人此の空を習はずんば、必ず二邊に墮せん。「即ち」若くは常、若くは滅なり。何となれば若し諸法實に有ならば、則ち滅の義なく、常の中に墮せん。人の一舎より出でて、一舎に入るは、眼に見ずと雖も、名けて無と爲さざるが如し。諸法も亦た爾なり。未來世より、現在世に入り、現在世より、過去世に入る。是の如くなれば、則ち滅せず。行者は有を以て、患と爲す。空を以て有を破し、心に復た空を貴ぶ。空に著する者は、則ち斷滅に墮す。是を以ての故に、是の空を行じて、以て有を破し、亦た空に著せず、是の二邊を離れ、以て中道を行す。是の十八空は、大悲心をもつて、衆生を度せんが爲なり。是の故に十八空の後に、皆「常に非ず滅に非ず」と言へり。是を摩訶衍と名く。若し此に異なる者は、則ち是れ戲論狂人なり。佛法の中に於いては、空にして所得なし。人の珍寶の聚中に於いて、水精の珠を取り、眼に見て好しと雖も、價直する所なきが如し。

問うて曰く、(三) 若し十八空、已に諸空を攝せば、何を以てか更に四空を説くや。答へて曰く、十八空の中に、現空盡く攝す。諸佛に二種の説法あり。或は初に略して後に廣く、或は初に廣くして後に

【云】 第一三問、十八空の後に必らず、常に非ず、滅に非ざるが故に」とあり、其の義如何。

【三】 第一四問、十八空、已に諸空を攝せば、更に四空を説くは何故なるか。

略す。初に略にして後に廣きは、義を解せんが爲の故なり。初に廣くして後に略するは、持し易きが爲の故なり。或は後會の衆生の爲に、略して其の要を説き、或は偈頌を以てす。今佛は前に廣く十八空を説き、後に略して四空の相を説きたまふ。法の法相たるは空なりとは、一切法の中に法相は不可得なり、色の中に色相の不可得なるが如し。

復次に、法中に法を生ぜざるが故に、名けて法の法たるは空なりと爲す。無法の無法たるは空なり

とは、無爲法を無法と名く。何となれば相は不可得なるが故なり。

問うて曰く、佛は三相を以て、無爲法を説きたまへり。云何が無相と

言ふや。答へて曰く、然らず。生を破するが故に無生と言ひ、住を破する

が故に無住と言ひ、滅を破するが故に無滅と言ふ。皆生住滅の邊に從つて

此の名あり、別に無生無滅の法なし。是を無法の無法とするは空なりと名

く。是の義は無爲空の中に説くが如し。自法の自法とするは空なりとは、自法とは、諸法の自性に名

く。自性に二種あり、一には世間の法の如く、地の堅性等なり、二には聖人は如・法性・實際を知る。

此の法は空なり。何となれば、知見に由りて知らざるが故なり。二性あり、空なることは先に説くが

如し。

問うて曰く、(三)如法性・實際は、無爲法の中に已に攝す。何を以てか復た更に説くや。答へて曰く、

【二〇】第一五問、佛は三相を以て無爲法を説き給へり。然るを今云何ぞ無相といふや。

【二一】第一六問、如・法性・實際は、已に無爲の中に攝せり。然るに今又更に之を説くは何故なるか。

観する時分別して、五衆の實相なる、法性・如・實際を説く。又空の智慧觀に非ざるが故に、空性をして自ら爾らしむ。

問うて曰く、色の如きは、是れ自法にして、識を他法と爲す。此の中に何を以てか、如法性・實際は、佛あるも、佛なきも、常住にして、是を過ぎたるを名けて他法空と爲すと説くや、答へて曰く、有人は、未だ善く見結を斷せざるが故に、處處に著を生ず。是の人は是の如法性・實際を聞き、是を過ぎ已りて更に餘法ありと謂ふ。是を以ての故に、如法性・實際を過ぐるも亦た空なりと説く。

【三】 第一七問、眞如、法性等を過ぎたるを、他法空となす理由如何。

# 卷の第四十七

## 摩訶衍品第十八の餘を釋す。

經

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂首楞嚴三昧、寶印三昧、師子遊戲三昧、妙月三昧、月幢相三昧、出諸法三昧、觀頂三昧、畢法性三昧、畢幢相三昧、金剛三昧、入法印三昧、三昧王安立三昧、放光三昧、力進三昧、高出三昧、必入辯才三昧、釋名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、無誑三昧、攝諸法悔三昧、遍覆虛空三昧、金剛輪三昧、斷寶三昧、能照三昧、不求三昧、無住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無邊明三昧、能作明三昧、普照明三昧、堅淨諸三昧三昧、無垢明三昧、歡喜三昧、電光三昧、無盡三昧、威德三昧、離盡三昧、不動三昧、不退三昧、日燈三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明三昧、作行三昧、相知三昧、如金剛三昧、心住三昧、普明三昧、安立三昧、寶聚三昧、妙法印三昧、法等三昧、斷喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、分別諸法句三昧、字等相三昧、離字三昧、斷緣三昧、不壞三昧、無種相三昧、無處行三昧、離障味三昧、無去三昧、不變異三昧、度緣三昧、集諸功德三昧、住無心三昧、淨妙華三昧、覺意三昧、無量辯三昧、無等等三昧、度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無住處三昧、一莊嚴三昧、生行三昧、一行三昧、不一行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入名誦三昧、摩訶聲字誦三昧、然炬三昧、淨相三昧、破相三昧、一切種妙足三昧、不喜苦樂三昧、無盡相三昧、多陀羅尼三昧、攝諸邪正相三昧、滅憍慢三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、大莊嚴三昧、能照一切世三昧、三昧等三昧、攝一切有諍無諍三昧、不樂一切住處三昧、如住處三昧、壞身衰三昧、壞語如虛空三昧、離著虛空不染三昧と名く。云何が首楞嚴三昧と名くるや。諸の三昧行處を知る、是を首楞嚴三昧と名く。云何が寶印三昧と名くるや。是の三昧に

住し、能く諸三昧を印す、是を寶印三昧と名く。云何が師子遊戯三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸三昧中に遊戯すること、師子の如し。是を師子遊戯三昧と名く。云何が妙月三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を照らすこと、淨月の如し。是を妙月三昧と名く。云何が月幢相三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧の相を持す、是を月幢相三昧と名く。云何が出諸法三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を出生す、是を出諸法三昧と名く。云何が觀頂三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧の頂を觀す、是を觀頂三昧と名く。云何が聖法性三昧と名くるや。是の三昧に住し、決定して法性を知る。是を聖法性三昧と名く。云何が畢幢相三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧の幢を持す。是を畢幢相三昧と名く。云何が金剛三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を破す。是を金剛三昧と名く。云何が入法印三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の法印に入る。是を入法印三昧と名く。云何が三昧王安立三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切の諸三昧の中に安立して、住すると王の如し。是を三昧王安立三昧と名く。云何が放光三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く光を放ちて、諸の三昧を照らす。是を放光三昧と名く。云何が力進三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて、能く力勢を作す。是を力進三昧と名く。云何が高出三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を増長す。是を高出三昧と名く。云何が必入辨才三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を辯說す。是を必入辨才三昧と名く。云何が釋名字三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧の名字を釋す。是を釋名字三昧と名く。云何が觀方三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧の方を觀す。是を觀方三昧と名く。云何が陀羅尼印三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の印を持す。是を陀羅尼印三昧と名く。云何が無誑三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて、欺誑せず。是を無誑三昧と名く。云何が攝諸法海三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を攝すること、大海の水の如し、是を攝諸法海三昧と名く。云何が遍覆虛空三昧と名くるや。是の三昧に住し、

遍おもれく諸もろの三味さいを覆おほふこと、虚空こくうの如ごとし、是これを遍覆へんそく虚空こくう三味さいと名なく、云何いかんが金剛輪三味こんごうりんさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、能よく諸もろの三味さいの分ぶんを持もつ。是これを金剛輪三味こんごうりんさいと名なく、云何いかんが斷寶三味だんぼうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいの垢あかを斷きず。是これを斷寶三味だんぼうさいと名なく、云何いかんが能照三味のうさうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、能よく光明くわうみやうを以もつて諸もろの三味さいを顯照けんさうす。是これを能照三味のうさうさいと名なく、云何いかんが不ふ求三味ぶきうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、法ほふとして求もとむべきもの無なし、是これを不ふ求三味ぶきうさいと名なく、云何いかんが無住三味むぢうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、一切いっせつの三味さい中に法住ほふぢうを見みず。是これを無住三味むぢうさいと名なく、云何いかんが無心三味むしんさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さい中に於おいて、明みやうと作ること、心しん、心數しんじゆ法行ほふぎやうぜず。是これを無心三味むしんさいと名なく、云何いかんが淨燈三味じやうとうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいの與あひ無邊むへんの明みやうを作なす。是これと燈とうの如ごとし。是これを淨燈三味じやうとうさいと名なく、云何いかんが無邊明三味むへんみやうみやうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいの爲ために明みやうと作る。是これを無邊明三味むへんみやうみやうさいと名なく、云何いかんが能作明三味のうさうみやうみやうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、即時そくじに能よく諸もろの三味さいの爲ために明みやうと作る。是これを能作明三味のうさうみやうみやうさいと名なく、云何いかんが普照明三味ふさうみやうみやうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、即すばよ能よく諸もろの三味さい門もんを照てらす。是これを普照明三味ふさうみやうみやうさいと名なく、云何いかんが堅淨諸三味けんじやうしよさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、能よく堅かたく諸もろの三味さいの相さうを淨じやうむ。是これを堅淨諸三味けんじやうしよさいと名なく、云何いかんが無垢明三味むくうみやうみやうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、能よく諸もろの三味さいの垢あかを除のぞき、亦また能よく一切いっせつの三味さいを照てらす。是これを無垢明三味むくうみやうみやうさいと名なく、云何いかんが歡喜三味くわんぎさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、能よく諸もろの三味さいの喜きを受うく。是これを歡喜三味くわんぎさいと名なく、云何いかんが電光三味でんくわうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいを照てらすこと、電光でんくわうの如ごとし、是これを電光三味でんくわうさいと名なく、云何いかんが無盡三味むぢんさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいに於おいて、盡じんを見みず、是これを無盡三味むぢんさいと名なく、云何いかんが威德三味ゐとくさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいの盡じんくつを見みず。是これを離盡三味りぢんさいと名なく、云何いかんが不動三味ふどうさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、諸もろの三味さいをして不動ふどう、不戲ふけならしむ。是これを不動三味ふどうさいと名なく、云何いかんが不退三味ふたいさいと名なくるや。是この三味さいに住すじ、能よく諸もろの三味さいの退しりぞくつを見みず。是これを不退三味ふたいさいと名なく、云何いかんが日燈三味ぢつとうさいと名なくる

や。是の三昧に住し、光を放ちて、諸の三昧門を照らす。是を日燈三昧と名く。云何が月淨三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧の闇を除く。是を月淨三昧と名く。云何が淨明三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて四無礙智を得。是を淨明三昧と名く。云何が能作明三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧をして、各所作あらしむ。是を能作明三昧と名く。云何が知相三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の相知を見る。是を知相三昧と名く。云何が如金剛三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸法に貫達し、亦た達することをも見ず。是を如金剛三昧と名く。云何が心住三昧と名くるや。是の三昧に住し、心動ぜず、轉ぜず、懼まず、亦た是の心あることをも念ぜず。是を心住三昧と名く。云何が普明三昧と名くるや。是の三昧に住すれば、普れく諸の三昧の明を見る。是を普明三昧と名く。云何が安立三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて、安立して動ぜず。是を安立三昧と名く。云何が寶聚三昧と名くるや。是の三昧に住し、普れく諸の三昧を見ること、寶聚を見るが如し。是を寶聚三昧と名く。云何が妙法印三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を印し、無印を以て印するが故に、是を妙法印三昧と名く。云何が法等三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸法等しうして、法の等しからざる無きを觀す。是を法等三昧と名く。云何が斷喜三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切法中の喜を斷ず。是を斷喜三昧と名く。云何が到法頂三昧と名くるや。是の三昧に住すれば、諸法の闇を滅し、亦た諸の三昧の上に在り、是を到法頂三昧と名く。云何が能散三昧と名くるや。是の三昧中に住し、能く諸法を破散す。是を能散三昧と名く。云何が分別諸法句三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の諸の法句を分別す。是を分別諸法句三昧と名く。云何が字等相三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の字等を得。是を字等相三昧と名く。云何が離字三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧中に、乃ち一字をも見ざるに至る。是を離字三昧と名く。云何が斷縁三昧と名くるや。是の三昧に

住し、諸の三昧の縁を斷ず。是を斷縁三昧と名く。云何が不壞三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸法の變異を得ず。是を不壞三昧と名く。云何が無種相三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸法の種種なることを見ず。是を無種相三昧と名く。云何が無處行三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の處を見ず。是を無處行三昧と名く。云何が離塵味三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の微塵を離る。是を離塵味三昧と名く。云何が無去三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切の三昧の去相を見ず。是を無去三昧と名く。云何が不變異三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切の三昧の緣境界を度る。是を度緣三昧と名く。云何が集諸功德三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の功德を集む。是を集諸功德三昧と名く。云何が住無心三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて心入る所なし。是を住無心三昧と名く。云何が淨妙華三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の中に七覺分を得。是を覺意三昧と名く。云何が無量辯三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて、無量の辯を得。是を無量辯三昧と名く。云何が無等等三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の中に無等等の相を得。是を無等等三昧と名く。云何が度諸法三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切の三昧の界を度る。是を度諸法三昧と名く。云何が分別諸法三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧及び諸法を分別して見る。是を分別諸法三昧と名く。云何が散疑三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸法の疑を散ずることを得。是を散疑三昧と名く。云何が無住處三昧と名くるや。是の三昧に住し、終に諸法の二相を見ず。是を一莊嚴三昧と名く。云何が一行三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸行の生ずることを見ず。是を生行三昧と名く。云何が一行三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の此岸、彼岸を見ず。是を一行三昧

と名く。云何が不行三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の一相を見ず。是を不行三昧と名く。云何が妙行三昧と名くるや。此の三昧に住し、諸の三昧の二相を見ず。是を妙行三昧と名く。云何が達一切有底散三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切有底散三昧に入り、智慧通達して、亦た達する所なし。是を達一切有底散三昧と名く。云何が入名語三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切の三昧の名語に入る。是を入名語三昧と名く。云何が離音聲字語三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の音聲字語を見ず。是を離音聲字語三昧と名く。云何が然炬三昧と名くるや。是の三昧に住し、威徳照明にして、炬の如し。是を然炬三昧と名く。云何が淨相三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の相を淨む。是を淨相三昧と名く。云何が破相三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の相を見ず。是を破相三昧と名く。云何が一切種妙足三昧と名くるや。是の三昧に住し、一切の諸の三昧の種皆具足す。是を一切種妙足三昧と名く。云何が不喜苦樂三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の苦樂を見ず。是を不喜苦樂三昧と名く。云何が無盡相三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧を持す。是を多陀羅尼三昧と名く。云何が攝諸邪正相三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて、邪正の相を見ず。是を攝諸邪正相三昧と名く。云何が減憎愛三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の憎愛を見ず。是を減憎愛三昧と名く。云何が逆順三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸法、諸三昧の逆順を見ず。是を逆順三昧と名く。云何が淨光三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の明垢を得ず。是を淨光三昧と名く。云何が堅固三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の不堅固を得ず。是を堅固三昧と名く。云何が滿月淨光三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧を満足すること、月の十五日の如し。是を滿月淨光三昧と名く。云何が大莊嚴三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧を成就す。是を大莊嚴三昧と名く。云何が能照一切世三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧及び一切法を能く

照らす。是を能照一切世三昧と名く。云何が三昧等三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧に於いて、定亂の相を見ず。是を三昧等三昧と名く。云何が攝一切有諍無諍三昧と名くるや。是の三昧に住し、能く諸の三昧をして、有諍無諍を分別せざらしむ。是を攝一切有諍無諍三昧と名く。云何が不樂一切住處三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の依處を見ず。是を不樂一切住處三昧と名く。云何が如住定三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の如相を過ぎず。是を如住定三昧と名く。云何が壞身衰三昧と名くるや。是の三昧に住し、身相を得ず。是を壞身衰三昧と名く。云何が壞語如虛空三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸の三昧の語業を見ざることを、虛空の如し。是を壞語如虛空三昧と名く。云何が離著虛空不染三昧と名くるや。是の三昧に住し、諸法を見ること、虛空の礙なく、亦た染せざるが如し。是の三昧をば離著虛空不染三昧と名く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

【一】百八三昧を釋す。

【二】首楞嚴三昧 (Suraṅgaṃ nāma samādhi) の義解。

釋して曰く、上には十八空を以て、般若波羅蜜(多)を釋し、今は百八三昧を以て、禪(那)波羅蜜(多)を釋す。百八の三昧は、佛自ら其の義を説きたまひしに、是の時は人、利根なるが故に、皆信解することを得き。今は則ち然らず。論者は重ねて其の義を釋して、易く解することを得せしむ。

(三) 首楞嚴三昧とは秦に健相と言ひ、諸の三昧の行相の、多少深淺を分別して知ること、大將の諸兵の力の多少を知るが如し。

復次に、菩薩定の三昧を得れば、諸の煩惱の魔、及び魔人の能く壞する者なし。譬へば、轉輪聖王

の主兵、寶將の往く所至る處、降伏せざることを無きが如し。寶印三昧とは、能く諸の三昧を印す。諸寶の中に於いて、法寶は是れ寶寶にして、今世後世より乃ち涅槃に至るまで、能く利益を爲す。經中に説くが如し。佛、比丘に語りたまはく、一汝が爲に法を説かん。所説の法は、所謂法印なり。法印は即ち是れ寶印なり。寶印は即ち是れ解脱門なり」と。

復次に、有人の言く、「三法印を名けて、寶印三昧と爲す。一切の法は無我なり。一切の作法は無常なり。寂滅は涅槃なり。是の三法印は、一切の天人の、能く如法に壞する者なし。是の三昧に入れば、能く三種に諸法を觀す。是を寶印と名く」と。

復次に、般若波羅蜜(多)は、是れ寶にして、是に相應する三昧を印と名け、是を寶印と名く。師子遊戯三昧とは、菩薩是の三昧を得れば、一切

の三昧の中に於いて、出入遲速、皆自在なることを得。譬へば、衆獸の戲るる時、若し師子を見れば、率に皆怖攝し、師子の戲るるときは、自在にして畏れ難る所なきが如し。

復次に、師子の戲むるとき、諸の群獸に於いて、強きものは、則ち殺し、伏するものは、則ち放つ。菩薩も亦た是の如く、是の三昧を得、諸の外道に於いて、強き者は、之を破り、信する者は、之を度す。

復次に、師子遊戯とは、初品の中に説くが如く、菩薩、是の三昧の中に入れば地爲に六反に震動し、

【三】 寶印三昧 (Ratnamtro nama samādhi) の義解。  
【四】 師子遊戯三昧 (Sinhavi-kūṭa nāma samādhi) の義解。

一切十方世界の湯をして冷やかならしめ。盲者は視ることを得、聾者は聽くことを得る等なり。妙

月三昧とは、月滿ちて清淨なれば、諸の翳障なく、能く夜闇を除くが如く、

此の三昧も亦た是の如し。菩薩この三昧に入れば、能く諸法の邪見、無明、

闇蔽等を除く。月幢相三昧とは、大軍將の幢寶を以て月像と作せば、

此の幢相を見て、人皆隨從するが如く、菩薩此の三昧の中に入れば、諸法

に通達すること、無礙にして、皆悉く隨從す。出諸法三昧とは、菩薩、

是の三昧を得れば、諸の三昧をして、增長せしむること、譬へば、時雨の

林木を茂盛ならしむるが如し。觀頂三昧とは、是の三昧の中に入れば、

能く遍ねく諸の三昧を見ること、山頂に住して、悉く衆物を見るが如し。

畢法性三昧とは、法性は、量なく、二なく、執持すべきこと難し。是の

三昧に入れば、必ず能く定相を得ること、譬へば、虚空は能く住する者な

きも、神足力を得れば、則ち能く之に處するが如し。毘幢相三昧とは、

是の三昧に入れば、則ち諸の三昧に於いて、最も尊長と爲す。譬へば軍

將の幢を得れば、其の大相を表すが如し。金剛三昧とは、譬へば、金剛

の物として陷らざること無きが如し。此の三昧も亦た是の如く、諸法に於いて通達せざること無く、

【五】 妙月三昧 (Sunnacandro nāma saraḍḍhi) の義解。

【六】 月幢相三昧 (Candabhiv-ajaketur nāma samāhi) の義解。

【七】 出諸法三昧 (Saraḍḍhar-mogato nāma samāhi) の義解。

【八】 觀頂三昧 (Vihāketamur-dho nāna samāhi) の義解。

【九】 畢法性三昧 (Dhammāhā-tuniyato nāma samāhi) の義解。

【10】 畢幢相三昧 (Niyatadha-jaketur nāna samāhi) の義解。

(一) 金剛三昧 (Vajro nāma samāhi) の義解。

諸の三昧をして、各其の用を得せしむること、碑磔、礪磧、瑠璃は唯金剛のみ能く穿つが如し。(三)

入法印三昧とは、人の安隱の國に入るに、印あれば入ることを得、印なければ入ることを得ざるが如く。菩薩も是の三昧を得れば、能く諸法實相の

中、所謂、諸法畢竟空に入る。(三) 三昧王安立三昧とは、譬へば、大王の正

殿に安住し、諸の群臣を召すに、皆悉く命に従ふが如く、菩薩も三昧王に

入つて、大光明を放ち、十方を請召するに、悉く集まらざることなく、又

化佛を遣はして遍ねく十方に至らしむ。安立とは、譬へば、國王の正殿に

安處し、身心坦然として、畏懼する所なきが如し。(四) 放光三昧とは、常に

火を修して、一切に入るが故に、神通力を生じ、意に随つて種種の色光を

放ち、衆生の樂ふ所に随つて、若くは熱、若くは冷、若くは不熱不冷なり。

(五) 照諸三昧とは、光明に二種あり、一には色光、二には智慧光なり。是

の三昧の中に住すれば、諸の三昧を照らして、邪見、無明等あること無し。

(六) 力進三昧とは、先づ諸法の中に於いて、(七) 信等の五種の力を得、然る

後に諸の三昧の中に於いて、自在の力を得、又三昧に住すと雖も、而も常

に能く神通變化して諸の衆生を度す。(八) 高出三昧とは、菩薩、是の三昧に入れば、所有る福德智慧、

【三】 入法印三昧 (Savvathāriyapavveśṣamūho nāna samādhi) の義解。

【四】 三昧王安立三昧 (Sama-dhiṅṅi paṭigūḥo nāna samādhi) の義解。

【五】 放光三昧 (Kāśhippanna-kho nāna samādhi) の義解。

【六】 照諸三昧の義解。

【七】 力進三昧 (Paḍavyūho nāna samādhi) の義解。これを直譯すれば、力莊嚴三昧となるも、他書には、精力三昧に作れり。

【八】 信等の五種の力とは、信進念・定・慧の五力を用い、(八) 高出三昧 (Samuddhato nāna samādhi) の義解。直譯して等涌三昧といふべし。

皆悉く增長し、諸の三味の性、心に從つて出づ。(一)必入辯才三味とは、四無礙の中の辭辯相應の三味なり。菩薩、是の三味を得れば、悉く衆生の語言の次第を知り、及び經書、名字等、悉く能く分別して礙なし。(二)釋名字三味とは、諸法は空なりと雖も、名字を以て、諸法の義を辯じ、人をして解を得せしむ。(三)觀方三味とは、十方の衆生に於て、慈悲を以て憐愍し、平等心「を以て」觀ず。

復次に、方とは、道理に循するを名けて、方を得と爲し、是の三味の故に諸の三味に於いて、其の道理を得、出入自在無礙なり。(四)陀羅尼印三味とは、是の三味を得る者は、能く諸の三味を分別して、皆陀羅尼あることを得。(五)無誑三味とは、有る三味よ、愛、恚、無明、邪見等を生ず。是の三味は諸の三味に於いて、都て迷悶の事なし。(六)攝諸法海三味とは、一切の衆流、皆海に歸するが如く、三乘の法は皆是の三味の中に入るも、亦是の如し。又諸餘の三味は、皆是の三味の中に入ること、四禪四無色の中に、諸の解脫、九次第等を攝して、皆其の中に入るが如し。(七)遍覆虛空三味とは、是の虚空は、無量無邊なり。

- 【一】 必入辯才三味 (Zrankiti-nijapapaṃso nāma samādhi) の義解。或は之を入言詞決定三味といふ。
- 【二】 釋名字三味 (Adhiva-nipravaso nāma samādhi) の義解。或は之を等入言語三味といふ。
- 【三】 觀方三味 (Dīrīkīto nāma samādhi) の義解。
- 【四】 陀羅尼三味 (Dharmat-dro nāma samādhi) の義解。
- 【五】 無誑三味 (Asampramaso nāma samādhi) の義解。或は之を無忘失三味といふ。蓋し語根解釋の相異より來る異譯ならん。
- 【六】 攝諸法海三味 (Sarvathāna samasaraṃsagrāma-ro nāma samādhi) の義解。或は之を諸法等趣海印三味といふ。
- 【七】 遍覆虛空三味 (Ākāśa-phiravā nāma samādhi) の義解。

この三昧力は、悉く能く虚空を遍覆し、或は結跏趺坐し、或は光明を放ち、或は音聲を以て、其中に充滿す。(二六)金剛輪三昧とは、眞金剛輪の往く所、無礙なるが如く、是の三昧を得る者は、諸法の中に於いて至る所無礙なり。

復次に、能く諸の三昧の分界を分別するが故に輪と名く。輪は分界なり。(二七)斷實三昧とは、有る實の能く諸實を淨治するが如く是の三昧も亦是の如し。能く諸の三昧の煩惱の垢を除く。

五欲の垢は遣り易く、諸三昧の垢は却け難し。(二八)能照三昧とは、是の三昧を得れば、能く十種の智慧を以て、諸法を照らす。譬へば、日出で

て闇浮提を照らすに、事皆顯了なるが如し。(二九)不求三昧とは、諸法を觀すること幻化の如く、三界の愛を斷するが故に、すべて求むる所なし。

是の三昧の中に住して、諸法は念念に無常にして、住する時あること無しと觀す。(三〇)無心三昧とは、即ち是れ滅盡定、或は無想定なり。何となれば佛、自ら因縁を説かく、「是の三昧の中に入れば、諸

【二六】金剛輪三昧 (Vajraṇāna-samādhi) の義解。

【二七】斷實三昧 (Kāṅgūḥo nāna samādhi?) の義解。今この三昧の義解より考察するに、離塵三昧 (Iraṅgūḥo N. 三) と同義異語なるに似たり。

【二八】能照三昧の義解。これ恐らくは遍照三昧 (Vairavaṇāna samādhi) の異譯ならん。

【二九】不求三昧の義解。これ又

恐くは、不胸三昧 (Amūḥo nāna samādhi) の脇目も振らず、一心專向なる義より、不求と意譯せるものならんかと思惟す。

【三〇】無住三昧 (Aniketaṅgūḥo nāna samādhi) の義解。この原語を忠實に字譯すれば無相住といふべし。

【三一】無心三昧 (Anisānto nāna samādhi) の義解。或は不思惟三昧ともいふ。

言、無住三昧とは、是の三昧を無作三昧と名け、

無心三昧とは、

の心、心數法行せざればなり」と。(三)淨燈三昧とは、燈は智慧の燈に名け、諸の煩惱を垢と名く。是の

垢を離るるが故に「慧は則ち清淨なり」。(三)無邊明三昧とは、無邊は無量無數に名く。明に二種あり、

一には衆生を度するが故に、身より光明を放ち、二には諸法の總相、別相

を分別するが故に、智慧の光明かなり。是の三昧を得れば、能く十方無邊

の世界、及び無邊の世界を照らす。(三)能作明三昧とは、諸法に於いて、能

く爲に明と作ることに、闇中に炬を燃すが如し。(三)普照明三昧とは、轉輪聖

王の寶珠の、軍衆の外の四邊に於いて、各一由旬を照らすが如く、菩薩、

是の三昧を得れば、普ねく諸法の種種の門を照らす。(三)堅淨諸三昧三昧と

は、菩薩は是の三昧の力を得るが故に、諸の三昧をして、清淨堅牢ならし

む。(三)無垢明三昧とは、三解脱門相應の三昧なり。是の三昧を得れば、一

切の三昧の垢を離れ、一切の無明、愛等を離れ、亦た能く一切の諸の三昧

を照らす。(三)歡喜三昧とは、是の三昧を得れば法に於て歡喜の樂を生ず。

何者か是なる。有る人の言はく、「初禪是なり」と。佛の説きたまふ如くは、

四修定あり。一には是の三昧を修して、現在の歡喜の樂を得、二には定を

修し、知見を得て、衆生の生死を見る、三には定を修して智慧分別を得、四には定を修して、漏盡く

【三】淨燈三昧 (Vimalapradīpo nāna samādhi) の義解。

【三】無邊明三昧 (Anantaprabhā nāna samādhi) の義解。

【三】能作明三昧 (Pratīkaro nāna samādhi) の義解。或は他書には之を發光三昧ともいふなり。

【三】普照明三昧 (Samantalokeya nāna samādhi) の義解。

【三】堅淨諸三昧三昧 (Suddhasiro nāna samādhi) の義解。

【三】無垢明三昧 (Vimalaprabhā nāna samādhi) の義解。

【三】歡喜三昧 (Kṛtikāro nāna samādhi) の義解。

ることを得るなり。

復次に是の三昧を得れば無量無邊の法、歡喜の樂を生ず。【三】電光三昧とは、電の暫く現すれば、行者路を得るが如く、是の三昧を得れば、無始世界より來た、道を失して還た得。【四】無盡三昧とは、

是の三昧を得れば諸法の無常等の相を滅して、即ち不生不滅に入るなり。

【四】威徳三昧とは、菩薩、是の三昧を得れば威徳をもて莊嚴す。【四】離盡三

昧とは、菩薩、是の三昧を得れば、無量阿僧祇劫の善本功德を必ず得。【五】

【五】果報は失せざればなり。不動三昧とは、有る人の言はく、第四禪は是

れ不動なり。欲界の中は、五欲の故に動き、初禪の中は、覺觀の故に動き、

二禪の中は、喜多きが故に動き、三禪の中は、樂多きが故に動き、四禪は

出入の息を離れ、諸の動相無きが故に動かずと。有る人の言はく、四無色

定は是れ不動なり、【六】諸色を離るればなりと。有る人の言はく、滅盡

定は是れ不動なり、【七】心心數法を離るればなりと。有る人の言はく、諸法實相よは畢竟空なりと知

るの智慧は、三昧に相應するが故に不動なり。是の三昧を得已れば、一切の三昧、一切の法に於いて、

都べて戲論せずと。【八】不退三昧とは、是の三昧に住すれば諸の三昧より退くを見ず。論者の言はく、

菩薩、是の三昧に住すれば、常に退轉せず。即ち是れ阿鞞跋致、智慧相應の三昧なり。退せずとは、

- 【九】 電光三昧 (Vidyutpradipō nāma samādhi) の義解。
- 【一〇】 無盡三昧 (Akṣayo nāma samādhi) の義解。
- 【一一】 威徳三昧 (Tejovati nāma samādhi) の義解。
- 【一二】 離盡三昧 (Kṣayaparaceti nāma samādhi) の義解。
- 【一三】 不動三昧 (Aniṣṭo nāma samādhi) の義解。

頂より墮せざるなり。頂より墮せざる義の中に説くが如し。日燈三昧とは、是の三昧を得れば、能く一切諸法の種種の門、及び諸の三昧を照らすこと、譬へば日の出でて能く一切の闇淨提を照らすが如し。月淨三昧とは、月の十六日より漸漸に滅じ、三十日に至りて都て盡くるが如く、凡夫の人も亦是の如し。諸善の功德漸漸に滅じ、盡きて三惡道に墮す。月の一日より漸漸に增長し、十五日に至りて、光明清淨なるが如く、菩薩も亦是の如し。是の三昧を得れば、發心より來た、世世に漸く善根を増し、乃ち無生法忍の受記を得るに至り、智慧清淨にして、衆生を利益し、又能く諸の三昧の中の無明を破す。淨明三昧とは、明を慧と名づけ、垢を礙と爲す。是の三昧を得れば、諸法に於て障礙なし。

是を以ての故に、佛は此に於て、「是の三昧の中に住すれば、四無礙智を得」と説きたまへり。問うて曰く、佛は何を以てか獨り此の中に於いて、四無礙智を説きたまひしや。答へて曰く、三昧の中に於いて、覺觀の心なく、樂説すべき所、定と相違す。是の事を難と爲す。此の三昧の力の故

- 【四四】 不退三昧の義解。
- 【四五】 頂より墮せず。頂とは、佛道修行の階級の一にして、達したる状をば、山の頂上に譬へたるなり。蓋し山頂が進退の兩際に在るが如く、此の頂位まで達せる人は、進んで聖者の位に昇るか、退いて或は下位の人となり、或は無間地獄の業を作りて、地獄に墮するか、兩者の中間に位するなり。然るに頂より墮せずと云へば、進んで聖者、佛位の位迄も昇る人と知るべし。
- 【四六】 日燈三昧 (Suryapadho nam samadhi) の義解。
- 【四七】 月淨三昧 (Ganarapadho nam samadhi) の義解。
- 【四八】 淨明三昧 (Sudhapanthirō nama samadhi) の義解。或は之を發明三昧、又は淨光三昧ともいふ。
- 【四九】 第一問、佛が此の中に於て四無礙智を説き給ひたる理由如何。

に、四無礙智を得。四無礙智の義は、先に説くが如し。能作明三昧とは、諸智慧の中にては、般若の智慧は最も第一なり。是れ般若相應の三昧なり。是の三昧力を得れば、能く先に得る所の諸の三昧を發起す。知相三昧とは、是の三昧を得れば、一切の諸の三昧の中に、實智慧の相あることを見る。如金剛三昧とは、是の三昧を得れば、實慧を以て、能く一切の諸法に通達し、亦た通達を見ず。「そは」無所得を用つての故なり。

問うて曰く、三種の三昧は何を以てか皆金剛と言ふや。答へて曰く、初には金剛と言ひ、中には金剛輪と言ひ、後には如金剛と言ふ。如金剛三昧とは、佛説きたまはく、「能く一切の諸法を貫穿し、亦是を見ず」と。金剛三昧は、能く諸の三昧に通達す。金剛輪三昧は、是の三昧を得れば、即ち能く諸の三昧の輪を持すと。是れ皆佛自ら説きたまへる義なり。論者は言く、「如金剛とは、能く一切の諸の煩惱、結使を破して、遺餘あること無し。譬へば、釋提桓因の、手に金剛を執りて、阿修羅の軍を破るが如し。即ち是の學人の末後心は、是の心に從つて、次第に三種の菩提を得。菩提と、佛の無上菩提となり。金剛三昧とは、能く一切の諸法を破して、無餘涅槃に入り、更に有を

明は即ち是れ智慧なり。能作明 作行三昧とは、

【五〇】 能作明三昧 (Alokakaro nana samadhi) の義解。或

は之を所應作三昧ともいふ。

【五一】 作行三昧 (Katakrato nama samadhi) の義解。

【五二】 知相三昧 (Jñānā'etur nā na samadhi) の義解。普通

には知相を智相に作る。

【五三】 如金剛三昧 (Vajrapānu rama samadhi) の義解。或

は之を金剛喻三昧ともいふ。

【五四】 第二問、三種の三昧を皆金剛といふ理由如何。

【五五】 金剛三昧と、金剛輪三昧と、如金剛三昧との相異。

聲聞の菩提と、辟支佛の

受けず。譬へば、眞の金剛は、能く諸山を破し、滅盡して餘なからしむるが如し。金剛輪とは、此の三昧は、能く一切の諸法を破して、遮なく礙なし。譬へば、金剛輪の轉する時、破せざる所なく、障礙せらるること無きが如し。

復次に初には金剛、二には金剛輪、三には如金剛なり。名字分別するに、佛の其の義を説きたまふことも亦た異なり、論者の其の因縁を釋するも、亦た異なれり、難を致すべからず。心住三昧とは、

心相は輕疾にして、遠く逝ぎ、形なく、制し難く、持し難し、常に是れ動相なり。彌猴の子の如く、又掣電の如く、亦た蛇舌の如し。是の三昧を得るが故に、能く攝して住せしめ、乃至天の欲心も動轉せざるなり。何に況んや人の欲をや。普明三昧とは、是の三昧を得れば、一切の法に於て、光明の相を見て、黒闇の相なく、晝の所見の如く、夜も亦た是の如し。如し前を見、後を見るも亦爾なり。如し上を見、下を見るも亦た爾なり。心中にも無礙なり。是の三昧を修するが故に天眼通を得、普く光明を見て了了にして無礙なり。善く是の神通を修するが故に慧眼を成ずるとを得、普く諸法を照らし見る所無礙なり。安立三昧とは、是の三昧を得る者は、一切の諸の功德、善法の中に安立して牢固なると、須彌山の大海に在りて、安立不動なるが如し。

- 【善】 心住三昧 (Cittasthirāna-samādhi) の義解。
- 【毛】 普明三昧の義解。
- 【天】 安立三昧 (Supraśithina-nāna-samādhi) の義解。
- 【无】 寶聚三昧 (Ratnakotrāna-samādhi) の義解。

寶聚三昧とは、是の三昧を得れば、有ゆるの國土悉く七寶と成る。

問うて曰く、(三〇)此は是れ肉眼の見る所なりや、禪定の見る所なりや、答へて曰く、天眼、肉眼は皆能く見る。何となれば、外の六塵は不定なるが故なり。行者は常に禪定を修習す、是の故に能く本相を轉ず。(六一)妙法印三昧とは、妙法は諸佛菩薩の深功德と智慧とに名く。是の三昧を得れば、諸の深妙の功德と智慧を得。(三三)法等三昧とは、(三二)等に二種あり、衆生等と法等となり。法等相應の三昧を名けて、法等と爲す。(三四)斷喜三昧とは、是の三昧を得れば、諸法の無常、苦、空、無我、不淨等を觀じ、心に厭離を生ず。十想中の一切世間不可樂想に相應する三昧なり。(三五)到法頂三昧とは、法は菩薩法、所謂六波羅蜜(多)に名け、到は、般若波羅蜜(多)中に方便を得るの力にして、法山の頂に到るなり。是の三昧を得れば、能く是の法山の頂に住し、諸の無明煩惱、動搖すると能はず。(三六)能散三昧とは、是の三昧を得れば能く諸法を破散す。散空相應の三昧是なり。(三七)分別諸法句三昧とは、是の三昧を得れば、能く一切諸法の語言字句を分別し、衆生の爲に説いて、辭に滯礙なし、樂説相應三昧是なり。(三八)字等相三昧とは、

- 【三〇】 第三問、此はこれ肉眼の見る所なるか、禪定の見る所なるか。
- 【六一】 妙法印三昧 (Vaidharmanandro nāma samādhi) の義解。
- 【三三】 法等三昧 (Savyadharmasamānta nāma samādhi) の義解。
- 【三五】 二種の等(一)衆生等と、(二)法等。(一)は衆生の平等なるをいひ、(二)は法、即ち萬有の平等なるをいふ。
- 【三六】 斷喜三昧 (Ratīhalo rāma samādhi) の義解。
- 【三二】 到法頂三昧 (Dharmodeśato rāma samādhi) の義解。
- 【三四】 能散三昧 (Vikīraṇo nāma samādhi) の義解。
- 【三七】 分別諸法句三昧 (Sarvadharmapadapabhiccho nāma samādhi) の義解。
- 【三八】 字等相三昧 (Samāntakāravakāro nāma samādhi) の義解。

是の三昧を得れば、諸字諸語を觀するに、皆悉く平等にして、呵罵讚歎する、憎愛あること無し。(五)

離字三昧とは、是の三昧を得れば、字の義中に在るを見ず、また義の字中に在るを見ず。

【七〇】斷縁三昧とは、是の三昧を得れば、若くは内、若くは外、樂の中に喜を生ぜず、苦の中に瞋を生ぜず。不苦不樂の中に「於て」捨心を

生ぜず。此の三受に於いて、遠離して著せず、心則ち歸滅す。心若し滅す

れば、縁も亦た斷ず。【七一】不壞三昧とは、法性を緣じ、畢竟空に相應する三

昧にして、戲論も破すること能はず、無常も轉すること能はず。先づ已に

壞するが故なり。【七二】無種相三昧とは、是の三昧を得れば、諸法の種種の相

を見ず。但一相、所謂る無相を見る。【七三】無處行三昧とは、是の三昧を得

ば、三毒の火の、三界に燃ゆることを知るが故に、心依止せず、涅槃は畢

竟空なるが故に、亦た依止せざるなり。【七四】離朦昧三昧とは、是の三昧を得

れば、諸の三昧の中に於いて、微翳無明等、悉く皆除き盡く。【七五】無去三昧

とは、是の三昧を得れば、一切の諸法を觀するに、因は變せずして果と爲

ること、乳の變せずして酪と作るが如し。諸法は皆自相に住して、動せざ

るが故なり。【七六】度縁三昧とは、是の三昧を得れば、六塵の中に於いて、諸の煩惱盡滅し、六塵の大海

【六九】離字三昧 (Aksarāṅgato nāma samādhi) の義解。

【七〇】斷縁三昧 (Aranāyaka-chedana nāma samādhi) の義解。

【七一】不壞三昧 (Avikāro nāma samādhi) の義解。

【七二】無種相三昧 (Aprakāro nāma samādhi) の義解。

【七三】無處行三昧 (Aniketvāri nāma samādhi) の義解。

【七四】離朦昧三昧 (Tinitāpāto nāma samādhi) の義解。

【七五】無去三昧の義解、これ又無變異三昧 (Avikāro nāma samādhi) の義解ならん。

【七六】度縁三昧 (Vīṣayāṅga nāma samādhi) の義解、或は斷所縁三昧ともいふ。

【七六】度縁三昧とは、是の三昧を得れば、六塵の中に於いて、諸の煩惱盡滅し、六塵の大海

を度り、亦た能く一切の三昧を過ぎ、智慧を縁生す。(七) 集諸功德三昧とは、是の三昧を得れば、諸の

功德を集め、信より智慧に至り、初夜、後夜、修習して息まざることに、日月の運轉して、初より休息せざるが如し。住無心三昧とは、是の三昧の中に入れば、心に隨はず但智慧に隨ひ、諸法實相の中に至りて住す。(七) 淨

妙華三昧とは、樹華の敷開して、樹をして嚴飾ならしむるが如く、是の三昧を得れば、諸の三昧の中に、諸の功德の華を聞き、以て自ら莊嚴す。(六)

覺意三昧とは、是の三昧を得れば、變じて無漏と成り、七覺と相應せしむ。譬へば、石汁一斤(を以て)、能く千斤の銅を變じて、

金と爲すが如し。無量辯三昧とは、即ち是れ樂說辯なり。是の三昧の力を得るが故に、乃ち一句を樂說し、無量劫にして、而も窮盡せざるに至る。

(八) 無等等三昧とは、是の三昧を得れば、一切の衆生を觀すると、皆佛の如く、一切法を觀するに、皆同じく佛法にして、無等等なり。般若波羅蜜

【多】相應(即ち)是なり。度諸法三昧とは、是の三昧を得れば、三解脱門に入りて三界を過出し、三乘の衆生を度し、諸法を分別す。三昧とは、即

ち是れ分別慧相應の三昧なり。是の三昧を得れば、諸法の善、不善、有漏、無漏、有爲、無爲等の相

【七】 集諸功德三昧 (Sarvaṅga-puṇyapaṅkato nāna samādhi) の義解。

【七】 住無心三昧 (Sthitavasthitō nāna samādhi) の義解。

【七】 淨妙華三昧 (Śubhapaṅkato nāna samādhi) の義解。

【六】 覺意三昧 (Bodhyaṅkavati nāna samādhi) の義解。或は之を具覺支三昧ともいふ。

【八】 無量辯三昧 (Anantapātibhāno nāna samādhi) の義解。

【八】 無等等三昧 (Asaṃvamaṇa samādhi) の義解。

【八】 度諸法三昧 (Sarvaḥśarīrānāma samādhi) の義解。

【八】 度諸法三昧 (Sarvaḥśarīrānāma samādhi) の義解。

を分別す。(八) 散疑三昧とは、有る人の言はく「即ち是れ見諦道中の無相三昧なり。疑結は見諦智相應の三昧の斷なるが故なり」と。有る人の言はく「菩薩の無生法忍相應の三昧是なり。是の時一切法中の疑網悉く斷じ、十方の諸佛を見たてまつり、一切諸法の實相を得」と。有る人の言はく「無礙解脱相應の三昧是なり。諸佛は是の三昧を得已つて、諸法の中に於て、礙なく、近きことなく、遠きこと無く。皆掌中を觀るが如し」と。(九) 無住處三昧とは、即ち是れ無受智慧相應の三昧なり。是の三昧を得れば、一切諸法の定んで住處あることを見ず。(一〇) 一莊嚴三昧とは、是の三昧を得れば、諸法は皆一なりと觀す。或は一切法は、有相なるが故に一なり。或は一切法は、無なるが故に一なり。或は一切法は、空なるが故に一なり。是等の如く、無量は皆一なり。一相の智慧を以て、是の三昧を莊嚴するが故に、一莊嚴と言ふ。(一一) 生行三昧とは、行は觀に名く。是の三昧を得れば、能く種種の行相、入相、住相、出相を觀じ、又是の行も皆空にして、見るべからず。(一二) 一行三昧とは、是の三昧は常に一行にして、畢竟空相應の三昧の中には、更に餘行の次第、「例へば」無常行の中には、次に苦行あり、苦行の中には、次に無我行あるが如きこと無し。又菩薩は是の三昧に於いて、此の岸を見ず、彼の岸を見ず、諸の三昧の入相を此岸と爲し、出相を彼岸と爲す。初めて得る相を此岸と爲し、滅相

- 【四】 散疑三昧 (Vimativikira-  
yo nama samādhi) の義解。
- 【五】 無住處三昧 (Niradha-  
tāno nama samādhi) の義  
解。
- 【六】 一莊嚴三昧 (Ekavyūho  
nāma samādhi) の義解。
- 【七】 生行三昧の義解。この原  
語は未だ檢出せず。
- 【八】 一行三昧 (Ekāṅkaro nāma  
samādhi?) の義解。

を彼岸と爲す。(九八) 不行三昧とは、上の一行(三昧と)相違する者も是なり。所謂諸餘の觀行なり。(九九) 妙行三昧とは、即ち是れ畢竟空相應の三昧なり。乃ち不二の相をも見ざるに至り、一切の戲論も破すること能はず。(一〇〇) 達一切有底散三昧とは、有とは三有に名け、底とは非有想非無想にして、到り難きを以ての故に、底と名け。達とは無漏の智慧を以て、乃至非有想非無想を離れ、無餘涅槃に入りて三界五衆散滅するなり。

復次に、菩薩は是の不生不滅の智慧を得て、一切諸有に通達し、散壞して、皆所有なし。(一〇一) 入名語三昧とは、是の三昧を得れば、一切の衆生、一切の物、一切の法の名字を識り、亦た能く此の名字語を以て人を化し、一切の語言を解了せざること無く、皆次第あり。(一〇二) 離音聲字語三昧とは、是の三昧を得れば、一切諸法を觀するに、皆音聲語言なく、常に寂滅の相なり。(一〇三) 燃炬三昧とは、炬を捉つて夜行けば、險處に墮せざるが如く、菩薩はこの三昧を得れば、智慧の炬を以てして、諸法の中に錯なく、著すること無し。(一〇四) 淨相三昧とは、是の三昧を得れば、能く清淨にして、三十二相を具足し莊嚴す。又能く如法に、諸法の總相別相を觀じ、亦た能く諸法の無

いはゆるしよよ 所謂諸餘の觀行なり。(九九) 妙

【九八】 不行三昧 (Anekāraṇa nāna samādhi) の義解。或

は Akāraṇavakāro 離行相の異譯ならんか。

【九〇】 妙行三昧 (Sūcarito nāna samādhi) の義解。

【九一】 達一切有底散三昧 (Nirvedhīkāravāḥaravāta'opar-tonāna samādhi) の義解。

【九二】 入名語三昧 (Nāmanīya-taprayaso nāna samādhi) の義解。

【九三】 離音聲字語三昧 (Nirho-sākṣaravimukto nāna samādhi) の義解。

【九四】 燃炬三昧 (Jvalanoko nāna samādhi) の義解。

【九五】 淨相三昧 (Takṣanapariso-dhano nāna samādhi) の義解。

相清淨、所謂る空、無相、無作を觀ず。相品の中に廣く説くが如し。破相三昧とは、是の三昧を得れば、一切の法相を見ず、何に況んや諸の三昧の相をや。即ち是れ無相三昧なり。一切種妙足三昧とは、是の三昧を得れば、諸の功德を以て具足し莊嚴す。所謂好姓、好家、好身、好眷屬、禪定、智慧、皆具足して清淨なり。不喜苦樂三昧とは、是の三昧を得れば、世間の樂の過多く、患多く、虛妄顛倒にして、愛樂すべきに非ずと觀じ、世間の苦は、病の如く、箭の身に入るが如しと觀じ、心に喜樂せず、一切の法は、虛誑なるを以ての故に、其の樂を求めず。何となれば異時に變じて苦となる、樂すら尙ほ喜ばず、何に況んや苦に於いてをや。無盡相三昧とは、是の三昧を得れば、一切の法を觀するに壞すること無く盡くること無し。

問うて曰く、若し爾らば云何が常邊に墮せざるや、答へて曰く、如し菩薩は、無常を觀ずと雖も滅中に墮せず。若し不盡を觀するも常中に墮せず。此の二相は諸法の中に於て、皆不可得なり。因縁あるが故に修行す。所謂る罪福を失せざるが爲の故に常と言ひ、著を離るるが故に無常と言ふ。(101) 陀

- 【九六】 破相三昧 (Anabhikṣito-nāma samādhi) の義解。或は無標識三昧と譯する方妥當ならん。
- 【九七】 一切種妙足三昧 (Sarvāṅga-pratyopeto nāma samādhi) の義解。
- 【九八】 不喜苦樂三昧 (Svaya-khulūkhararūhinandi nāma samādhi) の義解。具には、之を不喜一切苦樂三昧
- 【九九】 無盡相三昧 (Akṣayakṛāṇḍya nāma samādhi) の義解。或は之を無盡行相三昧といふ。
- 【一〇〇】 第四問、若し爾らば、云何が常邊に墮せざるか。
- 【一〇一】 陀羅尼印三昧 (Dhāraṇī-mūdro) ？ 或は Dhāraṇītrī nāma samādhi) とすれば、總持慧三昧といふべし。

問うて曰く、若し爾らば云何が常邊に墮せざるや、答へて曰く、如し菩薩は、無常を觀ずと雖も滅中に墮せず。若し不盡を觀するも常中に墮せず。此の二相は諸法の中に於て、皆不可得なり。因縁あるが故に修行す。所謂る罪福を失せざるが爲の故に常と言ひ、著を離るるが故に無常と言ふ。(101) 陀

羅尼印三昧とは、是の三昧力を得るが故に、聞持等の諸の陀羅尼、皆自然に得。【101】攝諸邪正相三昧とは、是の三昧を得れば、三聚の衆生、謂ゆる正定、邪定、不定を見ず、都べて棄つる所なく、一心に攝取す。又諸法に於て、定まれる正相、定まれる邪相を見ず。諸法に定相なきが故なり。【102】滅憎愛三昧とは、是の三昧を得れば、喜ぶべき法の中にも愛を生ぜず、惡むべき法の中にも瞋を生ぜざるなり。【103】逆順三昧とは、是の三昧を得れば、諸法の中に於て、逆順自在にして、能く諸の邪逆の衆生を破し、能く順じて衆生を化すべく、又著を離るるが故に、一切の法を破し、善根增長するが故に、一切の法を成じ、亦た諸法の逆順を見ず、是の事も亦た見ず。所有なきを以ての故なり。【104】淨光三昧とは、是の三昧を得れば、一切法の中の諸の煩惱の垢は不可得なり。不可得なるが故に、諸の三昧は皆清淨なり。【105】堅固三昧とは、有る人の言はく、「金剛三昧は是れ堅固にして壞せざるが故なり」と。有る人の言はく、「金剛三昧は是非なり。何となれば金剛も亦破し易ければなり。是の諸法實相の智相應の三昧は破すべからざると虚空の如し。是を以ての故に、牢固と言ふ」と。【107】滿月淨光三昧とは、是の三昧を得

【101】攝諸邪正相三昧 (Samyakt-kāramitīyāva sarvasaṅgāhanantīnaśamādhi) の義解。

或は之を攝一切正性邪性三昧といふ。

【102】滅憎愛三昧 (Anuśāpāpāśirodho nīna śamādhi) の義解。或は之を離憎愛三昧ともいふ。

【103】逆順三昧 (Suryaodhāvirodhāsaniprākāmanso nāma śamādhi) の義解。或は之を靜息一切逆順三昧といふ。

【104】淨光三昧 (Vimalaprabho nāna śamādhi) の義解。或は之を無垢光三昧ともいふ。

【105】堅固三昧 (Sāravatī nāma śamādhi) の義解。或は之を具堅固三昧といふ。

【107】滿月淨光三昧 (Pāradur-mācandravinalaprabho nāma śamādhi) の義解。或は之を滿月光三昧といふ。

れば、言ふ所清淨にして、諸の錯謬なし。秋時の虚空清淨にして、月滿ち、光明涼しく、樂を樂むべく、諸の惡むべきこと無きが如く、菩薩も亦た是の如し。諸の功德を修するが故に、月滿ちて無明の黒闇を破するが如くなるが故に、淨智光明を具足して、愛恚等の火を滅するが故に、清涼の功德を具足し、大に衆生を利益するが故に、樂しむべし。大莊嚴三昧とは、十方如恆河沙等の世界を見るに、七寶の華香を以て、佛處を莊嚴し其の中に是の如き等の清淨なる莊嚴あり。是の三昧を得るが故に、一時に諸の功德を莊嚴す。又此の莊嚴を觀するに、空にして所有なく、心に著する所なし。能照一切世三昧とは、是の三昧を得るが故に、能く三種の世間、(即ち)衆生世間、住處世間、五衆世間を照らす。三昧等三昧とは是の三昧を得れば、諸の三昧を觀するに皆一等なり。所謂る心相を攝す。是の三昧は皆因縁より生ず、有爲作法にして深淺なし。是の三昧を得れば皆悉く平等なり。是を名けて等と爲す。餘法與に亦た等うして異なることなし。是を以ての故に義中に設けり。「一切法中に定亂の相は不可得なり」と。攝一切有諍無諍三昧とは是の三昧を得れば是の法の如是の相、是の法の不如是の相を見ず。諸法の有諍、無諍を分別せず。一切法の中に於いて通達無礙なり。衆生の中に於いても、亦た好醜、

【109】大莊嚴三昧 (Mahāvīra-ho nāma samādhi) の義解。

【108】能照一切世間三昧 (Sarvākāmapahātāro nāma samādhi) の義解。

【110】三昧等三昧 (Samāhīsamantā nāma samādhi) の義解。或は此を定平等性三昧といふ。

【111】攝一切有諍無諍三昧 (Araṇsa upakāyasmimvasarino nāma samādhi) の義解。或は之を有諍無諍等趣三昧ともいふ。

諍論なく、但衆生の心行に随つて、是を度脱す。是の三昧を得るが故に、諸の三昧に於いて、皆隨順して逆はざるなり。(二三) 不樂一切住處三昧とは、是の三昧を得れば、世間に住することを樂しまず、非世間に住することを樂しまず。世間は無常の過を以ての故に、樂しまず。非世間の中には、一切法なく、是れ大に畏るべき處にして、樂を生ずべからず。(二三) 如住定三昧とは、是の三昧を得るが故に、一切法の如實相を知り、法として是の如を過ぐる者あるを見ず。如の義は先に説くが如し。(二四) 壞身衰三昧とは、血肉筋骨等相合するが故に、名けて身と爲す。是の身は患多く、常に飢寒冷熱等の諍あり、是を身衰と名く。是の三昧を得るが故に、智慧の力を以て、分分に身衰の相を破壞し、乃至不可得の相をも見ざるなり。(二五) 壞語如虛空三昧とは、語は内に名く。風の發して、七處に觸るるが故に聲あり、聲に依るが故に語あるなり。是の如く、語言の因縁を觀するが故に、能く語言を壞し、我相及び愛憎を生ぜず。有人言ふ、「二禪に覺觀なし、是れ壞語三昧なり。賢聖は默然たるが故なり」と。有人は言ふ「無色定三昧なり。彼の中に身なく、一切の色を離るるが故なり」と。有人は言ふ「但是れ諸の菩薩の三昧にして、能く先世の結業の因縁を破す。不淨身にして、而も法身を

【二三】 不樂一切住處三昧 (Ani-lambhānīkacārināto nāma samāhi) の義解。  
 【二四】 如住定三昧 (Pūṭhasthi-tanīśāto nāma samāhi) の義解。具さには之を決定安住眞如三昧。  
 【二五】 壞身衰三昧 (Kāyasapparamahanonāma samāhi) の義解。或は之を離身穢惡若くは減身穢惡三昧といふべし。

【二五】 壞語如虛空三昧 (Yakkā-ḍḍivādi vāṇasaṅgā mākalpo nāma samāhi) の義解。或は之を離語穢惡三昧ともいふ。具さには壞語穢惡如虛空三昧といふべし。

受け、度すべき衆生に隨つて、種種に形を現すと。離著虚空不染三昧とは、菩薩は般若波羅蜜  
 「多」を行じ、諸法の畢竟空を觀するに、不生不滅にして虚空の如く、物として喩ふべき無きが如し。  
 鈍根の菩薩は、此の虚空に著し、此の三昧を得るが故に、虚空等の諸法に著することを離れて、亦た  
 是の三昧に染著せず。人の没して泥中に在るに、人あり、鑢脚を挽き出して、奴と爲すが如く、三昧  
 あり、能く虚空に著することを離れ、而も復た此の三昧に著するも、亦是  
 の如し。今是の三昧は、能く空空に著することを離れ、亦た自から著を離  
 るるなり。

問うて曰く、(二七)佛は多く諸の三昧を説きたまへり。汝は何を以てか但諸  
 法のみを説くや。答へて曰く、佛は多く果報を説きたまひしに、論者は因  
 縁と果報とを合して説けり。譬へば、人の身不淨を觀じて、不淨三昧を得  
 るが如し。身は是れ因縁、三昧は是れ果なり。又人の五衆の無常、苦空等  
 を觀じて、七覺意三昧を得、能く八聖道、四沙門の果を生ずるが如し。

復次に、佛は衆生に應適するが故に、但一法のみを説きたまへり。論者は廣く説いて、諸事を分別  
 す。譬へば、一切の有漏は、皆是れ苦の因なり。而も佛は但た愛を説きたまへり。一切の煩惱の滅す  
 るを滅諦と名く。佛は但た愛の盡くるを説きたまひしが如し。是の菩薩は、諸の觀行の中に於いて、

【二六】離著虚空不染三昧(二七)中  
 sasānigavinīkaṅkūṇīṇīyapalepo  
 nama sūnīdhi)の義解。或は  
 之を無染著如虚空三昧ともい  
 ふ。具さには、如空空無著解  
 脫無染三昧と譯すべし。  
 【二七】第五問、佛は多く諸の三  
 昧を説き給ひしに、汝は何故  
 に但諸法のみを説くか。

必ず諸の三昧を疑はず、「それは」未だ了せざるが故なり。佛は但三昧を説きたまひしに、論者は諸法を説けり。一切の三昧は、皆已の中に在り。是の諸の三昧の末後には、皆應に、「無所得を用つて」と言ふべし、「それは」般若に同じきを以ての故なり。是等の如く、無量無邊の三昧の和合するをば、名けて摩訶衍と爲す。

# 卷の第四十八

## 四念處品第十九を釋す。

佛、須菩提に告げたまはく、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る四念處なり。何等をか四となす。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、  
 内身中、身に循つて觀するに、亦た身覺なし。勤めて精進して一心に世間の食憂を除く。内受、  
 身覺なし。不可得なるを以ての故なり。勤めて精進して一心に世間の食憂を除く。内受、  
 内心、内法、外受、外心、外法、内外受、内外心、内外法、法に循つて觀するに、亦た  
 法覺なし。不可得なるを以ての故なり。勤めて精進して一心に世間の食憂を除く。須菩  
 提よ、菩薩摩訶薩は、云何が内身中、身に循つて觀するや。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩  
 は行する時、行を知り、住する時は住を知り、坐する時、坐を知り、臥する時、臥を知  
 り、身の所行の如く、是の如くに知る。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の如く、内身中、身に循つて觀じ、勤めて精進して、  
 一心に世間の食憂を除く。不可得なるを以ての故なり。  
 復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若くは來り、若くは去るも、視聽一心なり。屈伸し、俯仰し、僧伽梨を服し、衣鉢を  
 執持し、飲食し、臥息し、坐立し、睡覺し、語默し、禪に入り、禪より出づるも、亦た常に一心なり。是の如く、須菩提よ、  
 菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、内身中、身に循つて觀す、不可得なるを以ての故なり。

【一】 他本には、此の品名を廣  
 乘品といふ。此の品には、先  
 づ四念處に就て、大乘を辨じ、  
 次に他の道品、即ち修行の階  
 梯たる、三三昧、十一智等に  
 就て述ぶ。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身に循つて觀する時、一心に念じ、入息の時、入息を知り、出息の時、出息を知り、入息長き時、入息の長きを知り、出息長き時、出息の長きを知り、入息短き時、入息の短きを知り、出息の短きを知り、入息の短きを知る。譬へば、旋師、若くは旋師の弟子の、繩長ければ、長きを知り、繩短ければ、短きを知るが如し。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、一心に念じて、入息の時、入息を知り、出息の時、出息を知り、入息長き時、入息の長きを知り、出息短き時は、入息の短きを知り、入息の短きを知る。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身中、身に循つて觀し、勤めて精進して一心に世間の貪愛を除く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、身の四大を觀じて是の念を作す。「身中に地大、水大、火大、風大あり」と。譬へば、屠牛師、若くは屠牛(師)の弟子の、刀を以て牛を殺し、分ちて四分と作し、四分と作し已りて、若くは立ち、若くは坐して、此の四分を觀するが如し。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、嚴若波羅蜜(多)を行する時、身の四大、(乃ち)地大、水大、火大、風大を觀す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身中、身に循つて觀す。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身を觀じ、足より頂に至るまで、薄皮を周布し、種種の不淨、身中に充滿す。是の念を作す、「身中に、髮毛、爪齒、薄皮、厚皮、筋肉、骨髓、脾胃、心臓、肝肺、小腸、大腸、胃脘、尿管、垢汗、淚涕、涎唾、膿血、黃白瘡、肪膈、膈膜あり」と。譬へば、田夫の倉中に、隔てて雜穀を盛り、種種の稻、麻、黍、粟、豆、麥を充滿せんに、明眼の人は、倉を開けば、即ち、是は麻、是は黍、是は稻、是は粟、是は麥なりと知り、分別して悉く知るが如し。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、是の身は、足より頂に至るまで、薄皮を周圍して、種種の不淨、身中に充滿す。髮毛爪齒より、乃至膈膜を觀す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身を觀じ、勤め精進して、一心に世間の貪愛を除く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、一日、二日、五日に至り、臃脹し、青瘀し、膿汁の流出するを見て、自ら念すらく、「我が身も亦是の如きの相、是の如きの法なり。未だ是の法を脱せず」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身中、身に循つて觀じ、勤め精進して、一心に世間の貪愛を除く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、若くは六日、若くは七日にして、烏鴉、鴟、豺狼、狐、狗、是の如き等の種種の禽獸、鬪み裂きて之を食ふを見て、自ら念すらく、「我が身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此の法を脱せず」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身中、身に循つて觀じ、勤め精進して、一心に世間の貪愛を除く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、禽獸食し已り不淨臭なるを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此の法を脱せず」と。乃至世間の貪愛を除く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、骨鑊、血肉塗染し、筋肉相連なるを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此の法を脱せず」と。乃至世間の貪愛を除く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、骨鑊、血肉已に離れ、筋骨相連なるを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此の法を脱せず」と。乃至世間の貪愛を除く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、骨鑊已に散じて地に在るを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此の法を脱せず」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身を觀じ、乃至世間の貪愛を除く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、若し棄てられたる死人の身の、骨散じて地に在り、跏骨、胫骨、腰

骨、肋骨、脊骨、手骨、頂骨、髓髓各各處を異にするを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり。未だ此の法を脱せず」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身を觀じ、乃至世間の貪要を除く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の棄てられたる死人の骨、地に在ること歳久しく、風吹き日曝し、色白くして貝の如きを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此の法を脱せず」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、内身を觀じ、乃至世間の貪要を除く。不可得なるを以ての故なりと。

論 問うて曰く、三 四念處の中には、種種の觀あり。何を以てか但十二種の觀、所謂若くは内、若くは外、若くは内外を説くや。

復次に、何等か是れ内なる、何等か是れ外なる。内外觀已りて、何を以てか復た次に別に内外を説くや。

復次に、四念處中の一念處は是れ内なり、内法の中に攝す。所謂の心なり。二念處は是れ外なり、外法の中に攝す。所謂の受と法となり。一念處は是れ内外なり。内外の法中に攝す。所謂の身なり。何を以てか四法を説けば、すべて是れ内、すべて是れ外、すべて是れ内外なるや。何を以てか

【一】 第一問、四念の中には、種種の觀あり、何故に但だ十二種の觀を説くか。  
二念處とは、(一) 身體は不淨なりと觀じ、(二) 受即ち感覺的快樂は、畢竟するに苦の本なりと觀じ、(三) 吾人の心は、念念に新陳代謝し、刹那刹那に生滅相續して、無常變遷毫も停止するものにあらずと觀じ、(四) 法、即ちそが精神的なるにせよ、物質的にせよ、客觀的對象は、一として常住の本體の認むべき物なし即ち無我と觀す。此の故に是の四種の觀法のうち、心は内法的の法といふべく、受(感覺)と法(客觀的對象)は、外的の法といふべく、身は内外を兼ねたるものといふべきなり。

但ただ身みを觀くわんずと言いはずして、而しかも身みに循したがつて觀くわんずと言いふや。云いかんが身みを觀くわんじて、而しかも身み覺かくを生しやうぜざるや。何なにを以もつてか勤つとめて精しやうじん進じんすると一心しんなりと言いふや。四し三十七品皆應みなまさに一心しんと言いふべし、何なにを以もつてか但た此たの中に一心しんと言いふや。此この中に若わかし四念處ねんじよを修行しゆぎやうする時は、一切いっさいの五蓋ごがいは應まさに除のぞくべし。何なにを以もつてか獨ひとりり（云）貪こんを除のぞくと言いふや。世間せけんの喜きも亦また能よく道だうを妨さまたぐ、何なにを以もつてか但ただ憂うを除のぞくと言いふや。身法しんぽうを觀くわんするに、種種しゆじゆの門もんあり。無む常じやう、苦く、空くう、無我むが等とうなり。今いま何を以もつてか但ただ不淨じやうと言いふや。若わかし但ただ不淨じやうのみを觀くわんせば、何なにを以もつてか復またた身みの四威儀等ふじぎとうを念ねんするや。此この事ことは知しり易やすし、何なんぞ問とふに足たらん。答こたへて曰いはく、是この十二種じふにしゆの觀くわんは、行者ぎやうじやは此これに從したがつて定心ぢやうしんを得う。先まづ三種さんしゆの邪行じやぎやうを來きたし、若わかくは内ない、若わかくは外げ、若わかくは内外ないげの三種さんしゆの邪行じやぎやうを破はす。是この故ゆゑに三種さんしゆの正行しやうぎやうあり。有人あるひとは、内ないに著ちやくするの情じやう多くして、外げに著ちやくするの情じやう少すくなし。人ひとの「己おのれ」の爲ための故ゆゑに、能よく妻さい子し、親屬しんぞく、寶物ばうぶつを捨すつるが如ごとし。有人あるひとは、外げに著ちやくするの情じやう多くして、内ないに著ちやくするの情じやう少すくなし。

- 【三】 循身觀、即ち順次に觀察して、身體の不淨老衰等を觀するをいふ。
- 【四】 三十七品とは、佛道修行の方法の分類にて、前に擧げたる、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、(即ち七覺支)、八正道の事なり。此の分科の數、七あるが故に、七科と呼び、七科中各項目を總計すれば、三十七項となるが故に、三十七の道品、又は三十七品行といふ。
- 【五】 五蓋の説明は前にあり。
- 【六】 貪とは、五蓋中の第一、貪欲蓋、即ち五欲の境——財色食名睡——に執著して、心の本性を覆ひ昏ますをいふ。
- 【七】 喜とは、憂惱の反對にて、喜び悦ぶ心情をいふ。
- 【八】 四威儀とは、身體の行、住、坐、臥をいふ。
- 【九】 三種の邪行とは、或は身體を重んじ、或は財寶を重んじ、或は兩者を重んじ執著するをいふの故にこれに對して、三種の正行あるべきは勿論なり。

し。人の財を貪りて身を喪ひ、欲の爲に命を歿すが如し。有人は、内外に著するの情多し。是の故に三種の正行を説く。

復次に、(一〇) 自身を内身と名け、他身を外身と名く。(一一) 九受入を名けて内身と爲し、九不受入を名けて外身と爲す。眼等の(一二) 五情を名けて内身と爲し、色等の(一三) 五塵を名けて外身と爲す。是の如き等は内外を分別す。(一四) 行者は先づ不淨、無常、

苦、空、無我等の智慧を以て、内身を觀じ、是の身の好相を得ず。若くは淨相、若くは常相、若くは樂、若くは我、若くは實は、内に既に得ず。(一五)

復た外身を觀じて、淨、常、我、樂を求むるに、實に亦た不可得なり。若し得ざれば疑を生ず。「我れ内を觀する時、外に於いて或は錯り、外を觀する時、内に於いて或は錯る。今内外一時に俱に觀するに亦た不可得なり」と。是の時、心に正定を得。(一六) 是の身の不淨、無常、苦、空、無我にして、病の如く、癰の如く、瘡の如く、九孔より穢を流す、是を行廁と爲

し、久しからずして破壊し、離散し、盡く滅し、死するの相にして、常に飢渴、寒熱、鞭杖、繫閉、罵詈、毀訾、老病等の諸苦ありて常に圍遶し、自在なることを得ず。内空にして主なく、亦た知者、見者、作者、受者なし。但だ空なるも、諸法の因縁和合して而も有り、自ら生じ、自ら滅して、繫屬

【一〇】 内身外身を區別する種類の異説。

【一一】 九受入とは、眼、耳、鼻、

各二個の孔と、口及び兩便の孔、既に九孔の感覺的受領作用の謂ひならん

【一二】 五情とは、眼耳鼻舌身の五根をいふ。

【一三】 五塵とは、色聲香味觸の五境をいふ。

【一四】 第一内身觀。

【一五】 第二外身觀。

【一六】 第三内外觀。

する所なきこと、猶ほ草木の如しと知る。是の故に、内外俱に觀ず。餘の内外の義は、十八空の中に説くが如し。身に循つて觀ずとは、尋隨觀察して、其の不淨、衰老、病死、爛壞、臭處、骨節の腐敗摩滅して、土に歸するを知る。我が是の身の如きは、覆ふに薄皮を以てし、人をして狂惑し、萬端憂畏せしむ。是を以ての故に、身相の如く、内外隨逐し、本末觀察す。又佛の説きたまふが如し、「身に循つて法を觀ず」と。(七) 身覺を生ぜずとは、身に一異の相を取りて、而も戲論を生ぜざるなり。衆生は、是の身中に於いて、種種の覺を起す。淨覺を生ずるあり、不淨覺を生ずるあり。(八) 眞覺を生じて、他の過罪を念するあり。有人は此の身を觀じて、身を何法とか爲す。諸の身分邊を一と爲し、異と爲す。是の如き種種の覺を生ぜず。何となれば利益する所なく、涅槃の道を妨ぐればなり。

復次に、餘の凡夫、聲聞の人は、身相を取りて、能く身を觀じ、菩薩は、身相を取らずして、而も能く身を觀ず。(九) 勤めて精進し、一心にと

は、餘の世事巧便は、無始世界より來た、常に習ひ常に作す。如し、常人と離別するは易く、知識は離別し難し、知識を離別するは易く、父子は離別し難し。父子を離別するは易く、其の身は自ら離れ難し。自ら其の身を離るるは易く、其の心を離るるは難し。自ら一心に勤めて精進せざれば、此は得べからざるなり。譬へば、燧を鑽りて火を求むるに、一心に勤めて著し、休まず息まざれば、乃ち火

【七】 身覺を生ぜずの義解。

【八】 淨覺とは、清淨の覺悟といふ意味にて、肉體を清淨のものとするをいひ、不淨覺は其の反對をいふ。

【九】 眞覺とは、肉體を見て、眞慧の煩惱を起すをいふ。

【一〇】 一心精進の義解。

を得べきが如し。是の故に、一心に勤めて精進すと説く。 (三)世間の貪憂を除くとは、貪を除けば、則ち五蓋盡き去る。猶ほ竹を破するに、初節既に破すれば、餘節皆去るが如し。

復次に、行者は五欲を遠離して出家學道し、既に世樂を捨て、未だ定樂を得ず。或時は心に憂念を生ず。魚の水を樂しむが如し。心相は是の如く、常に樂事を求め、還りて本の欲する所を念ず。行者は多く是の二心を生ず。是の故に佛は、「當に貪憂を除くべし」と説きたまへり。貪を説くは、即ち是れ世間を説くなり。喜、相應するを以ての故に。 (三)初に不淨を觀ずとは、人身は不淨にして、薄皮を覆ふが故に、先づ淨相を生じ、後に餘の「顛」倒生ず。是を以ての故に初に不淨觀を説く。

復次に、衆生は多く貪著して淨相を取らんと欲す。瞋恚、邪見は爾らざ

るが故に、是を以て、先づ貪欲を治するに不淨を觀す。身の四威儀等を念ずとは、先づ身賊を破せんと欲し、一心に人の爲す所の事、皆能く成辦することを得。是を以ての故に、先づ其の身の所爲、所行を尋釋し、來去臥覺に禪を生じて、身の所作を觀す。常に一心に安祥として、錯らず、亂れず、是の如き觀察を作す。不淨三昧は得易きを以て、身は安祥なりと雖も、内に種種の惡しき覺觀ありて、其の心を破亂す。是を以ての故に (三)安那波那、十六分を説き、以て覺觀を防ぐ。安那般那の義は先に説くが如し。身既に安祥にして心錯亂なく、然る後に不淨觀を行すれば、安隱牢固なり。若し先づ

【三】 除世間貪憂の義解。

【三】 不淨觀を念ず理由。

【三】 Anupassana は、譯して、數

息觀といふ。

不淨觀を行ずれば、狂心錯亂するが故に、不淨反つて淨相と作る。佛法の中には、此二法を甘露の初門と名く。不淨觀とは、所謂る菩薩摩訶薩は、身を觀すること、草木瓦石の如くにして、異なること無し。是の身は、(四)外の四大變じて飲食と爲り、内身に充實す。堅き者は是れ地、濕ふ者は是れ水、熱する者は是れ火、動く者は是れ風なり。是の四事、内に入れば、即ち是れ身なり。是の四分の中に、各各我なく、我所なく、自相を隨逐して、人意に隨はず。苦、空等も亦た是の如し。若くは坐し、若くは立つとは、臥するは則ち懈怠なり。身動せざるが故に、心も亦た動せず。行けば、則ち心亂る。身靜かならざるが故に、心も亦た靜かならず。眼を以て事を見んと欲す。況んや見ざる所をや。故に譬喩を説く。牛は即ち是れ行者の身、屠兒は即ち是れ行者、刀は是れ利なる智慧なり。牛の命を奪ふは、即ち是れ身の一相を破するなり。四分は即ち是れ四大なり。屠者は、牛の四分を觀するに、更に別牛なく、亦た是の牛にもあらず。行者の身の四大を觀するも、亦た是の如し。是の四大は、名けて身と爲さず。何となれば、此の四身は一なればなり。又四大は是れ總相、身は是れ別相なり。若し外の四大を名けて身と爲さず、身中に入るを、假に名けて身と爲す。我は四大の中に在らず、四大は我の中に在らず。我は四大を去ること遠く、但顛倒を以て、妄計して身と爲す。是の散空の智慧を用つて、四大及び造色を分別し、然る後に、(五)三念處に入りて道に入ることを得。又此の身

【四】外の四大とは、外界にある地・水・火・風の四原素をいふなり。

【五】三念處とは、四念處中の身念處を除き餘の三なり。

は、足より髪に至り、髪より足に至るまで、薄皮もて周帛す。反覆して思惟するに、一として淨處なし。髮毛等より乃ち腦膜に至るまで、略説すれば則ち(二六)二十六、廣く説けば則ち衆多なり。穀倉は是れ身、農夫は是れ行者、田に穀を種うるは、是れ行者の身業の因縁、實を結びて倉に入るは、是れ行者の因縁熟して得る身なり。稻、麻、黍、粟等は、是れ身中の種種の不淨なり。農夫の倉を開いて、即ち麻、黍、麥、豆の、種種の別異を知るは、是れ行者の不淨觀なり。慧眼を以て、是の身倉を開見するに、此の身中には、不淨充滿し、必ず當に敗壞すべく、若くは他來りて害し、若くは當に自ら死すべきことを知る。此の身中には、但尿管の不淨、種種の惡露等のみ有り。已に内身の不淨を觀じ、今外身の敗壞を觀す。是の故に(二七)二種の不淨を説く。一には已に壞し、二には未だ壞せず。先づ己身の未だ壞せずして識あるを觀するに、若し結使薄き利根の人は、即ち患厭を生ず。鈍根にして結厚き者は、死人の已に壞して、畏るべく惡むべきを觀す。若し死して一日より五日に至るまでは、親里猶尙守護し、是の時禽獸未だ食はず。青瘀臃脹し、膿血流し、腹脹れて破裂し、五藏爛壞し、尿管の臭處、甚だ惡厭すべし。行者心に念ずらく、「此の色は、先には好く行き來し、言語し、妖冶の姿、則ち人情を惑亂し、姪者愛著せり。今之を觀るに好色安にか

【二六】三十六とは、人間の肉身に三十六の不淨物あるをいふ。之を三類に分つ。(一)外相の十二、(二)身器の十二、(三)内含の十二なり。

(一)は、髮、毛、爪、齒、眵、淚、涎、唾、尿、溺、垢、垢、汗、(二)は、皮、膚、血、肉、筋、脈、骨、髓、肪、膏、腦、膜、(三)は、肝、膽、腸、胃、脾、腎、心、肺、生藏、熟藏、赤痰、白痰なり。

【二七】二種の不淨觀。

在る」と。佛の説きたまふ所の如くんば、眞に是れ幻法にして、但だ無智の眼を誑はすのみ。今此の實事露現す。行者は即ち念ずらく、「我身と彼と等しうして、異なること有ること無し。未だ此の法を脱せず。云何が自に著し、彼に著せん。又亦何ぞ自ら重んじ、他を輕んずることを爲さん」と。是の如く觀じ已りて、心則ち調伏し、以て道を求め、能く世間の貪愛を除くべし。又復た思惟すらく、「此の屍は初め死する時、鳥獸之を見て、死人に非すと謂ひ、敢へて來り近づかず。是を以ての故に説けり。「六七日を過ぐれば親戚既に去り、鳥鷲、野干の屬競ひ來り之を食ひ、皮肉既に盡き、日に變異す。是を以ての故に説けり。「但骨人のみ有り、其を見るに此の如し」と。更に厭心を生じ、念じて言はく、「是の心肝、皮肉には、實に我あること無し。但是の身の合するに因りて、罪福の因縁を集め、苦を受くると無量なり」と。即ち復た自ら念すらく、「我が身も久しからずして、會して當に是の如くなるべし。未だ此の法を離れず」と。或時、行者は骨人の地に在りて、雨水に澆浸し日に曝し、風吹き、但白骨のみあるを見る。或は久しうして骨筋斷え、節解分散して處を異にし、其の色鶴の如く、或は腐朽爛壞して土と色を同うするを見る。初に三十六物を觀じ、死屍臃脹の一日より五日に至るは是れ不淨觀なり。鳥獸來り食するより乃ち土と色を同うするに至るまでは是れ無常觀なり。是の中に我と我所とを求むるに、不可得なること先に説くが如し。因縁生にして自在ならざるが故なり。是れ非我觀なり。身相を觀するに、此の如くにして、一として樂むべきもの無く、若し著ある者は則

ち憂苦を生ず。是を苦觀と名く。(二) 四聖行を以て外身を觀ず。自ら己身を知るとも、亦復た是の如し。然して後内外俱に觀ず。若し心散亂せば、當に老病死、三惡道の苦、身命の無常、佛法の滅せんと欲するを念すべし。是等の如く、心を鞭ちて伏せしめ、還つて不淨觀中に繫く。是を勤めて精進すとなぐ。一心に勤めて精進するが故に、能く貪憂を除く。貪憂の二賊は、我が法寶を劫かす。行者は是の念を作す、「是の身は無常、不淨にして、惡むべきこと是の如し。衆生は何の故に此の身に貪著し、種種の罪の因縁を起すや」と。是の如く思惟し已りて、「是の身中には五情あり、外には五欲ありて、和合するが故に、世間の顛倒の樂を生ず」と知る。人心は樂を求めて、初より住する時なし。當に此の樂を觀すべし。實とせんか、虚とせんか。身の堅固なるすら、猶尙散滅す。何に況んや此の樂をや。此の樂も亦た住する時なし。未來は未だ有らず。過去は已に滅す。現在は住せずして念念に皆滅す。苦を遮するを以ての故に樂と名く。實の樂あること無し。譬へば、飲食の如し。飢渴の苦を除くが故に暫く以て樂と爲せども、度を通じせば、則ち復た苦を生ずること、先に樂を破する中に説けるが如し。則ち知る、世間の樂は皆苦の因縁より生じ、亦た能く苦果を生ず。人を誑はすこと須臾にして、後の苦は無量なることを、譬へば、美食に毒を雜へて食するに、香美なりと雖も、毒は則ち人を害するが如し。世間の樂も亦た是の

【二】 四聖行とは、一に、糞掃衣を著て満足すること。二に、食を乞ひ、他の施與を以て満足すること。三に、樹下に住して満足すること。四に、身も心も寂靜にして、絶對平和の生活を營むこと。

如く、淫欲煩惱等の毒の故に、智慧の命を奪ひ、心則ち狂惑し、利を捨てて衰を取る。誰か此の樂を受くるや。唯心識のみ有り。此の心を諦觀するに、念念生滅の相續あるが故に、相を取らざるを得べし。譬へば水波、燈焰の如し。苦を受くる心は、樂心に非ず。樂を受くる心は、苦心に非ず。不苦不樂を受くる心は、苦樂心に非ず。時相各異なれり。是を以ての故に、心は無常なり。無常なるが故に自在ならず、自在ならざるが故に我なし。想思、憶念等も亦た是の如し。

餘の三念處の内外の相は、先に説くが如し。是の四聖行を行ずれば、四顛倒を破し、四顛倒を破するが故に、實相門を開き、實相門を開き已りて、本習ふ所を愧づ。譬へば、人の夜、不淨地に食し、非を了知するや、其事を羞愧する〔が如し〕。

是の四法を觀するに不淨、無常等なり。是を苦諦と名く。是の苦は愛等の諸の煩惱に因る。是れ集諦なり。愛等の煩惱斷ずるは、是れ滅諦なり。愛等の諸の煩惱を斷ずる方便は、是れ道諦なり。

是の如く四諦を觀じ、涅槃の道に信じ、心快樂に住して、無漏の如きに似たり。是を暖法と名く。人の火を鎖るに、並に煖氣あれば、必ず火を望み得るが如し。此の法を信じ已りて、心に佛法を愛樂す。佛の説き給へる所の如し。如し好樂を服して病を瘥せば、師を妙と爲す。諸の樂を服せんに、病瘥ゆれば人中第一なりと知る。是れ則ち僧を信するなり。是の如く

【元】四顛倒とは、常住永劫にあらざるを常住とし、快樂にあらざるを快樂とし、自在の我あるにあらざるを我ありとし、清淨にあらざるを清淨なりと考ふるを云ふ。之を常樂、我、淨の四顛倒といふ。

【一】四諦觀の義解。

【二】暖法の義解。

【三】頂法の義解。

實を信じ、煖法増進し、罪福停等なるが故に、名けて頂法と爲す。人の山に上りて頂に至れば、兩邊の道里、俱に等しきが如し。頂より忍乃至阿羅漢に至るは、是れ一邊の道なり、煖より頂に至るも、是れ一邊の道なり。聲聞法の中にて、四念處を觀じ、得る所の果報は是の如し。菩薩の法は、是の觀の中に於て、本願を忘れず、大悲を捨てず。先づ不可得空を用つて、心地を調伏し、是の地中に住すれば、煩惱ありと雖も心常に墮せず。人の未だ賊を殺さずと雖も、一處に繫閉するが如し。菩薩の頂法は、先の法位の中に説くが如し。忍法、世間第一法は則ち是れ菩薩の柔順法忍なり。須陀洹道より乃ち阿羅漢、辟支佛道に至るは、是れ菩薩の無生法忍なり。佛、後品に自ら説きたまへるが如し。「須陀洹の若くは智、若くは果は、皆是れ菩薩の無生法忍なり」と。四正勤、四如意足は各各別なりと雖も、位は皆四念處中に在り。(三) 慧多きが故に四念處と名け、精進多きが故に四正勤と名け、定多きが故に四如意足と名く。

問うて曰く (三) 若し爾らば何を以てか智處を説かずして念處を説くや。答へて曰く、初めて習行する時は、未だ智あるに及ばず、念を初門と爲して常に其の事を念す。是の智慧は念に隨ふ、故に念を以て名と爲す。四念處の實體は是れ智慧なり。何となれば内外の身を觀するは、即ち是れ智慧なればなり。智慧を念持し、緣中に在つて、散亂せしめざるが故に念處と名く。九十六種の邪行の、道を求

【三】 四念處と四正勤と四如意足との異同及び關係。  
 【四】 第二問、智處を説かずして、念處を説く理由如何。

むると相違す。かるが故に正勤と名く。諸の外道等は五欲を捨て、自ら身と苦しむるも、惡不善を捨つること能はず、諸の善法を積むこと能はず。佛には兩種の斷あり。惡不善法の已に來る者は、除き却け、未だ來らざる者は、防ぎて生ぜざらしむ。善法にも亦た二種あり。未だ生ぜざる善法を生ぜしめ、已に生ぜる善法を増長せしむ。是を正勤と名く。智慧の火は、正勤の風を得れば、燒かざる所なし。正勤若し過ぐれば、心則ち散亂して、智火微弱なり。火の風を得ると過ぐれば或は滅し、或は微にして燒炤する能はざるが如し。是の故に、須らく定を以て、過ぐるを制すべし。精進の風は則ち定を得べし。定に四種あり。欲定、く、精進定と、心定と、思惟定となり。四念處中の過ぐるを制するは、智慧なり。是の時、定慧の道は、精進を得るが故に、欲する所意の如し。後に意の如く、事を辦することを得るが故に、如意足と名く。足とは、如意の因縁に名け、亦た分に名く。是の十二法を、鈍根の人の中には、名けて根と爲す。樹に根あるも未だ力あらざるが如し。若し利根の人の中には、名けて力と爲す。是の事を了了に能く疾に辦する所あり、利刀の物を截るが如くなるが故に、力ありと名く。事未だ辦せざるが故に、名けて道と爲す。事辦じ、思惟し、修行するが故に、名けて覺と爲す。三十七品の論議は先に説くが如し。

問うて曰く、若し菩薩、是の三十七品を修せば、云何が涅槃を取らざるや。答へて曰く、本願牢

【三三】 四種の定。

【三六】 第三問、若し菩薩、三十七品を修せば、何故に涅槃せざるか。

きが故になり、大悲心深く入るが故なり、了了に諸法實相を知るが故になり、諸佛の護念したまふが故なり。經に説くが如し、菩薩七住地に到れば、外に諸法の空を觀じ、内に無我を觀す。人の夢中に椶を縛び、河を渡るに、中流にして覺めて、是の念を作すが如し、「我れ空しく自ら疲れ苦しむ、河なく椶なし、我れ何の渡る所ぞ」と。菩薩の爾の時も亦た是の如く、心に則ち悔い厭ひ、「我れ何の度る所ぞ、何の滅する所かある」と。且つ自ら倒心を滅せんと欲す。是の時、十方の佛は手を伸べ頭を摩で、「善い哉、佛子よ、悔心を生ずること莫れ、汝が本願を念せよ。汝は此の衆生の未だ悟らざることを知ると雖も、汝、當に此の空法を以て、衆生を教化すべし。汝が得る所の者は、始、是の一門なり。諸佛の無量の身、無量の音聲、無量の法門、一切の智慧等、汝は皆未だ得ず。汝は諸法の空を觀するが故に、是の涅槃に著す。諸法空の中には、滅處あること無く、著處あること無し。若し實に滅あらば、汝は先より來た、已に滅せり。汝は未だ六波羅蜜〔多〕、乃至十八不共法を具足せず。汝、當に此の法を具足して、道場に坐すること、諸佛の法の如くなるべし」と。

復次に、三三昧、十一智、三無漏根、覺觀三昧、十念、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定は、先に説くが如し。

復次に、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法は、初品の中に説くが如し。是の諸法は、後皆無所得を用つての故に、般若波羅蜜〔多〕と畢竟空との和合を以つての故に、世間の貪憂を除くと

名く。「そは」不可得なるを以ての故なり。

繼

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の棄てられたる死人の、身骨地に在ること歳久しく、其の色鶴の如く、腐朽し爛壞して、土と共に合するを見て自ら念すらく、「我が身も是の如きの法、是の如きの相なり、未だ此法を脱ぜず」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は内身中、身に循つて觀じ、勤めて精進し一心に世間の貪愛を除く、不可得なるを以ての故なり。外身、内外身も亦た是の如し。受念處、心念處、法念處も、亦た應に是の如く、廣く説くべし。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂の四正勤なり。何等か四なる。須菩提よ、菩薩摩訶薩は未だ生ぜざる諸惡不善法を生ぜざらしめんが爲の故に、欲生ぜば、勤めて精進し、心を攝して道を行す。已に生ぜる諸惡不善法を斷ぜんが爲の故に、欲生ぜば、勤めて精進し、心を攝して道を行す。未だ生ぜざる諸善法を生ぜしめんが爲の故に、欲生ぜば、勤めて精進し、心を攝して道を行す。已に生ぜる諸の善法を住めて失せず、修し滿て、增廣せんが爲の故に、欲生ぜば、勤めて精進し、心を攝して道を行す。不可得なるを以ての故なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂の四如意分なり。何等か四なる。欲定をもて、斷行如意分を成就し修し、心定をもて、斷行如意分を成就し修し、精進定をもて、斷行如意分を成就し修し、思惟定をもて、斷行如意分を成就し修す。不可得なるを以ての故なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂の五根なり。何等か五なる。信根、精進根、念根、定根、慧根。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る五力なり。何等か五なる。信力、精進力、念力、定力、慧力、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる七覺分なり。何等か七なる。菩薩摩訶薩は、念覺分を修し、離に依り、無染に依りて、涅槃に向へば、擇法覺分、精進覺分、喜覺分、除覺分、定覺分、捨覺分の離に依り、無染に依りて、涅槃に向ふ。不可得なるを以ての故なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る八聖道分なり、何等か八なる。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く、不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る三三昧なり。何等か三なる。空、無相、無作の三三昧なり。空三昧とは、諸法の自相空に名く、是を空解脱門と爲す。無相は、諸法の相を壞し、憶ぜず、念ぜざるに名く。是を無相解脱門と爲す。無作は、諸法の中の不作に名く。是を無作解脱門と爲す。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、法智、比智、世智、他心智、如實智なり。云何が苦智と名くるや。苦の不生なることを知る、是を苦智と名く。云何が集智と名くるや。集の應に斷すべきことを知る、是を集智と名く。云何が滅智と名くるや。苦の滅することを知る、是を滅智と名く。云何が道智と名くるや。八聖道分を知る、是を道智と名く。云何が盡智と名くるや。諸の婬、怒、癡の盡くるとを知る、是を盡智と名く。云何が無生智と名くるや。諸有の中の無生を知る、是を無生智と名く。云何が法智と名くるや。五衆の本事を知る、是を法智と名く。云何が比智と名くるや。眼の無常なること、乃至意觸因縁生の受の無常なることを知る、是を比智と名く。云何が世

智と名くるや。因縁名字を知る、是を世智と名く。云何が他心智と名くるや。他の衆生の心を知る、是を他心智と名く。云何が如實智と名くるや。諸佛の一切種智を知る、是を如實智と名く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る三根即ち未知欲知根、知根、智者根なり。云何が未知欲知根と名くるや。諸の學人の、未だ果を得ざる信根、精進根、念根、定根、慧根、是を未知欲知根と名く。云何が知根と名くるや。諸の學人の果を得たる、信根、乃至慧根、是を知根と名く。云何が知者根と名くるや。諸の無學人、若くは阿羅漢、若くは辟支佛、諸佛の信根、乃至慧根、是を知者根と名く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る三三昧なり。何等か三なる。有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧なり。云何が有覺有觀三昧と名くるや。諸欲を離れ、惡、不善の法を離れて、有覺有觀、離生喜樂、初禪に入る、是を有覺有觀三昧と名く。云何が無覺有觀三昧と名くるや。初禪と二禪の中間の禪、是を有覺無觀三昧と名く。云何が無覺無觀三昧と名くるや。二禪、乃至非有想非無想定、是を無覺無觀三昧と名く。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る十念なり。何等か十念なるや。佛念、法念、僧念、戒念、捨念、天念、善念、出入息念、身念、死念なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る佛の十力なり。何等をか十となすや。佛の、如實に、一切法の是處、不是處の相を知りたまふは、一の力なり。如實に、他の衆生の過去、未來、現在の諸業、諸受の法を知り、造業の處を知り、因縁を知り、報を知りたまふは、二の力なり。如實に、諸禪、解脫、三昧、定の垢淨の分別の相を知りたまふは、三の力なり。如實に、他の衆生の諸根の上下の相を知りたまふは、四の力なり。如實に、他の衆生の種種の欲解を知りたまふは、五の力なり。如實に、世間の種種の無數の性を知りたまふは、六の力なり。如實に、一切の至る處の道を知りたまふは、七の力なり。種種の宿命に、相あり、因縁ありて、一世二世、乃至百千世、初劫より劫盡くるまで、我れ彼の衆生の中に在りて生じ、是の如きの姓、是の如きの名、是の如きの飲食、苦樂、壽命長短にして、彼の中に死し、是の間に生じ、是の間に死し、還つて、是の間に生じ、此の間の生の姓名、飲食、苦樂、壽命の長短も、亦た是の如しと知りたまふは、八の力なり。佛の天眼は淨うして、諸の天眼に過ぎ、衆生の死時、生時、端正、醜陋、若くは大、若くは小、若くは惡道に墮し、若くは善道に墮する、是の如き業因縁の受報、是の諸の衆生の惡身業を成就し、惡口業を成就し、惡意業を成就し、聖人を誘毀して、邪見の業因縁を受くるが故に、身壞死する時、惡道に入り、地獄中に生ずること、是の諸の衆生の善身業を成就し、善口業を成就し、善意業を成就し、聖人を誘らず、正見の業因縁を受くるが故に、身壞死する時、善道に入り、天上に生ずることを見たまふは、九の力なり。佛は、如實に、諸漏盡くることを知りたまふが故に、無漏心解脫し、無漏慧解脫し、現在法の中、自ら證知して是の法に入りたまふ。所謂る我が生は已に盡き、梵行を已に作し、今世より復た後世を見たまはざるは、十の力なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る四無所畏なり。何等か四なる。佛は誠言を作したまはく、「我れ是れ一切正智の人なり」と。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆ありて、如實に難じて言

く、是の法知らず」と。乃至是の微畏の相をも見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中の在りて獅子吼し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘の衆の、實に轉する能はざるは、一の無畏なり。佛誠言を作し給はく、「我は一切の漏を盡せり」と。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘の衆は、如實に難じて言く、「是れ漏盡さず」と。乃至是の微畏の相を見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、能く獅子吼し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘の衆の實に轉する能はざるは、二の無畏なり。佛誠言を作し給はく、「我は障法を説く」と。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆は、如實に難じて言く、「是の法を受くるも道を障へず」と。乃至是の微畏の相を見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、畏るる所なきことを得、聖主の處に安住し、能く獅子吼して能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆の實に轉する能はざるは、三の無畏なり。佛誠言を作し給はく、「我が説く所の聖道は、能く世間を出づ。是の行に隨へば、能く苦を盡くす」と。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆は、如實に難じて言く、「是の道を行するも、世間を出づること能はず、苦を盡くすこと能はず」と。乃至是の微畏の相をも見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、畏るる所なきことを得、聖主の處に安住し、能く獅子吼し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆の、實に轉する能はざるは、四の無畏なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂の四無礙智なり。何等か問なる。義無礙、法無礙、辭無礙、樂說無礙なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る十八不共法、是れなり、何等か十八なる。一に諸佛は身に失なし。二に口に失なし。三に念に失なし。四に異想なし。五に不定の心なし。六に不知已捨の心なし。七に欲滅すること無し。八に轉進滅すること無し。九に念滅すること無し。十に慧滅すること無し。十一に解脫滅すること無し。十二に解脫知見滅することなし。十三に一切の身業、智慧に隨つて行す。十四に一切の口業智慧に隨つて行す。十五に一切の意業智慧に隨つて行す。十六に智慧もて、過去世を知見するに、礙なく障なし。十七に智慧もて、未來世を知見するに、礙なく障なし。十八、智慧もて、現在世を知見するに、礙なく障なし。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂る字等、語等、諸字入門なり、何等か字等、語等、諸字入門なる。阿字門は、一切法初めより生ぜざるが故に。羅字門は、一切法垢を離るるが故に。波字門は、一切法第一義なるが故に。蓮字門は一切法終に得べからざるが故に、諸法は終らず生ぜざるが故に。那字門は、諸法は名を離れ、性相得ず失ぜざるが故に。蓮字門は、諸法、世間を度するが故に、亦た愛支の因緣滅するが故に。陀字門は、諸法、善心生ずるが故に、亦た施相の故に。婆字門は、諸法、婆字を離るるが故に。茶字門は、諸法、茶字淨きが故に。沙字門は、諸法、六自在王性清淨なるが故に。和字門は諸法に入るに語言の道斷ゆるが故なり。多字門は諸法に入るに如相は不動なるが故なり。夜字門は諸法に入るに實の如く不生なるが故なり。吒字門は諸法に入るに制伏は不可得なるが故なり。迦字門は諸法に入るに作者は得べからざるが故なり。婆字門は諸法に入るに時得べからざるが故なり。諸法は、時未だ轉ぜざるが故なり。阿字門は諸法に入るに我所は得べからざるが故なり。伽字門は諸法に入るに去る者は不可得なるが故なり。吽字門は諸法に入るに處不可得なるが故なり。闍字門は諸法に入るに生は不可得なるが故なり。籤字門は諸法に入るに籤字は不可得なるが故なり。

駄字門は諸法に入るに性は不可得なるが故なり。除字門は諸法に入るに定は不可得なるが故なり。喏字門は諸法に入るに塵染は不可得なるが故なり。又字門は諸法に入るに、盡は不可得なるが故なり。哆字門は諸法に入るに有は不可得なるが故なり。若字門は諸法に入るに智は不可得なるが故なり。拖字門は諸法に入るに拖字は不可得なるが故なり。婆字門は諸法に入るに破壊は不可得なるが故なり。車字門は諸法に入るに欲は不可得なるが故なり。影の如く五業も亦た不可得なるが故なり。摩字門は諸法に入るに摩字は不可得なるが故なり。火字門は諸法に入るに喚は不可得なるが故なり。蹉字門は諸法に入るに蹉字は不可得なるが故なり。伽字門は諸法に入るに厚は不可得なるが故なり。他字門は諸法に入るに躐字は不可得なるが故なり。伽字門は諸法に入るに厚は不可得なるが故なり。他字門は諸法に入るに處不可得なるが故なり。擊字門は諸法に入るに來、不去、不立、不坐、不臥なるが故なり。隨字門は諸法に入るに邊は不可得なるが故なり。歌字門は諸法に入るに聚は不可得なるが故なり。離字門は諸法に入るに離字は不可得なるが故なり。遮字門は諸法に入るに遮字は不可得なるが故なり。咤字門は諸法に入るに驅は不可得なるが故なり。茶字門は諸法に入るに邊竟の處なるが故に終らず生ぜず、茶を過ぎて、字の説くべきなし。何となれば更に字なければなり。諸字は礙なく、名なく、亦た滅せず、亦た説くべからず、示すべからず、見るべからず、書くべからず。須菩提よ、當に知るべし、一切の諸法は虚空の如し。須菩提よ、是を陀羅尼門と名く。謂ゆる阿字の義、若くは菩薩摩訶薩、是の諸字門印、阿字印、若くは聞き、若くは受け、若くは誦し、若くは讀み、若くは持し、若くは他の爲に説く。是の如く知らば、當に二十の功德を得べし。何等か二十なる。強き識念を得、慚愧を得、堅固心を得、經の旨趣を得、智慧を得、樂說無礙を得、諸餘の陀羅尼門を得易し。疑悔なき心を得、善を聞くも喜ばず、惡を聞くも怒らざることを得、高からず、下からず。住し、心に増減なきことを得、善巧に衆生の語を知ることを得、巧に五樂、十二入、十八界、十二因緣、四緣、四諦を分別することを得、巧に衆生の諸根の利鈍を分別することを得、巧に他心を知ることを得、巧に日月、歲節を分別することを得、巧に天耳通を分別することを得、巧に宿命通を分別

することを得、巧に生死通を分別することを得、能く巧に是處、非處を説くことを得、巧に往来坐起等の身の威儀を知る、とを得。須菩提よ、是の陀羅尼門、字門、阿字門等、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故なり。

**論** 釋して曰く、(三七) 字等語等とは、是の陀羅尼は、諸字に於いて平等にして、愛憎あること無く、又此の諸字は、因縁未だ會せざる時も、亦た終歸することなく、亦た現在すること無く、亦た無所有なり。但吾我の心中に住して、憶想、分別、覺觀の心もて説くのみ。是の散亂の心もて説くも、實事を見ず。風の水を動かせども、則ち見る所なきが如し。等とは、畢竟空涅槃と同等なり。菩薩は此の陀羅尼を以て、一切諸法に於いて、通達無礙なり。是を字等語等と名く。

問うて曰く、(三八) 若し略説すれば、則ち五百の陀羅尼門、若し廣説すれば、無量の陀羅尼門あり。今何を以てか、是の字等の陀羅尼門を説き、名けて諸の陀羅尼門と爲すや。答へて曰く、先づ一の大なる者を説けば、則ち餘は皆説けることを知る。此は是れ諸の陀羅尼門の初門なり。初を説けば餘も亦た説くなり。

復次に、諸の陀羅尼の法は、皆分別に従つて字語生ず。(三五) 四十二字は、是れ一切字の根本なり。字

【三七】 字等語等の義解。

【三八】 第四問、略説すれば五百の陀羅尼門、廣説すれば無量の陀羅尼門あり。今それ字等の陀羅尼門をば、諸の陀羅尼門といふ理由如何。

【三九】 四十二字とは、阿 a. 羅 ra. 波 ba. 遮 ca. 那 na. 暹 ta. 陀 da. 婆 ba. 茶 da. 沙 sa. 和 va. 多 ta. 夜 ya. 吒 za. 迦 ka. 婆 sa. 磨 ma. 伽 ga. 他 ha. 闍 ja. 簸 sa. 駄 da. 除 sa. 咄 ha. 又 ka. 哆 sa. 若 ja. 施 rha. 婆 ha. 車 cha. 魔 sma. 火 ha. 嗟 sa. 伽 ga. 咄 ha. 拏 na. 頰 pha. 歌 sa. 囉 sa. 遮 sa. 咤 ta. 茶 zha. なり。

に因りて語あり、語に因りて名あり、名に因りて義あり。菩薩は、若し字、字に因るを聞けば、乃至能く其の義を了る。是の字の初は阿、後は茶なり。中に四十ありて、是の字陀羅尼を得。菩薩、若し一切の語の中に、阿字を聞けば、即時に義に隨ふ。所謂一切法は初より來た、不生の相なり。阿提とは、秦に初と言ふ。阿耨波陀は、秦に不生と言ふ。若し羅字を聞けば、即ち義に隨つて、一切法の垢相を離るるを知る。羅閣は、秦に垢と言ふ。若し波字を聞けば、即時に一切法の第一義中に入ることを知る。波羅末陀は、秦に第一義と言ふ。若し遮字を聞けば、即時に一切諸行、皆行にあらざることを知る。遮梨夜は、秦に行と言ふ。若し那字を聞けば、即ち一切法は不得、不失、不來、不去なることを知る。那は秦には不と言ふ。若し邏字を聞けば、即ち一切の法は、輕重の相を離るることを知る。邏求は、秦に輕と言ふ。若し陀字を聞けば、即ち一切法の善相を知る。陀摩は秦に善と言ふ。若し婆字を聞けば、即ち一切法の縛なく、解なきことを知る。婆陀は秦に縛と言ふ。若し茶字を聞けば、即ち諸法の熱相なきことを知る。南天竺の茶閣他は秦に不熱と言ふ。若し沙字を聞けば、即ち人身の六種の相を知る。沙は秦には六と言ふ。若し波

【四〇】阿字(ア)は、接頭字として、不、非、無など打ち消しの意を有す。

【四一】阿提(Ahi) アアヒ

【四二】阿耨波陀(Amudha) アヌボダ

【四三】羅閣(Rajas) ラジャス

【四四】波羅末陀(Paranataka) パラマルタ

【四五】遮梨夜(Chalya) チャリヤ

【四六】那(Na) ナ

【四七】邏求(Lachin) ラグ

【四八】陀摩(Dama) タマ

【四九】婆陀(Baddha) バダ

【五〇】茶閣他は南天竺とあるより察するに、純手たる梵語にあらすして、タミール系の語なるか。

【五一】沙(Shas) シャス

【五二】沙(Shas) シャス

字を聞けば、即ち一切諸法は語言の相を離るることを知る。(三三) 波他は、秦に語言と言ふ。若し多字を聞けば、即ち諸法は、如の中に在りて、動せざることを知る。(三四) 多他は、秦に如と言ふ。若し夜字を聞けば、即ち諸法は實相中に入りて、不生不滅なることを知る。(三五) 夜他を聞けば、秦に實と言ふ。若し陀字を聞けば、即ち一切法は、障礙の相なきことを知る。(三六) 陀婆は、秦に障礙と言ふ。若し迦字を聞けば、即ち諸法中に、作者あること無きことを知る。(三七) 迦迦迦は、秦に作者と言ふ。若し薩字を聞けば、即ち一切法、一切種は、不可得なることを知る。(三八) 薩婆は、秦に一切と言ふ。若し磨字を聞けば、即ち一切法は、我所を離るることを知る。(三九) 磨磨迦羅は、秦に我所と言ふ。若し伽字を聞けば、即ち一切法の底は、不可得なることを知る。(四〇) 伽陀は、秦に底と言ふ。若し他字を聞けば、即ち四句の如去は、不可得なることを知る。(四一) 多陀阿伽陀は、秦に如去と言ふ。若し闍字を聞けば、即ち諸法の生老は、不可得なることを知る。(四二) 闍提闍羅は秦には生老と言ふ。若し濕波字を聞けば、即ち一切法は、皆不可得なることを知る。濕波字の如きは不可得なり。濕波字は義なきが故に釋せず。若し駄字を聞けば、即ち一切法は不可得なることを知る。(四三) 駄摩は、秦に法と言ふ。若し賒字を聞けば、即ち諸法寂滅の相を知る。(四四) 賒

- 【三三】 波他 (Pa-ta)
- 【三四】 如の中へは、眞如の中といふに同じ。
- 【三五】 多他 (Ta-ta)
- 【三六】 陀婆 (Ta-pa)
- 【三七】 迦迦迦 (Ka-ka-ka)
- 【三八】 薩婆 (Sa-pa)
- 【三九】 磨磨迦羅 (Ma-ma-ka-ra)
- 【四〇】 伽陀 (Ga-ta)
- 【四一】 多陀阿伽陀 (Ta-ta-a-ga-ta)
- 【四二】 闍提闍羅 (Cha-ti-ka-ra)
- 【四三】 濕波 (Shi-pa)
- 【四四】 駄摩 (Ta-ma)
- 【四五】 賒多 (Sha-ta)

多は、秦に寂滅と言ふ。若し味字を聞けば、即ち一切法虚空は不可得なることを知る。【六】 咳伽は秦に虚空と言ふ。若し又字を聞けば、即ち一切法の盡は、不可得なることを知る。【七】 又耶は秦に盡と言ふ。若し哆字を聞けば、即ち諸法の邊に、何の利を得るかを知ら。阿利迦哆度求那は、秦に是の事の邊に何の利をか得ると言ふ。若し若字を聞けば、即ち一切法の中に、智相なきことを知る。【八】 若那は、秦に智と言ふ。若し他字を聞けば、即ち一切法の義は、不可得なることを知る。【九】 阿利他は、秦に義と言ふ。若し婆字を聞けば、即ち一切法は、破す可らざるの相なることを知る。【一〇】 婆伽は、秦に破と言ふ。若し車字を聞けば、即ち一切法の、去る所なきことを知る。【一一】 伽車提は、秦に去と言ふ。若し

【六】 咳伽 (Gagan?)

【七】 又耶 (Kiyay?)

【八】 若那 (Ghna?)

【九】 阿利他 (Arhita?)

【一〇】 婆伽 (Bhaga?)

【一一】 伽車提 (Gachaiti?)

【一二】 濕尒 (Sila?)

【一三】 火夜 (Hyat?)

【一四】 未蹉羅 (未詳)

【一五】 伽那 (Ghana?)

【一六】 毗耶 (南天竺語、不詳)

【一七】 濕尒字を聞けば、即ち諸法は牢堅にして、金剛石の如くなることを知る。阿濕尒は、秦に石と言ふ。若し火字を聞けば、即ち一切法は、音聲の相なきことを知る。【一八】 火夜は、秦に喚來と言ふ。若し蹉字を聞けば、即ち一切法は、慳なく施相なきことを知る。【一九】 未蹉羅は、秦に慳と言ふ。若し伽字を聞けば、即ち諸法は、厚からず、薄からざることを知る。【二〇】 伽那は、秦に厚と言ふ。若し茶字を聞けば、即ち諸法は、住處なきことを知る。南天竺の【二一】 毗耶は、秦に處と言ふ。若し拏字を聞けば、即ち一切法、及び衆生の不來、不去、不坐、不臥、不立、不起なることを知る。衆

【二二】 未蹉羅 (未詳)

【二三】 伽那 (Ghana?)

【二四】 毗耶 (南天竺語、不詳)

【二五】 未蹉羅 (未詳)

【二六】 伽那 (Ghana?)

【二七】 毗耶 (南天竺語、不詳)

【二八】 未蹉羅 (未詳)

【二九】 伽那 (Ghana?)

【三〇】 毗耶 (南天竺語、不詳)

生も空、法も空なるが故なり。南天竺の 摩訶 拏は、秦に不と言ふ。若し顛字を聞けば、即ち一切法は、因果空なることを知る。故に 摩訶 顛羅は、秦に果と言ふ。若し歌字を聞けば、即ち一切法、五衆は、不可得なることを知る。(一五) 歌大は、秦に衆と言ふ。若し 醜字を聞けば、即ち醜字は空なり、諸法も亦た爾なることを知る。若し遮字を聞けば、即ち一切法は、不動の相なることを知る。(一六) 遮羅地は、秦に動と言ふ。若し吒字を聞けば、即ち一切法は、此彼の岸、不可得なることを知る。(一七) 多羅は、秦に岸と言ふ。若し茶字を聞けば、即ち一切法は、必ず不可得なることを知る。(一八) 波茶は、秦に必と言ふ。茶の外に、更に字なし。若し有れば、是れ四十二字の枝派なり。是の字は常に世間に在りて、相似相續するが故に、一切の語に入るが故に、無礙なり。國國に不同にして、一定の名なし。故に無名と言ふ。聞き已りて、便ち盡くるが故に、滅と言ふ。諸法は法性に入れば、皆不可得なり。而も況んや字けて説くべけんや。諸法は憶想分別なし、故に示すべからず。先づ意業もて分別す、故に口業あり。口業の因縁の故に、身業もて字を作る。字は是れ 色法にして或は眼に見、或は耳に聞き、衆生は強ひて名字を作せども因縁なし。是を以ての故に、見るべからず、書くべからず。諸法は常に空なると、虚空の相の如し。何に況んや字をや。説き已れば便ち滅す。是れ文字陀羅尼なり。是れ諸の陀羅尼門

- 【七】 拏(ニ)バ
- 【七六】 顛羅(ニ)ハラ
- 【七五】 摩訶(ニ)ハラ
- 【七四】 歌大(ニ)ハラ
- 【七三】 多羅(ニ)ハラ
- 【七二】 波茶(未詳)
- 【七一】 醜(未詳)
- 【七〇】 遮羅地(ニ)ハラ
- 【六九】 遮羅地(ニ)ハラ
- 【六八】 多羅(ニ)ハラ
- 【六七】 波茶(未詳)
- 【六六】 色法とは、物質又は物質的のものより生ずるものをいふ。

なり。

問うて曰く、(五) 是の陀羅尼門の因縁を知る者は、應に無量無邊の功徳を得べし。何を以てか但二十を説くや。答へて曰く、佛も能く諸餘の無量無邊の功徳を説きたまへり。但だ般若波羅蜜(多)を説くことを廢するを以ての故に、但だ略して二十を説きたまへるのみ。強き識念を得とは、菩薩は、是の陀羅尼を得て、常に諸字の相を觀じ、修習し、憶念するが故に、強き識念を得。慚愧を得とは、諸の善法を集め、諸の惡法を厭ふが故に、大慚愧の心を生ず。堅固を得とは、諸の福德智慧を集むるが故に心に堅固なること、金剛の如くなるを得。乃至阿鼻地獄の事すら、尙ほ阿耨多羅三藐三菩提を退かず。何に況んや餘の苦をや。經の旨趣を得と

【八五】 第五問、陀羅尼を知れば、二十の功徳を得る理由如何。

は、佛の五種の方便の説法を知るが故に、名けて經の旨趣を得と爲す。一には、種種の門を作して、説法することを知り、知りて法を説く。二には、何事の爲に説くかを知らる。三には、方便を以ての故に説くことを知る。四には、理趣を示すが故に説くことを知る。五には、大悲心を以ての故に説くことを知る。智慧を得とは、菩薩は是の陀羅尼によりて、諸字を分別し破散するに、言語も亦た空なり。言語空なるが故に、名も亦た空なり。名空なるが故に、義も亦た空なり。畢竟空を得れば、即ち是れ般若波羅蜜(多)の智慧なり。樂説すとは、既に是の如き、畢竟清淨無礙の智慧を得れば、本願の大悲心を以て、衆生を度するが故に樂説し易し。譬へば、竹を折るに、初節既に破るれば、餘は皆

〔破れ〕易きが如し。菩薩も亦是の如く、是の文字陀羅尼を得れば、諸の陀羅尼は、自然にして得。疑悔の心なしとは諸法實相の中に入れば、未だ一切の智慧を得ずと雖も、〔而も〕一切深法の中に於いて、疑なく悔なし。善を聞いて喜ばず、惡を聞いて瞋らずとは、各諸字を分別して、讚歎すること無く、毀替すること無きが故に、善を聞いて喜ばず、惡を聞いて瞋らざるなり。高からず、下らずとは、憎愛を斷するが故なり。善く巧に衆生の語を知るとは、一切衆生の言語、三昧、解するを得るが故なり。巧に五衆、十二入、十八界、十二因縁、四緣、四諦を分別すとは、五衆等の義は先に説くが如し。巧に衆生の諸根の利鈍を分別すとは、他心、天耳、宿命を知る。巧に是處非處を説くとは、十力の中に説くが如し。巧に往來坐起等を知るとは、阿鞞跋致の中に説く所の如し。日月歳節とは、日とは旦より旦に至るに名け、〔六八〕初分、〔六九〕中分、〔七〇〕後分なり。夜も亦た三分なり。一日一夜に三十時あり。春秋分の時には、十五時は晝に屬し、十五時は夜に屬す。餘時は増減あり。五月に至れば、晝は十八時、夜は十二時なり。十一月に至れば、夜は十八時、晝は十二時なり。一月は或は三十日、或は三十日半、或は二十九日、或は二十七日半なり。〔七二〕四種の月あり。一には日の月、二には世間の月、三には月の月、四には星宿の月なり。日の月とは三十日半なり。世間の月とは三十日なり。月の月とは二

【六】 是處非處とは、是非の道理といふほどの意。

【七】 印度の日月歳節に關する説明。

【八】 初分は午前なり。

【九】 中分は正午なり。

【一〇】 後分は午後なり。

【一一】 晝夜を三十時に分つ。

【一二】 四種の月——日の月、世間の月、月の月、星宿の月。

十九日に、六十二分の三十を加ふ。星宿の月とは、二十七日に、六十七分の二十一に加ふ。閏月とは、日の月、世間の月の、二事の中より出づ。是を十二月と名く。或は十二月、或は十三月を一歳と名く。是の歳は三百六十六日なり。周りて而して復た始まる。菩薩は、日中の分時は、前分已に過ぎ、後分未だ生ぜず、中分は中に住する處なく、相として取るべきなしと知る。日分は空にして、無所有なり。三十日に至る時は、二十九は已に滅す。云何が和合して月を成さん。月、無なるが故に。云何が和合して歳を爲さん。是を以ての故に、佛の言はく、「世間の法は、幻の如く、夢の如く、但だ是れ心を誑はすの法なり」と。菩薩は能く世間の日月・歳の和合を知り、能く破散して、無所有なることを知る。是を巧に分別すと名く。是の如き等の種種の分別、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

# 巻の第四十九

## 發趣品第二十を釋す。

釋

佛、須菩提に告げ給はく、「汝は問ふ、「云何が菩薩摩訶薩は大乗に發趣するや」と。若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)を行する時、一地より一地に至る、是を菩薩摩訶薩の大乗に發趣すと名く」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、一地より一地に至るや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、一切法に來去の相なく、亦法の若くは來り、若くは去り、若くは至り、若くは至らざるものと無きを知る。(そは)諸法の相の不滅なるが故なり。菩薩摩訶薩は、諸地に於いて念ぜず、思惟せず、而も地業を修治し、亦た地を見ず。何等か菩薩摩訶薩の地業を治むるや。菩薩摩訶薩は、初地に住する時、十事を行ふ。一には、深心堅固、是れ不可得なるが故なり。二には一切衆生の中に於いて等心なり。(そは)衆生の不可得なるが故なり。三には布施もて人に與ふ。(そは)受くる人不可得なるが故なり。四には、善智識に親近して、自ら高うせず。五には法を求む。(そは)一切法不可得なるが故なり。六には常に出家す。(そは)家不可得なるが故なり。七には佛身を愛樂す。(そは)相好不可得なるが故なり。八には、法教を演出す。(そは)諸法の分別不可得なるが故なり。九には憍慢を破す。(そは)法・生・慧不可得なるが故なり。十には實語す。(そは)諸語不可得なるが故なり。菩薩摩訶薩は、是の如く、初地の中に住して、十事を修治し、地業を治む。

【一】此の品は、前の第十八品に於いて、須菩提の問へる、「發趣大乘」の義を答ふるを以て眼目とす。發趣とは、菩薩の向上して、初他より二地に進むをいふ。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、二地の中に住して、八法を念す。何等か八なるや。一には、戒清淨なり。二には、思を知り思を報す。三には、忍辱力に住す。四には、歡喜を受く。五には、一切の衆生を捨てず。六には、大悲心に入る。七には、師を信じ、恭敬し、請受す。八には、諸の波羅蜜(多)を勤求す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、二地の中に住して、應に満足すべき八法と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、三地の中に住して、五法を行す。何等か五なるや。一には、多く學問して厭足すること無し。二には、淨法を施して、亦た自ら高うせず。三には、佛國土を莊嚴して、亦た自ら高うせず。四には、世間の無量の勤苦を受けて、以て厭ふことを爲さず。五には、慚愧處に住す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、三地の中に住して、應に満足すべき五法と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、四地の中に住して、應に行を受け、十法を捨てざるべし。何等か十なるや。一には阿練若住處を捨てず。二には、少欲、三には、知足、四には、頭陀の功德を捨てず。五には、戒を捨てず、戒相を取らず。六には、諸欲を穢惡す。七には、世間心を厭ふ。八には、一切の所有を捨つ。九には、心没せず。十には、一切の物を惜ます。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、第四地の中に住して、十法を捨てずと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、五地の中に住して、十二法をば遠離す。何等か十二なるや。一には、白衣に親むことを遠離す。二には、比丘尼を遠離す。三には、他家を憚惜することを遠離す。四には、無益の談説を遠離す。五には、瞋恚を遠離す。六には、自大を遠離す。七には、蔑人を遠離す。八には、十不善道を遠離す。九には、大慢を遠離す。十には、自用を遠離す。十一には、顛倒を遠離す。十二には、嫉、怒、癡を遠離す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、五地の中に住して、十二事を遠離すと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、六地の中に住して、當に六法を具足すべし。何等か六なるや。所謂六波羅蜜多なり。復た六法あり、爲すべからざる所なり。何等か六なるや。一には聲聞、辟支佛の意を作さず。二には布施に愛心を生ずべからず。三には索むる所あるを見ては心沒せず。四には所有の物を布施す。五には布施の後に心悔いす。六には深法を疑はず。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、六地の中に住して、應に六法を滿具し、六法を遠離すべしと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は七地の中に住して、二十の法に著すべからざる所あり。何等か二十なるや。一には、我に著せず。二には、衆生に著せず。三には、壽命に著せず。四には、衆數乃至知者見者に著せず。五には、斷見に著せず。六には、常見に著せず。七には、相を作すべからず。八には、因見を作すべからず。九には、名色に著せず。十には、五衆に著せず。十一には、十八界に著せず。十二には、十二入に著せず。十三には、三界に著せず。十四には、著處を作らず。十五には、所期の處を作らず。十六には、依處を作らず。十七には、佛に依る見に著せず。十八には、法に依る見に著せず。十九には、僧に依る見に著せず。二十には、戒に依る見に著せず。是の二十の法は、著すべからざる所なり。復た二十法の應に具足し滿すべきものあり。何等か二十なるや。一には、空を具足す。二には、無相を證す。三には、無作を知る。四には、三分清淨なり。五には、一切衆生の中に於て慈悲智具足す。六には、一切の衆生を念ぜず。七には、一切法、等しく觀じ、是の中にも亦た著せず。八には、諸法實相を知り、是の事をも亦た念ぜず。九には、無生忍法。十には、無生智。十一には、諸法一相を説く。十二には、分別の相を破す。十三には、憶想を轉す。十四には見を轉す。十五には、煩惱を轉す。十六には、等定慧地。十七には、意を調ふ。十八には、心寂滅す。十九には、無礙智、二十には愛に染ます。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、七地の中に住して、應に具足すべき二十法と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、八地の中に住して、應に五法を具足すべし。何等か五法なるや。衆生の心に順入し、

諸の神通に遊戯し、諸佛の國を觀て、見る所の佛國の如く、自ら其の國を莊嚴し、如實に、佛身を觀じて、自ら佛身を莊嚴す。是を五法を具足し滿すと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、八地の中に住して、復た五法を具足す。何等か五なるや。上下の諸根を知り、佛世界を淨め、如幻三昧に入り、常に三昧に入り、衆生所應の善根に隨つて身を受く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、八地の中に住して、五法を具足すと爲す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、九地の中に住して、應に十二法を具足すべし。何等を十二なるや。無邊世界に度する所の分を受け、菩薩所願の如きを得、諸天・龍・夜叉・捷闍婆の語を知りて、而も爲に法を説き、處胎成就し、家成就し、所生成就し、性成就し、眷屬成就し、出生成就し、出家成就し、莊嚴佛樹成就し、一切諸善功德圓滿し具足す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、九地の中に住して、應に具足すべき十二法と名く。須菩提よ、十地の菩薩は、當に知るべし、佛の如くなることを。

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は深心に地業を治むるや」と。佛「須菩提に」言はく、「菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、諸の善根を集む。是を菩薩摩訶薩、深心に地業を治むと名く」と。「云何が菩薩は、一切衆生の中に於いて、等心なりとするや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、四無量心を生ず。所謂る、慈・悲・喜・捨なり。是を一切衆生の中に於いて、等心なりと名く」と。「云何が菩薩は、布施を修ずとするや」と。佛の言はく、「菩薩は一切衆生に施與して、分別する所なし。是を布施を修すと名く」と。「云何が菩薩は、善知識に親近すとするや」と。佛の言はく、「一能く人ををして、薩婆若の中に住せしむ。是の如く善智識に親近し、諸受し、恭敬し、供養す。是を善知識に親近すと名く」と。「云何が菩薩は、法を求むとするや」と。佛の言はく、菩薩は薩婆若に應ずる心

もて法を求め、聲聞辟支佛地に墮せず。是を法を求むと名く」と。「云何が菩薩は常に出家して地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は、世世に雑心ならず、佛法の中に出家して、能く障礙する者なし。是を常に出家して、地業を治むと名く」と。「云何が菩薩は、佛身を愛樂し地業を治むとするや」と。佛の言はく、「若し菩薩は、佛の身相を見たてまつるより、乃至阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に念佛の念を離れず。是を佛身を愛樂し、地業を治むと名く」と。「云何が菩薩は、法教を演出して地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は、若くは佛現在し、若くは佛滅度の後、衆生の爲に說法し、初中後善く、妙義、好語、淨潔、純具、所謂、修妬路乃至優波提舍なり。是を法教を演出して、地業を治むと名く」と。「云何が菩薩は、憍慢を破り地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は是の憍慢を破するが故に、終に下賤の家に生ぜず。是を菩薩は、憍慢を破して、地業を治むと名く」と。「云何が菩薩は、實語して、地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は、所説の如く行す。是を實語もて地業を治むと名く」と。是を菩薩摩訶薩は、初住地の中に、十事を修行して、地業を治むと爲す。

【二】第一問、佛は何故に發趣大乘を答へずして、發趣地を答へ給ひしか。

論 釋して曰く、須菩提は上に摩訶衍を問ひ、佛、種種に、摩訶衍の相を答へたまへり。上には又大乘に發趣する者を問ひ、今は大乘に發趣するの相を答へたまふ。菩薩摩訶薩は、是の乘に乗じて、一切法の本より已來、不來、不去、無動、無發、法性常住なるとを知るが故に、又大悲心をもつての故に、精進波羅蜜(多)の故に、方便力の故に、還つて諸の善法を修し、更に勝地を求め、而も地相を取らず、亦た此の地を見ざるなり。

問うて曰く、應に大乘に發趣することを答ふべし、何を以てか地に發趣することを説くや。答へ

て曰く、大乘は即ち是れ地なり。地に十分あり。初地より二地に至る。是を發越すと名く。譬へば馬に乗つて象に趣き、馬を捨てて象に乗り、象に乗りて龍に趣き、象を捨てて龍に乗るが如し。

問うて曰く、此の中に、是れ何等か十地なるや。答へて曰く、地に二種あり。一には但菩薩地、二には共地なり。共地とは、所謂、乾慧地より乃ち佛地に至るまでなり。但菩薩地とは、歡喜地、離垢地、有光地、(一〇)增曜地、

難勝地、(三)現在地、(三三)深入地、(四)不動地、(五)善相地、(三六)法雲地なり。此の地相は、十地經論の中に廣く説くが如し。初地に入りて菩薩は應に十法を行すべし。深心より乃ち實語に至るまでなり。須菩提は知れりと雖も、衆生の疑ひを斷せんが爲の故に、世尊に問へり。云何が是れ深法なると、佛は答へたまはく、「薩婆若に應する心もて、諸の善根を集むるなり」と。薩婆

【三】十分とは、下に説く十地のことなり。

【四】第二問、此の中、何をか十地といふや。

【五】乾慧地。三乘共十地の第一地なり。其の智慧乾燥にして淳熟せず。又有漏の智慧は法性の理水を以て、潤まざれば乾慧と云ふ。

【六】但菩薩地。以下謂ゆる大乘の菩薩の十地を釋す。

【七】歡喜地。十地の第一地。菩薩既に一大阿僧祇劫の修行を経て、初めて見惑を斷じ、空の理を證し、大歡喜を生ずる位なり。此より十地の間に二大阿僧祇劫を経て成佛す。菩薩此の位に於て檀波羅蜜を成就するなり。

【八】離垢地。十地の第二地。

【九】有光地。十地の第三地。忍辱波羅蜜を成就して、修惑を斷じ、諦察法忍を得て、智慧顯發するが故に、發光地とも言ふ。

【一〇】增曜地。十地の第四地。精進波羅蜜を成就して、修惑を斷じ、慧性を以て熾盛ならしむるが故に、熾盛地とも言ふ。

【一一】難勝地。十地の第五地。禪定波羅蜜を成就して、修惑を斷じ、眞俗二智の行相互に違することを念じて、相應せしむるが故に、極難勝地とも言ふ。

【一二】現在地。十地の第六地。

薩婆

若〔に應ずる〕心とは、菩薩摩訶薩は、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發して、是の願を作す、

「我は未來世に於いて、當に佛と作るべし」と。  
是の阿耨多羅三藐三菩提の意、即ち是れ薩婆若に應ずる心なり。應ずとは、心を繫けて、「我當に佛と作るべし」と願ふなり。若し菩薩利根なれば、大に福德を集め、諸の煩惱薄く、過去の罪業少く、發意して即ち深心を得。深心とは、深く佛道を樂しみ、世世に世間に於て心薄し、是を薩婆若に應ずる心と名く。作す所の一切の功德の、若くは布施、若くは持戒、若くは修定等もて、今世後世の福樂、壽命、安隱を求めず。

乃至、一錢と「雖」も施さず、貪惜し積聚して、但增長せんことを望むが如し。菩薩も亦た是の如く、福德の若くは多きも、若くは少きも、餘事に向けず、但愛惜し積集して、薩婆若に向く。問うて曰く、(二七) 是の菩薩は、未だ薩婆若を知らず、其の味を得ず。云何が能く深心を得るや。答へ

智慧波羅蜜を成就し、修惑を斷じて最勝智を發し、染淨の差別なきを現前せしむるが故に、現前地とも言ふ。

【三】 深入地。十地の第七地。方便波羅蜜を成就して大悲心を發し、又修惑を斷じて二乘の自度を遠離するが故に、遠行地とも云ふ。此位にて第二の阿僧祇の行を終へしなり。

【四】 不動地。十地の第八地。願波羅蜜を成就し、修惑を斷じて無相觀を爲し、任運無功用に相續するが故に名くるなり。

【五】 善相地。十地の第九地。力波羅蜜を成就し、修惑を斷じて十力を具足し、一切處に於て、可度、不可度を知つて善く說法するが故に、善慧地とも云ふ。

【六】 法雲地。十地の第十地。智慧波羅蜜を成就し、修惑を斷じて無邊の功德を具足し、無量の功德水を出生すること、大雲の虚空を覆うて、清淨の衆水を出すが如くなるが故に名くるなり。

【七】 第三間。是の菩薩は、未だ一切智を知らず、其の味を得ずして、云何が能く深心を得るか。

て曰く、我先に已に説けり。此の人若し利根なれば、諸の煩惱薄く、福德濃厚にして、世間を樂します。未だ大乘を讚歎するを聞かずとも、猶ほ世間を樂します。何に況んや已に聞けるをやと。摩訶迦葉の如きは、(二八)金色の女を娶りて、妻と爲せしも、心に愛樂せず、棄捨して出家せり。又(二九)耶舎長者の子の如きは、中夜に、衆の姝女の皆死狀の如くなるを見て、直に十萬兩金の寶履を捨てて、水岸の邊に於て、直に渡りて佛(所)に趣けり。是等の如く、諸の貴人、國王にして、五欲を厭捨する者は無數なり。何に況んや菩薩は佛道の種種の功德、因縁を説くを聞いて、而も即時に發心して深く入らざらんや。後の薩陀波輪の品中に、長者の女、佛の功德を讚歎したてまつるを聞いて、即時に家を捨て、(三〇)曇無竭の所に詣るが如し。復次に、信等の五根を成就し、淳熟するが故に、能く是の深心を得。譬へば、小兒は眼等の五情根、未だ成就せざるが故に、五塵を分たず、好醜を識らざるが如し。信等の五根の未だ成就せざるも、亦復た是の如く、善惡を識らず、縛解を知らず、五欲を愛樂して、邪見に沒す。信等の五根を成就せる者は、乃ち能く善惡を識別す。十善道、聲聞法すら尙ほ愛樂す、

【二八】 印度にては、昔、理想的美人の皮膚の色を、臍鬲の花に喻ふるを常とす。而して此の花は白色に少し黄味を帯び、象牙の色に似たり。斯く黄味を帯びたる白色を以て、理想的の皮膚の色とする思想より一轉して、金色を理想の美人色、聖人色とするに至れるもの如し。

【二九】 耶舎(ヤシヤ)名聞と譯す。佛滅後一百年に出でて、摩竭陀國華氏城鷄園寺の上座となり、阿育王に勸めて、八萬四千の佛塔を建てしめ、後、跋耆國毘舍城に於て、七百の賢聖を集めて、第二結果をせし阿羅漢なり。

【三〇】 曇無竭(Dharmapala)法盛と譯す。衆香城に王となりて、常に般若波羅蜜多を宣説す。常啼菩薩、此に到つて般若を聞くと稱せらる。

況んや無上道にして、而も深く念せざらんや。初めて無上道心を發してより、已に世間に於いて最上たり。何に況んや成就するをや。

また次に、菩薩は、始めて般若波羅蜜〔多〕の氣味を得るが故に、能く深心を生ず。人の閉せられて幽闇に在り、微隙より光を見、心則ち踊躍し、是の念を作して、衆人に〔向ひ〕、「獨り是の如きの光明を見ることを得」と言ひ、欣悦し愛樂して、即ち深心を生じ、是の光明を念じ、方便して出でんことを求むるが如し。菩薩も亦た是の如く、宿業の因縁の故に閉せられて、十二入無明黑闇の獄中に在り、所有の知見は皆是れ虚妄なるも、般若波羅蜜〔多〕を聞いて少しく氣味を得、深く薩婆若を念じ、「我れ當に云何が、此の六情の獄より出づることを得て、諸佛聖人の如くならん」と〔念す〕。

復次に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、願に隨つて行ずる所あり。是を以ての故に深心を生ず。

深心とは、一切諸法の中の愛は、薩婆若を愛するに如くもの無く、一切衆生の中の愛は、佛を愛したてまつり、又深く悲心に入りて、衆生を利益するに如くものなし。是の如き等を深心の相と名く。初地の菩薩は、應に常に是の心を行すべし。一切衆生に於いて等心なりとは、菩薩は是の深心を得已つて、心は一切衆生に於いて等うす。

三三 衆生は常に情もて其の親しき所を愛し、其の憎む所を惡む。菩薩は深心を得るが故に、怨親平等にして二なし。此の中に、佛自ら等心とは、四無量心なりと

【三】 衆生の二心——愛と憎。  
【三】 菩薩は怨親平等なり。

説きたまへり。是の菩薩は衆生を見て、愛樂して、則ち慈喜を生じ、(三)心に是の願を作す、「我れ當に一切衆生をして、皆佛樂を得せしめん」と。若し衆生の苦を受くるを見れば、則ち悲心を生じて之を愍み、是の願を作す、「我れ當に一切衆生の苦を抜くべし」と。若し不苦不樂の衆生を見れば、則ち捨心を生じて、是の願を作す、「我れ當に衆生をして、愛憎の心を捨てしむべし」と。四無量心の餘の義は先に説くが如し。捨心とは、捨に二種あり。一には財を捨てて施を行じ、二には結を捨てて道を得。此の慳を除くを以て捨と爲すは、第二の結を捨つるが與めの因縁と作り、七地の中に至りて乃ち能く結を捨つるなり。

問うて曰く、(三)捨相に種種あり。内外、輕重、財施、法施、世間、出世間等なり。佛は何を以ての故に、但分別憶想なき出世間の施のみを説きたまひしか。答へて曰く、布施に種種の相あり。但大なる者を説いて相を取らざるなり。

復次に、佛は一切法に於いて著したまはず、亦た此を以て、菩薩に布施を教へて、佛法の如きにも著せざらしめたまふ。此の中に、應に廣く無分別の布施を説くべし。餘の布施の相は、處處に已に種種に説けり。善知識に近づくの義は先に説けるが如し。法を求むとは、(三)法に三種あり。一には、諸

【三】菩薩の願行。

【四】捨心とは四無量心の一なり。一切を棄てて著せざるを言ふ。

【五】二種の捨心——(一)捨財行施、(二)捨結得道。

【六】第四問、捨相に種種あり、佛は何故に、但出世間の施のみを説き給ひしか。

【七】三種の法——(一)涅槃、(二)八聖道、(三)八萬四千の法衆。

法ほふの中の無上むじやうなるもの、所謂いはゆる、涅槃ねはんなり。二には、涅槃ねはんを得るとる方便ほうべんたる八聖道はつしやうだうなり。三には、一切いっさいの善語ぜんご實語じつごにして、八聖道はつしやうだうをたゞするもの所謂いはゆるる八萬四千はつまんしよせんの法衆ほふしゆ、十二部經じふにぶきやう、四藏しよざう所謂いはゆるる阿含あこん、阿毘曇あびどん、毗尼びに、雜藏ざつざう、摩訶般若波羅蜜まかはんにやばらみつ〔多〕等たうの、諸もろの摩訶衍經まかえんぎやうは皆名みなけて法ほふと爲なす。此この中に、法ほふを求もとむとは、書寫しよしやし、讀誦とくじゆし、正ただしく憶念おくねんするなり。是等これらの如ごとくにして、衆生しゆじやうの心病しんびやうを治ちするが故ゆゑに、諸法しよほふの藥くすりを集あつめて身命しんみやうを惜をしまざるなり。釋迦文佛しやくかみぶんぶつの如ごときは、本菩薩もとぼさつたりし時とき、名なづけて樂法らくほふと曰いへり。時に、世よに佛ほとけなく、善語ぜんごを聞きかず。四方はうに法ほふを求もとめ、精勤しやうこんすること懈おこらざりしも、了つひに得うること能あたはずりき。爾その時に、魔變まへんじて婆羅門ばらもんと作り、而しかして之これに語りて言いはく、「我われに佛ほとけの説ときたまふ所ところの一偈いあり。汝なんぢ能あたく皮かわを以もつて紙かみと爲なし、骨ほねを以もつて筆ふでと爲なし、血ちゆうを以もつて墨すみと爲なして、此この偈いを書しよ寫しやせば、當まに以もつて汝なんぢに與あたふべし」と。樂法らくほふは即時そくじに自ら念みづかならずく、「我われれ世世せせに、身みを喪うふこと、無數むしゆなれども、是この利りを得えず」と。即すなはち自みづから皮かわを剥はぎ、之これを曝さらして乾かわかしめ。其その偈いを書しよせんと欲ほつするに、魔まは便すなはち身みを滅めつす。是この時に、佛ほとけ、其そのの至心ししんを知しり、即すなはち下方げはうより湧出ゆふしゆつして、爲たのに深法じんほふを説ときたまふに、即すなはち無生法忍むじやうほふにんを得えたり。又薩陀波輪またさつたはりんの如ごときは、苦行くぎやうして法ほふを求もとめ、釋迦文菩薩しやくかみぶんぼさつの如ごときは、五百いほひの釘くぎを身みに釘くぎす。〔皆〕法ほふを求もとめんが爲たのめ故ゆゑなり。又金堅王またこんけんわうの如ごときは、身みを割くくこと五百いほひ處しよ、炷しゆを燈とし、巖いふに投とうじ、火ひに入ることを爲なす。是等これらの如ごとき、種種しゆしゆの苦行くぎやう難行なんぎやうは、衆生しゆじやうの爲たのに法ほふを求もとむるなり。

復次またつぎに、佛ほとけ、自ら求法もとほふの相さうを説ときたまはく、「薩婆若サハロホニヤの爲たのにして、聲聞しやうもん、辟支佛地びやくしふぢに墮だせず」と。常つね

に出家すと、菩薩、家に在りては、種種の罪の因縁あることを知る。「我れ若し家に在らば、自ら清淨の行を行ふことを得ること能はず。何ぞ能く人をして、諸の淨行を得せしめん。若し在家の法に隨はば、則ち鞭杖等ありて、衆生を苦惱す。若し善法に隨つて行せば、則ち居家の法を破せん、二事を籌量するに、我れ今出家せざるも、死する時は、俱に亦た當に捨つべし。今自ら遠離せば福徳大なりと爲さん」と。

復次に、菩薩は是の念を作す、「一切の國王及び諸の貴人は、力勢、天の如く、樂を求めて未だ已まず。死して之を強奪す。我れ今衆生の爲の故に、家を捨てて清淨戒を持し、尸羅波羅蜜〔多〕の因縁を具足せん」と。此の中に、佛は自ら説きたま

【六】二種の佛道——(一)正見世間、(二)正見出世間。

はく、「菩薩は世世に雜心ならず」と。出家して雜心ならずとは、九十六種の道中に於いて出家せず、但佛道中に於いて出家するなり。何となれば、佛道中に二種あり。正見世間と正見出世間となり。正見の故に、佛身を愛樂すとは、種種の讚佛の功德、十力、四無所畏、大慈大悲、一切智慧を聞き、又た佛身の三十二相、八十隨形好、大光明を放ち、天人の供養して、厭足すること有ること無きを見て、自ら知るなり。「我れ當來世も亦當に是の如くなるべし」と。假令、佛を得る因縁なきすら猶尙愛樂す、何に況んや、當に得べくして、而も愛樂せざらんや。是の深心を得て、佛を愛樂したてまつるが故に、世世に常に佛に値ふことを得るなり。法教を演出すとは、菩薩は上の如く、法を求め、已

に衆生の爲に演説するなり。菩薩の家に在る者は多く財施を以てし、出家は佛を愛するの情重く常に法施を以てす。若くは佛世に在すも、若くは世に在ざるも、善く持戒に住し、名利を求めず、心を一切衆生に等うして、爲に法を説く。(三) 檀の義を讚歎するが故に、名けて初善と爲し、分別して持戒を讚歎するを、名けて中善と爲し、是の二法の果報の、若くは諸の佛國に生じ、若くは大天と作るを、名けて後善と爲す。

復次に、(三) 三界の五受衆の身の、苦惱多きを見て、即ち厭離の心を生ずるを、名けて初善と爲し、居家を棄捨して、身を離るるが爲の故に、中善と爲し、心の煩惱を離るるが爲の故に、名けて後善と爲す。聲聞乘を解説するを、名けて初善と爲し、辟支佛乘を説くを、名けて中善と爲し、大乘を宣暢するを、名けて後善と爲す。妙義好語とは、三種の語は、復た辭妙なりと雖も、而も義味淺薄に義理深妙なりと雖も、而も辭具足せず。是を以ての故に妙義好語を説く。三毒の垢を離るるが故に、但正法を説き、非法を離へざる、是を清淨と名く。八聖道分、六波羅蜜(多)を備ふるが故に、名けて具足と爲す。修多羅十二部經は先に説けるが如し。憍慢を破すとは、是の菩薩は出家して戒を持ち、法を説いて能く衆疑を斷ず。或る時は自ら恃んで憍慢を生ず。是の故に應に是の念を作すべし、「我は頭を剃り、染衣を着け、鉢を持して食を乞ふ。此は是れ憍慢を破するの法なり。我れ云何が中に於

【二】 檀とは檀那の略にして、施者、又は布施を意味するなり。

【三】 三善即ち初善中善後善の義解。

いて憍慢を生ぜんや」と。又此の憍慢は、人心の中に在りて、則ち功德を覆没し、人の愛せざる所に於て、惡聲流布し、後身に常に弊惡の畜生中に生じ、若くは人中の卑鄙下賤に生ず。是の憍慢に、是の如き無量の過罪ありと知りて、是の憍慢を破す。阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲の故なり。如し人、財を求むるすら、猶ほ謙遜し意を下す、何に況んや、無上道を求むるをや。憍慢を破するを以ての故に、常に尊貴を生じ、終に下賤の家に在りて生ぜず。實話とは是れ諸善の本にして、天に生ずるの因縁、人の信受する所なり。是の實話を行する者は、布施、持戒、學問を假らずして、但實話を修すれば、無量の福を得。實話とは、説の如く隨つて行するなり。

【三】 第五問、四種の口業、即ち惡口、兩舌、綺語、妄語との中、但實話のみを説く理由如何。

【三】 第六問、菩薩は何故に、初地に住して、但十事のみを行するか。

問うて曰く、(三) 口業に四種あり、何を以てか但實話を説くや。答へて曰く、佛法の中には實を貴ぶが故に、實を説き、餘は皆四諦に攝す。實の故に涅槃を得るなり。

復次に、菩薩は衆生と共に惡口、綺語、兩舌を事とし、或る時は能く妄語の罪ありて重きが故に、初地に應に是の菩薩行を捨つべし。初地には、未だ具足すること能はず。此の四業を行するが故に、但實話のみを説く。第二地の中には、則ち能く具足す。

問うて曰く、(三) 初地の中に、何を以てか但十事を説くや。答へて曰く、佛は法王たり、諸法の中に

自在を得たまふ。是の十方を知れば、能く初地を成ず。譬へば良醫は、能く藥草の種數を知るも、若くは五、若くは十にして、能く病を破するに足れるが如し。是の中、其の多少を難すべからず。



云何が菩薩は戒清淨なりとするや。若し菩薩摩訶薩、聲聞、辟支佛心、及び諸の破戒、佛道を障ふ法を念ぜざる、是を戒清淨なりと名く。云何が菩薩は、惡を知り惡を厭すとすや。若し菩薩摩訶薩は、菩薩道を行じ、乃至小思すら尙ほ忘れず、何に思ふや多きをや。是を思を知り惡を厭すと名く。云何が菩薩は、忍辱力に任すとすや。若し菩薩、一切衆生に於いて、瞋なく惱なき、是を忍辱力に任すと名く。云何が菩薩は、歡喜を受くとするや。所謂、衆生を成就し、此を以て喜と爲す。是を歡喜を受くと名く。云何が菩薩は、一切衆生を捨てすとすや。若し菩薩は、念じて一切衆生を救はんと欲するが故に、是を一切衆生を捨てすと名く。云何が菩薩は大悲心に入るとするや。若し菩薩は、是の如く念ず、我れ一一の衆生の爲の故に、如恆河沙等の劫、地獄の中に勤苦を受け、方ち是の人、佛道を得て涅槃に入るに至るべしと。是の如きを名けて、一切十方の衆生の爲に、苦を忍ぶと爲す。是を大悲心に入ると名く。云何が菩薩は、師を信じ、恭敬し、諸受するや。若し菩薩は、諸師に於いて、世尊の如く想ふ。是を師を信じ、恭敬し、諸受すと名く。云何が菩薩は、諸波羅蜜多を勤求すとすや。若し菩薩は、一心に諸波羅蜜多を求めて異事なし。是を諸波羅蜜多を勤求すと名く。是を菩薩摩訶薩は、二地の中に住して、八法を満足すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、多く學問して、厭足すること無しとするや。諸佛所説の法、若くは是れ此の間の世界、若くは十方世界の、諸佛の所説を盡く圓持せんと欲す。是を多く學問して、厭足すること無しと名く。云何が菩薩は法施を淨むとするや。法施する所あり、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を求めざるに至る。何に況んや餘事をや。是を名利を求めざる法施と名く。

云何が菩薩は、佛の世界を淨むとするや。諸の善根を以て、佛の世界を淨めんと廻向す。是を佛世界を淨むと名く。云何が菩薩は、世間の無量の勤苦を受け、以て厭ふことを爲さずとするや。諸の善根を備具するが故に、能く衆生を成就し、亦た佛界を莊嚴し、乃ち薩婆若を具足するに至るまで、終に疲厭せず、是を無量の勤苦を受くるを以て、厭ふと爲さずと名く。云何が菩薩は慚愧處に住すとすや。諸の聲聞、辟支佛の意を取つ、是を慚愧の處に住すと名く。是を菩薩摩訶薩は、三地の中に住して、五法を満足すと爲す。

云何が菩薩は、阿蘭若住處を捨てずとするや。能く聲聞、辟支佛地を過ぐ。是を阿蘭若住處を捨てずと名く。云何が菩薩は、少欲なりとするや。乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るすら尚ほ欲せず、何に況んや餘欲をや。是を少欲と名く。云何が菩薩は、是ることを知れりとするや。一切種智を得るのみ、是を智足と名く。云何が菩薩は、頭陀の功徳を捨てずとするや。

諸の深法忍を觀する、是を頭陀の功徳を捨てずと名く。云何が菩薩は、戒を捨てずとするや。戒相を取らざる、是を戒を捨てずと名く。云何が菩薩は、諸欲を穢惡とするや。欲心起らざるが故に、是を諸欲を穢惡すと名く。云何が菩薩は、世間心を厭ふとするや。一切の法は、不作なることを知るが故に、是を世間心を厭ふと名く。云何が菩薩は、一切の所有を捨つとするや。内外の諸法を惜まざるが故に、是を一切の所有を捨つと名く。云何が菩薩は、心没せずとするや。二種の識處に心生ぜざるが故に、是を心没せずと名く。云何が菩薩は、一切の物を惜まざるや。一切の物に於て、著せず念ぜざる、是

を一切の物を惜まずと名く。是を菩薩は、五地の中に於いて、十法を捨てずと爲す。

云何が菩薩は、白衣に親しむを遠離すとすや。菩薩は生ずる所を出家し、一佛界より一佛界に至り、常に出家し、剃頭して染衣を著す。是を白衣に親しむを遠離すと名く。云何が菩薩は、比丘尼を遠離すとすや。比丘尼と共に住せず、乃至彈指の頃も、亦た念を生ぜざる、是を比丘尼を遠離すと名く。云何が菩薩は、他家を憚惜することを遠離すとすや。菩薩

は、是の如く思惟す、「我れ應に衆生を安樂にすべし、他今、我を助けて安樂なり、云何が慳を生ぜんしと。是を他家を慳惜することと遠離すと名く。云何が菩薩は、無益の談處を遠離すとすや。若し談處ありて、或は聲聞辟支佛心を生ぜば、我れ當に遠離すべし、是を無益の談處を遠離すと名く。云何が菩薩は、瞋恚を遠離すとすや。瞋心、憍心、闘心をして、入ることを得せしめざる、是を瞋恚を遠離すと名く。云何が菩薩は、自大を遠離すとすや。所謂、内法を見ざるが故に、是を自大を遠離すと名く。云何が菩薩は、人を蔑むことを遠離すとすや。所謂、外法を見ざるが故に、是を人を蔑むことを遠離すと名く。云何が菩薩は、十不善道を遠離すとすや。是の十不善道は、能く八聖道を障ふ、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是を十不善道を遠離すと名く。云何が菩薩は、大慢を遠離すとすや。是の菩薩は、法として大慢を作すべき者を見ず。是を大慢を遠離すと名く。云何が菩薩は、自用を遠離すとすや。是の菩薩は、是の法の自用すべき者を見ず。是を自用を遠離すと名く。云何が菩薩は、顛倒を遠離すとすや。顛倒の處は、不可得なるが故に、是を顛倒處を遠離すと名く。云何が菩薩は、嫉、怒、癡を遠離すとすや。嫉、怒、癡の處は見るべからざるが故に、是を嫉、怒、癡の處を遠離すと名く。是を菩薩は五地の中に住して、十二法を遠離すと名く。

云何が菩薩は、六地の中に住して、六法、所謂、六波羅蜜(多)を具足するや。諸佛及び聲聞、辟支佛は、六波羅蜜(多)の中に住して、能く彼岸に渡る。是を六法を具足すと名く。云何が菩薩は、聲聞、辟支佛の意を作さざるや。(菩薩は)是の念を作す、「聲聞、辟支佛の意は、阿耨多羅三藐三菩提の道にあらす」と。云何が菩薩は、布施して憂心を生ぜざるや。(菩薩は)是の念を作す、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道にあらす」と。云何が菩薩は、索むる所あるを見て、心没せずとするや。(菩薩は)是の念を作す、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道にあらす」と。云何が菩薩は、索むる所あるを見て、心没せずとするや。(菩薩は)是の念を作す、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道にあらす」と。云何が菩薩は、所有物は布施すとすや。菩薩

は初發心の時、布施するに、「是は與ふべし、是は與ふべからず」と言はず。云何が菩薩は、布施の後、心に悔いざるや。慈悲力に故なり。云何が菩薩は深法を疑はざるや。功德力を信するが故なり。是を菩薩は、六地の中に住して、六法を遠離すと名く。

論者言はく、戒清淨なりとは、初地の中にては多く布施を行じ、次に持戒は、布施に勝ることを知る。何となれば、持戒は則ち一切衆生を攝するも、布施は則ち一切に普週すること能はざればなり。持戒は、遍ねく無量に滿つ。不殺生戒は、則ち一切衆生の命を施すが如し。衆生の無量無邊なるが如く、福德も亦た無量無邊なり。諸の能く佛道を破する事を略説して、此の中に皆破戒と名く。是の破戒の垢を離るるを、皆清淨と名く。乃ち聲聞辟支佛心に至るすら、尚ほ是れ戒の垢なり。何に況んや餘惡をや。

三 戒清淨の義解。  
四 持戒は布施に勝る。  
五 恩を知り、恩を報ずの義解。

三 恩を知り、恩を報ずとは、有人の言はく、「我れ當に宿世の福德因縁もて應に得べし」と。或は言ふ、「我は自然に尊貴なり。汝に何の恩かあらん」と。是の邪見に墮す。是の故に佛説きたまはく、「菩薩は應に恩を知るべし」と。衆生は宿世の樂因ありと雖も、今世の事と合せずんば、則ち樂を得るに由なし。譬へば、穀種地に在れども、雨なければ則ち生ぜず。地は能く穀を生ずるを以ての故に、雨に思なしと言ふべからざるが如し。受くる所の物は、是れ宿世に種うる所なりと雖も、供奉の人の敬愛好心、豈に恩分に非ざらんや。

復次に、(三) 恩を知るは、是れ大悲の本、善業を開くの初門なり。人に愛敬せられ、名譽遠く聞え、死しては、則ち天に生じ、終に佛道を成す。恩を知らざる人は、畜生よりも甚し。(三) 佛本生經に説き給ふが如し。有人山に入りて木を伐り、迷惑して道を失す。時に、暴雨に値ひ、日暮れ、飢寒し、惡蟲毒獸、來りて侵害せんと欲す。是の人、一の石窟に入るに、窟中に大なる熊あり。之を見て恐怖して出づ。熊、之に語つて言はく、「汝、恐怖すること勿れ。此の舍は温暖なり、中に於て宿るべし」と。時に連雨七日なり。常に甘果、美水を以て、此の人に供給す。七日にして雨止む。熊、此の人を將ゐて其の道徑を示し、熊は人に語りて言はく、「我は是れ罪身にして、多くの怨家あり。若し問ふ者ありとも、我を見たりと言ふこと莫れ」と。「この」人答へて言はく、「爾なり」と。此の人前み行くに、諸の獵者を見る。獵者問うて言はく、「汝は何れより來るや。衆獸あるを見るや不や」と。答へて言はく、「我は一の大なる熊を見たるも、此の熊は我に於いて恩あり、汝に示すことを得ず」と。獵者言はく、「汝は是れ人なり。當に人類を以て相親しむべし。何を以てか熊を惜むや。今一たび道を失すとも、何れの時か復た來らん。汝、我に示さば、汝に多分を與へん」と。此の人よ、心變じて、即ち獵者を將ゐて、熊の處所を示す。獵者、熊を殺して即ち多分を以て之に與ふ。此の人手を展べて、肉を取るに、二肘俱に墮つ。獵者言はく、「汝は何の罪かある」と。答へて言はく、「是の熊は、我を看ること、父の子を視る

【三】 知恩と不知恩の相異。

【三】 本生經に於ける不忘恩漢罪業の因縁。

が如し。我れ今恩に背けり。將に是れ此の罪なり」と。獵者は恐怖して、敢へて肉を食せず。持して衆僧に施す。爾の時、上座の六通の阿羅漢、諸の下座に語るらく、「此は是れ菩薩なり、未來世に當に佛と作るべし」と。此の肉を食ふことなく、即時に塔を起てて供養す。王、此の事を聞き、勅を國內に下す、「恩を知らざる人をして、此に任せしむると無からしめよ」と。又種種の因縁を以て、恩を知る者を讃す。恩を知る人の義は、閻浮提に遍ねく、人皆信行す。

復次に、菩薩は是の念を作す、「若し人の惡事を、我に於て有するすら、猶尙度すべし。何に況んや、我に於いて恩あるをや」と。忍辱力に住すと、忍波羅蜜(多)の中に廣く説くが如し。

問うて曰く、種種の因縁は是れ忍辱の相なり。此の中に何を以てか但

【三六】 第七問、忍辱の相に種種あり、何故に但だ不瞋不惱のみを説くか。  
【元】 歡喜を受くの義解。

不瞋不惱のみを説くや。答へて曰く、此は是れ忍辱の體なり。先づ瞋心を起こして、然る後に身口もて他を惱ます。是れ菩薩の初行なるが故に、但だ衆生忍を説いて、法忍を説かざるなり。歡喜を受くとは、菩薩は、是の持戒を見るが故に、身口清淨に、恩を知りて、忍辱なるが故に、心清淨なるが故に、則ち自然に歡喜を生ず。譬へば、人、香湯に沐浴し、好き新衣を著け、瓔珞もて莊嚴し、鏡中に自ら觀せば、心に歡喜を生ずるが如し。菩薩も亦た是の如く、是の善法を得て自ら莊嚴す。戒は是れ禪定智慧の根本なり。我れ今是の淨戒を得れば、無量無邊の福德、皆應に得易し。是を以て自ら

喜ぶ。菩薩は是の戒忍の中に住して、衆生を教化し、他方の佛前に生ずることを得、及び天上人中に生じて樂を受けしめ、或は聲聞、辟支佛乘を得せしむる者なり。衆生の樂著を觀すること、長者の小兒の共に戯るるを見て、亦た之と同じく戯れ、更に少しく異なる物を以て之に與へ、前の好む所を捨てしむるが如し。菩薩も亦た是の如く、衆生を教化して、人天の福樂を得せしめ、漸漸に誘進して三乘を得せしむ。是を以ての故に、歡喜の樂を受くと云ふ。一切衆生を捨てずとは、善く大悲心を修習し、誓つて衆生を度するが故に、發心牢固なるが故に、諸佛、賢聖の爲に輕笑せられざるが故に、一切衆生に負くを恐るるが故に、捨てざるなり。譬へば、先づ人に物を許し、後、若し與へざれば、則ち是れ虚妄の罪人なるが如し。是の因縁を以ての故に衆生を捨てず。大悲心に入るとは先に説けるが如し。此の中に佛自ら説きたまはく、「奉願の天心は衆生の爲の故なり」と。所謂、一一の人の爲の故に、無量劫に於いて、代りて地獄の苦を受け、乃ち是の人をして、功德を集行して佛と作り、無餘涅槃に入らしむるに至る。

問うて曰く、代りて罪を受くる者あること無し、何を以てか是の願を作すや。答へて曰く、是の菩薩は、弘大の心深く、衆生を愛す。若し代る理あれば、必ず代ること疑はざるなり。復次に、菩薩は、人間を見るに、天祠あり、人の肉血、五藏を用つて羅刹鬼を祀る。人の代る者あ

【一〇】 一切衆生を捨てずこの義解。  
 【四】 大悲心に入るの義解。  
 【五】 第八問、世に代りて罪を受くるものなし、何を以てか是の願をなすや。

れば、則ち聽す、菩薩は是の念を作す、「地獄の中に、若し當に是の如き代る理あらば、我れ必ず當に代るべし」と。衆人は菩薩の信心の是の如くなるを聞いて、則ち之を貴敬し尊重す。何となれば是の菩薩は、深く衆生を念すること、慈母に踰ゆるが故なり。師を信じ、恭敬し、諍受すとは、菩薩は師に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得。云何が師を信敬し、供養せざらん。智徳高明なりと雖も、若し恭敬供養せずんば、則ち大利を得ること能はず。譬へば、深き井は美水なれども、若し練なければ、水を得るに由なきが如し。若し憍慢、高心を破して、宗重敬伏なれば、則ち功徳の大利之に歸す。又雨は墮ちて山頂に住せず、必ず下處に歸するが如く、若し人、憍心にして、自ら高ければ、則ち法水入らず、若し善師を恭敬すれば、則ち功徳之に歸す。

復次に、佛説き給はく、「善師に依止すれば、持戒、禪定、智慧、解脱、皆增長することを得し」と。譬へば、衆樹は雪山に依れば、根莖、枝葉、華果、皆茂盛なることを得るが如し。是を以ての故に、佛説きたまはく、「諸の師に於いて、之を宗敬すること、佛の如くせよ」と。

問うて曰く、「惡師を云何が供養し、信受することを得ん。善師すら、之を視ると、佛の如くなると能はず、何に況んや惡師をや。佛は何を以ての故に、此の中に、諸師に於いて尊重すること、世尊を想ふが如くせよと説きたまふや。答へて曰く、菩薩は、世間の法に順すべからず。世間の法に順すれ

【三】 師を信じ、恭敬し、諍受すの義解。

【四】 第九問、惡師を尊重すべし理由如何。

ば、善者は心著し、悪者は「之を」遠離す。菩薩は則ち然らず。若し能く深義を開釋し、疑結を解散すること有りて、我に於いて益あれば、則ち心を盡くして之を敬し、餘惡を念せず、弊囊に寶を盛らんに、囊の悪しきを以ての故に、其の寶を取らざることを得ざるが如く、又夜、嶮道を行き、弊人炬を執るに、人の悪しきを以ての故に、其の照を取らざることを得ざるが如し。菩薩も亦た是の如く、師に於いて、智慧の光明を得、其の惡を計らず。

復次に、弟子は應に是の念を作すべし、「師は般若波羅蜜(多)を行するに、無量の方便の力あり。知らず、何の因縁を以ての故に、此の惡事あるや」と。薩陀波輪の空中に、十方の佛の教を聞くが如し、「汝は法師に於いて、其の短を念すること莫れ、常に畏敬を生ぜよ」と。

復次に、菩薩は是の念を作す、「法師の惡を好むは、是れ我事にあらず。

我が求むる所の者は、唯法を聞いて以て自ら利益せんと欲す。泥像、木像の如きは、實の功德なけれども、佛想を發するに因るが故に、無量の福德を得。何に況んや、是の人は智慧、方便もて能く人の爲に説くをや。是を以ての故に、法師には過ありと雖も、我に於いて咎なし」と。(四) 世尊を想ふが如しとは、我先に菩薩は世人に異なることを説けり。世人は好醜を分別して、好き者に愛著す、猶ほ佛に如かず、悪しき者を輕慢することは、了に比數せず。菩薩は則ち然らず、諸法の畢竟空を觀じ、本より已來、皆無餘涅槃の相の如くし、一切衆生を觀じて、之を視ると佛の如くす。何に況んや法師を

【四五】世尊を想ふが如しの義解。

や。智慧利益ありて、能く佛事を作すを以ての故に、之を視ること佛の如し。諸波羅蜜〔多〕を勤求すとは、菩薩は是の念を作す、「是の六波羅蜜〔多〕は、是れ無上正眞道の因縁なり。我れ當に一心に、是の因縁を行すべし」と。譬へば、商人、農夫の適する所の國土、須ふる所の物、地に宜しき所の種子に隨つて、勤修し求辦するに、事として成らざること無きが如く、又今世に布施を行すれば、後に大富を得、戒を持てば、後に尊貴を得、禪定智慧を修すれば、道を得るが如し。菩薩も亦是の如く、六波羅蜜〔多〕を行すれば、則ち佛と成ることを得。勤求とは、常に一心に六波羅蜜〔多〕を勤求するなり。何となれば、若し軟心にして漸進せば、則ち煩惱の爲に覆はれ、魔人に壞せらる。是を以ての故に、佛説きたまはく「一地の中に於いて、勤求して懈ること莫れ」と。多く學問して厭足すること無しとは、菩薩は多く學問して、是の智慧の因縁を知り、智慧を得れば、則ち能く分別して道を行す。人に眼あれば、至る所に礙なきが如し。是の故に菩薩は、是の願を作す、「十方の諸佛の説きたまふ所の法あり。我れ盡く受持せん。聞持陀羅尼の力の故に、清淨なる天耳力の故に、不忘陀羅尼の力を得るが故に」と。譬へば、大海の能く一切十方の諸水を受持するが如し。菩薩も亦た是の如く、能く十方諸佛の、所説の法を受持す。〔四六〕 布施を淨むとは、苗中に草を生せんに、穢を除けば、則ち茂るが如し。菩薩も亦是の如く、法施の時、名利、後世の果報を求めず、乃至衆生の爲の故に、小乘の

〔四六〕 諸波羅蜜多を勤求すの義解。  
 〔四七〕 多く學問して厭足することなしの義解。  
 〔四八〕 法施を淨むの義解。

涅槃を求めず、但大悲のみを以て、衆生に於て、佛の轉法輪、法施の相、莊嚴なる佛國の相に隨ひ、世間の無量の勤苦を受け、慚愧處に住し、阿蘭若住處を捨てざるなり。少欲知足は先に説くが如し。問うて曰く、(四)種種の因縁は、生死の中に厭はざるあり。何を以ての故に、但二因縁を厭はずと説くや。答へて曰く、是れ善根備具の故に、生死の中に在るも苦惱薄少なり。譬へば、人瘡あらんに、良藥を之に塗れば、其痛差えて少し。菩薩は善根を得て清淨なるが故に、今世の憂愁、嫉妬、惡心等悉く皆止息す。若し更に身を受くれば、善根の果報を得、自ら福樂を受け、自ら福樂を受け、亦た種種の因縁もて衆生を利益し、其所願に隨つて自ら世界を淨め、世界嚴淨にして、天宮に勝り、之を視るに厭ふこと無く、能く大菩薩の心を慰釋す。何に況んや凡夫をや。是を以ての故に、多くの因縁ありと雖も、但た二事のみを厭ふと無しと説く。慚愧に種種ありと雖も、此の中に大なる者は、聲聞辟支佛心なり。菩薩は發心して、廣く一切衆生を度せんと欲す。苦惱を少なくすることを得て、獨り涅槃を取らんと欲するは、是れ慚愧すべし。譬へば、人ありて、大に飭誡を設けて、衆人を請呼せんに、慳吝の心起りて、便ち自ら獨り食するは、甚だ慚愧すべきが如し。(五)阿蘭若住處を捨てずとは、衆を離れて獨り住し、若し聲聞辟支佛心を過ぐれば、是れ衆を離ると名く。一切法は、無所得空なるを以ての故に取らず。相に著せず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提も亦た取らず。著

【四九】第一〇問、生死の中に厭はざる種種の因縁あり、但二因縁を厭はずといふ理由如何。

【五〇】阿蘭若處を捨てずの義解。

心あること無きを用つての故なり。菩薩は、常に諸の功德を集めて、厭足すること無し。無上道を得れば、則ち足り、更に勝法なきが故なり。飲食、衣服、臥具に足ることを知るは、是れ善法の因縁にして、以て要と爲さざるが故に説かず。三頭陀の功德を捨てずとは、後に覺魔品の中に、無生法忍を説くが如し。此の中には、無生法忍を以て、頭陀と爲す。菩薩は、順忍に住して、無生忍を觀ず。是の十二頭陀は、持戒清淨の爲の故なり。持戒清淨なるは、禪定の爲の故なり。禪定は、智慧の爲の故なり。無生法忍は、即ち是れ眞の智慧、無生法忍は、是れ頭陀の果報なり。「そは」果中に因を説けばなり。戒を捨てず、戒相を取らずとは、是の菩薩は諸法實相を知るが故に、尙持戒を見ず、何に況んや破戒をや。種種の因縁ありと雖も戒を破らず、此れ最も大と爲す。空解脱門に入るが故なり。汗穢の諸欲は、先に説けるが如し。此の中に佛説きたまはく、「是の心相は、虚誑不實なりと知るが故に、乃ち欲心を生ぜざるに至る。何に況んや欲を受けんや」と。世間の心を厭ふとは、世間不可樂想中に説くが如し。此の中に、佛説きたまはく、「厭心の果報は所謂、無作解脱門なり」と。一切の所有を捨つとは先に説くが如し。心を没せずとは、先に已に、種種の因縁もて説けり。菩薩は是の不没不畏の相を聞く。二識處に生ぜずとは、二識處とは、所謂、眼の色中に眼識を生ぜず、乃至意法の中に意識を生ぜざるなり。菩薩は、是の不二門の中に住して、六識の所知、皆是れ虚誑無實なる

【五二】 頭陀の功德を捨てずの義解。

【五三】 戒を捨てず、戒相を取らずの義解。

ことを觀じて、大誓願を作す。「一切衆生をして、不二法の中に住して、是の六識を離れしめん」と。

【五】一切の物を惜まざるとは、一切の物を惜まざる中に種種の因縁ありと雖も、此の因縁は最大なり。所謂る菩薩は、一切法の畢竟空を知り、憶念して一切の取相を滅せず。是の故に受者に於いて思を求めず、惠施の中に高心なく、是の如くにして清淨なる檀波羅蜜「多」を具す。

【六】行者は道を妨ぐるを以ての故に出家せり。若し復た白衣に習近せば、則ち木と異なると無けん。是を以ての故に、行者は先づ自度を求めて、然る後に人を度す。若し未だ自ら度すること能はずして、而も人を度せんと欲する者は、浮ぶことを知らざる人の、溺るるを救はんと欲して、相與俱に没するが如し。是の菩薩は、白衣に親しむことを遠離すれば、則ち能く諸の清淨の功德を集め、深く佛を念するが故に、身を變じて諸の佛國に往至し、出家して頭を剃り、染衣を著く。何となれば、出家の法を樂んで、白衣に習近することを樂ばざるが故なり。比丘尼を遠離すとは、初品中に説くが如し。

問うて曰く、菩薩は等心に一切衆生を觀る。云何が共に住することを得ざるや。答へて曰く、是の菩薩は未だ阿鞞跋致を得ず、未だ諸漏を斷きず、諸の功德を集むる人にして、樂に著する所なり。是を以ての故に、共に住することを得ず。又人の誹謗を離るるが爲なり。若し誹謗する者は、地獄に

【五】一切の物を惜まざるの義解。

【六】白衣に親近することを遠離すの義解。

【五】第一一問、菩薩は怨親平等なり、何故に共に住すべからざるや。

障するが故なり。他家を慳惜すること遠離すとは、菩薩は是の念を作す、「我れ自ら家を捨つすら、尚ほ貪らず惜まず、云何が他家を貪惜せんや」と。菩薩の法は一切衆生をして、樂を得せしめんと欲す。彼の人は、我が衆生に樂を與ふることを助く、云何が慳惜せんや。衆生は、先世の福德因縁、今世に少し。功夫あるが故に我を供養することを得、何を以てか慳嫉せんや。無益の談説を遠

離すとは、此は即ち是れ綺語にして、自心他心の愁事を解くことを爲す。王法の事、賊の事、大海、山林、藥草、寶物、諸方の國土、是の如き等の事を説くは、福に於て益なく、道に於て益なし。菩薩は一切衆生の無常、苦火に没在するを愍念す。云何が安坐して、空く無益の事を説かん。如し人、火を失して、四邊に俱に起らば、云何が其内に安處して、餘事を語り説かんや。此中に、佛説き給はく、「若し聲聞辟支佛の事を説くすら、猶ほ無益の言と爲す、何に況んや餘事をや」と。瞋恚を遠離すとは、心中に

初めて生ずるを瞋心と名く。未だ定まらざるを以ての故なり。瞋心增長して事定まり、打砕し、殺害する、是を惱心と名け、惡口し譏謗する、是を誑心と名け、若し殺害し、打縛する等は、是を鬪と名く。菩薩大慈悲の衆生なるが故に則ち是の心を生ぜず。常に此惡心を防ぎて入るとを得せしめず。

自ら大にして、人を蔑むを遠離すとは、内外の法を見ず、所謂受の五衆、不受の五衆なり。

【五〇】 他家を慳惜することを遠離すの義解。

【五一】 無益の談説を遠離すの義解。

【五二】 瞋恚を遠離すの義解。

【五三】 自ら大にして、人を蔑むことを遠離すの義解。

【五四】 十不善道を遠離すの義解。

十

不善道を遠離すとは、菩薩は十不善道中の過罪、種種の因縁を觀ずることは先に説くが如し。此の中に佛説きたまはく、「十不善道は、小乗を破る、何に泥んや大乘をや」と。(二)大慢を遠離すとは、菩薩

は十八空を行じて、諸法は定んで、大小の相あるを見ず。(三)自用を遠離すとは、七種の憍慢の根本を抜くが故に、又深く善法を樂しむが故なり。(四)顛倒を遠離すとは、一切法中に淨、樂、我、淨は不可得なるが故なり。(五)三毒を遠離すとは、三毒の義は先に説くが如し。又此の三毒の所縁には定相ある

ことなし。六波羅蜜「多」とは先に説くが如し。此の中に佛説きたまはく、

「三乗の人は、皆此の六波羅蜜「多」を以て、彼岸に到るとを得し」と。

問うて曰く、(六)此は是れ菩薩地なり。何を以てか、聲聞辟支佛は彼岸

に到ることを得と説くや。答へて曰く、六波羅蜜「多」は多く能くする所あり、大乘法中には則ち能く小乗を舍受し、小乗は則ち能はず。是の菩薩

六地の中に住して六波羅蜜「多」を具足し、一切諸法の空を觀するも、未だ方便力を得ずして、聲聞、辟

支佛地に墮せんとを畏る。佛は將の護りたまふが故に、「聲聞、辟支佛心を生ずべからず」と説きたま

へり。菩薩は、深く衆生を念するが故に、大悲心の故に、一切諸法の畢竟空なることを知るが故に、

施す時に惜む所なく、求むる者あるを見れば、瞋らず、憂ひず布施の後、心に亦悔いず、福德大なる

が故に、信力も亦大に、深く清淨に諸佛を信敬したてまつり、六波羅蜜「多」を具足し、未だ方便を得

- 【六一】 大慢を遠離すの義解。
- 【六二】 自用を遠離すの義解。
- 【六三】 顛倒を遠離すの義解。
- 【六四】 三毒を遠離すの義解。
- 【六五】 第一二問。聲聞辟支佛は何を以て彼岸に到るや。

すと雖も、無生法忍、般舟三昧の深法の中に於て、亦疑ふ所なく、是の念を作す。「一切の論議は皆過罪あり。唯佛の智慧のみよ、諸の戲論を滅して、闕失あること無きが故に、而も能く方便を以て諸の善法を修す。是の故に疑はず」と。

# 巻の第五十

發趣品第二十の餘を釋す。

釋

二何が菩薩は我に著せずとするや。(そは)畢竟無我なるが故なり。云何が菩薩は衆生に著せず、壽命に著せず、衆數乃至知者、見者に著せずとするや。(そは)是の諸法は畢竟不可得なるが故なり。云何が菩薩は隨見に著せずとするや。(そは)法として斷するもの有ると無く、諸法は畢竟不生なるが故なり。云何が菩薩は常見に著せずとするや。若し法不生ならば、是れ常と作さざればなり。云何が菩薩は相を取るべからずとするや。(そは)諸の煩惱なきが故なり。云何が菩薩は内見を作すべからずとするや。(そは)諸見不可得なるが故なり。云何が菩薩は名色に著せずとするや。(そは)名色處の相は無なるが故なり。云何が菩薩は五衆に著せず十八界に著せず十二入に著せずとするや。(そは)是の諸法の性無きが故なり。云何が菩薩は三界に著せずとするや。(そは)三界の性無きが故なり。云何が菩薩は應に心に著不作すべからずとするや。云何が菩薩は應に願を作すべからずとするや。云何が菩薩は應に依止を作すべからずとするや。(そは)是の諸法の性無きが故なり。云何が菩薩は佛に依るの見到著せずとするや。依見を作せば佛を見上らざるが故なり。云何が菩薩は法に依るの見到著せずとするや。(そは)法は見るべからざるが故なり。云何が菩薩は僧に依るの見到著せずとするや。(そは)僧相は無爲にして依るべからざるが故なり。云何が菩薩は戒に依るの見到著せずとするや。(そは)罪無罪に著せざるが故なり。是を菩薩は七地の中に住して二十法に著すべからざる所と爲す。云何が菩薩は應に三空を具足すべしとする

【一】菩薩は七地の中に住し、我等の二十法不可得の故に著せず。  
 【二】空を具足すとは、十八空、人空、法空、空空、畢竟空にして著せざるをいふ。

や。(「そは」諸法は自相空を具足するが故なり。云何が菩薩は 無相を證すとするや。(「そは」諸相を念ぜざるが故なり。云何が菩薩は無作を知るとするや。(「そは」三界の中に於て作さざるが故なり。云何が菩薩は 四分清淨なりとするや。(「そは」十善道を具足するが故なり。云何が菩薩は一切衆生の中慈悲智具足すとするや。(「そは」大悲を得るが故なり。云何が菩薩は一切衆生を念ぜずとするや。(「そは」世界を淨むるとを具足するが故なり。云何が菩薩は一切法を等しく觀ずとするや。(「そは」諸法に於て損益せざるが故なり。云何が菩薩は諸法實相を知るとするや。(「そは」諸法實相、知ると無きが故なり。云何が菩薩は無生忍なるや。(「そは」諸法は不生不滅、不作忍の爲の故なり。云何が菩薩は無生智なるや。(「そは」名色の不生なるを知るが故なり。云何が菩薩は諸法の一相を説くとするや。(「そは」心に二相を行ぜざるが故なり。云何が菩薩は分別相を破すとするや。(「そは」一切法を分別せざるが故なり。云何が菩薩は憶想を轉ずとするや。(「そは」小大の無量の相轉ずるが故なり。云何が菩薩は 見を轉ずとするや。(「そは」聲聞辟支佛地に於て見を轉ずるが故なり。云何が菩薩は煩惱を轉ずとするや。(「そは」諸の煩惱を轉ずるが故なり。云何が菩薩の 定慧を等うる地とするや。所謂、一切種智を得るが故なり。云何が菩薩は意を調ふとするや。(「そは」三界に於て不動なるが故なり。云何が菩薩は心寂滅なりとするや。(「そは」六根を制するが故なり。云何が菩薩は無礙智なりとするや。(「そは」佛眼を得るが故なり。云何が菩薩は愛に染ますとするや。(「そは」六塵

【三】 無相とは、涅槃の異名なりと知れ。

【四】 三分清淨とは身口意の三業、等しく清淨なるをいふ。

【五】 大悲とは、衆生緣、法緣、無緣の三緣の中、無緣をいふ。法性空、實相空の悲なり。

【六】 憶想を轉ずとは、内心に諸法を分別憶想するを破す。

【七】 見を轉ずとは、先づ我見、邊見等を轉じて悟り、法見、涅槃見を轉じて二乘を過ぎ、佛道に趣くなり。

【八】 定慧を等うる地とは、初の三地は慧多くして定少なく、次の三地は定多くして慧少きも、今は二空によるが故に定慧等同なるをいふ。

【九】 六塵を捨つとは、色聲香味觸法の中に於て、捨心を以て、好惡の相を取らざるをいふなり。

を捨つるが故なり。是を菩薩は七地の中に住して、二十法を具足すと爲す。

【一〇】 云何が菩薩は、衆生の心に順入すとすや。菩薩は一心を以て、一切衆生の心及び心數法を知るなり。云何が菩薩

は、諸の神通に遊戲すとすや。是の神通を以て、一佛國より一佛國に至り、亦た佛國の想をも作さざるなり。云何が菩薩は、諸の佛國を觀すとすや。自ら其の國に住し、無量の諸の佛國を見、亦た佛界の想無きなり。云何が菩薩は、見る所の佛國の如く、自ら其の國を莊嚴すとすや。轉輪聖王の地に住し、遍れく三千大千世界に至り、以て自ら莊嚴するなり。云

何が菩薩は、如實に佛身を觀すとすや。(そは)如實に法身を觀するが故なり。是を菩薩は八地の中に住して、五法を具足すと爲す。

云何が菩薩は、上下の諸根を知るとすや。菩薩は佛の十力に住して一切衆生の上下の諸根を知るなり。云何が菩薩は、佛國を淨むとすや。(そは)衆生を淨むるが故なり。

云何が菩薩の如幻三昧とするや。是の三昧に住して、能く一切の事を成辦し、亦心相をも生ぜざるなり。云何が菩薩は、常に三昧に入るとすや。(そは)菩薩は報生三昧を得るが故なり。云何が菩薩は衆生所應の善根に隨つて身を愛くとすや。(そは)菩薩は衆生の善根を生ずべき所を知り、爲に身を受けて衆生を成就するが故なり。是を菩薩は八地の中に住して、五法を具足すと爲す。

云何が菩薩は、無邊の國土、度する所の分を受くとすや。十方無量の國土中の衆生を、諸佛の法の如く、度すべき所の者は之を度脱するなり。云何が菩薩は、願ふ所の如くなることを得とするや。(そは)六波羅蜜(多)を具足するが故なり。

云何が菩薩は諸天・龍・夜叉・提闍婆の語を知るとすや。(そは)辭辯の力の故なり。云何が菩薩は、胎生を成就すとすや。

【一〇】 菩薩は八地の中に於いて五法を具足す。

【一一】 心數法とは、新譯家の所謂心所にて、即ち諸の精神作用なり。

【一二】 報生三昧、果報得の定なれば、眼色を以て勞せざるが如し。

【一三】 菩薩は九法の中に於いて二十法を具足す。

〔そは〕菩薩は世に常に、化生するか故なり。云何が菩薩は家を成就すとすや。〔そは〕常に大家に在りて、生ずるか故なり。云何が菩薩は、所生を成就すとすや。そは若くは刹利家に生じ、若くは婆羅門家に生ずるか故なり。云何が菩薩は、姓を成就すとすや。〔そは〕過去の菩薩の生ずる所の姓の如く此の中より生ずるか故なり。云何が菩薩は眷屬を成就すとすや。純ら諸の菩薩摩訶薩を眷族と爲すが故なり。云何が菩薩は出生成就すとすや。〔そは〕生ずる時、光明遍れく無量無邊の世界を照らし、亦た相を取らざるか故なり。云何が菩薩は出家成就すとすや。出家の時、無量百千億の諸天、出家に侍従し、是の一切の衆生は、必ず三乘に至ればなり。云何が菩薩は、佛樹を莊嚴することを成就すとすや。是の菩提樹は、黄金を以て根と爲し、七寶を莖、節、枝、葉と爲し、莖、節、枝、葉の光明、遍れく十方阿僧祇の三千大千世界を照らすなり。云何が菩薩は、一切諸の善根、功德を成満し具足するや。菩薩は衆生を清淨にし、佛界をも亦た淨むることを得、是を菩薩は九地中に住して十二法を具足すと爲す。

【一四】 姓の如くとは、過去の七佛の中、三佛は憍陳如(Kāśyapa)を姓とし、三佛は迦葉(Kāśyapa)を姓とし、釋尊は瞿曇(Saṅgha)を姓とするが如し。

【一五】 菩薩は第十地に於いて、當に佛の如しと知る。

【一六】 習とは、煩惱の餘習、即ち情性なり。

云何が菩薩は、十地の中に住し、當に佛の如しと知るべしといふや。若し菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を具足し、四念處乃至十八不共法、一切種智を具足し圓滿して、一切の煩惱及び(六)習を斷ず、是を菩薩摩訶薩、十地の中に住し、當に佛の如しと知るべしと爲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の十地の中に住し、方便力を以ての故に、六波羅蜜(多)を行じ、四念處乃至十八不共法を行じ、乾慧地、性地、八忍地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地を過ぎ、是の九地を過ぎて佛地に住す。是を菩薩の十地と爲す。是の如く、須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。

論

論者言はく、我等の二十法は、不可得なるが故に著せず。不可得の因縁は、先に種種に説けるが如し。我見、乃至知者、見者、佛見、僧見は、是れ衆生空に入るが故に、是の見到著すべからず。餘の斷常乃至戒見、是の法は空なるが故に著すべからず。

問うて曰く、餘は知るべし、因見は云何。答へて曰く、一切の有爲法は、展轉して因果と爲る。是の法の中に著し、心に相を取りて、見を生ずる、是を因見と名く。所謂、因に非ざるを因と説き、或は因果の一異なるを説くなり。空を具足すとは、若し菩薩、能く盡く十八空を行せば、是を空を具足すと名く。

復次に、二種の空、「即ち」衆生空と法空を行する、是を空を具足すと名く。復次に、若し菩薩、能く畢竟空を行じて、中に於いて著せざれば、是を空を具足すと名く。

問うて曰く、若し爾らば、佛は此の中に何を以てか、但自相空のみを説きたまひしや。答へて曰はく、此の三種の空は、皆是れ自相空なり。六地に住する菩薩は、福德を以ての故に利根なり。利根なるが故に、諸法を分別して相を取る。是を以ての故に七地の中には、相空を以て具足空と爲す。佛は或る時には有爲空無爲空を説いて空を具足す

- 【一七】 衆生空とは、所謂人空といふに同じく、個人的の我は、五蘊假相合のものなるが故に空なりといふ義なり。
- 【一八】 斷常。有情の身心は、一期を限つて斷絶すと見るを斷見といひ、之に反して身心共に常住不滅と見るを常見といふ。
- 【一九】 第一問、因見とは何ぞや。
- 【二〇】 因見の義解。
- 【二一】 空を具足すの意義。
- 【二二】 第二問、佛が此の中に、但自相空のみを説き給ひし理由如何。

と爲したまひ、或る時には不可得空を説いて空を具足すと名けたまへり。無相を證すとは、(三)無相は即ち是れ涅槃にして證すべく修すべからず。修すべからざるが故に、知ると言ふことを得ず。無量無邊にして、分別すべからざるが故に、具足すと云ふことを得ず。無作を知るとは、三事は通ずと雖も、是の二事を知りて、更に義を以て其の名を立つ。無作は但名のみを知るに有り。(四)三分清淨なりとは、所謂十善道にして、身の三、口の四

(五)意の三、是を三分と名く。已の上に二解脱門を説くが故に、此の中に

は復た説かず。三分清淨なりとは、或は人の身業清淨にして、口業清淨ならず、口業清淨にして、身業清淨ならず、或は身口業は清淨なれ

ども、意業は清淨ならざるあり。或は世間に三業清淨なるも、而も未だ著

を離るること能はざるものあり。是の菩薩は、三業清淨にして、及び著

を離るるが故に、是を三分清淨なりと名く。一切衆生の中にて、慈悲と

知とを具足すとは、(六)悲に三種あり、衆生縁、法縁、無縁なり。此の中に

は無縁の大悲を説いて具足すと名く。所謂の法空乃至實相に至るまで、亦た空なり。是を無縁の大

悲と名く。菩薩は深く實相に入り、然る後に衆生を悲念す。譬へば人に一子あり、好き寶物を得、深

心に愛念して、以て之を與へんと欲するが如し。一切衆生を念せずとは、所謂の世界を淨むることを

- 【三】 無相は即ち涅槃なり。
- 【四】 身・口・意業の三分清淨の義。
- 【五】 身の三とは、不殺生、不偷盜、不邪淫なり。
- 【六】 口の四とは、不飲酒、不妄語、不說過、不自讚毀他なり。
- 【七】 意の三とは、不慳寶財、慚慮、不誇三寶なり。
- 【八】 三種の悲とは、(一)衆生縁と、(二)法縁と、(三)無縁とを云ふなり。

具足するが故なり。

問うて曰はく、(二五)若し衆生を念せずんば、云何が能く佛世界を淨むるや。答へて曰はく、菩薩は衆生をして、十善道に住せしめ、佛國を莊嚴することを爲す。莊嚴すと雖も、未だ無礙の莊嚴を得ず。菩薩をして、衆生を教化し、衆生の相を取らざらしむれば、諸の善根・福德・清淨なり。諸の善根・福德・清淨なるが故に、是れ無礙莊嚴なり。(二六)一切の法等しく觀ずとは、法等忍の中に説くが如し。此の中に佛自ら説きたまはく、「諸法に於いて増損せず」と。諸法の實相を知るとは、先に種種の因縁廣く説くが如し。(二七)無生法忍とは、生滅なき諸法實相の中に於いて、信受し通達して、無礙不退なり、是を無生忍と名く。(二八)無生智とは、初は忍と名け、後を智と名く。麤なる者は忍、細なる者は智なり。佛自ら説きたまはく、「名色の不生なることを知るが故なり」と。(二九)諸法は一相なりと説くとは、菩薩は、「内外の十二入は、皆是れ魔網にして、虚誑不實なり。此の中に於いて、六種の識を生ずるも、亦た是れ魔網にして虚誑なり」と知る。何者か是れ實にして唯不二の法なる。眼なく、色なく、乃至意なく、法なき等、是を實と名く。衆生をして十二入を離れしむるが故に、常に種種の因縁を以て、是の不二法を説く。(三〇)分別の相を破すとは、菩薩は是の不二法の中に住して、所縁の男

【一】 第三問、若し衆生を念せずんば、云何が能く佛界を淨むるや。

【二】 一切法等觀の義解。

【三】 無生法忍の義解。

【四】 無生智の義解。

【五】 諸法を一相なりと説くの義解。

【六】 分別の相を破するの義解。

女、長短、大小等、諸法を分別するを破す。(三) 憶想を轉ずとは、内心に諸法等を憶想し、分別するを破す。(三) 見を轉ずとは、是の菩薩は先づ我見、邊見等の邪見を轉じ、然る後に道に入る。今法見、涅槃見を轉ずるは、諸法に定相なきを以てなり。(三) 涅槃を轉ずとは、聲聞、辟支佛の見を轉じて、直に佛道に趣くなり。(三) 煩惱を轉ずとは、菩薩は福德、持戒の力を以ての故に、麤なる煩惱を折伏して、安隱に道を行ずるも、唯愛・見・慢等の微細の者の在る有り。今亦た細なる煩惱をも離る。

復次に、菩薩は實智慧を用つて、是の煩惱を觀ず、則ち是れ實相なり。

譬へば神通の人は、能く不淨を轉じて、淨と爲すが如し。(三) 定慧を等うする地とは、菩薩は初め三地に於いては慧多く定少し、未だ心を攝すること

能はざるが故なり。後の三地には定多く慧少し。是を以ての故に、菩薩位に入ることを得ず。今衆生空、法空にして、定慧等しきが故に、能く安隱

に菩薩の道を行じ、阿鞞跋致地より、漸漸に一切種智を得。(四) 慧地に意を調ふとは、是の菩薩は、先

づ老病死の三惡道を憶念し、衆生を愍念するが故に、心意を調伏し、諸法實相を知らしむるが故に、

三界に著せず、三界に著せざるが故に調伏す。(四) 心寂滅とは、菩薩は涅槃の爲の故に、先づ

五情を折伏し、意情は折し難きが故に、今、七地に住して、意情寂滅なり。

のの中に於いて、(三) 五情を折伏し、意情は折し難きが故に、今、七地に住して、意情寂滅なり。

【三】 憶想を轉ずるの義解。

【三】 見を轉ずるの義解。

【三】 涅槃を轉ずるの義解。

【三】 煩惱を轉ずるの義解。

【三】 等定慧地の義解。

【四】 慧地調意の義解。

【四】 心寂滅の義解。

【四】 五欲とは、財・色・食・名。

【四】 睡をいふ。

【四】 五情とは、眼・耳・鼻・舌。

【四】 身の五種の感覺をいふ。

【四】無礙智とは、菩薩は般若波羅蜜(多)を得て、一切の實、不實の法中に於いて無礙なり。是の道慧を得て、一切衆生を將ゐて實法に入り、無礙解脱を得、佛眼を得て、一切法の中に於いて、無礙ならしむ。

問うて曰はく、【五】是の七地の中に何を以てか佛眼を得と説くや。答へて曰はく、是の中に應に佛眼を學すべし。諸法に於いて無礙なること佛眼に似せり。【六】愛に染まらずとは、是の菩薩は七地に於いて、智慧力を得と雖も、猶ほ先世の因縁ありて此の肉身あり。禪定に入れ、ば著せざれども、禪定を出づる時は著氣ありて、此の肉眼の所見に隨ひ、好人を見ては親愛し、或は是の七地の智慧の實法を愛す。是の故に佛説きたまはく、「六塵の中に於いて捨心を行じ、好惡の相を取らず」と。【七】衆生の心に順入すとは、菩薩は是の八地の中に住し、一切衆生の心の趣く所を順觀し、動發し思惟し、深く念じて順觀し、智慧を以て分別すらく、「是の如きの衆生は、永く得度の因縁なし。是の衆生は、無量阿僧祇劫を過ぎて、然る後に度すべし。或は一劫、二劫、乃至、十劫にして度すべし。是の衆生は、或は一世、二世乃至、今世に度すべし。是の衆生は、或は即時に度すべき者なり。是は熟せり、是は未熟なり。是の人は聲聞乘を以て度すべく、是の人は辟支佛乘を以て度すべし」と。譬へば良醫の病を診して、瘡ゆることの久しき、近き、治すべき、治すべから

【四】 無礙智の義解。

【五】 第四問、七地の中に、佛眼を得と説く理由如何。

【六】 愛に染まらずの義解。

【七】 衆生の心に順入すとの義解。

ざるを知るが如し。(四八) 諸の神通に遊戯すとは、先に諸の神通を得て、今自在に遊戯することを得、能く無量無邊の世界に至る。菩薩は七地の中に住する時、涅槃を取らんと欲す。爾の時、種種の因縁及び十方の諸佛ありて、衆生を擁護し、心に衆生を度せんと欲し、莊嚴神通を好むに、意に隨つて自在にして、乃ち無量無邊の世界の中に、聖礙する所なく、諸佛の國を見たてまつり、亦佛國の相をも取らざるに至る。諸佛の國を觀ずとは、菩薩あり、神通力を以て、飛んで十方に到り、諸の清淨世界を觀じ、相を取りて自ら其の國を莊嚴せんと欲す。菩薩あり、佛將めて十方に至り、清淨世界を示したまふに、淨國の相を取りて自ら願行を作す。世自在王佛の法積比丘を將めて十方に至り、清淨世界を示したまへるが如し。或は有る菩薩は自らは本國に住し、天眼を用つて、十方の清淨世界を見、初は淨相を取るも、後に不著の心を得るが故に還つて捨つ。

(四九) 見る所の佛國の如く、其の國を莊嚴すとは、先に説くが如し。是の八地を轉輪地と名く。轉輪

聖王の寶輪の至る處には、礙なく、障なく、諸の怨敵なきが如し。菩薩は是の地の中に住して、能く法寶を雨らし、衆生の願を滿し、能く障礙するもの無し。亦た能く見る所の淨國の相を取り、而して自ら其の國を莊嚴す。(五〇) 如實に佛身を觀ずとは、諸佛の身を觀するに、幻の如く、化の如く、五衆、十二入、十八界の所攝にあらざるなり。若くは長、若くは短、若干種の色は、衆生の先世の業因縁の

【四八】 遊戯諸神通の義解。

【四九】 見る所の佛國の如く自ら其の國を莊嚴するの義解。

【五〇】 如實に佛身を觀するの義解。

見る所に隨ふ。此の中に佛自ら説き給はく、「法身を見る者、是れ佛を見たてまつると爲す。(五)法身とは不可得法空なり。不可得法空とは、諸の因縁の邊より生じ、法として自性あること無し」と。上根の諸根を知るとは、十方の中に説くが如し。菩薩は先づ一切衆生の心の所行を知り、誰か鈍、誰か利、誰か布施多く、誰か智慧多しと〔知り〕、其の多き者に因りて之を度脱す。(五)佛國土を淨むとは、二種の淨あり、一には菩薩は自ら其の身を淨め、二には衆生の心を淨めて清淨の道を行せしむ。彼我の因縁、清淨なるを以ての故に、所願に隨つて、清淨世界に入ることを得るなり。

【四】如幻三昧に入るとは、幻人は一處に住するも、所作の幻事は世界に遍滿するが如し。所謂の四種の兵衆、宮殿、城郭、飲食、歌舞、殺活、憂苦等なり。菩薩も亦た是の如く、是の三昧の中に住して、能く十方世界に於いて變化し、其の中に遍滿し、先づ布施等を行じて衆生に充滿し、次に法を説き、教化して三惡道を破壊し、然る後に衆生を三乘に安立し、一切の利益すべき所の事は成就せざる事なし。是の菩薩は心不動にして、亦心相をも取らざるなり。(五)常に三昧に入るとは、菩薩は如幻等の三昧を得て、役する所の心に能く所作の念あり、身を轉じて報生三昧を得。人の色を見るに、心力を用ゐざるが如く、是の三昧の中に住すれば、衆生を度すること安隱にして、如幻三昧に勝り、自然に事を成じて、役用する所なし。人の財を求む

るに、力を役して得る者あり、自然に得る者あるが如し。(五)衆生所應の善根に隨つて身を受くとは、菩薩は二種の三昧、二種の神通の行得、報得を得。何の身を以て、何の語を以て、何の因縁を以て、何の事を以て、何の道を以て、何の方便を以て「すべきか」を知り、而して爲に身を受け、乃至畜生の身を受けて、(毛)之を化度す。無邊の世界に度する所の分を受くとは、無量阿僧祇、十方世界の六道の中の衆生にして、是の菩薩の教化して度すべき所の者は之を度す。(六)是の世界に三種あり、淨なる有り、不淨なる「あり」、雜なる有り。是の三種の世界の中の衆生にして、應に度す可き所、利益ある者は皆之を攝取す。譬へば燈を然すは、目ある人の爲にして、盲者の爲ならざるが如し。菩薩も亦た是の如く、或は先に因縁ある者あり。或は始めて因縁を作す者あり。(七)復次に、(五)三千大千世界を一世界と名け、一時に起り、一時に滅す。是の如き等の、十方の如恆河沙等の世界は、是れ一佛の世界なり。(六)是の如き一佛の世界の數、如恆河沙等の世界は、是れ一佛世界の海なり。(七)是の如き佛世界の海の數、如十方恆河沙の世界は、是れ佛世界の種なり。是の如き世界の種は十方に無量なり。是を一佛世界と名け、一切世界の中に於いて、是の如き分を取る、是を一佛の度したまふ所の分と名く。(八)所願の如くなることを得とは、是の菩薩は、福德智慧を具足するが故に、願として得ざる無く、聽く者は、無量

【五】 衆生所應の善根に隨つて身を受くるの義解。

【五七】 これ八地の竟なり。

【五八】 三種の世界。

【五九】 一佛の世界の義解。

【六〇】 一佛世界の海。

【六一】 佛世界の種。

【六二】 所願の如くなることを得の義解。

無邊世界の度する所の分を聞き、疑は不可得なり。是を以ての故に、次に願ふ所、意の如しと説く。此の中に、佛自ら六波羅蜜〔多〕の具足を説きたまへり。〔三〕五度は則ち福德を具足し、般若は則ち智慧を具足す。諸天、龍、夜叉、提闍婆の語を知るとは、我、上に福德智慧を具足すれば、願ふ所意の如しと説けり、他人の種類の語を知るは、即ち是れ願ふ所の事なり。

復次に、菩薩は宿命智清淨なることを得るが故に、處處の生の一切の語を知るなり。復次に、願智を得るが故に、立名を知る者は、心に強ひて種種の名字語言を作す。復次に、菩薩は解衆生語言三昧を得るが故に、一切の語に通じて礙なきなり。

復次に、自ら〔四〕四無礙智を得、又復た佛の四無礙智を學す。是を以ての故に衆生の語言、音聲を知る。〔五〕處胎成就すとは、有る人の言はく、

「菩薩は白象に乗り、無量の兜率の諸天の與に、圍繞し恭敬し供養し侍從せられて母胎に入る」と。有る人の言はく、「菩薩の母は如幻三昧力を得るが故に、腹をして廣大無量ならしめ、一切の三千大千世界の菩薩、及び天、龍、鬼神皆な入出することを得、胎中に宮殿、臺觀あり。先づ床座を莊嚴し、繒幡蓋を懸け、華を散し香を燒く。皆是れ菩薩の福德業の因縁の感ずる所なり。然る後に菩薩は來り下りて之に處す。亦た

〔三〕五度とは、一に布施、二に忍辱、三に精進、四に禪定、五に智慧の五波羅蜜多なり。  
〔四〕四無礙智とは、(一)法無礙、名・句・文等能證の教を法といひ、教法に於て、滯ることなきを法無礙といふ。(二)義無礙、教法所詮の義理を知りて、滯ることなきをいふ。(三)辭無礙、諸方の言語に於て、通達自在なるをいふ。(四)樂說無礙、前の三種の智を以て、衆生の爲に樂說自在なるをいふ。  
〔五〕處胎成就の義解。

三昧力を以ての故に、下りて母胎に入り、兜率天上に於いては故の如し」と。(六六) 生成就すとは、菩薩生せんと欲する時は、諸天、龍、鬼神、三千大千世界を莊嚴し、是の時に七寶の蓮華座ありて、自然にして有り、母の胎中より無量の菩薩ありて先づ出で、蓮華の上に坐し、又手し讚歎して菩薩を俟待す。及び諸天、龍、鬼神、仙聖、諸の王女等は、皆手を合せて、一心に菩薩の生ずるを見んと欲す。然る後に、菩薩は母の右の脅より出づること、満月の雲中より出づるが如く、大光を放ちて無量の世界を照らす。是の時、大名聲ありて、十方世界に遍滿し、唱へて言はく、「某國の菩薩、末世の身生ず」と。或は有る菩薩は、蓮華に化生す。(六七) 四生の中に於いて、菩薩は胎生、化生なり。(六八) 四種の人中に於ては、菩薩は刹利、婆羅門の二姓の中に生ず。此の二種の姓に生るるは、人の貴ぶ所なるが故なり。(六九) 家成就すとは、婆羅門の家は智慧あり、刹利の家は力勢あり。婆羅門は後世を利益し刹利は今世を利益す。是の二種は世に於て益あり、是の故に菩薩は此の中に在りて生ず。

復次に、諸の功德法の家は、所謂不退轉の生なり。是を家生成就と名く。(七〇) 姓成就すとは、菩薩は兜率天上より、世間の何姓を貴と爲して、能く衆生を攝するかを觀じ、即ち是の姓中に於て生ず。(七一) 七佛の中、初の三佛は、橋陳如姓の中に生れ、次の三佛は、迦葉姓の中に生れ、釋迦文佛は

生成就すとは、菩薩

【六六】 生成就の義解。  
【六七】 四生とは、胎生と、卵生と、濕生と、化生となり。

【六八】 四種の人とは、婆羅門(僧族)と、刹帝利(武士族)と、毘舍(農工商族)と、首陀(奴隸族)となり。

【六九】 家成就の義解。  
【七〇】 姓成就の義解。  
【七一】 過去七佛の族姓。  
【七二】 Kāṇḍiyya  
カワンディヤ  
【七三】 Kāśyapa  
カシヤパ

【七四】 姓成就すとは、菩薩は

【七五】 復次に、諸の功德法の家は、所謂不退轉の生なり。

【七六】 是を家生成就と名く。

【七七】 即ち是の姓中に於て生ず。

(七) 橋曇姓の中に生れたまへるが如し。

復次に、菩薩は初より、深心にして牢固なり、是を諸佛の姓と名く。有る人の言はく、「無生法忍を得る、是れ諸佛の姓なり。是の時、佛の一切種智の氣分を得るが故なり。聲聞法の中の姓地人の如し」と。

(七五) 眷屬成就すとは、「眷屬は」皆な是れ智人、善人にして、世世に功德を積む。此の中に佛自ら説きたまはく、「純ら菩薩を以て眷屬と爲す」と。

(七六) 不可思議經中に説くが如きは、「瞿毗耶は是れ大菩薩なり。一切の眷屬は皆是れ阿鞞跋致地に住す。菩薩は方便三昧變化力を以て男と爲り、女と爲り、共に眷屬と爲る。轉輪聖王の居士の寶を以て」是の夜又、鬼神を人身に現作し、人と事を共にせしむるが如し」と。

(七七) 出家成就すとは、釋迦文菩薩の如きは、夜宮殿に於いて、諸の姝女を見るに、皆死せる狀の如し。十方の諸天、鬼神は幡華、供養の具を賣持して、迎へ奉りて出でんとす。是の時、車匿は淨飲王の敕を受くと雖も、而も菩薩の意に隨つて、自ら馬を牽きて至る。四天の使者は、馬足を接捧して城を踰えて出づ。

諸の煩惱及び魔人を破せんが爲に、一切の衆人に示すらく、「在家の穢は此の如し。大功徳貴重の人すら猶尙ほ出家す。況んや諸の凡細をや」と。是等の如き因縁を、出家成就と名く。

(七五) 眷屬成就の義解。

(七六) 不可思議經中の説。

(七七) 瞿毗耶(ゴウバ)の轉、牛護と釋す。悉多太子の夫人、耶須陀羅の稱なり。

(七八) 出家成就の義解。

(七九) 車匿(Chandaka) 新に闍鐸迦に作る、樂欲と譯す、佛出城の時の馭者なり、後出家して比丘となり、遂に阿羅漢となる。

(八〇) 凡細とは、無自覺の凡夫と、小心の細人といふ。

佛樹を莊嚴することを成就すとは、菩提樹を莊嚴するとは、先に説けるが如し。佛此の中に自ら説きたまはく、「是の菩提樹は黄金を以て根と爲し、七寶を莖節枝葉と爲し、莖節枝葉の光明は、遍ねく十方無數阿僧祇の諸佛の世界を照らす」と。或は佛あり。菩薩は七寶を以て佛樹を莊嚴す。或は是に如かざる者あり。何となれば諸佛の神力は不可思議にして、衆生の爲の故に、種種の莊嚴を現じたまへばなり。一切の諸善功德を成滿し具足すとは、菩薩は七地の中に住して、諸の煩惱を破し、自利を具足し、八地九地に住して、他人を利益す。所謂る衆生を教化し、佛世界を淨む。自利利他、深大なるが故に、一切の功德を具足す。阿羅漢、辟支佛の如きは、自利を重んずと雖も、利他を輕んずるが故に具足と名けず。諸天及び小菩薩は能く利益すと雖も、而も自ら未だ煩惱を除かざるが故に亦た具足と名けず。是を功德を具足すと名く。

當に知るべし、佛の如しとは、菩薩は是の如く、樹下に坐して、第十地に入るを名けて、法雲地と爲す。譬へば大雲の雨を澍ぎ、連りに下りて間なきが如く、心に自然に無量無邊の清淨なる、諸佛の法を生ずること、念念に無量なり。爾の時、菩薩は是の念を作す、「欲界の魔王の心は、未だ降伏せず」と。眉間の光を放ちて、百億の魔宮をして、闇蔽して現せざらしむ。魔は即ち瞋惱し、其の兵衆を集め、來りて菩薩に逼る。菩薩、魔を降し已るに、十方の諸佛は、其の功勳を慶し、皆眉間の

【八一】 佛樹莊嚴成就の義解。

【八二】 菩薩と聲聞、辟支佛との社會生活の態度の差異。

【八三】 九地の究竟。

【八四】 第十法雲地には、當に佛の如しと知るの義解。

光を放ちて、菩薩の頂より入りたまふ。是の時、十地に得る所の功德は、變じて佛法と爲り、一切の煩惱の習を斷じて、無礙解脱を得、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲等の、無量無邊の諸佛の法を具す。是の時、地は爲に六種に震動し、天は華香を雨らし、諸の菩薩、天、人は、皆手を合せて讚歎す。是の時、大光明を放ちて、遍ねく十方無量の世界を照らすに、十方の諸佛、諸菩薩、天、人は大聲に唱へて言はく、「某方、某國、某甲の菩薩、道場に坐して、佛事を成具す。是れ其の光明なり」と。是を十地と名く。當に知るべし佛の如くなることを。

復次に、佛は此の中に更に説きたまはく、「第十地の相とは、所謂、菩薩の六波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、乾慧地、乃至菩薩地を過ぎて、佛地に住することなり。佛地は即ち是れ第十地なり」と。菩薩は能く是の如く十地を行す、是を大乘に發越すと名く。

〔六〕 出到品第二十一を釋す。

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が問ふ所の、是の乘は、何の處より出で、何の處に至りて住するかとは、佛の言はく、是の乘は三界の中より出でて、薩婆若の中に至りて住す。〔七〕不二の法を以ての故なり、何となれば、摩訶衍と薩婆若と

【六】 此品所説の目的は、第十地八品の間に答へ、何處に出で、何處に到るかを示すにあり。而して其の出到を辨するや、三界を出で、一切智に到ると説く。而も空にして無相なるが故に、實に出到の取るべきものなきを明す。

の是の二法は、共にして合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相なり。若し人、實際をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、如、法性・不可思議性をして、出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。

若し人、色空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、受想行識空をして、出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして、出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提よ、色空の相は三界を出でず、亦た薩婆若に住せず。受想行識空の相は三界を出でず、亦た薩婆若にも住せざればなり。所以は何ぞや、色、色相は空なり、受想行識相は空なるが故なり。若し人、眼空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、耳鼻舌身意空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、乃至意觸因縁生の受空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提よ、眼空は三界を出でず、亦た薩婆若に住せず、乃至意觸因縁生の受空も三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや、眼想は空なり、乃至意觸因縁生の受、意觸因縁生の受相は空なるが故なり。若し人、夢をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、幻、焰、響、影、化をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提よ、夢想は三界を出でず、亦た薩婆若に住せず、幻、焰、響、影、化の相も亦た三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。

須菩提よ、若し人、檀波羅蜜(多)をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し

【八七】 合せず、散ぜずとは、二法は一ならざるが故に合せず、異ならざるが故に散ぜずとの意なり。  
【八八】 無相の法には出入なし。是を出でしめんと欲するは、妄想なり。



漢の性は空なり、辟支佛、辟支佛の性は空なり、佛、佛の性は空なるが故なり。

若し人、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切種智を出でしめんと欲せば、是の人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す、上に説くが如し。若し人、名字假名施設の相をして、但語言ありて出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、名字は空にして三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。名字、名字の相は空なるが故なり。乃至施設も亦た是の如し。若し人、不生不滅の法、不垢不淨無作の法をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、不生、乃至無作の法性は、三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以は何ぞや。不生の性、乃至無作、無作の性は空なるが故なり。須菩提よ、是の因縁を以ての故に、摩訶衍は三界の中より出でて、薩婆若の中に至りて住す。(そは)動ぜざる、を以て)の故なり。

問うて曰く、(八九)佛は已に須菩提の問ふ所を知りたまふ。今、何を以てか、更に稱して而も答へたまへるや。答へて曰く、(九〇)是の摩訶般若波羅蜜(多)經は、十萬偈、三百二十萬言あり、(九一)四阿含と等しきなり。此は一座に説き盡したまひしに非ず。又上に須菩提の問ふ所は已に答へ給へり。二事は時を異にし、日を異にするが故に、第三問を稱して而も答へ給ひしなり。復次に、有る人の言はく、(九二)「聲聞法の中には、不思議の事あると無く、一日、一坐の中に説き盡

事なし。

【八九】 般若は十萬偈三百二十萬言、四阿含と等し。

【九〇】 四阿含とは、一に、小阿含經、二に、中阿含經、三に、長阿含經、四に、增一阿含經なり。

【九一】 小乘法の中には不思議の事なし。

【九二】

くすことを得ず」と。(九三)佛は無礙解脫あり、菩薩は不可思議三昧ありて、能く多時をして少時ならしめ、少時を多時と作し、亦た能く大色を以て小に入れ、小色を大と作す。又六十小劫、法華經を説くに、人、「旦より食に至る」と謂ふが如し。

問うて曰く、色は有形にして見るべく、時は無形にして、但名のみあり。云何が近きを以て遠しと爲し、遠きを以て近しと爲すことを得ん。答へて曰はく、是を以ての故に。「不可思議神通の力を以てす」と説く。人の夢中に、夢に見る所ありとし、自ら以て覺せりと爲し、夢中に復た夢み、かの如く展轉するが故に、是の一夜あるが如し。是を以ての故に、更に其の問を稱して而も答へたまへり。是の乗は何處より出で、何處に至りて住するやとは、佛、答へたまはく、「是の乗は、三界の中より出でて、薩婆若の中に至りて住す」と。

問うて曰く、(九四)是の乗は是れ佛法と爲んや又は是れ菩薩の法なりと爲んや。若し是れ佛法ならば、云何が三界より出でん。若し是れ菩薩の法ならば、云何が薩婆若の中に住するや。答へて曰く、(九五)是の乗は是れ菩薩の法より、乃ち金剛三昧に至る、是の諸の功德は、清淨にして變じて佛法と爲る。是の乗には大力ありて能く去る所あり、直に以て佛に至る。更に勝處の去

【九三】佛は無礙解脫あるが故に、多時をして少時たらしめ、少時をして多時ならしむ。

【九四】第六問、色は有形にして見るべく、時は無形にして但名のみあり。如何ぞ近を遠となし、遠を近となすことを得んや。

【九五】第七問、此の乗は佛法なるか、菩薩の法なるか。

【九六】大乘の意義、絶對の大乘を説く。

るべき無きが故に住すと云ふなり。譬へば、劫盡の火、三千世界を燒き、勢力甚だ大なるも、更に燒く所なきが故に、便ち自ら滅するが如く、摩訶衍も亦た是の如し。一切の煩惱を斷じ、諸の功德を集めて、其の邊際を盡し、更に斷ずる所なく、更に知る所なく、更に集むる所なきが故に、便ち自ら滅に歸す。不二の法とは、諸の菩薩の著を斷ずるが故に説く。此の中に佛（三〇）自ら説きたまはく、「大乘と薩婆若とはこの二法は、一ならざるが故に合せず。異ならざるが故に六情の所知を散せず。虚妄を盡くすが故に色なく形なく、對なく一相なり」と。

問うて曰はく、（三〇）先には一ならざるが故に合せずと言ふ。今何を以てか一相なりと言ふや。答へて曰く、（三〇）此の中に一相と言ふは、所謂の無相なり。無相なれば、則ち佛道に出至することは有ること無し。凡夫の人を引導せんが爲の故に、説いて一相と言ふ。（三〇）實際とは、是れ諸法の末後なり、實相には出なく入なし。若し狂人ありて、實際をして佛道に出至せしめんと欲せば、此の人は則ち無相の法をして出でしめんと欲するなり。如、法性、法相は先に説くが如し。（三〇）不可思議性とは、有る人の言はく、「即ち是の如、法性、實際、無量無邊の心、心數法は滅なるが故に、不可思議と言ふ」と。復有る人の言はく、「實際、涅槃を過ぎて、更に諸法の實を求むるに、若くは有、若くは無なり。是を不可思議と名く」と。

【九七】大乘と一切智とは、一ならず、異ならず。

【九八】第八問、先には一ならざるが故に合せずといひ、然るに今これを一相なりといふは何故なるか。

【九七】一相とは無相の義なり。

【一〇〇】實際の義解。

【一〇一】不可思議性の義解。

復次に、一切諸佛の法は、能く思惟し、籌量する者あること無きが故に、不可思議と言ふ。復た有る人の言はく、「一切諸法を分別し、思惟するに、皆同じく涅槃の相なり。是れ不可思議なり」と。若し人、空をして出でしめんと欲せば、此の人は則ち無相の法中をして出でしめんと欲するなり。此の中に佛自ら説きたまはく、「五衆は空相なり、三界を出づること能はず。薩婆若に至ること能はず。〔そは〕五衆の中、五衆の相は空なるが故なり。十二入、乃至意觸因縁生の受の空なるも、亦是の如く、夢等の空の譬喩も、亦た是の如し。自相空なるが故に、出づると無く、至ると無し。若し人、六波羅蜜〔多〕をして出でしめんと欲せば、此の人は則ち爲に無相の法をして、出でしめんと欲するなり。何となれば、六波羅蜜〔多〕は、因縁和合なるが故に、自性なく、自性なきが故に、空なればなり。菩薩は六波羅蜜〔多〕に著して、邪道に墮するが故に、爲に空を説く。十八空、乃至一切種智も亦た是の如し」と。

問うて曰はく、(101) 六波羅蜜〔多〕には道俗有り。俗は著すべきが故に、空を説くべし。出世間の六波羅蜜〔多〕 (102) 三十七品、乃至十八不共法は〔共に〕著する所なきが故に何を以て空を説くや。答へて曰く、諸の菩薩は、漏未だ盡くさず、福德智慧の力を以ての故に、是の法を行じ、或は相を取りて、愛著するが故なり。凡夫の法は虚妄顛倒なり。此の法は、凡夫の法の邊より生ず。云何が是れ實な

【101】第九問、六度には道俗あり、俗に空を説くは可し、而も道に空を説けるは、何故なるか。  
 【102】三十七品とは、四念處と、四正勤と、四如意足と、五根と、五力と、七覺支と、八聖道となり。

らん。是を以ての故に、佛説きたまはく、「是も亦た空なり。喻を以てすれば、無相の法は、是れ大乘にして、即ち是れ無相なり。無相ならば云何が出あり、至ること有らん」と。諸法は皆空にして、但名字の相、假名、語言のみ有り。今名字等も亦空なり。喻を以てすれば、無相は第一義の中には不可得なり、世俗法の中には相あり。名字等の假名の相の義は先に説くが如し。是の如きの法を用つて、三界より出で、薩婆若の中に至りて住す。是は實法にあらず、亦た動する所無し。

經

須菩提よ、汝が問ふ所の、是の乘は何處に住するやとは、須菩提よ、(一〇四)是の大乗には

住處なし。何となれば、一切法には住相なければなり。是の乗若し住するも、住法に住せず。須菩提よ、譬へば法性の生ぜず、滅せず、垢づかず、淨からず、相なく、作なく、

住にあらず、不住に非ざるが如し。須菩提よ、是の乘も亦た是の如く、住にあらず、不住に非ざるなり。何となれば、法性の相、乃至無作の相は、住にあらず、不住に非ざればなり。所以は何ぞや。法性は相性空なるが故なり。乃至無作の性は、無作の性性空なるが故なり。諸餘の法も亦是の如し。須菩提よ、是の因縁を以ての故に是の乘には所住の處なし。(「そは」不住の法にして)不動の法なるを以ての故なり。

論

問うて曰く、(一〇五)上には是の乘は薩婆若に到れば、更に勝法の去るべき(所)あることなしと言へり。今何を以てか是の乘には住する處なしと説くや。答へて曰く、「既に」先に説けるは、空にして不

【一〇四】大乘は無住の住なることを明す。即ち一切智に到り住すといふも、定住するところなきなり。

【一〇五】第一〇問、先には是の乘には勝る所なく去るべき所なしといひ、今また此乘に住する處なしといふは何故なるか。

二の法なるを以ての故に住すと云ふ、幻の如く、夢の如し。坐臥行住ありと雖も、實に是れ住するにあらず。菩薩も亦た是の如く、薩婆若に到りて住すと云ふと雖も、亦た定住するところ無し。(109) 佛は此の中に自ら説きたまはく、「一切法は本より已來、住相なし、云何が獨り大乘のみ住すること有らんや。若し住する所あれば、畢竟空法を以て住す。譬へば如、法性、法相、實際は住するに非ず、住せざるに非ず、不生、不滅、不垢、不淨、不起、不作なるが如し。住せずとは、自相の中に住せず、住せざるに非ずとは、異相の中に住せざるなり。住せずとは、空を説きて有を破し、住せざるに非ずとは、世諦方便を説きて住すること有り、住せずとは、無常を説きて常相を破し、住せざるに非ずとは、滅相を破す。此の中に佛自ら説きたまはく、「法性、法性の相は空なり。何となれば、自相空なるが故なり。乃至、無起無作の諸餘の法も亦た是の如し」と。

**經**

須菩提よ、(109)汝が問ふ所の、誰か當に是の乘に乗じて出づべき者ぞとは、人の是の乘

に乗じて、出づる者あること無し。何となれば、(110)是の乘及び(111)出づる者、(112)用ふる所の法、及び出づる時、是の一切の法は皆所有なければなり。若し一切法にして所有なくんば、何等の法を用ゐてか當に出づべけん。何となれば、我が

- 【109】一切法は定住するところなく、常に新陳代謝し、進化發展して停滯することなきなり。前に無限の進化を認むべく、又無限の改造を學ぶべきなり。
- 【110】第十八品に問へる能乗者を答へ、實には乗者あることなきを述べ。
- 【111】是の乘は、六波羅蜜多のことなり。
- 【112】出づる者は、菩薩なり。
- 【113】用ふる所の法は、慈悲方便等なり。

得べからず。乃至知者、見者は得べからず、(二)畢竟淨なるが故なり。不可思議性は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。  
 (三)衆、入、界は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。檀波羅蜜(多)は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至般若波羅蜜(多)は不可得なり。畢竟淨なるが故なり。内空は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至無法有法空は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。四念處は不可得なり、乃至十八不共法は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。須陀洹は不可得なり、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛に至るまで不可得なり、畢竟淨なるが故なり。

須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切種智は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。不生、不滅、不垢、不淨、無起、無作は不可得なり、畢竟淨なるが故なり、過去世、未來世、現在世の生住滅は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。増減は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。何の法か不可得なるが故に、畢竟淨なるが故なり。増減は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。何の法か不可得なるが故に、不可得なりとするや。法性は、不可得なるが故に、不可得なり。  
 如、實際、不可思議性、法性、法相、法位、檀波羅蜜(多)は、不可得なるが故に不可得なり。乃至、般若波羅蜜(多)は、不可得なるが故に不可得なり。内空は、不可得なるが故に不可得なり。乃至、無法有法空は、不可得なるが故に不可得なり。四念處は、不可得なるが故に、不可得なり、乃至十八不共法は、不可得なるが故に、不可得なり。須陀洹は、不可得なるが故に、不可得なるより、乃至、佛は不可得なるが故に、不可得なり。須陀洹果は、不可得なるが故に、不可得なり。乃至佛道は、不可得なるが故に、不可得なり。不生、不滅、乃至不起、不作は、不可得なるが故に、不可得なり。

- 【一】畢竟淨、性空なるが故に畢竟清淨なり。
- 【二】衆、入、界とは、五蘊、十二處、十八界の略なり。
- 【三】十地の名義。

復次に、須菩提よ、初地は不可得なるが故に、不可得なり。乃至第十地は、不可得なるが故に、不可得なり。畢竟淨なるが故なり。云何が初地乃至十地と爲すや。所謂、(一)乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、

菩薩地、佛地なり。内空中に初地は不可得なり、乃至無法有法空中に初地は不可得なり。内空乃至無法有法空中に第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十地は不可得なり。何となれば、須菩提よ、初地は得に非ず、不得に非ず。乃至十地も得に非ず、不得に非ず、畢竟淨なるが故なり。内空乃至無法有法空中の中、衆生成就は不可得なり、(そは)畢竟淨なるが故なり。内空乃至無法有法空中の中、佛世界を淨むるこは不可得なり、(そは)畢竟淨なるが故なり。内空乃至無法有法空中の中、五眼は不可得なり、(そは)畢竟淨なるが故なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、一切諸法の不可得を以ての故に、是の摩訶衍に乗じて、薩婆若に住す。

論

論者言はく、(二四) 出づとは、是の乘を以て、佛道の邊に到り出づるなり。又復た成就を以て

の故に出づと名く。是の乘を以て薩婆若を成就する、是を名けて出づと爲す。此の中に佛自ら空の因縁を説き給ふ。乘とは、是れ六波羅蜜(多)なり。用ふる所の法とは、是れ慈悲方便等の諸法にして、六波羅蜜(多)に攝せざる所なり。出づる者は是れ菩薩なり。是の三法は皆空なり。此の中に佛復た因縁を説きたまふ。我は不可得なり、乃至知者、見者は不可得なり、(そは)畢竟空なるが故なり。(二五) 五衆、十二入、十八界、檀波羅蜜(多)、乃至十八不共法、須陀洹、乃至薩婆若、不生、不滅、不垢、不淨、乃至三世、三相、増減等、是を法空と名く。我より乃ち知者、見者に至るまで、須陀洹より乃ち佛に至るまで、是を衆生空と名く。

- 【二四】 出づるの義解。
- 【二五】 法空の意義。
- 【二六】 第一問、二種の不可得は、云何が不可得なるか。

問うて曰はく、(二六) 二種の不可得あり。一には法あるも智慧少きが故に得ること能はず。二には大

智慧ありて、推求すれども、得ること能はず。此は云何が不可得なるや。答へて曰く、是の法は無なるが故に不可得なり。

問うて曰はく、(二七)一切法は本末不可得ならば、人に於いて何の利あるや。答へて曰はく、此の中に佛自ら説きたまはく、「畢竟清淨なるが故なり」と。畢竟とは行者は無に依りて有を破し、有に於いて清淨を得、無に於いて未だ清淨ならず。依止するを以ての故なり。此の中に佛自ら不可得の因縁を説きたまへり、一切衆生は不可得なり。一切法は不可得なり。譬へば、如、法性、實際等、乃至不作、不起、不可得なるが如し。

復次に、十八空の故に、法性は不可得なり。乃至不作、不起、十八空の中には、初地乃至十地無く、衆生を成就することも無く、佛世界を淨むることも無く、五眼もなし。「そは」十八空を以ての故に空なり。畢竟清淨なるが故に不可得なり。菩薩は不可得の法を用ゐ、是の乘に乗じて薩婆若を出づるなり。

【二七】第一二問、一切法の本末不可得ならば、人に於いて何の利益ありや。

# 巻の第五十一

## 勝出品第二十二を釋す

釋

慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、摩訶衍、摩訶衍とは、一切世間、及び諸天人、阿修羅を勝出す。世尊

よ、是の摩訶衍は虚空と等し。虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍

も亦た是の如く、無量無邊阿僧祇の衆生を受く、世尊よ、是の摩訶衍は來處を見ず、

去處を見ず、住處を見ず。是の摩訶衍は前際も得べからず、後際も得べからず、中際

も得べからず、三世は等しく是れ摩訶衍なり。世尊よ、是を以ての故に是の乘を摩訶衍

と名くと。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し」と。是の菩薩摩訶薩の

摩訶衍は、所謂る六波羅蜜(多)にして、檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、麤提波

羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)なり。是を菩薩摩訶薩の摩

訶衍と名く。

復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、一切の陀羅尼門、一切の三昧門、所

謂首楞嚴三昧、乃至離著虚空不染三昧、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、

所謂内空乃至無法有法空なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂四念處、乃至十八不共法、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。須

【一】此の品には、大乘の一切世間等に勝出する所以を明す。

【二】須菩提は先に五事を以て大乘を問うて、佛の答を得、今大乘の力勢廣大なるを讃す。佛更に大乘の義を説き給ふ。

【三】大乘は、來處、去處、住處を見ず。

【四】菩薩の大乘の意義。

善提の言ふ所の如く、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出せり。須菩提よ、若し欲界は當に實ありて虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せずんば、常に以て壞せざるの相あるべく、無法に非ずんば、是の摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、欲界は虚妄なるを以て、憶想分別して名字を和合し、等しく一切無常の相のみありて法なし。是を以ての故に、摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、色界、無色界は、若し當に實有にして、虚妄ならず、異諦ならず、顛倒ならずんば、常に以て不壞の相あるべし。無法ならずんば、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。

須菩提よ、色界、無色界は、虚妄の憶想分別を以て、名字を和合し、有に等しきも一切無常、破壞の相にして法なし。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し色は當に實有にして、虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せずんば、常に以て、不壞の相あるべし。無法に非ずんば、是の摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。須菩提よ、色は、虚妄の憶想分別を以て、名字を和合し、有に等しきも、一切無常破壞の相にして法なし。是を以ての故に、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。〔乃至〕受、想、行、識も亦た是の如し。

須菩提よ、若し眼乃至意、色乃至法、眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受、若し常に實有にして虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せずんば、常に以て不壞の相あるべし。無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。

須菩提よ、眼乃至意觸因縁生の受は、虚妄の憶想分別を以て、名字を和合し、有に等しきも、一切無常破壞の相にして法なし。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し法性は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。須菩提よ、法性は無法なるを以て法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し如、實際、不可思議性は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。

須菩提よ、如、實際、不可思議性は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し檀波羅蜜(多)は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。檀波羅蜜(多)は、無法なるを以て、法に非ず。

是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。若し尸羅波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。尸羅波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)は、無法なるを以て、法に非ず。

是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間、諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し内空乃至無法有法空は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。内空乃至無法有法空は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し四念處乃至十八不共法は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。四念處乃至十八不共法は、無法なるを以て法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し四念處乃至十八不共法は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し四念處乃至十八不共法は、無法なるを以て法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

【五】 現象のみならず、法性等も有とすべきなし。是の故に之を無とする大乘は勝れたりと云ふべし。  
 【六】 無法、無爲空の故に無といふ。

問及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し性人法は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。性人法は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し八人法、須陀洹法、斯陀含法、阿那含法、阿羅漢法、辟支佛法、佛法は、是れ有法にして、

無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。八人法乃至佛法は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し性人法は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間、諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。性人法は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し八人、須陀洹、乃至佛は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出すこと能はざらん。八人乃至佛は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し一切世間及び諸天、人、阿修羅は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出すこと能はざらん。一切世間、諸天、人、阿修羅は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、初發心より乃ち道場に至るまで、其の中間の諸心に於いて、若し當に有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出すこと能はざらん。菩薩は初發心より、乃ち道場に至るまで、其

【七】 性人法。性地の人法を云ふ。先に概括的に人空に就て説き、今は諸地各各に就て別説するなり。

【八】 八人法等。第三、八忍地以下の諸地をいふ。

【九】 道場とは、釋尊の成道し給へる場處の義にて、今は成佛と同義なり。

菩薩は初發心より、乃ち道場に至るまで、其の摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出すこと能はざらん。菩薩は初發心より、乃ち道場に至るまで、其

の摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出すこと能はざらん。菩薩は初發心より、乃ち道場に至るまで、其

中間の諸心に於いて、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し菩薩摩訶薩の【一〇】金剛の如き慧は、若し是れ有法にして、無法に非ずんば、是の菩薩摩訶薩は、一切の結使、及び習の無法、非法なることを知りて、一切種智を得ること能はざらん。須菩提よ、菩薩摩訶薩の金剛の如き慧は、無

法、非法なるを以て、是の故に菩薩は、一切の結使、及び習の無法、非法なることを知りて、一切種智を得、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提よ、若し諸佛の三十二相は、是れ有法にして、無法に非ずんば、諸佛

の威徳は、照然として、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出すること能はざらん。

須菩提よ、諸佛の三十二相は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、諸佛の威徳は照然として、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提よ、若し諸佛の光明は、是れ有法にして、無法に非ずんば、諸佛の光明は、若くは恆河沙等の世界を照らすこと能はざらん。須菩提よ、諸佛の光明は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、諸佛は能く光明を以て、普れく恆河沙等の世界を照らした

まふ。須菩提よ、若し諸佛の六十種の莊嚴音聲は、是れ有法にして、無法に非ずんば、諸佛は六十種の莊嚴音聲を以て、遍れく十方無量阿僧祇の世界に至りたまふこ

と能はざらん。須菩提よ、諸佛の六十種の莊嚴音聲は、無法、非法なるを以て、是を以ての故に、諸佛は能く六十種の莊嚴音聲を以て、遍れく十方無量阿僧祇の世界に至る。

須菩提よ、諸佛の法輪は、若し是れ有法にして、無法に非ざるべくは、諸佛は、法輪を轉じたまふこと能はざるべく、諸

【一〇】 金剛の如き慧とは、菩薩の最後心の慧にて、根本我を摧破するものなり。

【一一】 六十種の莊嚴音聲、密迹力士經には、六十四種の梵音を説く。これ八轉聲（梵語の文法には名詞の格に、主格・業格・具格・爲格・屬格・從格・於格・呼格の八種あり。之を八轉聲といふ）各各八德あればなり。

八德は、調和、柔軟、諦了、易解、無錯謬、無雌小、廣大、深遠なり。寶積經、秘密大乘經等には、諸相具足の妙音六十種ありといふ。

の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、及び世間の餘衆も、如法に轉ずる能はざる所の者ならん。須菩提よ、諸佛の法輪は、無法非法なるを以て、是を以ての故に、諸佛は法輪を轉じたまふ。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、及び世間の餘衆の、如法に轉ずること能はざる者なり。須菩提よ、諸佛は、衆生の爲に、法輪を轉じたまふに、是の衆生は、若し實に有法にして、無法に非ずんば、是の衆生をして、無餘涅槃に於て、而も般涅槃せしめたまふこと能はざるなり。須菩提よ、諸佛は衆生の爲に、法輪を轉じたまふに、是の衆生は無法、非法なるを以て、是を以ての故に、能く衆生をして、無餘涅槃の中に於いて、已に滅し、今に滅し、當に滅すべし。

論

論者言はく、須菩提は上に五事を以て、摩訶衍を問ひたてまつり、佛は已に答へ竟りたまへ

り。須菩提は歡喜讚歎して是の言を作す、「世尊よ、是の摩訶衍は、大力

勢ありて、人天世間を破壊し、已に能く中に於いて勝出す。譬へば、(二三)

人惡道を度るに、一は、夜に於いて逃遁して、獨り其の身を脱し、二は、

錢を以て免るることを求め、三は、大王の如き、大軍衆を將ゐて、寇賊を摧破し、擧軍全く濟ひて、

畏難する所なきが如し。三乗も亦た是の如く、阿羅漢の如きは、一切の總相、別相を知ること能は

ず、亦た魔王を破すること能はず、又外道を降伏すること能はず、老病死を厭ひて、直に涅槃に趣く。

辟支佛の如きは、諸法實相に入ること、聲聞より深く、少しく悲心あり、神通力を以て、衆生を化度

し、能く煩惱を破すれども、魔、人、及び外道を破すること能はず。菩薩の如きは、初發心より、一

切衆生に於いて、大慈悲を起し、未だ佛を得ずと雖も、其の中間に於いて、無量の衆生を利益し、決

【二三】譬喩を擧げて、聲聞と緣覺と菩薩と三人者の比較相異を説く。

定して諸法實相を知り、六波羅蜜〔多〕を具足するが故に、諸の魔王を破し、及び外道を壊り、煩惱の習を斷じ、一切種智を具足し、總相、別相を悉く知り、悉く了じ、阿耨多羅三藐三菩提を成ず。三人は俱に生死を免るると雖も、然も方便の道各異なれり。是の故に須菩提は、摩訶衍の一切世間を摧破し、人天、阿修羅の上に勝出するを讚歎す。〔三〕譬へば虚空の一切の國土を含受して、而も虚空の故に盡きざるが如し。摩訶衍も亦た是の如く、三世の諸佛及び諸の弟子を含受すれども、摩訶衍も亦た満たす。又虚空は常相なるが故に、入相なく、出相なく、住相なきが如く、是の乘も亦た是の如し。未來世の入處なく、過去世の出處なく、現在世の住處なし。三時を破するが故に、三世等しく摩訶衍と名く。

問うて曰はく、〔四〕佛は應に須菩提の歎する所の言を「善い哉」と讚じたまふべし。何を以てか更に摩訶衍を説きたまへるや。答へて曰く、佛は將に須菩提の歎する所に順じて、而して讚歎せんと欲したまふ。上に説く摩訶衍は、遠きを以ての故に、今略して摩訶衍の相を説き、然る後廣く述べたまへり。須菩提の讚する所の摩訶衍とは、所謂、六波羅蜜〔多〕、諸の陀羅尼門、三昧門、十八空、四念處、乃至十八不共法等なり。須菩提の説く所の如く、摩訶衍は一切世間を破壊し、人天、阿修羅の上に勝出すとは、是の事は實に爾なり。何となれば、是の三界は虚誑にして、幻の如く、夢の如く、無明、虚妄の因縁の故に、

【三】 大乘は虚空の如く、一切の國土を含受す。

【四】 第一問、佛は須菩提の所説を讚せずして、更に大乘を説き給ひし理由如何。

因果あるも定實あることなく、一切無常にして、破壊し、磨滅す、皆是れ空相なり。摩訶衍は、三界と相違するを以ての故に、能く摧破し勝出す。若し三界は定實にして、常に虚妄ならずんば、是の摩訶衍は、摧破し勝出すこと能はず。何となれば、力等しきが故なり。五衆、十二入、十八界、六觸の諸受を生ずるも、亦た是の如し。若し法性は是れ有法にして無法に非ずんば、摩訶衍は世間を破して勝出することを得ること能はざらん。須菩提「言さく」、「法性は有に非ざるを以ての故に、摩訶衍は能く世間を勝出することを得」と。

問うて曰はく、(三)有爲法は因縁和合して、虚誑なるが故に無と言ふも、如、法性、實際、不可思議性は、是れ無爲實法にして名けて實際と爲す、

云何が無と言ふや。答へて曰く、無爲は空なるが故に無と言ふ。復次に、佛説きたまはく、「有爲を離れて、無爲法は得べからず。有爲法の實相とは、即ち是れ無爲法なり」と。

復次に、是の有爲法は虚誑なり。如、法性、實際の如きは、是れ實なりと觀じ、人は法性に於て、相を取り、誑を起すを以ての故に、法性なしと言ふ。或は有と説き、或は無と説くも、各因縁あるが故に咎なし。如、實際、不可思議も亦た是の如し。世間の檀波羅蜜「多」は、著の故に有なり。出世間の檀波羅蜜「多」は、無なるが故に空なり。慳貪を破するが爲の故に、檀波羅蜜「多」ありと言ひ、邪見を破するが故に、檀波羅蜜「多」は無なりと言ふ。初學者を度せんが爲に説きて有と言ひ、若し聖

【三】 第二問、眞如、法性等を無と名くる理由如何。

人は心中に説いて無と言ふ。檀波羅蜜〔多〕の如く、乃至若し衆生は、實有にして、是れ無法に非ず、強ひて滅して、無餘涅槃に入らしむ。

問うて曰く、(一六) 三十二相より已後は、何を以てか説いて、摩訶衍は勝出すと言はざるや。答へて曰く、應當に説くべきも、直に文煩はしきが故に説かず。復次に、三十二相より、乃ち衆生の爲に法輪を轉ずるに至るまで、亦た是れ摩訶衍にして、但名字を異にするのみ。

復次に、上に總相もて、摩訶衍は勝出すと説くも、云何が勝出せるかを知らざれば、今別相もて説くなり。所謂、佛の三十二相は、莊嚴の身なるが故に、一切衆生に勝り、佛の光明は、日月諸天の一切の光明に勝り、佛の音聲は、一切の音樂、世界の妙聲、諸天の梵音に勝り、佛の法輪は、轉輪聖王の寶輪、及び諸の外道の一切の法輪に勝れて、無障無礙なり。餘の法輪は、利益する所微淺にして、或は一世、二世、極まるも千萬世に至るのみ。佛の法輪は、能く永く無餘涅槃に入り、復た還つて生死に入らざらしむるなり。

復た次に、若し衆生實有ならば、佛は衆生をして涅槃に入り、永く其の根を抜かしめたまふべからず。此は一身を殺すよりも過ぎたり。是の如き大なる咎あり。衆生は顛倒の心を以て、我を見るが故に、佛は其の顛倒を破せんと欲し、説いて言はく、「涅槃には衆生の滅すべきもの無し」と。「かるが」故

【一六】 第三問、三十二相已後、大乘の勝出を説かざる理由如何。

に咎なし。是の如き功德あるが故に、摩訶衍は能く一切世間を勝出す。

問うて曰はく、(一七)一切世間とは、十方六道の衆生なり。何を以てか、獨

り諸の天、人、阿修羅に勝出すと説くや。答へて曰く、(一八)六道の中の三

は是れ善道、三は是れ惡道なり。摩訶衍は、尙ほ能く三善道すら、破して

勝出す、何に況んや惡道をや。

問うて曰はく、(一九)龍王經中に説く、「龍、菩薩道を得」と。何を以てか、是

を惡道なりと説くや。答へて曰く、衆生は無量無邊にして、龍の道を得る

者は少し。復た次に、有る人の言はく、「大菩薩は、身を變化して、教化

するが故に、龍王の身と作る」と。

【一〇】(一〇)受用品第二十二を釋す

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が言ふ所の、(二三)行と空と等しきこと、是の如し、是の

如し。須菩提よ、(二四)行と空とは等し。須菩提よ、虛空に、東方なく、南方、西方、北

方、四維、上下なきが如く、須菩提よ、摩訶衍も亦た是の如し。東方なく、南方、西方、

北方、四維、上下なし。須菩提よ、虛空の長に非ず、短に非ず、方に非ず、圓に非ざる

が如く、須菩提よ、摩訶衍も亦是の如し。長に非ず、短に非ず、方に非ず、圓に非ず。

【一七】 第四問、一切世間は十方六道の衆生なり、然るを獨り諸の天人阿修羅に勝出すと説くは何故なるか。

【一八】 六道の中の三。阿修羅、人間、天上、これ善の三にして、地獄、餓鬼、畜生、これ惡の三なり。

【一九】 第五問、龍王經によれば、龍にして菩薩の道を得たりといふ。何故に之を惡道といふか。

【二〇】 此の品の眼目は、大乘の能く一切衆生を包含し、容受する旨を明すにあり。或は等空品ともいふ。蓋し大乘は虛空に等しと説くが故に、この名あるなり。

【二一】 行とは、摩訶衍(大乘)の略なり。

【二二】 虛空の無方、無形、無色なるが如く、大乘も亦然なり。

須菩提よ、虚空の青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、黒に非ざるが如く、須菩提よ、摩訶衍も亦た是の如し。青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、黒に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空とは等しと説く。

須菩提よ、(一三) 虚空は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。過去に非ず、未來に非ず、現在に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、虚空は増さず、減ぜざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。増さず、減ぜざるなり。須菩提よ、虚空は垢なく、淨なきが如く、摩訶衍も亦是の如し。

垢なく、淨なきなり。須菩提よ、虚空の生なく、滅なく、住なく、異なきが如く、摩訶衍も亦た是の如し。生なく、滅なく、住なく、異なきなり。

須菩提よ、(一四) 虚空は善に非ず、不善に非ず、記に非ず、無記に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。善に非ず、不善に非ず、記に非ず、無記に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は、空と等しと説く。虚空の見なく、聞なく、知なく、識なきが如く、摩訶衍も亦た是の如し。見なく、聞なく、知なく、識なきなり。

(一五) 虚空は知るべからず、識るべからず、斷すべからず、證すべからず、修すべからざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。知るべからず、識るべからず、見るべからず、斷すべからず、證すべからず、修すべからず。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

(一六) 虚空は染相に非ず、離相に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。

(一七) 虚空の三界に繫せざるが如く、大乘も亦然なり。

(一八) 虚空の三世にあらす、不増、不減、不垢、不淨、無生無滅なるが如く、大乘も亦然なり。

(一九) 虚空の三性にあらす、見聞覺識にあらざるが如く、大乘も亦然なり。

(二〇) 虚空の不可知、不可識、不可見、不可斷、不可證なるが如く、大乘も亦然なり。

(二一) 虚空の染相に非ず、離相に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

【一三】 虚空の三世にあらす、不増、不減、不垢、不淨、無生無滅なるが如く、大乘も亦然なり。  
【一四】 虚空の三性にあらす、見聞覺識にあらざるが如く、大乘も亦然なり。  
【一五】 虚空の不可知、不可識、不可見、不可斷、不可證なるが如く、大乘も亦然なり。  
【一六】 虚空の染相に非ず、離相に非ざるが如く、大乘も亦然なり。  
【一七】 虚空の三界に繫せざるが如く、大乘も亦然なり。

繫せざるなり。 (三六) 虚空の初發心なく、亦た二三四五六七八九、第十心なきが如く、摩訶衍も亦是の如し。初發心乃至第十心無し。 (三七) 虚空の乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辨地なきが如く、摩訶衍も亦是の如し。乾慧地なく、乃至已作地なきなり。虚空の須陀洹果なく、斯陀含果なく、阿那含果なく、阿羅漢果なきが如く、摩訶衍も亦是の如し。須陀洹果なく、乃至阿羅漢果なし。虚空の聲聞地なく、辟支佛地なく、佛地なきが如く、摩訶衍も亦是の如し。聲聞地なく、乃至佛地なきなり。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと説く。

【一〇】 虚空の色に非ず、無色に非ず、可見に非ず、不可見に非ず、有對に非ず、無對に非ず、合に非ず、散に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。色に非ず、無色に非ず、可見に非ず、不可見に非ず、有對に非ず、無對に非ず、合に非ず、散に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、 (三一) 虚空の常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、 (三二) 虚空は空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、 (三三) 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。寂滅に非ず、

【一六】 虚空の初發心乃至に佛地にあらざるが如く、大乘も亦然なり。

【一五】 虚空の乾慧地乃至已算地なきが如く、大乘も亦然なり。

【一〇】 虚空の色、無色、可見、不可見、乃至合散にあらざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の常無常、乃至我無我にあらざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の空不空、乃至作無作にあらざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅非寂滅、離不離にあらざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

【三】 虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、大乘も亦然なり。

寂滅ならざらに非ず、離に非ず、不離に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、(三)虚空は闇に非ず、明に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。闇に非ず、明に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、虚空の可得に非ず、不可得に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。可得に非ず、不可得に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、虚空は可説に非ず、不可説に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。可説に非ず、不可説に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、是の諸の因縁を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説くなり。

論

論者言はく、須菩提は、「衍は虚空の如し」と讀じ、佛即ち廣く述べ

て、其事を成じたまふ。虚空には十方なきが如く、摩訶衍には亦た十方なし。「虚空に」長短方圓青黄赤白等なき「が如く」、是の摩訶衍も亦た是の如し。

問うて曰く、(三)虚空は應に爾るべし。是れ無爲法にして無色無方なり。

摩訶衍は是れ有爲法、是れ色法にして、所謂、布施、持戒等なり。云何が虚空と等しと言ふや。答へて曰く、六波羅蜜(多)に二種あり、(三)世間と出世間となり。世間(の六波羅蜜多)は、是れ有爲法、色法にして虚空と同じからず。出世間(の六波羅蜜多)は如、法性、實際、智慧と和合するが故に、虚空に似如し、無生忍を得てより已後、分別する所なきこと虚空の如し。

復次に、如し佛は、無礙智を以て、實相を觀たまふこと虚空の如し。餘人は則ち然らず、智慧未だ

【三】 虚空の明闇、可得、不可得、可説、不可説にあらざるが如く、大乘も亦然なり。  
【三】 第六問、無爲法たる虚空の無色無方なるは即ち可なり有爲法たる大乘を虚空と等しといふは何故なるか。  
【三】 二種の六度、(一)世間的、(二)出世間的。

畢竟清淨ならざるが故なり。復次に、佛は前後に諸法畢竟空と説きたまふ。如し無餘涅槃の相は、虚空の如く、疑を致すべからず。餘法も亦た是の如し。乃至虚空の説に非ず、不説に非ざるが如く、大乘も亦た是の如し。

問うて曰く、(七)虚空の所有なきが如しと言へば便ち足る。何を以てか種種の相なしと説くや。答へて曰く、初發心の菩薩は、内外の種種の因縁法の中に於いて心を著す。是を以ての故に、佛は虚空に是の種種の相なきが如く、摩訶衍も亦た是の如しと説きたまへり。

經

須菩提よ、汝が言ふ所の如し。虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍も亦無量無邊阿僧祇の衆生を受くると、是の如く是の如し。須菩提よ、衆生は無所有の故に、當に知るべし虚空も無所有なりと。虚空は無所有なるが故に、當に知るべし、摩訶衍も亦た無所有なることを。是の因縁を以ての故に、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、是の衆生、虚空、摩訶衍、是の法は皆不可得なるが故なり。

【七】第七問、虚空の所有なきが如くといへば便ち足る。然るに今何故に種種の相なしと説くか。  
【八】第二十品に、須菩提の言へる虚空の舍受するが如く、大乘も亦然りと印可し、廣説するなり。

復次に、須菩提よ、摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有なしと。阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、無量は所有なしと。無量は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば

是の衆生、虚空、摩訶衍、阿僧祇、無量無邊、是の一切法は不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、如、法性實際は所有なきが故に、當に知るべし、乃至無量無邊阿僧祇も所有なしと。無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、知るべし、一切法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、是の衆生、乃至知者、見者、實際、乃至無量無邊阿僧祇、是の一切法は、不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、不可思議性は所有なしと。不可思議性は所有なきが故に、當に知るべし、色、受、想、行、識は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有なしと。阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、無量は無量は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、須菩提よ、我乃至知者、見者等、一切法は皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、眼は所有なく、耳、鼻、舌、身、意も所有なしと。眼乃至意は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は、所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有なしと。阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、無量は無量は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、須菩提よ、我、法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、須菩提よ、我、

乃至一切諸法、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至、知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、檀波羅蜜(多)は所有なく、尸羅波羅蜜(多)、毘提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)は所有なしと。般若波羅蜜(多)は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、無量無邊阿僧祇は所有なしと。無量無邊阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生乃至一切諸法、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至、知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、内空は所有なく、乃至無法有法空は所有なしと。無法有法空は所有なきが故に、當に知るべし虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし阿僧祇無量無邊は所有なしと。阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生乃至一切諸法、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我、衆生、乃至一切諸法は、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我、衆生、乃至知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、四念處は所有なしと。四念處は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇無量無邊は所有なしと。

阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生、乃至一切諸法は、皆不可得なればなり。

阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生、乃至一切諸法は、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我、衆生は所有なく、乃至、知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、性地は所有なく、乃至已作地も所有なしと。已作地は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍に所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生、乃至一切諸法は、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我、衆生、乃至、知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、須陀洹は所有なしと。須陀洹は所有なきが故に、當に知るべし、斯陀含は所有なしと。斯陀含は所有なきが故に、當に知るべし、阿那含は所有なしと。阿那含は所有なきが故に、當に知るべし、阿羅漢は所有なしと。阿羅漢は所有なきが故に、當に知るべし、乃至一切諸法も所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、須菩提よ、我、乃至一切諸法は、皆不可得なればなり。

復次に、須菩提よ、我、乃至、知者見者は、所有なきが故に、當に知るべし、聲聞乗は所有なしと。聲聞乗は所有なきが故に、當に知るべし、辟支佛乗は所有なしと。辟支佛乗は所有なきが故に、當に知るべし、佛乗は所有なしと。佛乗は所有なきが故に、當に知るべし、聲聞人は所有なしと。聲聞人は所有なきが故に、當に知るべし、須陀洹は所有なしと。須陀洹は所有なきが故に、乃至、佛も所有なし。佛は所有なきが故に、當に知るべし、一切種智は所有なしと。一切種智は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、乃至一切諸法は、皆不可得なればなり。

譬へば、須菩提よ、涅槃の性の中に、無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是の摩訶衍も亦た無量無邊阿僧祇の衆生を受く。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是の摩訶衍も亦た是の如く、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。

問うて曰はく、何を以てか、虚空は廣大無邊なるが故に、一切の物を受くと説かずして、而

も虚空は所有なきが故に、能く一切の物と衆生とを受く、摩訶衍も亦た所有なしと言ふや。答へて曰はく、現に虚空を見るに所有なくして、一切萬物皆其の中に有り、所有なきを以ての故に能く受くればなり。

問うて曰はく、心心數法も亦た形質なし。何を以てか一切の物を受け

ざるや。答へて曰はく、心心數法は、覺知の相にして是れ受相に非ず。又

住處の若くは内、若くは外、若くは近、若くは遠なし。但だ分別相を以て

の故に、心形あることを知る。色法には住處あり。色處に因るが故に、虚

空あることを知る。色は物の性を受けざるを以て、則ち虚空は物を受くることを知る。色と虚空とは

相違す。色若し受けざれば、則ち虚空は、是れ受くることを知る。無明を以ての故に、明あることを

知り、苦を以ての故に樂あることを知るが如く、色の無なるに由るが故に、虚空ありて更に別相なし

と説く。

【三九】第八問、虚空は廣大無邊なるが故に、一切の物を受容すといはずして、而も所有なきが故に、受容すといふ理由如何。

【四〇】第九問、心王心所も亦質なし、何を以てか一切の物を受けざるか。

復次に、(四) 心心數法には更に受けざるの義あり。邪見の心は正見を受けず、正見は邪見を受けざるが如し。虚空は則ち然らず。一切皆受くるが故なり。又心心數法は、生滅の相にして、是れ斷すべき法なり、虚空は則ち然らず。心心數法と虚空とは、但だ無色無形なることは同じきも、都て異なるらずと言ふことを得ず。是を以ての故に、諸法の中にて、虚空は能く一切を受くと説く。

問うて曰はく、(四) 我が先の問意は然らず。何を以てか、虚空は無量無邊なれば、能く一切の物を受くと言はずして、而も所有なければ、一切の物を受くと言ふや。答へて曰はく、我は、虚空には自相なく、色相を待つて虚空を説くと説けり。若し自相なければ、則ち虚空なし。云何が無量無邊と云はんや。

問うて曰はく、(四) 汝は「受相は則ち是れ虚空なり」と言へり。云何が無と  
言ふや。答へて曰はく、受の相には即ち是れ色相なし。色の到らざる處を  
名けて虚空と爲す。是を以ての故に無は虚空なり。若し實に虚空あらば、  
未だ色あらざるべき應に虚空あるべし。若し未だ色あらずして虚空あらば、虚空は則ち無相なり。何  
となれば、未だ色あらざるを以てなり。色に因つての故に虚空あることを知る。色あるが故に便ち無  
色あり。若し先づ色ありて、後に虚空あらば、虚空は則ち是れ作法なり。作法は名けて常と爲さず。

【四】 心王心所には受けざるの義あり。  
【四】 第一〇問、汝は我が問意を取り違へたり。我は何故に虚空は無邊廣大なるが故に一切の物を受くといはずして、所有なきが故に受くといふやと問へるにあらずや。  
【四】 第一一問、汝は先に虚空の相に受なりといへり、今何を以てか無なりといふか。

若し無相の法あらば、是れ不可得なり。是を以ての故に無は虚空なり。

問うて曰く、若し常に虚空ありて、色に因るが故に、虚空の相を現せば、然る後の相も虚空に在るや。答へて曰く、若し虚空は先に無相ならば、後の相も亦た住する所なけん。若し虚空は先に有相ならば、相の相とする所なく、若し先に無相ならば、相として亦住する所なけん。若し相を離れて無相ならば、相を以て住する處なく、若し相に住處なければ、相とする所の處も亦た無く、相とする所の處なきが故に、相も亦た無く、相及び相處を離れて更に法あると無けん。是を以ての故に、虚空を名けて相と爲さず、名けて法と爲さず、名けて法に非ずと爲さず、名けて有と爲さず、名けて無と爲さず。諸の語言を斷すること、無餘涅槃の如し。餘の一切法も亦た是の如し。

問うて曰はく、若し一切法、是の如くならば、即ち是れ虚空なり。何を以てか復た虚空を以て喩と爲すや。答へて曰く、諸法の因果は皆是れ虚誑にして、無明に因るが故に、衆生の心を誑はすこと有り。衆生は是の法の中に於いて著を生じ、而も虚空に於いては著を生ぜず。六塵の法は衆生の心を誑はす。虚空は復た誑はすと雖も則ち爾らず。是を以ての故に、虚空を以て喩と爲し、麤現の事を以て微細の事を破す。虚空の色に因るが故に、但假名のみありて、定法あること無きが如く、衆生も亦

【四四】 第一二問、若し色に因るが故に虚空の相を現せば、然る後の相も虚空にありや如何。

【四五】 第一三問、若し一切法是の如くならば、即ち是れ虚空なり。然らば何故に復た虚空を以て喩とするか。

た是の如し。(四七) 五衆の和合に因るが故に、但假名のみ有りて、亦た定法なし。摩訶衍も亦た是の如し。衆生は空なるを以て佛なく、菩薩なし。衆生あるを以ての故に佛あり、菩薩あり。若し佛なく、菩薩なければ、即ち摩訶衍なけん。是を以ての故に、摩訶衍は能く無量無邊阿僧祇の衆生を受く。若し是れ有法ならば、無量の諸佛及び弟子を受くること能はざらん。

問うて曰はく、(四八) 若し實に虚空なくんば、云何が能く無量無邊阿僧祇の衆生を受くるや。答へて曰はく、是を以ての故に、佛説きたまはく、「摩訶衍無なるが故に、阿僧祇無なり。阿僧祇無なるが故に、無量も亦た無なり、無量無なるが故に、無邊も亦た無なり、無邊無なるが故に、一切法も亦た無なり。是を以ての故に、能く受く」と。阿僧祇とは、僧祇は秦に數と言ひ、阿は秦に無と言ふ。衆生と諸法とは、各各邊を得べからざるが故に無數と名く。虚空を數ふるに、十方遠近に、邊の得べからざるが故に、無數と名く。分別して六波羅蜜(多)を數ふるに、種種の布施、種種の持戒等、數あること無し。幾の衆生を數ふるに、(四九) 已の上乗、(五〇) 當の上乗、(五一) 今の上乗ありて數ふべからず。是を無數と名く。

復次に、有る人の言はく、「初の數を一と爲して但一のみ有り。一と一の故に二と言ふも、是の如

- 【四六】 五衆とは、新譯にては五蘊と云ふ、即ち色、受、想、行、識のことなり。
- 【四七】 第一四問、若し實に虚空なくんば、云何が能く無量無邊阿僧祇の衆生を受くるか。
- 【四八】 已の上乗とは過去の上乘のこと。
- 【四九】 當の上乗とは、未來の上乗のこと。
- 【五〇】 今の上乗とは、現世の上乗のこと。

き等は、皆一にして更に餘の數法なし。若し皆是れ一ならば則ち無數なり」と。有人の言はく、「一切法は和合するが故に名字あり。輪、鞘、輻、轂の如きありて、和合するが故に名けて車と爲し、定實の法あること無し。一法なきが故に多も亦た無し。先に一にして後に多なればなり。

復た次に、數數の事は、無なるを以ての故に、數も亦無なり。無量とは、斗を以て物を稱量するが如く、智慧を以て諸法を量るも、亦是の如し。諸法は空なるが故に無數なり、無數なるが故に無量無邊なり。實智あること無くんば、云何が能く諸法の定相を得ん。無量なるが故に無邊なり。量は總相に名け、邊は別相に名く。量は初始と爲し、邊は終竟と爲す。

復た次に、我、乃至知者見者は、無なるが故に、實際も亦た無なり。實際は無なるが故に、無數も亦た無なり。無數は無なるが故に、無量も亦た無なり。無量は無なるが故に、無邊も亦た無なり。無邊は無なるが故に、一切法も亦た無なり。是を以ての故に、一切法は畢竟清淨なり。是の摩訶衍は能く一切衆生及び法を含笑す。二事は相因る、若し衆生なければ則ち法なし。若し法なければ即ち衆生なし。先には總相をもて一切法の空を説き、後には一一別に諸法の空を説く。實際は是れ最後の妙法なり。此れ若し無くんば、何に況んや餘法をや。不可思議性より乃至如涅槃の性の如きも、亦是の如し。

須菩提よ、（五）汝が言ふ所の、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ざるも、是の如し、是の如し。須菩提よ、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず。住處を見ず。何となれば、須菩提よ、一切諸法は不動の相なればなり。是の法は來處なく、去處なく、住處なし。何となれば、須菩提よ、色は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なければなり。

須菩提よ、色法は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識法は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、色は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、色性は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、受、想、行、識性は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、色相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。

【五】 佛、第二十二品に須菩提の言へる大乘の來處等を見ずとの説を印可して、更に廣説し給ふなり。

須菩提よ、眼、眼法、眼如、眼性、眼相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。耳、鼻、舌、耳、意、意法、意如、意性、意相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。色、聲、香、味、觸、法も亦た是の如し。須菩提よ、地種、地種法、地種如、地種性、地種相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。水、火、風、空、識種、識種法、識種如、識種性、識種相も亦た是の如し。須菩提よ、如、如法、如如性、如如相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。

須菩提よ、實際、實際法、實際如、實際性、實際相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、不可思議、不可思議法、不可思議如、不可思議性、不可思議相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。

須菩提よ、檀波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)法、檀波羅蜜(多)如、檀波羅蜜(多)性、檀波羅蜜(多)相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)性、尸羅波羅蜜(多)相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。毘梨耶波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)性、毘梨耶波羅蜜(多)相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、四念處、四念處法、四念處如、四念處性、四念處相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。乃至十八不共法も、亦た是の如し。

須菩提よ、善薩、善薩法、善薩如、善薩性、善薩相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。佛如、佛性、佛相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。阿耨多羅三藐三菩提の法と如と性と相とは從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、有爲法、有爲法法、有爲法如、有爲法性、有爲法相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。

【五】 第一五問、諸法は現に來去して見るべきなり、云何が不動の相にして、來なく、去なしと言ふか。

須菩提よ、無爲法、無爲法法、無爲法如、無爲法性、無爲法相は從來する所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ざるなり。

論

論者は言ふ、「佛の謂はく、須菩提よ、汝は何を以てか、但摩訶衍のみの來ること無く、去ること無く、住すること無きを諱するや。一切法も亦た是の如く、來ること無く、去ること無く、住すること無し。一切法の實相は不動なるが故なり」と。

問うて曰く、諸法は現に來去あり、見るべきなり。云何が不動の相にして來ること無く、去ること

と無しと言ふや。答へて曰く、來去の相は、先に已に破せり。今當に更に説くべし。一切の佛法の中には我なく、衆生なく、乃至知者、見者なきが故に、來者、去者なし。來者、去者なきが故に、來去の相も亦た應に無かるべし。

復次に、(五)三世の中に、去相を求むるに不可得なり。何となれば、已に去れる中には、去ること無く、未だ去らざる中にも、亦た去ること無く、已に去り、未だ去らざることを離れて、去る時にも亦た去ること無し。

問うて曰はく、身の動く處ある、是を名けて去ると爲す。已に去り、未だ去らざる中には、身の動くこと無し。是を以ての故に、去ること有るべし。答へて曰はく、然らず、去相を離れて、去時は不可得なり。去時を離れて、去相は不可得なり。云何が去時に去ると言はんや。

復次に、若し去時に去相あらば、應に去相を離れて、去時あるべし。何となれば、汝は、去時に去ること有りと説けばなり。復次に、若し去時に去らば、應に二の去ること有るべし。一には去る時を知り、二には去る時に去ることを知る。

問うて曰はく、(五)若し爾らば何の咎ありや。答へて曰はく、若し爾らば、二の去者あり。何となれば、去者を離れて去相なし。若し去者を離れて去相なくんば、去相を離れて去者なけん。是の故に、

【五】三世の中、去相を求むるに不可得なり。

【五】第一六問、身の動く處ある、是を名けて去ると爲す。已に去り、未だ去らざる中には、身の動くこと無し。去る時、身動けば、即ち去ることあるにあらずや。

【五】第一七問、若し去る時、二の去あらば、何の咎ありや。

去者は去らず、不去者も亦た去らず。去不去を離れても、亦た去ること有ること無し。來者、住者も亦た是の如し。是を以ての故に、佛説きたまはく、「凡夫の人の法は、虚誑無實にして、復た肉眼の見所なりと雖も、畜生と異なること無し」と。是は信すべからず。是の故に、諸法の來ること無く、去ること無く、住する處なく、亦た動することも無しと説くなり。何者か是なる。所謂、色、色法、色如、色性、色相なり。色は眼の見る事に名け、未だ好醜、實不實、自相他相を分別せず。色法は無常、生滅、不淨等に名く。色如は色の和合して有るに名く。水沫の牢固ならずして、離散すれば則ち無く、虚偽無實にして但人の眼を誑はすが如し。色の現在は是の如し。過去、未來も亦た爾なり。現在の火の熱するより、過去未來も亦た、是の如くなるを比知するが如し。

復次に、諸佛は、「色相は畢竟清淨空なり」と觀じたまふが如く、菩薩も亦た應に是の如く觀すべし。色法、色如は何の因縁「を以てか」如ならざる。凡夫の人の見る所の性、自ら爾るが故なり。此の性は深妙なり、云何が知るべき。色相の力を以ての故に知るべし。火は烟を以て相と爲すを以て、烟を見て、則ち火あるとを知るが如く、今色の無常にして破壞し、苦惱麤澁の相なるを見て、其の性の爾ることを知る。此の三法の去らず、來らず、住せざることは、先に説くが如し。乃至無爲、無爲法、「その」如、性、相の來らず、去らず、住せざることも、亦た是の如し。



須菩提よ、汝が言ふ所の是の摩訶衍は、前際も不可得なり、後際も不可得なり、(五) 中際も不可得なり。是の衍は三世等しと名く。是を以ての故に、説いて摩訶衍と名くること、是の如し是の如し。須菩提よ、是の摩訶衍は前際は不可得なり、後際は不可得なり、中際は不可得なり。是の衍は(六) 三世等しと名く。是を以ての故に説いて摩訶衍と名く。何となれば須菩提よ、過去世は過去世空なり。未來世は未來世空なり。現在世は現在世空なり。三世等は三世等空なり。摩訶衍は摩訶衍空なり。菩薩は菩薩空なればなり。何となれば、須菩提よ、是の空は一に非ず、二に非ず、三に非ず、四に非ず、五に非ず、異に非ず、是を以ての故に、説いて三世等しと名く。是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。

是の衍の中には、等不等の相は、不可得なるが故に、染不染不可得なり、瞋不瞋不可得なり、癡不癡不可得なり、慢不慢不可得なり、乃至一切善法不善法も不可得なり。是の衍の中には、常は不可得なり、無常は不可得なり、樂は不可得なり、苦は不可得なり、實は不可得なり、空は不可得なり、我は不可得なり、無我は不可得なり、欲界は不可得なり、無色界は不可得なり、(七) 欲界を度ることは不可得なり、(八) 色界を度ることは不可得なり、(九) 無色界を度ることは不可得なり。何となれば、是の摩訶衍は自法不可得なればなり。

須菩提よ、過去の色は過去の色空なり。未來現在の色は未來現在の色空なり。過去の

- 【五】 佛、第二十二品に、須菩提の言へる大乘は、前中後際不可得なりとの説を印可し、更に之を廣説し給ふなり。
- 【五七】 前際は、過去のことなり。
- 【五八】 後際は、未來のことなり。
- 【五九】 中際は、現在のことなり。
- 【六〇】 三世等しとは、大乘は三世平等を主張するの義なり。而も此の平等も亦空なり不可得なり。
- 【六一】 欲界を度るとは、欲界を超越し、解脱するの謂ひにして、初禪を得たるなり。
- 【六二】 色界を度るとは、色界を超越し、無色界を得たるをいふなり。
- 【六三】 無色界を度るとは、三界の繫縛を離れて、超界解脱せるをいふ。

受想行識は過去の受想行識空なり。未來現在の受想行識は未來現在の受想行識空なり。空中の過去の色は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なり。何に況んや、空中の過去の色の不可得なることをや。空中の未來現在の色を得べけんや。空中の過去の受想行識は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なればなり。何に況んや、空中の未來現在の色を得べけんや。空中の過去の受想行識を得べけんや。空中の未來現在の受想行識は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なればなり。何に況んや、空中の過去の受想行識を得べけんや。空中の未來現在の受想行識を得べけんや。

須菩提よ、過去の檀波羅蜜(多)も不可得なり、未來の檀波羅蜜(多)も不可得なり、現在の檀波羅蜜(多)も不可得なり、三世等の檀波羅蜜(多)も亦た不可得なり。何となれば、等中の過去世は不可得、未來世も不可得、現在世も不可得にして、等中の等も亦た不可得なればなり。何に況んや、等中の過去世、未來世、現在世を得べけんや。尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、過去世の中の四念處は不可得なり、乃至過去世の中の十八不共法も不可得なり。未來世、現在世も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、三世等の中の四念處は不可得なり、乃至三世等の中の十八不共法も亦た不可得なり。何となれば、等の中の過去世の四念處は、不可得、等の中の未來世の四念處は、不可得、等の中の現在世の四念處は、不可得にして、等の中の等も亦た不可得なればなり。何に況んや、等の中の過去世の四念處、未來現在世の四念處を得べけんや。等の中の等も亦た不可得なり。何に況んや、等の中の過去、乃至十八不共法を得べけんや。未來、現在世も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、過去世の凡夫人は不可得なり。未來世、現在世中の凡夫人も不可得なり。三世等の中の凡夫人も亦た

不可得なり。何となれば、衆生は不可得、乃至知者見者も、不可得なればなり。過去世の中の聲聞、辟支佛、菩薩佛は不可得なり。未來現在世の中の聲聞、辟支佛、菩薩、佛は不可得なり。三世等のの中の聲聞、辟支佛、菩薩、佛は不可得なり。何となれば、衆生は不可得、乃至知者見者も不可得なればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の中に住し、三世の等の相を學して、當に一切種智を具足すべし。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。所謂、三世の等の相の菩薩摩訶薩は、是の衍の中に住し、一切世間及び諸天、人、阿修羅に勝出して、薩婆若を成就す。

爾の時に須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、善い哉、善い哉、是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。何となれば、過去の諸の菩薩は、是の衍の中に學して、一切種智を得たり。未來世の諸の菩薩摩訶薩も、亦た是の衍の中に學して、當に一切種智を得べし。世尊よ、今十方の無量阿僧祇の世界の中の、諸の菩薩摩訶薩も、亦た是の衍の中に學して、一切種智を得。是を以ての故に、世尊よ、是の衍は實に是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し、過去未來現在の諸佛は、是の摩訶衍の中に學して、已に一切種智を得、當に得べく、今得」と。

【六】等の義解

論者言はく、須菩提は讚じて、是の摩訶衍の前後際、中際は、俱に不可得にして、三世等しきが故に摩訶衍と名くと説けり。今佛は廣く須菩提の讚する所を演べたまふ。是の三世は云何が不可得なる。所謂過去世は過去世空なり。未來世は未來世空なり。現在世は現在世空なるが故に不可得なり。三世世とは、(西)等は空なり。摩訶衍は摩訶衍自ら空なり。菩薩は菩薩自ら空なり。是の三世の中の三世の相の空なる義は、先に説くが如し。此の中に佛は自ら空の因縁を説き給へり。所謂、空と空

相は一に非ず、二に非ず、三に非ず、四に非ず、五に非ず、等うして異ならず、合せず、散せず、分別すること有ること無し。是の故に三世に等うして、空相は所有なきが故に、是の等も亦た空なり。菩薩は能く是の如く諸法の三世の等を解し、無始世より來た、疲厭することを爲さず。未來世の無邊なるを以ての故に難を爲さず、是を菩薩の三世等と爲し、摩訶衍と名く。是の摩訶衍の中の等相は不可得にして、不等相も亦た不可得なり。是の三世等の三昧を得て是の不等相を破す。不等相は相對の故に有り。等不等は、畢竟無なるが故に、等も亦た無なり。欲、不欲、乃至三界、三界を度ることの是の相對法も亦た是の如し。此の中に佛自ら説きたまはく、「是の諸法は皆因縁の和合に従ふが故に自性なく、自性なきが故に空なり」と。

【六差】 第一八問、何故に三世及び三世の等の中の檀波羅蜜多は不可得なるか。

復次に、過去の色は過去の色相空なり。未來、現在も亦た是の如し。色の如く、餘の四衆も亦た是の如し。何となれば、空中の空相は不可得なり。何に況んや、空中に三世五衆の相あらんや。菩薩は五衆の空を觀じ、貪欲を斷じて道行、所謂る檀波羅蜜「多」等に入る。亦た五衆の如きは三世の中に不可得なり。三世は等なるが故なり。等は即ち是れ空なり。是の等中の檀波羅蜜「多」は不可得なり。

問うて曰はく、「蓋を以ての故に、三世及び三世の等の中の檀波羅蜜「多」は不可得なるや。答へて曰はく、諸法の等の中に三世の等なく、等の中の等の相も亦た不可得なり。何に況んや、三世の五波

羅蜜(多)、乃至十八不共法も亦た是の如くなるをや。

復次に、三世の中の凡夫の相は不可得なり。聲聞、乃至佛も亦不可得なり。「そは」衆生は空なるを以ての故なり。菩薩は般若波羅蜜(多)に住して、能く是の如く三世の等の空を學し、諸善の功德を集め、便ち一切種智を具足す。佛説きたまはく、「菩薩は能く是の如く、三世の等の中に住して、則ち能く一切世間、及び諸天人阿修羅に勝出す」と。是の時に須菩提、讚じて言はく、「世尊よ、善哉、善哉。是の摩訶衍は諸の菩薩を利益す。何となれば過去の諸の菩薩よ、是の摩訶衍を學して一切種智を得、未だ得ず、今得ることも亦た是の如し」と。有人の言はく、「清淨を得て因縁なければ、染垢穢も亦た因縁なく、大小、好醜、縛解も、皆な主を與へらると無し」と。有人の言はく、「好醜、縛解は時節に至りて自ら得し」と。

有人の言はく、「福德を成就するが故に佛道を得し」と。有人の言はく、「但清淨の實智慧を得て佛道を得し」と。是の如き等の説は、皆な是非因縁なり。少因縁なり、須菩提の讚歎せざる所以なり。今佛は非因縁を捨て、不具足の因縁を捨てず。具足の因縁、所謂る六波羅蜜(多)を説きたまふ。三世の菩薩は、是の乘を學し、具足して佛道を成ずることを得。佛も亦た須菩提の嘆ずる所を可して、是の如し、是の如しと言へり。

# 卷の第五十二

## 會宗旨第二十四を釋す。



爾の時に、三慧命富樓那彌多羅尼子、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は須菩提をして  
 諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜(多)を説かしむ、今乃ち 摩訶衍を説くことを  
 爲すや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、われ摩訶衍を説いて將に般若波  
 羅蜜(多)を離ること無からんとす。(離れたりとせんや、不や)と。佛の言はく、「不  
 なり。須菩提よ、汝は摩訶衍を説き、般若波羅蜜(多)に隨つて、般若波羅蜜(多)を離れ  
 す。何となれば一切の所有の善法、助道法、若くは聲聞法、若くは辟支佛法、若くは菩  
 薩法、若くは佛法、是の一切の法は、皆般若波羅蜜(多)の中に攝入すればなり」と。須菩  
 提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か諸の善法、助道法、聲聞法、辟支佛法、菩  
 薩法、佛法にして皆般若波羅蜜(多)の中に攝入するや」と。佛、須菩提に告げ給はく、  
 「所謂、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜  
 (多)、般若波羅蜜(多)、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、  
 空、無相、無作、解脫門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法は總攝の  
 相なくして常に攝行す。

【一】 第十八品以下、廣く大乘を説き、般若波羅蜜多と名異り、義同じき所以を示す。之を會宗といふ。

【二】 富樓那は、大乘と般若と一致することを疑はざるも、新學鈍根の者の疑を解決せんが爲に、之を問ひ、佛の決答を仰ぐなり。

【三】 般若を説かしめば、宜しく般若を説くべし。何ぞ般若を措いて大乘を説くか。

【四】 須菩提は自ら説く所の大乘、これ般若とするに、富樓那の疑難あるを以て、自家の所説に失ありや不やを問へるなり。



こと無し」と、此の義は初に已に之を論せり。今佛は爲に隨順の因縁を説きたまふ。所謂、三乘に攝する所の、一切の善法は皆合聚して、般若波羅蜜(多)の中に在り。何となれば、一切の三乘の善法は皆涅槃の爲にするが故なり。涅槃の門に三種あり。一切法に皆空門、無相門、無作門に入る。持戒の如きは能く禪定を生じ、禪定は能く實智慧を生ず。世間に著せざるが故なり。何等か三乘の助道法にして般若の中に攝在するや。所謂、六波羅蜜(多)、三十七品、三解脱門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法は錯謬の相なく、常に捨行す。此の中、三十七品、三解脱門は、是れ三乘の共法なり。六波羅蜜(多)は、是れ菩薩の法なり。十力、乃至常捨行は、是れ佛法なり。有る人の言はく、「六波羅蜜(多)に具足あり、不具足あり、不具足は二乘に共ずる法なり。具足は獨り菩薩のみの法なり」と。

【五】三種の涅槃門、(一)空門、(二)無相門、(三)無作門。

復次に、摩訶衍は空なり、般若波羅蜜(多)も亦た空なり、空の義は一なるが故に、須菩提は隨順して錯ること無し。般若波羅蜜(多)の空なるが如く、五波羅蜜(多)、乃至如法性實際不可思議性、涅槃も亦た是の如し。

復次に、般若波羅蜜(多)乃至涅槃は、皆是れ合せず、散せず、無色、無形、無對、一相、所謂、無相なり。是の同相の故に、摩訶衍は則ち是れ般若波羅蜜(多)なりと説く。摩訶衍と般若波羅蜜(多)は無二無別なるが故なり。

十無口第二十五を釋す。

慧命須菩提は佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の實際は不可得なり。後際も不可得なり。中際も不可得なり。色は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと。色は是れ菩薩摩訶薩、是れ亦た不可得なり。受想行識は是れ菩薩摩訶薩、是れ亦た不可得なり。

是の如く、世尊よ、一切種、一切處に於いて菩薩を求むるに不可得なり。世尊よ、我當に何等の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜(多)を教ふべきや。世尊よ、菩薩摩訶薩は但だ名字あるのみ。我の名字を説くに我は畢竟不生なるが如し。我の如く、諸法も亦た是の如く自性なし。何等の色か畢竟不生なる。何等の受想行識か畢竟不生なる。世尊よ、是れ畢竟不生なれば名けて色と爲さす。是れ畢竟不生なれば名けて受想行識と爲さす。世尊よ若し畢竟不生の法は當に是れ般若波羅蜜(多)なりと教ふべきや。畢竟不生を離れて亦た菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を行ずることも無し。若し菩薩、是の説を作すを聞いて、心に没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れずんば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜(多)を行ずるなり」と。

(七) 舍利弗、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、菩薩摩訶薩の實際は不可得なり、後際も不可得なり、中際も不可得なりと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、色は無邊の故に、當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと言ふや。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、色は是れ菩薩、是れ亦不可得なり、受想行識は是れ菩薩、是れ亦た不可得なりと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、一切種、一切處に於いて菩薩は不可得なり。當に何等

【六】 先に已に菩薩の人も、菩薩の名も、共に不可得なりと説けども、今は廣く十種に分別して、菩薩の不可得なる所以を説く、故に十無品と名くるなり。

【七】 舍利弗十種分別の因縁を問ふ。

なか菩薩の般若波羅蜜(多)なりと教ふべしと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は但名字のみ有りと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、我の名字を説くに、我は畢竟不生なるが如く、我の如く諸法も亦是の如く自性なし。何等の色か畢竟不生なる、何等の受想行識か畢竟不生なると言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、畢竟不生を名けて色と爲さず、畢竟不生を名けて受想行識と爲さずと言ふや。須菩提よ、何が故に、若し畢竟不生の法は、當に是れ般若波羅蜜(多)なりと教ふべしと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、畢竟不生を離れては、亦た菩薩の阿耨多羅三藐三菩提をも行すると無しと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、若し菩薩は是の説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れず、若し能く是の如く行せば、是を菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行すと名くと言ふや」と。

爾の時に須菩提、舍利弗に報じて言く、「衆生は所有なきが故に菩薩の實際は不可得なり。衆生は空なるが故に菩薩の實際は不可得なり。衆生は離なるが故に菩薩の實際は不可得なり。舍利弗よ、色有ると無きが故に菩薩の實際は不可得なり。受想行識有ると無きが故に菩薩の實際は不可得なり。色は空なるが故に菩薩の實際は不可得なり。受想行識は空なるが故に菩薩の實際は不可得なり。色は離なるが故に菩薩の實際は不可得なり。舍利弗よ、色は性無きが故に菩薩は實際不可得なり。受想行識は性無きが故に、菩薩は實際不可得なり。舍利弗よ、檀波羅蜜(多)は有ると無きが故に、菩薩は實際不可得なり。尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)は有ること無きが故に、菩薩は實際不可得なり。何となれば、舍利弗よ、空中には實際不可得なり。實際不可得なり。空は菩薩に異ならず、菩薩は實際に異ならず。舍利弗よ、空と菩薩と實際との是の諸法は無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩の實際は不可得なり。舍利弗よ、檀波羅蜜(多)は空なるが故に、檀波羅蜜(多)は離なるが故に、檀波羅蜜(多)の性は無なるが

【八】須菩提十種分別中の第一 實際不可得を明す。

舍利弗よ、檀波羅蜜(多)は空なるが故に、檀波羅蜜(多)は離なるが故に、檀波羅蜜(多)の性は無なるが

故に、菩薩の前際は不可得なり。尸羅波羅蜜(多)、辱提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)は空なるが故に、般若波羅蜜(多)は、離なるが故に、般若波羅蜜(多)の性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。何となれば、舍利弗よ、空中には前際も不可得なり、後際も不可得なり、中際も不可得なり、空は菩薩に異ならず、亦た前際に、異ならず。舍利弗よ、空と菩薩と前際とは無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩の前際は不可得なり。

復次に、舍利弗よ、内空は有る所なきが故に菩薩の前際は不可得なり。乃至、無法有法空も所有なきが故に、菩薩の前際は不可得なり。内空は空なるが故に、内空は離なるが故に、内空の性は無なるが故に、無法有法空に至るまで、空なるが故に、離なるが故に性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、四念處は所有なきが故に、菩薩の前際は不可得なり。四念處は空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。乃至、十八不共法も所有なきが故に、菩薩の前際は不可得なり。十八不共法は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩の前際は不可得なり。

復次に、舍利弗よ、一切の三昧門、一切の陀羅尼門は有るも無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。三昧門、陀羅尼門は空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、法性は有るも無きが故に菩薩の前際は不可得なり。法性は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、如は有るも無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に。實際は有るも無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に。不可思議性は有るも無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に。

菩薩の前後は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、聲聞は有ること無きが故に、菩薩の前後は不可得なり。聲聞は空なるが故に、離なるが故に、性は無

なるが故に、菩薩の前後は不可得なり。辟支佛は有ると無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に菩薩

の前後は不可得なり。佛は有ると無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に菩薩の前後は不可得なり。

阿耨多羅三藐三菩提は有ること無きが故に、乃至性無きが故に菩薩の前後は不可得なり。

復次に、一切種智は有ること無きが故に、乃至性無きが故に菩薩の前後は不可得なり。何となれば、舍利弗よ、空は前後

不可得、後際不可得、中際不可得なれば菩薩は不可得なり。舍利弗よ、空は菩薩に異ならず、亦た前後に異ならず。空と菩

薩と前後との是の諸法は無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩は不可

得なり。後際、中際も亦た是の如し。

論

問うて曰はく、上に已に説けり、菩薩、菩薩の字は不可得なり。

誰の爲にか般若波羅蜜(多)を説かんと。今何を以てか更に説くや。答へて

曰はく、應に是の間を作すべからず。須菩提は、空行第一にして、常に樂んで空を説き、若し所説あ

れば、常に空門を以て衆生を利益せり。

復た次に、上には略して説き、是の中には十種に廣く、菩薩の不可得なるを分別す。行者若し諸法

の空を觀じ、無相無作に隨順し、無作心を以ての故に、所作あるを欲せずんば、尚ほ自ら利益を作

すこと能はず、何に況んや、人を利益せんをや。若し人、我心の中に住せば、能く諸法の善、不善の

【九】 第一問、菩薩、菩薩の字の不可得なるは、上に已に説けり、然るを今更に説くは何故なるか。

相を分別し、諸の善法を集めて不善法を捨てん。今佛説きたまはく、「般若波羅蜜(多)の中には我心を計すべからず、諸法を分別すべからず」と。但衆善を行ずる、是の事すら難しと爲す。行者は是の念を作す、「若し我なくんば、誰の爲にか善を修せん。先づ我あり、般若波羅蜜(多)を以ての故に、心に憂感を生ずること無し」と。是の故に須菩提は更に重ねて説けり、「我は本より已來無なり。先に有にして、今無なるに非ず」と。行者は是の如く、本來自ら無なれば、今、失する所なきを知るが故に、憂ふる所なし。譬へば、深根の大樹は、一斫を以て能く辦すべからず、多くの斧の力を用つて、乃ち斷つが如く、菩薩の空も亦た是の如し。一たび説いて便ち得べからず。是を以ての故に廣く分別す。須菩提は、佛の問ひたまふ時、是の念を作せり、「若し定んで菩薩の法あらば、應に三世に通じて有るべし。今、前世の中には、菩薩あること無し。何となれば、前世には初なければなり。未來世も亦た是の如し。未だ因縁あらざればなり。前後相待するが故に中間あり。若し前後なければ、則ち中間なし。若し五衆は是れ菩薩なりと謂はば、五衆は無邊なること、先に種種の因縁を説けるが如し。五衆は、畢竟空なるが故に、無量無邊なり。無量無邊なるが故に、無爲法に同じ。若し菩薩は無邊なりとは、是の事は然らず。此の因縁を以ての故に、菩薩は不可得なり。當に誰の爲にか、常に一切處、一切種、一切時に菩薩を求むるに不可得なりと説くべき。當に誰の爲にか、我は畢竟不生空にして所有なきが如く。五衆も亦た是の如し。畢竟不生にして所有なし。既に衆生及び五衆法なし、云何が善

薩あらんと説くべきや。

問うて曰はく、(一〇)の衆生及び五衆法の畢竟不生なる、是の法を解する者は即ち是れ菩薩ならん。答へて曰はく、畢竟不生なれば名けて色と爲さず、名けて受想行識と爲さず。何となれば、五衆は是れ生相にして、畢竟不生の中には是の分別なければなり。五衆は畢竟不生なれば、以て教化すべからず。畢竟不生を離れては、亦た菩薩の行道も無し。當に誰にか教ふべき、菩薩は是を聞いて怖かず、畏れざる、是を能く菩薩道を行ずと爲す。

問うて曰はく、(二)が我と菩薩とは是れ一物なり。云何が我を以て菩薩に喩

ふるや。答へて曰はく、是の般若波羅蜜〔多〕の中には、一切法は空なり。

初學は得ざれば、便ち爲に空を説く、先づ當に罪福を分別し、罪を捨てて

福を修すべし。福德の果報は無常なり。無常なるが故に苦を生ず。是の故

に福を捨て世間を厭ひ、道を求めて涅槃に入る。爾の時、應に是の念を作すべし。「我に因るが故に

諸の煩惱を生ず。是の我は、六識の中に求むるに、不可得なり。但顛倒を以ての故に、我に著す」

と。是の故に、無我を解すること易く、化を受くべきこと易し。若し色は空なりと言はば、則ち解し

難し。耳に空を説くを聞くと雖も、眼に常に實を見る。是の故に先づ惡罪の中の我を破し、後に一切

諸法を破す。一切の佛弟子の道を得る者は自ら無我を知り、自ら〔無我〕を證す。未だ道を得ざる者は、

【一〇】 第二問、衆生及び五蘊の法の畢竟不生なるを解するは是れ菩薩にあらずや。

【二】 第三問、我と菩薩とは是れ一物なり。今それ我を以て菩薩に喩ふる理由如何。

餘法の空を信すること、無我を信するが如くなること能はず。是の故に無我を以て喩と爲す。此の中に須菩提は説けり、「一切法の空より推すに、菩薩なし」と。無我を用つて喩と爲す。小を以て大に喩ふることに、石蜜を甘露に喩ふるが如し。

問うて曰はく、(三)舍利弗は空、無我の義を知れり。何を以ての故に、事に問を致すや。答へて曰はく、須菩提は聲聞の人にして、徳、菩薩に如かず。而も佛前に於て深般若を説く。新學の菩薩は、心に或は疑を生ずらく、「上に佛は歎じて、汝は摩訶衍を説きて、般若に隨順すと言ふと雖も、佛は須菩提に、將に順せんとすと謂ふ」と。舍利弗は此の疑を斷せんと欲するが故に問を發するなり。

復次に、佛は須菩提と共に般若、乃至終竟を説かんと欲したまふ。是の

故に舍利弗は事事に質問し、須菩提をして善く深義を分別せしめ、衆人をして敬信せしむ。是を以ての故に、過去世の中の菩薩の不可得なるより、乃至恐れず怖かざるを問ひ、須菩提は義を答ふらく、「我と衆生と人とは、即ち是れ一物なり。未だ得ざる時を凡夫の人と名け、初めて道に入るより乃ち阿羅漢に至るまでを聲聞の人と名け、因縁法を觀じ、空を悟ること小しく深く、少しく衆生を感むを辟支佛の人と名け、深く空法に入り、六波羅蜜(多)、大慈大悲を行す、是を菩薩の人と名く。功德別異なるが故に名字も亦た異なり。我と衆生と人との如きは一事にして、眼に事を見るを以ての故に、

【三】 第四問、舍利弗は空、無我の義を知れり、何を以てか事に問を致すや。

見者と名け、意を得るが故に、知者と名け、苦樂を受くるが故に、受者と名く。是の我、衆生、人等  
 は、先に已に種種の因縁を以て、無なることを説けるが故に、菩薩も亦應に無なるべし。是の故に、  
 須菩提、舍利弗に語るらく、「衆生は無なるが故に三世の中に菩薩なし」と。

問うて曰はく、(二三) 五衆和合して菩薩あらば、菩薩は應に無なるべく。五衆は應に有なるべし。答へ  
 て曰はく、是の事を破せんが爲の故に、衆生なく、我なしと言ふ。我なきが故に、則ち五衆は屬す  
 所なし。屬する所なきが故に空なり。空なるが故に菩薩なきなり。

問うて曰はく、(二四) 若し五衆空ならば、空は即ち是れ菩薩ならん。答へて  
 曰はく、五衆は空にして亦た菩薩にも非ず。空にして所有なく、分別なき  
 が故なり。五衆は五衆を離れて性なく、亦た菩薩も無し。若し菩薩なしと  
 説かば、則ち三世は皆無なり。是の五衆等の世間法、六波羅蜜(多)等の道  
 法を觀する、是を菩薩と名く。是の法は空なるが故に、菩薩も亦た空なり。此の中に佛自ら因縁を説  
 きたまはく、「諸法の空は、菩薩に異ならず、菩薩は、空に異ならず、菩薩空なれば、三世は空にし  
 て、二なく別なし」と。六波羅蜜(多)より、乃ち一切種智に至るまで、是の諸法を行するが故に、名  
 けて菩薩と爲す。是の諸法は、空なるが故に、菩薩も亦た空なり。此の中の法は空なり。聲聞、辟支  
 佛は、是の空を得るか故に、聲聞、辟支佛と名く。聲聞、辟支佛は、空なるが故なり。菩薩も亦た是

【三】 第五問、五蘊和合して菩薩あらば、五蘊は有にして、菩薩は無なるにあらずや。  
 【四】 第六問、若し五蘊空ならば、即ち是れ菩薩にあらずや。



舍利弗の言ふ所の如く (二五) 色は無邊なるが故に、當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。受想行識は無邊なるが故に、當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。舍利弗よ、色は虚空の如く、受想行識も虚空の如し。何となれば、舍利弗よ、虚空の邊は不可得なり、中も不可得なり、邊なく申なきが故に但た説きて虚空と名くるが如し。是の如く、舍利弗よ、色の邊は不可得なり、中も不可得なり、是の色は空なるが故に空の中に亦た邊なく、亦た中も無し。受想行識の邊は不可得なり、中も不可得なり、識は空なるが故に空の中に亦た邊なく、亦中も無し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は邊なきが故に、當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。受想行識は邊なきが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。乃至十八不共法も亦た是の如し。

舍利弗の言へるが如く (二六) 色は是れ菩薩、是れ亦た不可得なり。受想行識は是れ菩薩、是れ亦た不可得なり。舍利弗よ、色、色相は空なり。受想行識、識相は空なり。檀波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)の相は空なり。乃至般若波羅蜜(多)も亦是の如し。内空、内空の相は空なり、乃至無法有法空、無法有法空の相も空なり。四念處、四念處の相は空なり、乃至十八不共法、十八不共法の相も空なり。如、法性、實際、不可思議性、不可思議性の相は空なり。三昧門、三昧門の相は空なり。陀羅尼門、陀羅尼門の相は空なり。一切智、一切智の相は空なり。道種智、道種智の相は空なり。一切種智、一切種智の相は空なり。聲聞乘、聲聞乘の相は空なり。辟支佛乘、辟支佛乘の相は空なり。佛乘、佛乘の相は空なり。聲聞人、聲聞人の相は空なり。辟支佛、辟支佛の相は空なり。佛、佛の相は空なり。

【二五】 十種分別の第二、色等の諸法無邊にして、菩薩も無邊なれば、邊中不可得なるを明す。

【二六】 十種分別の第三、五蘊等の當體菩薩にして、而も諸法の體相不可得なり、菩薩も亦不可得なる所を明す。

空の中の色は不可得なり。受想行識も不可得なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は是れ菩薩、是れ亦不可得なり。受想行識は是れ菩薩、是も亦た不可得なり。

舍利弗の言ふが如く、何の因縁の故に、一切種、一切處に於て菩薩は不可得なる。當に何等の菩薩にか般若波羅蜜(多)を教ふべきとは、舍利弗よ、色は色の中に不可得なり、色は受の中に不可得なり、受は受の中に不可得なり、受は色の中に不可得なり、受は想の中に不可得なり、想は想の中に不可得なり、想は色受の中に不可得なり、想は行の中に不可得なり。

行は行の中に不可得なり、行は色受想の中に不可得なり、行は識の中に不可得なり。識は識の中に不可得なり、識は色受想行の中に不可得なり。舍利弗よ、眼は眼の中に不可得なり、眼は耳の中に不可得なり、耳は耳の中に不可得なり、耳は眼の中に不可得なり、耳は鼻の中に不可得なり、鼻は鼻の中に不可得なり、鼻は眼耳の中に不可得なり、鼻は舌の中に不可得なり、舌は舌の中に不可得なり、舌は眼耳鼻の中に不可得なり、舌は身の中に不可得なり、身は身の中に不可得なり、身は眼耳鼻舌の中に不可得なり、身は意の中に不可得なり、意は意の中に不可得なり、意は眼耳鼻舌身の中に不可得なり。六入、六識、六觸、六觸因縁生の受も、亦た是の如し。檀波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)、内空、乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、性法乃至辟支佛法、初地乃至十地、一切種智、道種智、一切種智も亦た是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛も亦た是の如し。菩薩は菩薩の中に不可得なり。菩薩は般若波羅蜜(多)の中に不可得なり。般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)の中に不可得なり。般若波羅蜜(多)は菩薩の中に不可得なり。般若波羅蜜(多)は所有なくして不可得なり。教化の中の教化は所有なくして、不可得なり。教化の中の菩薩、及び般若波羅蜜(多)は所有なくして不可得なり。舍利弗よ、是の如く、一切の法は所有なくして、不可得なり。是の因縁を以ての故に、一切種、一切處に菩薩は

【七】十種分別中の第四、菩薩不可得の故に般若の所化とすべきものなきを示す。

不可得なり。當に何等の菩薩に般若波羅蜜(多)を教ふべき。

舍利弗の言ふ所の如く (二九) 何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は、但だ假名のみ有りと言くやとは、舍利弗よ、色は是れ假名なり、受想行識は是れ假名なり。色の名は色に非ず、受想行識の名は識に非ず。何となれば、名と名相は空なればなり。若し空なれば則ち菩薩に非ず。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩は但假名のみ有り。

復次に、舍利弗よ、檀波羅蜜(多)は但だ名字のみ有り。名字の中に檀波羅蜜(多)有るに非ず。檀波羅蜜(多)の中に名字ありに非ず。是の因縁を以ての故に、菩薩は但だ假名のみ有り。尸羅波羅蜜(多)、尸羅提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)は但名字のみ有り、名字の中には般若波羅蜜(多)あるも無く、般若波羅蜜(多)の中には名字あるも無し。是の因縁を以ての故に、菩薩は但だ假名のみ有り。舍利弗よ、内空は但だ名字のみ有り。乃至無法有法空も、但だ名字のみ有り。名字の中には内空なく、内空の中には名字なし。何となれば、名字と内空とは、俱に不可得なればなり。乃至、無法有法空も、亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩は但だ假名のみ有り。舍利弗よ、四念處は但だ名字のみ有り。乃至十八不共法も、但だ名字のみ有り。一切の三昧門、一切の陀羅尼乃至一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は、菩薩は但だ假名のみ有り」と説くなり。

舍利弗の言ふ所の如く (二九) 何の因縁の故に、我の名字を説くも我は畢竟不生なりとは、舍利弗よ、我は畢竟不可得なり、云何が當に生ずること有るべき。乃至知者、見者は畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。舍利弗よ、色は畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。受想行識は畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。眼は畢竟不可

【八】 十種分別中の第五、菩薩を教ふとは、假名施設に過ぎざる旨を説く。  
【九】 十種分別中の第六、名字の空なるが如く、人も法も畢竟不生なる旨を明す。

得なり。乃至、意觸因縁生の受も、畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。檀波羅蜜(多)は、畢竟不可得なり。乃至、般若波羅蜜(多)は、畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。内空は、畢竟不可得なり。乃至、十八不共法は、畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。四念處は畢竟不可得なり。乃至、十八不共法は、畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。諸の三昧門、諸の陀羅尼門は、畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。摩訶、乃至佛は畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべき。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は、我の名字の如くに我も亦た畢竟不生なりと説くなり。

論

問うて曰はく、(三〇) 心心數法は無形なり、見るべからざるが故に、無

邊なるべけんも、色は是れ有形にして見るべし、云何が無邊ならんや。答へて曰はく、處として色あらざること無く、遠近輕重を籌量することを得べからず。佛の説きたまへるが如くんば、「四大は處として有らざると無し、故に名けて大と爲す。五情を以て、其の限を得べからず。斗を以て其の多少輕重を稱量すべからず」と。是の故に、色は無邊なりと言ふ。

復次に、是の色は過去時の初始より不可得なり。未來時の中にも、恆河沙劫數の限あり。色は當に盡くること有るべき無し。是の故に後邊なし。初邊と後邊とは無きが故に、中もまた無きなり。復次に、邊は色相に名く。是の色を分別破散するに、邊は不可得にして、本相あること無し。

復次に、無爲法は、不生不滅なるが故に、無數無量無邊なり。法空を以て、色を觀するに皆空にし

【三〇】 第七問、心王心所は無形にして不可見の故に、無邊なりと言ひ得べきも、色は有形にして可見なり、云何が無邊と言ふべけんや。

て、虚空及び無爲と同相なり。無量無數無邊の法中より、乃ち微塵に至るまで不可得なり、何に況んや菩薩をや。是の故に色は無邊なりと説く。菩薩も亦無邊なり。色の無邊なるが如く、乃至十八不共法も亦た是の如し。相に随つて分別するとは先に説くが如し。是の五衆は無量無邊なるが故に、色は是れ菩薩なりと言ふことを得ず。四衆も亦た是の如し。

復次に、色若し心數法を離るれば草木瓦石の如し。云何が菩薩と名けんや。若し心數法は、色を離るれば則ち依止する處なく、亦た能く爲す所なし。云何が菩薩と名けん。復次に六波羅蜜〔多〕、十八空、三十七品、十力、乃至十八不共法、如、法性、實際、不可思議性、

【三】一切處の義解。  
【三】一切種智の義解。

三解脱門、陀羅尼門、諸の三昧門、薩婆若、道智、三乘、三乘の人、是の法を若くは修し、若くは觀する、是を菩薩と名く。是の法は皆自相空なるを以つての故に空なり。所謂、檀波羅蜜〔多〕、檀波羅蜜〔多〕の相は空なり。乃至、佛、佛の相も空なり。一切處とは、五衆、十二入、十八界、乃至一切種智なり。一切種智とは、十八空、三解脱門、般若波羅蜜〔多〕は、若くは常、若くは無常等と觀じ、一門、二門、乃至無量の門等に入る。是れを一切種智と名く。菩薩を求索するに不可得なり。又自法の中には自法なきを以つて、亦た他法も無し。此の中に説くが如く、色は色の中に不可得なり、色は受の中に不可得なり、受は受の中に不可得なり、受は色の中に不可得なり、乃至般若波羅蜜〔多〕は般若波羅蜜〔多〕の中に不可得なり。乃至、教化の中に教化は不可得なり。

〔三〕但名字のみ有りとは、是の五衆は破壊散滅し、虚空の如くにして、異なること無し。是の菩薩は但名字のみ有りて、幻化の人の如く、假の名字の中に更に名を立することを爲す。須菩提、舍利弗に語るらく、「但菩薩のみ假名字ならず、五衆も皆亦假名字なり」と。假の名字の中に、假の名字の相は不可得にして、皆第一義の中に入る。若し是の如くんば、空は則ち菩薩に非ず。

復次に、六波羅蜜(多)より、乃ち一切種智に至るまで、是の法を行ずるが故に、名づけて菩薩と爲す。是の法も亦た假の名字、菩薩も亦た假の名字なれば、空にして所有なし。是の諸法は等なり、強ひて爲に名を作す。因縁和合の故に有にして、亦た其の實なし。我の名字は畢竟不生なりとは、此の品の初に已に説くが如し。此の中に須菩提も亦た衆生空、法空を以つて我を破す。所謂、我は畢竟不可得なり。乃至知者、見者も不可得なり。云何が當に生ずること有るべけんや。五衆は畢竟不可得なり、云何が五衆の生ずること有らんや。乃至、意觸因縁生の受も畢竟不可得なり、云何が當に生ずること有るべけんや。六波羅蜜(多)は畢竟不可得なり、乃至、諸の陀羅尼門、三昧門、聲聞、辟支佛、佛は、畢竟不可得なり。云何が當に生ずること有るべけんや。若し法は先に有らば、然る後に生を問ふべし。法體先に無なり、云何んが生ずること有らん。

〔三〕但名字のみありの義解。

舍利弗の言ふ所の如く、(二四) 我の如くに、諸法も亦た是の如く自性なしとは、舍利弗よ、舍利弗よ、何等か和合生にして自性なきや。舍利弗よ、色は和合生にして自性なく、受想行識は和合生にして自性なく、眼は和合生にして自性なく、乃至意も和合生にして自性なく、色乃至法、眼界乃至法界、地種乃至識種、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至、意觸の因縁生の受も、和合生にして、自性なし。檀波羅蜜(多)、乃至、般若波羅蜜(多)も、和合生にして、自性なし。四念處、乃至、十八不共法も和合生にして自性なし。

復次に、舍利弗よ、一切法は無常にして亦た失せず。舍利弗、須菩提に問ふ、「何等の法が無常にして亦た失せざるや」と。須菩提の言はく、「色は無常にして亦た失せず。受想行識は無常にして亦た失せず。何となれば、若し法無常ならば即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、一切の有爲法は無常にして亦た失せず。復次に、舍利弗よ、若くは有漏法、若くは無漏法、若くは(二六) 有記法、若くは(二七) 無記法は無常にして亦た失せず。何となれば、若し法無常ならば、即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、一切の作法は無常にして亦た失せざるなり。

復次に、舍利弗よ、一切法は常に非ず、滅に非ず。舍利弗の言はく、「何等の法が常に非ず、滅に非ざるや」と。須菩提の言はく、「色は常に非ず、滅に非ず、何となれば(二五) 性自ら爾なればなり。受想行識は常に非ず、滅に非ず、何となれば、

諸法は、(二五) 和合生の故に自性なし

【四】第六分別の中、更に諸法無自性の義を明す。

【五】和合生とは、衆縁の相應不相應によりて和合し、爲に萬差の諸法を生ずるをいふ。

【六】有記法とは、善若くは惡と記別せらるるものをいふ。

【七】無記法とは、善惡の分つべからざるものをいふ。

【八】作法とは、造作せられたるもの、即ち有爲法といふに同じ。作者に對して作法といへるなり。

【九】性自ら爾りとは、自然論者の法爾任運の性を云ふにあらず、無性の性なるが故に性自ら爾りといふなり。

性自ら爾なればなり。乃至意觸の因縁生の受も亦常に非ず、滅に非ず。何となれば、性自ら爾なればなり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、諸法は、和合生にして自性なしと。舍利弗の言ふ所の如く、  
 【一〇〇】 何の因縁の故に、色は畢竟不生なる、受想行識は畢竟不生とは、須菩提の言はく、「色は作法に非ず、受想行識は作法に非ず、何となれば、作者は不可得なればなり。舍利弗よ、眼は作法に非ず、何となれば、作者は不可得なればなり。乃至意も亦た是の如く、眼界乃至意觸の縁生の受も亦た是の如し。

復次に、舍利弗よ、一切の諸法は皆起に非ず。作に非ず、何となれば、作者は不可得なればなり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は畢竟不生なり、受想行識も亦畢竟不生なりと。

舍利弗の言ふ所の如く、  
 【九九】 何の因縁の故に畢竟不生ならば、是を名けて色と爲さず、畢竟不生ならば、是を名けて受想行識と爲さずとは、須菩提の言はく、「色の性は空なり。是の空は無生、無滅、無住、無異なり。受想行識の性は空にして、是の空は無生、無滅、無住、無異なり。眼乃至一切の有爲法の性は空にして、是の空は無生、無滅、無住、無異なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、畢竟不生を色と名けず、畢竟不生を受想行識と名けざるなり。

舍利弗の言ふ所の如く、「何の因縁の故に、畢竟不生の法ならば、當に是の般若波羅蜜(多)を教ふべきや」とは、須菩提の言はく、「畢竟不生は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。般若波羅蜜(多)は即ち是れ畢竟不生なり、般若波羅蜜(多)と畢竟不生とは無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は、畢竟不生に當に是の般若波羅蜜(多)を教ふべきやと説く」と。

- 【一〇〇】 第六分別中、五蘊の諸法は、畢竟不生なる旨を明す。
- 【一〇一】 十種分別中の第七、畢竟不生なれば、名けて五蘊等となすべきものなきを明す。
- 【一〇二】 十種分別中の第八、般若を教ふるものなきを明す。

舍利弗の言ふ所の如く (三) 何の因縁の故に、畢竟不生を離れて、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行すること無きや」とは、

須菩提の言はく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、畢竟不生の般若波羅蜜(多)に異なることを見ず。亦た畢竟不生の菩薩に異なることを見ず。畢竟不生及び菩薩は無二無別なり。畢竟不生の色に異なることを見ず、何となれば、畢竟不生と受想行識とは、

竟不生と及び色とは無二無別なればなり。畢竟不生の受想行識に異なることを見ず。何となれば、畢竟不生と受想行識とは、

無二無別なればなり。乃至一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ。畢竟不生を離れて菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行すること無し」と。

舍利弗の言ふ所の如く (四) 何の因縁の故に、菩薩の是の説を作すを聞いて、心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れざる是を、菩薩は般若波羅蜜(多)を行すと名くるや」とは、

須菩提の言はく、「菩薩摩訶薩は諸法に覺知の想あることを見ず。一切諸法を夢の如く、幻の如く、欲の如く、影の如く、化の如しと見る。舍利弗よ、是の因縁を以ての故に、菩薩は是の説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れざるなり」と。

論者言はく、(五) 諸法は自性あること無しとは、性空なるを以て、諸法の各々の性を破す。此の中

に須菩提は自ら説けり、「諸法は和合生にして、自性あること無し」と。五衆等の法、及び六波羅蜜

〔多〕等の善法を和合し、是より菩薩の名字を出だすが如し。是の菩薩は、作法、衆法の和合に従つて

生ずるが故に、一法の成ずる所に非ず。是を以ての故に假名と言ふ。是の衆法も亦た和合の邊より生

【三】 十種分別中の第九、畢竟不生を離れて、菩提を行するなきを説く。

【四】 十種分別中の第十、菩薩なく菩提の行なしといふも、驚かず怖かざるを明す。

【五】 諸法無自性の義解。

す。譬へば、眼あり、色あり、明あり、空あり、見んと欲する心等の諸の因縁あり、和合して眼識を生ずるが如し。是の中に、眼は是れ見者、若くは識は是れ見者、若くは色は是れ見者、若くは明は是れ見者なりと言ふことを得ず。若し是の眼、色、識等の各各に見る所あることを得ざれば、和合の中にも亦た見ること有るべからず。是を以ての故に、法は畢竟空にして、幻の如く、夢の如し。一切諸法も亦た是の如しと見る。

復次に、一切法は無常にして亦た失せず。無常は常倒を破して斷滅の倒を失せず。是の無常は法を失せず。即ち是れ實相門に入る。是の故に須菩提、舍利弗に語るらく、「無常は即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。一切法も亦た是の如し」と。復次に、一切法は常に非ず、失に非ずとは、十八空の後に義を説くが如し。色は畢竟不生なりとは、五衆、作者、生者、起者は不可得なるが故なり。

復次に、生相は不可得なりとは、先に生を破する中に説くが如く、一切法も亦た是の如し。何となれば、若し色は生ぜずと説かば、色に非ずと爲せばなり。受想行識に非ずとは、此の中に須菩提は自ら説けり、「色は因縁より生じて、自性あること無く、常に空相なり。若し法は常に空相ならば、是の法は生起なく、滅相なく、住異の相なし。受想行識も亦た是の如し。是の故に不生相の法は、即ち是れ無爲にして、有爲の相に非ず。餘法も亦た是の如し。畢竟不生ならば、當に誰にか般若を教ふべきとは、畢竟不生は即ち是れ諸法實相なり。諸法實相は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。云何が般若波

羅蜜(多)を以て、般若波羅蜜(多)に教へん。若し是の畢竟不生を離れて菩薩あらば、應當に般若波羅蜜(多)を教ふべし。是の菩薩と般若波羅蜜(多)は畢竟不生にして無二無別なり。云何が當に教ふべき。畢竟不生を離れて道を行かとは、上に説く中に、已に合して解せり。菩薩は是を聞いて没せず、悔いすとは、菩薩は一切法の中に於て、我、衆生、乃至知者、見者を見ず。亦説者なく、亦た聽者も無く、邪説もなく、正説もなく、亦無説者もなし。一切法は因縁和合の故に生じ、諸縁を離るるが故に、滅し、起る者あること無く、滅する者あると無きを知るが故に、畏れず、怖かす、没せず、悔いざるなり。菩薩は一切法の虚誑にして、實なく、定なきとを知り、若くは死の急なる時、若くは阿鼻泥犁に墮するも、心猶ほ動せず、況んや虚聲を聞いて、而も怖畏すると有らんや。人の夢中に怖畏の事を見、覺め已りて則ち恐心なく、夢の法は能く心を誑はして實事ある無しと知るが如し。菩薩も亦た是の如く、世間の心の夢中に入りて、恐畏あるを見れども、諸法實相を得て覺する時は、則ち畏るる所なく、諸法は但是れ虚誑にして、眞實あること無きを知るなり。

復た次に、譬へば、幻事を、智者は見ると雖も、心に惑ふ所なく、是れ誑法たるを知るが如く、菩薩も亦た是の如し。一切法は幻の如くにして、能く人心を誑はし、是の中に實なきことを知る。是を以ての故に、怖畏せざるなり。餓の如く、影の如く、化の如きも、亦た是の如し。

【三】菩薩と智度は、畢竟不生にして、無二無別なり。

【三七】菩薩は死急る時も、若くは無間地獄に墮するも、心なほ動ぜざるなり。

釋

須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、是の如く諸法を觀す。三六〇 是の時菩薩摩訶薩

は 三九 色を受けず、 四〇 色を示さず、 四一 色に住せず、 四二 色に著せず、 亦た是れ 四三

色を言はず、 受想行識も亦た受けず、 示さず、 住せず、 著せず、 亦た是れ受想行識なり

と言はず。 眼を受けず、 示さず、 住せず、 著せず、 亦た是れ眼なりと言はず。 耳鼻舌身

意も亦た受けず、 示さず、 住せず、 著せず、 亦た是れ意なりと言はず。 檀波羅蜜(多)を

受けず、 示めさず、 住せず、 著せず、 亦た是れ檀波羅蜜(多)なりと言はず。 尸羅波羅蜜

(多)、 鬚提波羅蜜(多)、 毗梨耶波羅蜜(多)、 禪波羅蜜(多)、 般若波羅蜜(多)を受けず、

示さず、 住せず、 著せず、 亦た是れ般若波羅蜜(多)なりと言はず。 内空を受けず、 示さ

ず、 住せず、 著せず、 亦た是れ内空なりと言はず。 乃至無法有法空も亦た是の如し。

復次に、 世尊よ、 菩薩摩訶薩は 般若波羅蜜(多)を行ずる時、 四念處を受けず、 示さず

住せず、 著せず、 亦た是れ四念處なりと言はず。 乃至十八不共法をも受けず、 示さず、

住せず、 著せず、 亦た是れ十八不共法なりと言はず。 一切の三昧門、 一切の陀羅尼門乃

至一切種智をも受けず、 示さず、 住せず、 著せず、 亦た是れ一切種智なりと言はず。

復次に、 世尊よ、 菩薩摩訶薩は 般若波羅蜜(多)を行ずる時、 色を見ず乃至一切種智を

見ず。 何となれば、 色は不生にして是れ色に非ず、 耳鼻舌身意は不生にして是れ識に非ず、

眼は不生にして是れ眼に非ず、 耳鼻舌身意は不生にして是れ識に非ず、 檀波羅蜜(多)は不生にして是れ檀波羅蜜(多)に非ず

【三六】 之より五蘊の五正觀を明

す

【三九】 色を受けずとは、 五蘊無

常の火に心を燒亂せざるをい

ふ。

【四〇】 色を示さずとは、 五蘊に

空なれば、 相を取らざるをい

ふ。 縮藏は視に作る

【四一】 色に住せずとは、 五蘊に

依止せざるをいふ。 そは惱亂

を畏るればなり。

【四二】 色に著せずとは、 身に寒

熱病死あり、 心に憂悲苦惱あ

るが故に著せざるなり。

【四三】 色を言はずとは、 邪見を

以て分別して、 常無常等を説

かざるをいふ。

乃至般若波羅蜜(多)は不生にして是れ般若波羅蜜(多)に非ざればなり。何となれば、色と不生とは不二不別なり、乃至般若波羅蜜(多)と不生とは不二不別なればなり。内空は不生にして是れ内空に非ず、乃至無法有法空も不生にして、是れ無法有法空に非ず。何となれば、内空乃至無法有法空と不生とは不二不別なればなり。

世尊よ、四念處は不生にして四念處に非ず。何となれば、四念處と不生とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に四念處と不生とは不二不別なり。乃至十八不共法も不生にして十八不共法に非ず。何となれば、十八不共法と不生とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ざればなり。是を以ての故に、十八不共法は不生にして十八不共法に非ず。世尊よ、如は不生にして如に非ず、乃至不可思議性も不生にして、是れ不可思議性に非ず。

世尊よ、是の阿耨多羅三藐三菩提は不生なり。一切智、一切種智は不生にして是れ一切種智に非ず。何となれば、是の阿耨多羅三藐三菩提、乃至一切種智と不生とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず、是を以ての故に、乃至一切種智は不生にして一切種智に非ず。

世尊よ、色は不滅の相にして是れ色に非ず。何となれば、色及び不滅の相は不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不滅の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に、色は不滅の相にして是れ色に非ず。受相行識は不滅の相にして是れ識に非ず。何となれば、識と不滅の相とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不滅の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に識は不滅にして識に非ず。檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)は無二の法數に入り、乃至一切種智も無二法數に入る。

論者言はく、須菩提、佛に白して言さく、「菩薩は能く是の如く諸法を觀ず」と。(四)

於て五種の正しき觀行あり。所謂 受けずとしは五衆の中に無常の火あり、能く心を燒くを以ての故なり。(五) 示さずとは、相を取らず、但無常等の過を觀するのみに非ず、是の五衆の空を觀じて相を取らざるが故なり。(六) 住せずとは、五衆に依止せず、諸の煩惱の賊の來ることを畏るるが故に、敢へて久しく住せざるなり。譬へば空なる聚落の賊の所止の處に、智者は久しく住するべからざるが如し。(七)

著せすとは、五衆に若し一罪あるすら猶ほ著すべからず。何に況んや、身には、飢渴・寒熱・老病・死等あり、心には、憂愁・恐怖・妬嫉・瞋恚等ありて、

後世には三惡道に墮し、一切の無常・苦・空・無我に自在なることを得ず。

是の如き等の無量無邊の過罪あり、云何が著すべけんや。(八) 是れ色と言はずとは、邪見を以て、色の若くは常、若くは無常なり等と説かず。五衆は

是の如き常相なり。乃至一切種智も亦た是の如しと言はず、何となれば、

色の中には五種の正行を行すればなり。是の五衆は皆な生相なく、相は皆な一相なり、一相は則ち無相なり。若し無相なれば、則ちに衆あるに非ず。乃至一切種智も亦是の如し。若し一切法に生相なければ、般若波羅蜜(多)と不二不別なり。是の無生の心を得れば、即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。般若波羅蜜(多)を得れば、即ち諸法の不生不滅なるを知る。是を以ての故に、般若波羅蜜(多)は即ち是れ

【四】 五續の五正觀——不受、不示、不住、不著、不言——を釋す。

【四四】 不受の義解。

【四五】 不示の義解。

【四六】 不住の義解。

【四七】 不著の義解。

【四八】 不言の義解。

【四九】 不言の義解。

不生と不二別なり。

復た次に、須菩提は自ら因縁を説く。所謂、是の無生の法は、一相ならず、二ならず、三ならず、異ならず。何となれば、諸法は無生、一相なればなり。乃至一切種智も亦是の如く、如の無生無滅なるも、亦た是の如し。

問うて曰はく、末後に何を以てか、色乃至一切種智は、無二法數に入ると説くや。答へて曰はく、菩薩は、若し未だ色を破せざれば、則ち愛等の結使を生じ、是の色等に著す。色を破し已れば、則ち邪見を生じ、是の色空等に著す。今色等空の智慧を用ふるが故に、皆空にして不二の相なり。是の諸法は虚誑不實にして、内外入れて、攝する所なるが故に、名けて二と爲す。色等、乃至一切種智も、是の二を離るれば、不二と名く。今、須菩提は、衆生を憐愍し、諸の菩薩を利益するが故に、是の諸法の不二を説きて、無二の法數の中に入るなり。

【五二】第八問、何を以てか、末後に色乃至一切種智は、無二法數に入ると説くや。

# 卷の第五十三

## 無生品第二十六を釋す。



海の時に、慧者舍利弗、須菩提に語るらく、

是れ般若波羅蜜多、何等か是れ觀なるや。須菩提、

舍利弗に語るらく、一汝の問ふ所の、何等か是れ菩薩

薩なるとは、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、是の人は

三 大心を發す。是を以ての故に名けて菩薩と爲す。

亦た一切法、一切種相を知り、是の中にも亦た著せ

ず。色相を知りて著せず、乃至十八不共法を知るに

至るも、亦た著せず」と。舍利弗、須菩提に問ふ、

「何等をか一切法相と爲す」と。須菩提言は、

是は有爲法、是は無爲法なりと知り、是の名字の相と語言とを以て諸法相を知る、是を諸法の相を知ると名く。舍利弗の問

ふ所の如く、何等か是れ般若波羅蜜多なる」とは、遠離の故に般若波羅蜜多と名く。「何等の法をか遠離する」とは、

「衆生入を遠離し、續波羅蜜多乃至禪波羅蜜多」を遠離し、内空乃至無法有法空を遠離す。是を以ての故に、遠離を般若

波羅蜜多と名く。

【一】 此の品には、菩薩、般若

の義に、實に無量なるを以て、重ねて不二無生に就て證

けり。これ此の品名ある所以なり。

【二】 菩薩般若の觀行は、一切

を知り、一切を遠離するにあ

るを明す。

【三】 大心とは、成佛を求むる心なり。無上菩提を歡求して、未だ得ざる衆生なるが故

に、菩薩といふ。

【四】 遠離を般若と名くる所以

を説く。

有るは、即ち此の如く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

【四】

問として曰はく、所謂、菩薩の義、般若波羅密多の義、諸の觀の義の上に已に問へり、本則を以て更に問ふも、答へて曰はく、共に已に

大慈の譬として、一併して斷ずべきに非ざることを答へたるも、是の事は難きが故に更に問ふなり。復た、是の般若波羅密多にも無量の義あり。曼陀羅品の中に説くが如し。一般若波羅密多は、大海の水の無量なるが如く、須彌山の種種に嚴飾せざるが如し」と。是の故に問ふ。又此の問は同じし。

復た曰く、菩薩は法受を斷じ、罪書を立せず、大菩薩を莊嚴せず、但衆生を無濟せんが爲に、度す

【五】色入處に非ず、無常に非ず、乃若誰に非ず、不離に非ず、是を空として觀とす。  
 【六】第一問、或は若菩薩の義、智慧の義、緣起義を説く理無如何。

べき者に隨つて説きたまへり。大清涼の美地には無量の衆生、前後より來りて飲み、各飽いて而も去るが如し。聽く者も亦た是の如く、佛は先づ菩薩、般若波羅蜜(多)、及び觀を説きたまふに、前に來る者は解悟を得て而して去り、後に來る者は未だ聞かず。是の故に重ねて問ふなり。菩薩とは、菩提に三種あり。阿羅漢の菩提あり、辟支佛の菩提あり、佛の菩提あり。無學は智慧清淨にして、無垢なり、故に名けて菩提と爲す。菩薩は大智慧ありと雖も、諸の煩惱の習未だ盡さざるが故に、菩提と名けず。此の中には但一種を説く。所謂、佛の菩提なり。薩埵は秦に衆生と言ふ。是の衆生は、無上道の爲の故に、發心し修行するなり。

復た次に、薩埵を大心と名く。是の人は大心を發し、無上菩提を求め、而も未だ得ず。是を以ての故に、名けて菩提薩埵と爲す。佛は已に是の菩提を得たまへば、名けて菩提薩埵と爲さず。大心を満足したまふが故なり。菩薩の餘の義は、先に廣く説くが如し。

復た次に、佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、「是の人は佛道の爲の故に修行し、一切諸法の相を知るも亦た著せず」と。諸法の相とは、以て諸法の門は是れ色、是れ聲なり等と知るべし。略して菩薩の義を説き、先づ諸法の各各の相、地の堅相の如きを知り、然る後に畢竟空相を知る。是の二種の智慧の中に於いても亦た著せず、但衆生を度せんと欲するが故に、菩薩は是の如き智慧を得。一切の

【七】 三種の菩提——(一)阿羅漢の菩提、(二)辟支佛の菩提、(三)佛の菩提——を説いて、菩提の義を釋す。

【八】 無學とは、阿羅漢の境界をいふ。

【九】 薩埵(Sattva)の義解。

別相べつさうの法ほう中に、皆みな遠離だんりすることを得う。色しきの中に色しきを離はなるが如ごとし。色しきを離はなるれば、即すなはち是これ自じ相さう空くうなり。  
 (一) 遠離だんりとは、是これ空くうの別べつ名みやうなり。苦はつ薩さつは般はん若にゃく波は羅ら蜜みつ「多た」を得え、一いつ切せつの法ほうに於おいて、心こころ皆みな遠離だんりす。  
 何なんとなれば、一いつ切せつ諸しよ法ほふの過くわ罪ざいを見みればなり。(二) 阿あ羅ら蜜みつは秦しんに遠だん離りと言いひ、波は羅ら蜜みつ「多た」は秦しんに到たう彼ひが岸がんと  
 言いふ。此この二には音おん相あひ近かく、義ぎ相あひ會あひするが故ゆゑに、阿あ羅ら蜜みつを以もつて波は羅ら蜜みつ「多た」を釋しやくす。何なん等らの法ほふをか遠だん離りす  
 る。所す謂ゆゑ、衆しゆ界かい入にふ、乃な至いた一切いつせつ智ち、是この諸しよ法ほふを遠だん離りするを以もつての故ゆゑに、般はん若にゃく波は羅ら蜜みつ「多た」と名なく。禪ぜん波  
 羅ら蜜みつ「多た」の如ごときは、能よく人にん心しんを調てう伏ふくし、般はん若にゃく波は羅ら蜜みつ「多た」は、能よく人にんを以もつて  
 諸しよ法ほふを遠だん離りせしむ。觀くわんとは、諸しよ法ほふの常じやう、無む常じやう等らを觀くわんせざることを、先まきに説とく  
 が如ごとし。

【一〇】 遠離の義解。  
 【一一】 阿羅蜜 (Arumita)  
 【一二】 以下前品に説ける、色不生是れ色にあらず等の文に就て、問答説明す。

釋

舍利弗、須菩提に問ふ、(三) 「何の因縁の故に、色は不生にして是れ色に非ざる。受想行識は不生にして、是れ識に非ざる。乃至一切種智は不生にして、是れ一切種智に非ざるや」と。須菩提の言はく、「色の色相は空なれば、色空の中には色なく無生なり。是の因縁を以ての故に、色は不生にして是れ色に非ず。受想行識の識相は空なれば、識空の中には識なく生ずること無し。是の因縁を以ての故に、受想行識は不生にして是れ受想行識に非ず。舍利弗よ、檀波羅蜜「多」の檀波羅蜜「多」相は空にして、檀波羅蜜「多」空の中には檀波羅蜜「多」なく無生なり。尸羅波羅蜜「多」、瞋提波羅蜜「多」、毗梨耶波羅蜜「多」、禪波羅蜜「多」、般若波羅蜜「多」の般若波羅蜜「多」相は空にして、般若波羅蜜「多」なく無生なり。

是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、般若波羅蜜(多)は不生にして是れ般若波羅蜜(多)に非ず。内空乃至無法有法空四念處乃至十八不共法、一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、内空は不生にして是れ内空に非ず。乃至一切種智も、不生にして、是れ一切種智に非ざるなり。

舍利弗、須菩提に問ふ、「汝は何の因縁の故に、色は(三)不生にして是れ色に非ず、受想行識は不生にして是れ識に非ず、乃至一切種智は不生にして是れ一切種智に非ずと言ふや」と。須菩提答へて曰く、「所有る色は所有る不二なり。所有る受想行識は所有る不二なり。是れ一切法は皆な合せ散ぜず、無色、無形、無對、一相所謂る無相なり。眼、乃至一切種智も亦た是の如し。

是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は不生にして是れ色に非ず、受想行識は不生にして是れ識に非ず。乃至一切種智も、不二にして是れ一切種智に非ざるなり。舍利弗、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、是の色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至、一切種智も無二の法數に入ると言ふや」と。

須菩提答へて曰く、「(四)色は無生に異ならず、無生は色に異ならず、色は即ち是れ無生、無生は即ち是れ色なり。受想行識は無生に異ならず、無生は識に異ならず。識は即ち是れ無生、無生は即ち是れ識なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至一切種智も、亦た是の如しと。

問うて曰く、(五)品の竟に便ち應に不生を問ふべし、何を以てか此の中に方に問へるや。答へて曰く、三種の大法に解し易く、多くの衆生を利益するが故に、先づ何の因縁の故に、色は不生にし

【三】 他本には、不二を不滅に作れり。  
 【四】 色の不生不滅を觀じ、無生不二にして無生もなきを、無二の法數に入るとす。  
 【五】 第二問、不生は宜しく上品の竟に問ふべし、今品に之を問ふは何故なるか。

て、色に非すと爲し、乃至一切種智は、不生にして、一切種智に非すと爲すやと問ふに、須菩提は答ふらく、「色は是れ空にして、色の中に色相なし」と。行者は是の無生の智慧を以て、色をして無生ならしむ。若し能く是の無生の心を得れば、是の念を作す、「今、即ち色の實相を得たり」と。是の故に「色は無生にして色に非すと爲す」と説く。色性は常に自ら無生なり。今智慧力の故に、無生ならしむるに非ず。人あり、色を破して空ならしむるも、猶ほ本の色想を存す。譬へば、廟を除きて舍を作るに、今廟なしと雖も、猶ほ不淨の想あるが如し。若し能く廟は本より無にして、幻化の所作なりと知れば、則ち廟想なきが如し。行者も是の如く、若し能く色は本より已來、初め自ら無生なりと知らば、則ち復た色想を存せず。是の故に、色は無生にして色に非すと爲す、乃至一切種智も亦た是の如しと言ふ。

【六】第三問、無生即是無二に既に説けり今重ねて之を問ふは何故なるか。

問うて曰はく、「汝は先に自ら無生は即ち是れ無二なり」と説けり。今何を以てか更に問ふや。答へて曰はく、義は一なりと雖も、所入の觀門を異にす。上には、因中に先に果あり、若くは果なし、是の生法は一異等なり。是の生は若くは初に生じ、若くは後に生ずといふを破し、是れ等の如き生を破するを無生と名くと言ひ、今は眼色の有無等の諸の二を破するが故に、是を不二と名く。行者は先に無生の觀門に入り、後に不二に入る。或は先に不二に入り、後に無生に入る。觀の義は一なりと雖も、行者は分別して、色を破すると二なるが故に不二と言ふ。色の生を破するが故に無生と言ふ。上

に無生の因縁を説いて、自相空なりと謂へり。今は不二の因縁を説く。所謂る合せず散せず、一相にして、所謂る無相なり等と。義は同じく一の空なりと雖も。上は自相空、此は是れ散空なり。色は無二法數に入るとは、行者は色の不生不滅の相を觀じ、是の時、色を分別し、今變じて無生と爲す。是の故に、色は無生にして即ち是れ不二なりと説く。何となれば、色を破散すれば、即ち是れ無生なればなり。先に諸法を分別する時、色を離れて、更に生あるとを得ざるが如く、今色を破散すれば、即ち是れ無生にして、更に無生あることを得ず。是を以ての故に、色は即ち是れ無二法數に入る。是の二阿羅漢は、佛前に於て、共に論じ竟れり。須菩提は更に是の義を説く。佛をして證知せしめたてまつらんと欲するが故なり。

釋

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は轉若波羅蜜(多)を行じて是の如く諸法を觀す。是の時、色を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。受想行識を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。我を見るに無生なり、乃至、知者見者も無生なり、畢竟淨なるが故なり。檀波羅蜜(多)を見るに無生なり、乃至般若波羅蜜(多)も無生なり、畢竟淨なるが故なり。乃至十八不共法も無生なり、畢竟淨なればなり。一切の三昧、一切の陀羅尼を見るに無生なり、畢竟淨なればなり。乃至一切種智を見るに無生なり、畢竟淨なればなり。凡人、凡人の法を見るに無生なり、畢竟淨なればなり。須陀洹、須陀洹法、斯陀含、斯陀含法、阿那含、阿那含法、阿羅漢、阿羅漢法、辟支佛、辟支佛法、菩薩、菩薩法、佛、佛法を見る

に無生なり、畢竟淨なるが故なり」と。

舍利弗、須菩提に語るらく、(一七)我れ須菩提所説の義を聞くが如くんば、色は是れ不生なり、受想行識は、是れ不生なり、乃至佛、佛法も是れ不生なり」と。若し爾らば須陀洹、須陀洹果、斯陀含、斯陀含果、阿那含、阿那含果、阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道を得べからず、菩薩摩訶薩の一切種智を得べからず、亦た六道の別異も無く、亦た菩薩摩訶薩の五種の菩提を得ず。須菩提よ、若し一切法は不生相ならば、何を以ての故に、須陀洹は(一八)三結を斷ぜんが爲の故に道を修し、斯陀含は(一九)五下分の結を斷ぜんが爲の故に道を修し、阿羅漢は(二〇)五上分の結を斷ぜんが爲の故に道を修し、辟支佛は(二一)五上分の結を斷ぜんが爲の故に道を修し、菩薩摩訶薩は難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受くるや。何を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得たまふや。何を以ての故に、佛は法輪を轉じたまふや」と。

須菩提、舍利弗に語るらく、「我は無生法をして、所得あらしめんを欲せず、我は亦た無生法の中に須陀洹、須陀洹果を得せしめんことを欲せず、乃至無生法中に阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道を得せしめんことを欲せず。我は亦た無生法中に菩薩をして難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受けしめんことを欲せず。菩薩も亦た難行の心を以て道を行ぜず、何となれば、舍利弗よ、難心、苦心を生ずれば無量阿僧祇の衆生を利益すること能はざればなり。舍利弗よ、今菩薩は衆生を憐愍し、衆生に於いて、父母兄弟の想の如く、兒子及び己身の想の如し。是の如くなれば能く無量阿僧祇の衆生を利益す、是れ無所得を用つての故なり。何となれば、菩薩摩訶薩は應に是の如き心を生ずべし、我は一切處、一切種に不可得なるが如く、内外法も亦た是の如し」と。若し是の如き想を

- 【一七】 諸法不生にして、得道ありや無きやを辨す。
- 【一八】 三結とは、身見と戒取見と、疑使となり。
- 【一九】 五下分結とは、身見、戒取見、疑、貪、瞋なり。
- 【二〇】 五上分結とは、掉舉、慢、無明、色愛、無色愛なり。

生すれば則ち難心、苦心なし。何となれば、是の菩薩は一切種、一切處、一切法に於いて受けざればなり。舍利弗よ、我は亦た無生法の中に、佛をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしめたるまつらんことを欲せず。亦た無生の中に法輪を轉ぜしめたるまつらんことを欲せず。亦た無生法を以て道を得せしめんことを欲せずと。

論者言はく、(三) 無生觀に二種あり、一には柔順忍觀、二には無生忍觀なり。前に無生は是れ柔

順忍觀にして、畢竟清淨ならず、漸く柔順觀を習ひ、無生忍を得れば、則ち畢竟清淨なりと説けり。

問うて曰はく、(三) 菩薩は未だ結を盡さず、未だ佛道を得ず、智慧未だ淳

淨ならず、云何が畢竟清淨なりと言ふや。答へて曰はく、是の菩薩は無

生忍を得る時、諸の煩惱を滅し、菩薩の道を得、菩薩の位に入り、煩惱の

氣ありと雖も、道場に坐する時は、乃ち盡きて妨ぐる所なきが故に、畢竟

清淨なり。

復次に、(三) 畢竟清淨なりとは、柔順道に於いて畢竟清淨なり。佛道

の爲にあらず、衆生空、法空を以ての故なり。色を見るに無生にして畢竟清淨なり。乃至佛及び佛法

は無生にして畢竟清淨なり。須菩提は種種の因縁もて、諸法の相の決定して無生なることを説く。

此の事に因りて、舍利弗は是の難を作す、「賢聖の中にて、最小なる者は、須陀洹、須陀洹法にして、

最大なる者は佛、佛法なり。若し爾らば聖人は大なること無く、小なること無し。聖法も亦た優劣な

【二】 二種の無生觀、一に、柔順忍觀、二に無生忍觀。

【三】 第四問、菩薩は結未だ盡さず、未だ佛道を得ず、智慧淳淨ならず、云何が畢竟清淨なりと言ふや。

【三】 畢竟清淨の義解。

く、また六道の別異なけんしと。此は略して難ず。後に、三結を斷じて、道を修する者を問ふは、廣く難を爲すなり。

問うて曰はく、云何が是れ五種の菩提なるや。答へて曰はく、一には柔順忍、二には無生忍、及

び三種の菩提なり。三菩提の中に於いては、二を過ぎて而して第三の

菩提に住す。復た五菩提あり、一には發心菩提と名け、無量の生死の中

に於いて發心し、阿耨多羅三藐三菩提の爲にするが故に、名けて菩提と爲

す。此れ因中に果を説くなり。二には伏心菩提と名け、諸の煩惱を折

〔伏〕し、其の心を降伏し、諸の波羅蜜〔多〕を行す。三には明心菩提と

名け、三世の諸法の本末、總相、別相を觀じ、分別籌量して、諸法實相、

畢竟清淨、所謂般若波羅蜜〔多〕の相を得。四には出到菩提と名け、般

若波羅蜜〔多〕の中に於いて、方便力を得るが故に、亦た般若波羅蜜〔多〕に

著せず。一切の煩惱を滅し、一切十方の諸佛を見てこころつり、無生法忍を

得、三界を出でて薩婆若に到る。五には無上菩提と名け、道場に坐し、煩惱の習を斷じて阿耨多羅

三藐三菩提を得。是の如き等は五菩提の義なり。餘の諸の賢聖の結を斷ずる義は先に説くが如し。

問うて曰く、聲聞道には廣く結を斷ずる義を説く。何を以てか辟支佛に行あり、菩薩に種種の行あり

【四】 第五問、五種の菩提とは何ぞや。

【五】 三種の菩提とは、聲聞、緣覺、佛の菩提のことなり。

【六】 發心菩提の義解。

【七】 伏心菩提の義解。

【八】 明心菩提の義解。

【九】 出到菩提の義解。

【一〇】 無上菩提の義解。

【一一】 第六問、聲聞道には委しく斷結の義を説き、辟支佛及び菩薩に、種種の行あることを説かざる理由如何。

るを説かざるや。答へて曰はく、辟支佛は聲聞に於いて復た異道なく、但福徳利根にして、小しく深く諸法實相に入るを異なると爲す。菩薩道には種種の衆行ありと雖も、但難行、苦行は希有の事と爲し、衆生は見已りて歡喜して言はく、「菩薩は我等の爲に此の行を爲す」と。餘行は深妙なりと雖も、人の知らざる所にして、物を感ずる能はざるが故に説かず。

復次に、舍利弗の難意の如く、若し諸法は都て是れ無生にして空寂ならば、一切衆生は皆樂に著せんに。菩薩のみ、何を以ての故に、獨り苦行を受けん。復た次に、諸佛は常に遠離、寂滅を樂ひ、法愛を斷じ、決定して諸法を知り、轉せず、還らず。何を以ての故に、衆生の與に法輪を轉じたまふや。須菩提は、佛前に於いて、無生法を説き、佛は呵折したまはず、快心にして樂説することを得。無難の力の故なり。答ふらく、舍利弗よ、我は亦た都て無生法の中に、

六種の聖人あらしむることを欲せずと。菩薩を除くが故に六と言ふ、及び六道は別異なり。何となれば、無生法の證を得るを以ての故に、謂つて聖法と爲せばなり。聖人には差別あるも、無生法の中には、都て所有なし。

復次に、三無生法の中には、二種の失あり。麤なる失とは、殺盜等の罪の故に三惡道あり。細なる失とは、心に布施、持戒等の福に著するを用ふるが故に三善道あり。若し菩薩は難心、苦心を生ず

【三】 無生法の中に二種の失——一に麤失、二に細失——あり。

【三】 若し菩薩、難心苦心を生ずれば、則ち一切衆生を度すること能はず。

れば、則ち一切衆生を度すること能はず。世間の小事の、心に難かり、以て苦と爲すが如きすら、猶ほ成せず、何に況んや、佛道を成ずるをや。成ずるの因縁は、所謂の大慈大悲心なり。衆生に於いて父母、兒子、己身の想の如し。何となれば、父母、兒子、己身は自然に愛を生じ、推して愛を生ずるに非ざればなり。菩薩は善く大悲心を修するが故に、一切衆生、乃至怨讎に於いて同意に愛念し、是の大悲の果報、利益の具、都べて惜み持する所なく、内外に有する所、盡く衆生に與ふ。此の中には不惜の因縁を説く。所謂の一切種、一切法は不可得なるが故に、若し行者は初めて佛法に入り、衆生空を用つて、諸法の無我なることを知り、今法空を用つて諸法も亦た空なることを知り、此の大悲心及び諸法空の二因縁を以ての故に、能く内外の所有を惜まずして衆生を利益し、難行の想、苦行の想を起さずして、一心に精進し歡喜す。人の自身の爲め、及び父母妻子の爲に、勤身に修行するは、以て苦と爲さず、若し他の爲に作せば、則ち歡心なきが如し。苦行、難行は、後品の本生の因縁もて變化し、現に畜生の形を受くといふ中に説くが如し。一切諸法は、畢竟空、不可思議相の故に、一切法は、還つて而も轉せざるが故に、名けて轉ずと爲さず。但虚妄顛倒を破するが爲の故に、名けて法輪を轉ずと爲す。

釋

舍利弗、須菩提に語るらく

〔四〕今生法を以て道を得せしめんと欲するや。無生法を以て

【四】 諸法無生ならば、これを證するは、生法なりや、又は無生法なりやを辨す。生法は

道を得<sup>せ</sup>しめん<sup>と</sup>と欲<sup>ほつ</sup>する<sup>や</sup>し」と。須菩提<sup>しよぼだい</sup>舍利弗<sup>せりふ</sup>に語<sup>かた</sup>る<sup>らく</sup>、「我<sup>われ</sup>は生法<sup>じやうほふ</sup>を以<sup>もつ</sup>て道<sup>みち</sup>を得<sup>せ</sup>しめん<sup>と</sup>と欲<sup>ほつ</sup>せず<sup>し</sup>と。舍利弗<sup>せりふ</sup>の言<sup>い</sup>はく、「今<sup>いま</sup>須菩提<sup>しよぼだい</sup>よ、無<sup>む</sup>生法<sup>じやうほふ</sup>を以<sup>もつ</sup>て道<sup>みち</sup>を得<sup>せ</sup>しめん<sup>と</sup>と欲<sup>ほつ</sup>する<sup>や</sup>し」と。

舍利弗<sup>せりふ</sup>の言<sup>い</sup>はく、「須菩提<sup>しよぼだい</sup>の所<sup>しよ</sup>説<sup>せつ</sup>の如<sup>ごと</sup>くんば知<sup>ち</sup>なく、得<sup>とく</sup>なし」と。須菩提<sup>しよぼだい</sup>の言<sup>い</sup>はく、

【三】知<sup>ち</sup>あり、得<sup>とく</sup>あり。二法<sup>にほふ</sup>を以<sup>もつ</sup>てせず、世間<sup>せけん</sup>の名字<sup>みんじ</sup>を以<sup>もつ</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に、知<sup>ち</sup>あり、得<sup>とく</sup>あり。世

間の名字<sup>みんじ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、須陀洹<sup>しよたごん</sup>、乃至<sup>乃至</sup>阿羅漢<sup>あらかん</sup>、辟支佛<sup>びやくしふつ</sup>、諸佛<sup>しよぶつ</sup>有り。第一<sup>だいいち</sup>實義<sup>じつぎ</sup>の中<sup>なか</sup>には、知<sup>ち</sup>なく、得<sup>とく</sup>なく、須陀洹<sup>しよたごん</sup>なく、乃至<sup>乃至</sup>諸佛<sup>しよぶつ</sup>な

し」と。「須菩提<sup>しよぼだい</sup>よ、如<sup>ごと</sup>し世間<sup>せけん</sup>の名字<sup>みんじ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に知<sup>ち</sup>あり、得<sup>とく</sup>あらば、六道<sup>りくどう</sup>別異<sup>べつい</sup>は、亦<sup>また</sup>世間<sup>せけん</sup>の名字<sup>みんじ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に有<sup>あ</sup>り、第一<sup>だいいち</sup>實義<sup>じつぎ</sup>を以<sup>もつ</sup>てに

は非<sup>ひ</sup>ざる<sup>なり</sup>なり」と。

須菩提<sup>しよぼだい</sup>の言<sup>い</sup>はく、「是<sup>ぜ</sup>の如<sup>ごと</sup>し、是<sup>ぜ</sup>の如<sup>ごと</sup>し。舍利弗<sup>せりふ</sup>よ、世間<sup>せけん</sup>の名字<sup>みんじ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、知<sup>ち</sup>ある<sup>が</sup>如<sup>ごと</sup>く、得<sup>とく</sup>ある<sup>が</sup>如<sup>ごと</sup>く、六道<sup>りくどう</sup>別異<sup>べつい</sup>も、亦<sup>また</sup>

世間<sup>せけん</sup>の名字<sup>みんじ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に有<sup>あ</sup>り、第一<sup>だいいち</sup>實義<sup>じつぎ</sup>を以<sup>もつ</sup>てに非<sup>ひ</sup>ざる<sup>なり</sup>。何<sup>なん</sup>となれば、舍利弗<sup>せりふ</sup>よ、第一<sup>だいいち</sup>實義<sup>じつぎ</sup>の中<sup>なか</sup>には業<sup>ごふ</sup>なく報<sup>ほう</sup>なく、生<sup>ふつ</sup>なく滅<sup>めつ</sup>

なく、淨<sup>じよつ</sup>なく垢<sup>こ</sup>なければなり」と。

舍利弗<sup>せりふ</sup>、須菩提<sup>しよぼだい</sup>に語<sup>かた</sup>る<sup>らく</sup>、「不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>を生<sup>じやう</sup>ずる<sup>や</sup>、生法<sup>じやうほふ</sup>を生<sup>じやう</sup>ずる<sup>や</sup>し」と。須菩提<sup>しよぼだい</sup>の言<sup>い</sup>はく、「我<sup>われ</sup>は不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>をして生<sup>じやう</sup>ぜしむる

とを欲<sup>ほつ</sup>せず。亦<sup>また</sup>不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>をして生<sup>じやう</sup>ぜしむる<sup>こと</sup>を欲<sup>ほつ</sup>せず」と。舍利弗<sup>せりふ</sup>の言<sup>い</sup>はく、「何<sup>なん</sup>等<sup>どう</sup>か不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>をして、生<sup>じやう</sup>ぜしむる<sup>こと</sup>を欲<sup>ほつ</sup>せざ

る<sup>や</sup>し」と。須菩提<sup>しよぼだい</sup>の言<sup>い</sup>はく、「色<sup>しき</sup>は是<sup>こ</sup>れ不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>にして、自性<sup>じじやう</sup>空<sup>くう</sup>なれば生<sup>じやう</sup>ぜしむる<sup>こと</sup>を欲<sup>ほつ</sup>せず。受<sup>じゆ</sup>想<sup>じやう</sup>行<sup>ぎやう</sup>識<sup>しき</sup>は不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>にして、自性<sup>じじやう</sup>空<sup>くう</sup>

なれば、生<sup>じやう</sup>ぜしむる<sup>こと</sup>を欲<sup>ほつ</sup>せず。乃至<sup>乃至</sup>阿耨<sup>あう</sup>多羅<sup>た</sup>三藐<sup>さんみやく</sup>三菩提<sup>さんぼだい</sup>は不生<sup>ふじやう</sup>法<sup>ほふ</sup>にして自性<sup>じじやう</sup>空<sup>くう</sup>なれば、生<sup>じやう</sup>ぜしむる<sup>こと</sup>を欲<sup>ほつ</sup>せざる<sup>なり</sup>し」と。

舍利弗<sup>せりふ</sup>、須菩提<sup>しよぼだい</sup>に語<sup>かた</sup>る<sup>らく</sup>、「生<sup>じやう</sup>より生<sup>じやう</sup>ずる<sup>や</sup>、不生<sup>ふじやう</sup>より生<sup>じやう</sup>ずる<sup>や</sup>し」と。須菩提<sup>しよぼだい</sup>の言<sup>い</sup>はく、「生<sup>じやう</sup>より生<sup>じやう</sup>ずる<sup>に</sup>非<sup>ひ</sup>ず、亦<sup>また</sup>不生<sup>ふじやう</sup>

有<sup>あ</sup>爲<sup>ゐ</sup>、無<sup>む</sup>生法<sup>じやうほふ</sup>は無<sup>む</sup>爲<sup>ゐ</sup>なり。  
【三】知<sup>ち</sup>あり、得<sup>とく</sup>ありとは、道<sup>みち</sup>を知<sup>ち</sup>り、果<sup>ぐわ</sup>を得<sup>とく</sup>る<sup>なり</sup>なり。これあるも生法<sup>じやうほふ</sup>不生<sup>ふじやう</sup>法の二法<sup>にほふ</sup>によらず。

より生ずるにも非ず。何となれば、舍利弗よ、生、不生、是の二法は合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相所謂る無相なればなり。舍利弗よ、是の因縁を以ての故に、生より生ずるに非ず、亦た不生より生ずるにも非ず」と。

爾の時に、舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提よ、樂んで無生法及び無生相を説くや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「我は樂んで無生法を説き、亦樂んで無生相を説く。何となれば、諸の無生法及び無生相の樂説及び語言、是の一切法は皆合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なればなり」と。

舍利弗、須菩提に語るらく、「汝は樂んで無生法を説き、亦た樂んで無生相を説く。是の樂説語言も亦た不生なり」と。須菩提の言はく、「是の如し、是の如し、舍利弗よ、何となれば、舍利弗よ、色は不生なり、受想行識は不生なり、眼は不生なり、乃至意も不生なり、地種も不生なり、乃至識種も不生なり。意行も不生なり、口行も不生なり、意行も不生なり、檀波羅蜜(多)も不生なり、乃至一切種智も不生なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は樂んで無生法を説き、亦た樂んで無生法を説く。是の樂説の語言も亦た不生なり」と。

論

論者言はく、爾の時に、舍利弗は、須菩提の樂説に難なきことを知り、而も問うて言はく、「若し一切の法無相ならば、此の無生の相を云何が證せん。是れ生法を用つて證を得るや。不生法を用つて證を得ると爲すや。若し生法を用つて證を得ば、生法は虚誑なり。汝は已に種種の因縁もて破せり。又生法を以て、生法を脱することを得べからず。若し無生の法を以て證することを得ば、無生は未だ法相あらず、以て證すべからず、云何が證を得ん」と。須菩提は二法皆受けず、「そは俱に過あるが故なり。先に説くが如し。舍利弗、是の念を作す、「佛の經に、二法は一切法の、若くは有爲、

若くは無爲を攝す。生ずる者は有爲、生なき者は無爲なりと説く。今須菩提は此の二法を離る、云何が當に得道の事を説くべけん」と。是の念を作し已りて須菩提に問ふ、一得道の事あること無しや」と。須菩提は是れ大阿羅漢にして、無誣三昧を行ずること第一なり。但菩薩の爲の故に是の無生法を説く。汝は云何が當に邪見を作して、得道の者なしと説くべけん。是の故に、知あり、得ありと言ふ。知と得とは、即ち是れ得道の果の別名なり。須菩提は恐らくは前語に違ふが故に、一法を以てせずと言ふが故に、但世俗の爲の故に、須陀洹乃至佛有りと説けり。何となれば、一切の諸法は實に我相なし。今我を用つて、須陀洹乃至佛を分別するは、是れ世俗の法なり。

復次に、未だ法空を得ざるが故に、是れ善、是れ不善、是れ有爲、是れ

無爲等と言ふ。第一義の中には、衆生なきが故に、須陀洹乃至佛無く、法空なるが故に、須陀洹果、乃至佛道無し。聖人、聖法すら猶尙ほ定實なし。何に況んや、凡人、六道の業、及び果報をや。

問うて曰く、(三六)須菩提は已に種種の因縁をもて、定んで不生法を説けり。今舍利弗は何を以ての故に、更に不生法の生、生法の生を問へるや。答へて曰く、須菩提は上に得道の因縁を説くが故に、舍利弗は須菩提の意を得、不生の法を説いて、一切法を破すと雖も、因縁の爲の故に説いて、而も心無生の法に著せず。是の故に更に問へり。又此の法は甚深なるを以て、聽く者をして、了了に解を得せ

【三六】第七問、須菩提は已に種種の理由を以て、不生の法を説けり。今舍利弗が更に不生法の生、生法の生を問へるは何故なるか。

しめんと欲するが故に更に問へり。上には得道の行法を問ひ、今は總じて一切法は、云何が生ずるやを問ふ。慧眼を用つて、一切法は皆不生なりと知れども、今、現見の諸法生ず。是の故に、云何が生ずるやと問ふ。須菩提答ふらく、二事は皆非なり。若し生の生ならば、生法は已に生じ、應に更に生ずべからず。若し不生の生ならば、生法は未だ有らざるが故に、生ずべからず。若し生ずる時、半ば生じ、半ば不生なりと謂はば、是も亦た不生なり。若し生の分は、則ち已に生じ竟り、若し未生の分は、則ち生ずること無きが故なり。是れ須菩提は是の肉眼を用ゐて見ず、通達せざるを以ての故に、二法皆受けず。但だ是の生は、幻の如く、夢の如く、虚誑法より生ず。應に離すべく、應に相を取らざるべしと説く。舍利弗問ふ、「何等の法か二にして俱に受けざるや」と。須菩提は世諦を以ての故に説けり、「色乃至一切種智は、畢竟不生にして、自然に空相なり」と。實の中に生あらしむることを欲せず。若し生諦は虚誑にして生あるべくんば、生は幻化の如し。此の中に不生の因縁を説く。所謂不都合、不散なり。有る人の言はく、「生と法とは異なり。謂はく、生は是れ常にして、生すべき所の法は無常なり」と。是の故に更に問はば、答ふる者は、生法の不異を以てす。若し生法を説けば、已に生相を説くなり。生、不生は、上に説くが如し。舍利弗は須菩提の所説を聞き、須菩提の心に無生の法を愛樂することを知るが故に、須菩提に語るらく、「汝は實に愛樂して、無生法を説くや」と。須菩提は即ち其の問を受けて心に亦た愧づること無し。何となれば、是の論議は破すべからず、過罪あ

ること無ければなり。何を以てか之を知る。須菩提は自ら説く、「法として合すべき無く、法として散すべき無く、無色、無形、空、一相、所謂無相なり」と。空相すら尚ほ受けず、何に況んや餘相をや。舍利弗重ねて讚すらく、「汝が樂んで説く無生の法及び語言は、皆無生にして、是れ實に清淨なり。若し當に樂説及び語言は無生に非ず。但外物の無生を説かば、則ち清淨に非ず」と。須菩提は即ち復其の讚を受け、舍利弗に答ふるらく、「但樂説、語言のみ、是れ無生なるに非ず。色乃至一切種智も皆亦た生ずる所なし」と。

經

爾の時に、舍利弗、須菩提に語るらく、**【三七】**須菩提は説法人の中に於て、應に最も上に在るべし。何を以ての故に、須菩提は問ふ所に隨つて皆能く答ふるや」と。須菩提言はく、

「諸法は所依なきが故なり」と

舍利弗、須菩提に語るらく、「云何が諸法は所依なきや」と。須菩提の言はく、「色の性は常に空にして **【三八】**内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず、受想行識の性は常に空にして内に依らず、外に依らず、**【三九】**内に依らず、兩の中間に依らず。檀波羅蜜(多)の性は常に空、乃至般若波羅蜜(多)の性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。内空の性は常に空、乃至無法有法空の性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。舍利弗よ、四念處の性は常に空、乃至一切種智の性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。」

**【三七】** 無所依清淨なるを説く。  
**【三八】** 内に依らず等。内法は空なれば内に依らず、外法も空なれば外法によらず。而して中間は無所有なれば、中間にもよらず、故に所依なきなり。

依らず。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、一切諸法は所依なし。性常に空なるが故なり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、應に色受想行識を淨むべし、乃至應に一切種智を淨むべし」と。

舍利弗、須菩提に問ふ、「菩薩摩訶薩は云何が六波羅蜜(多)を行する時、菩薩道を淨むるや」と。須菩提言はく、「世間の檀波羅蜜(多)あり、出世間の檀波羅蜜(多)あり。尸羅波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)にも世間あり、出世間あり」と。

舍利弗、須菩提に問ふ、「云何が世間の檀波羅蜜(多)なる、云何が出世間の檀波羅蜜(多)なる」と。須菩提言はく、「若し菩薩摩訶薩、施主と作りて能く沙門、婆羅門、貧窮乏人に施し、食を須つには食は與へ、飲を須つには飲を與へ、衣を須つには衣を與へ、臥具、牀榻、房舍、香華、瓔珞、醫藥、利利の須つ所の資生の物、若くは妻子、國土、頭目、手足、支節、内外の物を、盡く以て給施す。施す時に是の念を作さく、「我は與へ、彼は取る、我は慳貪ならず、我は施主と爲る、我は一切を捨つ、我は佛教に隨ひて施す、我は檀波羅蜜(多)を行す」と。是の施を作し已り、用て法を得し、一切衆生と之を共に

することを得せしむべし」と。是の人の布施に三礙あり。何等か三なる。我相と他相と施相となり。是の三相に著する布施は是を世間の檀波羅蜜(多)と名く。何の因縁の故に世間と名くや。世間の中に於いて動かす、出でず、是を世間の檀波羅蜜(多)と名く。云何が出世間の檀波羅蜜(多)と名くるや。所謂三分清淨なり。何等か三なる。菩薩摩訶薩の布施の時、我は不可得なり、受者を見ず、施物は不可得にして亦た報をも望まず。是を菩薩摩訶薩の三分清淨の檀波羅蜜(多)と名く。

復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は布施の時、一切衆生に與ふるに衆生も亦た不可得なり。此の布施を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、乃至微細の法相をも見ず、舍利弗よ、是を出世間の檀波羅蜜(多)と名く。何を以ての故に名けて出世間と爲

すや。世間の中に於いて能く動き能く出づ、是の故に出世間の檀波羅蜜(多)と名く。尸羅波羅蜜(多)の所依ある、是を世間の尸羅波羅蜜(多)と爲し、所依なき、是を出世間の尸羅波羅蜜(多)と爲す。餘は檀波羅蜜(多)に説くが如し。屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)の所依ある、是を世間と名け、所依なき是を出世間と名く。餘も亦た檀の中に説くが如し。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、菩薩道を淨む」と。

舍利弗、須菩提に問ふ、「云何が菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲すや」。須菩提の言はく、「四念處は是を菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲す。乃至八聖道分、空解脱門、無相解脱門、無作解脱門、內空乃至無法有法空、一切の三昧門、一切の陀羅尼門、佛の十方、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、舍利弗よ、是を名けて菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲す」と。

【五九】

問うて曰はく、五百の阿羅漢あり、佛は各其第一を説きたまへ

り。舍利弗は智慧第一、目捷連は神足第一、摩訶迦葉は頭陀を行する中の

第一、須菩提は無諍三昧を得ると第一、摩訶迦延は修多羅を分別すると

第一、富樓那は人に説法する中の第一なるが如し。今舍利弗は何を以ての故に、須菩提は説法人の中

に於て應に最第一なるべしと讃するや。答へて曰はく、佛は佛眼を以て、一切衆生の利根と鈍根とを

觀じ、一切法の總相と別相とを籌量し、其の所得の法に隨つて各第一を記したまふことに錯なし。富

樓那は四衆の中に於いて、十二部經、種種の法門、種種の因緣、譬喩を用ゐ、説いて能く衆生を利益

すること第一なり。須菩提は常に無諍三昧を行じ、菩薩と事を同うし、巧に便ち一種の空相法門を樂

【六〇】 第八問、佛は須菩提を以て解空第一と説き給へり。然るを今舍利弗が須菩提を説法第一と讃するは何故なるか。

説すること富樓那に勝れたり。譬へば工師の多く能くする所あるも、能くする所多きが故に、普ねく精悉ならざるが如く、人ありて偏に一事を能くすれば、則ち必ず其の美を盡くすが如く、富樓那は多能なりと雖も、須菩提の常に樂んで空を行ずるが故に、能く巧に空を説くに如かず。是の故に舍利弗は、須菩提の巧に空義を説くを聞き、便ち讚じて言はく、「汝は説法人の中に於いて、應に第一と作すべし」と。舍利弗は須菩提の、問はるるに随つて皆能く答ふるを見るに、風の空中に行くが如く、聖礙する所なし。爾の時、須菩提は謙せず、受けず。何となれば、平實に安立して、人相を好くするが故なり。人相を好くすとは、自ら讚せず、自ら毀らず。他に於いても亦讚せず毀らざるなり。若し自ら身を讚せば、大人の相に非ず、人の爲に讚せられずして而も便ち自ら美とし、若し自ら毀るは、是れ妖諂の人なり、若し他を毀るは、是れ讒賊の人なり、若し他を讚するは、是れ諂媚の人なり。須菩提は無生の法を説くが故に、舍利弗は讚すと雖も而も諂に非ず。須菩提は舍利弗の實に讚するを以ての故に謙ならず。又法愛を斷するを以ての故に心に高ぶらず、亦た愛著せず。但無礙無障の因縁、所謂一切法は依止する所なく、依止する所なきが故に、障なく礙なきことを答ふ。依止する所なき義は先に説くが如し。此の中に須菩提は自ら説けり、「内法は空なるが故に、色は内に依止せず、外法は空なるが故に、色は外に依止せず、中間は所有なきが故に、色は中間に依止せず。色の如く、乃至一切種智も亦た是の如し」と。若し菩薩は一

【四〇】 自讚するは大人の相にあらず。

切の三界の無常、空を知るが故に、中に依止せず。爾の時、煩惱を斷じて、能く菩薩道を淨うす。是の故に須菩提は説けり、「菩薩は六波羅蜜(多)を行じて、應に色乃至一切種智を淨うすべし」と。

問うて曰はく、(四)色を淨うし、乃至一切種智を淨うするは、即ち是れ菩薩道を淨うするなり。何を以ての故に更に問ふや。答へて曰はく、菩薩の能く色をして、畢竟空ならしむる、是を清淨と名く。是の事は深妙にして、頓に得べからず。是の故に舍利弗は問へり、「新學の菩薩は、云何が是の初の方便道を修するや」と。須菩提答ふ、「若し菩薩は、能く二種の波羅蜜(多)を行す。六波羅蜜(多)は、是れ初めて菩薩道を開き、能く無所得空を用つて、三十七品を行するは、是れ佛道を開くなり」と。淨うすとは、名けて

開くと爲す。道中の荆棘を去るを名けて、道を開くと爲すが如し。何等か是れ二種の波羅蜜(多)なる。(四)一には世間、二には出世間なり。世間とは、須菩提自ら義を説く、所謂、食を須てるには、食を與ふる等なり。是の義は初品の中に説くが如し。若し施す時は依止する所あり。譬へば老病の人の他の力を持つに依りて、能く行き、能く立つが如く、施者は實智慧を離れ、心力薄少なるが故に依止す。依止とは己身と財物と受者となり。是の法の中に相を取り、心著して憍慢等の諸の煩惱を生ずる、是を世間の不動不出と名く。動とは柔順忍なり、出とは無生法忍なり。聲聞法の中の動とは學人にして、出とは無學なり。

【四】 第九問、色乃至一切種智を淨うするは、即ち是れ菩薩道を淨くするなり、何を以てか更に問ふや。

【四】 二種の波羅蜜多——(一)世間的、(二)出世間的——の義解。

餘の五波羅蜜(多)も、亦た是の如し。是を初めて菩薩道を開くと名く。

問うて曰はく、(聖)菩薩道は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり、何を以てか更に問ふや。答へて曰は

く、菩薩の時は道あるも、佛は已に到りて道を須めたまはず。是の道は、阿耨多羅三藐三菩提を得る

が爲の故に、菩提道と名く。菩薩は、是の道を行するが故に、菩薩道と名く。此の中に佛は、遠道、

所謂の六波羅蜜(多)の菩薩道、「及び」近道、所謂の三十七品の菩提道を説きたまへり。六波羅蜜(多)

の中には、布施、持戒等を雜ゆるが故に遠く、三十七品は但禪定と智慧のみ有るが故に近し。六波羅

蜜(多)には世間と出世間とを雜ふるが故に遠く、三十七品、三解脱門等、

乃至大慈大悲は畢竟清淨なるが故に近し。復次に、阿耨多羅三藐三菩提

の道は、初發意より乃ち金剛三昧に至るまでにして、其の中に菩提の爲に

苦行するも、皆是れ菩提道なり。

釋

爾の時に、舍利弗(四)須菩提を讚じて言はく、「善哉、善哉、何等か波羅蜜(多)の力なりや。」須菩提の言はく、「是

れ般若波羅蜜(多)の力なり。何となれば、般若波羅蜜(多)は能く一切諸の善法の、若くは聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛

法を生ずればなり。舍利弗よ、般若波羅蜜(多)は能く一切諸の善法の、聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法を受く。舍利弗

よ、過去の諸佛に般若波羅蜜(多)を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、未來の諸佛も亦た般若波羅蜜(多)を行じて當に

【三】第一〇問、無上菩提、これ即ち菩薩道なり、今それ更に此を問ふは何故なるか。  
【四】須菩提を讚じ、併せて般若の妙力を明にす。

阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべし。舍利弗よ、今現在十方世界の諸佛も、亦是の般若波羅蜜(多)を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を説く時、疑はず難ぜずんば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は菩薩道を行するなり。菩薩道とは、一切衆生を救ふが故に心に一切衆生を捨てず。所得なきを以ての故に菩薩は常に是の念、所謂大悲の念を離れざらしめんことを欲すべしと。

舍利弗復た問ふ、「菩薩摩訶薩をして、常に是の念、所謂大悲の念を離れざらしめんことを欲す。若し菩薩摩訶薩、大悲の念を離れずんば、一切衆生をして皆當に菩薩と作らしむべし。何となれば、須菩提よ、一切衆生も亦た諸の念を離れざればなりしと。須菩提の言く、「善い哉、善い哉、舍利弗よ、汝が我を難ぜんと欲して而も我が義を成せり。何となれば、衆生は無なるが故に念も亦た無なり。衆生の性無なるが故に念も亦た性は無なり。衆生の法無なるが故に念も亦た法は無なり。衆生離なるが故に念も亦た離なり。衆生空なるが故に念も亦た空なり。衆生不可知なるが故に念も亦た不可知なり。舍利弗よ、色は無なるが故に念も亦た無なり。色の性は無なるが故に念も亦た性は無なり。色の法は無なるが故に念も亦た法は無なり。色は離なるが故に念も亦た離なり。色は空なるが故に念も亦た空なり。色は不可知なるが故に念も亦た不可知なり。受想行識も亦た是の如し。眼乃至意、色乃至法、地種乃至識種、檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切の三昧門、一切の陀羅尼門、一切智、一切種智乃至阿耨多羅三藐三菩提無なるが故に念も亦た無なり。乃至阿耨多羅三藐三菩提不可知なるが故に念も亦た不可知なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は是の道を行じ、我は是の念、所謂大悲の念を離れざらしめんことを欲すしと。

爾の時に、佛、須菩提を讃じて言はく、「善い哉、善い哉、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。其の説く者有るも亦た當に是の如く説くべし。汝が説く所の如く、般若波羅蜜(多)は、皆是れ佛意を承くるが故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜

〔多〕を學して、應に汝が説く所の如く學すべし」と。須菩提、是の般若波羅蜜〔多〕品を説く時、三千大千世界は六種に震動し、東涌西沒し、西涌東沒し、南涌北沒し、北涌南沒し、中涌邊沒し、邊涌中沒せり。

爾の時、佛微笑したまふ。須菩提、佛に白して言さく、「何の因何の縁の故に微笑したまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「我れ此の世界に於て般若波羅蜜〔多〕を説くが如く、東方の無量阿僧祇世界の諸佛も、亦た諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜〔多〕を説きたまひ、南、西、北方、四維、上下も亦た是の般若波羅蜜〔多〕を説く。是の般若波羅蜜〔多〕品を説く時、十二那由他の諸の天人無生法忍を得、十方の諸佛、是の般若波羅蜜〔多〕を説きたまふ時、無量阿僧祇の衆生も亦た阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

論

論者言はく、舍利弗は是の念を作す、「須菩提の説く所は、六波羅蜜〔多〕の世間と出世間と、及び菩提道とを分別して、大に衆生を利益す」と。故に歡喜し、讚じて言はく、「善い哉、善い哉」と。再び之を言ふは喜の至れるなり。問ふ、「是れ何の波羅蜜〔多〕の力なるや」と。須菩提、是の思惟を作す、「一切の心數法の中に、智慧を除けば、能く是の如く分別し、疑を斷じて開導すること無し。諸の波羅蜜〔多〕の中に、若し般若波羅蜜〔多〕を離れては、自體を成就すること能はず。何に況んや、能く分別し開導せんや」と。是の如く、思惟し已りて、舍利弗に答ふ、「是れ般若波羅蜜〔多〕の力なり」と。先に説くが如く、我なく、知者なく、見者なし。今此を以て證知するに、是れ般若波羅蜜〔多〕の力にして、佛の力に非ず、須菩提の力に非ず。何となれば、所謂、般若波羅蜜〔多〕は、斷常、有無の二邊等をば離るるが故に、能く一切の善法、所謂

【四】三乘の法とは、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の法なり。

ば、所謂、般若波羅蜜〔多〕は、斷常、有無の二邊等をば離るるが故に、能く一切の善法、所謂

乘の法の定相堅牢不壞の相を生じ、又般若波羅蜜〔多〕は、無量無邊なるが故に、能く一切の善法を受くること、大海の能く衆川萬流を受くるが如し。三乗の善法とは、所謂の六波羅蜜〔多〕、乃至十八不共法なり。十方三世の諸佛は、般若波羅蜜〔多〕を行するが故に、皆な阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。餘の波羅蜜〔多〕を行すと雖も、般若波羅蜜〔多〕は、最も尊大にして、分別通達之力あり。譬へば下藥を和合するに、巴豆は最も力あるが如し。般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如く、餘の波羅蜜〔多〕と合して、而も諸の煩惱、邪見を破し、戲論を捨つと雖も、般若波羅蜜〔多〕の力は最勝なり。是を以ての故に、皆是れ般若波羅蜜〔多〕の力なりと説く。

問うて曰はく、種種に此の般若波羅蜜〔多〕の、微妙甚深なることを讚

【四六】 第一一問、般若波羅蜜多を行する者は誰ぞ。

するも、誰か能く隨順して、般若波羅蜜〔多〕を行すべきや。答へて曰はく、有る菩薩は無量世に諸の福德を集め、利根にして諸の煩惱を折薄し、未だ阿鞞跋致地に到らずと雖も、般若波羅蜜〔多〕を聞いて即時に信受し、深く入りて通達す。是の如きの相は、則ち能く般若波羅蜜〔多〕の道を行す。所謂一切衆生を救度して、世間の憂惱を離れしめ、大悲心の故に一切衆生を捨てず。菩薩は常に大悲及び畢竟空を離るべからず、畢竟空を念じて、世間の諸の煩惱を破し、涅槃を示し、而して大悲もて之を引いて還つて善法の中に入らしめ、以て衆生を利益す。爾の時、舍利弗、須菩提を難すらく、「若し菩薩は、是の大悲の念、及び畢竟空の念を離れずんば、一切衆生は皆當に菩薩と作すべし。何となれ

ば、是の畢竟空は、無相にして、分別する所なく、菩薩に有にして、衆生に無なるべからず。若し有  
 ならば、一切衆生は、應に共に有なるべく、若し無ならば、菩薩も亦た應に無なるべし」と。須菩提  
 は答ふらく、「汝は我を難せんと欲して、而も我が義を助成せり。何となれば、諸法の相は、畢竟空  
 なるが故に、衆生も亦た空なり、衆生は空なるが故に、畢竟空の念も亦た空なり。若し諸法は、畢竟  
 空ならば、何ぞ衆生あらん、實に空なり。而も我を難じて言はく、「衆生  
 は是の念を離れず、皆な當に菩薩と爲すべし」と。是の故に、衆生は所有  
 なきが故に、畢竟空の念も亦た所有なし。衆生は無性、衆生は離、衆生は  
 空、衆生は不可知なれば、畢竟空の念も亦た空なり。色乃至阿耨多羅三藐  
 三菩提も亦た是の如しと説く」と。

問うて曰はく、(聖) 此の中の念は、是れ大悲の念を離れず、何を以てか、  
 畢竟空の念を離れずと説くや。答へて曰く、菩薩は是の念心を離れず、衆生を捨てず、無所得を用ふ  
 るが故なり。(聖) 無所得空と畢竟空とは、名を異にするも而も義は一なり。不可得空は初に在つて、畢  
 竟空は後に在り。畢竟空は大なるを以ての故に、悲を生ずることも亦た大なり。大悲とは、阿差末經  
 中に説くが如く三種の悲あり。衆生縁と法縁と無縁となり。無縁の悲は畢竟空より生ず。是を以て舍  
 利弗の難する所を解く。佛は其の説を證するが故に讚じて言はく、「善哉、若し般若波羅蜜〔多〕を

【四七】 第二二問、此の中の念は  
 是れ大悲の念を離れず、何を  
 以てか畢竟空の念を離れずと  
 いふか。  
 【四八】 無所得と畢竟空とは、異  
 名同義なり。  
 【四九】 阿差末經の説——無縁の  
 悲は畢竟空より生ず。

説くことを解せんと欲せば、當に汝の所説の如くなるべし」と。爾の時、衆中の天人、菩薩は是の念  
 を作せり、一般若波羅蜜(多)は甚深なり、三世の諸佛は皆中より生じたまふ。須菩提は小乗の人なり。  
 云何が佛は、般若波羅蜜(多)を説かんと欲せば、當に汝が所説の如くなるべしと讚じたまふや」と。  
 是の故に、次に言はく、須菩提の所説は、皆な佛意を承く。正しくは彌勒等の諸の菩薩、梵天王等を  
 して佛意を承けざらしむるすら、尙ほ問ふことを得ること能はず。何に況んや、須菩提は佛前に在り  
 て自ら恣に樂説せんや。諸の菩薩、般若波羅蜜(多)を學せんと欲するも、亦た當に汝が所説の如  
 く學すべしと。是の品を説く時、三千大千世界の地は六種に震動すとは、是の時に、會中に多くの菩  
 薩ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、皆な當に作佛すべし、佛は是れ天地の大主なり、地神は歡  
 喜して、「我が主、今生す」といふ。故に地をして大に動せしむ。  
 復次に、人、心に深般若波羅蜜(多)を信する者は得難く、希有なるが故に、是の人は福德の因縁を  
 以て大風を感じ、以て水を動かし、水動するが故に地動す。復次に、地下の大龍王は來りて、般若波  
 羅蜜(多)を聽かんと欲し、水より出づるが故に水動じ、水動するが故に地動す。  
 復次に、佛の神力の故に地をして動せしむ。般若波羅蜜(多)は見難く知り難く、衆人を引導して、  
 益信樂せしめんと欲するが故なり。餘の地動の因縁は先に説くが如し。此の中に佛は自ら因縁を説  
 きたまへり。所謂、我は般若波羅蜜(多)を説き、十方の諸佛も亦、是の般若波羅蜜(多)を説きたまひ、

十二那由他の天人は阿鞞跋致地を得て法位に入る。是の故に地動ず。又十方世界の衆生も、等しく亦た無上道意を發す。是の故に地動ず。爾の時、諸天も亦種種の蓮華を散じ、及び種種の雜香、天衣、天蓋、千萬種の天の妓樂あり。諸の龍王等は四海水の中より踊出し、及び諸の夜叉、羅刹等、皆慈心を生じ、手を合せて佛を讚じたてまつれり。又佛の微笑したまふ時、無量の光明、遍ねく十方如恆河沙等の世界を覆ひ、爾所等の希有の事あり。要を取りて之を言へば、地の動ずるは皆諸法實相を説くに由る。所謂、般若波羅蜜「多」の故なり。

# 卷の第五十四

## 天王品第二十七を釋す。



爾の時、三千大千世界の諸の(一)四天王天は無數百千億の諸天と俱に來りて會中に在り。三千大千世界の諸の(二)釋提桓因等の諸の(三)忉利天、(四)須夜摩陀王等の諸の(五)夜摩天、(六)刪提率陀天王等の諸の兜率陀天、(七)須涅蜜陀天王等の諸の妙化天、(八)婆舍跋提天王等の諸の自在行天は各無數百千億の諸天と俱に來りて會中に在り。三千大千世界の諸の梵天王、乃至(九)首陀婆の諸天、各無數百千億の諸天と俱に來りて會中に在り。是の諸の四天王乃至首陀婆の諸天、(一〇)業報生身の光明は佛の(一一)常光に於いて百分、千分、千萬億分の一にも及ぶこと能はず、乃至算數、譬喩を以て比と爲すべからず。世界の光明に最勝、最妙、最上第一にして、諸天の業報の光明は常光の

【一】 四天王、梵天、帝釋等の諸天來會し、帝釋等般若に住するを問へる品なり。故に此の品名を或は問住品、又は天王品ともいふ。

【二】 四天王とは、東方の持國天王、西方の廣目天王、南方の增長天王、北方の多聞天王なり。

【三】 Sakrathevarindra 譯して帝釋天といふ。

【四】 Indrasatrisa 譯して三十三天といふ。

【五】 Anumanava 譯して妙天といふ。

【六】 Yama 譯して時分といふ。

ふ。

【七】 Anurita 譯して妙足といふ。

【八】 Sumanagaratideva 譯して化樂天といふ。

【九】 Vasavindra 他化自在天といふ。

【一〇】 Sudhavaṇṇa 譯して淨居天といふ。

【一一】 業報生身とは、勝徳の果報として得たる、天人の身なり、各各光明あり。

【一二】 常光とは、佛に二種の光明——神通光と常光——ある中の後者なり。常光は佛身として常に具ふる光明をいふ。

邊に在りては聞らず、現せず。譬へば、**【三】** 燧炬を圓浮檀金に比するが如し。

爾の時、**【四】** 釋提桓因、大德須菩提に白さく、「是」三千大千世界の諸の四天王天、乃至、首陀婆の諸天は、一切相合して、須菩提の般若波羅蜜(多)の義を説くを聽かんことを欲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は云何が應に般若波羅蜜(多)の中に住すべきや。何等か是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なるや。云何が菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜(多)を行すべきや。」

須菩提、釋提桓因に語りて言はく、**【五】** 橋戸迦よ、我れ今ま當を佛意に承服し、佛の神力を承け、諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜(多)を説き、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)の中に住すべき所の如くすべし。諸の天子の、今未だ阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者は、今應當に發心すべし。諸の天子、若し聲聞の**【六】** 正位に入れば、是の人は阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと能はず。何となれば、生死と障礙を作せばなり。是の人若し阿耨多羅三藐三菩提心を發せば我も亦た隨喜せん。何となれば、上人は應に眞に上法を求むべく、我は終に其の功德を斷たざればなり。

橋戸迦よ、何等か是れ般若波羅蜜(多)なりや。菩薩摩訶薩は應に應に應する心もて、色の無常を念じ、色の苦を念じ、色の空を念じ、色の無我を念じ、色は病の如く、瘡の如く、癰の如く、毒の如く、箭の身に入りて痛惱し、衰壞し憂長して、安せざるが如しと念す。**【七】** 所得なきが故なり。愛想行識も亦是の如し。眼耳鼻舌身意地種・水・火・風・空・識種は無常乃至憂畏不安を觸す。是も亦た所得なきが故なり。色の寂滅を獲じ不生、不滅、不壞、不淨を離る。愛想行識も亦た是の如し。地種より乃至識種に至るまでの寂滅を觀じ、不生、不滅、不壞、不淨を離る。亦た所得なきが故なり。

**【三】** 燧炬とは、松明の火なり。  
**【四】** 帝釋の間に答へて、般若波羅蜜多を説く。  
**【五】** 橋戸迦(カウシカ)は帝釋天の異名なり。  
**【六】** 正位とは、小乗の四果ノ預流、一來、不還、阿羅漢の如き、已に聖道に入るものなればなり。

亦た所得なきが故なり。



若波羅蜜(多)を説いて、諸の菩薩摩訶薩の心を安慰すしと。

須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、我れ應に恩を報すべく、恩を報せずんばあるべからず。過去の諸佛及び諸の弟子は

諸の菩薩の爲に六波羅蜜(多)を説いて示教し利喜す。世尊も爾の時、亦た中に在つて學し、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。我も今亦た當に諸の菩薩の爲に、六波羅蜜

(多)を説いて、示教し、利喜して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんしと。

問うて曰はく、(七)初品の中に、佛、殊勝の光明を放らたまひ、諸

天、大に此の間に集ると(説けり)。何を以てか更に説くや。答へて曰は

く、有る人の言はく、「此は是れ後の會なり」と。有る人の言はく、「即ち

是れ前の會の天なり」と。須菩提は善く能く深般若波羅蜜(多)を説くを以

て諸天は歡喜す。是を以ての故に佛は微笑し給ひしに、常光益益更に明

を發し諸天の光明は復た現せず。日の出づる時、星月燈燭の復た光明な

きが如し。譬へば、熾炷の 閻浮檀金の邊に在るが如し。四天王天とは、

東方(二)提多羅吒と名く。(三)乾闥婆及び 毗舍闍に主たり。南方は(三)

毗流離と名く。(四)拘槃荼及び 薛荔多に主たり。西方は(二)毗流波叉と

名く。諸の龍王及び富樓多那に主たり。北方は(二)鞞沙門と名く。夜叉及び羅刹に主たり。釋提桓

釋提桓

- 【七】 第一問、初品の中に、已に佛、殊勝の光明を放ち、諸天大に此の間に集ると説けり。然るを今また更にこれを説くは何故なるか。
- 【八】 提多羅吒 (Dhṛtarāṣṭra) 秦には治國又は持國といふ。
- 【九】 乾闥婆 (Gandharva) 秦には増長といふ。
- 【一〇】 毗舍闍 (Vishāka) 秦には雜語又は廣目といふ。
- 【一一】 鞞沙門 (Vaiśāṃana) 秦には多聞といふ。
- 【一二】 拘槃荼 (Kumbhāṇḍa) 薛荔多 (Vṛndhāy) 毗流波叉 (Virūpaka) 秦

因は釋迦は秦に能と言ひ、提婆は秦に天と言ひ、因提は秦に主と言ひ、合して之を釋提婆那民と

言ふ。須夜摩は夜摩天王の名なり。秦には妙善と言ふ。刪兜率陀は兜率陀天王の名なり。秦には妙足

と言ふ。須涅蜜陀は秦に化樂と言ひ、婆舍跋提は秦に他化自在天と言ひ、此の間の一の梵天王を

尸棄と名け秦には火と言ふ。梵天より乃ち首陀婆に至る。首陀婆天は秦には淨居天と言ふ。業報

生身の光とは、欲界の天は燈燭、明珠等の施及び布施、持戒、禪定等

清淨なるを以ての故に、身に常に光明ありて、日月を須ゐず。色界天は

禪を行じ、欲を離れて、火三昧を修習するが故に、身より常に妙光を出

だし、日月及び欲界の報の光明に勝る。離欲天は要を取りて之を言へば、

是の諸の光明は、皆心清淨なるに由るが故に得。佛の常光明とは、

面各一丈なり。諸天の光の大なる者は、無量由旬なりと雖も、佛光の

邊に於いては、蔽はれて現せず。釋提桓因は佛の神力、光明を見て是の

念を作す。一佛の光明は能く諸天の光を蔽ふ、智慧の明も亦た當に能く我が愚闇を破すべし」と。又

佛は須菩提に命するに、般若を説くことを以てしたまふ。是の故に言はく、一切の諸天は、皆な大

に集會して、須菩提の般若の義を説くを聽かんと欲し、今大福徳の諸天は、皆な集まりて、般若の

義を聞かんと欲す」と。云何が是れ般若波羅蜜(多)なるとは、是れ般若の體を問ふ。云何が行せん

と

- 【二七】 尸棄(Shakra) 梵天より乃ち首陀婆に至る。
- 【二八】 須夜摩(Śyāma) 夜摩天王の名なり。
- 【二九】 妙善(Śānti) 須夜摩の妃。
- 【三〇】 妙足(Śānti) 須涅蜜陀の妃。
- 【三一】 須涅蜜陀(Śyāma) 須涅蜜陀天王の名なり。
- 【三二】 淨居天(Śuddhāvastī) 色界の天。
- 【三三】 佛光(Śānti) 佛の常光明。

は、是れ初に方便に入りて行ずることを問ふ。云何が住すとは、深く究竟に入りて、住することを問ふ。須菩提は其の語を受けて、是の答を作せり。若し人飢渴せんに、飲食を給足すれば、思を感ずること則ち深し。菩薩も亦た是の如く、發心して佛道を求むるに、是の人の爲に般若を説けば、則ち大に利益を得、思を感ずることも亦た深し。是の故に般若を説く。若し未だ發心せざる者は當に發すべく、已に聖道に入れば是れ則ち堪任せず。漏盡さて後に生ずること無きを以てなり。是れ等の如き因縁の故に任へずと言ふ。

問うて曰はく、若し是の人は任へずんば、何を以ての故に、是の人は若し發心せば、我も亦隨喜して其の功德を障げず、上人は應に更に上法を求むべしと言ふや。答へて曰はく、須菩提は是れ小乘なりと雖も、常に空

【三】第二問、若し是の人任へずんば、上人は更に上法を求むべしと言ふは何故なるか。

を習ひ行ずるが故に、聲聞道に著せず。是を以ての故に假に言を説く。若し發心せば、何の咎か有らん。此の中に須菩提は自ら二の因縁を説く。一には其の福德心を障げず、二には上人は應に更に上法を求むべし。是を以ての故に、上人は阿耨多羅三藐三菩提を求むるに咎なし。上人にして小法を求めば是れ恥づべし。中間、傍及び餘事を以ての故に更に稱問せり。何等か是れ般若波羅蜜〔多〕なるとは、所謂、薩婆若の心に應じて、色の無常、苦、空、無我を觀ずること、先に説くが如し。五衆の能く諸惱を生ずることを觀ずるが故に、病の如しと言ひ、有る人は、五衆は病の如しと聞くも、謂ひ

て癡微と爲すが故に、癡疽の如しと言ひ、有る人は癡疽を以て愈え難きも、猶は或は差ゆべしとするが故に、箭鏑の體に入りて出すとを得べからざるが如しと言ふ。有る人は箭鏑の體に在りて、沈むこと深きを以て、抜き難しと雖も、良方妙術は猶は出でしむべしとするが故に、常に痛惱すと言ふ。人の衰を著れば常に不吉あるが如く、五衆も亦た是の如し。若し人、隨逐すれば則ち安隱なること無し。衰あるを以ての故に、常に憂怖を懷く。是の五衆は、師子虎狼と共に住して、常に憂畏を懷くが如し。是の五衆は無常、虚誑等の過の故に常に安隱ならず。

問うて曰はく、(一)五衆には但此の十五種の惡のみ有るや、更に餘事あるや。答へて曰はく、略して説かば則ち十五にして、廣く説かば則ち無量無邊なり。(二)雜阿含の中に、五衆には百種の罪過ありと呵するが如し。

問うて曰はく、(三)何を以てか常に無常、苦、空、無我を説き、或る時は、八事は病の如く、癡癡等の如しと説き、餘の七事は少しく説く處あるや。答へて曰はく、人に上中下あり。(四)利根の爲の故に、四を説けば、即ち苦諦に入る。(五)中根の者に四を説くも則ち厭心を生ずること能はず。病の如く癡の如し等の八事を説かば、即ち厭心を生ず。(六)鈍根の人は、是の八事を聞くも、猶ほ厭を生ぜず。更に爲に痛惱等の七

- 【三】 第三問、五蘊には但十五種の惡のみなりや、更に他の惡ありや如何。
- 【四】 雜阿含經に五蘊に百種の罪過ありと説く。
- 【五】 第四問、十五種の過罪の中多く八種を説いて、餘の七種を説くこと少なきは何故なるか。
- 【六】 上根の人の爲には、苦・空・無常・無我を説く。
- 【七】 中根の人の爲には、病癡等の八事を説く。
- 【八】 下根の人の爲には、更に痛惱等の七事を説く。

事を説いて、然る後に乃ち厭ふ。利根は度し易  
 きが故に、常に多く四事を説き、鈍根の人は、  
 時に度すべき者あるが故に、希に餘事を説く。  
 上の八事を名けて聖行と爲し、餘の七事は凡  
 夫、聖人共に行す。初の四は、**十六聖行**に  
 入るが故に、般若の中に常に説き、又般若は、  
 若くは菩薩の爲に説き、利根なるが故に多く聖  
 行を説く。今云何が是れ初の行法なりやと問ふ  
 が故に、此の中に都べて十二入を説く。乃至六  
 種等も亦た應に是の如くなるべし。十八界等を  
 呵することも亦た應に具に説くべし。誦者は忘  
 失す。何となれば、此の十八界等の諸法は、皆  
 是れ五衆の別名なり、故に説かざるべからず。  
 若し行者は五衆等の寂滅、遠離、不生、不滅、不  
 垢、不淨を觀せば、此れ但般若波羅蜜(多)の爲

【三九】十六聖行とは、苦諦の下

に苦、空、無常、無我の四、  
 集諦の下に、因、集、生、縁  
 の四、滅諦の下に、滅、靜、妙、  
 離の四、道諦の下に、道、如、  
 行、出の四あるをいふ。これ  
 蓋し能く四諦の理に趣くが故  
 に行といふなり。

(イ) 苦——五蘊を觀るに、無常  
 の爲に逼らるるが故に苦な  
 り。

(ロ) 空——五受蘊は、一相異相  
 無なるが故に空なり。

(ハ) 無常——五蘊の因縁は新陳  
 代謝するが故に無常なり。

(ニ) 無我——五受の中、我も我  
 が所有も不可得なるが故に  
 無我なり。

(ホ) 因——六因の苦果を生ずる  
 を觀するを因行と名く。

(ヘ) 集——煩惱有漏は能く苦果

を招集す。

(ト) 生——還て後有の身を受く  
るが故に生と名く。

(チ) 縁——四縁の苦果を生ずる  
を觀するを縁行と名く。

(リ) 滅——涅槃は煩惱の火滅す  
と觀す。

(ヌ) 靜——涅槃は種種の苦盡き  
て寂靜なり。

(ル) 妙——涅槃は一切の中第一  
なり。

(チ) 離——涅槃は世間の生死の  
法を離る。

(ワ) 道——三十七品は能く涅槃  
に至る。

(カ) 如——三十七品は顛倒の法  
にあらず。

(ヨ) 行——三十七品は是れ一切  
の聖人の去る處なり。

(タ) 出——道品に能く行人を運  
んで、三解脱に至る。

の故なり。上の十五を合せず、十五事を説くは三乘共なるが故なり。聲聞の人は智力薄きが故に、初に始めて五衆の若くは遠離、若くは寂滅なり等と觀ずると能はず。但能く無常等を觀じ、第三諦に入りて乃ち能く寂滅を觀ず。菩薩は利根なるが故に、初に五衆を觀ずれば、便ち寂滅の相を得。無所得を用ふとは、常に無所得空慧を用つて諸法の相を觀するなり。

復次に、釋提桓因は般若波羅蜜【多】の相を問うて、五衆患厭の事を問はず。但般若の相を説く。般若の相とは、【四】五衆を離れずして涅槃あり、涅槃を離れずして五衆あり、五衆の實相は即ち是れ涅槃なり。是の故に、初發心にして鈍根なる者は、先づ無常等の觀を用ゐ、然る後に五衆の寂滅等を觀ず。十二因縁も亦た是の如し。

復次に、四念處乃至八聖道分を修す。是の共法は薩婆若に應ずる心なり。

無所得を以てとは、是れ般若波羅蜜【多】の相に名く。【四二】六波羅蜜【多】、乃至十八不共法は、獨り是れ大乘の法なり。

問うて曰はく、【四三】應に般若波羅蜜【多】の相行を説くべし。何を以ての故に、中間に諸法を説き、諸法は更に相因縁たり、潤益し增長すといふや。答へて曰はく、須菩提は、上に先づ諸法の無常等の過を説き、後に諸法の遠離、寂滅にして、無所得空なることを説き、然る後、諸法は空なりと雖も、因

【四〇】五蘊と涅槃との關係。  
 【四一】六度及び十八不共法は、獨り是れ大乘の法なり。  
 【四二】第五問、中間に諸法は互に相因縁たり、潤益し、增長すと言へる理由如何。

縁和合に從ふ故に有りと説き、次に四念處より乃ち十八不共法に至るまで、佛道を行ずることを説く。聽者は是の念を作す、「上に遠離、寂滅、空を説くが故に、常に非ざることを知り。十二因縁を説くが故に、不滅なることを知る。而も知者、見者なし。誰か是の諸法を修行して佛を得ん」と。是の故に説く。菩薩は是の念を作す、「諸法は空にして我なく、衆生なく、而も因縁に從ふが故に有り。四大、六識、是の十法は、各各力ありて能く生じ、能く起き、能く作す所あり。地の能く水を持し、能く火を爛し、能く風を消し、能く識を廻轉するが如し。能く十法を分別するに各所作あり。衆生は顛倒の故に謂はく、「是は人の作、我が作なり」と。皮肉和合の故に、語聲あるを、惑ふ者は人語と謂ふが如く、火の乾ける竹林を燒きて大音聲を出すも、此の中に作者あること無きが如く、又木人、幻人、化人は、能く動作ありと雖も、作者あること無きが如く、此の十法も亦た是の如し。前生の法と後生の法と因縁和合し、或は共生の因縁、或は相應の因縁、或は報因縁等の常修常集の因縁は果報をして增長せしむること、春に果樹を植ゑ、時に隨つて溉灌すれば、華果繁茂するが如し。智慧分別を以て、一切諸法に作者あること無きことを知る。菩薩の初發意の廻向は、佛心と因縁とより作る。而も初發意の廻向の時は、未だ佛心あらず。佛心の中には、初の廻向心なし。無しと雖も而も能く因縁と作る。問うて曰はく、若し初發心の廻向の時、菩提心なくんば、何の所にか廻向するや。答へて曰は

【三三】 第六問、若し初發心の廻向の時、菩提心なくんば、何の所に廻向せんか。

く、般若波羅蜜(多)の實相中には、諸法は常相に非ず、無常相に非ず、有相に非ず、無相に非ず。故に難じて、「廻向心は、已に滅して所有なくんば、云何が菩提の與めに因と作らん」と言ふべからず。若し諸法は不生不滅、非不生、非不滅ならば、云何が不生不滅を以て難を作さん。「菩提心なくんば、何の所にか廻向せん」と。復次に、佛自ら説き給はく、「菩提の相は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず」と、云何が難じて、「未來の菩提なきが故に、何の所にか廻向せん」と言はんや。

復次に、如如品の中に説く、「過去世に未來世を離れず、未來世は過去世を離れず、過去世の如と未來世の如とは一如にして二なし」と。云何が、菩提心は、廻向心の中に在らず、廻向心は、菩提心の中に在らずと説かんや。但菩薩は佛法を讚歎するを聞いて、發心し愛樂し、我が所有の功德、皆佛道に廻向し、發心より已來、乃ち佛道に至るまで、是の功德を修して休まず息まず、幻の如く、夢の如く、無所得なるを用ての故に、是を菩薩の般若波羅蜜(多)と名け、能く諸法の因縁より果報を生ずるも、而も定相あること無きことを知る。釋提桓因難すらく、一何を以ての故に、廻向心は菩提心の中に在りて得可らず、菩提心は廻向心の中に在りて得可らざるや」と。須菩提よ、世諦の幻の如く、夢の如きを以て説かず、但第一義諦を以て説けり、是の二心は皆空にして心相に非ず。何となれば、諸法畢竟空の中には、是心非心なし。是の如き法に云何が廻向あるべきや。若し二法あらば廻向あるべし。譬へば、車に乗りて西に行き、南に止宿する處あるが故に、車を廻して趣向するに、車は廻向

の處と異なるが故に、廻向あるべく、但車のみ有るを、而も廻向と異なること無しと言ふを得ざるが如くなればなり。心相は常に非ず心相に非ずとは、須菩提は意に謂へらく、「是の心相は如常住不生不滅不垢不淨なり」と。心相に非ざるを以ての故に心に非ず、亦た是非の心も無し。是の故に不可思議と説く。不可思議も亦た、常に不可思議にして、籌量思惟して相を取るべからず。是の因縁を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提に因る所の心は果に似たり。似ざれば則ち生ずること能はず。若し初心不淨なれば、後に淨心を發すること能はず。鐵を鍊るも、金と成すこと能はざるが如し。佛は須菩提を以て、深く因縁般若波羅蜜(多)の中に入れてたまふ。此は是れ般若波羅蜜(多)の名なり。能く深く諸法の因縁を得るを以ての故に、即ち以て名と爲す。違錯あること無きが故に、大衆の中に於いて、讚じて言はく、「善い哉、善い哉。汝は是れ小乗の人にして而も能く善く深般若波羅蜜(多)を説く」と。諸の菩薩の心を安慰すとは、般若波羅蜜(多)を以て諸の菩薩に示すに、「汝は自ら煩惱未だ盡きず、未だ佛道を成せざるを以ての故に、自ら懈廢すると莫れ、諸法は障なく礙なく、初心と後心とに異相あること無し。但勤めて精進すれば、則ち佛道を成せん」と。(四) 我れ應に恩を報ずべしとは、須菩提は是の念を作す、「我は此の諸法實相を行じて、老病死苦を脱することを得たり。我は云何が是の法の大恩を念せざらん」と。是を以ての故に常に樂説す。

【四四】報恩の意義。

復次に、佛は大悲心あり、樂んで法を説き、衆生を度したまふ。我は佛恩を以ての故に、道を得たり、我も亦た佛を助けたてまつり、法を説き衆生を度せん。是を報恩と爲す。又知る、「今の世尊は、過去の諸佛に因りて、佛道を成ずることを得たまへり。是の故に我も亦た、過去の佛を愛敬すること、子の父を愛敬するが故に、亦た祖父をも愛重するが如くならん。亦た過去の諸の菩薩、及び弟子を愛敬せん。能く法を説きて教示するが故なり。今の世尊も亦、此に因りて成ずることを得たり」と。須菩提は深心に三寶を信するが故に説けり。「我は今世尊及び法、過去の諸佛及び弟子の恩を知る」と。法は即ち是れ法實なり。今の佛と過【去】の佛は、即ち是れ佛實なり。諸の菩薩及び弟子は、是れ僧實なり。六波羅蜜【多】は先に説くが如し。【三】示すとは、人の好醜、善不善、行すべきと、行すべからざるとを示すなり。生死を醜と爲し、涅槃安隱を好と爲し、三乗を分別し、六波羅蜜【多】を分別する、是の如き等を示すと名く。【四】教ふとは、教へて、「汝、惡を捨て、善を行せよ」と言ふ、是を教と名く。【五】利すとは、未だ善法の味を得ざるが故に、心則ち退没するを、爲に法を説いて、引導して出でしめ、「汝は因時に於いて果を求むること莫れ。汝は今勤苦すと雖も、果報出づる時は大に利益を得」と。其の心をして利ならしむるが故に利と名く。【六】喜とは、其の所行に隨つて、而も之を讚歎すれば、其の心をして喜ばしむ。若し布施を樂しむ者に、布施を讚すれば、則ち喜ぶが

【四三】 示すの義解。

【四四】 教ふの義解。

【四五】 利すの義解。

【四六】 喜の意義。

故に喜と名く。此の四事を以て説法を莊嚴するなり。

爾の時に、兜須菩提、釋提桓因に語りて言はく、橋尸迦よ、汝今當に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)の中に如に住すべき所と、住すべからざる所を懸くべし。橋尸迦よ、色の色空、受想行識の識空、菩薩の菩薩空に於いて、是の色空と菩薩空とは不二不別なり。受想行識空と菩薩空とは不二不別なり。橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に應に是の如く住すべからず。

復次に、眼の眼空乃至意の意空、菩薩の菩薩空に於いて、眼空、乃至菩薩空は不二不別なり。六塵も亦た是の如し。地種、地種空、乃至識種の識種空、菩薩の菩薩空に於いて、橋尸迦よ、地種空乃至識種空と菩薩空とは不二不別なり。橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に應に是の如く住すべし。無明の無明空乃至老死の老死空、無明の無明滅空乃至老死滅の老死滅空、菩薩の菩薩空に於いて、橋尸迦よ、無明空乃至老死空、無明滅空乃至老死滅空と菩薩空とは不二不別なり。橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に應に是の如く住すべし。四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、聲聞乘、辟支佛乘、佛乘、聲聞、辟支佛、菩薩、佛も亦た是の如し。一切種智の一切種智空、菩薩の菩薩空に於いて、一切種智空と菩薩空とは不二不別なり。橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に應に是の如く住すべしと。

爾の時に、釋提桓因、須菩提に問うて云はく、「何(一)云何が般若波羅蜜(多)の中に住すべからざる所なるや」と。須菩提言はく、「橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は色の中に住すべからず、所料あるを以ての故なり。受想行識の中に住すべからず、所得

【四九】 以下般若の住すべき所を示す。

【五〇】 一切有所得に住すべからざるを明す。

【五一】 色に住せば、これ實有とする有所得なり、般若に合せず。

あるを以ての故なり。眼の中に住すべからず、乃至意の中に住すべからず、色の中に住すべからず、乃至法の中に住すべからず、眼識、乃至意識、眼觸、乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸の因縁生の受の中に住すべからず、所得あるを以ての故なり。地種、乃至識種の中に住すべからず、所得あるを以ての故なり。檀波羅蜜(多)乃至、般若波羅蜜(多)四念處乃至十八不共法の中に住すべからず、所得あるを以ての故なり。須陀洹果の中に住すべからず、所得あるを以ての故なり。乃至阿羅漢果、辟支佛道、菩薩道、佛道、一切種智に住すべからず、所得あるを以ての故なり。

復次に、橋戸迦よ、菩薩摩訶薩は色は是れ常に住すべからず、色は是れ無常に住すべからず、受想行識も亦た是の如し。色、若くは樂、若くは苦、若くは淨、若くは不淨、若くは我、若くは無我、若くは空、若くは不空、若くは寂滅、若くは不寂滅、若くは離、若くは不離に住すべからず、所得あるを以ての故なり。受想行識も亦た是の如し。

復次に、橋戸迦よ、菩薩摩訶薩は、**【五】**須陀洹果無爲相、斯陀含果無爲相、阿那含果無爲相、阿羅漢果無爲相に住すべからず。辟支佛道無爲相、佛道無爲相に住すべからず。**【三】**須陀洹の福田に住すべからず。斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、佛の福田に住すべからず。

復次に、橋戸迦よ、菩薩摩訶薩は初地の中に住すべからず。所得あるを以ての故なり。乃至第十地の中に住すべからず、所得あるを以ての故なり。

復次に、菩薩摩訶薩は、初發心の中に住して我當に檀波羅蜜(多)を具足すべきにも住すべからず。乃至我當に般若波羅蜜(多)を具足すべきにも住すべからず。六波羅蜜(多)を具足して當に菩薩位に入るべきにも住すべからず。菩薩位に入り已り

**【五】** 須陀洹等は、須陀洹の聖果は、福田果報無量なりと説くを以て、菩薩は此に住すべからず。  
**【三】** 須陀洹等の聖果無爲とせば、相の取著よく、住す可らず。有爲ならば虚誑にして住すべからず。

て當に阿耨跋致地に住すべきにも住すべからず。菩薩は當に五神通を具足すべきにも住すべからず。有所得を以ての故なり。菩薩は五神通に住し已り、我當に無量阿僧祇の世界に遊び、諸佛を禮敬し供養し、法を聽き、法を聽き已りて他人の爲に説かんと。菩薩摩訶薩は是の如きに住すべからず。所得あるを以ての故なり。諸佛の世界の嚴淨なるが如く、我亦當に世界を莊嚴すべきにも住すべからず。所得あるを以ての故なり。衆生を成就して佛道に入らしむるにも住すべからず。無量阿僧祇の世界の諸佛の所に到りて尊重し、愛敬し、供養し、香華・環塗・塗香・搗香・幢幡・華蓋・百千億種の寶衣を以て諸佛を供養し上るも住すべからず。所得あるを以ての故なり。我當に無量阿僧祇の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむべしと。是の如きにも菩薩は住すべからず。我當に五眼・乃ち肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼を生ずべきにも住すべからず。我當に一切の三昧門を生ずべきにも住すべからず。欲する所に隨つて諸の三昧に遊戯するにも住すべからず。我當に一切の陀羅尼門を生ずべきにも住すべからず。我當に佛の十力を得べきにも住すべからず。我當に四無所畏、四無礙智、十八不共法を得べきにも住すべからず。我當に大悲を具足すべきにも住すべからず。我當に三十二相を具足すべきにも住すべからず。我當に八十隨形好を具足すべきにも住すべからず。所得あるを以ての故なり。是の(八)人は是れ(蓋)信行の人、是れ(妄)法行の人なりと、是の如きにも住すべからず。須陀洹(七)世の生を極むるにも住すべからず。家家に住すべからず。須陀洹の命終り

【五】 八人とは、見諦道、八忍地なり。

【五】 信行の人。鈍根にして他教を信じて行する人をいふ。

【五】 法行の人。利根にして法教を觀て行する人をいふ。

【五】 七世とは、九品の思惑——情的の惑——七生を潤すをいふ。初果——須陀洹——預流の最長を七世生とす。

【五】 家家とは、一來向中にて極果を證する聖者なり。此に二種あり。一は三生家家、欲惑三品を斷じて既に四生を滅し、餘の六品即ち三生を餘すもの、二は二生家家、欲惑四品を斷じて既に五生を滅し、餘の五品、即ち二生を餘すもの。此の聖者は家より家に轉生して、極果を證し涅槃に入るが故に家家といふ。

垢盡るにも住すべからず。須陀洹の中間に涅槃に入るにも住すべからず。是人は斯陀含果の證に向ふにも住すべからず。是人は斯陀含より一來して、涅槃に入るも住すべからず。是人は阿那含果の證に向ふにも住すべからず。斯陀含の一種にも住すべからず。是人は阿那含にて彼の間に涅槃に入るにも住すべからず。是人は阿羅漢果の證に向ふにも住すべからず。是人は阿羅漢にて、今世に無餘涅槃に入るにも住すべからず。是人は辟支佛にも住すべからず。聲聞・辟支佛地を過ぎて、我當に菩薩地に住すべきにも住すべからず。這種智中にも住すべからず。所得あるを以ての故なり。一切種・一切法を知り、已に諸の煩惱及び習を斷するにも住すべからず。佛は阿耨多羅三藐三菩提を得て、當に法輪を轉すべきにも住すべからず。佛事を作して無量阿僧祇の衆生を度し、涅槃に入るにも住すべからず。四如意足中にも住すべからず。是の三昧に入り如恆河沙等の劫壽に住するにも住すべからず。我當に壽命無火數劫を得べきにも住すべからず。三十二相の一一の相、百福莊嚴に住すべからず。我が一世界は十方恆河沙等の世界の如きにも住すべからず。我が三千大千世界は純らはれ金剛なるにも住すべからず。我菩提樹をして當に是の如きの香を出ださしむべく、衆生は是を聞きて姪欲・瞋恚・愚癡ある無く、亦聲聞・辟支佛の心なし。是の一切の人は必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。若し衆生の是の香を聞く者は身病・意病、皆悉く除き盡くすにも住すべからず。當に我が世界中に色受想行識の名字あると無からしむべきにも住すべからず。當に我が世界中に種波羅蜜(多)の名字あると無く、乃至般若波羅蜜(多)の名字あること無からしむべく、當に我が世界中に四念處の名字あること無く、乃至十八不共法の名字あると無く、亦た須陀洹の名字なく乃至佛の名字あると無からしむべきにも住すべからず。所得あるを以てなり。何となれば、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ時一切の諸法は所得なければなり。

是の如く、憍尸迦よ、菩薩は般若波羅蜜(多)の中に於て住すべからず。所得あるを以ての故なり。爾の時、舍利弗心に念すらく、「菩薩は今云何が應に般若波羅蜜(多)の中に住すべき」と。須菩提、舍利弗の心に念する所を知り、舍利弗に語り

て言く、「汝が意に於いて云何、諸佛は何所にか住したまふと。舍利弗、須菩提に語るらく、「諸佛に住處あること無し。諸佛は色の中に住せず、受想行識の中に住せず。有爲性の中に住せず、無爲性の中に住せず、四念處の中に住せず乃至十八不共法の中に住せず、一切種智の中に住せず、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に應に是の如く住すべし。諸佛の諸法の中に住したまふが如く、住するに非ず、住せざるに非ず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に應に是の如く學すべし。我は當に不住法に住するが故なり」と。

【論】

論者言はく、般若波羅蜜(多)の中の住とは、所謂、五衆と五衆相の

空なり。五衆相の空とは、十八空觀を以ての故なり。復次に、般若波羅蜜

〔多〕經に空の義を説くに、(五)五衆の相は空なり、但凡夫顛倒の故に五衆の

相を取り、五衆和合して、菩薩の相を取る。般若波羅蜜〔多〕の中には、衆

生空を以て、衆生を除けば、即ち是の菩薩相なく、法空を以て、五衆を除

けば、則ち五種の相なく、二空は別異なること無きが故に、五衆の空と、

菩薩の空とは、無二無別なりと言ふ。梅檀の火の滅すると、糞草木の火の滅すると、滅法には異なる

と無く、未だ滅せざる時の相を取りて、滅時に於て説くが故に別異あり、滅中に於ては則ち異なること

無きが如し。乃至一切種智も亦た是の如し。住すべからずとは、所謂五衆中に住すべからざるなり。

問うて曰はく、(六)應に如住の義を説くべし、何を以ての故に不住を説くや。答へて曰はく、若し能

【五】五蘊空と菩薩空とは、滅法として無二無別なること、梅檀の火の滅すると、糞草木の火の滅すると、異なることなきが如し。

【六】第七問、如住の義を説かずして、不住の義を説く理由如何。

く五衆の中に於いて、心離れて住せざれば、則ち是れ住するの義なり。是の故に、「所得あるを以ての故に、住すべからず、乃至一切種智も亦た是の如し」と説けり。先に五衆の中に住すべからざることを説くも、何の門を以て住すべからざるかを知らず。今常、無常等の門の中に住すべからず、乃至遠離して住すべからざるを説く。

問うて曰はく、(三)須陀洹果等の無爲相に住すべからざるに、何の次第ありや。答へて曰はく、菩薩は先づ諸法の空にして、所有なきを觀じ、心退没して涅槃を取らんと欲す。涅槃は即ち是れ無爲の相なり。是の故に、今須陀洹果等の無爲の相に住すべからずと説く。若し是の須陀洹果は無爲の相ならば、則ち法として著すべき無し。何の愛する所、何の取る所ぞ。若し是れ有爲の相ならば、有爲相は虚誑にして實なく、亦た住すべからず。是の故に、須陀洹果の無爲の相に住すべからずと説く。乃至佛の無爲の相に住すべからざるも、亦た是の如し。如し菩薩、佛道を行せんと欲せば、初に檀波羅蜜〔多〕を行じて、應に福田を求むべし。何となれば、福田の因縁功德の故に、所願を満することを得ればなり。良田に種うれば則ち收むる所、益益多きが如し。佛の説きたまふが如くんば、「餘の田の果報には量あるも、賢聖の田には量なく、果報も亦た量なし」と。菩薩は是の須陀洹等の福田の果報の、無量なることを聞くが故に、便ち須陀洹と作らんと欲す。是を以ての故に、須陀洹の福田に住すべからず。乃至辟支佛も

【二六】 第八問、須陀洹果等の無爲の相に住すべからざるに、何等の次第ありや。

亦た是の如しと説く。

問うて曰はく、(三)二乗は小なるが故に、應に過ぎて住せざるべし、佛の福田には何を以てか住せざるや。答へて曰はく、菩薩の法は、諸法に於いて、應に平等なるべし。若し佛を以て大と爲し、衆生を小と爲さば、則ち等しき法相を破す。復次に、空なるが故に、一切處に住すべからず。

復次に、菩薩は等心に布施す。若し福田を分別すれば、則ち大悲を破し、亦た三分清淨の布施を破す。初地の中に住すべからずとは、若し初地を捨てざれば、則ち二地を得ず。大益を求むるが故に、應に小利を捨つべし。復次に、著心にして相を取るを以ての故に住すべからず。乃至第十も亦た是の如し。

問うて曰はく、(四)若し菩薩摩訶薩の法は發初心より應に六波羅蜜〔多〕を行すべく、六波羅蜜〔多〕を行すが故に法位に入り、法位に入るが故に、應に阿鞞跋致地に住すべく、阿鞞跋致地に住し已りて、應に五神通を起こすべし。十方の諸佛に供養したてまつることは、後に説くが如し。今何を以てか皆な住すべからずと言ふや。答へて曰はく、清淨に住することを破せず。但我を計し、邪見もて相を取る心に住することを破す。譬へば、田を治して、其の穢草を去るが如し。

【三】 第九問、二乗は小なるが故に住すべからず、佛の福田に住すべからざる理由如何。

【四】 菩薩は等心に布施す。

【五】 第一〇問、菩薩は初發心より六度を行じ、六度を行するが故に法位に入り、法位に入るが故に不退位に住すべし。然るに今何を以てか皆住すべからずといふや。

復次に、法愛を斷せんが爲の故に住すべからず。諸佛の畢竟空を説きたまふ智慧に違はんことを欲せざるが故に住すべからず。若し方便を以て、不著の心もて、衆生を憐愍するが故ならば、住すと雖も咎なく、乃至、八十種の隨形好も、亦た是の如し。(三六) 八人とは、所謂、見諦道中の信行、法行なり。(三七) 須陀洹は極く久しきは七世生なり。有る須陀洹は、今世に煩惱盡きて阿羅漢を得。有る家家の須陀洹は、三世生なり三世生已りて涅槃に入る。有る中間の須陀洹は、第三を除き、餘の中間に涅槃に入る。六無礙、五解脱中に住する者は、皆是れ須陀洹向なり。(三八) 斯陀含は、欲界六種の結を斷じて天上に生じ、天上より人間に來り生じて涅槃に入るを斯陀含と名く。欲界の第七分の結を斷ずるを向阿那含と名け、第八分の結を斷ずるも、亦た向阿那含と名け、一種子と名く。斯陀含の此の間に死し、彼の間に生じて涅槃に入り、能く欲界一切の結使を斷ずるを阿那含と名け、此の間に死し、色、無色界に生じて涅槃に入り、更に復た來り生ぜず。今世に滅する阿那含あり、中陰に滅する阿那含あり、即ち生ずる時、涅槃に入る阿那含あり、生じ已り、諸行を修起して涅槃に入る阿那含あり、諸行を勤求せずして、涅槃に入る阿那含あり、上行より乃ち阿迦貳吒に至るまでの阿那含あり、無色界に生じて涅槃に入る阿那含あり。身證を得て涅槃に入る阿那含あり、是を阿那含と名け、亦た向阿羅漢とも名く。(三九) 阿羅漢に九種あり、漏を盡くし、身を捨つる時

- 【三六】 八人の義解。
- 【三七】 須陀洹の解。
- 【三八】 斯陀含の解。
- 【三九】 阿那含の解。
- 【四〇】 Akāṅkṣhā
- 【四一】 九種の阿羅漢。

を、無餘涅槃に入ると名く。聲聞、辟支佛地を過ぎて菩薩地に住し、道種智、一切種智「を以て」一切法を知り、一切の煩惱及び習を斷じ、成佛して法輪を轉じ、三十二相あり、廣く世界の無量の衆生を度し、無量の壽命あることは、皆先の論議の中に説くが如し。聲聞の人の善く四如意足を修し、是の三昧力を得るも、能く壽に住すること、若くは一劫、若くは減一劫なり。菩薩は善く四如意足を修し、若し如恆河沙劫の壽を欲するも、亦た得ること意の如し。三千大千世界は、純ら是れ金剛なりと雖も、餘の世界は底に金剛あり、及び佛の所行、所坐の處には金剛ありと雖も、而も餘の處には皆無し。是の菩薩の所願の世界は、皆是れ金剛なり。菩提樹香もて衆生を度すとは、先の義中に説くが如し。

問うて曰はく、**【七】**此の中の事は希有にして、皆信すべしと雖も、受想行識の名字あること無く、檀波羅蜜「多」の名字、乃至佛の名字のなきことは、是れ信すべきこと難し。答へて曰く、世界あり、大福德智慧の人の生ずる處なり。樹木、虚空、土地、山水等は、常に諸法實相の音を出だし、所有る法は、皆是れ不生不滅、不淨不垢、空、無相、無作等なり。衆生は生れて便ち是の音を聞き、自然に無生法忍を得。是の如き世界の中には分別して諸法の名字、所謂是の五衆、十二入等、檀波羅蜜「多」、乃至十八不共法、須陀洹、乃至諸佛を説くことを須るす。是の世界の衆生は、皆三十二相八十隨形好ありて身を莊嚴し、無量の光明、一種の道、

**【七】** 第一問、受想行識の名字なく、布施波羅蜜多の名字なく、佛の名字なきを如何にして信し得んや。

一種の果あり、是の中に住すべからずとは、菩薩は自ら念ずらく、「我れ能く是の如き世界に生ずれば、則ち高心を生ず」と。是を以ての故に、相を取りて此の中に住すべからず。須菩提は自ら説けり、「因縁に住せず、諸佛の佛道を得たまふ時は、諸法の中に於いて、定んで實相を得ず。故に當に何所にか住すべき」と。今舍利弗は是の念を作す、「若し都べて住する所なくんば、當に何處にか住して佛道を成ずることを得べき」と。須菩提は舍利弗の心に念する所を知り、舍利弗に語るらく、「諸の菩薩は皆是れ佛子なり。子の法は應に父の所行の如くなるべし。諸佛の心は、一切法の中に於いて、住したまふ所なし。所謂、色乃至一切種智なり。菩薩も亦た應に是の如く學し、住する所なき心を用つて、般若波羅蜜(多)を行すべし。諸佛は住する所なき心の中にも亦た住せず、住せざるに非ざる心の中にも亦た住したまはず。畢竟清淨なるが故に、諸の菩薩は亦た應に佛に隨つて住すべし、(そは)畢竟清淨なるが故に、諸の菩薩は亦た應に佛に隨つて學すべし。



爾の時、(三)會中に諸の天子ありて是の念を作す、「諸の夜叉の言語名字句の説く所すら尙ほ了知すべし。須菩提の説く所の

の(三)言語・論議・解釋般若波羅蜜(多)は了かに知るべからず」と。須菩提は諸の天子の心に念する所を知り、諸の天子に語る

らく、「解せず、知らざるや」と。諸の天子の言はく、「大徳よ、解せず、知らず」と。須菩提諸の天子に語るらく、「汝等は

【七】 説法の執すべきものなきを示す。

【七】 言説は平易なるも、旨趣幽玄にして了知難し。

法を應に知らざるべし。我は論説する所なく乃至一字をも説かず、亦た聽く者も無し。何となれば、諸の字は般若波羅蜜〔多〕に非ず。般若波羅蜜〔多〕の中には聽く者なく、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提も字なく、説くこと無し。諸の天子よ、佛化人を化作したまひ、是の化人復た四部の衆なる比丘、比丘尼、優婆塞優婆夷を化作し、化人の四部の衆中に於いて法を説くが如き、汝が意に於いて云何。是の中に説く者あり、聽く者あり、知る者ありや不や」と。諸の天子の言はく、「否なり、大徳よ」と。

須菩提言はく、「一切の法は、皆化の如く、此の中に説く者なく、聽く者なく、知る者なし。諸の天子よ、譬へば、人の夢中に佛の説法を見る〔が如し〕。汝が意に於て云何、是の中に説く者あり、聽く者あり、知る者ありや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳よ」と。須菩提は諸の天子に語るらく、「一切の諸法は皆夢の如く、説く者なく、聽く者なく、知る者なし。諸の天子よ、譬へば二人の大深淵に在り、各一面に住して佛法衆を讚するに、二の響ありて出づるが如し。諸の天子、意に於いて云何、是の二つの響は展轉して相解するや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳須菩提よ」と。須菩提は諸の天子に語るらく、「一切法も亦た是の如く、説く者なく、聽く者なく、知る者なし。諸の天子よ、譬へば、巧なる幻師の四衢の道中に於いて、佛及び四部の衆を化作し、中に於いて説法するが如し。諸の天子、意に於いて云何、是の中に説く者あり、聽く者あり、知る者ありや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳よ」と。

須菩提は諸の天子に語るらく、「諸の天子よ、一切諸法は幻の如く、説く者なく、聽く者なく、知る者なし」と。爾の時、諸の天子は心に念ずらく、「須菩提の説く所は解し易からしめんとを欲し、深を轉じ、妙を轉ず」と。須菩提は諸の天子の心に念する所を知り、諸の天子に語りて言はく、「色は深きに非ず、妙に非ず、受想行識は深きに非ず、妙に非ず。色の性は深きに非ず、妙に非ず、受想行識の性は深きに非ず、妙に非ず。眼の性乃至意の性、色の性乃至法の性、眼界の性乃至意

界の性、眼識、乃至、意識、眼觸乃至、意識、眼觸因縁生の受、乃至、意識因縁生の受、檀波羅蜜(多)、乃至、般若波羅蜜(多)、乃至、無法有法空、四念處、乃至、十八不共法、一切諸の三昧門、一切の陀羅尼門、乃至一切種智、一切種智の性は深きに非ず。妙に非ず」と。諸の天子復た是の念を作さく、「是の所説の法の中には色を説かず、受想行識を説かず、眼乃至、意識因縁生の受を説かず、檀波羅蜜(多)、乃至、般若波羅蜜(多)を説かず、内空、乃至無法有法空を説かず、四念處、乃至十八不共法を説かず、陀羅尼門、三昧門、乃至一切種智を説かず、須陀洹果乃至阿羅漢果を説かず」と。須菩提は諸の天子の心に念する所を知り、諸の天子に語りて言はく、「是の如し、是の如し。諸の天子よ、是の法の中には諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を説くべからざるの相なり。是の中にも亦た説く者なく、亦た聽く者なく、亦た知る者なし。是を以ての故に、諸の天子よ、善男子、善女人の須陀洹果に住せんと欲し、須陀洹果を證せんと欲する者は、是の人は是の忍を離れず。斯陀含、阿那含、阿羅漢果、辟支佛道、佛道に住せんと欲し、證せんと欲するも、是の忍を離れず。是の如く、諸の天子よ、菩薩摩訶薩は初發心より般若波羅蜜(多)の中に應に、是の如く住すべし。説くもの無く、聽くもの無きを以てなり。」

**論** 問うて曰はく、(七) 諸の夜叉の語は、隱覆して正しからずと雖も、而も事則ち鄙近なり、深般若波羅蜜(多)を説くは、常辭を用ふと雖も、而も幽旨玄遠にして、事異なり、趣乖けり。何を以てか

**【七四】** 説聽なく、法の住すべきものなしとするをいふ。  
**【七五】** 一切法説聽なく、諸觀滅し、言語斷するが故に、不可説、不可聽、不可知にして、一切法に受なく著なし。  
**【七六】** 第一二問、般若を説くの語は平易なりと雖も、幽旨玄遠なり、云何が了することを得んや。

相況すや。答へて曰く、諸天は適人の解せざる所を以て、況し已つて未だ悟らず、必ずしも事趣皆同じきを以て喻と爲さざるなり。有人の言はく、「天帝に九百九十九の門あり、門は皆十六青衣の夜叉を以て之を守る。此の諸の夜叉の語言は、淨信にして情趣妖語なり。諸天は之を賤しき以て意に在かず。是の故に其の言を解せずして而して其の意況す。言辯を須あらずして、而して之を識るべし、故に尙し知すべしと言ふ。今深般若の言を聞くに、及ぶべきに似て、而も玄旨幽邃、之を尋ぬること深しと雖も、而も之を失すること、逾逾遠し、故に夜叉の言を以て、其の知り叵きことを況す。又夜叉の語は、解し難しと雖も、眼に見て其の言を相傳し、其の心を度れば、皆知るべきを以てなり。譬へば、深淵の駛水も、船を得れば度るべきが如し。須菩提の説く所の、般若波羅蜜「多」の畢竟空の義は、定相あること無く、取るべからず。傳譯して悟ることを得べからず、有と言ふことを得ず、無と言ふことを得ず、有無と言ふとを得ず、非有非無と言ふことを得ず、非有非無も亦た無し。「そは」一切心行の處滅し、言語の道斷すればなり。是の故に諸の天子は、驚疑し迷悶す。須菩提は諸の天子に答ふらく、「汝が解せざる所の者は、汝自ら應に爾るべし。是の法は説く所なく、乃至一字の著すべく、取るべきを説かず、字なく、語なし、是れ諸佛の道なり。何となれば、名字は皆空にして、虚誑無實なればなり。色の名字を破する中に説くが如し。名字を用ふれば、則ち語言あり、若し名字なければ則ち語言なし」と。諸の天子は是の念を作す、「若し説くこと無く、若し聽くこと無くんば、今日

和合ノ聚會は、何の所作か有らん」と。須菩提は此の義を解せんと欲するが故に、譬喩を以て之を明  
 にす。諸の天子は復た是の念を作す、「譬喩を以て我等を解悟せんと欲するも、而も此の譬喩は轉た  
 更に深妙の譬喩にして、麤を以て細に喩へ、定事を以て不定を明す。今此の譬喩も、亦た微妙にして  
 定相なし」と。須菩提は、諸の天子の心の、深般若の中に於いて、迷没して自ら出づること能はざるこ  
 とを知る。是の故に説けり、「般若波羅蜜(多)は五衆に異ならず、五衆の實相は、即ち是れ般若波羅蜜  
 (多)なり。今是の般若波羅蜜(多)は深きに非ず、妙に非ず、乃至一切種智も深きに非ず、妙に非ず」  
 と。諸の天子は爾の時、深く須菩提の口に色心を説くと雖も、説く所なく、乃至阿耨多羅三藐三菩提  
 を生ずるも、亦た是の如きを知る。須菩提は諸の天子の心を知りて答へて言はく、「是の如し。是の  
 如し。我のみ獨り爾るに非ず。佛の菩提を得たまひし時も亦説くこと無く、寂滅の相にして、實に説  
 く者、聽く者なしかりき」と。是の故に、須陀洹果、乃至佛道は、皆な無爲法に因りて、而して有な  
 なり。是の法を離れて、是の忍を得れば、即ち須陀洹なく、乃至佛道も亦た是の如し。菩薩は初發心  
 より乃ち佛を得るに至るまで、其の中間に於て一切の法を説くこと無く、聞くこと無し。諸觀を滅す  
 るが故に、語言を斷するが故に説くべからず。説くべからざるが故に聽くべからず。聽くべからざる  
 が故に知るべからず。知るべからざるが故に、一切の法に於いて受くること無く、著すること無けれ  
 ば則ち涅槃に入るなり。

# 巻の第五十五

## 幻人聴法品第二十八を釋す。

釋

爾の時に 諸の天子心に念ずらく、「應に何等の人を用つてか須菩提の所説を聽かしむべき」と。須菩提は諸の天子の心に念ずる所を知りて、諸の天子に語りて言く、「幻化の人の法を聽くが如く、我は應に是の如き人を用ふべし、何となれば是の如き人は聞くこと無く、聽くこと無く、知ることも無く、證すること無ければなり」と。諸の天子須菩提に語るらく、「是の衆生は幻の如く、化の如く、法を聽く者も亦た幻の如く化の如くなるや」と。「是の如し、是の如し。

諸の天子よ、衆生は幻の如くなれば、法を聽く者も亦た幻の如く、衆生は化の如くなれば法を聽く者も亦た化の如し。諸の天子よ、我は幻の如く夢の如し、衆生乃至知者見者も亦た幻の如く夢の如し。諸の天子よ、色は幻の如く夢の如く、受想行識は幻の如く、夢の如し。眼乃至意觸の因縁生の受も、幻の如く、夢の如く、内空、乃至無法有法空、檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)も幻の如く夢の如し。

諸の天子よ、四念處乃至十八不共法は幻の如く夢の如し。須陀洹果は幻の如く夢の如く、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道は、幻の如く夢の如し。諸の天子よ、佛道は、幻の如く夢の如し」と。爾の時に、諸の天子、須菩提に問ふ、「汝、佛道は幻の如く夢の如しと説けり。汝涅槃をも、亦た復た幻の如く夢の如しと説くや」と。須菩提諸の天子に語るらく、

【一】 般若無著をれば、聽者も幻人の如しと再説し、これを問法に任ふる機とす。その機四人あり。他本には略して幻聽品といへり。  
【二】 衆生も諸法も聖果も、夢幻の如くなるを説く。

「我佛道は幻の如く、夢の如しと説けば、我は涅槃も、亦た幻の如く夢の如しと説く。若し我は亦た復た幻の如く夢の如しと説かん。何となれば、諸の天子よ、是の幻夢と涅槃とは不二不別なればなり」と。

論

問うて曰はく、上に已に、幻の如く、夢の如く、説く者なく、聽く者なきことを説けり。今

何を以ての故に、復た應に何等の人か、須菩提の意に隨つて、法を聽く者を用ふべきと問ふや。答へて曰はく、諸天子は、先に須菩提の所説は解すべからずと言ひ、此の中に須菩提は、幻化の人の喩を説けり。今諸の天子は、更に是の念を作す、「何等の人が聽いて、須菩提の所説と相應し、能く信受し、行じて道果を得ん」と。須菩提答ふらく、「幻化の人の如く、聽く者は、則ち我が説法と相應せん」と。

問うて曰はく、是の化人は心心數法なく、聽受すること能はず、何ぞ説法を用ゐんや。答へて曰はく、即ち幻化の人をして、聽かしむるに非ず、但行者をして、諸法に於て心を用ゐ、著すること無きこと、幻化の人の如くならしめんと欲するなり。是の幻化の人は聞くこと無く、亦た證すること無し。衆生は、幻の如く、夢の如くなれば、法を聽くことも、亦た幻の如く、夢の如し。法の人なり。法を聽く者は是れ法を受くる人なり。須菩提言はく、「但法を説く者、法を聽く者のみ、

【三】法の涅槃に勝る者ありとも、

【三】法の涅槃に勝る。佛、涅槃は人法の最上なれば、之に勝るものなしと雖も、假説して比説するなり。

【四】第一問、上に已に夢幻の如く、聽く者なく、説く者なしと説けり。然るを今復た何等の人が、須菩提の意に隨つて、法を聽く者を用ふべきと問ふ理由如何。

【五】第二問、化人には心王心所なく、聽受する事能はざるなり、何ぞ説法を用ゐんや。

衆生は説つ

幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとくなるにあらす。我が乃至なほ知者ちしや、見者けんじやも皆みな幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく。色しきも亦またた幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく、乃至なほ涅槃ねはんも幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく。即すなはち是この所説しよせつの法ほふは、幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく、一切衆生いつさいしゆじゆうの中なかにて佛ほとけを第一だいいちと爲なし、一切諸法いつさいしよほふの中なかにて涅槃ねはんは第一だいいちなり。是この二事にじは、幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく、夢ゆめの如ごとく、夢ゆめの如ごとくなるや」と。是こを以もつて聞いて驚疑きやうぎすべく、「佛ほとけ及び涅槃ねはんは最上最妙さいじゆうさいめうなり。云何いかんが幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく、夢ゆめの如ごとくなるや」と。佛ほとけ及び涅槃ねはんは、悉ことごとく幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとくなるや」と。須菩提しゆぼだいは將まさに誤あやまり説とく無く、我等われらは將まさに謬あやまり聽きくと無なしと。是こを以もつて更さらに定ただんで問とふ。須菩提しゆぼだいは諸もろの天子てんしに語かたるらく、「我われは佛ほとけ及び涅槃ねはんは、正ただしく自らみづか、幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとくと説とけり。是この二法ほふは妙めうなりと雖いへども、皆みな虚誑きやうきやう法ほふより出いづるが故ゆゑに空くうなり。何なんとなれば、虚誑きやうきやうの法ほふに従したがふが故ゆゑに涅槃ねはんあり、福徳智慧ふくとくちゑに従したがふが故ゆゑに佛ほとけありて、是この二法ほふは因縁いんねんに屬ぞくして、實じつ定ぢやうあること無なければなり。念佛念法ねんぶつねんほふの義ぎの中なかに説とくが如ごとく」と。須菩提しゆぼだいは是この念ねんを作なす、「般若波羅蜜はんにやはらみつ〔多〕の力ちからは、假令たとひ、法ほふの涅槃ねはんに勝まさる者ものありとも、能よく幻まぼろしの如ごとくならしむ。何いかに況いはんや、涅槃ねはんをや。何なんとなれば、涅槃ねはんは、一切いつさいの憂愁苦惱うしゆうくなんらう畢めつして滅めつす。是こを以もつての故ゆゑに法ほふの涅槃ねはんに勝まさる者ものあるとなし。問とうて曰いはく、若そし法ほふの涅槃ねはんに勝まさる者ものなくんば、何なにを以もつての故ゆゑに、若もし法ほふあり、涅槃ねはんに勝まさらんも、亦また復またた幻まぼろしの如ごとくと説とくや。答こたへて曰いはく、譬喻へいよの法ほふは或あるは實事じつじを以もつてし、或ある時は假設けせつの因縁いんねんに隨したが

【六】 第三問、法の涅槃に勝るものなくんば、若し法あり、涅槃に勝るとも、復た幻の如く夢の如しと説く理由如何。  
 【七】 譬喻の法は、或は實事を以てす、或は假設の事項を以てす。

ぶが故に説く。佛の言ぶが如し、「若し樹木をして、我が所説を解せしめん者は、我は亦た記して須陀洹を得と言はんと。但、樹木は因縁の解悟すべきなし。佛は人の意を解悟せんが爲の故に、此の喻を引きたまひしのみ。涅槃は是れ一切法の中に、究竟無上の法なり。衆川萬流は大海を上と爲し、諸山の中には須彌を上と爲し、一切法の中には虚空を上と爲すが如し。涅槃も亦た是の如く、老病死の苦あること無く、邪見、貪恚等の諸衰あること無く、愛別離の苦あること無く、怨憎會の苦なく、所求不得の苦なく、無常、虛誑、敗壞、變異等の一切皆無し。要を以て之を言へば、涅槃は是れ一切の苦盡き、畢竟常樂にして、十方の諸佛、菩薩、弟子衆の所歸の處、安隱常樂にして是に過ぐる者なく、終に魔王魔人の爲に破せられず。阿毗曇の中に説くが如し。有上の法とは、一切有爲の法と及び虚空、非智緣盡なり。無上の法とは、智緣盡にして所謂涅槃なり。是の故に、法の涅槃に勝る者なきことを知る。須菩提は般若波羅蜜「多」の力を美とするが故に、言はく、「若し法ありて涅槃に勝らんに、是も亦た幻の如し」と。譬へば、大熱の鐵丸を以て、擘の起これる鬣上に著けんに、直に燒き下り過ぎ、勢熱して損すること無く、但更に燒くべき者なきが如し。般若波羅蜜「多」の智慧も、一切の法乃至涅槃を破し、直に過ぎて礙なく、智力を滅せず、直に更に法の破すべき無し。是の故に、設ひ法ありて涅槃に勝らんも、智慧の力は亦た能く破すと言ふ。



可得なり」と。爾の時に舍利弗、須菩提に語つて言はく、「般若波羅蜜(多)の中には廣く三乘の教を説き、及び菩薩の法を攝取し、初發意地より乃至十地、檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至十八不共法、菩薩の教を護持す。菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜(多)を行じ、常に化生して神通を失せず、諸佛の國に遊び、善根を具足し、其の欲する所に隨じて諸佛を供養したてまつり、即ち願の如くなることを得、諸佛に聽受したてまつる所の法教に従つて薩婆若に至るまで、初より斷絶せず。未だ曾つて三昧を離れざる時、當に捷疾辯、利辯、不盡辯、不可斷辯、隨應辯、義辯、一切世間最上辯を得べし」と。

須菩提言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗の言ふが如く、般若波羅蜜(多)は廣く三乘の教を説き、及び菩薩の教を護持し、乃至菩薩摩訶薩は一切世間最上辯を得ると不可得なるが故に、我乃至知者見者も不可得なり。色受想行識、檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)も不可得なり。内空乃至無法有法空も不可得なり。四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智も亦不可得なるが故なり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「何の因縁の故に、般若波羅蜜(多)の中に、廣く三乘を説くも而も不可得なるや。何の因縁の故に、般若波羅蜜(多)の中に菩薩を護持し、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は捷疾辯乃至一切世間最上辯を得ると不可得なるや」と。

須菩提、舍利弗に語りて言はく、「内空を以ての故に、般若波羅蜜(多)に廣く三乘を説くは不可得なり。外空乃至無法有法空の故に廣く三乘を説くは不可得なり。内空の故に、菩薩を護持し、乃至一切世間最上辯は不可得なり、外空乃至無法有法空の故に、菩薩を護持し、乃至一切世間最上辯は不可得なるが故なり。

論

論者言はく、是の時、諸の大弟子、舍利弗等は須菩提に語るらく、「是の般若波羅蜜(多)の法は甚深にして解し難し。諸法は定相なきを以ての故に甚深と爲し、諸の思惟、觀行滅するが故に見難

く、亦た般若波羅蜜〔多〕に著せざるが故に解し難く知り難しと名け、三毒及び諸の戲論を滅するが故に寂滅と名け、是の智慧の妙味を得るが故に常に満足を得、更に求むる所なし。餘の一切の智慧は、皆麤澁にして、樂み巨きが故に微妙と言ふ。諸の大弟子は是の言を作す、「般若波羅蜜〔多〕の智は甚深なるに、世間の人は智慧淺薄にして、但福德の果報に貪著し、而も樂んで福德を修せず、有に著すれば則ち情勇み、有を破すれば則ち心怯へ、本、聞習する所の邪見の經書に堅く著して捨てず。是の如きの人は常に世樂を樂しむ。是を以ての故に、誰か能く信受せんと言ふ。

是の深般若波羅蜜〔多〕を、若し信受すると無くんば、何ぞ説くことを用つて、阿難の助と爲さん。答ふ、四種の人あり、能く信受す。是の故に大德須菩提の所説は、必ず信受するものあり、空説にあらざるなり。一には、

阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、一切法の不生不滅を知り、相を取らず、著す所なきが故に、是れ則ち能く受く。二には漏盡の阿羅漢は、漏盡るが故に、著する所なく、無爲最上の法を得て、所願已に滿たし、更に求むる所なきが故に、常住、空、無相、無作の三昧〔を以て〕般若波羅蜜〔多〕に隨順するが故に則ち能く信受す。三には三種の學人は、正見を成就し、漏未だ都べて盡きずと雖も、(二) 四信力の故に亦た能く信受す。四には有る菩薩は、未だ阿鞞跋致を得ずと雖も、福德利根にして、智慧清淨に、常に善知識に隨ふ。是の人も亦た能く信受す。信受の相は、是の法は佛、

【一〇】不退轉の菩薩のこと。  
 【一一】四信とは、(一)常に佛を信ず。(二)法を聽んと欲す。(三)衆を供養す。(四)五欲を離る。又は佛法僧戒を信するを四信といふ。

菩薩、大弟子の所説に非ずと言はず、般若波羅蜜(多)の諸法は、皆畢竟空なりと聞くと雖も、先法を受くるを以ての故に、而も非法なりと言はざるなり。

問うて曰はく、(三)上より已來、阿難はすべて言論なく、今何を以てか須菩提に代りて答ふるや。答へて曰はく、阿難は是れ第三の轉法輪の將にして、能く大衆の師と爲る。是れ世尊に近侍して、初道を得と雖も、漏未だ盡くさざるを以ての故に、多聞智慧ありと雖も、自ら空の智慧の中に於いて、未だ能く善巧ならざるを以て、若し空法を説くは自ら未だ入らざるが故に、皆是れ他事なり。是の故に言ふこと無し。或時は諸有の事を説けば、則ち能く問ひ能く答ふ。後品の中に佛に問ひたてまつりて言ふが如し。「世尊よ、何を以てか但般若波羅蜜(多)を讚歎して、五波羅蜜(多)を讀じたまはざるや」と。此の中に、人誰か能く是の深般若波羅蜜(多)を信せん」と問ふは、是れ空事に非ざるが故なり。阿難は便ち答ふ。

須菩提は常に樂んで空事を説き、有を説くことを喜ばず。又阿難は是の時、樂説の心生するを以て是の故に答を聽す。阿難は煩惱未だ盡くさざるが故に、智慧力鈍し、然るに信力猛利なるが故に、甚深般若波羅蜜(多)の中に於いて、能く法の如く問答するなり。

問うて曰はく、(三)般若波羅蜜(多)は所有なく、一定の法あること無し。云何が四種の人は信受して

【二】第四問、從來全く説く所なかりし阿難が、今突然須菩提に代りて説けるは何故なるか。

【三】第五問、智度には所有なく一定の法あるとなし、云何が四種の人これを信受して、非法なりと言はざるや。

非法なりと言はざるや。答へて曰はく、今須菩提は、此の中に自ら因縁を説けり、「空を以て色を分別せず」と。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。是を以ての故に、般若波羅蜜(多)は、失する所なく、破する所なく、若し破する所なければ、則ち過罪なし。是の故に非法なりと言はず。空は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。空の智慧を以て色を破して空ならしめず。亦た色を破する因縁を以ての故に空有らず。空は即ち是れ色、色は即ち是れ空なるが故に、般若波羅蜜(多)の中に諸の戲論を破するを以て、是の如き功德あるが故に、信受せざること無し。無相、無作、無生、無滅、寂滅、遠離も亦た是の如し。乃至一切種智も皆應に廣く説くべし。

問うて曰はく、(一四) 諸の大弟子、是の義を問ふに、須菩提は何を以て乃ち諸の天子に答ふるや。答へて曰はく、諸の大弟子は已に阿羅漢を得。但

自ら疑を爲すが故に問ふも利益の事少し。諸の天子は發心して菩薩と爲り、利益深きが故に爲に説くなり。

復次に、諸天の爲に説くと雖も、即ち是れ諸の大弟子に答ふ。上には諸法の空を説き、今は深般若波羅蜜(多)の中に、衆生は畢竟空なることを説く。是を以ての故に、般若波羅蜜(多)の中には、説く者あること無し。何に況んや、聽受する者あらんや。若し能く是の如く、諸法の空を解し、心に著する所なければ、則ち能く信受す。爾の時、須菩提は深般若波羅蜜(多)を説き、舍利弗は讚歎して其の事

【一四】第六問、諸の大弟子此義を問へるに、須菩提が諸の天子に答へたる理由如何。

を助成す。般若波羅蜜〔多〕は、但空を以ての故に受くべきに非ず。亦た廣く三乘あることを説く。三乘の義は先に説くが如し。菩薩を攝取すとは、般若波羅蜜〔多〕を以て、諸の菩薩を利益して、增長することを得せしむるなり。

復た次に、攝取とは、是の般若の中に十地あり、菩薩をして一地より一地に至り、乃至第十地に至らしむるなり。十地の義と、六波羅蜜〔多〕、乃至一切種智の義とは、先に説けるが如し。化生の者は、般若の行報を説く。般若波羅蜜〔多〕を行じ、一切法に於いて、無礙なるが故に、捷疾辯を得。有る人は能く捷疾なりと雖も、鈍根の故に深く入ること能はず、能く深く入るを以ての故に利なり。是の利は、諸法實相を辯説すること、無邊無盡なるが故に、樂説無盡と名く。般若の中には諸の戲論なきが故に能く問難すること無し。斷絶とは、不可斷辯に名く。

法愛を斷ずるが故なり。衆生の應ずる所に隨つて、而も爲に法を説くを隨應辯と名け、涅槃に趣く利益の事を説くが故に義辯と名け、一切世間に第一の事、所謂大乘を説く。是を世間最上辯と名く。須菩提は其問を然りとし、「是の如し、是の如し」と言ふ。舍利弗は是の念を作す、「須菩提は常に樂んで空を説く。何を以ての故に我が所説を受くるや。般若波羅蜜〔多〕は、廣く三乘の教を説く。應當に更に因縁あるべし」と。須菩提答ふ、「般若波羅蜜〔多〕は、廣く三乘の法を説くと雖も、定相

- 【一五】 攝取の義解。
- 【一六】 樂説無盡の義解。
- 【一七】 斷絶の義解。
- 【一八】 隨應辯の義解。
- 【一九】 義辯の義解。
- 【二〇】 世間最上辯の義解。

るに非ず。皆な十八空の和合を以ての故に説く。攝取の菩薩の七種の辯も、亦た是の如し。空の智慧を以ての故なり」と。

三三 散華品第二十九を釋す。

經

爾の時に、釋提桓因及び三千大千世界の中の四天王天、乃至阿迦尼吒の諸天、是の念を作さく、「慧命須菩提は、法雨を雨らさんとす。我等は寧ろ華を化作し、佛、菩薩摩訶薩、比丘僧、須菩提、及び般若波羅蜜(多)の上に散すべし」と。釋提桓因及び三千大千世界の中の諸天は華を化作して、佛、菩薩摩訶薩、比丘僧、及び須菩提の上に散じ、亦た般若波羅蜜(多)を供養す。是の時、三千大千世界の華は悉く虚空の中に周遍し、化して華臺と成り、端嚴殊妙なり。須菩提心に念すらく、「是の天子の華は悉く虚空の中に周遍し、化して華臺と成り、端嚴殊妙なり。須菩提心に念すらく、是の天子の華は天上に未だ曾つて見ず。是の加き華を是の華に比するに、是は化華にして樹生の華に非ず。是の諸の天子の散する所の華は心樹より生じ、樹生の華に非ず」と。釋提桓因は須菩提の心に念する所を知り、須菩提に語りて言はく、「大徳よ、是の華は生華に非ず、亦た意樹に生ぜしにも非ず」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「僑尸迦よ、汝、是の華は生華に非ず、亦た意樹に生ずるに非ずと言へり。僑尸迦よ、是の華は若し生法に非ずんば名けて華と爲さず」と。

釋提桓因は須菩提に語りて言く、「大徳よ、但是の華のみ不生なるや。色も亦た不生、受想行識も亦た不生なりや」と。須菩提の言はく、「僑尸迦よ、但だ是の華のみ不生なるに非ず、色も亦た不生なり。若し不生ならば是を名けて色と爲さず、受想行識も、亦た不生なり。若し不生なれば、是を名けて識と爲さず。六入、六識、六觸、六觸因縁生の諸の受も、亦た是

【三】 諸天供養の散華に因みて不生假名を説くが故に散華品と名く。  
【三】 Akusidhā は譯して色究竟といふ。

の如し。檀波羅蜜(多)は不生なり、若し不生ならば、是を檀波羅蜜(多)と名けず、乃至般若波羅蜜(多)も不生なり、若し不生ならば、是を般若波羅蜜(多)と名けず。内空は不生なり、若し不生ならば是を内空と名けず。乃至無法有法空も不生なり、若し不生ならば無法有法空と名けず。四念處は不生なり、若し不生ならば是を四念處と名けず。乃至十八不共法も不生なり、若し不生ならば是を十八不共法と名けず。乃至一切種智も不生なり、若し不生ならば是を一切種智と名けず。

論

釋して曰はく、釋提桓因及び諸天は、須菩提の説く所の般若の義を聞くに、「一切の法は盡く是れ實相にして分別する所なく、空を説くと雖も、諸法に於いて破する所なく、亦た諸の行業、果報

を失せず」と。聲聞の人、佛前に於いて、能く是の甚深の法を説くが故に

釋提桓因等は、皆歡喜して是の念を作す、「須菩提の説く所の法は無礙

無障なり。(三三) 譬へば、如し時雨(少なければ)、國土溉灌、種時、及び種種

の用水、常に不足に苦しむが如し。若し時雨普ねく降れば、沾洽ならざる

無く、願の如くならざる無し。小乗の法も、亦た是の如く、初め種種に、布施、持戒、禪定、無常等

の諸觀を讚歎するに、量あり、限あり、末後に涅槃を説く。此の中に須菩提の明かにする所は、初發

心より乃ち佛道に至るまでにして、諸法實相を説くと雖も、分別する所なし。譬へば、大雨の遍ねく

閻浮提に滿てば、潤はざる所なきが如し。(三四) 又地に先づ穀子ありと雖も、雨なければ、則ち生ぜざる

が如し。行者も亦是の如く因縁ありと雖も、法雨を得ざれば發心せし者は退き、未だ發(心)せざる者

【三】 大小の雨を法雨の大小に喩ふ。

【四】 地に穀子ありと雖も、雨なければ生ぜず。

は住まゐる。若し法雨を得れば、發心せし者は増長し、未だ發「心」せざる者は發す。是を以ての故に法雨を雨ふらすが如しと説く。

復次に、譬へば、惡風、塵土、諸熱、毒氣等は、雨を得れば則ち消滅するが如く、法雨も亦た是の如し。惡覺觀、塵土、三不善、毒邪見、惡風、邪師、惡蟲及び諸の惡知識等は、般若波羅蜜「多」の法雨を得れば、則ち皆除滅す。人は時雨を蒙るが故に天を供養す。諸天は法雨を聞いて大に利益し、供養せんと欲するが故に是の念を作す、「我等は寧ろ華を作りて、佛、諸大菩薩、比丘僧及び須菩提に散じ、亦た般若波羅蜜「多」を供養すべし」と。須菩提は善く般若を説くを以て、之を敬ふこと重きが故に名を甄して供養す。是の般若波羅蜜「多」は多く諸法の空を説き、又上に化人の法を聴くが如く、其の相に隨ふことを得んと欲するが故に化華を以て供養す。

復次に、諸天は當に歡喜すべき時、便ち心に稱ひて供養し、多く還取することを容れず。即ち化華を作りて佛、須菩提、諸の菩薩、比丘僧、及び般若波羅蜜「多」に散す。花を佛の上に散するは、是れ佛寶を供養し、諸の菩薩、須菩提、及び般若波羅蜜「多」に散するは、是れ法寶を供養し、諸の比丘僧に散するは、是れ僧寶に供養するなり。是の念を作し已りて、意に隨つて變化し、三寶を供養し、大福德を成就するが故に、心に生ずる所願、皆意の如くなることを得て、他に從つて求めざるなり。

【二五】惡風、塵土、諸熱、毒氣も雨を得れば則ち消滅す、法雨も亦是の如し。

問うて曰はく、(二七)華臺の端嚴なるは是れ誰の力と爲すや、答へて曰はく、是れ諸天の力なり。諸天は福德自在なるが故に小を能く大と爲す。有る人の言はく、「佛の神力なり。佛には此の般若波羅蜜〔多〕を以て大功徳あり。因の時には少けれども、而も果報は甚だ大にして佛道を成就したまふ。是の故に此の奇特を現し給へり」と。須菩提は即時に分別して、實華に非ざることを知る。釋提桓因は、須菩提の是を化華なりと覺せるを知り、須菩提に語りて言はく、「大徳よ、是の華は生華に非ず」と。

(二七) 生華に非ずとは、是の華の無生空にして出づる所なきを言ふ。須菩提

は是の般若波羅蜜〔多〕を説き、諸法は無生空寂の故に、無生の華を以て供養せり。(二八) 意樹とは、諸天は意に念する所に隨つて則ち得。要を以て之を言へば、天樹は意の欲する所に隨ひ、念に應じて則ち至るが故に意樹と言

- 【二七】 第七問、華臺の端嚴なるは、是れ誰の力なるか。
- 【二八】 非生華の義解。
- 【二九】 意樹の義解。

ふ、釋提桓因は須菩提を難するが故に言はく、「是の華は無生なるに、何を以てか、是の華は樹より生ぜずと言ふや」と。須菩提反質して言はく、「若し不生ならば、何を以てか華と名くるや。不生の法の中には、所謂是の華は、是れ華に非ずと分別する所なし」と。是の時に、釋提桓因は心に伏して而も問ふ、「但是の華のみ無生なりや。諸法も亦た無生なりや」と。須菩提は答ふ、「但是の華のみ不生なるに非ず、色も亦不生なり。何となれば、若し一法空なれば則ち一切法皆空なればなり。若し行者一法の中に於いて、了了に決定して空を知れば、則ち一切法の中にも、皆亦た明了なり。若し五衆は

不生なれば、則ち五衆の相に非ず。乃至一切種智も亦た是の如し」と。

經

爾の時に、(元)釋提桓因是の念を作す、「是の慧命須菩提は、其の智甚深にして、假名を壞せずして、而も諸法實相を説く」と。佛、釋提桓因の心に念する所のを知り、釋提桓因に語りて言はく、「是の如し、是の如し。橋戸迦よ、須菩提は其の智甚深にして、假名を壞せずして而も諸法實相を説く」と。「釋提桓因、佛に白して言さく、「大徳須菩提は云何が假名を壞せずして而も諸法實相を説くや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「色は但だ假名なり、須菩提は假名を壞せずして而も諸法實相を説く。受想行識は、但だ假名なり、須菩提は亦た假名を壞せずして、而も諸法實相を説く。何となれば、是の諸法實相は、壞も(無く)不壞も無ければなり。眼、乃至意觸因縁生の諸の受も、亦た是の如く、檀波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も亦た是の如し。須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、菩薩道、佛道、一切智、一切種智も亦た是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、佛は是れ但だ是れ假名なり。須菩提は假名を壞せずして、而も諸法實相を説く。何となれば、是の諸法實相は、壞不壞無ければなり。須菩提の所説も亦た壞不壞無し。是の如く、橋戸迦よ、須菩提は假名を壞せずして、而も諸法實相を説く」と。

【元】假名を壞せずして、諸法實相を説き、般若の學を明かにす。

須菩提、釋提桓因に語るらく、「是の如し。是の如し、橋戸迦よ、佛の所説の如く、諸法は但だ假名なり。菩薩摩訶薩は應に是の知を作すべし、(所謂)諸法は假名なりと。但だ應に是の如く、般若波羅蜜(多)を學すべきなり。橋戸迦よ、菩薩摩訶薩の是の如く學を作すをば、色を學せず、受想行識を學せず」と爲す。何となれば、色の當に學すべき者を見ず、受想行識の當に學すべき者を見ざればなり。菩薩摩訶薩の是の如く學するをば、檀波羅蜜(多)を學せず」と爲す。何となれば、檀

波羅蜜多(の)當に學すべき者を見ざればなり。乃至般若波羅蜜多(の)當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、內空乃至無法有法空を學せず」と爲す。何となれば、內空乃至無法有法空の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、四念處乃至十八不共法を學せず」と爲す。何となれば、四念處乃至十八不共法の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、須陀洹果乃至一切種智の當に學すべき者を見ざればなり」と。

爾の時、釋提桓因、須菩提に語りて言く、「菩薩摩訶薩は何の因縁の故に、色を見ず乃至一切種智を見ざるや」と。須菩提言く、「色は色空乃至一切種智は一切種智空なり。橋戸迦よ、色空は色空を學せず乃至一切種智空は一切種智空を學せず。橋戸迦よ、若し是の如く空を學せざる是を空を學すと名く。不二なるを以ての故に、是の菩薩摩訶薩は、色空を學す。不二なるを以ての故に、乃至、一切種智空を學す。不二なるが故に、若し色空を學せば、不二なるが故に、乃至、一切種智空を學す。不二なるが故に、是の菩薩摩訶薩は、能く檀波羅蜜多(の)を學す。不二なるが故に、乃至能く般若波羅蜜多(の)を學す。不二なるが故に、能く四念處を學す、不二なるが故に、乃至、能く十八不共法を學す、不二なるが故に、能く須陀洹果を學す。不二なるが故に、乃至、一切種智を學す。不二なるが故に、是の菩薩は、能く無量無邊阿僧祇の佛法を學す。若し能く無量無邊阿僧祇の佛法を學すれば、是の菩薩は、色の爲めに學を増さず、色の爲めに學を減ぜず、乃至、一切種智の爲めに學を増さず、一切種智の爲に學を減ぜず、若し色の爲に學を増減せず、乃至一切種智の爲に學を増減せしんば、是の菩薩は、色の爲めに學を受けず、色の爲めに學を減せず、亦受想行識の爲に學を受けず、亦た爲に學を減せず、乃至一切種智も亦た爲めに學を受けず、亦た爲めに學を減せず」と。

舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は是の如く學して、色を受くるが爲めに學せず、色を減するが爲めに學せず、

乃至、一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せざるや」と。須菩提言はく、「菩薩摩訶薩は、若し是の如く學して、色を受くるが爲めに學せず。色を減するが爲めに學せず、乃至、一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せず」と。

〔舍利弗、須菩提に語るらく〕「須菩提よ、何の因縁の故に菩薩摩訶薩は色を受くるが爲に學せず、色を減するが爲に學せず、乃至一切種智も亦た受くるが爲に學せず、亦た減するが爲に學せざるや」と。須菩提の言はく、「是の色は受くべからず、亦た受くる者も無し、乃至一切種智も受くべからず、亦た受くる者も無し。内外空なるが故なり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、一切法を受けざるが故に、能く一切種智に到る」と。

是の時、舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜〔多〕を學して能く一切種智に到るや」と。須菩提言はく、「菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜〔多〕を學して能く一切種智に到る。一切法を受けざるが故なり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「若し菩薩摩訶薩、一切法に於て學を受けず減せずば、菩薩摩訶薩は云何が能く一切種智に到らんや」と。須菩提言はく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を行するや、色の生ずることを見ず、色の滅することを見ず、色の受くることを見ず、色の受けざることを見ず、色の垢なることを見ず、色の淨なることを見ず、色の増すことを見ず、色の減することを見ず、何となれば、舍利弗よ、色と色の性は空なればなり。受、想、行、識も亦た生ずることを見ず、亦た増することを見ず、亦た受くることを見ず、亦た受けざることを見ず、亦た垢なることを見ず、亦た淨なることを見ず、亦た増すことを見ず、亦た減することを見ず。何となれば、識と識の性とは空なればなり。乃至一切種智も亦た生ずることを見ず、亦た減することを見ず、亦た受くることを見ず、亦た受けざることを見ず、亦た垢なることを見ず、亦た淨なることを見ず、亦た増すことを見ず、亦た減することを見ず、何となれば、一切種智と一切種智の性は空なればなり。是の如く、舍利弗よ、

乃至、一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せざるや」と。須菩提言はく、「菩薩摩訶薩は、若し是の如く學して、色を受くるが爲めに學せず。色を減するが爲めに學せず、乃至、一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せず」と。

善薩摩訶薩は一切法は(一〇)不生(一一)不滅(一二)不受(一三)不捨(一四)不取(一五)不垢(一六)不淨(一七)不合(一八)不散(一九)不增(二〇)不減なるが爲の故に、般若波羅蜜(多)を學して、能く一切種智に到る。學する所なく、到る所なきが故なり。

論

釋して曰はく、釋提桓因歡喜して言はく、「須菩提は其の智甚深にして、假名を壞せずして、而も諸法實相を説く」と。爾の時、佛、須菩提を讚じて言はく、「是の如し、是の如し」と。釋して言ふ所の如し。

問うて曰く、(三)佛は何の故に須菩提を讚じたまひしや。答へて曰はく、

師は自ら高からざるを示す、弟子は師法を承順するが故なり。人あり、師の説く所を弟子は受けず、弟子の説く所を師聽かず、凡夫人の衆に處して法を説く時、一切の語を破して受けざるが如し。佛には吾我の心なきを以ての故に、須菩提を讚じて、「是の如し、是の如し」と言へり。

復次に、佛は大悲心を以て、衆生をして須菩提の所説を信受せしめんと

欲したまふが故に讚じて、「其の智甚だ深し」と言へり。五衆は因縁の和合

より生じて定性あると無く、但假名のみ有り。假名の實相は、所謂、五衆の如、法性、實際なり。須

菩提の所説は此の理に違はず、所以は何となれば、聖人は、「名字は是れ俗諦にして、實相は是れ第

一義諦なることを知る。説く所あるは、凡夫人に隨ふなり。第一義諦の中には彼此なく、亦た誣もな

- 【一〇】 不生。諸法の生相を破するが故に不生なり。
- 【一一】 不滅。諸法の無常相を破するが故に不滅なり。
- 【一二】 不受。種種の罪過を觀るが故に受けず。
- 【一三】 不捨。種種の利益を觀るが故に捨てず。
- 【一四】 不取。性常に清淨なるが故に垢つかず。
- 【一五】 不淨。能く著心を生ずるが故に淨からず。
- 【一六】 第八問。佛、須菩提を讚じ給ふ理由如何。

く、乃至一切種智も亦た是の如し。衆生も空、乃至、知者見者も空なればなり。須陀洹は但假名の有り。乃至佛も亦た是の如し。菩薩は一切法の假名なることを知れば、則ち應に般若波羅蜜「多」を學すべし、所以は何となれば、一切法は但假名のみ有りて、皆般若波羅蜜「多」の畢竟空相に隨順するが故に是の如く學するなり。色を學せずとは、假名の法中には定色あるなし。若し色なくんば、云何が色を學せん。何となれば、菩薩は五眼を以て色を求むるに、而も是の色の若くは我、若くは無我等の相を見ざればなり。乃至一切種智も亦た是の如し。何を以ての故に、色を見ざるや。答へて言はく、色の中には、色相は空にして、不可得なるが故に見るべからず。即ち是れ自相空なり。乃至一切種智も亦た是の如し。

復次に、色を學せずとは、是の色は空にして即ち自ら色空を學すること能はず、諸法は他相を行じ自相を行せざるを以ての故なり。譬へば、人、馬に乗り、馬、馬に乗るに非ざるが如し。

問うて曰はく、若し是の如く一切法を學せずんば、云何が一切智を學するや。答へて曰はく、是の中に説けり、「若し能く諸法の空の中に於いて、著する所なくんば、是を眞に色空を學すと爲す。若し色に著する者は、是れ諸法を破して、而も空を破せざるなり。若し人、色を破して、而も空に著せざれば、是れ則ち色空は不二不別なり。是を能く色空を學すと爲す。不可得なるが故に空を見ず。

【三七】 色を學せずの義解。

【三八】 第九問、若し是の如く一切法を學せずんば、云何が一切智を學するや。

乃至一切種智も亦た是の如し」と。無量無邊阿僧祇の佛法とは、是れ一切種智を讚す。上の一切種智是なり。菩薩の心中には量あり、限あり。佛の心中に在りては、則ち量なく限なし。是を以ての故に上に佛法を學することをば説くと雖も、今更に別して説くなり。若し能く是の如く學すれば、菩薩の道を行するに増減せず。色の増すことを學すとは、若し但四大及び造色の和合して、身を成すことを見れば、則ち著を生せず。是の身中に於いて、男女、好酬、長短の相を起こし、謂つて定實と爲すを以て染著の心を生ず。是を増すと爲す。若し色を破して空ならしめ、心是の空に著する、是を減すと爲す。乃至一切種智も亦た是の如し。受けず減せずとは、空なるが故に業果を受けず。因縁相續するが故に滅せず。是の中に須菩提は自ら因縁を説けり、「色を受くる者は、不可得なるが故に受けず。又色の内外は空なるを以ての故に受けず。色の中、内外空も空なるを以ての故に滅せず」と。

問うて曰はく、應に十八空を以て諸法を空とすべし。此の中に何を以てか但内外空を説くや。答へて曰はく、色を受くる者は無なるが故に内空を説き、色は受くべからざるが故に外空を説く。是の内外空は則ち一切法の空を攝す。乃至一切種智も亦た是の如し。若し菩薩、能く是の如く學すれば、則ち一切種智を生ず。一切種智は是れ無障礙の相なり。若し菩薩は、「一切法は、虚空の如く障礙なし」と觀すれば、則ち是れ一切種智を觀するなり。因果相似するが故なり。舍利弗是の念を作す、

【三元】 第一〇問、十八空を以て諸法の空を説かずして、但内空外空を説くは何故なるか。

「菩薩の法は、應當に一切の煩惱を滅すべく、應當に一切諸の善法を受くべし。今受けず、滅せざることを學して、云何が出て、薩婆若に至らん」と。是の念を作し已りて、須菩提に問ふ。須菩提答へて言はく、「一切法の生相を破するが故に不生なり。一切法の無常相を破するが故に不滅なり。一切法の、種種の過罪を觀するが故に不受なり。一切法の種種の利益を觀するが故に不捨なり。一切法性は常に清淨なるが故に垢つかず、一切法は能く著心を生ずるが故に淨からず。一切法は是れ作、無作、起滅、入出、來往等ありと雖も、而も多からず、少からず、増さず、減せず。譬へば、大海は衆流の之に歸するも増さず、火珠は之を煎るも滅せざるが如し。諸法も亦た是の如く、法性は常住なるが故に、一切法の自性は不可得なるが故に、能く是の如く學せば、則ち出でて薩婆若に至り、學相を見ず、出相を見ず、菩薩相を見ず、般若波羅蜜(多)相を見ず、此の中には略して説くが故に、但學すること無く、出づること無しと説く」と。

【四〇】須菩提の説法も佛力に由る。これ受くる所なきが爲めなるを説く。

釋

爾の時、釋提桓因、舍利弗に語るらく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は當に何處に於て求むべきや」と。舍利弗の言はく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は、當に須菩提品の中に於て求むべし」と。釋提桓因、須菩提に語るらく、「是れ汝が神力、舍利弗をして、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を當に須菩提品の中に於て求むべしと語りしむるなり」と。須菩提、釋提

檀因たんにんに語るらく、「我が神力じんりきに非ず」と。釋提桓因しゃくだいゝわんにん、須菩提じゆぼだいに語るらく、「是れ誰の神力じんりきなるや」と。須菩提じゆぼだい言はく、「是れ佛の神力じんりきなり」と。釋提桓因しゃくだいゝわんにんの言はく、「一切の法しやくたい皆みな受くる處ところなし。何を以ての故ゆゑに、是れ佛の神力じんりきなりと言ふや。受處じゆよなき相さうを離れては如來にらいは不可得ふかたくなり。如にらを離れて如來にらいは亦た不可得ふかたくなり」と。

須菩提じゆぼだい、釋提桓因しゃくだいゝわんにんに語りて言はく、「是の如し、是の如し。橋尸迦けししやよ、受處じゆよなき相さうを離れて如來にらいは不可得ふかたくなり。如にらを離れて如來にらいは亦不可得ふかたくなり。受處じゆよなき相さう中に如來にらいは不可得ふかたくなり。如の中に如來にらいは不可得ふかたくなり。色如しよくにらいの中に如來にらいの如にらは不可得ふかたくなり。如來にらいの如にらは不可得ふかたくなり。色しよくの法相ほふさうの中に如來にらいの法相ほふさうは不可得ふかたくなり。如來にらいの法相ほふさうの中に色しよくの法相ほふさうは不可得ふかたくなり。受想行識じゆきやうしやくの法相ほふさうの中乃至一切種智しやくしちゆいも亦た是の如し。橋尸迦けししやよ、如來にらいは色如しよくにらいの中に合あはせず、散さんぜず。受想行識じゆきやうしやく如にらいを離れて合あはせず、散さんぜず。乃な至一切種智しやくしちゆいも亦た是の如し。如來にらいは色しよくの法相ほふさうの中に合あはせず、散さんぜず。受想行識じゆきやうしやくの法相ほふさうの中に合あはせず、散さんぜず。如來にらいは色しよくの法相ほふさうの中を離れて合あはせず、散さんぜず。乃な至一切種智しやくしちゆいも亦た是の如し。橋尸迦けししやよ、是の如にらき等の一切法しやくたい中に合あはせず、散さんぜず。是れ佛の神力じんりきの用もちは受くる所ところなき法ほふなるが故ゆゑなり。

【四】 橋尸迦けししやの言ことが如く、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの般若波羅蜜はんぱにらみ多たは、當まに何處いどこに於おいて求もとむべきやとは、橋尸迦けししやよ、色しよくの中に般若波羅蜜はんぱにらみ多たを求もとむべからず、亦た色しよくを離れて般若波羅蜜はんぱにらみ多たを求もとむべからず。受想行識じゆきやうしやくの中に求もとむべからず、亦た受想行識じゆきやうしやくを離れて求もとむべからず。何となれば、是れ般若波羅蜜はんぱにらみ多た、色受想行識しよくじゆきやうしやく是の一切法しやくたいに皆みな合あはせず、散さんぜず、無色むしよく、無形むぎやう、無對むたい、一思想いちしゆしゆ所謂しよいうの無相むさうなればなり。乃至一切種智しやくしちゆいの中に、般若波羅蜜はんぱにらみ多たを求もとむべからず。亦た一切種智しやくしちゆいを離れて般若波羅蜜はんぱにらみ多たを求もとむべからず。何となれば、是れ般若波羅蜜はんぱにらみ多た、一切種智しやくしちゆい、是の一切の法しやくたい皆みな合あはせず、散さんぜず、無色むしよく、無形むぎやう、

【四】 以下般若は一法の中にても、一法を離れても求むべからざるを説く。

無對、一相所謂の無相なり。何となれば、般若波羅蜜(多)は色に非ず、亦た色を離るるにも非ず。受想行識に非ず、亦た受  
 想行識を離るるにも非ず。乃至一切種智に非ず、亦た一切種智を離るるにも非ず。般若波羅蜜(多)は色如に非ず、亦た色如  
 を離るるにも非ず。受想行識の如に非ず、亦た受想行識の如を離るるにも非ず。般若波羅蜜(多)は色法に非ず、亦た色法  
 を離るるにも非ず。受想行識法に非ず、亦た受想行識法を離るるにも非ず。乃至一切種智如に非ず、亦た一切種智如を離  
 るるにも非ず。般若波羅蜜(多)は一切種智法に非ず、亦た一切種智法を離るるにも非ず。何となれば、橋戸迦よ、是の一切  
 法は皆所有なく、不可得なればなり。所有なく、不可得なるを以ての故に、般若波羅蜜(多)は色に非ず、亦た色を離るるにも  
 非ず。色如に非ず、亦た色如を離るるにも非ず。色法に非ず、亦た色如を離るるにも非  
 ず。乃至一切種智に非ず、亦た一切種智を離るるにも非ず。一切種智如に非ず、亦た一  
 切種智如を離るるにも非ず。一切種智法に非ず、亦た一切種智法を離るるにも非ざれば  
 なりしと。

【四】第一一問、上來已に智度  
 を明かにせり、然るを今帝釋  
 が何の處にか般若を求めんと  
 問へるは何故なりや。

問うて曰はく、佛、舍利弗、須菩提は、上來種種の因縁もて般若波羅蜜(多)の相を明かにせ  
 り。今釋提桓因は何を以ての故に、當に何處に般若を求めむべきやと問へるや。答へて曰はく、此は般  
 若の體を問はず。但般若の言說名字の讀誦すべき事を問へるなり。是の故に、舍利弗言はく、「當に  
 須菩提所説の品中に於いて求むべし」と。須菩提は、樂んで空を説き、常に善く修習するが故なり。  
 舍利弗は智慧第一なりと雖も、吾我、嫉妬の心なきを以て、又法愛を斷ずるが故に、而も當に須菩提  
 所の説品中に於いて求むべしと言ふなり。

問うて曰はく、<sup>【四】</sup>佛の處處に説き給へる般若波羅蜜「多」は、須菩提の所説を比せんと欲するに、百千萬倍にして、算數譬喩も比を爲すべからず。何を以てか、「佛所説の品中に於いて求めよ」と言はざるや。答へて曰はく、釋提桓因の意は、「佛一人を除きたてまつりて、誰か能く善く説く者ぞ」と。是を以て須菩提を推せり。

復次に、<sup>【四】</sup>佛は常に一日一夜六時に、佛眼を以て衆生を觀じ、法を聞かざらしめ給ふこと無きが故に墮落したまふ、是の故に、衆生の解すべき所、得べき所、習行すべき所等に隨つて説き、或は般若波羅蜜「多」を説くに、無常、苦、空、無我、病の如く、癰の如き等を名けて般若波羅蜜「多」と爲し、或は諸法の總相、別相を分別し、或は諸法の因縁和合して生じ、作者、受者あること無く、知者見者なしと説くを名けて、般若波羅蜜「多」と爲し、或時は法空を説き、或は畢竟空を説くを名けて般若波羅蜜「多」と爲したまへり。是を以ての故に、佛所説の品中に求めよとを示さざるなり。亦た釋提桓因は心に念じて、「何者か定んで是れ般若の定相なり」と知らず。是を以て、舍利弗言はく、「當に須菩提は常に深く空に入り、説く所、皆空に趣き、説く所の空も亦た空なり」と。是の故に、「當に須菩提所説の品中に於いて求めむべし」と言ふなり。釋提桓因は、歡喜し、須菩提を讚じて言はく、「大徳は神力甚だ大なり」と。須菩提謙して言はく、「是れ我が力に非ず。是れ佛に受けたてまつる所の神力な

【三】 第一二問、佛説中に求めよといはずして須菩提所説中に求めよと言へる理由如何。

【四】 佛は二六時中、佛眼を以て衆生を觀じたまふ。

りしと。釋提桓因言はく、「若し一切法は、皆な受くる所なくんば、云何が是れ佛に受けたてまつる所の神力なりと言ふや。若し受くること無き相を離るれば、如來は不可得なり。如中を離れて如來は不可得なり」と。釋提桓因は是の念を作して言はく、「一切の法は受相なく、一切の法は空にして依止する處なし。云何が當に定んで如來ありと言ふべき。若し如來なくんば、云何が神力を受くること有らん。又復た受くる所なき相を離るるも、如來は亦た不可得なり。是の如を離れしむるも如來は不可得なり」と。

問うて曰はく、無受相と如と何等の異なること有りや。答へて曰く、

諸法實相をば、亦た無受とも名け、亦た如とも名く。諸法は著すべからざ

るが故に無受と名け、諸の戲論の破壊すること能はざる〔所なる〕が故に、

名けて如と爲す。今如來は、空中に不可得なり。空を離るるも亦た不可得

なり。須菩提は然も其れ、「是の如し、是の如し」と言ふ。今須菩提は廣く其の事を説く。無受相、

如相の中には、如來は不可得なりとは、或は佛名を以て名けて如來と爲し、或は衆生の名字を以て名

けて如來と爲し、先世に來る如く、後世にも亦た是の如く去る、是を亦た如來と名け、亦た如去と名

く。十四置難の中に説くが如し。「死して後、去るが如きは、有と爲し、無と爲し、亦た有、亦た無、

亦た非有、非無なり」と。佛を如來と名くるは、定光佛等の六波羅蜜〔多〕を行じて、佛道を成ずる

【四五】 第一三問、無受相と如との相異如何。  
【四六】 或は佛を如來と名け、或は衆生を如來と名く。

ことを得たまふが如し。釋迦文佛も亦た是の如く來りたまふが故に如來と名けたてまつり、定光佛等の如きは、智を以て諸法の如を知り、如中より來りたまふが故に、如來と名けたてまつり、釋迦文佛も亦た是の如く來りたまふが故に、如來と名けたてまつる。此の二種の如來の中、此の間に説くは是れ佛の如來なり。因りて佛の如來を解するに所有なし。一切の衆生、一切の法は、皆是の如く、所有なく、受くること無し。及び如來の義は、先に説くが如し。今當に更に略して説くべし。無受相、如來相は、皆空にして所有なく、無受相、如相は定相なきが故に如來なし。有る人の言はく、「諸の實相に二種の説あり。一には諸法の相は畢竟空にして是れ實なり」と。二には有る人の言はく、「畢竟空は示すべく説くべきが故に實に非ず。涅槃の相の如きは示すべからず、説くべからず、是を名けて實と爲す」と。此の二事の畢竟空中に於て如來は不可得なり。畢竟空の實相を破する中にも、如來は亦不可得なり。畢竟空は即ち是れ無受相なり。畢竟空の實相を破すれば即ち是れ如なり。此より已下、廣く二義を説く。五衆乃至一切種智に於いても、如來は不可得なり。如來は不可得なるが故に、云何が當に如來の神力あるべき。如來の不可得なることは上に説くが如し。是の五衆は如來に非ず。五衆を離るるも如來に非ず、五衆は如來の中に非ず、如來には亦五衆あらず。五衆は生滅、無常、苦、空、無我の相なるが故に、是れ如來に非ず。若し是れ如來ならば、如來も亦た應に是れ生滅すべし。

復次に、五衆は是れ五法にして、如來は是れ一なり。云何が五法をひと作さん。若し五は即ち是れ一ならば、一も亦た應に即ち是れ五なるべし。若し爾らば、世間法と出世間法と一切亂壞せん。是の如き種種の因縁の故に、五衆は如來に非ず。若し五衆を離れて如來あらば、如來は應に見ると無く、聞くこと無く、知ること無く、識ること無く、亦た苦樂を覺せざるべし。何となれば、知覺等は是れ五衆の法なればなり。

問うて曰く、(四七) 如來の眼・耳・智慧等を用つて、能く知見したまふに、何の咎ありや。答へて曰はく、能く見るは是れ眼にして、是れ如來に非ず。若し如來に見相あらずんば、眼を用つて能く見る者ならんや。未だ色を取らざる時、云何が是の眼を用ふることを知らん、亦た耳を用つて見るべけんや。

問うて曰く、(四八) 如來は智慧を用ひ、分別して能く知りたまふ。眼は是れ能く見るも、餘は見ると能はず。是を以ての故に、眼を用つて餘想を取らず。答へて曰く、知も亦眼の如く、知を過ぎて、是の五衆は是れ如來に非ず。若し知を用つて眼を知らば、復た何事も用つてか能く此の知を知らんや。

問うて曰く、(四九) 如來は知を用つて、眼を知り、眼を以て色を知りたまふ。若し如來を知らんと欲せ

【四七】 第一四問、如來の眼耳智慧等を用つて知見し給ふに何の咎ありや。

【四八】 第一五問、眼を用ひて見ることを得るも、餘想は取ること能はざるにあらずや。

【四九】 第一六問、若し如來を以て如來を知ると言はば無窮の過に墮するにあらずや。

ば、何を以てか知ることを得ん。若し如來を以て如來を知らば、是れ則ち無窮ならん。答へて曰く、知相は知中に住す。如來、若し知りたまはば、即ち是れ知相なり。若し是れ知相ならば、則ち是れ無常なり。若し無常ならば、則ち後世なし。

復次に、五衆を離れて如來あらば、如來は應に是れ常なるべく、虚空相の如く、變異すべからず。苦を受け樂を受くるも、亦應に縛なく、解なかるべし。是の如き等の過罪ありて異を破するが故に、五衆は如來に非ず、如來は五衆に非ず、亦た如來に五衆あるにも非ず。

問うて曰はく、吾應に五衆の因縁を以ての故に如來あるべし。若し五衆なければ則ち如來なけん。答へて曰はく、若し五衆の因縁を以て如來あらば、則ち如來は自性なし。若し自性なくんば、何ぞ他性に從つて五衆の中に於いて生ずることを得ん。五種に如來を求むるも不可得なり。是の故に如來なし。但戲論を以ての故に如來ありと説く。戲論を斷ずるを以ての故に如來なし。如來は是れ不生不滅の法なり。云何が當に戲論を以て如來を求むべき。若し戲論を以て如來を求めば、則ち如來を見ず。若し當に都てて如來なくんば、則ち邪見に墮せん。是の故に若し有無を以て戲論して、如來を求めば、是れ則ち然らず。如來の相は即ち是れ一切法相、一切法相は即ち是れ如來、如來の相は即ち是れ畢竟空の相、畢竟空の相は即ち是れ一切法相なり。

【五】 第一七問、五蘊の因縁の故に如來あるべく、若し五蘊なければ、則ち如來なきにあらずや。

問うて曰はく、(三三)此の中に何を以てか但二事を説き、五衆如中に如來如なく、如來如中に五衆如なしと言ふや。答へて曰はく、此は是れ略して説く。二を説けば則ち五事はすべて攝す。復次に、二十種の我見は、一切の凡夫の人に一時に起ること能はずと雖も、今是の會中には此の二事に惑ふ。是を以ての故に但二事を説く。五衆の如相、乃至一切種智の法相も、亦た是の如し。五衆如は、即ち是れ法相なり。

問うて曰く、(三三)若し如、即ち是れ法相ならば、何を以てか重ねて説くや。答へて曰はく、行者は既に五衆の如に到りて心に驚く、「法相は何を以てか、畢竟空にして有る所なきや」と。是の故に、五衆の法相の自ら爾ることを説く。人の火に觸れて手を焼きて、則ち慢心なきが如きは、其の火相の自から爾るを以ての故なり。若し人、火を執りて之を焼けば、則ち忿然として怒らん。其の火を執りて焼くを以ての故なり。如來は五衆如の中、五衆の法相の中に合せず、散せずとは、五衆の如を除きては、如來の如なければ、則ち是れ一時にして、所謂無相なり。何となれば、一法は合すること無く、散すること無ければなり。二法の故に合することあり、散すること有り。五衆の法相を離るるも亦た合散なし。何となれば、五衆の法相を離れて、如來は不可得なればなり。如來の如・法相と、五衆の如・法相とは、無二無別なるが故に、五衆の如を離れて、五衆の法相は

【五一】 第一八問、五衆如中に如來如なく、如來如中に五衆如なしと言ふ理由如何。

【五二】 第一九問、若し如は即ち是れ法相ならば、重ねて説くは何故なるか。

亦た合せず、散せずと言ふ。乃至一切種智も、亦た是の如し。能く是の如く、諸法の如と、法相と、合せず、散せざることを知るが故に、是の神力あり。當に何處に於いてか求むべきとは、上來は佛の神力に因りて般若の相を説き、今は直に云何が般若を求めんと説く。論者は説けり、「五衆は虚誑無常にして本は無、今は有、已に有にして還つて無なること、幻の如く、夢の如し。般若波羅蜜多」は是れ諸佛の實智慧なり。云何が五衆の中に於て求めん」と。譬へば、重寶を求むるには必ず大海の寶山中に於て求め、溝瀆臭穢の處に在りて求むべからず。五衆を離るれば則ち無生、無滅、無作、無起にして法相あること無し。是の中に云何が求むべけんや。復次に、五衆と般若波羅蜜多とは一ならず、異ならず、合せず、散せず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なり。

問うて曰はく、般若波羅蜜多は是れ智慧、心數法なるが故に、應に無色、無形、無對なるべし。五衆中の色衆は云何が當に無形無對なりと説くや。答へて曰はく、聖人は慧眼を以て諸法を觀するに、平等にして皆な空、一相、所謂無相なり。是を以ての故に、色衆は無形無對なり。

復次に、凡夫の人の見る所の色の實に非ざること、種種に先に破するが如し。復次に、因縁あり、般若波羅蜜多は即ち是れ凡夫の人の見る所の五衆の如くならず。凡夫の人の見る所の五衆を破する

【五】 重寶に必らず大海の中に求むべく、溝瀆臭穢の中に求むべからず。

【六】 第二の問、五衆中の色衆を無形無對なりと説く理由如何。

が故に、即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。故に不離と言ふ。乃至一切種智も亦た是の如し。如相、法相は先に説くが如し。

釋

【五】 釋提桓因 須菩提に語るらく、「是の 摩訶波羅蜜(多)は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。無量波羅蜜(多)は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。諸の須陀洹、須陀洹果は是の般若波羅蜜(多)中より學成す。乃至諸の阿羅漢、阿羅漢果、諸の辟支佛、辟支佛道、諸の菩薩摩訶薩は、皆是の般若波羅蜜(多)中より學成す。衆生を成就し佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得るも、皆是より學成す」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「是の如し、是の如し。橋尸迦よ、是の摩訶波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。無量波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。諸の須陀洹、須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道を學成す。諸の菩薩摩訶薩は、是の般若波羅蜜(多)の中より學成す。衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得。已に得、今得、當に得べし。橋尸迦よ、色は大なるが故に般若波羅蜜(多)も亦た大なり。何となれば、是の色は實際不可得、後際不可得、中際不可得なればなり。受想行識は大なるが故に般若波羅蜜(多)も亦た大なり。何となれば、受想行識は實際不可得、後際不可得、中際不可得なればなり。乃至一切種智も亦た是の如し。

是の因縁を以ての故に、橋尸迦よ、是の摩訶波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。橋尸迦よ、是の摩訶波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)なり。橋尸迦よ、色は無量なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり。何となれば色の量は不可得なればなり。橋尸迦よ、譬へば、虚空の量の不可得なるが如し。色も亦た是の如く、量は不可得なり。虚空

【五】 帝釋般若の大無量無邊なるを讚するに對し、須菩提これを廣説す。  
【五】 Mahāparāmirā ば譯して大度彼岸といふ。

は無量なるが故に色無量なり、色は無量なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり、受想行識乃至一切種智は無量なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり。何となれば一切種智は量不可得なればなり。譬へて虚空の量不可得なるが如し。一切種智も亦是の如く量ば不可得なり。虚空は無量なるが故に一切種智は無量なり、一切種智は無量なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり。是の因縁を以ての故に、是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は無量なり。

橋戸迦よ、色は無量なるが故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は無量なり。何となれば、橋戸迦よ、是の色は前際不可得、後際不可得、中際不可得の故に。受想行識無量なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり。何となれば、受想行識は前際、後際、中際皆な不可得なればなり。乃至一切種智無量なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり。何となれば、一切種智は前、後、中際不可得なればなり。是の因縁を以ての故に、橋戸迦よ、是の般若波羅蜜(多)は無量なり、色は無量なり、乃至一切種智は無量なり。

復次に、橋戸迦よ、縁は無量の故に、般若波羅蜜(多)は無量なり。「須菩提よ、云何が縁は無量の故に、般若波羅蜜(多)は無量なるや」と。須菩提は言く、「一切無邊の法を縁するが故に般若波羅蜜(多)は無量なり」と。云何が一切無邊の法を縁するが故に般若波羅蜜(多)は無量なるや」と。須菩提は言く、「無邊の法性を縁するが故に般若波羅蜜(多)は無量なり」と。

復次に、橋戸迦よ、無邊の如を縁するが故に般若波羅蜜(多)は無量なり」と。釋提桓因言はく、「云何が無邊の如を縁するが故に般若波羅蜜(多)は無量なるや」と。須菩提は言く、「如は無邊なるが故に縁も亦無量なり。縁は無量なるが故に如も亦た無量なり。是の因縁を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は無量なり」と。

復次に、橋戸迦よ、衆生無邊なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なり」と。釋提桓因、須菩提に問ふ、「云何が衆生無邊なるが故に般若波羅蜜(多)は無量なるや」と。須菩提は言はく、「波が意に於いて云何、何等の法を衆生と名くるや」と。釋提桓因

の言はく、「法あること無きを衆生と名く。假名の故に衆生と爲す、是の名字は、本法あること無く、亦た趣く所なし、強

ひて名を作ることを爲す。橋戸迦よ、汝が意に於いて云何。是の般若波羅蜜(多)の中に衆生は實ありと説くや不や」と。釋

提桓因の言はく、「無なり」と。「橋戸迦よ、若し般若波羅蜜(多)の中に實を説かずんば、實に衆生の無邊なるも亦た不可得

ならん。橋戸迦よ、汝が意に於て云何。佛の恆河沙の劫壽の衆生と衆生の名字を説くとも、頗る衆生法あり、生あり滅ありや

不や」と。釋提桓因の言はく、「不なり。何となれば、衆生は本より已來常に清淨なればなり」と。是の因縁を以ての故に、

橋戸迦よ、衆生は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無邊なり」と。

論

問うて曰はく、(毛) 釋提桓因は是れ須陀洹の人なり。云何が能く深

般若波羅蜜(多)を問ふや。答へて曰はく、須菩提の如きは、是れ阿羅漢を

具足し、菩薩を利益し、衆生を憐愍するを以ての故に、菩薩の所行の事を

問ふ。釋提桓因は、聲聞人なりと雖も、是れ諸天の主にして、利なる智慧

あり、衆生を憐愍するが故に、般若波羅蜜(多)を問ふ事も亦た是の如し。

復次に、有る人の言はく、「三千大千世界の中に百億の釋提桓因あり」と。

須陀洹を得と説くは、今の釋提桓因は是れ大菩薩にして、衆生を憐愍するが

故に、三種に般若波羅蜜(多)を讚す。所謂 摩訶波羅蜜(多)、無量波羅蜜(多)、無邊波羅蜜(多)は、

是れ般若波羅蜜(多)なり。是の般若波羅蜜(多)の中に、諸の聖道を學成するが故に、須菩提は然も釋

【五七】 第二二問、須陀洹の人なる帝釋が、深般若を問へる理由如何。  
【五八】 中阿含の帝釋と、般若經の帝釋とは同名異人なり。  
【五九】 三種に般若を讚す。(一)摩訶波羅蜜多、(二)無量波羅蜜多、(三)無邊波羅蜜多。

提桓因を讀じて、廣く其の讀言を解せり。

五衆大なるを以ての故に、般若波羅蜜〔多〕は大なり。(三〇) 五衆大なりとは、所謂る三際には不可得なる

が故に、亦た無量無邊なるを以ての故に大と言ふ。是の無量無邊の五衆を破し、一切衆生を將ゐて、

無餘涅槃の中に入るが故に、般若波羅蜜〔多〕は大なりと言ふ。乃至一切種智も亦た是の如し。

無量も亦た爾なり。但虚空を以て、譬喩とするを異なりと爲す。有る法

は大なりと雖も、必ずしも無量ならず。是の故に空を以て喩と爲すことを

得ず。須彌山の如きは、諸山の中に於いて大なりと雖も、而も量あり、所

謂八萬四千由旬なり。

(二) 無邊なりとは、五衆は、廣大無量なるを以ての故に、無邊なりと言

ふ。亦た五衆を以て、有邊なりとすれば、則ち始あり。始あれば則ち終あ

り。即ち是れ無因無縁にして、斷滅等の種種の過に墮するが故なり。復た

次に、五衆は三世の中に不可得なるが故に無邊と言ふ。

(三) 縁は無邊なりとは、所謂る一切法の 四縁なり。因縁生の一切有爲法と、次第縁の過去現在の

心心數法なると、縁縁と、増上縁となり。一切法は是れ四種の縁なり。一切處一切時に皆有るが故に、

縁は無邊なりと説く。縁は無邊なるが故に般若波羅蜜〔多〕は無邊なり。復次に、縁は無邊なりとは、

- 〔六〇〕 五衆大なりの義解。
- 〔六一〕 無邊なりの義解。
- 〔六二〕 縁は無邊なりの義解。
- 〔六三〕 四縁の名義。
- (一) 因縁 (Hetu-pratyaya) (Ettuppara taya)
- (二) 次第縁 (Samantatarapa-taya)
- (三) 縁縁 (Anubandhapraya)
- (四) 増上縁 (Adhipatyaya)

四縁えんの法ほふは、虚誑こわう無實むじつ、畢竟ひつぎやう空くうなるが故ゆゑに、無邊むへんなり。復またた次に、如に法性ほつしやうじつさい實際じつさいは無邊むへんなり。復またた次に、如に法性ほつしやうじつさい實際じつさいは無邊むへんなり。五に、般若はんには波羅蜜はらみつた〔多た〕は無邊むへんなり。如に法性ほつしやうじつさい實際じつさいは、是こゝれ自然じねん無爲むゐの相さうなるが故ゆゑに、無量むりやう無邊むへんなり。五衆しゆの無邊むへんは、是こゝれ觀力くわんりきの故ゆゑに、強しひて無邊むへんと作なす。復またた次に、衆生しゆじやうは無邊むへんなりとは、衆生しゆじやうは多おほきを以もつての故ゆゑに、無量むりやう阿僧祇あそうぎ、三世さんぜ十方はうの衆生しゆじやうは、人ひとの能よく數しゆを知しること無なきが故ゆゑに、無邊むへんと言いふ。復またた次に、是こゝの中なかに説とけり、「衆生しゆじやうは空くうなるが故ゆゑに無邊むへんなりと言いふ」と。

且とらく強たかひて爲たるに名なを作なすも亦またた趣おもむく所ところなしとは、衆生しゆじやうは定法ぢやうほふありて、趣向しゆかうすべきこと無なきを以もつての故ゆゑなり。火ひの如ごときは、定さだんで趣おもむく所ところあり。而しかも衆生しゆじやうは名なのみにして、實じつに衆生しゆじやうの趣おもむくべき無なし。汝なんぢが意こころに於おいて云何いかなん。般若はんには波羅蜜はらみつた〔多た〕の中なかに頗すこぶる實じつに衆生しゆじやうありと説とくや不いななり。不いななり、大德だいとくよ。若もし衆生しゆじやうは實じつに無むならば、

云何いかなんが邊へんあらん。譬たとへば諸佛しよぶつの如ごときは、是こゝれ一切いっさい實語じつごの人ひとの中なかの第一だいいちにして、無量むりやう恆河沙劫ごうがしゃくの壽じゆに於おいて、衆生しゆじやうの名字みやうじを説たまひ給たまふに、是こゝの衆生しゆじやうの法ほふは、以もつて説とかせざるが故ゆゑに、生しやうあり、滅めつあり。何いかに況いんや。餘人よじんの顛倒てんだう虚誑こわうにして少時せうじに説とくをや。我心がしんを生しやうずるが故ゆゑに、當まさに衆生しゆじやうあるべし。是こゝの衆生しゆじやうは、以もつて般若はんには波羅蜜はらみつた〔多た〕の中なかに入いらざるが故ゆゑに無むと言いふ。本もとより已來このかた、常つねに清淨しやうじやうにして所有しやうなく、有無うむ等とうの戲論けろんを滅めつするが故ゆゑなり。是こゝの衆生しゆじやうは、無邊むへんなりと説とくを以もつての故ゆゑに、般若はんには波羅蜜はらみつた〔多た〕は無邊むへんなり。問とうて曰いはく、無邊むへんの中なかには何なにを以もつて廣ひろく説とき、而しかも大だい及び無量むりやうは何なにを以もつて略りやくして説とくや。答こたへ

【六】第二二問、無邊は廣説し、大及び無量は略説する理由如何。

て曰はく、衆生の因縁を以ての故なり。一切の凡夫は、諸の煩惱を起し、五衆の中に於いて、諸の邪行を作して、破し難きが故に、是を以て廣く説く。若し衆生の相を破すれば、餘の一切は破し易し。

# 巻の第五十六

## 二 願視品第三十を釋す。

釋

爾の時、<sup>(一)</sup> 諸天王及び諸天、諸の梵王及び諸の梵天、<sup>(二)</sup> 伊餘那天及び神仙、並に諸天女同時に三反稱歎すらく、「快い哉、慧命須菩提の所説の法は、皆是れ佛出世間の因縁にして、恩力を以て是の教を演布す。若し菩薩摩訶薩ありて、

是の般若波羅蜜(多)を行じて遠離せざれば、我輩は是の人を視ること、佛の如くす。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中には、法の所謂、色受想行識乃至一切種智を得べきもの無しと雖も、而も三乗の教あり。所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり」と。

爾の時、佛、諸の天子に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸の天子よ、汝が言ふ所の如く、是の般若波羅蜜(多)の中には法の得べき無しと雖も、而も三乗の教あり、所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり。若し菩薩摩訶薩ありて是の般若波羅蜜(多)を行じて遠離せざる者は、是の人を視ること當に佛の如くすべし。所得なきを以ての故なり。何となれば是の般若波羅蜜(多)の中に廣く三乗の教を説く。所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり。檀波羅蜜(多)の中に佛は不可得なり。檀波羅蜜(多)を離れて佛は亦た不可得なり。乃至般若波羅蜜(多)を離れて佛は亦た不可得なり。内空乃至無法有法空四念處乃至十八不共法、一切種智も亦是の如し」と。佛、諸の天子に語り給はく、「菩薩摩訶

【一】 佛は、普く在會の大衆、諸天を願視し觀察し給ふが故に、願視品と名く。又諸天三たび稱歎するが故に、三數品ともいふ。  
【二】 諸天、須菩提所説の般若を讚じ、行人を尊重すべきを説く。  
【三】 「Iśāna」は譯して自在主といふ。大自在天主、並に其の眷屬なり。

薩、若し能く是の一切諸法、所謂檀波羅蜜(多)乃至一切種智を學せば、是の事を以ての故に、當に是の菩薩摩訶薩を視るゝと佛の如くすべし。

諸の天子よ、(四)我昔、然燈佛の時に於いて、華嚴城の内、四衢道の頭に佛を見たり

まつりて法を聞き、即ち檀波羅蜜(多)行を離れざることを得、尸羅波羅蜜(多)、屬提波

羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)の行を離れず、内空乃至

無法有法空、四念處乃至八聖道分を離れず、四禪、四無量心、四無色定、一切三昧門、

一切陀羅尼門を離れず、四無所畏、佛の十方、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、及び

餘の無量の諸佛の法行を離れざるを得ず、無所得を以ての故に。是の時、然燈佛は我

當來世に、一阿僧祇劫を過ぎて、當に佛と作り、天釋迦牟尼(七)多陀阿伽度、阿羅訶、

三藐三佛陀、轉修進羅那、修伽度、路迦德、無上士、調御、丈夫、天人師、佛

世尊と號すべしと記したまへり」と。爾の時、諸の天子、佛に白して言さく、「世尊よ、

希有なり。是の般若波羅蜜(多)は能く諸の菩薩摩訶薩をして薩婆若を得せしむ。色に於

いて取らず、捨てざるが故に、受想行識に於いて取らず捨てざるが故に、乃至一切種智

に於いて取らず捨てざるが故なり。

釋して曰はく、人は歡喜の至を以て、則ち三反稱歎す。是の故に、諸天は大德須菩提の般若波

羅蜜(多)を説くを聞き、歡喜して、「快い哉、快い哉」と言へり。

【四】釋尊、然燈佛の時、記を  
受け給ふ。

【五】 Dipankara、又別に錠光と  
も譯するなり。

【六】 Sakyamuni は譯して能仁  
寂默といふ。

【七】 Tathagata、は譯して如來  
といふ。

【八】 Avahan は譯して應供とい  
ふ。

【九】 Samyaksambuddha は譯  
して正徧智といふ。

【一〇】 Vidyakaraṇa は譯して明  
行足といふ。

【一一】 Ananta は譯して善逝とい  
ふ。

【一二】 Lokanātha は譯して世間解  
といふ。

天王とは、四天處、四天王、三十三天王、釋提桓因、乃至諸の梵天王なり。梵天已上は更に王あること無し。諸天は是れ欲界の天、諸の梵は是れ色界の天、伊睺那は是れ大自在天王並に其の眷屬なり。神仙とは、二種あり。(一)言のひてん、或は天、或は人なり。天女とは、是れ天帝釋の夫人、舍脂等の諸の天女なり。須菩提の深般若波羅蜜(多)を説くを讚歎する所以は、其の佛の神力を承くるを知るが故なり。若し能く是の般若波羅蜜(多)を行せば、我等は當に是の人を視ること佛の如くすべしと。何となれば法を尊重するが故なり。法とは所謂深般若波羅蜜(多)なり。深法とは、一切法は畢竟空なりと雖も、而も三乗の分別あり。何となれば、諸法は若し畢竟空ならば、更に三乗の功德を修集すべからず。則ち斷滅の中に墮す。若し三乗の功德を修すれば、則ち是れ差降を分別し、是れ畢竟空なるべからず。是の般若波羅蜜(多)は、畢竟空なりと雖も、而も斷滅に墮せず。分別して三乗ありと雖も、亦た著心を生ぜず。二事の中に於いて、定相を取らず、是の事は甚深微妙なり。故に諸天は大に歡喜し、歎じて快哉と言へり。

佛は然も其の讚に更に甚深の因縁を説き給はく、「六波羅蜜(多)より乃至一切種智の中に、佛に不可得なり。此を離れても、佛は亦た不可得なり。諸法は和合する因縁の故に佛あるも、自性あること無し。若し菩薩にして、能く是の如く行する者は、當に知るべし、是の菩薩は即ち是れ佛なり」と。即ち是れ佛なりとは、是の世界の中の語に、「如し太子は、未だ正位ならずと雖も、必ず當に王たるべし」

【二三】 二種の神仙。

と。此の中に佛は自ら本事を引きて以て證と爲したまへり。此の菩薩は、己に無生忍を得て菩薩の位に入り、十方の諸佛を見たてまつる。諸天は、佛の廣く明に己に讃じたまふ所の義解を聞き、心轉た深重にして復た讚歎す。一切法の過罪を見るを以ての故に取らず、利益あるが故に捨てず。又一切法は畢竟空、不生不滅なるを以ての故に、取らず捨てざるなり。



爾の時に、佛四衆の和合の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及諸の菩薩摩訶薩、並に四天王、乃至阿迦尼吒の諸天の皆會に坐せるを觀、普れく觀じ已りて佛釋提桓因に告げたまはく、「橋戸迦よ、若くは菩薩摩訶薩、若くは比丘、若くは比丘尼、若くは優婆塞、若くは優婆夷、若くは諸の天子、若くは諸の天女は、是の般若波羅蜜(多)に於て、若くは聽き受持し親近し讚誦し、他の爲に説き、正憶念し、薩婆若の心を離れずんば、諸の天子よ、是の人ば魔、若くは魔天も、其の便を得ること能はず。何となれば是の善男子、善女人は諦かに色空を了知す、空は空の便を得ること能はず、無相は無相の便を得ること能はず、無作は無作の便を得ること能はず、諦かに受想行識の空を了知す、空は空の便を得ること能はず、乃至無作も無作の便を得ること能はず、乃至諦かに一切種智の空を了知す、空は空の便を得ること能はず、乃至無作は無作の便を得ること能はず。」

【四】佛、帝釋諸天に般若の功德を説き給ふ。

何となれば、是の諸法の自性は不可得にして、事として便を得べきこと無し。誰か惱を受くる者あらん。

復次に、橋戸迦よ、是の善男子善女人は、若くは人非人も其の便を得ること能はず。何となれば、是の善男子善女人は、一切衆生の中に善く慈心、悲、喜、捨の心を修す、無所得なるを以ての故なり。橋戸迦よ、是の善男子善女人は、終に横死

せず。何となれば、是の善男子善女人は、檀波羅蜜(多)を行じ、一切衆生に於いて等心に供給すればなり。復次に、橋戸迦よ、三千大千世界の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵天、光音天、遍淨天、廣果天、是の諸天の中に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すも有る者も、未だ是の般若波羅蜜(多)をば聞かず、未だ受持し親近せざらん、是の諸の天子は、今應に聞いて受持し親近し、讀誦し正憶念して、薩婆若心を離れざるべし。

復次に、橋戸迦よ、諸の善男子善女人は是の般若波羅蜜(多)を聞いて受持し親近し、讀誦し正憶念して薩婆若の心を離れず。是の善男子善女人は、若くは空舍に在り、若くは曠野、若くは人の住處に在りて終に恐怖せず。何となれば、是の善男子善女人は、内空を明む、無所得なるを以ての故なり。外空乃至無法有法空を明む、無所得なるを以ての故なり。

問うて曰はく、(二五) 此の中に佛は四部の衆を觀じ已りて、何を以てか釋提桓因に告げ給へるや。答へて曰はく、餘品の中には、多く般若波羅蜜(多)の體を説く。今は般若の功德を讚せんと言ふが故に釋提桓因に命じ給へり。譬へば、先づ好寶を以て人に示し、然る後に寶の能くする所を讚するが如し。復次に、

善ねく觀するは、會中の衆生をして、各佛の願念を知りて、則ち自ら輕んぜざらしめんと欲す。自ら輕んぜざるが故に、法を聽くに堪任す。是を以て善ねく觀す。譬へば、王の群下を顧眄すれば、群下は則ち欣然として自ら慶ぶが如し。功德を説くが故に、應に白衣を以て證すべし。白衣の中には釋提桓因を大と爲す。般若を説くことは、出家の人を以て證と爲す。出家の人の中には、是れ舍利弗、須菩提等を大と爲す。

問うて曰はく、(二六)先に釋は是れ字、提桓因は、是れ天主なりと言へり。今は佛は何を以てか、釋と言はずして乃ち命じて、憍尸迦と言ひしや。答へて曰く、(二七)昔、摩伽陀國の中に婆羅門あり (二八)摩伽と名く。姓は憍尸迦、福德にして大智慧あり。知友三十三人、共に福德を修し、命終りて皆須彌山の頂、第二の天上に生れ、摩伽婆羅門は天主と爲り、三十二人は輔臣と爲れり。此三十三人を以ての故に、名けて三十三天と爲し、其の本性を喚ぶが故に憍尸迦と言ひ、或は天主と言ひ、或は千眼等と言ひ、大人之を喚ぶが故に其の姓を稱す。(二九)此の中に説く所の般若波羅蜜(多)は、是れ十方の諸佛の説き給へる所の語言名字を經卷に書寫し、實相の智慧を宣傳し顯示す。何となれば、般若波羅蜜(多)には、諸觀の語言の相なくして、而も語言の經卷に因りて、能く此の般若波羅蜜(多)を得、是の故に名字經卷を以て、名けて般若波羅蜜(多)と爲す。此の中に略して佛意を説く。若し能く聞いて般若を受持せば、等しく當に種種の功德を得べし。復た當に廣く説くべし。衆生を度せんと欲し、佛道を得るが爲の故に、供養して般若波羅蜜(多)を受學す。是の人は魔、若くは魔天も、便を得ること能す。

問うて曰はく、(三〇)何者か是れ魔にして、何故に菩薩を惱まし、云何が便を得るや。答へて曰はく、

- 【二六】 第二問、佛が釋提桓因といはずして、憍尸迦と言ひし理由如何。
- 【二七】 三十三天往昔の因縁。
- 【二八】 摩伽( Magadha )
- 【二九】 此の般若波羅蜜多は、十方の諸佛の所説の言語名字を經卷に書寫せるものなり。
- 【三〇】 第三問、何者をか魔といひ、何故に菩薩を惱まし、云何が便を得るか。

魔とは、自在天主に名く。福徳の因縁を以て、彼に生ずと雖も、而も諸の邪見を懐けり。欲界の衆生は、是れ己が人民なるを以て、復た死生すと雖も、展轉して我が界を離れず。若し復た上の色、無色界に生ずるも、還り來りて我に屬す。若し外道の五通を得ること有るも、亦た未だ我が界を出でず、皆な以て憂と爲さず。若し佛及び菩薩の世に出づる者は、我が民を化度して、生死の根を抜き、無餘涅槃に入りて、永く復た還らず。我が境界を空しうすと。(三三) 是の故に、恨を起して讎嫉す。又欲界の人は見るに、皆佛に往趣し、來り歸らず、已に供養を失するが故に、心に嫉妬を生ず。是を以て佛は菩薩を以て名けて怨家と爲す。是の菩薩は、法位に入りて法性生身を得。魔は惡を起すと雖も、壞敗すること能はず。若し未だ阿鞞跋致地を得ざれば、魔は則ち種種に破壞す。若し菩薩、一心に身命を惜まらず、方便ありて佛道を求むれば、十方の諸佛及び諸の大菩薩は皆共に護持す。是の因縁を以ての故に能く佛道を成す。若し菩薩と爲りて而も懈怠あり。世樂に負著して、專心に佛道を求動すること能はざれば、是れ則ち自ら欺き、亦た十方の諸佛及び諸の菩薩を欺くなり。何となれば、自ら言はく、「我は一切衆生の爲の故に、佛道を求む」と。而も雜行を行じ、菩薩の法を壞す。是の罪を以ての故に、諸佛、菩薩の守護せざる所にして、魔は其の便を得。何となれば、一切の聖人は、已に正位に入り、一心に道を行じて、深く涅槃を樂しみたまひ、魔は邪位に入りて、邪道を愛著し、邪相違すればなり。是の故に正行を憎嫉し、狂愚にし

【三】 魔は佛、菩薩を以て怨家と爲す。

て自ら高く、佛を沙門瞿曇と喚び、佛、其の實の名を稱して弊魔と爲し、相違するを以ての故に名けて怨家と爲す。經に説くが如くんば、**三** 魔に四種あり。一には煩惱魔、二には五衆魔、三には死魔、四には自在天子魔なり。此の中に般若の力を以ての故に、四魔は便を得ること能はず。諸法實相を得て、煩惱魔を壞すれば、天魔も亦た其の便を得ること能はず。無餘涅槃に入るが故に、則ち五衆魔及び死魔を壞す。云何が便を得ることを爲さん。魔及び魔人は來りて菩薩を恐怖す。經中に説くが如くんば、魔は龍身の種種の異形畏るべきの像と作り、夜來りて行者を恐怖し、或は上妙の五欲を現じて菩薩を壞亂し、或は世間の人心を轉じて、大供養を作さしむ。行者は供養に貪著するが故に、則ち道德を失す。或は人心を轉じて菩薩を輕惱せしめ、或は罵り、或は打ち、或は傷け、或は害するに、行者は苦に遭うて、或は瞋患憂愁を生ず。是の如き等の魔は、前人の意の趣向する所に隨ひ、因つて之を壞す。是を便を得と名く。魔品の中に廣く説くが如し。

問うて曰はく、**三** 魔の力は甚だ大なり。肉身の菩薩は道力尙ほ少し、云何が便を得ざるや。答へて曰はく、上に説くが如く、諸佛、菩薩の爲に護らるるが故なり。此の中に、佛自ら因縁を説きたまへり。是の人は善く諸法の空を修し、亦た空にも著せず。空に著せざる者に、云何が便を得べき。譬へば、瘡なげれば則ち毒を受けざるが如く、無相、無作も亦た是の如し。復次に、一切法は實觀すれ

【三】 四種の魔。一煩惱魔、五衆(又は陰)魔、死魔、自在天子魔一是れなり。

【三】 第四問、魔の力は甚だ大なるに、肉身の菩薩は道力尙ほ少し云何が便を得ざるや。

ば、皆是れ空、無相、無作の相なり。皆な是れ空、無相、無作の相なるが故に。則ち便を受くる者なし。是の故に空は空の便を得べからず、無相は無相の便を得べからず、無作は無作の便を得べからず、一相なるを以ての故なり。火の如きは火を滅すること能はず、水を得れば則ち滅す、異相なるを以ての故なり。

問うて曰はく、(四) 菩薩は三解脱門に住すれば、則ち是れ便を受けん。處と一切法と相違するが故に、空と有と相違し、無相と有相と相違し、無作と有作と相違せん。答へて曰はく、此の經中に、佛は自ら三解脱門を説きたまふに、自性あること無し。又先の論議の中に、空、無相、無作を説く中にも亦た著せず。是の故に三解脱門に住すと雖も、魔及び魔民は、其の便を得ず。

問うて曰はく、(五) 餘處には皆菩薩摩訶薩と言ふ。今何を以てか、善男子善女人と言ふや。答へて曰く、先には實相の智慧の、受け難きを能く受くるを以ての故に、則ち是の菩薩摩訶薩を説き、今は供養、受持、讀誦等の雜説を説くが故に、善男子善女人を攝得す。復次に、經中に説く、(六) 女人に五礙あり、釋提桓因、梵王、魔王、轉輪聖王、佛と作ることを得ず」と。是の五礙の〔爲に〕、作佛をする得ずと聞いて、女人は心退き發意すること能はず。或は説法する者ある

【四】 第五問、菩薩は三解脱門——空、無相、無作——に住するが故に、便を受くべきにあらずや。

【五】 第六問、餘處には菩薩摩訶薩といひ、今善男子善女人といふは何故なるか。

【六】 女人に五礙あり、帝釋、梵王、魔王、轉輪聖王、佛と作ることを得ず。

も、女人の爲に佛道を説かず。是の故に、佛は此の間に説きたまはく、「善男子、善女人よ、女人は作佛を得べし、女身を轉せざるに非ざるなり」と。五礙は一身の事を説く。善男子善女人の義は、先に已に廣く説けり。人、便を得ずとは、人とは若くは賊、若くは官、若くは怨等に名く。菩薩を惱亂せんと欲して、其の便を求索するなり。

問うて曰はく、「三先に魔の便を得ざる因縁を説くに、何を以てか但空を説き、今は人の便を得ざるを説くに、但四無量心を説くや。答へて曰はく、有る人の言はく、「先には魔若くは魔民を説くは、怨大なるが故に、法も亦大なり、故に空を説く。〔今は〕怨小なるが故に法も亦小なり、故に四無量心を説く」と。有る人の言はく、「四無量心は、是れ菩薩の常に行じて、爲に諸の功德を集むるが故に、後に般若波羅蜜〔多〕の空相を以て、邪見を除かしめ、衆生に著せず。亦た法にも著せず、是の二法は前後に在ること無し。復次に、上には魔の恐怖の事を作すこと甚だ多く、本形を現さず、或は雷震を現じ、或は風雨を作し、或は病痛等を作す。是の故に諸法の空を説く。今は人の來りて、惡口し、罵詈し、刀杖もて打斫するが故に、四無量心を用ふ。

横死せずとは、三六所謂、罪なくして而も死するなり。或は壽命未だ盡きざるに、錯まりて薬を投ずるが故に、或は薬法に順せず、或は看病の人なく、或は飢渴寒熱等もて天命する、是を横死と名づ

【三】第七問、魔の便を得ざる理由を説くに、但空を説じ、人の便を得ざるを説くに、四無量心を談ずるは、何故なるか。

【二】横死の因縁。

く。(五)菩薩は初發意より來た、一切衆生の中に於いて、常に檀波羅蜜(多)を行じ、病に應じて藥を與へ、病の須ふる所に隨ふ。孤窮を極濟するに、其の乞ふ所に隨つて、之を給與し、一切衆生の中に於いて、悉く皆平等に好心もて供養し、亦た是の般若波羅蜜(多)を行じ、是の功德を以ての故に横死せず。是の中に略して三の功德を説き已れり。三千大千世界の中の諸天の發心して、未だ般若波羅蜜(多)を聞かざる者には、先に、「善男子善女人よ、應に聞いて受持し、乃至、正憶念すべし」と説き、今は因縁を説く。諸天の大功德あるすらも猶は尙は供養す。何に況んや、人に於いてをや。一切の人は應に般若を聽くべしと雖も、能く無上道心を發する者は、最も應に深心に聽くべし。何となれば、(三)般若は是れ佛道の本なればなり。

問うて曰はく、(三)此の天は發心するに、何を以てか般若を聞かざるや。

答へて言はく、此の人は、前世に人中に發意して、今天上に生じ、五欲、心を覆ふが故に聞かず。復次に、諸天は無上道心を發すと雖も、五情の利、五欲の妙、染著深きが故に、東を視て西を忘れ、般若を求むること能はず。色界の諸天は、先づ法を聞いて發心すと雖も、禪定に味著すること深きを以ての故に、般若を求むること能はず。是の故に、聞かざる者は、應に聞いて受持すべしと説く。復次に、先には魔及び魔天の、其の便を得ること能はざることを説く。是れ内の因縁にして、所謂、空三昧、及び四無量心なり。今は更に便を得ざることを説く。是れ外の因縁な

【二】菩薩の横死せざる理由。

【三】般若は佛道の本なり。

【三】第八問、此の天は發心して、而も般若を聞かざる理由如何。

り。所謂、佛、諸天に告げたまはく、「汝等、般若を供養し受持せよ。是の善男子、善女人も、亦た是の般若を受持し供養す。事を同じうするが故に、若し魔來りて汝を破せば應に守護すべし」と。復

次に、般若を受持する者は、若くは空舎に在りて住し、若くは曠野に在り、若くは人間に在りて住す。空舎の中に處するは、諸の鬼魅及び賊寇多く、衆惡來り易きが故に初に説く。人の住處、及び

び空舎を除いて、餘殘の山澤樹林等は、皆是れ曠野にして、人の行くこと少きが故に、諸の虎狼、獅子、惡賊、鬼魅多し。人の所住の處は、不淨なるが故に、魔及び鬼神は尠しく來り、諸難少なきが故

に、是を以て後に説けり。行者は三處に於いて住するも畏懼する所なし。

二の因縁を以ての故なり。一には、善く十八空を修し、二には、般若波羅蜜〔多〕の威徳の故なり。

經

爾の時に、三千大千世界中の諸の四天王、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天乃至首陀婆の諸天、佛に

白して言さく、「世尊よ、是の善男子、善女人の、能く般若波羅蜜〔多〕を受持し、親近し、讀誦し、正憶念して、薩婆若

心を離れざる者を、我等は常に當に守護すべし。何となれば、世尊よ、菩薩摩訶薩の因縁を以ての故に三惡道を斷じ、天人

の食を斷じ、諸の災患、疾病、饑饉を斷す。菩薩の因縁を以ての故に、便ち十善道、出世間、四禪、四無量心、四無色定、檀波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、毗梨耶波羅蜜〔多〕、禪波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕、內空乃至無法有法

【三】 行者は空舍・曠野・人間の三處に住するも、畏懼することなし。  
【三】 諸天は般若を行する者を守護すべきを説く。

空、四念處、乃至一切種智有り。菩薩の因縁を以ての故に、世間に便ち刹利の大家、婆羅門の大家、居士の大家、諸王及び轉輪聖王、四天王乃至阿迦尼吒天に生ずること有り。菩薩の因縁を以ての故に、須陀洹、須陀洹果、乃至阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道有り。菩薩の因縁を以ての故に衆生を成就し、佛國土を淨むる有り。便ち諸佛の世に出現する有り、便ち法輪を轉する有り、是の佛寶、法寶、比丘僧寶あることを知る。世尊よ、是の因縁を以ての故に一切世間の諸天及び人、阿脩羅は應に是の菩薩摩訶薩を守護すべしと。

佛、釋提桓因に語りたまはく、「是の如し、是の如し。橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は、因縁を以ての故に、三惡道を躋じ、乃至三寶世に出現す。是を以ての故に、諸天及び人、阿脩羅は常に應に是の菩薩摩訶薩を守護し供養し、恭敬し尊重し讚歎すべし。橋尸迦よ、是の菩薩摩訶薩を供養し、恭敬し尊重し讚歎するは、即ち是れ我を供養するなり。是の故に、是の諸の菩薩摩訶薩を、諸天及び人阿脩羅は常に應に守護し供養し、恭敬し尊重し讚歎すべし。橋尸迦よ、若くは三千大千世界の中に滿つる聲聞、辟支佛、譬へば竹菴、稻麻、叢林の如くならんを、若し善男子善女人ありて、供養し恭敬し尊重し讚歎するも、初發心の菩薩摩訶薩の六波羅蜜(多)の所得の福德を離れざるを供養し恭敬し尊重し讚歎せんには如かず。何となれば、聲聞辟支佛の因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩及び諸佛は世に出現すること有らず。菩薩摩訶薩の因縁あるを以ての故に聲聞、辟支佛、諸佛は世に出現すること有り。是を以ての故に、橋尸迦よ、是の諸の菩薩摩訶薩を、一切世間諸天及び人阿脩羅は、常に應に守護し供養し、恭敬し尊重し讚歎すべしと。

論

釋して曰はく、爾の時、諸天、佛に白さく、「我等、當に是の菩薩を守護すべし。我等と事を同じうするが故に、亦た佛道を求むる者は、能く自ら身を捨て、樂しんで一切衆生をして、樂を得せ

しめんと欲するを以ての故なり」と。(三三)菩薩に因りて三惡道を斷ずとは、菩薩は未だ欲を離れずと雖も、能く衆生の十不善を遮するが故に、三惡道及び天人の貧窮、諸の災患等を斷じ、十善を行ずるが故に、三善道の門を開く。或は菩薩ありて五欲の罪過を見、能く欲を離れて四禪を得、本願を以ての故に、四無量心<sup>むりやうしん</sup>を起し、種種の因縁<sup>しゆじゆいんねん</sup>、身の苦を離れんと欲するが故に、四無色定<sup>むしきぢやう</sup>を起し、佛道の爲めの故に、六波羅蜜<sup>はつぱらみつ</sup>〔多〕、乃至一切種智<sup>いっさいしゆぢ</sup>を修し、是の法を亦た自ら行じ、亦た人にも教へ、是の福德の道法<sup>だうほふ</sup>を以て、衆生の中に於いて、展轉<sup>てんでん</sup>して相教<sup>あひをし</sup>へ、常に世間に在り。今當<sup>まさ</sup>に是の諸<sup>もろもろ</sup>の善報<sup>ぜんほう</sup>の果報<sup>くわほう</sup>を説くべし。刹利<sup>せつり</sup>の大臣<sup>だいてん</sup>に生ずるより、乃ち三寶<sup>さんぼう</sup>の世<sup>よ</sup>に出現<sup>しゆつげん</sup>するに至るまでは、〔既に〕先<sup>すて</sup>の義<sup>ぎ</sup>の中に説くが如し。今是の菩薩<sup>はつさつ</sup>は、結業生身<sup>けつごふしやうしん</sup>にして因縁<sup>いんねん</sup>の中に在り、力勢<sup>りきせい</sup>あること無くして、而も能く是の善法<sup>ぜんほふ</sup>を説き、衆生<sup>しゆじやう</sup>をして修行<sup>しゆぎやう</sup>せしむ。我等<sup>われら</sup>は當に云何<sup>いかにん</sup>が守護<sup>しゆご</sup>せざらん。譬<sup>たと</sup>へば、太子<sup>たいし</sup>は小なりと雖も、群臣<sup>ぐんしん</sup>、百官<sup>ひやくくわん</sup>、奉承<sup>ほうじやう</sup>せざることを無きが如し。佛は諸天<sup>しよてん</sup>の述<sup>じゆつ</sup>〔する所〕を可<sup>か</sup>として、而して之<sup>これ</sup>を成<sup>じやう</sup>じ給<sup>たま</sup>へり。(三四)若し菩薩<sup>はつさつ</sup>を供養<sup>くやう</sup>する者は、即ち是れ佛<sup>ほとけ</sup>を供養<sup>くやう</sup>する者なり。般若<sup>はんや</sup>は是れ三世<sup>さんぜ</sup>の佛<sup>ほとけ</sup>の母<sup>はは</sup>なり。若し般若<sup>はんや</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、菩薩<sup>はつさつ</sup>を供養<sup>くやう</sup>すれば、則ち佛<sup>ほとけ</sup>を供養<sup>くやう</sup>すと爲すなり。初發意<sup>しよはつち</sup>の菩薩<sup>はつさつ</sup>を供養<sup>くやう</sup>し、恭敬<sup>くぎやう</sup>するに如かずとは、〔後に説くが如く〕菩薩<sup>はつさつ</sup>は三事<sup>さんじ</sup>をもて二乘<sup>じやう</sup>に勝<sup>まさ</sup>るなり。〕

【三四】菩薩に因りて、三惡道を斷じ、人天の食を斷じ、乃至佛菩薩を生ず。

【三五】般若の爲に菩薩を供養するは、佛を供養する所以なることを明す。

問うて曰く、二乗は已に實際を證す、是れ一切衆生の福田なり、何を以ての故に、初發意の菩薩に如かざるや。答へて曰く、三事を以ての故に如かず。一には薩婆若の心を用つて行じ、二には常に六波羅蜜(多)等の諸の功德を離れず、三には是の菩薩に由りて三惡道を斷じ、三乗を出生す。二乗の人に依りては、三惡道を斷じ、三乘に出生すること能はざるなり。

【三〇】 滅諍亂品第三十一を釋す。

釋

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、(三〇)世尊よ、甚だ奇なり、希有なり。諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を若し聞いて、受持し、親近し、讀誦し、他の爲に説き、正憶念する時は、是の如く、今世の功德を得。亦た衆生を成就し、佛國土を淨め、一佛界より一佛界に至りて、諸佛を供養したてまつり、欲する所の供養の具は、意に隨つて即ち得。諸佛より法を聞きたてまつり、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで終に中忘せず。亦た家を成就し、母を成就し、生を成就し、眷屬を成就し、相を成就し、光明を成就し、眼を成就し、耳を成就し、三昧を成就し、陀羅尼を成就することを得。是の菩薩は方便力を以て身を變ずること佛の如く、一佛國より一佛國に至り、無佛處に到りて檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)を讚じ、四禪、四無量心、四無色定を讚じ、四念處乃至十八不共法を讚す。方便力を以て法を説き、三乗の法を以て衆生を度脱す。所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり。世尊よ、快哉、希有なり。是の般若波羅蜜(多)を受くれば、以て總じて五波羅蜜(多)乃至十八不共法を攝すと爲すや。亦た須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切智、一切種智に至るまでを攝する

【三〇】 第九問、二乗は一切衆生の福田なり、何故に初發意の菩薩に如かざるか。  
 【三一】 如かざる理由に三あり。  
 【三二】 此の品には、現世の功德を説き、般若能く善惡諸法の諍亂を滅するものあることを力説す。他本には、現功德品、又は滅諍品の現世の功德を説く。

むし。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。橋尸迦よ、是の般若波羅蜜(多)を受くれば、已に總じて五波羅蜜(多)乃至一切種智を攝すと爲す。復次に、橋尸迦よ、是の般若波羅蜜(多)なば受持し、親近し、讀誦し、他の爲に説き、正憶念する、是の善男子、善女人の得る所の(四)今世の功德を汝一心に諦かに聽け」と。釋提桓因の言はく、「唯、世尊よ、

教を受けん」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「橋尸迦よ、若し外道(四)諸の梵志、若くは魔、若くは魔民、若くは増上慢の人ありて、菩薩の般若波羅蜜(多)の心を乖錯し、破壞せんと欲するに、是の諸人は、適、此の心を生ずるや、即時に滅し去りて、終に願に從はず。何となれば、橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は、長夜に檀波羅蜜(多)を行じ、尸羅、廉提、毗梨耶、禪、般若の波羅蜜(多)を行す。衆生は長夜に貪を護

るを以ての故に、菩薩は悉く内外の物を捨てて、衆生を檀波羅蜜(多)の中に安立す。衆生は、長夜に、戒を破するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を戒に安立す。衆生は、長夜に闘諍するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を忍辱に安立す。衆生は、長夜に憍怠するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を精進に安立す。衆生は、長夜に亂心するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を般若波羅蜜(多)に安立す。衆生は、長夜に愛結の爲の故に、生死に流轉するを以ての故に、菩薩摩訶薩は、方便力を以て、衆生の愛結

を斷じて、四禪、四無量心、四無色定、四念處乃至八聖道分、空、無相、無作三昧に安立し、衆生を須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道に定立す。橋尸迦よ、是を菩薩摩訶薩は、般若法羅蜜(多)を行じて、現世の功德と後世の功德とを得と爲す。阿耨多羅三藐三菩提を得て、菩薩は法輪を轉じて、所願を満足し、無餘涅槃に入る。橋尸迦よ、是を菩薩摩訶薩の後世

【四〇】 佛更に現世の功德を廣説せんとす。  
【四一】 出家の諸の外道を梵志といふ。

の功德と爲す。

復次に、橋戸迦よ、善男子、善女人は、是の般若波羅蜜(多)を、若くは聞き、受持し、親近し、讀誦し、他の爲に説き、正憶念せんに、其の所住の處の魔、若くは魔民、若くは外道、梵志、增上慢の人、般若波羅蜜(多)を輕毀し、難問し、破壞せんと欲するに、終に成ずること能はず。其の人は、惡心轉た滅し、功德轉た増す。是の般若波羅蜜(多)を聞くが故に、漸く三乘の道をも以て、衆苦を盡くすことを得。譬へば、橋戸迦よ、藥あり、**四**摩祇と名く。蛇あり、飢ふ行いて、食を索め、蟲を見て啖はんと欲するに、蟲、藥の所に趣き、藥氣の力の故に、蛇は前むこと能はず、即便ち還り去るが如し。何となれば、是の藥力は能く毒に勝るが故なり。橋戸迦よ、摩祇の藥は、是の如き力あり。是の善男子、善女人は、是の般若波羅蜜(多)を、若くは、受持し、親近し、讀誦し、他人の爲めに説き、正憶念せば、若し種種の鬭争を起し、來りて破壞せんと欲する者あらんに、般若波羅蜜(多)の威力を以つての故に、所起の處に隨つて即ち疾く消滅し、其の人は、即ち善心を生じて、功德を増益す。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は、能く諸法の諍亂を滅す。何等か諸法なる、所謂、婬、怒、癡、無明、乃至大苦樂、諸蓋、結使、纏、我見、人見、衆生見、斷見、常見、垢見、淨見、有見、無見、是の如き一切の諸見と、慳貪、犯戒、瞋恚、憍怠、亂意、無智、常想、樂想、淨想、我想、是の如き等の要行、色に著し、受想行識に著し、檀波羅蜜(多)尸羅波羅蜜(多)、摩提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)に著し、内空、外空、内外空乃至無法有法空に著し、四念處乃至十八不共法に著し、一切智、一切種智に著し、涅槃に著するなり。是の一切法の諍亂盡く能く消滅して増長せしめず。

論

釋して曰はく、聞くとは、若くは佛、若くは菩薩、若くは餘の説法人の邊より、般若波羅蜜

【四】摩祇(Maghi)の藥、毒を消すの喻。

〔多〕を聞くなり。是れ十方の三世諸佛の法寶藏なり。聞き已りて信力を用ふるが故に受け、念力の故に持し、氣味を得るが故に常に來りて承奉し、諍受するが故に親近し、親近し已れば或は文を看、或は口受の故に讀むと言ひ、爲に常に得て忘れざるが故に誦し、宣傳を未だ聞かざるが故に、他の爲に説くと言ひ、聖人の經書を直に説きて、歎了るが故に、義を解す。諸佛の法を觀るに、不可思議にして、衆生に於いて、大悲有るが故に法を説き、邪見、戲論を以て佛法を求めず、佛の意旨の如くにして、著せざるが故に、法を説くも亦た著せず。四顛倒等の諸の邪なる憶念を除くが故に、四念處の正憶念の中に住し、但得道の爲の故に、戲論を爲さざるを名けて、正憶念と爲す。〔四〕正憶念は是れ一切善法の根本にして、修習の行者の初めて入るを名けて、正憶念と爲し、常に行じて、禪定を得るが故に、名けて修と爲す。

〔四三〕 正憶念は一切善法の根本なり。

〔四四〕 智度の中に餘の五波羅蜜多乃至一切種智を攝す。

今世の功德とは、先に義を説くが如し。今釋提桓因は、更に今世の功德を説く。所謂る、衆生を教化し、乃至衆生をして三乗を得せしむ。先に、般若波羅蜜〔多〕は、三乗を攝すと説きて、其の義を解せしむ。是の故に、〔四〕般若波羅蜜〔多〕の中に、五波羅蜜〔多〕乃至一切種智を攝すと言ふ。佛、其の説を可としたまふとは、人をして信せしめんと欲したまふが故なり。得る所の今世の功德を、汝、一心に誦に聽げとは、上に略して、今世の功德を説き、佛は今廣く其の事を説かんと欲したまふに、

信持し難きが故に、一心に諦かに聴けと言へり。復次に、因小、果大にして、信じ難きが故に、一心に諦かに聴けと言ひ、帝釋は信受すと雖も、人知らざるが故に、「唯、世尊よ」と言ふ。是の般若波羅蜜〔多〕は破壊すべからずと雖も、而も實相を宣示する語言は破すべく、語言破するが故に、信心未だ定らざる者も、亦た破すべし。是の故に、若くは外道梵志等來りて、般若波羅蜜〔多〕を破壊せんと欲すと説く。梵志とは、是れ一切出家の外道にして、若し其の法を、承け用ふること有る者も、亦た梵志と名く。梵志は其の法に愛著し、實相、空相を聞きて、信ぜざるが故に壞せんと欲す。魔若くは魔民とは、先に説くが如し。増上慢の人とは、是れ佛弟子の禪定を得るも、未だ聖道を得ざるに、自ら已に得たりと謂ひ、是の人は、須陀洹なく、乃至阿羅漢なく、道なく涅槃なしと聞きて、便ち増上慢を發し、忿怒の心を生じて、是の實相の空法を破せんと欲するなり。是の般若波羅蜜〔多〕の神力の故に、彼の惡心をして、即時に滅去せしめ、終に願を成せず。人の手を以て、鉢を障げんに、但自ら其の手を傷けて、鉢は損ずる所なきが如し。何となれば、菩薩は内外の法に於いて著せず。衆生は無始世界より來かた、常に内外の法に著するが故に、鬪諍を起す。菩薩は内外の著所を捨てて、自ら六波羅蜜〔多〕に安立し、衆生を教化して、内外の鬪諍を捨てしめ、衆生を六波羅蜜〔多〕に安立す。是の無量世に福德力を修集して、鬪諍の根を盡くすが故に、鬪諍の事ありと雖も、來りて便を得ること能はず。譬へば、毒蛇の蝦蟇を食せんと欲して、常に之に隨逐するに、蝦蟇、摩祇藥の所に到れば、蛇は

藥氣を聞きて、毒即ち消歇するが如し。是の法を壞する惡人も亦復た是の如く、般若波羅蜜〔多〕を行する人を壞せんと欲して、常に之に隨逐するに、般若の力勢を以ての故に、瞋恚、邪見の毒は、即時に消滅し、降伏して、道を得る者あり、弟子と作る者あり、復た道より還り去る者あり。是の般若波羅蜜〔多〕は、能く無明等の諸の結使を破し、諸の斷常の邪見等を破し、能く五衆、乃至、涅槃に著するを滅す。何に況んや、瞋恚嫉妬鬪亂の事にして、而も能く滅せざらんや。

【四】

復次に、橋戸迦よ (四) 三千大千世界の諸の四天王、諸の釋提桓因、諸の梵天王、乃至阿迦尼吒天は、常に是の善男子善女人の、能く般若波羅蜜〔多〕を受持し、供養し、讚誦し、他の爲に説き、正憶念する者を守護す。十方現在の諸佛も、亦た共に、是の善

男子善女人の、能く般若波羅蜜〔多〕を聞き、受持し、供養し、讚誦し、他の爲に説き、正憶念する者を擁護したまふ。是の善男子、善女人は、不善法を滅し、善法轉た増す、所謂る、檀波羅蜜〔多〕轉た増す、無所得なるを以ての故なり。乃至、般若波羅蜜〔多〕轉た増す、無所得なるを以ての故なり。内空轉た増す乃至無法有法空轉た増す、無所得なるを以ての故なり。四念處、乃至、十八不共法轉た増す、無所得なるを以ての故なり。諸の三昧門、諸の陀羅尼門、一切智、一切種智轉た増す、無所得なるを以ての故なり。是の善男子、善女人の所説は、人皆な信受し、親友堅固にして、無益の語を説かず。瞋恚の爲に覆はれず、憍慢、慳貪、嫉妬の爲に覆はれず。

是の人は (四) 自ら殺生せず、人をして殺さざらしめ、不殺生の法を讀じ、亦た不殺生の者を歡喜し讚歎す。自ら不與取な

【四】 諸天、諸佛の擁護によりて、善法轉増の功德を明す。  
【四】 十善に於いて四種の功德を具す。

遠離し、亦た人をして不與取を遠離せしめ、不與取の法を遠離することを讀じ、亦た不與取を遠離する者を歡喜し讚歎す、自ら  
ら邪淫せず、人をして邪淫せざらしめ、不邪淫の法を讀じ、亦た不邪淫の者を歡喜し讚歎す。自ら安語せず、人をして安語  
せざらしめ、不安語の法を讀じ、亦た不安語の者を歡喜し讚歎す。兩舌、惡口、無利益の語も、亦た是の如し。自ら食ら  
ず、人をして食らざらしめ、不食の法を讀じ、亦た不食の者を歡喜し讚歎す。不瞋惱・不邪見も亦た是の如し。

自ら(四七)檀波羅蜜(多)を行じ、人をして檀波羅蜜(多)を行ぜしめ、檀波羅蜜(多)の法を行するを讀じ、亦た檀波羅蜜(多)  
を行する者を歡喜し讚歎す。自ら尸羅波羅蜜(多)を行じ、人をして尸羅波羅蜜(多)を行ぜしめ、尸羅波羅蜜(多)を行じ、亦  
尸羅波羅蜜(多)を行する者を歡喜し讚歎す。自ら屬提波羅蜜(多)を行じ、人をして屬提  
波羅蜜(多)を讀じしめ、亦屬提波羅蜜(多)を行する者を歡喜し讚歎す。自ら毗梨耶波羅  
蜜(多)を行じ、人をして毗梨耶波羅蜜(多)を行ぜしめ、毗梨耶波羅蜜(多)を讀じ、亦毗  
梨耶波羅蜜(多)を行する者を歡喜し讚歎す。自ら禪波羅蜜(多)を行じ、人をして禪波羅  
蜜(多)を行ぜしめ、禪波羅蜜(多)を讀じ、亦た禪波羅蜜(多)を行する者を歡喜し讚歎  
す。自ら般若波羅蜜(多)を行じ、人をして般若波羅蜜(多)を行ぜしめ、般若波羅蜜(多)  
を讀じ、亦た般若波羅蜜(多)を行する者を歡喜し讚歎す。

自ら(四八)內空を修し、人をして內空を修せしめ、內空を讀じ、亦た內空を修する者を歡喜し讚歎す。乃至自ら無法有法空  
を修し、人をして無法有法空を修せしめ、無法有法空を讀じ、亦た無法有法空を修する者を歡喜し讚歎す。  
自ら(四九)一切三昧の中に入り、人をして一切三昧中に入らしめ、一切三昧を讀じ、亦た一切三昧を行する者を歡喜し讚歎  
す。自ら陀羅尼を得、人をして陀羅尼を得せしめ、陀羅尼を讀じ、亦た陀羅尼を得る者を歡喜し讚歎す。

- 【四七】 六度に於いて四種の功德を具す。
- 【四八】 十八空に於いて四種の功德を具す。
- 【四九】 諸の三昧に於いて四種の功德を具す。

【四】 四禪に入り、人をして初禪に入らしめ、初禪を讚じ、亦た初禪に入る者を歡喜し讚歎す。二禪、三禪、四禪も亦た是の如し。

【五】 慈心の中に入り、人をして慈心の中に入らしめ、慈心の法に入るを讚じ、亦た慈心に入る者を歡喜し讚歎す。悲、喜、捨も亦た是の如し。

【六】 無邊空處に入り、人をして無邊空處に入らしめ、無邊空處を讚じ、亦た無邊空處に入る者を歡喜し讚歎す。無邊識處、無所有處、非有想非無想處も亦た是の如し。

【七】 四念處を修し、人をして四念處を修せしめ、四念處法を修するを讚じ、亦た四念處を修する者を歡喜し讚歎す。

【八】 四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分も亦た是の如し。

【九】 空、無相、無作の三昧を修し、人をして空、無相、無作の三昧を修せしめ、空、無相、無作の三昧を讚じ、亦た空、無相、無作の三昧を修する者を歡喜し讚歎す。

【十】 八解脱の中に入り、人をして八解脱の中に入らしめ、八解脱を讚じ、亦た八解脱に入る者を歡喜し讚歎す。自ら九次第定中に入り、人をして九次第定中に入らしめ、九次第定法に入るを讚じ、亦た九次第定に入る者を歡喜し讚歎す。

【十一】 佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法を修するも、亦た是の如し。

【十二】 自ら不謬錯の法を行じ、自ら常捨法を行じ、人をして不謬錯の法、常捨法を行ぜしめ、不謬錯の法、常捨法を行するを讚

【四】 四禪に於いて四種の功徳を具す。

【五】 四無量心に於いて四種の功徳を具す。

【六】 四空處に於いて四種の功徳を具す。

【七】 四念處に於いて四種の功徳を具す。

【八】 四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道に於いて四種の功徳を具す。

【九】 三解脱門に於いて四種の功徳を具す。

【十】 八解脱に於いて四種の功徳を具す。

【十一】 十力、四無所畏等に於いて四種の功徳を具す。

【十二】 自ら不謬錯の法を行じ、自ら常捨法を行するを讚

じ、亦た不謬錯の法、常捨法を行する者を歡喜し讚歎す。

自ら一切種智を得、人をして一切種智を得せしめ、一切種智の法を得る者を歡喜し讚歎す。是の菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、所有る布施を衆生と共にし已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、亦た無所得なるを以ての故なり。所有る持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、無所得を以ての故なり。

是の善男子善女人は、是の如く、六波羅蜜〔多〕を行する時、是念を作す、「我若し布施せずんば當に貧窮の家に生れ、衆生を成就し、佛世界を淨むること能はず、亦た一切種智を得ること能はざるべし。我若し戒を持たずんば、當に三惡道中に生じ、尙ほ人身すら得ざるべし。何に況んや、能く衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得んや。我若し忍辱を修めずんば、則ち當に諸根を毀壞し、色を具足せず、菩薩の具足せる色身ありて、衆生、見者、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得る能はず、亦た具足せる色身を以て、衆生を成就し、佛世界を淨むることを得て、一切種智を得ること能はざるべし。

我若し懈怠せば、菩薩道を得ること能はず、亦た衆生を成就し、佛世界を淨むることを得て、一切種智を得ること能はず。我若し亂心ならば、諸の禪定を生ずることを得ず、此の禪定を以て、衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得ると能はず、我若し無行ならば、方便智を得、方便智を以て、聲聞辟支佛地を過ぎ、衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得ること能はざらん」と。

是の菩薩は復是の思惟を作す、我慳貪に隨ふが故に、檀波羅蜜〔多〕を具足せざるとあるべからず。犯戒に隨ふが故に尸羅波羅蜜〔多〕を具足せざるとあるべからず、瞋恚に隨ふが故に、瞋恚に隨ふが故に、瞋恚に隨ふが故に、尸羅波羅蜜〔多〕を具足せざるとあるべからず、亂意に隨ふが故に、禪波羅蜜〔多〕を具足せざるとあるべからず。癡心に隨ふが故に、般若波羅蜜〔多〕を具足せざるとあるべからず。若し檀波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、瞋提波羅蜜〔多〕、毗

梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を具足せしんば、我終に一切種智を出到する能はざらん」と。是の如く善男子善女人は、是の般若波羅蜜(多)を受持し親近し讀誦し他の爲に説き、正憶念し、亦薩婆若の心を離れずんば是の今世後世の功德を得と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、希有なり。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を薩婆若に廻向することを爲すが故に、亦高心ならざるが爲の故に」と。佛釋提桓因に告げ給はく、「憍尸迦よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を薩婆若の心に廻向するが爲の故に、亦た高心ならざるが爲の故にといふや」。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し世間の檀波羅蜜(多)を行じて、諸佛、辟支佛、聲聞及び諸の貧窮、乞丐、行路の人に布施せんも、是の菩薩は方便なきが故に、高心を生ず。若し世間の尸羅波羅蜜(多)を行ずも、「我は尸羅波羅蜜(多)を行す。我は能く尸羅波羅蜜(多)を具足す」と言はば、方便なきが故に、高心を生ず。「我は屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)を行じ、我は般若波羅蜜(多)を行じ、我は般若波羅蜜(多)を修したり」と言はば、是れ世間の般若波羅蜜(多)は方便なきを以ての故に、高心を生ず。世尊よ、菩薩は世間の四念處を修する時、自ら念じて言はく、「我は四念處を修し、我は四念處を具足す」と。方便力なきが故に、高心を生ずらく、「我は四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を修す」と。自ら念じて言はく、「我は空、無相、無作三昧を修し、我は一切三昧門を修し、當に一切陀羅尼門を得べし。我は佛の十力、四無所畏、十八不共法を修し、我は當に衆生を成就すべく、我は當に佛世界を淨むべく、我は當に一切種智を得べし」と。吾我に著し、方便力なきが故に高心を生ず。世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、世間の善法を行じ、吾我に著するが故に高心を生ず。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、出世間の檀波羅蜜(多)を行すれば、施者を得ず、受者を得ず、施物を得ず。是の如きの菩薩摩訶薩は出世間の檀波羅蜜(多)を行じて、薩婆若に廻向するが爲の故に、亦た高心を生ぜず。尸羅波羅蜜(多)を行するに、尸羅は不可得なり。屬提波羅蜜(多)を行するに、屬提は不可得なり。毗梨耶波羅

蜜(多)を行するに、尸羅は不可得なり。屬提波羅蜜(多)を行するに、屬提は不可得なり。毗梨耶波羅蜜(多)を行するに、

蜜(多)を行するに、毗梨耶は不可得なり。禪波羅蜜(多)を行するに、禪は不可得なり。般若波羅蜜(多)を行するに、般若は不可得なり。四念處を行するに四念處は不可得なり。乃至十八不共法を修するに十八不共法は不可得なり。大慈大悲を修するに大慈大悲は不可得なり。乃至一切種智を修するに一切種智は不可得なり。世尊よ、是の如きの菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を薩婆若に廻向することを爲すが故に、亦た高心を生ぜざること爲すが故に」と。

論 問うて曰はく、(受)先に已に、魔若くは魔民等の三種の人、般若を破壊せんと欲すと説けり。今

何を以てか重ねて説くや。答へて曰く、佛の先に説きたまふ三種の人は、來りて便を求め、恐怖し愁惱せしめんと欲す。中に來る者は、人を惱ますことを爲さず、但般若波羅蜜(多)を破壊せんと欲するも、其の願に隨はず、破することを得ること能はず。後に來る三種の人は、心に破壊を生ぜんと欲すと雖も、即時に滅し去り、所語の人は、皆な愛者を信す。是の菩薩は常に不善法をして斷滅し、善法轉た増さしむ。所謂、檀波羅蜜(多)より乃ち一切種智に至るまでなり。是の人は福德智慧を

【五六】第一〇問、先に已に魔及び魔民等の般若を破壊せんと欲するを説く、今復た重説するは何故なるか。

修集するが故に、大威徳を成じ、設使ひ妄語の人も皆信受す。何に況んや、實語の親友、堅固の者をや。是の人は一切衆生の中に於いて、深く慈悲心あり。何に況んや、親友の我に於いて益あるをや。是の菩薩は佛道を愛敬し、身口の無常を知るが故に、無益の言を説かず、善法增長するを以ての故に、瞋恚等の煩惱も、心を覆ふこと能はず。行者は是の念を作す、「結使を起すと雖も、智慧もて思

惟せば、心を覆はしめず。結使若し起らば、今世にも不善、後世にも不善にして佛道を妨ぐ。設使心に結使を起すとも、口業を起さず。設ひ口業を起すとも、身業を成さず、設ひ身業を起すとも、大惡に至りて、凡夫の人の如くならず。是の菩薩は、復た卑陋鄙賤なりと雖も、勝法を行するを以ての故に、勝人の數中に在ることを得。是れ今世の功德なり。

是の人は深く善法を樂ふが故に、能く善法に於いて四種の正行を求む。二乗の人は、四行を具足すること能はず。深く善法を樂はざるを以ての故なり。所謂、自ら殺生せず、一切に慈悲なるも、自利に深きが故に、他をして慈ならしめず、是れ一切賢聖の法なるが故に常に讚歎す。是の菩薩は、常に人をして樂を得せしめんと欲するが故に、不殺の者あるを見れば、歡喜し愛樂す。乃至一切種智も、亦た是の如し。

上には四種の行を廣説し、今は略して功德を説き、總じて六波羅蜜(多)中に攝入す。所得の果報は衆生と之を共にす。是の菩薩は未だ正位に入らず、諸の煩惱未だ盡さざるが故に、或時は慳等の諸の煩惱を起す。爾の時、應に是の思惟を作して、其の心の共に布施せざるを諫諭すべし。我は自ら四事の功德を失す。所謂、後身に貧窮に生じ、貧窮なるが故に、自ら利益すること能はず、何ぞ能く他を利せん。若し他を利せざれば、則ち衆生を成就すること能はず。衆生を成就すること能はざれば、亦た佛世界を淨むること能はず。何となれば、衆生淨なるを以ての故に、世界清淨なればなり。

若し是等の衆事を具足せずんば、云何が當に一切種智を得べき。要を以て之を言へば、方便なき者は、六波羅蜜(多)を行すと雖も、内に我心を離るること能はず、外に諸法の相を取る。所謂、我は是れ施者、彼は是れ受者、是は布施物と。是の因縁の故に佛道に到ること能はず。此と相違するは是れ方便あり。

問うて曰はく、(堯)若し世間の波羅蜜(多)等は、是れ正道に非ず。是の般若波羅蜜(多)の中に、佛は何を以てか説きたまひしや。答へて曰く、此は是れ行者の初門にして、正道と相似するが故に、先づ相似の法を行じ、後に眞道を得ればなり。

【堯】 第一一問、世間の波羅蜜多は正道にあらず、然るに佛が是の中に説き給へるは何故なるか。

# 卷の第五十七

## 寶塔校量品第三十二を釋す。

釋

爾の時に、佛、釋提桓因に告げたまはく、若し、善男子、善女人ありて、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、受持し、親近し、讀誦し、正憶念して薩婆若の心を離れざれば、兩陣戰ふ時、是の善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を誦するが故に、軍陣中に入るとも終に命を失せず、刀箭も傷けず。何となれば、是の善男子善女人は、長夜に、六波羅蜜(多)を行じて、自ら婬欲の刀箭を除き、亦た他人の婬欲の刀箭をも除く。自ら瞋恚の刀箭を除き、亦た他人の瞋恚の刀箭を除く。自ら愚癡の刀箭を除き、亦他人の愚癡の刀箭をも除く。自ら邪見の刀箭を除き、亦他人の邪見の刀箭をも除く。自ら纏垢の刀箭を除き、亦た他人の纏垢の刀箭をも除く。自ら諸の結使の刀箭を除き、亦た他人の結使の刀箭をも除く。橋戸廻よ、是の因縁を以て、是の善男子善女人は、刀箭の爲に傷けられず。

復次に、橋戸廻よ、是の善男子、善女人は、是の般若波羅蜜(多)を聞き、受持し、親近し、讀誦し、正憶念して、薩婆若の心を離れずんば、若くは毒藥を以て熏じ、若くは、蠱道(四)を以てし、若くは火杭を以てし、若くは深水を以てし、若くは刀殺を欲し、若くは毒を興ふるも、是の如き衆惡も、皆傷つくるも能はざるなり。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は、是れ

- 【一】 此の品には、般若は大明咒なるが故に、持誦の功德の大なること、寶塔建立の比にあらざることを明す。他本には寶塔品、大明品と名く。
- 【二】 般若を誦する者は、軍陣に入るも、傷けられず。又能く煩惱の刀箭を除く。
- 【三】 般若を受持すれば、水火も傷害すること能はず。
- 【四】 蠱道は左道なり、咒咀厭勝の法にて調伏するなり。

大明咒、是れ無上咒なればなり。若し善男子善女人、明咒の中に於いて學せば、自から身を惱ま  
 ず、亦た兩ながら惱まます。何となれば、是の善男子善女人は、我を得ず、衆生を得ず、  
 壽命を得ず、乃至知者、見者皆な  
 得べからず、色、受、想、行、識を得べからず、乃至一切種智も亦た得べからざればなり。  
 得べからざるを以ての故に、自  
 ら身を惱まます、亦た他を惱まます、亦た兩ながら惱まます。是の大明咒を學するが故に、  
 阿耨多羅三藐三菩提を得。一切衆生の心を見て、心に從つて説法す。何となれば、過去の諸佛も、  
 是の大明咒を學びて、阿耨多羅三藐三菩提を得たればなり。當來の諸佛も是の大明咒を學して、  
 當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、今現在の諸佛も、是の大明咒を學して、阿耨多羅三藐  
 三菩提を得たまふ。

復次に、橋尸迦よ、般若波羅蜜(多)は、若し但だ經卷を書寫し、舍に於いて、供  
 養すること有るのみにして、受けず、讀まず、誦せず、説かず、正憶念せざるも、是の  
 處、若くは人、若くは非人、其の便を得ると能はず。何となれば、是の般若波羅蜜(多)  
 は、三千大千世界中の、四天王、諸天乃至阿迦尼吒の諸天子、及び十方無量阿僧祇世界  
 中の、諸の四天王乃至阿迦尼吒の諸天等の爲に守護せらるればなり。是の般若波羅蜜  
 (多)の所止の處には、諸天皆な來りて、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、禮拜し已り  
 て去る。是の善男子善女人は、般若波羅蜜(多)をば、但だ書寫し、舍に於いて供養するのみにて、  
 受けず、讀まず、誦せず、説かず、正憶念せざるも、今世に、是の如き功德を得。譬へば、  
 若くは人、若くは畜生にして、菩提樹下の諸邊、内外に來  
 入せんに、設ひ人、非人來るも、其の便を得ること能はざるが如し。何となれば、是の處は、  
 過去の諸佛、中に於て阿耨多

【五】大明咒とは、外道の但明咒と言へるものに比せる語なり。これ蓋し大の一字を加へて、諸佛成就の勝法なるを示す。此の咒によりて煩惱の塵病は勿論、禪定佛道涅槃の諸執著をも除くことを得、故に大明咒といふ。無上咒も亦た比知すべし。

【六】但書寫するのみの功德にて、人非人その便を得ること能はず。

羅三藐三菩提を得たまひ、未來の諸佛、現在の諸佛も、亦た中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべく、佛を得已て一切衆生に、無恐無畏を施し、無量阿僧祇の衆生をして、天上、人中の福樂を受けしめ、亦無量阿僧祇の衆生をして、須陀

洵果を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得せしめたまふ。般若波羅蜜(多)の力の故に、是の處に、恭敬し、禮拜し、華香、瓔珞、摩香、澤香、幢蓋、妓樂を供養することを得。

論

問うて曰はく、(一)現に受持し讀誦すること有りて軍陣に入るも、刀

兵の爲に傷つけられ、或は命を失ふに至る。又佛は、業因縁は、非空非海

の中にも免るることを得る者あること無しと説き給へり。是の中に、佛は

何を以ての故に、般若を讀誦する者は、軍陣に入るも兵刃に傷つかず、

亦た命を失はずと言ふや。答へて曰はく、(二)種の業因縁あり。一には必ず

す應に報を受くべし。二には必ずしも報を受けず。必ず應に報を受くべき

が爲の故に、法句の中には是の如く説き、此の中には、必ずしも報を受けざ

るが爲の故に、般若を讀誦すれば、兵刃に傷つかずと説く。譬へば、大逆

重罪の應に死すべき人は、強力財寶ありと雖も、免るるを得べからず。

人ありて、罪もて死の料理に入ると雖も、救ふに用ふべき力勢、財物あれば便ち命を濟ふことを得、救はざれば則ち死するが如し。善男子も亦た是の如く、若し必ず報を受くると無くんば、罪は死事來

【七】 第一問、般若を受持するも、現に戰陣中に傷き、失命するものあり、佛の言説は事實と相違するにあらずや。

【八】 非空非海の非の字は、恐くは衍字か、然らざれば此間に缺字あらん。何となれば著者ば此の經文を法句經中より引き來れることを述ぶ。然るに法句經には、

空中にありても、海中にありても、將た山間の窟中にありても罪業より脱るべき方所とはあらじ。(惡業品)とあればなり。

【九】 業に二種あり。

ると有りと雖も、般若波羅蜜〔多〕を誦讀するに至れば、則ち濟度することを得。若し讀誦せざれば、すなはし免れず。是の故に、般若波羅蜜〔多〕に、力勢あると無しと言ふとを得ず。

復次に、善男子、善女人は若し惡法を遠離し、其の心を調伏し、煩惱を折減し、一心に直信なれば善法に疑悔あること無く、久遠より已來、福德智慧を修集し、一切衆生に於いて、慈悲心あり、衆生を教化して、惡心を除去す、是の如き善男子は、力兵も命を傷つけず、中斷せず。佛自ら因縁を説きたまへるが如し。長夜に六波羅蜜〔多〕を行じて、己身及び他の三毒の刀箭を除く。五波羅蜜〔多〕は、是れ福德、般若波羅蜜〔多〕は是れ智慧にして、已に廣く此の二事を集むるが故に、失命に中らず。毒藥、水火等も亦た是の如し。復次に、外道、神仙の如きは、咒術の力の故に、水に入るも溺れず、火に入るも熱からず、毒蟲も齧さず。何に況んや、般若波羅蜜〔多〕をや。是の十力は、諸佛の因つて咒術を成就したまふ所なり。

問うて曰く、(一〇)上の所説の如き、是の事は信すべし。今此の中には、能く般若を受持し、讀誦し、念ずる等あらず、但書寫し供養するのみ。云何が是の功德を得るや。答へて曰はく、是の人の所得の功德も亦た上に同じ。何となれば、人あり、先づ已に師の般若の義を説くを聞き、深く入りて愛樂するも、然も文字を識らず、師に遠離するが故に、讀誦すること能はず。而も財寶を惜まず、人を雇ひ

【一〇】第二問、受持し讀誦する功德は信すべし、然も此の中には、書寫し供養するのみを説けり、云何が之を信すべけんや。

て書寫し、心を盡くして種種に供養せんに、意は讀誦の者と同じ、故に亦た功德を得。人の便を得ること能はざるは、諸天守護すればなり。是の事は信じ難きが故に、佛は菩提樹を以て喩と爲したまへり。佛は般若の力を以ての故に、菩提樹の下に於て、無上道を成じたまひ、無上道の力勢の故に、其處すら猶ほ威徳ありて、衆生の中に入るに、衆惡は其の便を得ず。何に況んや、般若波羅蜜〔多〕は、是れ諸佛の母なり。善男子、心を盡して供養せんに、而も功德なからんや。

釋

釋提桓因、佛に白して言さく、(一)世尊よ、善男子、善女人、般若波羅蜜〔多〕を書寫

し、華香、環珞乃至妓樂もて供養すると、若くは人あり、佛涅槃の後、若くは舍利を供養し、若くは塔を起して、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、環珞乃至妓樂もて供養すると、是の二の何者が福を得ること多きや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、

「我選つて汝に問はん。汝が意に隨つて我に答へよ。汝が意に於いて云何。佛の一切種智を得、及び是の身を得るが如きは、何の道に従ひ學して、是の一切種智を得、是の身を得たるや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、(二)佛は般若波羅蜜〔多〕に従ひ學して、一切種智及び相好の身を得た

まへり」と。佛、釋提桓因に告げ給はく、「是の如し、是の如し、橋尸迦よ。般若波羅蜜〔多〕の中に従ひ學して、一切種智を得。橋尸迦よ、是の身を以て、名けて佛と爲さず。一切種智を得るが故に、名けて佛と爲す。橋尸迦よ、是の佛の一切種智は、般若波羅蜜〔多〕の中より生ず。是を以ての故に、橋尸迦よ、是の佛身は、一切種智の所依の處にして、佛は是の身に

因りて一切種智を得給ふ。善男子當に是の思惟を作すべし、是の身は一切種智の所依の處なり。是の故に我が涅槃の後に、

依なり、故に舍利を供養すべし。

【一】般若の供養と、舍利の供養とを比較す。慧根多きは般若を供養し、信根多きは舍利を供養すればなり。

【二】佛身は是れ一切種智の所依なり、故に舍利を供養すべし。

【三】佛は是の佛身に因りて一切種智を得給ふ。善男子當に是の思惟を作すべし、是の身は一切種智の所依の處なり。是の故に我が涅槃の後に、

舍利を供養することを得べしと。復次に、橋戸廻よ、善男子善女人、若し是の般若波羅蜜(多)を聞いて、書寫し、受持し、親近し、讀誦し、正憶念し、華香、瓔珞、摩香、檀香、幢蓋、妓樂(を以て)恭敬し、供養し、尊重し、讚歎せんに、是の善男子、善女人は、則ち一切種智を供養すと爲す。是を以ての故に、橋戸廻よ、若し善男子善女人ありて、是の般若波羅蜜(多)を書き、若くは受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念し、華香、瓔珞、乃至妓樂(を以て)供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、若し復た善男子、善女人ありて、佛涅槃の後に、舍利を供養し、塔を起し、華香乃至妓樂(を以て)供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、若くは善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜(多)を書持し、華香、瓔珞、乃至妓樂(を以て)供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せんに、是の人は福を得ること多し。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は、五波羅蜜(多)を生じ、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法を生じ、一切の三昧、一切の禪定、一切の陀羅尼は、皆般若波羅蜜(多)の中より生じ、衆生を成就し、佛世界を淨むることも、皆般若波羅蜜(多)の中より生じ、菩薩の家を成就し、色を成就し、養生の物を成就し、眷屬を成就し、大慈大悲を成就することも、皆般若波羅蜜(多)の中より生じ、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家も、皆是の般若波羅蜜(多)の中より生じ、四天王乃至阿迦尼吒天、須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩、諸佛、諸佛の一切種智は、皆是の般若波羅蜜(多)より生ずればなりと。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、閻浮提の人の、般若波羅蜜(多)を供養せず、恭敬せず、尊重せず、讚歎せざるは、供養の利益する所多きを知らざるが爲なるや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「橋戸廻よ、汝が意に於て云何。閻浮提の中、幾所の人が、佛を信じて壞せず、法を信じ、僧を信じて壞せず、幾所の人が、佛に於て疑なく、法に於て疑なく、僧に於て疑なきや。幾所の人が、佛に於て決了し、法に於て、決了し、僧に於て決了するや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、閻浮提の人は、佛法僧に於いて、壞せざるも、信す少く、佛法僧に於いて、疑なければども、

決了も亦た少し」と。橋戸迦よ、汝が意に於いて云何。闍浮提の幾所の人か、三十七品、八解脫門、八解脫、九次第定、四無礙智、六神通を得るや。闍浮提の幾所の人か、三結を斷するが故に、須陀洹道を得、幾所の人か、三結を斷じ、亦た婬、瞋、癡を薄くするが故に、斯陀含道を得るや。幾所の人か、五下分の結を斷じて、阿那含道を得るや。幾所の人か、五上分結を斷じて、阿羅漢を得るや。闍浮提の幾所の人か、辟支佛を求め、幾所の人か、阿耨多羅三藐三菩提心を發するや」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、闍浮提中の少所の人、三十七品を得、至乃少所の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發するのみ」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。橋戸迦よ、少所の人、佛を信じて壞せず、法を信じて壞せず。僧を信じて壞せず。少所の人、佛に於いて疑なく、法に於いて疑なく、僧に於いて疑なし。少所の人、佛に於いて決了し、法に於いて決了し、僧に於いて決了す。橋戸迦よ、亦た少所の人、三十七品、三解脫門、八解脫、九次第定、四無礙智、六神通を得、橋戸迦よ、亦た少所の人、三結を斷じて、須陀洹を得、三結を斷じ、亦た婬、瞋、癡を薄くして、斯陀洹を得、五下分の結を斷じて、阿那含を得、五上分の結を斷じて、阿羅漢を得。少所の人、辟支佛を求め、是の中より亦た少所の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。發心者中に於て亦た少所の人、菩薩の道を行す。何となれば、是の衆生は、前世に佛を見ず、法を聞かず、比丘僧を供養せず、布施せず、持戒せず、忍辱せず、精進せず、禪定せず、智慧なく、内空、外空乃至無法有法空を聞かず、亦た四念處乃至十八不共法を聞かず、修せず、亦た諸の三昧門、陀羅尼門を聞かず、修せず。亦た一切の智、一切の種智を聞かず、修せず。橋戸迦よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、少所の衆生、佛を信じて壞せず、法を信じて壞せず、僧を信じて壞せず、乃至少所の衆生は辟支佛道を求め、是の中に於て、少所の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、發心者中に於いて少所の衆生は、菩薩道を行し、是の中に於いて、亦た少所の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提を

得。橋戸迦よ、我れ佛眼を以て、東方無量阿僧祇の衆生を見るに、發心して阿耨多羅三藐三菩提を行じ、菩薩道を行するも、般若波羅蜜(多)の方便力を、遠離するが故に、若くは一人、若くは二人、阿鞞跋致地に住し、多くは聲聞、辟支佛地に墮す。南、西、北方、四維、上下も、亦た是の如し。是を以ての故に、橋戸迦よ、善男子善女人の發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求むる者は、應に般若波羅蜜多を聞き、應に受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念すべし。受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念し已らば、應に經卷を書し、香華、瓔珞、乃至妙樂を以て、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎すべし。諸餘の善法を以て、般若波羅蜜(多)の中に入る者も、亦應に聞き、受持し、乃至、正憶念すべし。何等が是れ、諸餘の善法なる。所謂、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、內空、外空乃至無法有法空、諸の三昧門、諸の陀羅尼門、四念處、乃至十八不共法、大慈大悲なり。是の如き等の無量の諸の善法は、皆般若波羅蜜(多)の中に入る。是も亦應に聞き、受持し、乃至、正憶念すべし。何となれば、是の善男子、善女人は、當に是の如く念すべければなり。一佛は本、菩薩たりし時、是の如く行じ、是の如く學し給へり。所謂、般若波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)、內空乃至無法有法空、諸の三昧門、諸の陀羅尼門、四念處乃至十八不共法、大慈大悲なり。是の如き等の無量の佛法、我等も亦應に隨つて學すべし。何となれば、般若波羅蜜(多)は是れ我等が尊ぶ所、禪波羅蜜(多)乃至無量の諸餘の善法も、亦是れ我等が尊ぶ所、此は是れ諸佛の法印、諸の辟支佛、阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹の法印なればなり。諸佛は是の般若波羅蜜(多)乃至一切種智を學して彼岸に度るとを得給へり。諸の辟支佛、阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹も、亦是の般若波羅蜜(多)乃至一切種智を學して、彼岸に度ることを得たり」と。是を以ての故に、橋戸迦よ、善男子善女人は、若くは佛在世、若くは般涅槃の後、應に般若波羅蜜(多)に依止すべし。禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)乃至一切種

智にも亦應は依止すべし。何となれば、是の般若波羅蜜(多)乃至一切種智は、是の諸の聲聞、辟支佛、菩薩摩訶薩及び一切世間の天人、阿修羅の依止すべき所なればなり」と。

論

問うて曰く、(三)佛は已に種種に般若の功德を讃じたまへり。今釋提桓因は何が故に舍利を以て、般若と功德の多少を校ぶるや。答へて曰く、信根多き者は、舍利を供養することを喜び、慧根多き者は經法を讀誦することを好む。是の故に、有る人は經を書して供養し、有る人は舍利を供養するに、何れか爲す所多きと問ふなり。華香、瓔珞等の義は、先に説くが如し。汝が意に於いて云何とは四時の問の中、此は是れ反問の答なり。是の故に佛は即ち釋提桓因に反問したまへり。或は有る人は、舍利を供養して、福德を得ること多く、或は有る人は、般若波羅蜜(多)を供養して、福德を得ること多く、人の心に隨ふが故に、佛は一定して答へたまふことを得ず。是の故に反問したまへり。

【三】第三問、佛已に種種に般若の功德を讃歎せり。今それ帝釋が、舍利供養の功德と般若の功德とを校ぶるは、何故なるか。

般若波羅蜜(多)の中より、五波羅蜜(多)を生ずとは、後品の中に、佛自ら説きたまはく、方便、智慧、布施、廻向なきは檀波羅蜜(多)と名けず。十八空は、即ち是れ智慧なり。智慧の因縁の故に、四念處、乃至一切種智を生ず。盡く是れ智慧に非ずと雖も、性同じきを以ての故に、智慧を以て主と爲す。是の故に、般若より生ずと言ふ。般若波羅蜜(多)を行すれば、諸法實相を得、布施、持戒等に於いて通達す。若し般若の實相を得ざれば、布施、持戒に通達すること能はず。何となれば、若し一

切法は空なれば、則ち罪なく福なし、何ぞ布施持戒を用ゐん。若し諸法實相ならば、因縁より生ずべからず、先に已に有ればなり。若し衆生は是れ常ならば、則ち譬へば虚空の如く、亦た死者なけん。若し無常ならば、神は則ち身に随つて滅し、亦た後世の罪福なけん。若し衆生なくんば、何ぞ殺罪あらん。是の如くんば、亦た不殺生戒等も無し。若し是の般若波羅蜜「多」の實相の法を得れば、則ち有無の二邊に墮せず、中道を用ゐて、布施持戒等に通過せん。此の布施持戒等の果報を以ての故に、刹利の大姓乃至諸佛あり。

問うて曰はく、(四)閻浮提の人は利福徳を食ふ。何を以てか、般若波羅蜜を供養せざるや。答へて曰はく、智人少きが故に、般若を供養することを知らざるも咎なきなり。譬へば、金寶も、盲者は識らざるが如し。閻浮提の人は、但三寶を信する者すら少し。何に況んや、知つて而も能く行せんや。佛は釋提桓因をして自ら説かしめんと欲したまふが故に、幾許の人ありてか、三尊に於いて信等を壞せざることを得るやと反問したまへり。

問うて曰はく、(五)信を壞せざると、疑なきと、決了すると何の差別ありや。答へて曰はく、有る人の言はく、「差別あること無し。佛は莊嚴して、種種に説き、人心を開悟したまへばなり」と。有る人の言はく、「三寶の中に於て、信を壞せざることを得し、何を以てか之を知る、疑なきを以ての故なり。

【四】 第四問、閻浮提の人は福徳を食ふ。何故に智度を供養せざるか。  
【五】 第五問、信を壞せざると疑なきと、決了すると、何の差別ありや。

何を以てか疑なきを知る、決了するを以ての故なりしと。

問うて曰はく、「云なきと決了すると何の異なること有りや。答へて曰はく、初めて三寶を信する

が故に是れ疑なく、智慧を究竟するが故に決了す。譬へば、水を度るに、初めて入るは是れ疑なく、

彼岸に出づるは是れ決了するが如し。三分聖戒力の故に信を壞せず、四分力の故に是れ疑なく、正見

分力の故に是れ決了す。

復次に、見諦道の中は是れ信を壞せず、思惟道の中は是れ疑なく、無學道の中は是れ決了す。是等

の如く、種種に分別す。是の三事は何の果報をか得る。三十七品、乃至六神通は、是れ有爲果なり。

三結を盡すより、乃ち煩惱、及び習を盡すに至るは、是れ無爲果にして、

是の如き等の果報を得。釋提桓因は、報生の知他心あり。亦た曾つて天

耳を以て、諸道の差別を聞く。又是の大菩薩は、利根にして、觀衆生心三昧に入るを以ての故に、

諸道の差別を知ることを得。是の故に佛に答へたてまつるらく、「深信の者は少し」と。須陀洹より乃

ち初發心に至るは、佛道を求むると轉た少く、轉た少きが故に、般若を供養するとを知らざるなり。

何となれば、少しも前世の生死の中に、三寶の名を聞かず、乃至一切種智の名を聞かざればなり。佛

は上の事を證せんと欲したまふが故に説きたまはく、「我れ今佛眼を以て、十方無量阿僧祇の衆生を

觀るに、無上道を發するも、般若の方便力を離るるが故に、若くは一「人」、若くは二「人」、阿鞞跋致

【二六】第六問、疑なきと、決了するとの異ありや。

地に住す」と。諸餘の善法は、般若波羅蜜(多)に入るるといふ。是れ諸餘の經なり所謂る。法華經、密迹經等の十二部經の中の義は、般若に同ずる者にして、名けて般若波羅蜜(多)經と爲さすと雖も、然も義理は、即ち般若波羅蜜(多)經に同じ。

問うて曰はく、(二八)云何が須陀洹も亦般若波羅蜜(多)、乃至一切種智を學して、彼岸に到ることを得るや。答へて曰く、此の中の六波羅蜜(多)、三解脱門、三十七品等、乃至一切種智は是れ獨り菩薩の法なるのみに非ず、三乘も共に各分に隨つて學すること有り。

經

【四九】 橋戸迦、(一九)若し善男子、善女人ありて、佛の般涅槃の後に、佛を供養せんが爲の故に、七寶の塔の高き一由旬なるを作り、天香、天華、天の瓔珞、天の擗香、天の澤香、天衣、天の幢蓋、天の妓樂(を以て)供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せんに、橋戸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、是の因緣によりて、福を得ること多きや不

【七】 法華經、密迹經等の義は般若に同じ。  
【八】 第七問、須陀洹が智度乃至一切種智を學して、彼岸に到る理由如何。  
【九】 寶塔の供養よりも、般若の功德大なるを説く。

や」と。釋提桓因言さく、「世尊よ、甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、是の般若波羅蜜(多)を聞き、書寫し、受持し、親近し、正憶念し、薩婆若の心を離れず、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、若くは華香、瓔珞、擗香、澤香、幢蓋、妓樂もて供養せんに、是の善男子、善女人の福德多きには如かず」と。

佛、橋戸迦に告げたまはく、「一の七寶の塔を置かんに、若し善男子善女人、佛を供養するが故に、佛の般涅槃の後、七寶塔を起して、閻浮提に滿て、皆な高き一由旬ならしめ、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞、幢蓋、妓樂もて、供養せ

んに、橋尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、福を得ること多きや不や」と。釋提桓因言さく、「世尊よ、其の福、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、前の如く、般若波羅蜜(多)を供養する、其の福甚だ多きには如かず。橋尸迦よ、復一間淨提の中に滿つる七寶の塔を置き、若し善男子善女人ありて、佛を供養したてまつるが故に、佛の般若樂の後、七寶の塔を起して四天下に滿て、皆高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如くならんに、橋尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、其の福多きや不や」と。釋提桓因言さく、「甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人、般若波羅蜜(多)を書持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至妓樂(を以て)供養する、其の福の甚だ多きには如かず。

橋尸迦よ、復た四天下の中に滿つる七寶の塔を置き、若し善男子善女人ありて、佛を供養したてまつるが故に、佛の般若樂の後に、七寶の塔を起して、小千世界に滿て、高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如くせば、橋尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、其の福多きや不や」と。釋提桓因言さく、「甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子、善女人、是の般若波羅蜜(多)を書し、受持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至妓樂(を以て)供養する、其の福の甚だ多きには如かず。橋尸迦よ、復た小千世界の中に滿つる、七寶の塔を置き、若し善男子、善女人ありて、佛を供養したてまつるが故に、佛の般若樂の後、七寶の塔を起して、二千中世界に滿て、皆高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如きも、故らに、般若波羅蜜(多)を供養して、其の福甚だ多きには如かず。復た二千世界中に七寶の塔を置き、若し善男子善女人、佛を供養したてまつるが故に、佛の般若樂の後、七寶の塔を起して三千大千世界に滿て、皆高さ一由旬ならしめ、形壽を盡くして天華、天香、天の瓔珞乃至天の妓樂もて供養せんに、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、福を得ること多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「世尊よ、甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人、是の般若波羅蜜(多)

を書持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至妓樂もて供養する、其の福の甚だ多きには如かず。復た三千大千世界の中に七寶の塔を置き、若し三千大千世界中の、衆生の一一の衆生、佛を供養したてまつるが故に、佛の般涅槃の後、各七寶の塔を起て、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至、妓樂もて供養するも、若し善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)を書持し、乃至正憶念して薩婆若の心を離れず、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞乃至妓樂もて供養せんに、是の人は福を得ること甚だ多しと。

釋提桓因佛に白して言さく、「是の如し、是の如し、世尊よ、若し人は是の般若波羅蜜(多)を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、則ち過去、未來、現在の佛世尊を供養すと爲す。若し十方如恆河沙等の世界中の衆生の一一の衆生、佛を供養したてまつるが故に、佛の般涅槃の後、各七寶の塔を起し、高さ一由旬ならしめ、是の人は若くは一劫、若くは減一劫(の間)、

恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至妓樂もて供養せんに、世尊よ、是の善男子、善女人は、福を得ること多きや不や」と。佛の言はく、「甚だ多し」と。釋提桓因言さく、「善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜(多)を書持し、乃至正憶念し、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至妓樂を以て供養せんに、其の福大に多し。何となれば、世尊よ、一切の善法は、皆

般若波羅蜜(多)の中に入ればなり。所謂、十善道、四禪、四無量心、四無色定、三十七品、三解脱門、空、無相、無作、四諦なる苦諦、集諦、滅諦、道諦、六神通、八解脫、九次第定、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、内空乃至無法有法空、諸の三昧門、陀羅尼門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法、一切智道種智、一切種智なり。世尊よ、是を一切諸佛の法印と名く。この法中に一切の聲聞及び辟支佛、過去、未來、現在の諸佛は是の法を學して彼岸に度ることを得たまふ」と。

釋して曰く、般若波羅蜜(多)をば、若し聞き受持し讀誦する等に無量の功德あり。更に説かん

論

と欲するが故に、現事の譬喩を以て之を證す。人は土塔の高大なるを見て、即時に心を生じて謂く、「是の塔主の福德は極めて大なり」と。何に況んや、七寶の塔の高さ一由旬なるを起すをや。是の故に佛は塔を以て喩と爲したまへり。

問うて曰はく、「是の塔は實と爲すや、假と爲すや。答へて曰はく、佛は人をして福德の多少を解知し、分別せしめんと欲したまふが故に、是の譬喩を作したまへり。其の虚實を問ふべからず。有る人の言はく、「實あり假あり。迦葉佛の般涅槃の後に、國王あり、吉梨姑と名くるが如きは、爾の時、人壽一萬歳にして、是の王は舍利を供養せんが爲の故に、七寶の塔を起し高さ五十里なり。又過去世に轉輪王あり、徳主と名く。一日に五百の塔を起し、高さ五十由旬なり。

此を三千大千世界に滿てりと言ふ、是の事は譬喩なり」と。有る人の言は

【三】第八問、是の塔は、實塔なりや、假塔なりや。

く、「皆な是れ實有なり」と。小國王の如きは、力に隨つて、七寶の塔を起て、大王は能く一由旬の七寶の塔を起て、或は一由旬に過ぎ、小轉輪王は能く七寶の塔を起て四天下に滿て、大轉輪王は能く七寶の塔を起て四天下に過ぎ、梵天王は三千大千世界に主たり。是の佛弟子は能く心を生じ變化して塔を起て、高さ梵天に至り、三千大千世界に滿つ。或は菩薩ありて陀羅尼門、諸の三昧門を得、深く六波羅蜜「多」を行するが故に、佛の滅度の後、能く七寶の塔を起て、三千大千世界に滿つ。滿つとは、其の多きを擧ぐるが故に間を言はず、間を容れず。後に一一の衆生と言ふは、施主多きが故に

福徳多し。佛は是の中に自ら福を得るの因縁を説きたまへり。十善道より乃ち一切種智に至るまでは皆般若波羅蜜(多)の中に攝在し、是の法を和合するを、般若波羅蜜(多)と爲す。是の般若の中より、佛のみを出生するすら、尙ほ當に供養すべし。何に況んや、三乘及び人天の中の樂を出生するは、皆な般若波羅蜜(多)に由りて有るを、而も供養せざらんや。舍利は是れ無記法にして、是れ諸の善法の所依止の處なり。故に後に乃ち能く、人に果報を與へ、般若波羅蜜(多)を行じて、即時に果を得、後にも亦た報を得。

述誠品第三十三を釋す。

釋

爾の時、三佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、是の諸の善男子善女人は、是の般若波羅蜜(多)を書し、經卷を持し、受學し、親近し、讀誦し、説き、正憶念し、加ふるに、復た華香、瓔珞、搗香、澤香、幢蓋、妓樂を供養して、當

に無量、無數、不可思議、不可稱量、無逸の福徳を得べし。何となれば、諸佛の一切

智、一切種智は、皆な般若波羅蜜(多)の中より生じ、諸の菩薩摩訶薩の禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)も、皆な般若波羅蜜(多)の中より生じ、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も、般若波羅蜜(多)の中より生じ、諸佛の五眼も、皆般若波羅蜜(多)の中より生じ、衆生を成就し、佛世界を淨む、道種智、一切種智、諸佛の法も、皆般若波羅蜜(多)の中より生じ、聲聞乘、辟支佛乘、佛乘も、皆般若波羅蜜(多)りより生ず。

【三】此の品には、前に帝釋の般若供養の功徳の大なるを説けるを、佛印可して、書寫し受持して、世に在らしむる功徳を説けり。他本には述成品に作れり。

【三】寶塔供養の功徳の、受持般若のそれに及ばざるとは、百千萬分の一のみにあらざるなり。

是を以ての故に、橋尸迦よ、善男子善女人の、是の般若波羅蜜(多)を書し、經卷を受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念し、加ふるに復た華香、乃至妓樂を供養するは、前の七寶の塔を供養するに過出すると、百分、千分、千億萬分、乃至算數譬喻も及ぶ能はざる所なり。何となれば、橋尸迦よ、若し般若波羅蜜(多)に在れば、佛寶、法寶、比丘僧寶も、亦た終に滅ぜず。若し般若波羅蜜(多)世に在れば、十善道、四禪、四無量心、四無色定、檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)四念處乃至十八不共法、一切智、一切種智皆な世に現す。若し般若波羅蜜(多)世に在れば、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天乃至阿迦尼吒の諸天、須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、菩薩摩訶薩、無上佛道、轉法輪、衆生を成就し、佛世界を淨むること有ればなり。

【三】第九問、智度の相、若し一切の諸觀滅し、語言の道斷へ、不生不滅にして、虚空の相の如くならば、何故に般若波羅蜜(多)の體性は、佛あるも、佛なきも、常住不滅なり。此に世に在りと言ふは、所謂、般若の經卷を修習し、讀誦すべき者にして、是れ因中に果を説くなり。譬へば、井深きに綆短くして及ばざれば、便ち井を失すと云ふも、井は實は失せざるが如し。般若波羅蜜(多)の實相は、深井の如く、經卷

「是の如し、是の如し」と。  
 問うて曰はく、(三)若し般若波羅蜜(多)の相は、一切の諸觀滅し、語言の道斷へ、不生不滅にして、虚空の相の如くならば、今何を以てか、「般若世に在れば三寶滅せず」と説くや。答へて曰はく、般若波羅蜜(多)の體性は、佛あるも、佛なきも、常住不滅なり。此に世に在りと言ふは、所謂、般若の經卷を修習し、讀誦すべき者にして、是れ因中に果を説くなり。譬へば、井深きに綆短くして及ばざれば、便ち井を失すと云ふも、井は實は失せざるが如し。般若波羅蜜(多)の實相は、深井の如く、經卷

を名けて、**經**と爲し、行者の書寫し、修習すること能はざるが故に滅すと云ふ。

問うて曰く、**二四**若し三寶を説いて、一切の善人善法を攝し盡さば、何を以てか、復た般若世に在れば、世間に十善道乃至一切種智有り」と言ふや。

答へて曰はく、此の諸法及び諸道は、皆な廣く

解す。三寶中の義は、佛寶とは、佛法の攝する

所の無學の五衆なり。法寶とは、**二五**第三諦、所

謂、涅槃にして、**二六**四沙門を攝する所の**二七**學

無學の功徳を除き、餘殘の辟支佛の功徳、菩薩

の功徳なり。僧寶とは、四向、四果、學無學の

五衆なり。餘の十善道、四禪、四無量等は、皆

な是の道の方便門なり。是の故に別説す。

**【二四】** 第一〇問、若し三寶の中

に、一切の善人善法を攝し盡さば、何故に般若世に在れば世間に十善道、乃至一切種智ありと言ふや。

**【二五】** 第三諦とは、四諦の中の

第三、滅諦をいふ。滅諦は佛教の理想たる涅槃なり。

**【二六】** 四沙門とは、須陀洹、斯陀舍、阿那舍、阿羅漢なり。

これを向と果とに分ちて、四

向四果といふ。

**【二七】** 學無學。眞理を研究して妄想を斷するを學といひ、眞理究り妄想盡き、更に修學すべき無きを無學といふ。小乘にては、前三果即ち阿那含果までを學とし、阿羅漢果を無學とす。大乘にては、菩薩の十地を學とし、佛果を無學とす。

# 卷の第五十八

## 勸受持品第三十四を釋す。

爾の時、三千大千世界の有ゆる四天王天、乃至阿迦尼吒天、釋提桓因、諸天に語りて言はく、「應に是の般若波羅蜜(多)を受くべく、應に持すべく、應に親近すべく、應に讀誦して、説き、正憶念すべし。何となれば、三般若波羅蜜(多)をば受持し、乃至、正憶念するが故に、一切の修集する所の善法をば當に具足滿じ、諸天衆を増益し、阿修羅を減損すべし。諸天子、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念するが故に佛種斷ぜず、法種、僧種斷ぜざるが故に、世間に便ち檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)ありて、皆世に現じ、四念處乃至十八不共法、菩薩の道皆な世に現じ、須陀洹果、斯陀含果、阿那

含果、阿羅漢果、辟支佛道、佛道、須陀洹、乃至佛菩提世に現すればなり」と。

爾の時、佛釋提桓因に告げ給はく、「橋尸迦よ、汝當に是の般若波羅蜜(多)を受持し、讀誦して、説き、正憶念すべし。何となれば、三般若波羅蜜(多)をば受持し、乃至、正憶念するが故に、一切の修集する所の善法をば當に具足滿じ、諸天衆を増益し、阿修羅を減損すべし。諸天子、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念するが故に佛種斷ぜず、法種、僧種斷ぜざるが故に、世間に便ち檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)ありて、皆世に現じ、四念處乃至十八不共法、菩薩の道皆な世に現じ、須陀洹果、斯陀含果、阿那

含果、阿羅漢果、辟支佛道、佛道、須陀洹、乃至佛菩提世に現すればなり」と。

爾の時、佛釋提桓因に告げ給はく、「橋尸迦よ、汝當に是の般若波羅蜜(多)を受持し、讀誦して、説き、正憶念すべし。何となれば、三般若波羅蜜(多)をば受持し、乃至、正憶念するが故に、一切の修集する所の善法をば當に具足滿じ、諸天衆を増益し、阿修羅を減損すべし。諸天子、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念するが故に佛種斷ぜず、法種、僧種斷ぜざるが故に、世間に便ち檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)ありて、皆世に現じ、四念處乃至十八不共法、菩薩の道皆な世に現じ、須陀洹果、斯陀含果、阿那

- 【一】 此の品には、諸天の讚説を擧げ、更に功德を述べて、受持因縁を説く。品名を或は勸持品ともいふ。
- 【二】 般若を受持すれば、諸天を増益し、阿修羅を減損し、三寶の種子を斷ぜざらしむ。
- 【三】 般若を誦すれば、阿修羅の鬪諍止む。
- 【四】 五死は五衰ともいふ。諸天の命終の時現るる相なり。
- (一) 華鬘萎ゆ。
- (二) 腋下に汗出づ。
- (三) 蠅來りて身に著く。
- (四) 他天の己が座處に坐するを見る。
- (五) 自ら本座を樂ます。

四 五死の相現る

は、當に、不如意處に墮すべし。汝當に其の前に於いて、般若波羅蜜(多)を誦讀すべし。是の諸の天子、天女は、般若波羅蜜(多)を聞き、功德力の故に、還つて本處に生ぜん。何となれば、般若波羅蜜(多)を聞くは、大利益あればなり。

復次に、橋戸迦よ、若し善男子善女人、若くは諸の天子、天女ありて、是の般若波羅蜜(多)經を聞くのみなるも、是の功德の故に、漸く當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。何となれば、橋戸迦よ、過去の諸佛及び弟子は皆、是の般若波羅蜜(多)を學し、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に入ればなり。橋戸迦よ、未來世の諸佛、今現在十方の諸佛及び弟子も、皆

是の般若波羅蜜(多)を學して、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に入らん。何となれば、橋戸迦よ、是の般若波羅蜜(多)は、一切の善法、若くは辟支佛法、若くは佛法を攝すればなり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は是れ大明咒なり、無上明咒なり、無等等明咒なり。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は、能く一切の不善法を除き、能く一切の善法を興ふればなり」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「是

の如し、是の如し。橋戸迦よ、般若波羅蜜(多)は、是れ大明咒なり、無上明咒なり、無等等明咒なり。何となれば、橋戸迦よ、過去の諸佛は、是の明咒に因るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、未來世の諸佛、今現在十方の諸佛も、亦た

是の明咒に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。是の明咒に因るが故に、世間に便ち十善道あり。便ち四禪、四無量心、四無色定あり。便ち檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、四念處乃至十八不共法あり。便ち法性、如法、相法、住法、位

實樂あり。便ち五眼、須陀洹果乃至阿羅漢、辟支佛道、一切智、一切種智あればなり。橋戸迦よ、菩薩摩訶薩の因縁の故に、十善世に出て、四禪、四無量心乃至一切種智、須陀洹乃至諸佛世間に出づること、譬へば、滿月にして照明なれば、星

宿も亦た能く照明なるが如し。是の如く、橋戸迦よ、一切世間の善法、正法、十善乃至一切種智は若し諸佛出て給はざる時

【五】 不如意處は惡處なり。  
【六】 般若の力によりて、十善諸禪等、世に出現す。

は、皆な菩薩より生ず。是の菩薩摩訶薩の方便力は、皆な般若波羅蜜(多)より生ず。菩薩摩訶薩は、是の方便力を以て、檀波羅蜜(多)乃至禪波羅蜜(多)、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法を行じ、聲聞辟支佛地を證せず、衆生を成就し、佛世界を淨め、壽命を成就し、世界を成就し、菩薩眷屬を成就し、一切種智を得るは、皆な般若波羅蜜(多)より生ず。

復次に、橋戸迦よ、七若し善男子、善女人は般若波羅蜜(多)を聞いて、受持し、親近し、乃至正憶念せば、是の人は、當に今世後世の功徳を得べし」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念せば、今世の功徳を得るや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「若し善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念せば、終に毒に中りて死せず、兵刃も傷けず、水火も害せず、乃至四百四病も中ること能はざる所なり。其の宿命、業報を除く。

【七】般若によりて今世後世の功徳を得。

復次に、橋戸迦よ、若し官事の起ること有らんに、是の善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を讀誦するが故に、往いて官所に到るも、官は譴責せざらん。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の威力の故なり。若し善男子、善女人、是の般若波羅蜜(多)を讀誦して、王所、若くは太子、大臣の所に到らんに、王及び太子、大臣は、皆な歡喜し、問訊し、意を和けて、與に語らん。何となれば、是の諸の善男子、善女人は、常に慈悲、喜捨の心ありて、衆生に向へばなり。橋戸迦よ、若し善男子、善女人、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念せば、是の如き等の種種の今世の功徳を得。

橋戸迦よ、何等か是れ善男子、善女人の後世の功徳なるとは、是の善男子、善女人は、終に十善道、四禪、四無量心、四無色定、六波羅蜜(多)、四念處乃至十八不共法を離れず、是の人は終に三惡道に墮せずして、身を受くると完具なり。終に貧窮、下賤、工師、廁を除く人、死人を擔ふ家に生ぜず。常に三十二相を得、常に諸の現在の佛界に化生することを得、終

に菩薩の神通を離れず。若し一佛界より、一佛界に至りて、諸佛を供養し、諸佛の法を聽きたてまつらんと欲せば、即ち意に隨つて遊歩所の佛界を得、衆生を成就し、佛世界を淨め、漸く阿耨多羅三藐三菩提を得。橋戸迦よ、是を後世の功德と名く。是を以ての故に、橋戸迦よ、善男子善女人は應當に般若波羅蜜(多)を受持し、親近し、讀誦して説き、正憶念し、華香乃至妓樂を以て供養し、常に薩婆若の心を離れざるべし。是の善男子、善女人は、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至りて、今世後世の功德を成就することを得。

論

釋して曰はく、佛は是れ法王にして、般若波羅蜜(多)を受持する者を讚歎し已りて、次に天王

釋讚じ、「天王」釋讚じ已りて、今次に諸天讚(歎)す。多衆の讚を以ての故に、人をして信心轉た深からしめ、是の言を作さく、「應に是の般若波羅蜜(多)を受持すべし」と。此の中に受持の因縁、諸の功德を修し、諸天を増益し、阿修羅を減損し、三寶を斷せず、六波羅蜜(多)等の諸の功德、世に出現するを説きたまへり。爾の時、佛、諸天の讚を可とし、「天王」釋に告げて言はく、「汝、是の般若波羅蜜(多)を受持せよ」と。此の中に因縁を説きたまはく、「若し阿修羅惡心を生じて三十三天と共に闘はんと欲せんに、汝、爾の時、般若を讀誦せば、惡心即時に滅せん。若し二陣相對する時、般若を讀誦せば、阿修羅即ち退き去らん」と。

問うて曰はく、若し爾らば、何を以てか常に般若を誦して、阿修羅の惡心をして生ぜざらしめざ

【八】第一問、讀般若の時、阿修羅退出せば、何故に常に般若を誦して、兩陣相對せしむることを中止せざるや。

るや、何が故に乃ち兩陣をして相對せしむるや。答へて曰く、諸天は多く福樂に著し、染欲の心利にして、般若に大功徳あることを知ると雖も、常に誦すること能はざるが故に、又切利天は、不淨業の因縁を以ての故に、怨敵あることを致し、鬪はざることを得ず。諸天は命を終らんと欲する時、五死の相現す。一には華冠萎み、二には腋下より汗出で、三には蠅來りて身に著き、四には更に天ありて己が座處に坐するを見、五には自ら本座を樂します。諸天は是の死相を見て、念じて天樂を惜み、惡處に生ずべきことを見て、心に憂毒を懷く。爾の時、若し般若波羅蜜「多」の實相と諸法の虚誑、無常、空寂なるを聞き、是の佛法を信せば、心清淨なるが故に、還つて本處に生せん。是の天人は但還つて本處に生ずるのみにあらず、般若を聞くを以ての故に、世世に福樂を受け、漸く無上道むじやうじやうを成せん。此の中の因縁は經中に説くが如し。般若波羅蜜「多」を大明咒と爲すとは是なり。

問うて曰はく、(一〇)釋提桓因は、何を以ての故に、般若を名けて大明咒と爲すや。答へて曰はく、諸の外道の聖人には、種種の咒術ありて、民人を利益し、是の咒を誦するが故に、能く意の欲する所に隨ひ、諸の鬼神、諸の仙人をして、是の咒あらしむるが故に、大に名聲を得、人民歸依す。咒術を貴ぶが故なり。是を以て帝釋、佛に白して言さく、「諸の咒術の中に、般若波羅蜜「多」は、是れ大咒術なり。何となれば、能く常に衆生に道德の樂を與ふればなり。餘の咒術は樂の因縁を以て能

【九】 天人の五衰、經論の所説一ならず。本論も亦た其一如り。

【一〇】 第二問、般若を大明咒と名くる理由如何。

煩惱を起し、又不善業の故に三惡道に墮す」とし。

復次に、餘の咒術は能く貪欲、瞋恚に随つて自在に惡を作し、是の般若波羅蜜(多)の咒は、能く禪定、佛道、涅槃の諸の著を滅す。何に況んや、貪、恚の癡病をや。是の故に、名けて大明咒、無上咒、無等等咒と爲す。復次に是の咒の能く人をして老病死を離れしめ、能く衆生を大乘に立て、能く行者をして一切衆生の中に最大ならしむ。是の故に大咒と言ひ、能く是の如く利益するが故に、名けて無上と爲す。先づ仙人所作の咒術あり、所謂、能く他人の心を知る咒を  
〔一〕 抑又尼の意義。  
〔二〕 捷陀梨の意義。  
〔三〕 般若を無等等と名くる理由。

行し變化する咒を 捷陀梨と名け、能く壽に住すること千歳、萬歳に過ぐる咒は、諸咒の中に於いて等しきもの無し。此の無等なる咒術の中より、般若波羅蜜(多)は、過出すること無量なるが故に無等等と名く。  
復次に、諸の佛法を無等と名け、般若波羅蜜(多)は佛を得るの因縁なるが故に、無等等と言ふ。復次に、諸佛は一切衆生の中に於いて無等と名け、是の般若の咒術は佛の所作なるが故に、無等等咒と名く。復次に、此の經の中に自ら三咒の因縁を説く。所謂、是の咒は能く一切の不善法を捨て、能く一切の善法を與ふ。佛は其の歎する所に順じたまふが故に言はく、「是の如し、是の如し」と。亦た更に其の讚する所を廣くしたまふ。所謂、般若に因るが故に、十善道乃至諸佛を出生す。是の般若波羅蜜(多)は、菩薩に屬するが故に、佛は譬喩を説きたまはく、「諸佛は

能く大に無明の闇を破したまふが故に、満月の如く、菩薩は暗を破すること〔佛に〕如かざるが故に、星宿の如し」と。夜中に見る所あるは、皆な是れ星月の力なるが如く、世間生死の夜中に知見する所あるは、皆な是れ佛菩薩の力なり。若し世に佛なければ、爾の時、菩薩は法を説いて、衆生を度し、人天の樂中に著するより、漸漸に涅槃の樂を得せしむ。菩薩の有する所の智慧は、皆な是れ般若波羅蜜〔多〕の力なり。

復次に、是の菩薩は、三十七品、十八空を行じて、諸法の畢竟取るべからざることを知ると雖も、亦た聲聞辟支佛の道を證せず、而も能く還つて善法を起し、衆生を教化し、佛世界を淨め、壽命を具足する等は、皆是れ方便般若波羅蜜〔多〕の力なり。若し是の人、能く般若を受持し、乃至、正憶念せば、今世後世の功德を得ん。今世の功德とは、所謂、終に毒に中りて死せざる等なり。

【四】 第三問、已に横死せざることを説き、今また更に之を説くは何故なるか。

【五】 二種の刀・毒・水・火。

問うて曰はく、〔四〕先に已に横死せざることを説けり、今何を以てか更に説くや。答へて曰はく、已に般若波羅蜜〔多〕を説けるは、一會の中に説かず。此は後來の者の爲に更に爲に説くなり。復次に、刀、毒、水、火に二種あり。他の作るあり、自ら作るあり。先には他の兵、毒、水、火等を加ふることを説き、今は自ら傷げざることを爲す。何を以てか之を知る、次に四百四病を説くが故に知るなり。上には人の其の便を得ること能はざることを説くと雖も、其の人の還つて恭敬供養することを

と説かず。(二六) 四百四病とは、四大、身と爲りて常に相侵害し、一一の大的の中に百一の病起る。冷病に二百二あり。水風起るが故なり。熱病に二百二あり。地火起るが故なり。火は熱相、地は堅相にして、堅相の故に消し難く、消し難きが故に、能く熱病を起す。血肉筋脈骨髓等は、地の分なり。其の業報を除くとは、一切法は、和合の因縁より生じて、作者あること無し。作者あること無きが故に、必ず業報を受け佛の救ひたまふこと能はざる所なり、何に況んや、般若をや必ず業報を受け、必ずしも業報を受けざることは、先に已に説けり。官事起るとは、般若波羅蜜(多)を誦する力の故に、起るに随つて皆な滅す。

問うて曰はく、(二七) 先に人は便を得ること能はざることを説けり。今何を以てか、更に説くや。答へて曰く、先に人の便を得ること能はざることを説くと雖も、國王、大臣等既に便を得ること能はず、還つて復た恭敬、供養することを説かず。何となれば、是の菩薩は、常に慈悲喜捨の心ありて、衆生に向へばなり。後世の功德とは、世世に生ずる所、常に十善道等を離れず。是の故に常に惡道に墮せず。是の人は惡心を折伏するが故に、身を受くること完具し、下賤等の家に生せず、佛の學したまふ所の道を學するが故に、變化の身を得、佛に似て三十二相、八十隨形好あり。常に現在の佛國に化生するを得とは、心の到る所に随つて十方の世界に諸佛を供養したてまつり、諸法を聽受し衆生を教化し、漸漸に佛道を得ること能はざるを説く理由如何。

【二六】 四百四病の義解。

【二七】 第四問、重ねて人の便を得ること能はざるを説く理由如何。

成ずることを得るなり。是の故に、行者は聽聞し、受持し、乃至正憶念して、薩婆若の心を離れず。是の如くにして今世後世の功德を得るなり。

二八 梵志品第三十五を釋す。

爾の時、諸の外道の梵志、佛の所に來向して、佛の「一九」短を求めんと欲す。是の時、釋提桓因心に念すらく、「是の諸の外道の梵志、佛の所に來向して、佛の短を求めんと欲す。我今當に、佛より受くる所の般若波羅蜜(多)を誦念し、是の諸の外道の梵志等をして、終に中道にして、礙斷を作すこと能はざらしめ、般若波羅蜜(多)を説かしむべし」と。

釋提桓因、是の念をなし已りて、即ち般若波羅蜜(多)を誦す。是の時、諸の外道の梵志は、遙に佛を遠り、道を復して還り去る。時に舍利弗心に念すらく、「是の中何の因縁によりてか、諸の外道の梵志は、遙に佛を遠り、道を復して還り去るや」と。

佛、舍利弗の心に念(する所を)知りて、舍利弗に告げたまはく、「是の釋提桓因は、

般若波羅蜜(多)を誦念す。是の因縁を以ての故に、諸の外道の梵志は、遙に佛を遠り、道を復して還り去れり。舍利弗よ、我は是の諸の外道の梵志の一念の善心をも見ず。是の諸の外道の梵志は、但惡心のみを持し、來りて佛の短を求めんと欲す。舍利弗よ、我れ般若波羅蜜(多)を説く時、一切世間、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは沙門衆、婆羅門衆の中に、惡意を持し來りて、能く短を得る者あることを見ず。何となれば、舍利弗よ、是の三千大千世界の中の、諸の四天王

【一八】 此の品には、般若ばよく惡魔外道の害する能はざる現證を擧ぐ。他本には遣異品といふ。異心の外道を遣去するの謂ひなり。

【一九】 佛の短とは、相好、事業、説法等に於ける佛の短處缺點をいふ。今は殊に靈山に於ける諸法皆空を力説する般若の缺點を指すなり。

天、乃至阿迦尼吒天、諸の聲聞、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩は、是の般若波羅蜜(多)を守護すればなり。何となれば、是の  
諸の天人は、皆な般若波羅蜜(多)の中より生ずるが故なり。

復次に、舍利弗よ、十方如恆河沙等の世界の中の諸佛、及び聲聞、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸の天、龍、鬼人等は、皆な是の  
般若波羅蜜(多)を守護す。何となれば、是の諸佛等は、皆な般若波羅蜜(多)の中より生ずればなり」と。爾の時、惡魔心に  
念すらく、「今佛の四衆、現前し集會し、亦た欲界世界の諸天子もあり。是の中に、必ず菩薩摩訶薩ありて、記を受け、當  
に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。我は樂ら佛の所に至りて其の意を破壞すべし」と。

是の時惡魔は四種の兵を化作して、佛の所に來至す。爾の時、釋提桓因、心に念す  
らく、「是の四種の兵は、或は是れ惡魔の化作して、佛に來り向はん」と欲す。何となれ  
ば、是の四種の兵の裝飾は、(10)類婆沙羅の四種の兵も類せざる所、(11)波斯匿王の四種  
の兵も亦た類せず、諸の釋子の四種の兵、諸の梨昌の四種の兵も皆な亦た類せず。

是の惡魔は、長夜に佛の便を索めて衆生を惱まさんと欲す。我は樂ら般若波羅蜜(多)  
を誦念すべし」と。釋提桓因、即時に般若波羅蜜(多)を誦念するに、惡魔は誦する所を聞き、漸漸に道を復して還り去る。  
爾の時、會中の四天王の諸天子乃至阿迦尼吒の諸天子は天華を化作し、虚空の中より而も佛の上に散じて、是の言を作す、  
「世尊よ、願はくば、般若波羅蜜(多)をして、久しく閻浮提に住せしめたまへ。何となれば、閻浮提の人、般若波羅蜜(多)  
を受持せば、所住の時に隨つて佛寶滅せず、法寶、僧寶も亦た住して滅せざればなり」と。

爾の時、十方如恆河沙等の世界の中の諸天も、亦華を散じて是の言を作す、「世尊よ、願はくば、般若波羅蜜(多)をして、  
久しく閻浮提に住せしめたまへ、若し般若波羅蜜(多)久しく住せば、佛法僧も亦た當に久しく住すべく、亦た分別して菩薩

- 【10】 Bimbisara  
Bimbisara  
Prasenajit
  - 【11】 Licchavi  
Licchavi
- に作る。摩伽陀の東北に於ける國なり。

摩訶薩の道を知らん。復次に、所在の住處に善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)の經卷を書せば、是の處ば則ち照明と爲り已りて、衆冥を離るればなり」と。

佛、釋提桓因等の諸の天子に告げ給はく、「是の如し、是の如し。橋尸迦及び諸の天子、閻浮提の人、般若波羅蜜(多)を受持し、所住の時に隨つて、佛寶是の如く住し、法寶、僧寶も亦是の如く住し、乃至所在の住處、善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)の經卷を書持せば、是處ば則ち照明と爲り已りて衆冥を離る」と。

爾の時、諸の天子は天華を化作し、佛の上に散じて、是の言を作す、「世尊よ、若し善男子、善女人ありて、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念せば、魔、若くは魔天は、其の便を得ること能はず、世尊よ、我等も亦た當に、是の善男子、善女人を擁護すべし。何となれば、若し善男子善女人にして、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念すれば、我等は是の人を視て、則ち是れ佛とし、若くは佛に次ぐとすべければなり」と。

是の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女人、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念せば、當に知るべし、是の人は、先世に佛所に於いて、功德を作すこと多く、諸佛に親近して、供養したてまつり、善知識の爲に護らる。世尊よ、諸佛の一切智は、應當に般若波羅蜜(多)の中より求むべく、般若波羅蜜(多)は、亦當に一切智中より求むべし、何となれば、般若波羅蜜(多)は、一切智に異ならず、般若波羅蜜(多)に異ならず、般若波羅蜜(多)と一切智とは、不二不別なればなり。是の故に、我等は是の人を視て、即ち是れ佛とし、若くは佛に次ぐとす」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。橋尸迦よ、諸佛の一切智は、即ち是れ般若波羅蜜(多)は、即ち是れ一切智なり。何となれば、橋尸迦よ、諸佛の一切智は般若波羅蜜(多)の中より生じ、般若波羅蜜(多)は一切智に異ならず、一切智は般若波羅蜜(多)に異らず、般若波羅蜜(多)と一切智とは不二不別なればなり」と。

論 釋して曰はく、上品の中には、般若を聞受する者には、魔、若くは魔民、外道の梵志も、其の

便を得ざるを説けり。今は現に證驗せんと欲するが故に、威神の感を以て、衆魔及び諸の外道を致

す。是を以て、外道の梵志は是の念を作す、「佛は耆闍崛山の中に在りて、般若波羅蜜〔多〕、所謂、

諸法畢竟空、無所有を説き、以て十方の衆生を引致す。我等は共に往き、難問して此の空論を破せ

ん。其の論若し破せば、佛は則ち自ら退き、我等は、還つて本の如くなることを得ん」と。是の諸の

外道は、但邪見、惡心、憍慢あるが故に、來りて是の畢竟清淨なる般若波羅蜜〔多〕の過罪を出ださん

と欲す。譬へば、狂人の虚空を中傷せんと欲して、徒に自ら疲苦するが如し。爾の時、帝釋は、佛の

教の如くに般若を受持するに外道は便を得ること能はず。今實を驗して、

人をして信知せしめんと欲するが故に、帝釋は無量の福德を成就し、天の

利根を以て深く般若を信じ、即時に誦念するに、般若の力を得るが故に、外道は遙に佛を遶り、道を

復して而して去れり。

問うて曰はく、(三)何を以てか直に還らず、方に佛を遶りて而して去るや。答へて曰はく、般若の神

力を以ての故に、遠處に於いて降伏し、是の念を作す、「佛の衆〔多〕の威徳は、甚だ大なり。我等は

今往いて、徒に自ら困辱し、成辦する所なし。我等今若し遙に見て直に去らば、人は當に我等は怯弱

にして、來りて而も空しく去ると謂ふべし」と。是を以ての故に、詐りて供養を現じ、佛を遶り、道

【三】 第五問、直に還らず、佛を遶りて去るは何故なるか。

を復して而して去れり。舍利弗は本是れ梵志なり。諸の外道の遠處にして、而して去るを見、心に少  
 しく憐愍し、小事なるを以ての故に三昧に入るも、求め知ること能はず、是の念を作す、「此の諸の  
 外道は、何の因縁によりて來り、竟に度を蒙らずして、而して空しく還り去るや」と。佛の言はく、  
 「是れ般若波羅蜜(多)の力なり」と。舍利弗、意に念ずらく、「佛は般若波羅蜜(多)を以て、事として  
 濟したまはざる無し。云何が此の外道をして空しく來りて、而して去らしめたまへるや」と。佛は舍  
 利弗の念する所を知しめし、舍利弗に語りたまはく、「是の諸の梵志は、乃至一念の善心もなく、但  
 惡意を持し、邪見著心にして、諸法の定相を求めんと欲す。是の故に度に中らず。譬へば、必ず死す  
 る病には、良醫神藥ありと雖も、救濟すること能はざるが如し。舍利弗よ、般若波羅蜜(多)を説く時  
 は、但此の梵志のみに非ず、一切世間の人、惡心を持し來るも便を得ること能はず。何となれば、一  
 切の諸佛及び諸の菩薩諸天は、常に般若を守護すればなり。何となれば、諸佛・菩薩・天人は是の念を  
 作す、「我等は皆般若より生ずるが故に」と。魔來り、難問して、破壊せんと欲するも、亦た是の如  
 し。是の時に、會中の諸の天子は、先には般若の功德を聞き、今は現に證驗して、心大に歡喜し、華  
 を化して供養し、是の願を作す、「般若波羅蜜(多)をして、久しく閻浮提に住せしめんと」。是の事は  
 下に廣く説くが如し。佛は即ち印可したまふに、諸天は佛前に於て、自ら誓つて言はく、「行者若し  
 般若波羅蜜(多)を聞いて、受持し、乃至正憶念せば、我等は、常に當に守護すべし。所以は何となれ

ば、我等は是の人を視ること、佛の如くし、若くは佛に次げばなり」と。佛の如しとは、法性身の阿鞞跋致に住して、無生法忍を得るより乃ち十地に至るまでなり。佛に次ぐとは、肉身の菩薩にして、能く般若波羅蜜〔多〕及び其の正義を説く。爾の時に、帝釋は先世の因縁もて、集むる所の功德、智慧を以て是の菩薩を讚す。此の中に更に讚歎の因縁を説けり。諸佛の一切種智は應に般若の中より求むべしとは、菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行すること具足するが故に、佛を得る時、般若は變じて一切種智と成る。故に一切種智は、當に般若の中より求むべしと言ふ。佛は能く般若波羅蜜〔多〕を説きたまふが故に、般若波羅蜜〔多〕は當に一切種智の中より求むべしと言ふ。譬へば乳變じて酪と爲れば、乳を離れて酪なきも、亦乳は即ち是れ酪なりと言ふことを得ざるが如く、般若波羅蜜〔多〕變じて一切種智と爲れば、般若を離れて亦た一切種智なきも、亦般若は即ち是れ一切種智なりと言ふことを得ず。般若は一切種智の與に生因と作り、一切種智は般若の與に説因と作り、因果相離れざるが故に不二不別と言ふ。

二四 尊導品第二十六を釋す。

經

爾の時、三慧命阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以ての故に、檀波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、羼提波羅蜜〔多〕、

【二四】此の品は初段に、阿難、般若を稱譽する所以を問ひ、佛、諸法の尊導たるが故なりと答へ給ふ。後段に、般若を受持する功德の盡きざるを明す。他本に阿難稱譽品ともいふ。

【二五】般若を稱譽するは、諸法の最尊たるによる。

毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)乃至十八不共法を稱譽せずして、但般若波羅蜜(多)のみを稱譽したまふや」と。佛阿難に告げたまはく、「般若波羅蜜(多)は五波羅蜜(多)乃至十八不共法に於いて尊導たり。阿難よ、汝が意に於いて云何

(三) 薩婆若に廻向せざる布施を檀波羅蜜(多)と稱し得るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。薩婆若に廻向せざる尸羅、羶提、毗梨耶、禪、智慧は、是れ般若波羅蜜(多)なりや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「是を以ての故に、般若波羅蜜(多)

は、五波羅蜜(多)乃至十八不共法に於て尊導たることを知る。是の故に稱譽す」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が布施は薩婆若に廻向して檀波羅蜜(多)と作り、乃至般若波羅蜜(多)と作る

や」と。佛、阿難に告げ給はく、「無二法を以て布施は、薩婆若に廻向せば、是を檀波羅蜜(多)と名け、不生不可得を以て、薩婆若に廻向する布施、是を檀波羅蜜(多)と名け、不生不可得を以て、薩婆若に廻向する智慧、是を般若波羅蜜(多)と名く」と。

阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が不二法を以て、薩婆若に廻向する布施、是を檀波羅蜜(多)と名け乃至不二法を以て、薩婆若に廻向する智慧、是を般若波羅蜜(多)と名く」と。佛、阿難に告げ給はく、「色は不二法なるを以ての故に、受・想・行・識は不二法なるが故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提は不二法なるが故に」と。世尊よ、云何が色は不二法、乃至阿耨多羅三藐三菩提は不二法なるや」と。佛の

言はく、「色、色相は空なり。何となれば檀波羅蜜(多)と色とは、不二不別なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提は檀波羅蜜(多)とは、不二不別なればなり。五波羅蜜(多)も亦た是の如し。是を以ての故に、阿難よ、但た般若波羅蜜(多)のみを稱譽す、

五波羅蜜(多)乃至一切種智に於いて尊導たり。

【三】 尊導とは、最尊の導師の意。般若が三界より導き出し、三乘に到らしむるが故なり。  
【三】 一切智に廻向せざれば、有限の一定法となり、大ならず、度脱を得ざるなり。

阿難よ、譬へば、地の如し、種を以て中に散ずるに、因縁の和合を得て便ち生ず。是の諸の種子は、地に依りて而して生ず。是の如く、阿難よ、五波羅蜜(多)は、般若波羅蜜(多)に依りて生ずることを得、四念處乃至一切種智も、亦般若波羅蜜(多)に依りて生ずることを得。是を以ての故に、阿難よ、般若波羅蜜(多)は、五波羅蜜(多)乃至十八不共法に於て尊導たりと。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の説きたまへる、善男子善女人の般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念する者の(二)功德は、未だ盡きず。何となれば、般若波羅蜜(多)をば受持し、乃至正憶念すれば、則ち三世諸佛の無上道を受けばくなり。何となれば、陸婆若を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)の中より求むべし。世尊よ、般若波羅蜜(多)を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)の中より求むべければなり。世尊よ、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念するが故に、十善道世に現じ、四禪、四無量心、四無色定乃至十八不共法世に現す、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念するが故に、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天乃至阿迦尼吒の諸天有り。般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念するが故に、便ち須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩あり。般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念するが故に、諸佛は世間に出てたまふ」と。

爾の時に、佛、釋提桓因に告げたまはく、「橋戸迦よ、善男子、善女人般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念せば、我は但だ爾所の功德あるのみと説かず。何となれば、橋戸迦よ、是の善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念し、陸婆若の心を離れずんば、(二五)無量の戒、(三〇)衆成就し、定衆、慧衆、解脱衆、解脱智見衆を成就すればなり。

【二六】 功德は未だ盡きずとは、般若の功德の實に無量なるをいふ。

【二五】 無量の戒。名字戒は毗尼の中の二百五十、略説戒は八萬四千、廣説戒は無量無邊、一日受るより盡未來際に至るまで、種種の戒あるを無量の戒といふ。

【三〇】 衆とは、新譯の所謂蘊の義なり、以下同じ。

復次に、憍尸迦よ、是の善男子、善女人、能く般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念し、薩婆若の心を離れずんば、當に知るべし、是の人は佛の如しと爲すことを。復次に、憍尸迦よ、一切の聲聞、辟支佛の有する所の、戒衆、定衆、慧衆、解脫衆、解脫知見衆は、是の善男子善女人の、戒衆乃至解脫知見衆に及ばざること、百分、千分、千億萬分乃至算數、譬喻も及ぶ能はざる所なり。何となれば、善男子善女人は、聲聞、辟支佛地中に於て、心に解脫を得、更に大乘の法を求めざればなり。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子善女人あり、般若波羅蜜(多)の經卷を書持し、華香、瓔珞、乃至妓樂(を以て)供養し、恭敬し、尊重するも、亦た今世、後世の功德を得しと。爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、是の善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念し、薩婆若の心を離れずして、般若波羅蜜(多)を供養し、華香乃至妓樂(を以て)恭敬し、尊重せば、我れ常に當に是の人を守護すべし」と。

釋して曰く、阿難は多聞の方もて、能く空を分別すと雖も、而も未だ欲を離れざるが故に、深く入ること能はず。常に佛に侍したてまつると雖も、數數空事を問難せず。今佛は般若波羅蜜(多)を讚歎し、亦た行者をも讚歎したまふ。是の故に、阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以てか、餘の波羅蜜(多)、及び諸法を稱歎せずして、而も獨り般若波羅蜜(多)を稱歎したまふや」と。

【三】第六問、佛は初より常に六度の名を説き給へり。然るを今阿難は何故に稱説し給はずといふか。

問うて曰く、(三)佛は初より以來、常に六波羅蜜(多)の名を説きたまへり。今阿難は何を以てか稱説し給はずと言へるや。答へて曰く、名字を説くと雖も稱美を爲さず、皆般若の中に入るが爲の故に説

く。佛、阿難に語りたまはく、「一切の有爲法の中、智慧は第一なり、一切の智慧の中、彼岸に度す  
 般若波羅蜜〔多〕は第一なり。譬へば、路を行くに衆の伴ありと雖も、導師は、第一なるか如し。般  
 若も亦た是の如く、一切の善法は、各各方ありと雖も、般若波羅蜜〔多〕は能く示導し、三界を出でて  
 三乘に到る。若し般若波羅蜜〔多〕なければ、布施等の善法を行すと雖も、隨受業行の果報盡くるこ  
 とあり。盡くること有るを以ての故に、尙ほ小乘の涅槃すら得ること能は  
 ず、何に況んや、無上道をや。若し布施等の善法は、能く佛道の相の如  
 く、不二、不生、不滅、不得、不失、畢竟空寂なりと觀せば、是を薩婆若  
 に廻向すと名く。是の布施の福は世世に常に果報を受けて而も盡きず、後  
 に當に一切種智を得べし。布施の如く、一切法も亦た是の如きの相なり。  
 問うて曰はく、佛は何を以てか、不二の因縁を答へずして、還つて不  
 二を以て解したまひしや。答へて曰く、阿難は不二の因縁を問はず、但何  
 の法か不二なると問へり。是の故に佛答へたまはく、色等の諸法は不二なるが故に、般若波羅蜜〔多〕  
 は、能く五事をして、等しく波羅蜜〔多〕と作らしむ。故に但般若波羅蜜〔多〕を稱譽すと。佛は是の義  
 をして、了了に解し易からしめんと欲するが故に、是の喩を作したまふ。譬へば大地の能く萬物を生  
 ずるが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、能く一切善法の種子を持する者なりと。發心より來た、

【三】 路を行くに導師は第一なるが如く、般若が第一なり。  
 【三】 有漏の布施は果報盡き、終に涅槃を得ず。  
 【四】 無漏の布施は果報盡きす、終に涅槃を得。  
 【五】 第七問、佛が不二の因縁を答へずして、還つて不二を以て解し給へる理由如何。

般若波羅蜜〔多〕を除いて、餘の一切の善法は是れ因縁和合する者にして、是の佛道の中に、一心に信  
 忍し精進して、休せず息まず、受けて通達し、壞せざることを欲すれば、是の如き等の法あり。事を  
 成辦することを得る者は、是れ増長の者にして、發心より起りて、諸の波羅蜜〔多〕を學し、一地より  
 一地に至る、乃至佛地是なり。

問うて曰はく、帝釋は何を以ての故に、佛、行者の般若を受持する功德は、未だ盡きずと説きた

まへりと言ふや。答へて曰く、般若波羅蜜〔多〕は、無量無邊なれば、功德

も亦た無量無邊なり。説の未だ究竟せざる中間に、外道、梵志及び魔の來

るが故に、傍に異事に及ぶ。今は還つて續いて聞かんと欲す。帝釋は深く

福德の果報を受け、樂んで般若の功德を聞き、聽くに厭足すること無く、

今更に説くとを聞かんと欲するが故に、自ら因縁を説けり。世尊よ、若し人、般若波羅蜜〔多〕を受持

し、乃至、正憶念せば、則ち三世の諸佛の、無上道の功德智慧を受く。何となれば、般若の中に、應

に一切種智を求むべく、一切種智の中に、應に般若を求むべければなりと。上品の末に説くが如く、

行者、若し般若を受持し、發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求め、衆生を度せんが爲の故に、般若波

羅蜜〔多〕等の諸の功德、所謂る、十善道、乃至十八不共法を集むれば、世間には是の善法の因縁現は

るが故に、刹利の大姓、乃至諸佛有り。佛、天帝に告げたまはく、「是の人は、但上の如き功德

【三】 第八問、帝釋は何故に「佛は受持般若の功德盡きずと説き給へり」と言ふや。  
 【七】 天帝とは、帝釋のことなり。又は天帝釋ともいふ。

を得るのみならず、亦た無量の戒衆等の功徳を得」と。【三八】戒衆とは、是の菩薩は般若波羅蜜【多】を行

し、一切衆生の中に於いて、畢竟無畏施を修するなり。衆生の十方中の數は無量無邊、三世中の數も

亦た無量無邊、六道四生の種類の各各の相も、亦た無量無邊なり。此の無量無邊の衆生の中に於て、

第一に愛樂する所の物、所謂、壽命を施す。是の故に無量戒衆の果報を得。是の如き不殺等の戒は、

但名字を説けば、則ち二百五十なり。毗尼の中に略説すれば則ち八萬四千、廣く説けば則ち無量無邊

なり。是の戒を凡夫の人は、或は一日に受け、或は一世、或は百千萬世【三九】に

受く。菩薩は世世に、一切衆生の中に於いて、無畏を施し、乃ち無餘涅槃

に入るに至る。是を無量戒衆と名く。乃至解脱知見衆も亦た是の如く、義

に隨つて分別す。是の五衆の功徳は、二乘に勝ること計量すべからず。若

し人、【四〇】般若波羅蜜【多】を書寫し供養せば、今世後世の功徳を得。

問うて曰はく、【四一】今世後世の功徳は深重にして、書持供養は輕微なり、

云何が二世の功徳を得るや。答へて曰はく、【四二】供養に二種あり。一には効他の供養、二には深心の供

養なり。般若の功徳を知りて、深心に供養するが故に、二世の功徳を得。是の般若には種種の門あり

て入る。若し聞持し、乃至正憶念する者は、智慧、精進門より入り、書寫し供養する者は、信及び精

進門より入る。若し一心深信なれば、則ち經卷を供養するに勝れたり。若し一心ならざれば、受持

受持

【三八】 戒蘊の義解。  
【三九】 般若を書寫し供養せば、  
現當二世の果報を得。  
【四〇】 第九問、現當二世の功徳  
は深重にして、書持の供養は  
輕微なり。云何が二世の果報  
を得るや。  
【四一】 二種の供養。

すと雖も、而も如かず。

復次に、如意寶珠あり、是れ無記の色法にして、無心無識なり。衆生の福德の因縁を以ての故に生

ず。人ありて供養せば、能く人をして意に隨つて所得あらしむ。何に況んや、般若波羅蜜(多)は是れ

無上の智慧、諸佛の母にして、諸の法寶の中にて、是れ第一の寶なるをや。若し人、所聞の如く、信

受し供養せば、云何が二世の功徳を得ざらん。但、人は一心に供養せず、

又先世の重罪の故に、般若を供養すと雖も、而も上の如き功徳を得ず。般若

若には各なきなり。

總

佛釋提桓因に告げたまはく、「橋戸迦よ(四三二) 是の善男子善女人、般若波羅蜜(多)を讀誦し説かんと欲する時、無量百千の諸天、皆な來りて法を聽く。是の善男子善女人の、

般若波羅蜜(多)の法を説くや、諸の天子は其の臍力を益す。(四三三) 是の諸の法師、若し疲極して法を説くことを欲せざれば、

諸天は其の臍力を益すが故に、便ち能く更に説く。善男子善女人は、是の般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念し華香乃

至妓樂(なを以て)供養するが故に、亦た是の今世の功徳を得。

復次に、橋戸迦よ、(四三四) 是の善男子、善女人は、四部衆の中に於いて、般若波羅蜜(多)を説く時、心に怯弱なく、若し論

難あるも、亦た畏想なし。何となれば、こゝの善男子善女人は、般若波羅蜜(多)の爲に護持せらるればなり。般若波羅蜜(多)

中には、亦た一切法を分別して、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏、若くは善、若くは不善、若くは有

【四三二】 説般若の功徳は臍力を増長す。

【四三三】 誦説の行者は諸天に守護せられて疲勞せず。

【四三四】 説般若の行者は、諸天に守護せらるるが故に、心に怯弱なし。

爲、若くは無爲、若くは聲聞法、若くは辟支佛法、若くは菩薩法、若くは佛法とす。善男子善女人は、内空に住し、乃至、  
無法有法空に住するが故に、能く般若波羅蜜(多)を難する者あるを見ず、亦た難を受くる者を見ず、亦た般若波羅蜜(多)を  
見ざるなり。是の如きの善男子、善女人は般若波羅蜜(多)の爲に護持せらるるが故に、能く難壞する者あること無し。

復次に、善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念する時、没せず、畏れず、怖かざるなり。何となれば、  
是の善男子、善女人は、是の法の没者、恐怖者を見ざればなり。橋戸迦よ、善男子善女人、般若波羅蜜(多)を受持し、  
乃至正憶念し、華香を以て供養し、乃至旃蓋を以てせば、亦た是の今世の功德を得。

復次に、(聖)橋戸迦よ、善男子善女人、般若波羅蜜(多)を受持し、乃至、正憶念し、經  
卷を書持し華香を供養し、乃至旃蓋を以てせば、是の人は父母の爲に愛せられ、宗親、  
知識に念ぜられ、諸の沙門、婆羅門に敬せられ、十方の諸佛及び菩薩摩訶薩、辟支佛、  
阿羅漢乃至須陀洹に愛敬せられ、一切の世間、若くは天、若くは魔、若くは梵及び阿修  
羅等も皆亦た愛敬せん。是の人、檀波羅蜜(多)を行するや、檀波羅蜜(多)斷絶する時あ  
るも無く、尸羅波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)も、亦た斷絶する時あ  
る無し。内空を修して斷ぜず乃至無法有法空を修して斷ぜず、四念處を修して斷ぜず乃至十八不共法を修して斷ぜず、諸の  
三昧門を修して斷ぜず、諸の陀羅尼門を修して斷ぜず、諸の菩薩の神通を修して斷ぜず、衆生を成就し、佛世界を淨むると  
を斷ぜず、乃至一切種智を修して斷ぜず、是の人は亦能く難論、毀謗を降伏す。善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を受持し  
乃至正憶念し、薩婆若の心を離れず、經卷を書持し、華香を供養し、乃至旃蓋もてせば、亦是の今世、後世の功德を得。

復次に、橋戸迦よ、(四六)善男子、善女人、經卷を書持せんに、所住の處に在りて、三千大千世界の中の所有る諸の四天王

【四四】般若を書寫し受持する人は、父母乃至諸佛に愛敬せらるるなり。  
【四六】經卷安置の處には、大徳諸天來臨す。

阿耨多羅三藐三菩提心を發す者は皆是の處に來到し、般若波羅蜜(多)を見て受(持)し、讀誦して説き、供養し禮拜して還つて去る。三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵衆天、梵輔天、梵會天、大梵天、光天、少光天、無量光天、光音天、淨天、少淨天、無量淨天、遍淨天、無陰行天、福德天、廣果天の阿耨多羅三藐三菩提心を發する者も、皆是の處に來到して、般若波羅蜜(多)を見、受(持)し、讀誦して説き、供養し禮拜して還つて去る。淨居の諸天、所謂無量天、無熱天、喜見天、色究竟天も、皆な是の處に來到し、是の般若波羅蜜(多)を見て、受(持)し、讀誦して説き、供養し禮拜して還り去る。

復次に、橋戸迦よ、十方世界の中の諸の四天王天、乃至廣果天、阿耨多羅三藐三菩提心を發する者、及び淨居天、並に餘の諸の天、龍、鬼神、捷闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、亦た來りて、般若波羅蜜(多)を見、受け讀誦し説き、供養し禮拜して還り去る。是の善男子善女人は、應に是の念を作すべし、十方世界の中の諸の四天王天乃至廣果天、阿耨多羅三藐三菩提心を發する者、及び淨居天、並に餘の諸の天、龍、鬼神、捷闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は來りて、般若波羅蜜(多)を見、受け讀誦し説き供養し禮拜するに、我は則ち法を施し已んぬし。

橋戸迦よ、三千大千世界の中の、所有る諸の四天王天乃至阿迦尼吒天、及び十方世界の中の諸の四天王天、乃至阿迦尼吒天、阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は、是の善男子、善女人を護持し、諸惡も(亦)傾を得ること能はず、其の宿命の重罪を除く。

橋戸迦よ、是の善男子善女人も、亦た是の今世の功德を得。所謂、諸の天子は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、皆是の

- 【四七】 捷闍婆 (Gandharva)
- 【四八】 迦樓羅 (Garuda)
- 【四九】 緊那羅 (Kinura)
- 【五〇】 摩睺羅伽 (Mahoraga)

處に來到す。何となれば、橋戸迦よ、諸の天子は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切衆生を救護し、一切衆生を捨てず、一切衆生を安樂にせん」と欲するが故なり」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、善男子善女人は、云何が當に、諸の四天王天、乃至阿迦尼吒天來り、

及び十方世界中の諸の四天王天乃至阿迦尼吒天來りて、般若波羅蜜(多)を見、受け讀誦し説き、供養し禮拜する時を知るべきや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「橋戸迦よ、若し善男子善女人は大なる淨光明を見れば、必ず大徳の諸天ありて來り、般若波羅蜜(多)を見て、受け讀誦し説き、供養し禮拜する時と知らん。

復次に、橋戸迦よ、善男子善女人、若し異妙なる香を聞かば、必ず大徳の諸天ありて來り、般若波羅蜜(多)を見て、受け讀誦し説き、供養し禮拜する時と知らん。復次に、橋戸迦よ、善男子善女人は、淨潔を

行するが故に、諸天、其の處に來到し、般若波羅蜜(多)を見て、受け讀誦し説き、供養し歡喜し禮拜す。是の中に小鬼の輩あらば即時に出て去り、任に堪ふること能はず。是

れ大徳諸天の威徳の故なり。是の大徳諸天來るを以ての故に、是の善男子善女人は、大心を生ず。是を以ての故に、般若波羅蜜(多)の所住の處には、四面に諸の不淨あるべからず。應に燈を燃し、香を燒き、衆の名華を散じ、衆の香を地に塗り、衆の蓋、旛、幢もて、種種に嚴飾すべし。

復次に、(五)橋戸迦よ、善男子、善女人は、法を説く時、終に破滅すること無く、自ら身の輕きを覺え、心樂しみ、法に隨つて優息し、臥し、覺め、安隱にして、諸の惡夢なく、夢中には、諸佛の三十二相、八十隨形好あり、比丘僧に恭敬し圍

遮せられて、法を説くを見、諸佛の邊に在りて法教、所謂、六波羅蜜(多)、四念處乃至十八不共法を、聽受し六波羅蜜(多)の義を分別し、四念處乃至十八不共法をも、亦た其の義を分別し聽受すと見、亦た菩提樹の莊嚴殊妙なるを見、諸の菩薩の

【五】般若の力によりて、身輕く、心樂しく、惡夢を見ず。

菩提樹に趣きて、阿耨多羅三藐三菩提を得るを見、諸佛の成じ已りて、法輪を轉するを見、百千萬の菩薩、共に集りて法を論議し、應に是の如く薩婆若を求むべく、應に是の如く、衆生を成就すべく、應に是の如く、佛世界を淨むべしとするを見。亦た十方の無數百千萬億の諸佛を見、亦た其の名號を聞く。某の方某の界某の佛の、若くは千百千萬億の菩薩、若くは千百千萬億の聲聞に恭敬し、圍遶せられて、法を説くを見る。復た十方の無數百千萬億の諸佛の般涅槃を見、復た無數百千萬億の諸佛の七寶の塔を見、諸塔を供養し、華香乃至旛蓋(を以て)、恭敬し、尊重し、讚歎するを見る。橋戸迦よ、是の善男子善女人は、是の如きの善夢を見、臥して安く、覺めて安し。諸天は其の氣力を益して、自ら其の身體の輕きを覺え、便ち大に飲食、衣服、臥具、湯藥を食著せず。

此の 四供養に於いて、其の心輕微なることは、譬へば、比丘の坐禪して、禪定より起つに、心定と合して、飲食を食著せずして、其の心輕微なるが如し。何となれば、橋戸迦よ、諸天の法は、應に諸味の精を以て、其の氣力を益すべければなり。十方の諸佛及び天、龍、鬼神、阿修羅、提闍婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽も、亦た其の氣力を益す。是の如く、橋戸迦よ、善男子、善女人は、今世に、是の如きの功德を得んと欲せば、應當に般若波羅蜜(多)を受持し、親近し、讚誦し、説き、正憶念し、亦た薩婆若の心を離れざるべし。

橋戸迦よ、善男子善女人は、受持し、乃至正憶念すること能はずと雖も、應當に經卷を書持し、華香、環珞乃至旛蓋(を以て)、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎すべし。橋戸迦よ、若し善男子、善女人、是の般若波羅蜜(多)を聞いて、受持し、讚誦し、説き、正憶念し、經卷を書寫し、華香乃至旛蓋(を以て)、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎せんに、是の善男子善女人は、功德甚だ多く、十方の諸佛及び弟子衆を供養し、衣服、臥具、湯藥(を以て)、恭敬し、尊重し、讚歎し、

【五二】 四供養とは、佛僧の需要品たる、(一)飲食、(二)衣服、(三)醫藥、(四)臥具を供養するなり。

【五三】 般若を書寫するの功德は、諸佛及び弟子を供養し、寶塔を建立するに勝る。

諸佛及び弟子の般涅槃の後、七寶の塔を起し、華香乃至旛蓋をもて恭敬し、供養し、尊重し、讚歎するに勝れり。

論

問うて曰はく、(善) 天上に自ら般若あり、何を以てか、説法の人の所に來至すれば、其の膽力を益すや。答へて曰はく、(善) 天上に般若ありと雖も、諸天は衆生を憐愍するが故に來り、來れば則ち惡鬼遠く去り、法師の膽力を益し、其をして樂つて説かしめ、又衆生をして、益益信敬を加へしむ。是を以ての故に來る。有る人の言はく、「天の甘露味は微細にして、沾洽く能く毛孔に入り、善男子の四大諸情は、柔軟輕利にして、樂んで説く所あらしむ」と。

問うて曰はく、(善) 一切の般若を説く者は、皆諸天の甘露味を得、其をして樂說せしむるや不や。答へて曰く、不なり。若し行者あれば、一心に佛道を求め、結使を折伏し、衣服淨潔に、説法の處清淨に華香、旛蓋(を以て莊嚴し)、香水を地に灑ぎ、諸の不淨なからしむ。是の故に諸天は歡喜し、亦た諸の聽者、説法者を利益す。多く内外の經書を讀まずと雖も、深く般若波羅蜜(多)の義に入るが故に、心怯弱ならず、沒せず、恐れず、畏かず。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には、定法の執るべく、難すべく、破すべきもの有ること無ければなり。

復次に、是の般若波羅蜜(多)の中に、亦た分別して諸法の世間、出世間、常、無常、善、不善等を

【善】 第一の問、天上にも般若あり、諸天來至すれば、何故に其の膽力を増すか。  
【善】 諸天は衆生を憐愍するが故に來迎す。  
【善】 第一の問、般若を説く者は、皆諸天の甘露味を得て、其をして樂說せしむるや、不や。

説き、法として有らざる無く、備に諸法あるを以ての故に、怯ます畏れざるなり。若し但一法あれば、則ち闕くる所多きが故に恐れあり。是の菩薩は般若波羅蜜(多)を行じ、煩惱折薄し、福德增益して、身を熏するが故に、威徳敬すべし。身は是れ功徳の住處なり、故に形體は醜陋にして能く作す所なしと雖も、猶ほ人の爲に愛重せらる。何に況んや、自然に端正にして、能く人を利益するをや。

問うて曰はく、若し諸佛、沙門、婆羅門の愛重する所は爾るべし。父母の愛念は何ぞ稱するに足らんや。答へて曰はく、人は父母の生ずる所なりと雖も、父母の教に順せざれば、則ち愛念せず。菩薩は恭敬の中に於いて、倍倍復た殊勝なり。(五) 道徳を供養し、恭敬し、尊重するが故に、沙門婆羅門は、平實至誠を愛敬し、口に妄言せず、深く後世の功徳を愛し、今世の樂に著せず、下人を接養し、自ら高大ならず。(五) 若し他の過あるを見

【五】 第一二問、諸佛沙門等の愛重は然るべきも、父母の愛念は何ぞ論するに足らんや。  
 【五】 沙門は至誠を愛敬し、口妄語せず、後世の功徳を愛し、現世の樂に著せず。  
 【五】 沙門は他の過を説かず。

るすら、尚ほ其の實を説かず、何に況んや、毀毀せんや。若し必ず已むを得ざるも終に盡く説かず、孤窮を給恤して、己に私附せず。是の如き等の事は、皆是れ般若波羅蜜(多)の力なり。是の人の功徳は、遠く聞ゆるが故に、諸天、世人の皆愛敬する所なり。是の般若波羅蜜(多)を供養するが故に、世に常に六波羅蜜(多)等を得て、斷絶すること有ること無く、時に是の人の福德智慧の名聞ゆるが故に、若し問難、毀謗あるも、悉く能く降伏す。

復次に、諸天は般若波羅蜜「多」をば供養するが爲の故に、般若の所住の處に來至す。復次に、山河・樹木・土地・城郭一切の鬼神は、皆な四天王に屬し、四天王來るが故に、皆な隨從して共に來る。是の諸の鬼神の中には、般若の經卷の得ざる者あり、是の故に般若波羅蜜「多」の處に來至し、供養し、讀誦し、禮拜す。亦た善男子を利益せんが爲の故に、此も亦た是れ今世の功德もて、諸天・善神來るを以ての故に、天帝は肉眼の人の疑を破するが故に、「云何が大徳の天の來るを知るや」と問ひ、時に「大光明を見、若くは殊異の香を聞き」と答ふ。亦た先に説くが如く、住處清淨なるを以ての故なり。

問うて曰はく、人身は不淨内に充つ、外のみ淨なるも何を益せん。答へて曰はく、其の住處及び衣服を淨うすれば、則ち外に不淨なく、外に不淨なきが故に、諸天は歡喜す。譬へば、國王、大臣の來る處には、群細の庶民は、避け去るが如く、諸の大徳の天來れば、小鬼の去るも、亦た是の如し。大天の威徳重きが故に、舊住の小鬼は避け去る。是の諸の大天、來り近づきが故に、是の人の心は、則ち清淨廣大なり。行者、若し大徳の天をして來らしめんと欲せば、當に經に説く所の如くすべし。惡鬼遠く去るが故に身心輕便なり。何となれば、諸の惡鬼を近づければ、人の身心をして漸く惡しからしむ。譬へば瞋人を近づければ、喜んで人を瞋らしめ、美色を近づければ、則ち人をして好色の情を發せしむるが如し。是の人は内外の惡しき因縁を遠離するが故に、臥するに安らかに、覺するに安らかに、諸の惡夢

【三〇】 第一三問、人身は内に不淨を以て充たざる、外のみ清淨なるも何の益あらんや。

なく、若し夢に但諸佛を見たてまつることは、經に説く所の如し。

問うて曰はく、〔六〕般若波羅蜜〔多〕は佛身の中に在り、若し一佛を供養すれば、則ち般若波羅蜜〔多〕

を供養す。何を以てか、十方の佛を供養することは、般若波羅蜜〔多〕を供養するに如かずと言ふや。

答へて曰はく、供養する者の心に、若し佛を供養して人相を取らんに、人は畢竟不可得なり。相を取

るを以ての故に、福德は大なりと雖も、而も功德は薄少なり。般若波羅蜜

〔多〕を供養する者は、則ち聞く所の如く、般若の中に人相を取らず、法相

を取らず、是の心を用つて供養するが故に福德大なり。

復次に、般若波羅蜜〔多〕は是れ一切の十方諸佛の母にして、亦た是れ諸佛の師なり。諸佛の是の身

に三十二相、八十隨形好、及び無量の光明、神通變化を得たまへるは、皆な是れ般若波羅蜜〔多〕の力

なり。是を以ての故に、般若波羅蜜〔多〕を供養するは勝れたり。是等の因縁を以ての故に、十方の諸

佛を供養するに勝れたり。佛を敬せざるには非ず。

〔六〕 第一四問、諸佛を供養するは、智度を供養するに如かずといふ理由如何。

# 巻の第五十九

## 二 校量舍利品第三十七を釋す。



佛、釋提桓因に告げて言はく、「橋戸迦よ、若し閻浮提に滿つる佛舍利を一分と作し、復た人あり、般若波羅蜜(多)の經卷を一分と作さば、二分の中、汝は何所を取るや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、若し閻浮提に滿つる佛舍利を一分と作し、般若波羅蜜(多)の經卷を一分と作さば、二分の中、我は寧ろ般若波羅蜜(多)の經卷を取らん。何となれば、世尊よ、我は佛舍利に於いて恭敬せざるには非ず、尊重せざるには非ず、舍利は般若波羅蜜(多)の中より生じ、般若波羅蜜(多)に薰修せらるるを以ての故に、是の舍利を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎することを得ればなり」と。

爾の時、舍利弗、釋提桓因に問ふ、「橋戸迦よ、是の般若波羅蜜(多)は、取るべからず。色無く、形無く、對無く、一相、所謂、無相なり。汝云何が取らんと欲するや。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は取ることを爲さざるが故に出で、捨つることを爲さざるが故に出で、増減、聚散、損益、垢淨を爲さざるが故に出づ。是の般若波羅蜜(多)は、諸佛の法を與へず、凡人の法を捨てず。辟支佛の法、阿羅漢の法、(有)學の法を與へず、凡人の法を捨てず、無爲性を與へず、有爲性を捨てず、内空乃至無法有法空を與へず、四念處乃至一切種智を與へず、凡人の法を捨てざればなり」と。釋提桓因、舍利弗に詰るらく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、若し

【一】 此の品には、舍利の供養と、般若經卷の供養との利益の勝劣を比較して、般若の勝れたることを稱揚す。品名を或は法稱品ともいひ、又ば單に舍利品ともいふ。

【二】 般若によりて、佛法を増すにあらず、凡愚の法を減するにあらずといふ意。

人あり、是の般若波羅蜜(多)は、諸佛の法を與へず、凡人の法を捨てず、乃至一切種智を與へず、凡人の法を捨てずと知らば、是の菩薩摩訶薩は、能く般若波羅蜜(多)を行じ、能く般若波羅蜜(多)を修す。何となれば、般若波羅蜜(多)は、二法相を行ぜざればなり。不二法相は是れ般若波羅蜜(多)なり。不二法相は是れ禪波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)なり」と。爾の時、佛釋提桓因を講して言はく、「善い哉、善い哉、憍尸迦よ、汝の所説の如く、般若波羅蜜(多)は二法相を行ぜざるが故に、不二法相は是れ般若波羅蜜(多)なり。不二法相は是れ禪波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)なり。憍尸迦よ、若し人、法性の二相を得んと欲せば、是の人は般若波羅蜜(多)の二相を得んと欲すと爲す。何となれば、憍尸迦よ、(三)法性と般若波羅蜜(多)は無二無別なればなり。乃至檀波羅蜜(多)も、亦た是の如し。若し人、實際不可思議性の二相を得んと欲せば、是の人は般若波羅蜜(多)の二相を得んと欲すと爲す。何となれば、般若波羅蜜(多)と不可思議性と

【三】 法性と般若波羅蜜(多)とは、無二無別なり。

釋提桓因、佛に白して言はく、「世尊よ、一切世間の人、及び諸天、阿修羅は、應に般若波羅蜜(多)を禮拜し、供養すべし。何となれば、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の中に學して、阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。世尊よ、我が常に善法堂上に在りて坐す。我若し座に在らざる時は、諸の天子來りて我を供養するが故に、我が坐する處なるが爲めに禮を作し、遠り竟りて還り去る。諸の天子は是の念を作す、「釋提桓因は是處に在りて坐し、諸の三十三天の爲に法を説くが故に」と。是の如く、世尊よ、在所の處に是の般若波羅蜜(多)の經卷を書し、受持し、誦讀し、他の爲に演說せば、是處に十方世界の中の諸天、龍、夜叉、捷闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は、皆來りて禮拜し、般若波羅蜜(多)を供養し已りて去る。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中には、諸佛及び一切衆生の樂具を生ずればなり。諸佛の舍利も亦た是の一切種智の住處の因緣なり。是を以ての故に、世尊よ、二分の中、我が般若波羅蜜(多)

を取ら。

復次に、世尊よ、我若し般若波羅蜜(多)を受持し讀誦し、心深く法中に入らば、我是の時に怖畏の相を見ず。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は相無く、貌無く、言無く、説無ければなり。世尊よ、無相、無貌、無言、無説は、是れ般若波羅蜜(多)乃至是れ一切種智なり。世尊よ、般若波羅蜜(多)若し當に有相にして無相に非ずんば、諸佛は一切法の無相、無貌、無言、無説を知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の爲に諸法も亦た無相、無貌、無言、無説と説くべからず。世尊よ、般若波羅蜜(多)は、實に是れ無相、無貌、無言、無説なるを以ての故に、諸佛は一切諸法の無相、無貌、無言、無説を知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の爲に、諸法も亦無相、無貌、無言、無説と説く。是を以ての故に、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)をば、一切世間の諸の天人阿修羅は、應に華香璣珞乃至幡蓋を以て、供養し、恭敬し、尊重し、讃歎すべし。

復次に、世尊よ、若し人あり、般若波羅蜜(多)を受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念し、及び書し、華香、乃至幡蓋を以て供養せば、是の人ハ地獄、畜生、餓鬼道の中に墮せず、聲聞辟支佛地に墮せず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て、常に諸佛を見たてまつり、一佛界より一佛界に至りて、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讃歎するに華香、乃至幡蓋を以てす。復次に、世尊よ、三千大千世界に滿つる佛舍利を一分と作し、般若波羅蜜(多)の經卷を書せるを一分と作さば、是の二分の中、我れ般若波羅蜜(多)を取らん。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)の中に諸佛の舍利を生ずればなり。是を以ての故に、舍利は供養、恭敬、尊重、讃歎を得。是の善男子、善女人は、舍利を供養し、恭敬するが故に、天上人中の福樂を受けて、常に三惡道に墮せず、所願の如く、漸く三乘の法を以て涅槃に入る。是の故に、世尊よ、若くは現在佛を見たてまつること有ると、若くは般若波羅蜜(多)の經卷を見るとは、等うして異なること無し。何となれば、世尊よ、是の般若波

羅蜜(多)は、佛と無二無別なればなり。

問うて曰く、**【四】**上に七寶の塔を起つるを以て、般若波羅蜜(多)を供養するに對校し、義已に具

足せり。今佛は何を以てか、舍利を以て經卷に對校したまふや。答へて曰く、先には七寶の塔は、

是れ舍利の住處なることを明かにし、今は但舍利を明かにし、以て經卷に對す。舍利は般若には及

ばすと雖も、而も閻浮提に滿ち、般若の妙の故に、但經卷のみを明かにす。復次に、出家の人は多

く智慧を貪る。智慧は是れ解脱の因縁なるが故なり。在家の人は多く福德を貪る。福德は是れ樂の因

縁なるが故なり。出家の人は多く意識の知る所の物を貪り、在家の人は多

く五識の知る所の物を貪る。釋提桓因は、已に福樂の果報最大なること

を證し、在家の人の中に於て、最も尊勝と爲す。是を以ての故に、佛は釋

提桓因に問ひたまふ。釋提桓因言さく、「我は二分の中に於て、般若波羅蜜(多)の經卷を取らん」

と。此の中に自ら因縁を説けり、「世尊よ、我は輕慢して、舍利を恭敬せざるにはあらず、我は芥子

許の舍利を供養する功德の無量無邊にして、乃ち佛を得て功德盡きざることを知る。何に況んや、閻

浮提に滿つるをや。世尊よ、菩薩は身を受けて、便ち舍利あるも人の貴はざる所なり。成佛を得る

時、舍利は般若を以て熏修するが故に、人の恭敬し、尊重し、供養する所なり。是の故に、二分の中、

我は勝れたる者を取る」と。

**【四】** 第一問、佛が舍利を以て經卷に對校したまへる理由如何。

問うて曰はく、舍利弗は、釋提桓因の世諦を以ての故に、般若波羅蜜〔多〕を取るといへることを知れり。何を以ての故に難するや。答へて曰はく、釋提桓因は在家の中にありて、煩惱の爲に縛せられ、五欲に覆はれ、而も能く般若波羅蜜〔多〕を説く。是の事は希有なり。是を以ての故に、舍利弗は質問して、釋提桓因をして更に佛の深義を問はしめんと欲す。〔かるが〕故に難す。釋提桓因は、舍利弗の意に順つて答へて言はく、「是の如し」と。釋提桓因の意は、一切法の中に於いて、二相なく、舍利を以て小と爲さず、般若波羅蜜〔多〕を以て大と爲さず。般若波羅蜜〔多〕には二なく、分別の相なく、新發意の菩薩を利益せんが爲の故に、世諦を以て致す。是の如く、般若波羅蜜〔多〕を説きて、能く衆生の心をして、無二無分別ならしむ。是の利益を以ての故に「我は般若を取る」と言ふ。是の時、佛、釋提桓因を讚じたまはく、「善哉、善哉」と。能く諸法を分別し、亦た能善く諸法を分別し、亦た能善く般若の相を説くを以ての故なり。所謂、無二の相なり。是の故に讚歎したまへり。佛は此の中に自ら譬喩を説きたまはく、「若し人、法性、實際等を分別して、二分と作さんと欲せば、是の人は般若波羅蜜〔多〕を分別して二分と作さんと欲すと作す」と。帝釋は自ら般若を説き、又佛の重ねて説きたまふを聞きて、其の心清淨にして、深信に歡喜して言はく、「一切世間の禮敬すべき所なり」と。帝釋は此の中に自ら因縁を説けり、「一切の菩薩は、是の般若を學して、阿

【五】 第二問、舍利弗は、帝釋の世諦の故に智度を取ると言へるを知る。然るを今何が故に難するか。

耨多羅三藐三菩提を得」と。又此の中に己身を以て喻と爲し、己が身を佛に喩へ、般若の經卷を坐處に喩ふ。有る人の言はく、「己身を般若に喩へ、坐處を般若に喩ふ。是の故に、二分の中、我は般若を取る」と。

復次に、「世尊よ、我若し般若を受持し讀誦せんに、是の時より乃ち怖畏の相を見ざるに至る。何に況んや、實に怖畏せんや。何となれば、一切の諸法は、無相、無言、無説なればなり。般若波羅蜜(多)は能く人をして、是の無相の法を得せしむるが故に、畏るる所なし。般若を受持し、供養する者は、三惡趣、及び二乘道に墮せず、世世に諸佛を離れず、十方の諸佛を供養したてまつる。是の故に、般若波羅蜜(多)は、一切世間の供養すべき所なり。

復次に、佛は其の初に舍利を以て滿つる閻浮提を開き給へり。帝釋は既に二事の勝負を悟り、一切衆生の爲の故に、廣く増して三千大千世界に至り、此の中に自ら因縁を説き、般若波羅蜜(多)を見ると、佛を見ると、等うして異なること無きなり。

【六】 般若の誦説は、諸佛の佛力に等しきを説き、爾餘の功德に及ぶ。  
 【七】 三事の示現とは、神通と説法・教誡の三神變なり。或は三示導ともいふ。  
 【八】 佛の十二部經を説き給ふと、行者の般若を誦説することとは兩者正に等うして異なるなし。



復次に、(一)世尊よ、佛は、(二)三事の示現に住し、(三)十二部經修多羅、祇夜乃至優波提舍を説きたまふが如く、復た善男子善

女人ありて、是の般若波羅蜜(多)を受持し誦說せんに、等うして異なること無し。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)の中に、三事の示現、及び十二部經修多羅、乃至優波提舍を生ずればなり。

復次に、世尊よ、(五)十方の諸佛の三事の示現に住し、十二部經修多羅、乃至優波提舍を説くと、復た人あり、般若波羅蜜(多)を受け、他人の爲に説くとは、等うして異なることなし。何となれば、般若波羅蜜(多)の中に諸佛を生じ、亦た十二部經修多羅、乃至優波提舍を生ずればなり。

復次に、世尊よ、(六)若し十方如恆河沙等の世界の中の諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香あると。復た人あり、般若波羅蜜(多)の經卷を書し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋を以てするあると、其の福は正に等し。何となれば、十方の諸佛は、皆な般若波羅蜜(多)の中より生ずればなり。

復次に、世尊よ、善男子、善女人、是の般若波羅蜜(多)を聞き、受持し、讀誦し、正憶念し、亦た他人の爲に説かば、是の人、地獄道、畜生道、餓鬼道に墮せず、亦た聲聞辟支佛地に墮せずと。何を以ての故に當に知るべし、是の善男子善女人は、正しく阿鞞跋致地の中に住するが故に、是の般若波羅蜜(多)は一切の苦惱衰病を遠離するとな。

復次に、世尊よ、若し善男子善女人あり、是の般若波羅蜜(多)の經卷を善し、受持し、親近し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、是の人、諸の恐怖を離れん。世尊よ、譬へば、(一)負債人の、國王に親近し、左右に供給せば、債主、反つて更に是の人を供養し、恭敬し、是の人復た怖畏せざるが如し。何となれば、世尊よ、此の人は、王に近づくに依り、有力を憑恃すればなり。是の如く、世尊よ、諸佛の舍利は、般若波羅蜜(多)の熏修の故に、供養、恭敬を得。世尊よ、當に知るべし、

- 【九】 諸佛の十二部經を説き給ふと、行者の般若を受持し説くと、其の福正に等し。
- 【一〇】 恆沙の諸佛を供養すると、般若の經卷を供養すると、其の福等し。
- 【一一】 般若は王の如く、舍利は負債者の如し。

般若波羅蜜(多)は王の如く、舍利は負債人の如しと。負債人は王に依るが故に供養を得。舍利も亦た般若波羅蜜(多)の修熏に依るが故に供養を得。世尊よ、當に知るべし、諸佛の一切種智も、亦た般若波羅蜜(多)の修熏を以つての故に、成就することを得と。是を以つての故に、世尊よ、二分の中、我は般若波羅蜜(多)を取る。何となれば、世尊よ、般若波羅蜜(多)の中より、諸佛の舍利、三十二相を生じ、般若波羅蜜(多)の中に、亦た佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を生ずればなり。世尊よ、般若波羅蜜(多)の中に五波羅蜜(多)を生じ、便ち波羅蜜(多)の名字を得。般若波羅蜜(多)の中に、諸佛の一切種智を生ずればなり。

復次に、世尊よ、所在の三千大千世界の中に、若し般若波羅蜜(多)を受持し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎すること有らば、是の處に、若くは人、若くは非人、其の便を得ること能はずして、是の人は漸漸に涅槃に入ることを得。世尊よ、般若波羅蜜(多)の大利益を爲すことは是の如し。三千大千世界の中に於いて、能く佛事を作す。世尊よ、所住の處に在りて、般若波羅蜜(多)あらば、則ち佛ありと爲す。(二三) 譬へば、無價の摩尼寶の、所住の處に在りては、非人も其の便を得ざるが如し。若くは男子、若くは女子、熱病ありて、是の珠を以て、身上に著くれば、熱病は即時に除き癒えん。若くは風病あり、若くは冷病あり、若くは雄熱風冷病ありて、珠を以て身上に著くれば、皆悉く除き癒えん。若し闇中には是の寶能く明かならしめ、熱時には能く涼しからしめ、寒時には能く温かならしめ、珠の所住の處、其の地は寒からず、熱からず、時節和適す。其の處には亦た諸餘の毒蝨なし。若くは男子、女人の、毒蛇の爲に蝨れんに、珠を以て之を示せば、毒は即ち除滅す。

【二三】 智度を摩尼寶珠に喩ふ。

「復次に、世尊よ、若し男子女人の、眼痛、膚醫、盲、瞽ならんに、珠を以て之に示せば、即時に除き癒えん。若し癩瘡、惡腫あらんに、珠を以て其の身の上に著くれば、病即ち除き癒えん。復次に、世尊よ、是の摩尼寶所在の水中、水は隨つ

て一色を作す。若し青き物を以て、裹んで水中に著くれば、水の色は則ち青と爲り、若し黄・赤・白・紅・縹の物を以て、裹んで水中に著くれば、水は隨つて、黄・赤・白・紅・縹色を作す。是の如き等の、種種の色物を以て、裹んで水中に著くれば、水は隨つて種種の色を作す。世尊よ、若し水濁らんに、珠を以て水中に著くれば、水は即ち清と爲る。是の珠に其の徳是の如しと。

爾の時に、阿難、釋提桓因に問うて言はく、「是の摩尼寶は、是れ天上の寶と爲すや、是れ閻浮提の寶と爲すや」と。釋提桓因、阿難に語りて言はく、「是は天上の寶なり。閻浮提の人も亦た是の寶あれども、但だ功德の相少なくて具足せず。天上の寶は、清淨輕妙にして、譬喩を以て比と爲すべからず。復次に、世尊よ、是の摩尼寶を、若し篋中に著けて舉せんに、珠は其の功德を出だし、篋を熏するが故に人皆な愛敬す。是の如く、世尊よ、所住の處に在りて、般若波羅蜜(多)の經卷を書すること有れば、是の處には則ち衆の惱患なく、亦た摩尼寶所著の處、則ち衆難なきが如し。世尊よ、佛般泥洹の後、舍利を供養することを得るは、皆な般若波羅蜜(多)の力、禪波羅蜜(多)、乃至檀波羅蜜(多)、內空乃至無法有法空、四念處、乃至、十八不共法、一切智、法相、法住、法位、法性、實際、不可思議性、一切種智、是れ諸の功德の力なり。善男子、善女人は是の念を作す、是の佛の舍利は一切種智、一切種智、大慈大悲、一切の結使、及び習を斷じて、常に捨を行じ、法を錯謬せざる等の諸佛の功德の住所なり。是を以ての故に舍利を供養するとを得と。世尊よ、舍利は是れ諸功德寶なり、波羅蜜(多)の住處は不垢不淨なり。波羅蜜(多)の住處は不生不滅なり、波羅蜜(多)は不入不出なり、波羅蜜(多)は不增不損なり、波羅蜜(多)は不來不去不住不離、波羅蜜(多)は是れ佛舍利なり、是れ諸の法相波羅蜜(多)を以て、重習するが故に、舍利は供養を得。

復次に、世尊よ、三千大千世界の中に滿つる舍利と、如恆河沙等の諸の世界の其の中に滿つる舍利とを置き一分と作

し、人あり、般若波羅蜜(多)の經卷を書して一分と作さんに、二分の中、我は般若波羅蜜(多)を取らん。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中より諸佛の舍利を生じ、是の般若波羅蜜(多)の修熏の故に、舍利は供養を得ればなり。世尊よ、若し善男子、善女人ありて、舍利を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、其の功德の報は邊を得べからずして人中、天上の福樂を受けん。所謂、刹利の大姓の中、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天處乃至他化自在天の中に福樂を受け、亦是の福德の因緣を以ての故に、當に苦を盡くすことを得べし。若し是の般若波羅蜜(多)を受け、讀誦し、説き、正憶念せば、是の人は能く禪波羅蜜(多)を具足し、乃至能く檀波羅蜜(多)を具足し、能く四念處を具足し、乃至能く十八不共法を具足し、聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位に住す。菩薩位に住し已りて、菩薩の神通を得、一佛界より一佛界に至る。是の菩薩は衆生の爲の故に身を受け、其の應する所に隨つて、衆生を成就す。若くは轉輪聖王と作り、若くは刹利の大姓と作り、若くは婆羅門の大姓と作りて、衆生を成就す。是を以ての故に、世尊よ、我は輕慢して恭敬せざるが故に、舍利を取らざるにあらず。善男子、善女人、般若波羅蜜(多)を供養せば、則ち舍利を供養することと爲るを以ての故なり。

復次に、世尊よ、人あり、十方無量阿僧祇の諸の世界の中の、現在の佛の法身色身を見んと欲せば、是の人は應に般若波羅蜜(多)を聞き、受持し、讀誦し、正憶念し、他人の爲に廣く説くべし。是の如きの、善男子、善女人は、當に十方無量阿僧祇の世界の中の、諸佛の法身色身を見らべし。是の善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を行じ、亦た應に法相を以て、念佛三昧を修すべし。復次に、善男子、善女人、現在の諸佛を見んと欲せば、應當に、是の般若波羅蜜(多)を受け、乃至正憶念すべしと。



復次に、佛は三事の示現に住して十二部經を説きたまふとは、「次の如し」。

問うて曰はく、(三)一切の説法人の中に佛と等しき者なく、佛の説き給へる十二部經は、則ち備具せざることを無し。云何が善男子は、但般若を受持し讀誦するのみにして、佛と等うして異なることを無きや。答へて曰はく、此の中に、佛は般若を稱歎して、大と爲さんと欲するが故に、(四)十二部經の中に於いて、般若を最勝と爲したまへり。何となれば、是の般若波羅蜜(多)を説けば、多く菩提心を發する有り、十二部經を説けば、雜して三乘の意を發すればなり。菩薩の功德を以て、佛の無量身に比するにあらず。此の法身の菩薩は但般若のみを説きて、大乘に勸導し、佛は雜説して三乘に勸導したまふが故に、等うして異なることを無きなり。

復次に、三事の示現、及び十二部經の根本とは、所謂、般若波羅蜜(多)是なり。十方如恆河沙等の諸佛を供養すると、若くは復た般若の經卷を供養すること有ると、亦た等うして異なることを無し。此の中に佛は般若の福德たる所以の因縁を説きたまふ。所謂、般若若能く一切の苦惱、衰病、怖畏等を破すること、負債の人の王に依るが如し。王は般若に喩へ、負債の人は舍利に喩ふ。舍利は是れ先世の因縁の所成にして、因縁の中には應に諸對を償ふべし。般若波羅

【三】 第三問、一切の説法者の中に佛と等しきものなし、云何が行者は但般若を受持し讀誦するのみにて、佛と等しきことを得るか。

【四】 十二部經の名目は左の如し。

- (一) 契經 (Sūtra)
- (二) 應頌 (Geyā)
- (三) 記別 (Yākaṅga)
- (四) 諷頌 (Gāthā)
- (五) 自說 (Udāna)
- (六) 因緣 (Vidhāna)
- (七) 譬喻 (Avadāna)
- (八) 本事 (Chivutaka)
- (九) 本生 (Jātaka)
- (十) 方廣 (Aṅgulimāyā)
- (十一) 希法 (Abhinidhama)
- (十二) 論議 (Paṭisaṅga)

蜜<sup>みつ</sup>、多<sup>た</sup>の熏修<sup>くんしゆ</sup>を以て<sup>もち</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、宿命<sup>しゆくふん</sup>の因縁<sup>いんねん</sup>、諸對<sup>しよたひ</sup>及び飢渴寒熱<sup>けかつかんねつ</sup>の得<sup>う</sup>る能<sup>あた</sup>はざる所<sup>ところ</sup>にして、而<sup>しか</sup>して諸天<sup>しよてん</sup>、世人<sup>せじん</sup>に供養<sup>くやう</sup>せらるる所<sup>ところ</sup>なることを得<sup>う</sup>、負債<sup>ふさい</sup>の人の王<sup>わう</sup>に依<sup>よ</sup>りて、反<sup>かへ</sup>つて債主<sup>さいしゆ</sup>の爲<sup>ため</sup>に敬<sup>きやう</sup>せらるるが如<sup>ごと</sup>し。

先<sup>さき</sup>には諸<sup>しよ</sup>の衰病<sup>すいびやう</sup>、及び怖畏<sup>おそびやう</sup>なきことを説<sup>と</sup>き。以<sup>もち</sup>つて内<sup>ない</sup>を明<sup>あきら</sup>かにし、今<sup>いま</sup>は摩尼寶<sup>まにほう</sup>を以<sup>もち</sup>て、人<sup>にん</sup>、非人<sup>ひにん</sup>の其<sup>そ</sup>の便<sup>たより</sup>を得<sup>え</sup>ざることを説<sup>と</sup>き、以<sup>もち</sup>つて外<sup>げ</sup>を明<sup>あきら</sup>かにす。是<sup>こ</sup>の人は般若波羅蜜<sup>はんにはらみつ</sup>多<sup>た</sup>を供養<sup>くやう</sup>するが故<sup>ゆゑ</sup>に、若<sup>もし</sup>くは今<sup>こ</sup>世<sup>ぜ</sup>、若<sup>もし</sup>くは後世<sup>ごせ</sup>に、若<sup>もし</sup>くは身衰心病<sup>しんすんしんびやう</sup>、盡<sup>みな</sup>く皆<sup>みな</sup>能<sup>よ</sup>く除<sup>のぞ</sup>き、諸善願事<sup>しよぜんぐんじ</sup>、意<sup>い</sup>に隨<sup>したが</sup>つて能<sup>よ</sup>く與<sup>あた</sup>へらる。是<sup>こ</sup>の般若波羅蜜<sup>はんにはらみつ</sup>多<sup>た</sup>の大寶<sup>だいほう</sup>を得<sup>う</sup>るが故<sup>ゆゑ</sup>に、諸<sup>しよ</sup>の怖畏<sup>おそびやう</sup>なく、乏短<sup>はぶたん</sup>する所<sup>ところ</sup>なきこと、譬<sup>たと</sup>へば、無價<sup>むげ</sup>の寶珠<sup>ほうじゆ</sup>を以<sup>もち</sup>て、願<sup>ねが</sup>ふ所<sup>ところ</sup>、皆<sup>みな</sup>得<sup>え</sup>るが如<sup>ごと</sup>し。

問<sup>と</sup>うて曰<sup>い</sup>はく、(二五) 摩尼寶珠<sup>まにほうじゆ</sup>は、玻瓈<sup>はり</sup>・金銀<sup>こんぎん</sup>・車磑<sup>しやこ</sup>・碼碯<sup>めなるり</sup>・磁瑠璃<sup>さんご</sup>・珊瑚<sup>さご</sup>・琥珀<sup>こはく</sup>・金剛<sup>こんがう</sup>等<sup>とう</sup>

【二五】 第四問、諸寶珠の中に於ける、摩尼寶珠の位置如何。

の中に於<sup>お</sup>いて、是<sup>こ</sup>れ何等<sup>なんら</sup>の寶<sup>たから</sup>なるや。答<sup>こた</sup>へて曰<sup>い</sup>はく、有<sup>あ</sup>る人の言<sup>い</sup>はく、「此<sup>こ</sup>の寶珠<sup>ほうじゆ</sup>は龍王<sup>りゆうわう</sup>の腦中<sup>なうちゆう</sup>より出<sup>い</sup>づ。人<sup>ひと</sup>、此<sup>こ</sup>の珠<sup>たま</sup>を得<sup>え</sup>れば、毒<sup>どく</sup>も害<sup>がい</sup>すること能<sup>あた</sup>はず、火<sup>ひ</sup>に入るも燒<sup>や</sup>くこと能<sup>あた</sup>はず、是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>き等の功<sup>こう</sup>徳<sup>とく</sup>あり」と。有<sup>あ</sup>る人の言<sup>い</sup>はく、「是<sup>こ</sup>れ帝釋<sup>たいしやく</sup>の執<sup>と</sup>る所の金剛<sup>こんがう</sup>を用<sup>もち</sup>つて、阿修羅<sup>あしゆら</sup>と鬪<sup>たたか</sup>ひし時<sup>とき</sup>、閻浮提<sup>えんぶだい</sup>に碎<sup>さい</sup>落<sup>らく</sup>せり」と。有<sup>あ</sup>る人の言<sup>い</sup>はく、「諸<sup>しよ</sup>の過去久遠<sup>くわくこくゑん</sup>の佛<sup>ほとけ</sup>の舍利<sup>しゃり</sup>にして法既<sup>ほふすで</sup>に滅盡<sup>めつじん</sup>し、舍利<sup>しゃり</sup>は變<sup>へん</sup>じて此<sup>こ</sup>の珠<sup>たま</sup>と成<sup>な</sup>り、以<sup>もち</sup>て衆生<sup>しゆじやう</sup>を益<sup>やく</sup>す」と。有<sup>あ</sup>る人の言<sup>い</sup>はく、「衆生<sup>しゆじやう</sup>の福徳<sup>ふくとく</sup>の因縁<sup>いんねん</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、自然<sup>じねん</sup>に此<sup>こ</sup>の珠<sup>たま</sup>あり。譬<sup>たと</sup>へば、罪<sup>つみ</sup>の因縁<sup>いんねん</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、地獄<sup>ぢごく</sup>の中に自然<sup>じねん</sup>に罪<sup>つみ</sup>を治<sup>な</sup>するの器<sup>き</sup>あるが如<sup>ごと</sup>し」と。此<sup>こ</sup>の寶<sup>たから</sup>を如意<sup>にょい</sup>と名<sup>なづ</sup>け、定色<sup>ぢやうしき</sup>あること無<sup>な</sup>く、清徹<sup>しやうてつ</sup>輕妙<sup>けいめう</sup>に、四天下<sup>しやうてん</sup>の物<sup>もの</sup>、皆<sup>みな</sup>悉<sup>しつ</sup>く照現<sup>しやうげん</sup>す。如意珠<sup>にょいじゆ</sup>の義<sup>ぎ</sup>は、先<sup>さき</sup>に説<sup>と</sup>くが如<sup>ごと</sup>く、



く、般若も亦た是の如く、能く三界の黑暗を除く。寶珠の能く熱を除くが如く、般若も亦た是の如く、能く姪欲瞋恚の熱を除く。寶珠の能く冷を除くが如く、般若も亦た是の如く、能く無明不信不恭敬懈怠等の冷心を除く、日月は皆な諸寶の所成にして、日は能く熱を作し、月は能く冷を作して、俱に衆生を利益すと雖も、兼ねること能はざるを以ての故に、名けて如意と爲さず。寶珠の所在の處には、毒蛇等の諸の惡蟲も害すること能はざる所なり。般若も亦た是の如く、貪欲等の毒の能く病まざる所なり。若し人あり、毒蛇に螫れんに、寶珠を持して之に示せば、即時に除愈す。人あり、貪欲等の毒蛇の爲に螫れんに、般若波羅蜜〔多〕を得れば、貪恚の毒即ち除く。〔五〕難陀、〔六〕鴞群梨摩羅等の如し。人あり、眼痛み、盲瞽ならんに、寶珠を以て之に示せば、即時に除愈す。般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如し。人あり、無明・疑悔・顛倒・邪見等を以て、慧眼を破せんに、般若を得れば、即時に明了なり。人の癩瘡癰腫に、寶珠を以て之れに示せば、即時に消滅す。種種の色を以て寶珠を裹み、亦た是の如し。五逆の癩罪等あらんに、般若を得れば、即時に消滅す。種種の色を以て寶珠を裹み、水中に著くれば、随つて一色と作るが如く、般若も亦た是の如し。行者、般若の力を得るが故に、心則ち柔軟にして著する所なく、信手の五根等に隨ひ、亦た四禪・四無量心・背捨・勝處及び一切入に

【九】難陀 (Nanda) (アナンダ)  
 【一〇】鴞群梨摩羅 (Angulimālī) (アングリマール)  
 舊に央掘摩羅、新に鴞羆利摩羅、指鬘と譯す。人を殺すは涅槃の道なりとの邪説を信奉して、市に出て、九百九十九人を殺し、各人の指を取りて鬘となして首にかけ、千人目に己が母を殺せんとす、世尊憐んで之に正法を教ふ。後遂に羅漢果を證す。

随順す。

復次に、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛地に於いて随順し、遍ねく學して、達逆する所なく、第六の繚色は是れ虚空色にして、行者は般若を得て、諸法の空を觀するに、心も亦た随順にして著せず。是の如き等の種種は、一切諸法に入りて、皆な随順にして礙なし。水の渾濁雜色不淨ならんに、珠を以て中に著くれば、皆な清淨一色なるが如く、般若も亦た是の如し。人に種種の煩惱、邪見、戲論、擾心、渾濁あらんに、般若を得れば、則ち清淨一色なり。如意珠に無量の功德あるが如く、般若の功德も亦た是の如し。(三) 今當に別相(を以て)、般若の功德を説くべし。是の如意珠は但能く惡鬼を除くのみにして、魔天を壞すること能はず。般若は則ち能く二事を除く。珠は能く身病を治し、般若は能く身心の病を治す。珠は能く人に治せらるる病を治し、般若は能く一切の天龍・鬼神の治する能はざる所の病を治す。珠は能く世世に會つて治する所の病を治し、般若は能く無始の世界より來、未だ會つて治せられざる病を治す。是の如き等の種種の差別あり。珠は能く所在の處の夜闇を照らし、般若は能く一切の煩惱相應の無明の黒闇、及び不共の無明、及び一切法中の不了の癡の黒闇を照らす。珠は但能く所在の處の熱を破するのみにして、餘處の熱を破すること能はず。般若の力は、乃ち無量世界の劫盡の大火に至るも、一吹に能く滅す、何に況んや、一處の熱をや。珠は但能く形質火日の熱を除くのみなるも、般若は能く三

【三】 以下寶珠を以て般若に比し、其の功德を細説す。

毒の心熱を除く。珠は能く風雨寒雪を除き、般若は能く十方無量世界の衆生の、不信・不恭敬懈怠心等の寒を除く。珠は能く外の毒螫を却くるも、四大の毒蛇を除くこと能はず。般若は能く畢竟して、

此の二種の毒を除く。珠は邪見の毒を治すること能はざるも、般若は能く「之を」除く。珠は能く肉眼を治し、般若は能く慧眼を治す。珠は能く近見眼を治し、般若は能く遠見眼を治す。珠は能く肉眼を治するも、肉眼は珠と作らず。般若は能く慧眼を治し、慧眼は即ち般若と

作る。珠は能く肉眼を治するも後に病復た發し、般若の慧眼を治するは畢竟清淨なり。珠は能く癩瘡惡腫を治し、般若は能く身癩心癩を治す。

問うて曰はく、(三) 四種の病の中に、一切の病を攝す。何を以ての故に、眼痛、癩病等を別説するや。答へて曰はく、(三) 眼は是れ身中第一にして、

所用最も貴し。是の故に別説す。諸病の中、癩病は最も重く、宿命の罪の因縁の故に治し難し。是の故に更に説く。珠は能く水をして裏む所の色に隨はしめ、般若は能く心數の善法に隨順す。珠は人心を轉ずること能はず、般若は能く一切衆生の心性の樂ふ所、欲する所を轉ず。珠は能く所著の處の濁水をして清からしむるも一切の水に非ず、般若の力は能く (二) 六覺の濁心

をして、即時に清淨ならしめ、又諸の龍王・鬼神王・人王等の貪恚の濁心に於いて、能く清淨ならしむ。珠は能く所著の函篋、房舎をして威徳あらしめ、般若の力は、能く十方無量の世界の阿僧祇の

【三】 第五問、四百四病の中に一切の病を攝す、何を以てか眼病癩病等を別説するか。

【三】 眼は是れ身中第一、癩病は諸病中最も重し。

【三】 六覺とは、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識をいふ。

衆生を度して威徳あらしむ。珠の功德力は函篋に入るも、人に隨意の功德を與ふること能はず。舍利は般若の熏修を得るが故に、人の、供養するあれば、必ず還た般若を得、而して成佛を得。是の函篋は、凡夫の人の貴ぶ所、舍利は凡夫聖人の貴ぶ所、函篋は世間の樂を受くる人の貴ぶ所、舍利は出世間と世間の樂を受くる人の貴ぶ所なり。般若は是れ如意寶珠、函篋は是れ舍利にして、舍利の中には般若なしと雖も、般若に熏せらるるが故に供養を得。

復次に、諸の聖法の中にて、般若は第一にして、譬喩すべきもの無し。世間の人は、是の寶珠を貴ぶを以ての故に、珠を以て喩と爲す。人は如意寶珠を見れば、願ふ所皆な得、若し珠の所住の處を見るも、亦た少願を得。行者も亦た是の如く、是の般若波羅蜜(多)の義を得れば、即ち佛道に入り、若し般若の住する所の舍利を見て、供養するが故に、今世後世に、無量の福樂を得、久しうして必ず道を得。是の如きの總相別相、應當に知るべし。

問うて曰はく、(五)般若に若し是の如きの功德あらば、何を以ての故に、舍利は是れ五波羅蜜(多)、乃至一切種智の所住の處なるが故に、供養を得と説くや。答へて曰く、先に已に説けり。「一切の諸法は、般若波羅蜜(多)を首と爲し、明導と爲す。譬へば王來れば必ず將從あり、但其の主の名を擧ぐるのみにして、餘の者は已に盡く得るが如し」と。般若波羅蜜(多)を讃ずとは、是の義は先に已に説

【五】第六問、若し般若に是の如きの功德あらば、舍利は是れ五波羅蜜多、乃至一切種智の住處なるが故に、供養を得といふ理由如何。

けり。



「復次に、世尊よ、(三)二種の法相あり、有爲の諸の法相と無爲の諸の法相となり、云何が有爲の諸の法相なる。所謂、内空の中の智慧乃至無法有空の中の智慧、四念處の中の智慧乃至八聖道分の中の智慧、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法の中の智慧、善法の中、不善法の中、有漏法の中、無漏法の中、世間法の中、出世間法の中の智慧、是を有爲の諸の法相と名く。云何が無爲の諸の法相と名くるや。若し法の生なく、滅なく、住なく、畏なく、垢なく、淨なく、増なく、減なきは、諸法の自性なり。云何が諸法の自性と名くるや。諸法は所有の性なき、是れ諸法の自性なり。是を無爲の諸の法相と名く」と。

爾の時、佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し是の如し、橋戸迦よ、過去の諸佛は、是の般若波羅蜜(多)に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。過去の諸佛の弟子も、亦た般若波羅蜜(多)に因りて、須陀洹道乃至阿羅漢、辟支佛道を得たり。未來現在世の十方の無量阿僧祇の諸佛も、是の般若波羅蜜(多)に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ん、未來、現在の諸佛の弟子も、亦た般若波羅蜜(多)に因りて、須陀洹道乃至辟支佛道を得ん。何となれば、般若波羅蜜(多)の中に、廣く三乘の義を説くや、無相法を以てするが故に、無生・無滅法の故に、無垢・無淨法の故に、無作・無起・不入・不出・不増・不損・不取・不捨法の故に、俗法を以ての故に、第一義を以てするに非ざればなり。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は、此に非ず彼に非ず、高に非ず下に非ず、等に非ず不平等に非ず、相に非ず無相に非ず、世間に非ず出世間に非ず、有漏に非ず無漏に非ず、有爲に非ず無爲に非ず、善に非ず不善に非ず、過去に非ず現在に非ず、未來に非ざればなり。何となれば、橋戸迦よ、般若波羅蜜(多)は、聲聞辟支佛の法を取ら

【三】般若には一切の法を攝するを明す。故に般若を見れば、諸佛を見ることとなるなり。

す、亦た凡夫の法をも捨てざればなり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、一切衆生の心を知るも亦衆生を得ず、乃至、知者見者をも亦た得ず、是の菩薩は色を得ず、受想・行・識を得ず、眼乃至意を得ず、色乃至法を得ず、眼觸因縁生を受、乃至意觸因縁生を受を得ず、四念處、乃至十八不共法を得ず、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、諸の佛法を得ず、佛を得ず。何となれば、般若波羅蜜(多)は、法を得ることを爲さざるが故に出づればなり。何となれば、般若波羅蜜(多)の性は、所有なく得べからず、所用の法も得べからず、處も亦た得べからざればなり」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し是の如し。橋尸迦よ、汝が説く所の如し。菩薩摩訶薩は、長夜に般若波羅蜜(多)を行するに、阿耨多羅三藐三菩提を得べからず。何に泥んや、菩薩及び菩薩法をや」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、但た般若波羅蜜(多)のみを行じて、餘の波羅蜜(多)を行ぜざるや」と。佛、釋提桓因に告げて言はく、「橋尸迦よ、菩薩は盡く六波羅蜜(多)の法を行す。所得なきを以ての故に檀波羅蜜(多)を行するも、施者を得ず、受者を得ず、財物を得ず。尸羅波羅蜜(多)を行するも戒を得ず、持戒の人を得ず、破戒の人を得ず。乃至般若波羅蜜(多)を行するも智慧を得ず、智慧の人を得ず、智慧なき人を得ず。橋尸迦よ、菩薩摩訶薩の布施を行する時、般若波羅蜜(多)は爲に明導と作りて能く檀波羅蜜(多)を具足す。菩薩摩訶薩の持戒を行する時、般若波羅蜜(多)は爲に明導と作りて、能く尸羅波羅蜜(多)を具足す。菩薩摩訶薩の忍辱を行する時、般若波羅蜜(多)は爲に明導と作りて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。菩薩摩訶薩の禪を行する時、般若波羅蜜(多)は爲に明導と作りて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。菩薩摩訶薩の諸法を觀する時、般若波羅蜜(多)は爲に明導と作りて、能く般若波羅蜜(多)を具足す。一切法は無所得なるを以ての

卷の第五十九

故に、所謂色乃至一切種智あり。

橋戸迦よ、譬へば、闍浮提の諸の樹の種種の葉、種種の華、種種の果、種種の色あるも、其の蔭に差別なきが如く、諸の波羅蜜(多)の、般若波羅蜜(多)の中に入り、薩婆若に至れば、差別なきことも亦た是の如し。所得なきを以ての故なり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は、大功徳を成就す。世尊よ、般若波羅蜜(多)は一切の功徳を成就す。世尊よ、般若波羅蜜(多)は、無量の功徳を成就し、無邊の大功徳を成就し、無等の功徳を成就す。世尊よ、若し善男子善女人あり、是の般若波羅蜜(多)の經卷を書し、華香、乃至幡蓋(を以て)恭敬し、供養し、尊重し、讚歎し、般若波羅蜜(多)に説く所の如く、正憶念すると、復た善男子、善女人あり、般若波羅蜜(多)の經卷を書して、他人に與ふるも、其の福は何れか多しと爲すや」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「橋戸迦よ、我遺つて汝に問はん。汝が意に隨つて我に報へよ。若し善男子善女人あり、諸佛の舍利を供養し、華香乃至幡蓋(を以て)恭敬し、尊重し、讚歎すると、若し復た人ありて、舍利を分つこと、芥子許の如きを、他人に與へて、華香乃至幡蓋(を以て)恭敬し、尊重し、讚歎すると、其の福は何れか多しと爲すや」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、我が佛より聞ける法の中の義の如くんば、善男子、善女人あり、自ら舍利を供養し、乃至幡蓋(を以て)するも、若し復人あり、舍利を分つこと、芥子許の如きを、他人に與へて供養せしむるも、其の福甚だ多し。世尊よ、佛は是の福の衆生を利するを見たまふが故に、金剛三昧に入りて、金剛身を碎いて末舍利と作す。何となれば、人あり、佛の滅度の後、佛舍利の乃至芥子許の如きを供養するも、其の福報無邊にして、乃ち苦を盡すに至ればなり」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し是の如し、橋戸迦よ。若し善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)の經卷を書

し、華香、乃至、幡蓋を以て供養し、恭敬するも、若し復た人あり、般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人に與へて學せしむるも、是の善男子善女人は、其の福甚だ多し。

復次に、橋戸迦よ、善男子、善女人、般若波羅蜜(多)の中の善の如く、他人の爲に説き、開示し分別して、解し易からしめんに、是の善男子、善女人は、前の善男子、善女人の功德に勝る。従つて般若波羅蜜(多)を聞く所、當に其人を視ること

佛の如く、亦た高勝梵行人の如くすべし。何となれば、當に知るべし、般若波羅蜜(多)は、即ち是れ佛なり。般若波羅蜜

(多)は佛に異ならず。佛は般若波羅蜜(多)に異ならず。過去、未來、現在の諸佛は、皆な般若波羅蜜(多)の中より學して、

阿耨多羅三藐三菩提、及び高勝梵行人の人を得。高勝梵行人とは、所謂、阿耨跋致なり。菩薩摩訶薩も亦た般若波羅蜜

(多)を學して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。聲聞の人は是の般若波羅蜜(多)を學して、阿羅漢道を得、辟支佛の道な

求むる人は、是の般若波羅蜜(多)を學して辟支佛道を得、菩薩も亦是の般若波羅蜜(多)を學して菩薩位に入ることを得。是

を以ての故に、橋戸迦よ、善男子善女人は、現在の佛を供養し、華香、乃至幡蓋を以て恭敬し、尊重し、讚歎せんと欲

せば、當に般若波羅蜜(多)を供養すべし。我、是の利益を見る。初めて阿耨多羅三藐三菩提を得る時、是の如きの念を作す

「誰か供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、依止し、住すべき者ぞ」と。

橋戸迦よ、我一切世間の中の、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは沙門、婆羅門の中に、我と等しきものを見ず。何

に況んや、勝る者あらんや。我自ら思惟し念すらく、「我が所得の法は、自ら作佛を致す、我れ是の法を供養し、恭敬し、

尊重し、讚歎し、當に是の法に依止し住すべし」と。何等か是の法なる。所謂、般若波羅蜜(多)なり。橋戸迦よ、我自らは

の般若波羅蜜(多)を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し已り、依止し住せん。何に況んや、善男子、善女人は、阿耨多羅三藐

三菩提を得んと欲し、而も般若波羅蜜(多)を供養し、華香、瓔珞乃至幡蓋を以て恭敬し、尊重し、讚歎せざらんや。何と

なれば般若波羅蜜(多)の中には諸の菩薩摩訶薩を生じ、菩薩摩訶薩の中には諸佛を生ずればなり。是を以ての故に橋尸迦よ、善男子、善女人、若くは佛道を求め、若くは辟支佛道を求め、若くは聲聞道を求めば、皆な應に般若波羅蜜(多)を供養し、恭敬し、華香乃至幡蓋(を以て)尊重し、讚歎すべしと。

論

問うて曰はく、(三三) 何の因縁の故に、是の有爲法、無爲法の相を説くや。答へて曰はく、帝釋

は、般若波羅蜜(多)の、一切法を攝するを讚歎し、此の中に因縁を説かんと欲す。有爲法の相は、所謂、十八空、三十七品より、乃ち十八不共法に至り、略して善不善等より、乃ち世間、出世間に至

るを説く、是を有爲の法相と名く。何となれば、是れ作相にして、先には無にして今は有、已に有にして還た無なればなり。上と相違するは、即ち

【三三】第七問、有爲法無爲法の相を説く理由如何。

是れ無爲法の相なり。是の二の法相は、皆な般若波羅蜜(多)の中に攝す。有爲の善法は、是れ行處、無爲法は、是れ依止の處、餘の無記、不善法は捨離を以ての故に説かず。此は是れ新發意の菩薩の意に學する所にして、若し般若波羅蜜(多)の方便力を得れば、應に無生忍にして、則ち行法を愛せず、捨法を増さず、有爲法を離れず、而も無爲法あるべし、是の故に涅槃に依止せず。是を以て經中に、般若波羅蜜(多)を説く中に、廣く三乘を説けり。無相法を用ふるが故に、無生、無滅等あり。世諦を以ての故に、是の説を作すも、第一義諦に非ず。菩薩は是の諸法實相を行じ、能く一切衆生の心を觀すと雖も、亦た衆生を得ず。能く一切法を行すと雖も、亦た一切法を得ず。何となれば、無所得の般

若波羅蜜(多)を得るを以ての故なり。佛は其の歎する所を可としたまへり。菩薩の常に是の行、乃至阿耨多羅三藐三菩提を習ふも得べからず。何に況んや、餘法をや。帝釋意に念ずらく、「若し般若は、是れ究竟の法ならば、行人は、但だ般若波羅蜜(多)のみを行せん、何を餘法を用ゐんや」と。佛答へたまはく、「六波羅蜜(多)を行するに、般若波羅蜜(多)の無所得の法を用つて、和合するを以ての故に、此は即ち是れ般若波羅蜜(多)を行するなり。(二六) 若し但般若のみを行じて、五法を行せば、則ち功德具足せず、美ならず、妙ならず。譬へば、愚人は飲食の種種に具はるを識らず、醬は是れ衆味の主なりと聞き、便ち純ら醬を飲み、味を失うて患を致すが如し。行者も亦た是の如く、著心を除かんと欲するが故に、但般若のみを行じ、反つて邪見に墮して、善法を増進すること能はず。若し五波羅蜜(多)と和合すれば、則ち功德具足し、義味調適す。衆行和合すと雖も、般若を主と爲す。若し布施等の諸法は、般若波羅蜜(多)を離るれば、則ち種種の差別あり。(二七) 般若波羅蜜(多)の中に至れば、皆な一相にして差別あること無し。譬へば、閻浮提の阿那婆達多池より、四大河流れ、一大河に五百の小川ありて之に歸し、俱に大海に入れば、則ち其の本名を失し、一味と爲りて、別異なる

【二六】 若し但智度を行じて五度を離るれば、純ら醬を飲んで患を致すが如し。

【二七】 五法とは、智度以外の五度をいふ。

【二八】 四河海に入つて本名を失するが如く、五度は智度の海の中に入れば一相となるなり。

【二九】 阿那婆達多(Aparavata) 瞻部洲の中心、香山の南大雪山の北にあり、周圍八百里、金・銀・瑠璃・頗珉其岸を飾り、金沙彌漫して清波皎鏡たり、八地の菩薩願力を以ての故に化して龍王となり、中に潜宅せりといふ。

こと無きが如し。又樹木の枝葉華果の衆色は、別異なれども、蔭には則ち別なきが如し。

問うて曰はく、蔭にも亦た差別あり、樹大なれば則ち蔭大に、枝葉華果の大小も、種種にして、形を異にす、云何が差別なきや。答へて曰はく、光を蔽ふが故に、影現じ、光なきの處を即ち名けて蔭と爲す。蔭は大小異形を以て義と爲さず。

問うて曰はく、般若波羅蜜「多」を行じ、受け、誦するより、乃ち正憶念するに至るまで、此の事は難しと爲し、般若の經卷を、書持して、他人に與ふるは、易しと爲す。

「その」功德すら尙等しかからず、云何が勝れりと言ふや。答へて曰はく、獨り行じて、誦讀し、正憶念することは、難しと雖も、或は我心を以ての故に功德少し。經卷を以て他に與ふるは、大悲の心ありて、佛道の因縁と作り、吾我なきが故に、功德は大なりと爲す。佛、帝釋に問ひたまへるが如し、「若し人自ら舍利を供養すると、復人あり、舍利を以て、他に與へて供養せしむると、其の福は何の所に多しと爲すや」と。答へて曰はく、「他人に與へて供養せしむることは、福を得ること多し。吾我なく、慈心(を以て)與ふるを以ての故なり」と。佛は福德を用ゐたまはずと雖も、是の如く、大に衆生を利益すること有るを見る故に、是を以て金剛三昧に入り、自ら其の身を碎きたまへり。

【三二】 第八問、樹蔭華果等に差別なしといふ理由如何。

【三三】 第九問、般若を讀誦し正憶念するは難く、般若の經卷を書寫して、他人に與ふるは易し、其の功德は等しかるべからず、云何が勝れたりと言ふや。

問うて曰はく、(一)若し福德、佛心に在らば、佛は何ぞ身を碎くこと、芥子の如くなるを用つて、人をして供養せしめたまひしや。答へて曰はく、(二)信淨の心は、二因縁より生ず。一には内に正憶念し、二には外に良き福田あり、譬へば、好き鑿子あり、田も又良美なれば、所收必ず多きが如し。是の故に、心は好しと雖も、必ず舍利に因りて、然る後に大果報を得。佛は、既に其の言を可とし、復た更に自ら説きたまはく、(三)一人あり、經卷を書寫し、人に與ふると、復た人あり。大衆の中に於いて、廣く其の義を解すると、其の福は前に勝る。是の人を視ること佛の如く、若くは佛に次ぐこと。佛の如く、若くは佛に次ぐの義は、先に説くが如し。佛は二種の因縁を以て、般若波羅蜜〔多〕の勝れたることを證したまへり。一には、三世の聖人は、〔般若〕の中より學して、聖道を成じ、二には、我は此の法を以ての故に、無上聖を成ずることを得。我今還つて師として、此の法を仰ぐ。法とは、諸法實相、所謂、般若波羅蜜〔多〕なり。我は更に求むる所なけれども、而も猶ほ般若を推尊し供養す。何に況んや、善男子は種種の供具を以て、般若波羅蜜〔多〕を供養せざらんや。此の中に因縁を説きたまはく、「般若は是れ菩薩の根本の因縁、菩薩は是れ諸佛の根本の因縁、諸佛は是れ一切世間の大利益安樂の因縁なり」と。是の故に、聲聞辟支佛の人は、疾く安隱に三解脱の門に入

【一〇】 第一〇問、若し福德、佛心にあらば、佛は何ぞ芥子の如くに身を碎き、人をして供養せしめ給ひしか。

【一一】 信淨の心は二因縁より生ず。(一)内の正憶念、(二)外の良福田。

【一二】 經を書寫して人に與ふるよりも、人の爲に經を解説するは、其の福勝れたり。

らんと欲す。行者すら猶尚ほ般若波羅蜜〔多〕を供養す。何に況んや、菩薩をや。供養の具とは、所謂、一心を以て聽受するより、乃ち正憶念するに至り、及び華香、乃至旛蓋を以てす。

# 巻の第六十

## 二 校量法施品第三十八を釋す。

釋

佛、釋提桓因に告げて言はく、「橋戸迦よ、  
 佛、釋提桓因に告げて言はく、「橋戸迦よ、  
 人をして、十善道を行ぜしめば、汝が意に於いて云何。是の因縁の故に、福を得ること多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子善女人に如かず。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中に、廣く諸の無漏法を説けばなり。善男子善女人は、是の中に從つて學し、已に學し、今學し、當に學すべし。正法位中に入る、已に入り、今入り、當に入るべし。須陀洹果を得る、已に得、今得、當に得べしと。乃至阿羅漢果、辟支佛道を求むるも亦是の如し。諸の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めて正法位中に入る、已に入り、今入り、當に入るべし。阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得、今得、當に得べし。」

橋戸迦よ、何等か是れ無漏法なる。所謂、四念處乃至八聖道分、四聖諦、內空乃至無法有法空、佛の十力乃至十八不共法なり。善男子善女人は、是の法を學し、阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得、今得、當に得べし。橋戸迦よ、若し善男子善女人ありて、一人に教へて須陀洹果を得せしめば、是の人福徳を得ること、一閻浮提の人に十善道を行ぜしむるに勝る。何

【一】 此の品には、十善を施すよりも、又他の諸の善法よりも、般若を施す功德の勝れたるを明す。品名を或は法施品ともいひ、又は十善品ともいふ。

【二】 全印度の人をして十善を行ぜしむるよりも、般若の經卷を著持し、他に與へて讀誦し説かしむるは、其の功德勝れたり。

となれば、橋戸迦よ、一閻浮提の人をして、十善道を行せしむるも、地獄、畜生、餓鬼の苦を離れず、橋戸迦よ、一人をして須陀洹果を得せしむれば、三惡道を離るればなり。乃至阿羅漢果、辟支佛道も亦た是の如し。橋戸迦よ、三若し善男子善女人、一閻浮提の人をして、須陀洹果、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛道を得せしむるも、善男子善女人、一人に教へて阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるの福を得ること多きには如かず。何となれば、橋戸迦よ、菩薩の因縁を以ての故に、須陀洹乃至阿羅漢辟支佛道を生じ、菩薩の因縁を以ての故に諸佛を生ずればなり。是の因縁を以ての故に、橋戸迦よ、當に知るべし、善男子善女人、般若波羅蜜(多)の經卷を書して、他人に與へ、書持し、讀誦し、説かしむれば、福を得ること多きことを。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中に、廣く諸の善法を説き、是の善法の中に學して、便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至非有想非無想天を生じ出す。便ち四念處乃至一切種智有り、便ち諸の須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛あり、便ち諸佛あればなり。

【三】一閻浮提の人をして小果を得せしむるは、一人をして善提を得せしむるに如かず。

橋戸迦よ、一閻浮提の人を置き、若し善男子善女人ありて、四天下の世界の中の衆生に教へて、十善道を行せしめば、汝が意に於いて云何、是の人は是の因縁を以て、福を得ること多きや不やと。答へて言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子善女人の、般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦し、説かしむる福を得ること多きには如かず。餘は上に説くが如し。橋戸迦よ、四天下の世界の中の衆生を置き、若くは大千世界の中の衆生に教へて、十善道を行せしむるも、亦た是の如し。橋戸迦よ、小千世界の中の衆生を置き、若くは小千世界の中の衆生に教へて、十善道を行せしむるに、若し善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人に與へて書持し、讀誦せしめば、是の人は福を得ること多し。餘は上に説くが如し。橋戸迦よ、二千中世界の中の衆生を置き、若くは三千大千世界の中の、所有の衆生に教へて、十善道を行せしめん、復た人ありて、般若波羅蜜(多)の經卷をば書し、他

人に與へ、書持し、讀誦せしめば、是の人は福德多し。橋戸迦よ、三千大千世界の中の衆生を置き、若くは如恆河沙等の世界の中に、所有る衆生に教へて、十善道を行ぜしめん、若し復た人ありて、般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦せしめば其の福多し。餘は上に説くが如し。

復次に、橋戸迦よ、人あり、一閻浮提の衆生に教へて、四禪・四無量心・四無色定・五神通に立たしめば、汝が意に於いて云何、是の善男子善女人は、福德多きや不や」と。佛の言はく、「是れ善男子善女人の般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦せしめて、福を得ること多きに如かず。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中に、廣く諸の善法を説けばなり。餘は上に説くが如し。橋戸迦よ、閻浮提の衆生を置き、復た四天下の世界の中の衆生、小千世界の中の衆生、二千中世界の中の衆生、三千大千世界の中の衆生を置き、橋戸迦よ、若し人ありて、十方如恆河沙等の世界の中の衆生に教へて、四禪・四無量心・四無色定・五神通に立たしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福德多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し。世尊よ」と。佛の言はく、「善男子善女人、般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦せしめて、福を得ること多きに如かず。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中に廣く諸の善法を説けばなり。餘は上に説くが如し。

復次に、橋戸迦よ、若し善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜(多)を受持し、讀誦し、説き、正憶念せば、是の人の福徳は、閻浮提の人に教へて、十善道を行せしめ、四禪・四無量心・四無色定・五神通に立たしむるに勝る。正憶念とは、般若波羅蜜(多)をば受持して、親近し、乃至、正憶念し、二法を以てせず、不二法を以てせず、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)をば受持して、親近し、乃至正憶念し、二法を以てせず、不二法を以てせず、阿耨多羅三藐三菩提の爲に正憶念し、内空乃至一切種智、二法を以てせず、不二法を以てせざるなり。

復次に、橋尸迦よ、若し善男子善女人ありて、他人の爲に種種の因縁もて、般若波羅蜜(多)の義を演説し、開示し、分別して解し易からしむ。橋尸迦よ、何等か是れ般若波羅蜜(多)の義なる。橋尸迦よ、般若波羅蜜(多)の義は、二相を以て觀すべからず、不二相を以て觀すべからず。相あるに非ず、相なきに非ず、入らず出でず、増さず損ぜず、垢ならず淨ならず、生ぜず滅せず、取らず捨てず、住せず、住せざるに非ず、實に非ず、虚に非ず、合するに非ず、散するに非ず、著するに非ず、著せざるに非ず。因に非ず、因ならざるに非ず、法に非ず、法ならざるに非ず、如に非ず、如ならざるに非ず、實際に非ず、實際ならざるに非ず、橋尸迦よ、若し善男子善女人にして、能く是の般若波羅蜜(多)の義を以て、他人の爲に種種の因縁(を以て)演説し、開示し、分別して、解し易からしめば、是の善男子善女人の得る所の福德は、甚だ多し、自ら般若波羅蜜(多)を受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念するに勝る。

復次に、橋尸迦よ、善男子善女人は、自ら般若波羅蜜(多)をば受持して、親近し、讀誦し、説き、正憶念し、亦た他人の爲に種種の因縁(を以て)、般若波羅蜜(多)の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめば、是の善男子善女人の得る所の功德甚だ多しと。釋提桓因佛に白して言さく、「世尊よ、善男子善女人は應に是の如く般若波羅蜜(多)の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしむべし」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「是の如し橋尸迦よ、是の善男子善女人は、應に開示し分別して解し易からしむべし」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「是の如し橋尸迦よ、是の善男子善女人は、應に是の如く、般若波羅蜜(多)の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしむべし。橋尸迦よ、善男子善女人は、是の如く般若波羅蜜(多)の義を演説し、開示し、分別して解し易からしめば、無量無邊阿僧祇の福德を得。若し善男子善女人ありて十方の無量阿僧祇の諸佛を供養したてまつり、其の壽命を盡すまで、其の須ふる所に隨つて恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋(を以て)供養するも、若し復た善男子善女人あり、種種の因縁(を以て)、他人の爲に廣く般若波羅蜜(多)の義を説き、開示し、分別して、解し易からしめば、是の善男子善女人は功德甚だ多し。何となれば、諸の過去、未來、現在の佛は

皆て是の般若波羅蜜(多)の中より學して、阿耨多羅三藐三菩提を得べく、已に得、今得、當に得べければなり。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子善女人、無量無邊阿僧祇劫に於いて、檀波羅蜜(多)を行ずるも、是の善男子善女人の、般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲に其の義を演説し開示し、分別して解し易からしむる其の福の甚だ多きには如かず。(そは)

無所得を以ての故なり。云何が有所得と名く。憍尸迦よ、四若し菩薩摩訶薩、有所得を用ての故に布施せば、布施の時是の

念を作す、我與へ彼受く、施す所の物ありと。是を檀を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。我は戒を持す。此は是れ戒なりと。

是を戒を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。我は忍辱し、是の人の爲に忍辱すと。是を忍辱を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。

我は精進し、是の事の爲に勤め精進すと。是を精進を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。我は禪を修す、修する所は是れ禪

なりと。是を禪を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。我は慧を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。我は慧を得て、波羅蜜(多)を得すと名く。

得すと名く。憍尸迦よ、是の善男子善女人、是の如く行する者は、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、

波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)を具

足することを得ずしと。

釋提桓因、佛に白して言さく、世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が修して、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)

(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)を具足するやと。

佛、釋提桓因に告げたまはく、菩薩摩訶薩は布施する時、與ふる者を得ず、受くる者を得ず、施す所の物を得ず。是の人は、檀波羅蜜(多)を具足することを得。乃至

般若波羅蜜(多)を修する時、智を得ず、修する所の智を得ず。是の人は般若波羅蜜(多)を具足することを得。憍尸迦よ、是を

菩薩摩訶薩の檀波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)を具足すと爲す。善男子善女人は、是の如く般若波羅蜜(多)を行じて、當に他人の爲に其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)

【四】檀を得て智度を得ず。乃至慧を得て智度を得ず。

尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしむべし。何となれば、橋尸迦よ、未來世に當に善男子善女人あり、般若波羅蜜(多)を説かんと欲して、而も相似の般若波羅蜜(多)を説くべけん、善男子善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發すも、是の相似の般若波羅蜜(多)を聞いて正道を失せん。善男子善女人は、當に是の人の爲に具足して、般若波羅蜜(多)の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしむべしと。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ相似の般若波羅蜜(多)なる」と。佛の言はく、「善男子善女人ありて、有所得の般若波羅蜜(多)を説く、是を相似の般若波羅蜜(多)と爲す」と。釋提桓因佛に白して言さく、「世尊よ、云何が善男子善女人、有所得の般若波羅蜜(多)を説く、是を相似の般若波羅蜜(多)と爲すや」と。佛の言はく、「善男子善女人有所得の般若波羅蜜(多)を説くは、是れ相似の般若波羅蜜(多)なりとは、色の無常を説いて是の言を作す、能く是の如く行すれば、是れ般若波羅蜜(多)を行す」と。行者は色

【五】相似の般若波羅蜜多とは何ぞや。

第一、是れ般若波羅蜜(多)を行すと、行者は受・想・行・識の無常を求む。是を相似の般若波羅蜜(多)を行すと爲す。眼の無常を説き、乃至法の無常を説き、眼界の無常を説き、乃至至意の無常を説き、色の無常を説き、乃至至意の無常を説き、乃至至意觸因縁生の受の無常を説く、廣く説くこと五界、法界、意識界の無常を説き、地種の無常を説き、乃至識種の無常を説き、眼識衆の無常を説き、乃至意識觸因縁生の受の無常を説く、廣く説くこと五家の如し。色の苦を説き乃至意識觸因縁生の受の苦を説き、色の無我を説き乃至意識觸因縁生の受の無我を説くこと、皆な五衆を説くが如し。行者檀波羅蜜(多)を行する時、爲めに色の無常・苦・無我を説き、乃至、意識觸因縁生の受の無常・苦・無我を説く、尸羅波羅蜜(多)乃至、般若波羅蜜(多)も亦た是の如し。四禪・四無量心・四無色定を行するに爲めに、無常・苦・空・無我

を説き、四念處を行する爲めに、無常・苦・無我を説き、乃至薩婆若を行する時、無常・苦・無我を説く。是の如き教を作して能く是の如く行する者は、是を般若波羅蜜(多)を行すと爲す。橋戸迦よ、是を相似の般若波羅蜜(多)と名く。

復次に、橋戸迦よ、若し善男子善女人、當來世に相似の般若波羅蜜(多)を説いて、是の言を作す、汝、善男子よ、般若波羅蜜(多)を修行せよ。汝は般若波羅蜜(多)を修行する時、當に初地を得べく乃至當に十地を得べし。禪波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)も亦た是の如しと。行者は相似の有所得を以て、總相を以て是の般若波羅蜜(多)を修す。橋戸迦よ、是を相似の般若波羅蜜(多)と名く。

復次に、橋戸迦よ、善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を説かんと欲して、是の言を作す、汝、善男子よ、般若波羅蜜(多)を修行し已んぬ。當に聲聞辟支佛地を過ぐべしと。是を相似の般若波羅蜜(多)と名く。

復次に、善男子善女人、佛道を求むる者の爲に是の如く説く、汝、善男子善女人、般若波羅蜜(多)を修行し已りて、菩薩の位に入り、無生法忍を得、無生忍を得已りて、便ち菩薩の神通に住し、一佛界より一佛界に至りて、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎すと。是の如く説く者、是を相似の般若波羅蜜(多)と名く。

復次に、橋戸迦よ、善男子善女人、佛道を求むる者の爲に、是の如く説く、汝、善男子善女人よ、是の般若波羅蜜(多)を學し、受持し、讀誦し、説き、正憶念せば、當に無量無邊阿僧祇の功徳を得べしと。是の如く説く者、是を相似の般若波羅蜜(多)と名く。

復次に、善男子善女人、佛道を求むる者の爲に説く、過去・未來・現在の諸佛の功徳善本の如きは、初發心より佛を成得するに至るまですべて合集し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと。是の如く説く者、是を相似の般若波羅蜜(多)と名くと。釋提桓因、佛に白して言とく、「世尊よ、云何が善男子善女人、佛道を求むる者の爲に、相似の般若波羅蜜(多)を説かすとす

るや」と。佛の言はく、「若し善男子、善女人、佛道を求むる者の爲に、般若波羅蜜(多)を説く、汝、般若波羅蜜(多)を修行して、色の無常を觀すること莫れ。何となれば、色は色性空なり、是の色性は法に非ず、若し法に非ざれば、即ち名けて般若波羅蜜(多)と爲す。般若波羅蜜(多)の中に色は常に非ず、無常に非ず。何となれば、是の中、色すら尚ほ不可得なり、何に泥んや、常・無常をやと。橋尸迦よ、善男子善女人の、是の如く説く者は、是を相似の般若波羅蜜(多)を説かずと名く。受・想・行・識も亦た是の如し。

復次に、橋尸迦よ、善男子善女人は、佛道を求むる者の爲に説く、汝、善男子よ、般若波羅蜜(多)を修行し、諸法に於いて過ぐる所あること莫く、住する所あること莫れ。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には、法として過ぐるべく、住すべくも有ること無ければなり。何となれば一切法の自性は空なり、自性空は是れ法に非ず、若し法に非ざれば即ち是般若波羅蜜(多)と爲す。般若波羅蜜(多)の中には法の入るべく、出づべく、生すべく、滅すべきもの有ること無ければなりと。橋尸迦よ、是の善男子、善女人の是の如く説く、是を相似の般若波羅蜜(多)を説かずと名く。廣く説くこと上の如く、相似のものと相違する、是を相似の般若波羅蜜(多)を説かずと名く。是の如く、橋尸迦よ、善男子善女人は、應に是の如く般若波羅蜜(多)の義を演説すべし。若し是の如く、般若波羅蜜(多)の義を説かば、所得の功德前者に勝る。

【六】有漏の福は無漏の福に及ばず。

論者言はく、佛は更に異門を以て、般若波羅蜜(多)の勝れることを明かにせんと欲したまふが故に、帝釋に問うて言はく、「若し人あり、一閻浮提の人をして、十善道を行せしめば、其の福多きや不や」と。經中に廣く説くが如し。此の中に勝る所以の因縁を説きたまふ。所謂 般若波羅蜜(多)を説くが如し。

論者言はく、佛は更に異門を以て、般若波羅蜜(多)の勝れることを明かにせんと欲したまふが故に、帝釋に問うて言はく、「若し人あり、一閻浮提の人をして、十善道を行せしめば、其の福多きや不や」と。經中に廣く説くが如し。此の中に勝る所以の因縁を説きたまふ。所謂 般若波羅蜜(多)を説くが如し。

は廣く諸の無漏法を説き、三乘道を成じて涅槃に入り、復た十善道に還らず。但善の有漏のみにては世間の無常の福樂を受くるも、還た復た苦に墮つ、是の故に如かず。

復次に、先は是れ世間法、後は是れ出世間法、先は是れ能く生死の法を生じ、後は是れ能く生死の法を滅す、先は是れ無常なる樂の因縁、後は是れ常なる樂の因縁、先は是れ凡夫、聖人に共にある

法、後は但是れ聖人の法なるのみと爲し、是の如き等の差別あり。無漏法とは、三十七品、十八不共法、乃至無量諸佛の法なり。是の事をして了了に解し易からしめんと欲したまふが故に、更に因縁を説きたまへり。所謂、一人を教へ、須陀洹果を得せしめて、大福德を得ることは、閻浮提の人をして

十善道を行せしむることに勝る。十善を行すと雖も、未だ三惡道を免れざるが故なり。乃至阿羅漢、辟支佛道を得るも亦た是の如し。佛更に譬喩を説きたまはく、「若し人あり、一閻浮提の人を教へて、聲聞、辟支佛道を行せしむるは、人あり、一人を教へ、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、是の人の福

を得ること多きには如かず。何となれば、須陀洹乃至辟支佛は、皆な菩薩より生ずればなり。是の般若波羅蜜〔多〕の中には、種種に佛道の因縁を説く。是の故に、般若の經卷を書して、人に與ふるは、

十善を以て、四天下、乃至如恆河沙等の世界を教ふるに勝る。

復次に、閻浮提の人、乃至恆河沙等の世界の人を教へて、四禪等、乃至五神通を行せしむるも、亦

た是の如し。但四禪等は、是れ離欲の人にして、十善と差別す。復次に、若し人あり、一閻浮提の人

乃至如恆河沙の世界を教へて、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通を行せしむるも、是の人の般若波羅蜜〔多〕をば受持して、讀誦し、説き、正憶念して、福を得ること多きに如かず。福を得ること多しとは、上には般若の經卷を以て他人に與へ、今は自ら般若を行するを異なれりと爲す。先には十善道、乃至五神通を別〔別〕に説き、今は合して説く。

問うて曰はく、何を以てか受持し、讀誦し、説くことを解せず、但正しく憶念することのみを解するや。答へて曰はく、受持し、讀誦し、説くことは福德多く、正しく憶念することは能く二事、所謂、福德と智慧とを具ふるを以て、是の故に別説す。人の藥草を採り乃至合和するも、而も未だ之を服せざれば、病を損すること無く、服すれば乃ち病を除くが如し。正しく憶念するは藥を服して病愈ゆるが如し。是の故に但正しく憶念することのみを解す。正しく憶念するの相は、所謂、二に非ず、不二に非ずして、般若波羅蜜〔多〕を行するなり。二、不二の義は先に説くが如し。初には、經卷を書するを以て舍利に勝り、中には、經卷を以て人に與ふれば、人をして十善乃至五神通を行せしむるに勝り、今は、受持し、讀誦し、説くに、受持の邊より、正しく憶念するは、最も勝れり。諸佛の衆生を憐愍するが故に、爲に其の義を解せしめ、解し易からしめたまふことは、自ら正しく憶念することに勝れり。是の時、佛は廣く福德を分別せんと欲するが故に説い

【七】 第一問、受持し、讀誦し、説くを解せず、但正しく憶念を解するに何故なるか。  
 【八】 藥草を採取し調合するも、未だ服せざれば効なし。

て言はく、「若し人あり、形壽を盡すまで、十方の佛を供養したてまつるも、他の爲に般若の義を解説するに如かず」と。此の中に勝れる因縁を説きたまはく、「三世の諸佛は、皆是の般若を學して、無上道を成じたまへり」と。

復次に、若し菩薩は無量劫に於て、六波羅蜜〔多〕を行ずるも、有所得を以ての故に、人の爲に般若波羅蜜〔多〕を解説するに如かず。〔九〕有所得とは、所謂、我心を以て諸法の中に於いて、相を取るが故なり。佛、更に般若の正義を説かんと欲し給ふが故に、帝釋に答へたまはく、菩薩は無所得を以て、六波羅蜜〔多〕を行ずれば、則ち具足することを得。即ち是れ般若波羅蜜〔多〕の正義なり」と。人あり、未來世に、相似の般若を説くとは、會中の  
人、正憶念すと説くをば聞いて、是の思惟を作す、「何者か、是れ邪憶念なる」と。是の故に相似の般若波羅蜜〔多〕の相を説く。人の是なる道と非なる道とを知るが故に、能く非道を捨てて、正道を行ずるが如し。

復次に、未來世の衆生を憐愍して、佛及び諸の大菩薩を見ず、但經書のみを見て、邪憶念するが故に、隨つて音聲に著し、相似の般若波羅蜜〔多〕を説く。相似とは、名字語言を同じうして、而も心義異なるなり。著心を以て相を取り、五衆等の無常、乃至生なく、滅なきを説くは、是れ相似の般若なるが如し。〔一〇〕若し著せざるの心を以て、相を取らざれば、五衆の無常を説くも、但常顛倒を破する

【九】 有所得の義解。  
【一〇】 五蘊の無常は常倒を破せんが爲にして、無常に著せざるは眞の般若なり。

が爲の故にして、無常に著せざるは、是れ眞實の般若なり。是の説法の人の、相似の般若波羅蜜(多)を捨てて、眞の般若を修習することを教ふるは、是を般若波羅蜜(多)の正義を説くと名け、前の功德に勝る。



「復次に、橋戸迦よ、閻浮提中の所有る衆生をして、皆教へて須陀洹を得せしめん、汝が意に於いて云何、是の人は福を得ると多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲に種種の因縁(を以て)、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、是の如く言人には如かず。善男子よ、汝來りて、是の般若波羅蜜(多)を受け、勤めて誦讀して説き、正憶念し、般若波羅蜜(多)の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中より諸の須陀洹を出生すればなり。橋戸迦よ、閻浮提中の衆生を置き、復た四天下の衆生小千世界、二千世界、三千大千世界の衆生を置き、若くは人あり、十方如恆河沙等の世界の中の衆生に教へ、盡く教へて須陀洹を得せしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲に種種の因縁(を以て)、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、是の如く言人には如かず。善男子よ、汝來りて、是の般若波羅蜜(多)を受け、勤めて誦讀して説き、正憶念し、般若波羅蜜(多)の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中に諸の須陀洹を出生すればなり」と。

【一】 諸の聖果を得せしむるよりも、般若を施す功德の大なる所以を明す。

「復次に、橋戸迦よ、若し善男子善女人あり、闍浮提の中の人を教へて、斯陀含、阿那含、阿羅漢を得せしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲に、種種の因縁を以て、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜(多)をば受けて、勤めて誦讀し、説き、正憶念し、般若波羅蜜(多)の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、般若波羅蜜(多)の中より諸の斯陀含、阿那含、阿羅漢を出生すればなり。乃至十方如恆河沙等の世界の衆生も亦た是の如し」と。

「復次に、橋戸迦よ、若し善男子善女人ありて、闍浮提中の衆生を教へて、辟支佛道を得せしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し」と。佛の言はく、「善男子善女人は般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲に、種種の因縁を以て、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜(多)を受けて、勤めて誦讀し、説き、正憶念し、般若波羅蜜(多)の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、般若波羅蜜(多)の中に諸の辟支佛道を出生すればなり。四天下乃至十方如恆河沙等の世界の衆生も亦た是の如し」と。

「復次に、橋戸迦よ、善男子善女人、一闍浮提中の衆生を教へて、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲に、種種の因縁を以て、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、汝當に般若波羅蜜(多)の中に隨つて學すべくんば、當に一切智法を得べし。汝若し一切智法を得ば、汝便ち般若波羅蜜(多)を修行し、増益し、具足することを得ん。若し般若波羅蜜(多)を修行し、増益し、具足することを得ば、

汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。何となれば、橋戸迦よ、般若波羅蜜(多)の中に、諸の初發意の菩薩摩訶薩を生ずればなり。乃至十方如恆河沙等の世界も亦た是の如し」と。

「復次に、橋戸迦よ、善男子善女人、一闍浮提の中の衆生に教へて、阿鞞跋致地に任せしめん、汝が意に於いて如何、是の人の福德多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を以て、他人の爲めに、種種の因縁もて、其の義を演説し、開示し、分別して、解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜(多)を受け、乃至般若波羅蜜(多)の中の説の如く行ぜば、汝便ち一切智法を得、一切智法を得已りて乃至便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ん。何となれば、般若波羅蜜(多)の中に、諸の菩薩摩訶薩の阿鞞跋致地を生ずればなり」と。乃至十方如恆河沙等の世界も亦た是の如し」と。

「復次に、橋戸迦よ、一闍浮提の中の衆生、意を發して阿耨多羅三藐三菩提を求めんに、若し善男子善女人あり、是の人の爲に、般若波羅蜜(多)を演説し、及び其の義を解し、開示し、分別して是の如く言はん、「汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜(多)を受け、乃至般若波羅蜜(多)の中の説の如く行じ、學し已らば、汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。復たあり、一阿鞞跋致の菩薩の爲に、般若波羅蜜(多)を演説し、及び其の義を解し、開示し、分別して、是の如く言はん、「善男子よ、汝來れ、是の般若波羅蜜(多)を受け、乃至般若波羅蜜(多)の中の説の如く行じ、學し已らば、汝は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。是の善男子の得る所の功德甚だ多し。乃至十方如恆河沙等の世界の中も亦た是の如し」と。

「復次に、橋戸迦よ、若し一闍浮提の中に衆生ありて、皆な阿鞞跋致、阿耨多羅三藐三菩提を得んとするに、復た善男子善女人あり、般若波羅蜜(多)を以て、是の人の爲に、其の義を演説す。是の中に於いて一の菩薩あり、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。若し善男子善女人ありて、是の菩薩の爲に、般若波羅蜜(多)を説き、及び其の義を解せん、是の人の

功徳は最も多し。乃至十方如恆河沙等の世界亦た是の如し」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、轉轉して阿耨多羅三藐三菩提に近づく者の如きは、是の如く應

に轉轉して、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行ぜ

しむべし。應に内空乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分、佛の十方・四無所畏・四無礙智・十八不共法を教ふべし。亦た應

に衣服、臥具、飲食、湯藥を其の須ふる所に隨つて供養すべし。是の善男子善女人、法施財施をもて是の菩薩に供養せば、

得る所の功徳は前者に勝れり。何となれば、世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり」と。

爾の時、慧命須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「善い哉、善い哉、橋尸迦よ、汝を聖弟子と爲す。諸の菩薩摩訶薩の

阿耨多羅三藐三菩提を爲す者を安んじ、法施財施を以て、法の應に爾るべきを利益す。何となれば、菩薩の中に、諸佛聖衆

を生ずればなり。若し菩薩にして、阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者は、是の菩薩は、六波羅蜜(多)乃至十八不共法を學

ぶること能はず。若し六波羅蜜(多)乃至十八不共法を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。若し阿耨多羅三

藐三菩提を得ること能はざれば、則ち聲聞辟支佛なし。是を以ての故に、橋尸迦よ、諸の菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)乃至十

八不共法を學し、六波羅蜜乃至十八不共法を學する時、阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に、地獄

畜生餓鬼道を斷じ、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至非有想非無想天有り、便ち檀波羅

蜜(多)、尸羅、羼提、毗梨耶、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法世に出現し、

聲聞乘、辟支佛乘、佛乘も、皆な世に現はる」と。

論 論者言はく、閻浮提、乃至恆河沙の世界の中の人を教へて、聲聞、辟支佛道を得せしむるも、

他人の爲に般若波羅蜜(多)の義を演說せんには如かず。此の中に因縁を説きたまはく、「是の諸の賢

聖は、皆な般若波羅蜜〔多〕の中より出づるが故なり」と。般若波羅蜜〔多〕は、是れ諸法實相なり。正

遍知を名けて佛と爲す。小は是の大菩薩に如かず。辟支佛、阿羅漢も、轉た是の阿那含、斯陀含、須

陀洹の、諸法實相を愛念し、供養し、能く知る者に如かず。是の天王、人王等は、世間の福德の人な

り。是の故に常に般若波羅蜜〔多〕を説き、諸の賢聖、刹利の大臣、乃至一切諸天を出生す。復次に、

一閻浮提、乃至恆河沙の世界の人をして、無上道を發し、乃ち阿鞞跋致に

至らしむるも、人の爲に般若波羅蜜〔多〕の正義を解説するには如かず。

問うて曰はく、(二)上に凡夫の法、二乗の法の如かざるを説けるは爾るべ

し。今人をして無上道を發し、阿鞞跋致を得せしむと説けるは、是れ佛道

の事なり。何が故に如かざるや。答へて曰はく、般若の正義を説くに、二

種あり。(三)一には生死肉身の菩薩、二には三界を出でたる不生不死の法性

生身の菩薩なり。是の菩薩は、但阿鞞跋致を過ぐる菩薩の事を説く。所謂、衆生を教化し、佛世界を

淨め、一切衆生の三世無量劫の心、行業の因縁を分別し、諸の世界の起滅、成敗、劫數の多少、大慈

大悲、一切智等の無量の諸の佛法を分別す。是の一人の説法は、閻浮提、乃至恆河沙世界の衆生を

教へて、發心せしむるに勝れりと爲し、又復た阿鞞跋致に至り、阿鞞跋致より已上、佛道に至る中間

に、更に一人あり、佛道に近づき、疾かに成佛せんと欲す。是の人に般若波羅蜜〔多〕の正義を教ふる

【三】 第二問、人をして無上道  
を發し、不退轉を得せしむる  
ことの、般若を施す功德に如  
かざる理由如何。  
【三】 二種の菩薩。(一)生死肉身  
の菩薩(二)出三界不生不死法性  
生身の菩薩。

者は、其の福最も多し。何となれば、福田大なるが故に、福德も亦た大なればなり。譬へば、一切十方の如恆河沙等の世界の聖人、乃至道場に坐せんと欲する菩薩を供養するは、一佛を供養したてまつるに如かざるが如し。譬へば、太子を犯して罪を得るは、一切の人を犯すに過ぎ、若し太子を供養して恩を得れば、一切の凡夫を供養するに勝り、若し國王を犯して罪を得れば、太子を犯すに過ぎ、若し國王を供養するは、太子を供養するに勝るが如し。是の如く、疾く作佛に近づく菩薩を教化供養するは、如恆河沙等の阿鞞跋致の菩薩を供養教化する功德に勝る。何となれば、福田深厚にして、其の法は能く衆生をして、增長せしむればなり。

爾の時、帝釋は、是の法力の大なることを了知するが故に、佛に白して言さく、「菩薩は轉轉して無上道に近づく。是の如きを教化供養する功德

【四】太子を犯して罪を得るは一切の人を犯すに過ぐ。

は、轉た多かるべし」と。爾の時、須菩提、帝釋を讚じて言はく、「善哉、善哉、汝は能く諸の菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする者を、慰安し勸進するに、財法の二施を以てす」と。財施とは、供養の具、衣食等なり。法施とは、教ふる所の六波羅蜜「多」等なり。帝釋は道を得るが故に名けて聖弟子と爲す。聖弟子の法は、應に等しく諸の菩薩を安んじ勸進すべし。是の中に因縁を説けり。是の諸の聖衆は、皆菩薩の中より出づ。何となれば、若し菩薩にして、六波羅蜜「多」を行せず、無上道を成せざれば、則ち須陀洹、乃至辟支佛、菩薩の因縁なければなり。十善道、乃至無量の佛法、世に出

現げんす。是この故ゆゑに三惡道あくだうを斷だんじ、利利せりりの大姓だいじやう、乃至ないし諸佛しよぶつありて、世よに出現しゆつげんす。是この故ゆゑに、菩薩ぼさつの般若波はんには

羅蜜らみん「多た」の正義しやうぎを説とき、佛道ぶつだうに近ちかづくを教をふる福德ふくとくは最つとも大だいなり。

# 卷の第六十一

## 〔一〕 隨喜廻向品第三十九を釋す。

爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩、慧命須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩あり、福德を隨喜し、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。〔そは〕所得なきを以ての故なり。若くは聲聞辟支佛の福德、若くは一切衆生の福德、若くは布施、若くは持戒、若くは修定、若くは隨喜よりも、是の菩薩摩訶薩の福德を隨喜して一切衆生と共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは其の福最上第一最妙無上にして、與に等しき者なし。何を以つての故に、聲聞・辟支佛・及び一切衆生の布施、持戒、修定、隨喜は、自調の爲、自淨の爲、自度の爲の故に起す。所謂る、四念處、乃至八聖道分、空・無相・無作なり。菩薩の福德を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、是の功德を持つて、一切衆生を調へんが爲め、一切衆生を淨めんが爲め、一切衆生を度せんが爲めの故に起せばなり」と。

爾の時、慧命須菩提、彌勒菩薩に白して言さく、「諸の菩薩摩訶薩は、十方無量無邊阿僧祇の世界の中の、無量無邊阿僧祇の諸の滅度せる佛を念じ、初發心より、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、無餘涅槃に入り、乃至法を盡すに至るまで、其の中間に於ける、諸の善根六波羅蜜多に應じ、及び諸の聲聞人の善根、若くは布施の福德、持戒、修定の福德、及び諸の學人の無漏の善根、無學人の無漏の善根、諸佛の戒衆、定衆、慧衆、解脱衆、解脱知見衆、一切智、大慈大悲、及び

- 【一】 此の品には、隨喜即ち福德に賛成する功德を説く。他本には單に隨喜品といふ。
- 【二】 廻向とは、因を廻して果に、小を廻して大に向はしむるをいふ。
- 【三】 菩薩の隨喜は、聲聞のそれに勝る。

餘の無量阿僧祇の諸佛の法、及び諸佛の所説の法、是の法の中に學びて、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果、辟支佛道を得、菩薩摩訶薩の位に入り、及び餘の衆生の種々の諸の善根、是の諸の善根の一切を相合せ、隨喜の福德を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、最上第一、最妙無上にして與に等しきもの無し。是の如く隨喜し已りて、是の隨喜の福德を持つて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。若し善男子ありて、菩薩乘を行する者は、是の念を作す、我が是の心、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是れ心を生じ事を緣するなり。若し善男子、相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、念する所の如く得べきや不や」と。

彌勒菩薩須菩提に語るらく、「是の善男子、菩薩乘を行じて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向する心は、是れ事を緣するなり。若し善男子、相を取らば、念する所の如くなるを得ず」と。須菩提、彌勒菩薩に語るらく、「若し諸事、諸緣所有なくんば、是の善男子の菩薩乘を行する者、相を十方の諸佛の諸の善根、初發心より乃ち法の盡くるに至るまで、及び聲聞の諸の善根、學、無學の善根に取り一切相合せ、隨喜の功德を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、無相を以ての故に、是の菩薩は將に顛倒なからんか、無常を常と謂ふは、想顛倒、心顛倒、見顛倒なり。不淨を淨と謂ひ、苦を樂と謂ひ、無我を我と謂ふは、想顛倒、心顛倒、見顛倒なり。若くは緣の如く、事の如く、阿耨多羅三藐三菩提となすも、亦た是の如し。廻向心も亦た是の如く、檀波羅蜜多、尸羅、戒、忍、捨、檀、持、淨、戒、忍、波羅蜜多乃至十八不共法も、亦た是の如くならん。若し爾らば、何等か是れ緣、何等か是れ事、何等か是れ阿耨多羅三藐三菩提、何等か是れ善根、何等か是れ隨喜の心もて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するや」と。



釋して曰く、先の七品の中に、佛は須菩提に命じて、般若を説かしたまひ、中間には、帝釋

は多く問ひ、多く功德の事を説き、今、彌勒は佛の本意に順じ、還つて須菩提をして、隨喜の法に因らしめんと欲して、廣く般若波羅蜜〔多〕を説くなり。

復次に、帝釋は、上に般若を供養するに、華香伎樂幡蓋の具を以てすれば、福を得ること甚だ多きことを聞いて、深く自ら慶幸すらく、「此の供養の具は、唯我等のみ能く辨ず、出家の人の所有に非ず」と。是の故に、彌勒は其の自ら多しとするの情を抑へんと欲するが故に、須菩提に語るらく、菩薩は但心に隨喜するを以て、則ち聲聞辟支佛、一切衆生の布施等、及び諸の無漏の功德に勝れり。何に況んや、華香を以て、經卷等に供養することに對してをや」と。菩薩摩訶薩の義は、先に説くが如し。隨喜の福德とは、身口業を勞せずして、諸の功德を作し、但心の方便を以て、他の修福を見るのみにして、隨つて歡喜し、是の念を作す

【四】二種の福德の樂の因縁。

なり。「一切衆生の中、能く福を修し、道を行する者を最も殊勝と爲す。若し福德を離るる人は、畜生と同じく三事を行す」と。三事とは、姪欲飲食・戰闘なり。能く福德を修行し、道を行するの人は、一切衆生と共に尊重愛敬せらる。譬へば、熱時には清涼なる滿月を樂しみ仰がざると無きが如く、亦大會の集りに先んじ、伎樂簡饌、畢備せざると無く、遠近の諸人、咸く共に欣び起くが如く、修福の人も亦復た是の如し。〔四〕福德に二種の樂の因縁あり、世間と出世間なり。出世間とは、諸の無漏法は福報なしと雖も、能く福德を生ずるが故に福德と名く。是の故に有漏・無漏を通じて福德と名く。

復次に、福德は、是れ菩薩摩訶薩の根本にして、能く所願を滿じ、一切の聖人の讚歎する所、無智の人の毀訾する所、智人の所行の處、無智の人の遠離する所なり。是の福德の因縁の故に、人王轉輪聖王・天王・阿羅漢・辟支佛・諸佛・世尊と作り、大慈大悲・十方・四無所畏・一切種智・自在無礙は、皆な福德の中より生ず。是の如き等の種種の福德もて、正見を得るが故に、隨つて歡喜す。復次に、菩薩は自ら念ずらく、「我れ應に一切衆生に樂を與ふべし」と。而して衆生は能く自ら福德を行す。是の故に心に歡喜を生ず。

復次に、一切衆生の善を行するは、我と相似す、是れ我の同伴なり。是の故に隨喜す。諸の菩薩摩訶薩は、十方三世の諸佛、及び菩薩、聲聞、辟

【五】一切衆生と共にの義解。

支佛、及び一切修福の衆生の布施・持戒・修行に於いて、此の福德の中に於いて、隨喜の福德を生ず。是の故に隨喜と名く。是の隨喜の福德を持し、一切衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。一切衆生と共にとは、是の福德は、一切衆生に與ふることを得べからず、而も果報を與ふべし。菩薩は既に福德の果報を得、衣服・飲食等の世間の樂具を以て、衆生を利益し、菩薩は福德清淨なる身口を以て、人に信受せられ、衆生の爲に說法して十善道・四禪等を得せしめ、與に後世の利益を作し、末後に成佛するに福德の果報を得、身に三十二相・八十隨形・好無量の光明ありて、觀る者は厭ふこと無く、無量の清淨なる、梵音柔和・無礙解脫等の諸の佛法は、三事に於いて示現し、無量阿僧祇の衆

生を度し、般涅槃の後、身を碎いて、舍利に人の供養を興へ、久しうして後、皆な道を得せしむ。是の果報は、一切衆生に與ふべく、果中に因を説くを以ての故に、福德を衆生と共にすと言ふ。若し福德は以て人に與ふべしとは、諸佛は初發心より、集むる所の福德を、盡く人に與ふべく、然る後に更に善法の體を作りて人に與ふべからず。今は直に無畏・無惱を以て、衆生に施與す、無所得を用ふるが故にとは、此の義は先に説くが如し。是を菩薩摩訶薩の隨喜の福德と名く。一切の聲聞・辟支佛、及び衆生の三種の福德に比するに、最勝・最上・第一・最妙・無上にして、等しきもの無し。等の義は先に説くが如し。是の中には勝れる因縁を説く。

是の二乗の福德は、皆自調・自淨・自度の爲なりとは、持戒は是れ自ら調へ、修禪は是れ自ら淨め、智慧は是れ自ら度す。復次に、自調とは、正語・正業・正命なり。自淨とは、正念・正定なり。自度とは、正見・正思惟・正方便なり。

復次に、布施の因縁の故に自ら調へ、持戒の因縁の故に自ら淨め、修定の因縁の故に自ら度す。修定は是れ無漏法の近因縁なり。無漏とは、所謂、三十七品、三解脱門等なり。布施持戒は遠きが故に解せず。菩薩の隨喜の福德は、勤勞なしと雖も、一切衆生を度するが爲の故に勝れり。

問うて曰はく、實に一切衆生を度せず、何を以てか、一切衆生を度するが故に、勝れりと言ふ

- 【六】 自調の義解。
- 【七】 自淨の義解。
- 【八】 自度の義解。
- 【九】 第一問、實に一切衆生を度せず、一切衆生を度するが故に勝るといふ理由如何。

や。答へて曰はく、(一〇)諸佛菩薩の功德力は、能く一切衆生を度す。但衆生に和合の因縁なきを以ての故なり。譬へば、大火には常に焼く力あり。但薪近からざるを以ての故に焼くを得ざるも、近ければ則ち能く焼くが如し。爾の時に、須菩提は、畢竟空の智慧を以て、彌勒菩薩を難問すらく、「諸佛を念じ、福德を隨喜し、無上道に廻向する、是の念ずる所は過去の事なり。是の事は念ずる所の如くなるや不や」と。彌勒は二の因縁を以ての故に答へて言はく、「不なり、一には、過去無量阿僧祇劫の諸佛は、久しく已に滅度して、復た遺餘なく、菩薩は或は宿命智なく、或は有るも而も及ぶこと能はず。但聞く所の如く、憶想分別するを以ての故に、念ずる所の如くならず。二には、諸佛及び功德は、三界を出で三世を出で、戲論語言の道を斷じて、涅槃の相の如く、畢竟空にして清淨なり。隨喜する者は、諸佛及び諸の弟子の善根功德を分別し、是の廻向心及び無上道は、實に非ざるが故に不なりと言ふなり」と。須菩提難じて言はく、「若し是の事なくんば、是の菩薩の憶想分別は、應に顛倒に墮すべし。若し是の事、畢竟空にして清淨の相ならば、憶念も亦是の如くならん、諸の過去の佛の功德も亦た是の如く、分別なく異なること無し。云何が隨喜することを得ん」と。是は略して義を説く、廣くは則ち經に説くが如し。所謂、須菩提、彌勒に問ふ。若し菩薩摩訶薩は、過去の十方無量無邊阿僧祇の世界の中の諸の滅度の佛を憶念したてまつるとは、是の菩薩は隨喜の福德を起さんと欲

【一〇】佛には濟度力あるも、衆生和合せざれば度せず、火は燒力あるも、薪近づかざれば燒かざるが如し。

す。佛は是れ福德の主なり。是の故に佛を念す。經書の説を聞きて、過去の佛名あるが故に、是の名に因つて、廣く一切の過去の佛を念す。初發心よりとは、初發心に願を作す、「我れ當に一切衆生を度すべし」と。是の心は、三善根・不貪・不瞋・不癡の善根に相應し、諸の善法及び善根の起す所の身口業に相應し、是の法に和合するを名けて福德と爲す。初發心より六波羅蜜〔多〕を行じて菩薩位に入り、十地を得、乃至道場に坐す。是の中の菩薩は、自ら福德を修し、和合して佛道を得、乃至無餘涅槃に入る。滅度の後の舍利及び遺法は、皆な是れ佛自身の功德の和合なり。諸佛に因りて大乘の人は六波羅蜜〔多〕に相應する福德を行す、相應とは、六波羅蜜〔多〕を除きて、餘の菩薩の所行の法は、皆六波羅蜜〔多〕の中に攝入するが故に、六波羅蜜〔多〕に應じて和合すと説く。若し聲聞辟支佛を求むる人は、布施・持戒・修定等の福德を種う。 (二二) 聲

【二】二種の聲聞と辟支佛。

聞・辟支佛に二種あり、一には漏の盡きたるを無學と名け、二には道を得るも、漏未だ盡くさざるを名けて學と爲す。是の二人は、諸の福德の中にて、善根勝るるが故に、但善根と説く。上に言ふ二乘を求むる人とは、總じて凡夫の聖人なり。今の學無學とは、純は是れ聖人なり。相好は是れ無記の色法にして、是れ善功德に非ざるが故に、但佛を説くのみ。五無學衆大慈大悲佛法の義は、初品中に説くが如し。諸佛所説の法、是の法を學して須陀洹果を得、乃至菩薩の位に入る者は、是の佛の滅度の後、遺法の中に得道す。是の故に重ねて説く、及び餘の衆生の諸の善根を種うとは、此は是れ佛

在世及び遺法の中の天人乃至畜生の種種の福德の因縁なり。是の上の四段の福德をば、行者は心に遍  
ねく縁じ、憶念し隨喜して、佛道を求むるが故に、廻向するを無上の隨喜と名く。最上にして等しき  
の無きなり。

問うて曰はく、(三)佛道を求むる者にして、何を以てか自ら功德を作さずして、而も心に隨喜を生ず  
るや。答へて曰はく、諸の菩薩は、方便力を以て、他を勤勞して功德を作し、能く中に於いて隨喜の  
福德を起し、自ら作者に勝る。復次に、是の隨喜の福德は、即ち是れ實の福德なり。何となれば過去  
の佛を念するは、即ち是れ念佛三昧なり。亦た是の六念中にも念佛念法・

念僧念戒念捨念天等あり。清淨戒を行するに因りて禪定に入り、畢竟  
の智慧を起して和合するが故に、能く正しき隨喜を起す。是の故に但隨  
喜するのみにあらず、亦た是の實法をも行す。是の心、廻向すとは、即ち是れ隨喜の心なり。縁すと

は、隨喜の心の縁する所にして、所謂、一切諸佛及び一切衆生の作す所の功德なり。事とは、是れ縁  
する所の本なり。福德は是れ縁にして、功德の所住の處、所謂、諸佛及び衆生、併に土地・山林・精舍・  
住處を皆な事と名く。念する所の如く得べきや不や。彌勒答へて曰はく、「不なり」と。須菩提、彌勒  
に語るらく、「若し諸事・諸縁にして所有なくんば、云何が顛倒に墮せざるや」と。顛倒とは、四顛倒に

して三種の分別あり。此の顛倒は是れ譬喩なり。佛なくして、而も憶想して佛を念するは、猶は無常

【三】 第二問、求道の人にして、自ら功德を作さず、但心に隨喜を生ずる理由如何。

なるを而も常と念じ、不淨なるを而も淨と念ずるが如し。

問うて曰はく、(三)見を諸の顛倒の本と爲す。初道を得る人の、能く想心顛倒を起して、見顛倒なき

が如きは、見諦道斷なるを以ての故なり。答へて曰はく、是の顛倒は、生時異なり、斷時異なれり。

生ずる時は想前に在りて、次は是れ心、後は是れ見なり。斷ずる時は先づ見を斷ず。見諦「を以て」斷

ずる所なるが故なり。顛倒の體は、皆是れ見相にして、見諦「を以て」斷ずる所なり。想心顛倒とは、

學人は未だ欲を離れず、憶念するも忘るるが故に、淨相を取り、結使を起し、還つて正念を得れば即

時に滅す。經中の譬喩の如し。「浦水も大熱鐵上に墮つれば、即時に消滅

するが如し」と。小なる錯なるが故に、假に顛倒と名くるも、實の顛倒に

非ず。是の故に、凡夫の人には、三種の顛倒、學人には、二種の顛倒を説

くなり。

復次に、諸緣、諸事は、實に畢竟空なるが如く、念も亦た空、苦提も亦た空、隨喜心も亦た空、檀

波羅蜜(多)、乃至十八不共法も亦た空なり。若し諸法は一相、所謂、無相ならば、此の中に何等か

れ緣、何等か是れ事、何等か是れ心にして、無上道に廻向せん。

經

彌勒菩薩、須菩提に語るらく、「若し諸の菩薩摩訶薩、久しく六波羅蜜(多)を行じ、多く諸佛を供養し上り、善根を種ふ、

【三】 第三問、見は顛倒の根本たり。而も初得道の人の見顛倒なきは、見諦道斷なるを以てにあらざるか。

善知識と相隨ひ、善く自相空法を學せば、是の諸の菩薩、是の緣、是の事、諸佛の諸善根、隨喜の福德相を取らずして、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。不二法を以てして、不二法に非ず、相に非ず、不相に非ず、可得法に非ず、不可得法に非ず、淨に非ず、垢に非ず、生にあらす、滅にあらざる法、是を阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。若し諸の菩薩、久しく六波羅蜜(多)を行ぜず、多く諸佛を供養せず、善根を種ふず、善知識と相隨はず、善く自相空法を學せずんば、是の諸の菩薩、是の諸事、諸佛の諸善根、隨喜の福德、諸心の相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是れ廻向と名けず。須菩提よ、是の如きの般若波羅蜜(多)の義、乃至一切種智の義、所謂内容乃至無法有法空は、乃至新學の菩薩の爲に説くべからす。何となれば、是の菩薩は、所有の少許の信樂、恭敬、清淨心、皆な忘失すればなり。當に阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の前に在りて説くべし。

若くは善知識の爲に護られ、若くは久しく諸佛を供養してまつり、諸の善根を種うるあり。應に是の人の爲に是の如きの般若波羅蜜(多)の義乃至一切種智の義、所謂内容乃至無法有法空を説くべし。是の人ば是の法を聞いて、沒せず、驚かす、畏れず、怖かざればなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は福德を隨喜して應に是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。所謂善薩は心を用ゐて隨喜の功德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の心盡滅し變離すれば、是の緣、是の事、是の諸の善根も亦た盡滅し變離す。是の中何等か是れ隨喜心、何等か是れ諸緣、何等か是れ諸事、何等か是れ諸善根ありて、阿耨多羅三藐三菩提に隨喜廻向せんや。二心俱ならず。是の心性も亦た廻向を得べからす。菩薩、云何が隨喜心もて阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんや、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行ずる時、是の如く、是の般若波羅蜜(多)法あると無く、乃至檀波羅蜜(多)も亦た法あること無く、色法あることなく、受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提も法あること無しと知る。菩薩摩訶薩は應に是の如く功德を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。若し能く是の如く廻向せば、是を功德を隨喜し、阿耨多羅三藐

三菩提に廻向すと名く。

釋して曰はく、彌勒は意へらく、「諸法は甚深微妙なるを以て、所謂、諸の法相を壞せずして、而も隨喜心を無上道に廻向する、是の事は甚だ難く、凡夫の人は、心剛強にして、是の法を行ずること能はず」と。是の故に彌勒答へて言はく、「行者は久しく六波羅蜜〔多〕を修すれば、諸の功德深厚なるが故に動せず。所謂能く信じ能く行じ、多く諸佛を供養したてまつり、善根を種うるが故に無量無邊阿僧祇の功德を集め、結使を折損し、其の心柔軟なり。此は是れ先世の因縁〔を以て〕、今世に好師、好同學を得、亦自らも諸法實相の空を學し、巧方便の故に是の空に著せず」と。是の如き等の種種の無量の因縁の故に、法は無相なりと雖も而も能く隨喜心を起して、無上道に廻向す。譬へば、鐵は堅韌なりと雖も、爐に入るれば、則ち柔軟にして、隨つて何なる器をも作るが如し。菩薩の心も亦た是の如く、久しく六波羅蜜〔多〕を行じ、善知識に護らるるが故に、其の心調柔にして、過去の諸佛諸緣諸事諸善根の中に相を取らず。能く隨喜の心を起し、無相を用つて、無上道に廻向す。無相とは、能不二非不二法、乃至不生不滅等を用ふ。上と相違する者は、是を廻向すること能はずと名く。彌勒は須菩提の樂んで空を説くことを知るが故に、語りて言はく、「是の如き、般若波羅蜜〔多〕の隨喜の義は、新學の菩薩の前に説くべからず。何となれば若し少福德あり善根ある者は、是の畢竟空の法を聞けば、即ち空に著して、是の念を作す、一若し一切法は畢竟して所有なくんば、我れ何すれぞ福德

を作さん」と。即ち前業を忘失すればなり。是を以ての故に、新發意の菩薩には、先づ相を取る隨喜を教へ、漸く方便力を得て、爾して乃ち能く無相の隨喜を行す。譬へば、鳥子の羽翼未だ成らざれば、逼りて高く翔けしむべからず、六翻成就すれば、即ち能く遠く飛ぶが如し。阿鞞跋致の菩薩は、法位に入りて、法忍を得れば、能く信じ、能く行するが故に、爲に説くべし。若し久しく六波羅蜜(多)を行すること有り、善知識と相隨ひ、内の福德と外の因縁の力に助けらるれば、阿鞞跋致に非ずとも、能く信じ能く行す。是の二種の人は、是を聞き、心清淨にして、歡喜し信受す。久しく飢渴せる者の好き飲食を得るが如く、大熱に涼を得、大寒に温を得て、其の心愛樂し歡喜するが如し。是の二菩薩も亦た是の如く、是の無相の智慧を得て、是の念を作す、「我れ是の智慧に因りて、能く無量の衆生を度す。何に況んや、驚懼恐怖あらんや。恐怖は我の心中より出づ。是の法中には、諸法の法相すら尙ほ空なり。何に況んや、我あらんや」と。而も決定して諸法の相を取り、一切法の無相を聞けば、則ち驚懼を生ず。是く隨喜の義體を説き竟りて、後に當に更に種種の異門を以て、上の事を釋すべし。

復次に、須菩提よ、菩薩は應に是の如く思惟すべし、「是の心を用つて、無上道に廻向す。是の心は、念念に盡滅し、變離して、住する時あること無く、是の諸の縁と事とは、所謂、過去の諸佛、及び諸の善根、諸佛等の諸の縁と事にして、久しく已に滅し、隨喜の心も今滅し、既に滅して異なる

こと無し」と。是の故に經中に説けり、(四)「是の心を用つて廻向するに是の心は即ち盡滅し、是の如き等は過去世に入るが故に、諸法實相に入るが故に、是の心、是の縁、是の事、是の善根等を分別すること有ること無し。若し能く是の如く廻向すれば、是を正廻向と爲す」と。

復次に、一時に二心は和合せず。隨喜心の時は、菩提心なし。一切の心相は畢竟空なり、取相を以て廻向すべからず。何となれば、菩薩は、般若波羅蜜(多)の、空にして、定法あること無く、般若波羅蜜(多)の如く、一切法、乃至、無上道も亦た是の如きことを知り、是の時、法愛を斷じ、著心を捨て、空に於いて淨なし。是を菩薩の正廻向と名くるなり。

【四】 正廻向の義解。  
 【五】 新發意の菩薩の學すべき眞實無上の廻向を述ぶ。

經

爾の時に、釋提桓因、須菩提に語るらく、(五)「新發意の菩薩は、是の事を聞いて、將に慙懼怖畏ならんや、須菩提よ、云何が新發意の菩薩は、諸の善根を作して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、復云何が福德を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するや」と。須菩提、釋提桓因に語るらく、「若し新發意の菩薩は、般若波羅蜜(多)を行するも、是の般若波羅蜜(多)を受けず。所得なきを以ての故に、無相の故に。乃至檀波羅蜜(多)も亦是の如し。多く内空を信解し、乃至多く無法有法空を信解し、多く四念處乃至十八不共法を信解し、常に善知識と相隨ふ。是の善知識は爲に六波羅蜜(多)の義を説き、開示し、分別し、是の如く教授して、常に般若波羅蜜(多)を離れざらしめ、乃至菩薩の法位に入るを得るに至るまで、終に般若波羅蜜(多)を離れず、乃至檀波羅蜜(多)を離れず、四念處乃至十八不共法を離れざらしめ、亦た魔事を語らしめ、種種の魔事を

問き已りて、増さず、減らず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、一切法を受けざればなり。是の菩薩は亦た常に諸佛を離れず、乃至菩薩の位を得、中に於いて善根を種う。是の善根を以ての故に、菩薩の家に生じ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、終に是の善根を離れず。

復次に、新發意の菩薩摩訶薩は、過去十方無量無邊阿僧祇の世界の中に於ける、諸佛の生死の道を斷じ、諸の戲論の道を斷じ、盡く重擔を棄て、聚落の刺を滅し、諸有の結を斷じ、正智(を以て)解脱を得、及び弟子の所作の功德の中に於いて、若くは刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至淨居天の種うる所の善根、是の一切を和合し稱量するに、阿喜心は、最上第一、最妙無上にして、共に等しき者なきを以て、應に阿喜し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべしと。

爾の時に、彌勒菩薩、須菩提に語るらく、「若し新發意の菩薩摩訶薩、諸佛及び弟子の諸の善根を念じ、隨喜せる功德は最上第一、最妙無上にして、與に等しき者なく、隨喜し已りて、應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべくんば、云何が菩薩は、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せざるや」と。須菩提の言はく、「若し菩薩摩訶薩、諸佛及び僧を念すれば、是の中に於いて、佛想を生ぜず、僧想を生ぜず、善根の想なし。是の心を用て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是の心中にも亦心想を生ぜず。菩薩は是の如く廻向せば、想顛倒せず、心顛倒せず、見顛倒せず。若し菩薩摩訶薩、諸佛及び僧の善根を念じて、相を取り、相をとり已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、菩薩の是の如きを名けて、想顛倒・心顛倒・見顛倒と爲す。若し菩薩摩訶薩、是の心を用て、諸佛及び僧の諸の善根を念せば、是の心を念する時、即ち盡滅を知る。若し是の法を盡滅すれば、廻向することを得べからず。用ふる所の廻向心も、亦た是れ盡滅の相なり、所廻向の處の法も、亦た是の相の如し。若し是の如く廻向せば、是を正廻向と名く、邪廻向に非ず。菩薩摩訶薩は、應に是の如く、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべしと。

しと。

復次に、若し菩薩摩訶薩、過去の諸佛の善根、及び弟子の善根、是の中に凡夫人の法を聞いて種うる善根、若くは諸天・龍・夜叉・提闍婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の法を聞いて種うる善根、若くは刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至阿迦尼吒天の法を聞いて種うる善根、阿耨多羅三藐三菩提心を發すもの、是の一切の福德を和合し稱量するに、隨喜せる福德は最上第一・最妙無上にして、與に等しき者なく、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の時、菩薩若し是の如く是の諸法盡滅し、所廻向の處、及び是の法も、亦た自性空なりと知り、能く是の如く廻向せば、是を眞に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。

復次に、若し菩薩、是の如く法あること無きを知らば、能く法を廻向す。何となれば、一切法の自性は空なればなり。若し是の如く廻向せば、是を正しく阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)を行すれば、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せず、何となれば、菩薩は、是の廻向に著せず、亦諸の善根を以て菩提心に廻向する處を見さればなり。是を菩薩摩訶薩の無上廻向と名く。

【一六】 第四問、新發意の菩薩の怖畏し驚懼するなきや不やは已に問答せり。然るを今復た之を問ふは何故なるか。

論

問うて曰はく、(二云)新發意の菩薩は、是の事を聞いて、將に怖畏し驚懼する者なからんとするやと、此の義は先に已に問答せり。今何を以てか復た問うや。答へて曰はく、上に彌勒は須菩提に語るに雖も、新學の爲に説くべからず、阿鞞跋致及び久行の者の爲に説くべし。是の二種の人は聞いて能く信行す。已に正廻向の因縁を説くすら、猶は空法を説く。是の故に帝釋は疑つて言はく、「是の衆

中に新發意の者あり、云何が更に説いて恐怖せざらしむるべし」と。須菩提、彌勒の所説を成せんと欲し、新發意の者をして、應に正しく廻向すべからしめんと欲するが故に、帝釋に答ふらく、「若し新發意の菩薩、久しく六波羅蜜(多)を行せず、諸佛を供養したてまつらずと雖も、而も利根を以て善知識を得。是の二因縁の故に正廻向に堪任す」と。是の故に帝釋に語るらく、「新發意の菩薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、是の般若を受けず。所得なきを以ての故に、畢竟空なるが故なり」と。般若波羅蜜(多)も亦た得ず、亦た著せず。乃至檀波羅蜜(多)も亦た是の如し。多く内空を信解する者は、常に内空三昧を修樂し、入觀するが故に信解す、乃至十八不共法を多く信解するも亦た是の如し。善知識の相は先に説くが如し。此の中に但明に能く六波羅蜜(多)の義に隨つて説く。是の義を聞き已りて、常に般若波羅蜜(多)を離れず、乃至菩薩の法位に入ることを得。久しく行ふこと有りて菩薩位に入り、「或は」新發意ありて菩薩位に入る。

復次に、是の新發意の菩薩に、善知識は爲に魔事を説くに、魔事を聞き已りて、増さず減らず。善知識の實相を修習するを以ての故なり。若し魔破せんと欲せば、空を破せんと欲すと爲す。空なれば則ち破すること無く、若し増益すること有るも、幻の如く、夢の如し。何ぞ増益する所あらんや。是の故に増さず減らずと説くなり。是の因縁の故に、常に諸佛を離れたてまつらず、常に菩薩の家に生れて、世世に、善根、乃至無上道を離れず。是の新發意の菩薩は、是の如き因縁を得れば、久しく

意を發すると異なること無し。

復次に、隨喜し廻向す。所謂の新發意の菩薩は、過去十方無量阿僧祇の世界の中に於ける諸佛の道を斷ずとは、生死の道を斷じて、無餘涅槃に入り、諸の戲論を斷ずるが故に、諸の戲論を滅すと云ふ。「そは」空空等の三昧を以て八聖道分を捨するが故に、道を盡すと云ふ。五衆は能く苦惱を生ずるが故に、是れ重擔なり。(三七) 五衆に二種の捨あり。一には、有餘涅槃の中に、五衆の因縁、諸の煩惱を捨す。二には、無餘涅槃の中に、五衆の果を捨す。一切の白衣の舎を名けて、聚落と爲す。出家の人は白衣の舎に依りて活く。而も(三八) 白衣の舎に五欲の刺あり。食の爲の故に、惡刺の果林に來入し、果を取るを以ての故に、刺の爲に刺さる。如し人、木履を著けて刺を踐めば、刺は即ち摧折す。是の諸佛の禪定智慧の履を以て五欲の刺を摧きたまふを、下分の五結を滅斷すと名け、有分の結盡るを、上五分の結を斷ずと名け、諸法實相・金剛三昧、相應の智慧を以て、一切の煩惱及び習を斷ずるが故に、正智を以て解脱を得と言ふ。是等の如きは、皆過去の諸佛を讚歎したてまつると名く。及び弟子の所作の功德とは、(一九) 佛弟子に三種あり。菩薩・辟支佛・聲聞なり。刹利の大姓、乃至淨居天には是の中に善根を種うる者なり。是の四種の福田は、是に因りて福德を種うる處なり。是の福德を和合して稱量するに、隨喜の心は最上にして、與に等しきもの無く、

【三七】 五蘊に二種の捨あり。

【三八】 俗人の家には五欲の刺あり、道人は宜しく禪定智慧の木履を著けて、之を摧くべし

【一九】 三種の佛弟子——聲聞、辟支佛、菩薩。

無上道に廻向す。是の廻向心は、正に非ず邪に非ず。何となれば、今彌勒、須菩提に問ふ、「若し新發意の菩薩は、諸佛等の功徳を念じて、無上道に廻向す。云何が顛倒に墮せざるや」と。須菩提答ふ、「若し是の菩薩は、般若波羅蜜多の方便力をもつての故に、諸佛に於いて佛相を生ぜず、及び弟子の諸の善根の想を生ぜず。一切法は和合より生じて、自性あることなきが故に、定法あること無く、名けて佛と爲す。是の故に佛等の想を生ぜず。是の廻向心も亦た心想を生ぜず。是の故に菩薩は顛倒に墮せず。上と相違すれば即ち顛倒に墮す。

復次に、菩薩は是の心を以て、諸佛等及び諸の善根を念じ、是の心の盡るとき、即ち盡ることを知る。盡きたる心は、廻向することを得ず。何となれば變失滅壞すればなり。是の心も亦た無常門に入り、法性の中に至る。法性の中には、是は心、是は非心、是は佛、是は弟子、是は善根、是は無上道と分別することあること無し。廻向心、廻向處の盡る相も、亦た是の如し。初心は是れ過去諸佛等の、隨喜の功徳を憶念す。後心は是れ廻向心なり。若し是の如く廻向するは、是を正廻向と名く。

【三】 第五問、所廻向の法は未來世にあり、云何が滅盡すといふや。

問うて曰はく、(三) 初心と後心は、是れ生滅の相にして、無常なるべし。所廻向の處の法は、是れ無上道にして、未來世の中に在り。云何が盡滅すといふや。答へて曰はく、汝は我が先の答を聞かず。無常門に入りて、法性の中に到る。此の中、盡く是れ無常なりとは説かず。但諸法實相は是れ盡と

と説く。先に亦た阿耨多羅三藐三菩提は、三世を出で、三界を過ぎ、無受の相なりと説く。能く是の如く廻向する、是を正廻向と爲す。

復次に、正に非ず邪にあらざるの廻向とは、所謂菩薩は過去の諸佛の善根等、乃至無上無與等に於て、無上道に廻向す。若し菩薩、是の事の皆盡滅するを知り、廻向處の法も亦た自性空なることを知る。能く滅を知り空を知るは、是れ眞の廻向なり。若し過去の法は無常なり。無常なるが故に、自性空法の中に廻向すべからず。若し過去の法は空なり。空なるが故に、自性空法の中に廻向すべからず。是の如き智慧を用つて廻向するは、是を正廻向と名く。

復次に、若し菩薩は、一切法は因縁生なるが故に、自力常住、自法相、不動なること無きを知る。況んや能く所作あらんや。所作なきが故に、一切法の中に、法として能く廻向する法あることなし。是を正廻向と名く。是の如く菩薩は般若波羅蜜〔多〕等の諸の善法を行すと雖も、亦た顛倒に墮せず、〔そは〕一切法に著せざるが故なり。

【釋】

復次に、(三)若し菩薩摩訶薩は、所起の福德、五衆、十二入、十八界を離るるを知り、亦た般若波羅蜜〔多〕も、是れ相を離れ、乃至檀波羅蜜〔多〕も是れ相を離れ、内空乃至無法有法空も是れ相を離れ、四念處乃至十八不共法も是れ相を離るるを知る。是の如く、菩薩摩訶薩は、隨喜心もて福德を起し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。

【三】 現世の福業の空にして、相を離るるを説き、正廻向を辨す。

復次に、是の菩薩摩訶薩、隨喜の福德には隨喜の福德の自性を離るるを知り、亦諸佛も佛性を離れ、諸の善根も亦善根の性を離れ、菩提心の菩提心性も亦た離れ、廻向の廻向性も亦た離れ、菩薩の菩薩性も亦た離れ、般若波羅蜜(多)の般若波羅蜜(多)性も亦た離れ、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)の檀波羅蜜(多)性も亦た離れ、乃至十八不共法の十八不共法性も亦た離るるを知る。菩薩摩訶薩は、應に是の如く、離相の般若波羅蜜(多)を行すべし。是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)の中に隨喜の福德を生ずと名く。

復次に、菩薩摩訶薩、諸の過去の滅度の佛の諸善根、若し廻向せんと欲せば、應に是の如く廻向して、是の念を作すべし、「諸佛の滅度の相の如く、諸善根の相も亦た是の如く滅度す、法相も亦た是の如し。我れ心を用つて廻向せば、是の心相も亦た是の如し。若し能く是の如く廻向せば、應に知るべし、是れ阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。是の如く廻向せば、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せず。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を行する時、諸佛の善根の相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是を名けて廻向と爲さす。何となれば、諸の過去の佛、及び善根は、相縁に非ず、無相縁に非ざればなり。

若し菩薩摩訶薩、是の如く、相を取ることを爲さば是を善根もて阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名けず。是の如きの菩薩摩訶薩は、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮す。若し菩薩摩訶薩、諸佛及び諸善根、及び諸心の相を取らざれば、是を諸善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。是の如きの菩薩摩訶薩に、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せず。

爾の時、彌勒菩薩、須菩提に問ふ、「云何が菩薩摩訶薩は、諸善根に於いて相を取り、能く阿耨多羅三藐三菩提に廻向せざるや」と。須菩提言はく、「是の事を以ての故に、當に知るべし、菩薩摩訶薩の學する所の般若波羅蜜(多)の中には、應に般若波羅蜜(多)の方便力あるべし」と。若し是の福德、般若波羅蜜(多)を離るれば、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するを得ず。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には、諸佛得可らず、諸善根得可らず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦た得可らず

ればなり。是の中に於いて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を行する時、應に是の如く思惟すべし、諸の過去の佛及び弟子の身は皆々滅し、諸善根も亦た滅す。我今相を取りて、諸佛の諸善根及び諸心を分別し、是の相を取ることを以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、諸佛の許さざる所なりしと。何となれば、取相は所得あればなり。所謂過去の諸佛に於いて、相を取りて分別す。是の故に、菩薩摩訶薩は、諸善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんと欲するも、得ること有るべからず、相を取るべからず、是の如く廻向す。若し取相を得ること有りて、諸佛に廻向せば、大利益ありと説かず。何となれば、是の廻向は、毒を雜ふればなり。

譬へば美食に毒を雜ふるが如し。好色、好香ありて、人の食する所と爲ると雖も、而も毒を雜ふ。愚癡の人は、之を食して歡喜し、其の好色、好香を食りて口にし可きも、飯消せんと欲する時、若くは死、若くは死に等しき苦を受く。若し善男子善女人、諦に受けず、諦に相を取らず、諦に讀誦せず、中の義を解せずば、是の如く他に教へて言はく、「汝、善男子よ、過去・未來・現在の十方の諸佛は、初發意より已來、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、無餘涅槃に入り乃至法盡き、其の中間に於いて、般若波羅蜜多を行する時に作せる諸の善根、禪波羅蜜多、毗梨耶波羅蜜多、尸羅波羅蜜多、檀波羅蜜多」を行する時に作せる諸の善根、四無量心・四無色定・四念處乃至八聖道分・佛の十力を修し、乃至十八不共法を修する時に作せる諸の善根、佛世界を淨め、衆生を成就するに、作せる諸の善根、及び諸佛の戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆・一切種智・無錯謬法・常捨行、及び諸の弟子の中に種うる所の善根、及び諸佛の記せられ、當に辟支佛となるべき善根、是の中に諸天・龍・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の種うる所の善根、是の諸の福德を稱量し、和合し、隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の廻向は、相を取り法を得るを以ての故に、毒を雜ふる食の如く、法を得る者は、終に正廻向なし。何となれば、是の法を得るは毒を雜へ、相あり、動あり、戲論あればなり。若し是の如く、廻向

すれば、則ち佛を誑る、佛教に隨はず、法説に隨はずと爲す。

是の善男子善女人、佛道を求めんとせば、應に是の如く學すべし。過去・未來・現在の諸佛初發意より乃至法盡まで、及び弟子の般若波羅蜜(多)を行ずる時作せる善根、乃至一切種智を修するは、上に説けるが如し。云何が諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、正廻向なるや。佛道を求むる善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)を行じて、諸佛を誑らんと欲せざる者は、諸の福德を修して、應に是の如く廻向すべし。佛の知りたまふ所の如く、無上の智慧を以て、是の諸の善根の相、是の諸の善根の性を知り、我も亦た是の如く、隨喜し、諸佛の知りたまふ所の如く、我も亦た是の如く、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、菩薩の道な求むる善男子善女人は、應に是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべしと。若し是の如く廻向すれば、即ち佛を誑らず、佛の教へたまふ所の如く、佛法に説くが如しと爲す。是の菩薩摩訶薩の廻向には、則ち毒を雜ふることなし。

論

釋して曰はく、起す所の福德、五衆を離るとは、先には但過去の事を説き、今は自ら隨喜の福德を起すことを説く。若し是の福德の中に、五衆十二入十八界なきことを知れば、般若波羅蜜(多)等の諸法を行ずと雖も、亦た空にして相を離ると知る。是の如き福德を正廻向と名く。

復次に、若し菩薩は、隨喜の福德の中に、隨喜の福德の性は自ら離るることを知り、諸佛及び善根並に諸の起せる阿耨多羅三藐三菩提心・廻向心・菩薩の般若波羅蜜(多)等の諸行の法は、自性空なることを知る。是を正廻向と名く。隨喜の福德とは、總じて一切の福德の相を説く。善根を隨喜し、福德を起すは、是れ別相の説なり。菩薩は自ら求むる所の阿耨多羅三藐三菩提を緣す。是を阿耨多羅三藐

三菩提の心と名く。是の菩薩の隨喜心の功德の果は、但無上道を求む。是を廻向心と名く。行者は五衆の中の假の名字を菩薩と爲す。般若波羅蜜(多)等の諸法は、先に義を説くが如し。先には福德の中に五種を離るることを説き、今は福德と福德の自相は空なることを説く。

復次に、菩薩は過去の佛の因縁生の福德を念じて、應に是の如く廻向すべし。過去の諸佛は無餘涅槃に入りたまひ、無相無戲論にして、性常に寂滅なるが如く、是の福德及び廻向心も亦た是の如し。是の如き廻向は、是を正廻向と名け、顛倒に墮せず。

復次に、若し菩薩、諸の過去の佛の功德に於いて、相を取り、分別して廻向するは、是を廻向と名けず。何となれば、有相は是れ一邊、無相も是れ一邊にして、是の二邊を離れて、中道を行ずるは、是れ諸佛の實相なればなり。是の故に、諸の過去の佛は、相の數中に墮せず、無相の數中に墮せずと説く。若し是の如く相數を取るは、是を廻向と名けず、則ち顛倒に墮す。上と相違するは是れを顛倒に墮せずと爲す。是の事は難きが故に、彌勒重ねて問へり。所謂、一切法は相を取らずして、而も復た能く廻向す。須菩提は是の中に決定して答ふる處を得ず。是の故に、彌勒に語るらく、「是の事を知るが故に、菩薩は般若波羅蜜(多)を學するに方便力を求む」と。是の福德は、般若波羅蜜(多)を離れて、廻向することを得ずとは、一切法の中に、一法は實にして而も誑ならず。所謂阿耨多羅三藐三菩提なり。是の阿耨多羅三藐三菩提に隨ひ、不誑道を行じて爾も乃ち得べし。

三不誑道とは即ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり。是の故に、般若波羅蜜〔多〕を離れて、是の福德は廻向することを得べからずと説く。何となれば、是の般若波羅蜜〔多〕は畢竟空にして、福德を分別することと有ること無く、若くは般若波羅蜜〔多〕を離れ、若くは般若波羅蜜〔多〕を離れず、廻向することを得べからず。菩薩は應に是の念を作すべし、「諸の過去の佛、及び弟子の身、並びに諸の善根、福德は皆滅す。我れ今相を取りて分別す、所謂、是は諸佛、是は弟子、是は善根、是は隨喜の福德なり」と、相を取りて廻向す。我は不足なりと爲す。何となれば、諸法實相と異なればなり。果報を受け已りて、久久しうして當に盡べきか故に、疾く佛道に至らず、有所得の故に、過去の羅蜜多なり。

【三】不誑道は即ち是れ般若波羅蜜多なり。

諸佛に於いて、憶想分別す。即ち是れ大失なり。所謂、過去の佛は空無なるに、而も我は憶想分別す。譬へば毒を雜ふる食の如し。食は是れ隨喜の福德、毒は是れ取相なるが故に、愛見等の諸の煩惱を生ず」と。

好色とは、福德の因縁〔を以て〕、人王・轉輪王・天王と作りて、福樂を得るなり。

好香とは、好き名譽・富貴・勢力を得て、凡夫・無智の人に共に負愛せらるるなり。

愚癡の人とは、是れ新發意にして、相を取る著心の菩薩なり。

之を食して歡喜すとは、富樂・福德の因縁の故に、天人の中に於いて、此の富樂を受くるなり。

飯の消えんと欲する時、若くは死、若くは死に等しき苦を受くとは、是の富樂は、若くは無常にし

て破壊し、離るる時に憂愁して遂に死し、若くは死に次いで諸の苦惱を受く。

復次に、若くは死し、若くは死に等しとは、自ら命を失するを死と名け、著する所の物を失するを死に等しと名く。復次に、若くは死し、若くは死に等しとは、苦惱多きが故に、智慧の命を失するを死と名け、善道を行ふを妨ぐるを死に等しと名く。此の經の中に須菩提は自ら説けり、「是の無智の人は、審かに諦かに受けず、其の義を取らず、但語言に著す」と。

諦に相を取らずとは、如法に分別せざるなり。諦かに讀誦せずとは、句逗を忘失し、若くは自ら失し、若くは受けて具足せざるなり。義を解せずとは、經の意を得ざるなり。是の如き少智の師は弟子を教化すらく、「汝、善男子よ、過去未來現在の十方の諸佛よ、初發意より乃至〔云云〕」と。是の如く廻向するを、則ち佛を謗り、佛教に隨はず、法説に隨はずと爲し、此と相違するを名けて、正廻向と爲す。

復次に、正廻向の菩薩は、應に是の念を作すべし、「十方三世諸佛の知りたまふ所の如く、無上の智慧を用つて諸の善根の相を知らん。一切の智人の中に、佛は第一に勝れたまふ。佛の知りたまふ所の諸の善根は、必ず是れ實相なり。佛の知りたまふ所の如く、我も亦た是の如き善根の相を用つて廻向せん。譬へば地を射れば、著かざる時なく、若し餘物を射れば、或は著き或は著かざるが如し。如し諸佛の知りたまふ所の隨喜は、地を射れば著かざること無きが如く、若し餘道の隨喜を用ふるは、

餘物を射て、或は著き、或は著かざるが如し。是の如き廻向は、佛を誘りたてまつらずと爲す。

經

復次に、(三) 佛道を求むる善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を行する時、諸の善根を應に是の如く廻向すべし。(四) 色に欲界

に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去と名けず、未來と名けず、現在と名けず、受・想・行・

識欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、不繫の法は過去・未來・現在

と名けず。十二入・十八界も亦た是の如し、般若波羅蜜(多)は欲界に繫せず、色界に繫

せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去・未來・現在と名けず。禪波羅蜜(多)

乃至檀波羅蜜(多)も亦た是の如く、内空乃至無法有法空も亦た是の如し。四念處は欲界

に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去・未來・現在と名

けず。乃至八聖道分も亦た是の如く、佛の十力乃至十八不共法も亦た是の如し。

如如・法性・法相・法住・法位・實際・不思議性・戒・定・慧・解脫・解脫智見・一切種智、

不錯謬の法・常・捨・行は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去・未來・現在と名けず。

是の廻向、廻向せらるる處、行者の繫せざることも皆亦た是の如し。是の諸佛も亦繫せず、諸の善根も亦た繫せず。是の諸

の聲聞辟支佛の善根も、亦た繫せず。不繫の法は過去・未來・現在と名けず。若し菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)を行する

時、是の如く色は三界に繫せず、不繫の法は過去・未來・現在と名けずと知り、若し法過去・未來・現在と名けずんば、取相

有所得を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべからず。何となれば、是の色は無生なり、若し法にして無生ならば、則ち法

無し、無法の中に廻向すべからざればなり。受・想・行・識も亦た是の如し。檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、四念處乃至

【三】 諸法は三界に繫せざるが故に三世に攝せず。これを以て廻向するの眞正の廻向たるを説く。

【四】 三界繫縛の心を以てするが故に、色三界に墮す。若し墮せずんば、界繫なく、過未あることなきなり。

不錯謬の法・常捨行は三界に繫せず、不繫の法は、亦た過去・未來・現在に非ず。若し過去・未來・現在法に非ざれば、取相有  
所得の法を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべからず。何となれば、是の法は無生なり。若し法、無生ならば、則ち無法  
にして、無法の中には、廻向すべからざればなり。菩薩摩訶薩、是の如く廻向すれば、則ち毒を雜へず。若し佛道を求むる  
善男子善女人にして、取相を以て法を得、諸の善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是を邪廻向と名く。若し邪廻  
向せば、諸佛の稱譽したまはざる所なり。是の邪廻向を用つては、檀波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)を具足すると能は  
ず、四念處乃至八聖道分、內空乃至無法有空、佛の十力乃至不錯謬の法・常捨行を具足すると能はず、佛世界を淨め、  
衆生を成就すること具足すること能はず。若し佛世界を淨め、衆生を成就すること能はざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を  
得ること能はず、何となれば、是の廻向は毒を雜ふればなり。

復次に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、應に是の念を作すべし。「諸佛の知りたまふ所の、諸の善根の廻向  
は、眞の廻向なるが如く、我も亦た應に是の法相を以て廻向すべし」と。是を正廻向と名く。

爾の時、佛、須菩提を誨したまはく、「善い哉、善い哉、汝が所爲の如きは佛事を爲作し、諸の菩薩摩訶薩の爲に所應の  
廻向の法を説けり、(そは)相なく、得なく、出なく、垢なく、淨なく、法性なく、自相空、常性空、法性、如、實際なる  
を以ての故なり」と。

「須菩提よ、若し三千大千世界の中の衆生、皆當に十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通を得べげんに、須菩提の意に  
於いて云何、是の衆生は福を得るころ多きやいや」と。「甚だ多し世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人、諸の善根に  
於いて心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんに如かず。須菩提よ、是の善男子善女人の福德は、最上第一最妙無上にし  
て、與に等しきもの無し」と。

「復次に、須菩提よ、三千大千世界の中の衆生、皆當に須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛と作るべく、若し、善男子善女人ありて、形壽を盡して供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、衣服・飲食・臥具・醫藥もて須ふる所のものを供給せば、須菩提の意に於いて云何、是の善男子善女人は、是の因縁の故に、福德を得ること多きや不や」と。「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、諸の善根に於いて心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず。最上第一最妙無上にして、與に等しきもの無し」と。

「復次に、須菩提よ、若し三千大千世界の中の衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、十方如恆河沙等の世界の中の一一の衆生、如恆河沙等の劫に、是の菩薩を恭敬し、尊重し、讚歎し、供養し、衣服・飲食・臥具・醫藥もて須ふる所のものを供給せば、須菩提の意に於いて云何、是の善男子善女人は、是の因縁の故に、福を得ること多きや不や」と。「甚だ多し、世尊よ、無量無邊阿僧祇にして譬喩を以て比と爲すべからず。世尊よ、若し是の福德にして形有らば、十方如恆河沙等の世界も受けざる所なり」と。

【五】 無著の廻向を、取相の廻向に比するに、百千萬億倍勝れたり。

佛須菩提に告げたまはく、(三) 善い哉、善い哉、汝が言ふ所の如し。爾りと雖も、善男子善女人は、諸の善根に於いて心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず、最上第一最妙無上にして、與に等しき者なし。是の著せざる廻向の功德を、前の功德に比するに、百倍・千倍・百千億倍乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。何となれば、是の善男子善女人は、取相・得法して、十善道・四善・四無量心・四無色定・五神通を行じ、取相・得法して、須陀洹を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、衣服・飲食・臥具・醫藥、須ふる所のものを供給し、乃至相を取りて菩薩を供養するが故なり」と。

爾の時に四天王天二萬の諸の天子と共に、合掌し、佛を禮し上りて、是の言を作す、「世尊よ、菩薩摩訶薩の最大廻向は、方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相の法を以ての故に、無覺の法を以ての故に、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩

提に廻向するなり。是の如き廻向は、二法に墮せずしと。

爾の時に、釋提桓因も、亦た無數の三十三天、及び餘の諸の天子と、共に天華・環珞・搗香・澤香・天衣・幡蓋・鼓・天的妓樂を持し、以て佛に供養し上りて、是の言を作す。「世尊よ、菩薩摩訶薩の最大廻向は、方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相の法を以ての故に、(三)無覺の法を以ての故に、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。是の如き廻向は二法に墮せずしと。須夜摩天王は、千の天子と俱に、瓊兜率陀・化樂・他化自在の諸天王は、各千の天子と俱に、佛を供養し已りて是の言を作す。「世尊よ、菩薩摩訶薩の最大廻向は、方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相の法を以ての故に、無覺の法を以ての故に、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。是の如き廻向は二法に墮せずしと。

爾の時に、諸の梵天は、無數百千億那由他の諸天と俱に、佛の所に詣り、頭面に佛の足を禮し、大音聲を發して、是の如き言を作す。「未曾有なり。世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の爲に護られ、方便力を以ての故に、前の善男子善女人の取相、有所得、般若波羅蜜(多)の爲に護られ、方便力を以ての故に、前の善男子善女人の取相、有所得、

の者に勝るしと。光音天乃至阿迦尼吒天は、無數百千億那由他の諸天と俱に、佛の所に詣り、頭面に佛の足を禮し、大音聲を發して、是の如き言を作す。「未曾有なり。世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の爲に護られ、方便力を以ての故に、前の善男子善女人の取相、有所得の者に勝るしと。

爾の時に、佛、四天王天、乃至阿迦尼吒の諸天子に告げたまはく、「若し三千大千世界の中の所有る衆生、持阿耨多羅三藐三菩提心を發せば、是の一切の菩薩は、過去、未來、現在の諸佛及び聲聞・辟支佛の諸の善根、初發意より乃至法住まで其の中間に於ける所有る善根、並に餘の一切衆生の所有る善根、所謂布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)・戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆、是の如き等の諸餘の無量の佛法を念じ、一切和合し隨喜し、隨喜し已り

【云】無覺の法とは、諸の妄思  
散妄分別なきをいふ。

て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。(そは)取相・有所得を以ての故なり。

復た善男子善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、過去未來・現在の諸佛及び聲聞・辟支佛の初發意より、乃至法住まで、其の中間に於ける所有る善根、兼に餘の一切衆生の所有る善根、所謂布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・檀波羅蜜

〔多〕乃至無量の諸の佛法を念じ一切和合し稱量す。(そは)無所得を以ての故に、無二の法なる故に、無相の法なる故に、不著の法なる故に、無覺の法なる故なり。是は最上の隨喜、第一、最妙、無上にして與に等しきもの無き隨喜なり。隨喜し已りて、

阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の善男子善女人の功德の、前の善男子善女人の功德に勝れるとは、百倍・千倍・百千億倍乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は善男子善女人の、諸の善根を和合し、稱量し、隨喜し、廻向する最上第一最妙無上にして、與に等しきもの無しと説きたまふ。世尊よ、云何が隨喜は最上乃至與に等しきもの無しと名くるや」と。佛の言はく、「若し善男子善女人、過去・未來・現在の諸法に於いて、取らず、捨てず、念ぜず、念ぜざるに非ず、

得ず、得ざるに非ず、是の諸法の中にも亦た法として生ずる者、滅する者、若くは垢、若くは淨有ること無く、諸法は増さず、減らず、來らず、去らず、合せず、散ぜず、入らず、出でず、過去・未來・現在の諸法相、如如相・法性・法住・法位の如く、我も亦た是の如く隨喜し、隨喜し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の如き廻向は最上第一最妙無上にして、與

に等しきもの無し。須菩提よ、是の隨喜の法を餘の隨喜に比するに、百倍・千倍・百千億倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

復次に、須菩提よ、佛道を求むる善男子善女人は、過去・未來・現在の諸佛及び聲聞・辟支佛に於いて初發心より、法住ま

で、其の中間に於ける所有る善根、若くは布施乃至智慧、檀波羅蜜〔多〕乃至無量の諸佛の法、及び餘の一切衆生の所有る善

根、若し隨喜せんと欲せば、應に是の如く隨喜して、是の念を作すべし、「布施は解脫と等し、戒忍・精進・禪・智は解脫と等し、色は解脫と等し、受・想・行・識も亦た解脫と等し、内空は解脫と等し、乃至無法有法空も亦た解脫と等し、四念處は解脫と等し、乃至八聖道分も亦た解脫と等し、佛の十力は解脫と等し、乃至一切種智も亦た解脫と等し、戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆も亦た解脫と等し、隨喜は解脫と等し、過去・未來・現在に諸法は解脫と等し、十方の諸佛は解脫と等し、諸佛の廻向は解脫と等し、諸佛は解脫と等し、諸佛の滅度は解脫と等し、諸佛の弟子・聲聞・辟支佛は解脫と等し。諸佛の弟子の滅度は解脫と等し、諸佛の法相は解脫と等し、諸の聲聞・辟支佛の法相は解脫と等し、一切諸法の相も亦た解脫と等し。我れ是の諸の善根の相を以て、隨喜の功德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦た解脫と等し、不生不滅なるが故なり」と。須菩提よ。是を諸の菩薩摩訶薩の隨喜の功德は、最上第一最妙無上にして、與に等しきもの無しと名く。須菩提よ、菩薩は是の隨喜の功德を成就して、當に疾く阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

復次に、須菩提よ、十方如恆河沙等の諸佛、及び弟子の、現在に佛道を求むること有らんに、善男子善女人ありて、形壽を盡して、是の諸佛及び弟子を供養し一切の須ふる所の衣服・飲食・臥具・醫藥を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎す。是の諸佛の滅度の後、晝夜に勤修し、華香乃至幡蓋・妓樂を以て供養し、恭敬し、尊重し、讚歎す。(そは)取相・有所得を以ての故なり。持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修す。(そは)取相・有所得を以ての故なり。

復た善男子善女人ありて、意を發して阿耨多羅三藐三菩提を求め、檀波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行する時、相を取らざるを以て、所得の法無く、方便力を以て、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の福德は最上第一最妙無上にして、與に等しきもの無く、前の福德に勝ること、百倍千倍・百千億倍乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・



り。一には悔過品、二には隨喜品、三には勸請諸佛品なり。廣く説かば則ち無量無邊なり。善い哉、善い哉、汝は佛事を作すとは、佛は初發心に一切衆生を度せんことを誓ひたまふ。須菩提は是れ阿羅漢なりと雖も、而も能く佛の説法を助けたてまつりて、菩薩の道を開く。是の故に讚じて、善い哉、善い哉と言へり。

復次に、佛は自ら因縁を説き、諸の菩薩の爲に、應に廻向すべき所の法を説きたまへり。無相を用つての故には、無相の智慧を以て、和合し廻向するなり。福德の相とは、上と相違し、名けて無相と爲す。二六、無相に三種あり、假名相・法相・無相なり。假名相とは、車の如く、屋の如く、林の如く、軍の如し。衆生の如きは、諸法和合する中に、更に是の名あり。無明の力の故に是の假名の相を取りて、諸の煩惱業を起す。法相とは、五衆、十二入・十八界等の諸法は、肉眼を以て觀るが故に有り。慧眼を以て觀れば、則ち無し。是の故に法も亦た虚誑妄語なれば、應に法相を捨離すべし。是の二相を離るれば、餘は但無相のみ有り。人ありて是の無相相を取り、隨逐して相を取り、還た結使を生ず。是の故に亦た無相相を取るべからず。三種の相を離るるが故に無相と名く。若し相あること無くれば、是の中に所得なく、得なきが故に出づること無し。若し法にして、無得、無出ならば、即ち是れ無垢無淨なり。若し法にして、無垢無淨ならば、即ち是れ無法性なり。若し法にして無性ならば、即ち是れ自相空なり。若し法にして自相空

【二六】 三相の無相、(一)假名相、(二)法相、(三)無相相。

ならば、即ち是の法は常に自性空なり。若し法にして常に自性空ならば、即ち法性、如、實際に同じ。是の如き法を用つて、和合して福德を隨喜し廻向するが故に讚じて、善い哉、善い哉と言ふ。復次に、善哉の因縁あり。所謂、隨喜の福德は、大に衆生を利益し、大なる果報あり。何者か是れ大利益なる。所謂、佛、須菩提に語りたまはく、「若し三千大千世界の衆生、十善、乃至五通を行す」と。

問うて曰はく、(五)欲界の中の二處の天及び梵天王は何を以てか多くの天と俱にして、餘の四天は何を以てか少なきや。答へて曰はく、是の二天は、地に依止して、佛に近くが故なり。又、五欲は上天に如かず。佛の生れたまふ時、苦行の時、降魔の時、得道の時、轉法輪の時、常に來りて佛を供養したてまつれり。是の故に多し。餘の四處の天の宮殿は、虚空の中にありて、地に屬せず。五欲妙にして、染著すること深きが故に、多く來ること能はず。又兜率陀天は、利根にして法を樂しむと雖も、而も其の天上に常に補處の菩薩ありて法を説く、是の故に來らず。梵天は欲を遠離すと雖も、故らに法を樂しむ情深く、佛を法王と爲す。是の故に多く來る。復次に、梵天王は、色界の主と爲りて、佛の初轉法輪を請す。是の故に、應に多衆と俱に來るべし。餘の色界の天は、盡く梵天と名く。

問うて曰はく、(三)先に種種の因縁(を以て)、正廻向を説けり。正廻向は即ち是れ最上なり。今何を

【元】第六問、欲界の中の二處の天、及び梵天は、多くの天と俱なるに、餘の四天は何故に伴侶少なきか。

【三】第七問、正廻向に就て再問する理由如何し。

以てか更に問ふや。答へて曰はく、上には處處に廣く説き、今は略して説く。所謂、三十十方一切法は決定して、心に是の法中に於いて生者、滅者等のなきことを知る。一切法は得べからず、念ずべからず。念せざるを得ざるが故に、取らず捨てず。諸法實相の中に入りて是の念を作す。「諸法實相の如く、我も亦た是の如し、隨喜の福德を以て、廻向して諸法を分別せず、法性を壞せず」と。是を最上の廻向と名く。何となれば、果報は常に無盡なればなり。

問うて曰はく、(三) 六波羅蜜(多)等の諸法の各各の相は、若くは色相、若くは無色相等なり。解脱に二種あり。有爲解脱と無爲解脱なり。云何が皆解脱と等しきや。答へて曰はく、我れ先に已に説けり。凡夫の人は肉眼を以てし、六識顛倒して觀するが故に、異を觀る。若し慧眼を以て觀すれば、諸法な皆虚妄なり。唯涅槃を實と爲す。是の有爲解脱は、無爲に屬し、無爲に隨ふが故に解脱と名く。如實に、道を得る者を道人と名け、今未だ道を得ざる者も、衣服の法は則ち得道の者に隨ふが故に、亦た道人と名く。如し無餘涅槃は、不生不滅・不入不出・不垢不淨・非有非無・非常非無常・常寂滅相・心識の觀滅し、語言の道斷え、非法・非非法等の相なり。無所有の相を用つての故なり。慧眼もて一切法を觀するも亦た是の如きの相なり。是を六波羅蜜(多)と解脱と等しと名く。是の故に佛法の中に、「解脱を貴しと爲し、上智慧は解脱を貴ぶ」と説けり。佛、是の中に分別して説きたまはく、「若し人無量阿僧祇劫に六波羅

【三】 第八問、解脱に二種あり、何故に一切法は解脱と等しといふか。

蜜〔多〕を行じ、有所得の法を用つて、種種に善根を修習せるは、一人の無所得の法を用ゐ、但心を以て隨喜し、他の功德を念じて、無上道に廻向する是の人の、百千萬分の其の一にも及ばず。何となれば、先の福德には量あり、是の福德は無量なり。先の福德は盡ること有り、今の福德は盡くこと無し。先の福德は毒を雜へ、今の福德には毒なし。先の福德は生死に隨ひ、今の福德は涅槃に隨ふ。先の福德は不定にして或は佛と作り、或は退し、今の福德は定んで到り、必ず疾く佛と作ればなり。是の如き等の差別あり。是の故に、四種の人の〔中〕、若し凡夫の人は世間の樂を求む。若し聲聞辟支佛の人は涅槃の樂を求め、若し諸の菩薩摩訶薩は、佛の樂を求む。應に是の如く、隨喜して福德を生じ、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべしとす。此の品の中に説くが如し。

# 卷の第六十二

## 照明品第四十を釋す。

釋

爾の時に、慧命舍利弗、佛に白して言さく、

佛の言はく、「是れ般若波羅蜜

〔多〕なり」と。「世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は能く一切法を照らす、〔そは〕畢竟淨なるが故

〔一〕此の品は、初に般若の能く一切法を照すの徳を讚する

なり。世尊よ、應に般若波羅蜜〔多〕を禮すべし。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は三界に著せ

が故に照明品と名け、後に般若の大度なる旨を説くが故に

尊よ、般若波羅蜜〔多〕は一切の助道法中の最上なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は安隱な

大度品ともいふ。

り。〔そは〕能く一切の怖畏苦惱を斷するが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は能く光明

〔二〕般若の功徳を讚じて、供養を明にし、その導者たる所以を説く。

を與ふ。〔そは〕五眼を莊嚴するが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は能く邪見に墮する

衆生を示導す。〔そは〕二邊を離るるが故なり。

世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は是れ一切種智なり。〔そは〕一切の煩惱及び習を斷するが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は諸

の菩薩摩訶薩の母なり。〔そは〕能く諸佛の法を生ずるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は不生不滅なり。〔そは〕自相空な

るが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は生死を遠離す。〔そは〕非常非減なるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は救なき者

の護と作る。〔そは〕一切の珍寶を施すが故なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は力を具足す。〔そは〕能く破壞するもの無きか故

なり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は能く三轉、十二行の法輪を轉す。〔そは〕一切諸法は不退不還なるが故なり。

世尊よ、般若波羅蜜(多)は能く諸法の性を示す。(せば)無法有法空なるが故なり。世尊よ、應に云何が般若波羅蜜(多)を供養すべきや。佛の言はく、當に世尊を供養するが如くすべし。般若波羅蜜(多)を禮すると、當に世尊を禮するが如くすべし。何となれば世尊は般若波羅蜜(多)に異ならず、般若波羅蜜(多)は世尊に異ならず。世尊は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり、般若波羅蜜(多)は即ち是れ世尊なればなり。是の般若波羅蜜(多)の中に、諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・順陀洹を出生し、般若波羅蜜(多)の中に、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通・內空・乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分を生じ、是の般若波羅蜜(多)の中に、佛の十力・十八不共法・大悲大悲・一切種智を生ずればなり。

爾の時に、釋提桓因、心に念すらく、「何の因縁の故に舍利弗は是の事を問ふや」と。舍利弗、釋提桓因に語りて言はく、「橋戸迦よ、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に守護せられ、(三) 五波羅蜜(多)は、能く諸法の性を示す。(せば)無法有法空なるが故なり。世尊よ、應に云何が般若波羅蜜(多)を供養すべきや。佛の言はく、當に世尊を供養するが如くすべし。般若波羅蜜(多)を禮すると、當に世尊を禮するが如くすべし。何となれば世尊は般若波羅蜜(多)に異ならず、般若波羅蜜(多)は世尊に異ならず。世尊は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり、般若波羅蜜(多)は即ち是れ世尊なればなり。是の般若波羅蜜(多)の中に、諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・順陀洹を出生し、般若波羅蜜(多)の中に、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通・內空・乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分を生じ、是の般若波羅蜜(多)の中に、佛の十力・十八不共法・大悲大悲・一切種智を生ずればなり。

念じ已りて舍利弗に語るらく、「何の因縁の故に、是の事を問ふや」と。舍利弗、釋提桓因に語りて言はく、「橋戸迦よ、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に守護せられ、(三) 五波羅蜜(多)は、能く諸法の性を示す。(せば)無法有法空なるが故なり。世尊よ、應に云何が般若波羅蜜(多)を供養すべきや。佛の言はく、當に世尊を供養するが如くすべし。般若波羅蜜(多)を禮すると、當に世尊を禮するが如くすべし。何となれば世尊は般若波羅蜜(多)に異ならず、般若波羅蜜(多)は世尊に異ならず。世尊は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり、般若波羅蜜(多)は即ち是れ世尊なればなり。是の般若波羅蜜(多)の中に、諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・順陀洹を出生し、般若波羅蜜(多)の中に、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通・內空・乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分を生じ、是の般若波羅蜜(多)の中に、佛の十力・十八不共法・大悲大悲・一切種智を生ずればなり。

溼和拘舍羅の力を以ての故に、過去未來現在の諸佛に於いて、初發心より乃至法住まで、其の中間に於いて、作す所の善根の一切利合し隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の因縁を以ての故に、我々は是の事を問ふ。橋戸迦よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は檀波羅蜜(多)、尸羅・麁提・毗梨耶・禪波羅蜜(多)に勝ると、譬へば生育の人、若くは百、若くは千、若くは百千あるも、而も前導無ければ道に趣き城に入るも能はざるが如し。橋戸迦よ五波羅蜜(多)も亦た是の如く、般若波羅蜜(多)を離るれば、盲の導き無くして、道に趣くも能はざるが如く、一切種智を得ること能はず。

橋戸迦よ、若し五波羅蜜(多)は、般若波羅蜜(多)の將導を得れば、是の時、五波羅蜜(多)を名けて有眼と爲す。般若波羅蜜(多)の將導は、波羅蜜(多)の名字を得しと。釋提桓因、舍利弗に語るらく、「汝の言ふ所の如く、般若波羅蜜(多)は、

【三】 Upajakamsalya は譯して「方便善巧」といふ。  
【四】 五度を生育に比し、智度を將導に比す。

五波羅蜜(多)を將導するが故に、波羅蜜(多)の名字を得るも、舍利弗よ、若し檀波羅蜜(多)なければ、五波羅蜜(多)は、波羅蜜(多)の名字を得ず。若し尸羅波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)なければ、五波羅蜜(多)は、波羅蜜(多)の名字を得ず。若し爾らば、何を以ての故に、獨り般若波羅蜜(多)のみを讚するや」と。舍利弗言はく、「是の如し、是の如し、橋尸迦よ。檀波羅蜜(多)なければ、五波羅蜜(多)の名字を得ず。尸羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)なければ、五波羅蜜(多)の名字を得ず。但た菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の中に住してのみ、能く檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)を具足す。是を以ての故に、橋尸迦よ、般若波羅蜜(多)は、五波羅蜜(多)の中に於いて、最上、第一、最妙、無上にして、與に等しきもの無きなり」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が應に般若波羅蜜(多)を生ずべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「色は不生なるが故に、般若波羅蜜(多)を生じ、受想行識は不生なるが故に、般若波羅蜜(多)を生じ、檀波羅蜜(多)は不生なるが故に、般若波羅蜜(多)を生じ、乃至八聖道分、佛の十力乃至一切智、一切種智は不生なるが故に、般若波羅蜜(多)を生じ、内空乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分、佛の十力乃至一切智、一切種智は不生なるが故に、般若波羅蜜(多)を生ず。是の如く諸法不生なるが故に、般若波羅蜜(多)は應に生ずべし」と。舍利弗言はく、「世尊よ、云何が色は不生なるが故に、般若波羅蜜(多)を生じ、乃至一切諸法は、不起、不生、不得、不失なるが故に、般若波羅蜜(多)を生ずべきや」と。佛の言はく、「色は不起、不生、不得、不失なるが故に、乃至一切諸法は、不起、不生、不得、不失なるが故に、般若波羅蜜(多)を生ず」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「是の如く生ずる般若波羅蜜(多)と何等の法と合するや」と。佛言はく、「合する所なし。是の如くなるが故に、般若波羅蜜(多)と名くることを得」と。「世尊よ、何等の法と合せざるや。」佛言はく、「不善法と合せ

す。善法と合せず、世間法と合せず、出世間法と合せず、有漏法と合せず、無漏法と合せず、有罪法と合せず、無罪法と合せず、有爲法と合せず、無爲法と合せず。何となれば、般若波羅蜜(多)は、諸法を得るを爲さざるが故に生ずればなり。是を以ての故に、諸法に於いて合する所なし」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は、亦た薩婆若とも合せざるや」と。佛の言はく、「是の如し僑尸迦よ、般若波羅蜜(多)は、亦た薩婆若とも合せざるも亦た得ず」と。釋提桓因の言さく、「世尊よ、云何が般若波羅蜜(多)は、亦薩婆若とも合せざるも亦た得ざるや」と。佛の言はく、「般若波羅蜜(多)は名字の如くならず、相の如くならず、起作法の合するが如くならず」と。釋提桓因言さく、「今云何が合するや」と。佛の言はく、「若し善薩摩訶薩の不起不受・不住・不著・不斷の如く、是の如く合するも、亦た合する所なし。是の如し、僑尸迦よ、般若波羅蜜(多)は、一切法と合する所なし」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「未曾有なり。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は、一切法の不起・不生・不得・不失の爲の故に生ず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、是の念を作す、「般若波羅蜜(多)は、若くは一切法と合し、若くは合せず。是の善薩摩訶薩は、則ち般若波羅蜜(多)を捨て、般若波羅蜜(多)を遠離す」と。佛、須菩提に告げたまはく、「復た因縁ありて、善薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を捨て、般若波羅蜜(多)を遠離す。若し善薩摩訶薩は是の念を作す、「是の般若波羅蜜(多)は、無所有空虛にして堅固ならず」と。是の善薩摩訶薩は、則ち般若波羅蜜(多)を捨て、般若波羅蜜(多)を遠離す。須菩提よ、是の因縁を以ての故に、般若波羅蜜(多)を捨離す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)を信じて、何の法をか信ぜずと爲すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「般若波羅蜜(多)を信すれば、則ち色を信ぜず、受想行識を信ぜず、眼乃至意を信ぜず、色乃至法を信ぜず、眼界

乃至意識界を信ぜず、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)を信ぜず、内空乃至無法有法空を信ぜず、四念處乃至八聖道分を信ぜず、佛の十力乃至十八不共法を信ぜず、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を信ぜず、菩薩道を信ぜず、阿耨多羅三藐三菩提乃至一切種智を信ぜず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が般若波羅蜜(多)を信する時、色乃至一切種智を信ぜざるや」と。佛、須菩提に告げ給はく、「色は不可得なるが故に、般若波羅蜜(多)を信じて色を信ぜず、乃至一切種智は不可得なるが故に、般若波羅蜜(多)を信じて一切種智を信ぜず。是を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)を信する時、色を信ぜず、乃至一切種智を信ぜざるなり」と。

論

釋して曰く、上に佛は彌勒、須菩提、釋提桓因と共に、隨喜の義を説きたまへるに、舍利弗は嘿然として、是の般若波羅蜜(多)の隨喜の義の甚深無量無邊にして、大に衆生を利益するを聽聞し、漏盡寂滅なりと雖も、歡喜の心を發し、座より起つて、掌を合せ、佛に白して言さく、「能く隨喜を作して諸の戲論を斷じ、無量の衆生を利益して、佛道に入らしむる者は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛は其の語を可としたまへるが故に言はく、「是の般若波羅蜜(多)の中に諸法實相を説き、諸法實相の中には、戲論垢濁なきが故に、畢竟清淨と名け、畢竟清淨なるが故に、能く遍ねく一切五種の法藏、所謂過去と、未來と、現在と、無爲と及び不可説とを照らす」と。是の故に、舍利弗の言はく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は、能く一切法を照らす。畢竟淨なるが故なり。般若波羅蜜(多)は、能く菩薩を守護し、諸の苦惱を救うて、能く所願を滿すこと、梵天王の三千大千世界を守護するが故

に衆生皆禮するが如し」と。三界の中の三毒の泥、汗さざる所なるが故に、三界に著せずと言ひ、一切の愛等の百八煩惱、我見等の六十二見を破するが故に、無明の黒闇を破すと言ひ、諸法の中にて、智慧は最上にして、一切の智慧の中にて、般若波羅蜜(多)を上と爲し、智慧を以て本と爲して、四念處等の三十七品を分別す。是の故に、一切の助道法の中にて最上なりと言ふ。能く生老病死等の諸の怖畏苦惱を斷するが故に、安隱と言ひ、是の般若波羅蜜(多)の中に、五眼を攝するが故に、能く光明を與ふと言ひ、有邊、無邊等の諸の二邊を離るるが故に、能く正道を示すと言ひ、菩薩は、金剛三昧に住して、一切の煩惱を斷じ、微習ども、遺餘なからしめて、無礙解脱を得るが故に、一切種智と言ふ。

復次に、一切法の總相別相、一切種智の因縁を知るが故に、一切種智と名け、能く十方三世の無量の諸佛の法を生ずるが故に、諸の菩薩の母と言ひ、一切法の中、各各の自相は空なるが故に、不生不滅と言ふ。斷[見]と常[見]とは、是れ諸見の本、諸見は是れ諸の結使の本、諸の結使は是れ一切の生死の中、苦の本なり。是の故に生死を遠離すと言ふ。能く衆生をして、三寶等の諸の善法の實を信じて、諸の善法の實を得せしむるが故に、世間と出世間の樂を得て、能く衆生をして、二種の樂を得せしむるが故に、救なき者を護ることを作すと言ふ。是の般若波羅蜜(多)の相は乃ち十方の諸佛に至るまで、壞することを能はざる所なり。何となれば、「そは」畢竟不可得なればなり。何に泥んや餘人を

や。故に波羅蜜〔多〕を具足すと言ふ。是の般若波羅蜜〔多〕の中には、自性なきが故に、諸法は轉せずと説く。生死の中に還らず、涅槃に入りて不生なるが故に、轉せず、滅せず、故に還らず。故に能く 三轉 十二行法輪を轉ずと言ふ。三轉十二行法輪の義は、先に説くが如し。一切の法に二分あり。若くは有、若くは無なり。是の般若の中には、有も亦た取るべからず、無も亦た取るべからず、是の有無を離るるは、即ち是れ諸法の性なり。是の故に、能く諸法の性を示すと言ふ。是の如き等の無量の因縁もて般若を讚歎す。後に當に廣く説くべし。是の般若波羅蜜〔多〕は、是れ無相の相なり。有る人は心未だ淳熟せず、其の定相を求めて得ること能はざれば、便ち慢心を生ず。是の故に舍利弗問ふ、「應に云何が供養すべき」と。佛敎へて言はく、「當に佛を供養したてまつるが如くすべし」と。人は久遠よ

【五】三轉とは、苦集滅道の四諦の法を以て、三番に説くをいふ。三番とは、(一)示轉、(二)勸轉、(三)證轉なり。  
 一に謂く、示は即ち指示なり。此は是れ苦、此は是れ集等といふが如し。  
 二に謂く、勸は即ち勸勉なり。此は是れ苦、汝應に知るべし。此は是れ集、汝應に斷すべし。此は是れ滅、汝應に證すべし。此は是れ道、汝應に修すべしといふが如し。  
 三に謂く、證は驗なり、即ち己が所證を引いて以て驗するなり。此は是れ苦、我已に知る、復た更に知らず。此は是れ集、我已に斷す、復た更に斷せずといふが如し。  
 【六】十二行法輪とは、前に擧げたるが如く、四諦の一一に示、勸、證の三轉あるが故に、十二の教法となるをいふなり。これを教の十二行法輪と言ひ、三轉の一一に、眼智、明、覺の四種の智を生ずるを、行の十二法輪といふ。眼智、明、覺とは、眼は見道の十六心の中、四法智忍を眼とし、四法智を智とし、四類智忍を明とし、四類智を覺とす。是れ見道に就ての釋なり。又眼は觀見の義、智は決斷の義、明は照了の義、覺は警察の義と釋す。

り已來、深く衆生相に著するを以て、貴法に於いて情薄し。是の故に、世尊を供養したてまつるが如くせよと言ふ。智者は之を觀じて、佛と般若と等うして異なること無しとす。何となれば、般若の修集は、即ち變じて、一切智と爲ればなり。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「是の般若波羅蜜多」の中より、賢聖等を出生し、十善道等の世間、出世間の法、乃至一切種智を出生す」と。爾の時に帝釋は是の念を作せり、帝釋は意に舍利弗を以て、漏盡離欲の人にして、著法の人の如くに似て般若を讚歎すと「爲す」。今舍利弗は自ら因縁を説けり。菩薩は般若の守護の爲の故に、方便の力を以つて、能く福德の廻向を隨喜し、而して般若波羅蜜多の相を破らず、是の事は希有なるが故に、般若波羅蜜多を尊敬す」と。是の故に佛に問ふ、「云何が供養せん」と。復次に、橋戸迦よ、般若波羅蜜多は自の力勢の故に五波羅蜜多に勝る。

問うて曰く、五波羅蜜多は、應に五盲人を以て喩と作すべし。何を以てか乃ち百千を説くや。答へて曰はく、此の中に其の力勢を説きて多少を論せず。復次に、若し五を導くと言はば、貴しと爲すに足らざるが故に百千を説く。復次に、波羅蜜多も亦た多し。賢劫三昧の中に、八萬四千の波羅蜜多あり。廣く説くときは、則ち無量なるが如し。

問うて曰はく、檀波羅蜜多にも亦た眼あり。何となれば、罪福あることを信じ、邪見等の無明

【七】 第一問、五度は應に五盲人を以て喩とすべし、何を以てか乃ち百千を説くか。  
 【八】 第二問、檀波羅蜜多にも亦眼あり、然るを眼なきに喩ふるは何故なるか。

を破するが故に能く布施すればなり。何を以ての故に眼無きに喩ふるや。答へて曰はく、布施の中の智慧は、是れ客來にして正體に非ず。譬へば四大は常に和合して相離るることを得ざるが如く、諸の波羅蜜(多)の和合も亦た是の如し。道に趣くことを得ずとは、道は菩薩の十地の道なり。城は一切種智等の諸佛の法なり。

復次に、道とは、八聖道分なり。城とは、涅槃なり。盲人は手足の力ありと雖も、意に随つて所至あるとを得ること能はず。有眼の人の示導を得て、則ち意に随つて往く所、皆能く成辦するが如く、五波羅蜜(多)は各各事ありと雖も、能く般若の示導を得ざれば、尙二乗をすら得ず、何に況んや無上道をや。五波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)の將導を得るが故に、波羅蜜(多)の名字を得、佛道を成ずるに至る。帝釋問ふ、「汝は自ら説けり、諸の波羅蜜(多)は、和合して互に相佐助すること、四大の相離るることを得ざるが如し」と。是の如くんば、般若波羅蜜(多)も亦た五法を待つ。何を以てか獨り般若を以ての故に、五法は、波羅蜜(多)の名字を得と説くや」と。答へて曰く、六事は和合して互に相佐助すと雖も、但般若波羅蜜(多)の力は大なるが故に、五法は因りて波羅蜜(多)の名字を得。譬へば、合散は衆藥に各各力ありと雖も、石勢大なるが故に、名けて石散と爲すが如し。又大軍は敵を摧き、各各力ありと雖も、王將の力大なるが故に、主として名字を得るが如し。舍利弗は已に般若を供養することとを問ひ、今行者は云何が般若波羅蜜(多)を生ずるやと問ふ。佛答へたまはく、「若し行者、色等

の諸法の不生の相を觀ずれば、是れ則ち般若波羅蜜(多)を生ず」と。舍利弗復た問ふ、「云何が色等の不生を觀ずるが故に、般若波羅蜜(多)を生ずるや」と。答へて曰はく、色等は因縁和合して起る、行者は色の虚妄なることを知りて起らしめず、起らざるが故に生ぜず、生ぜざるが故に得ず、得ざるが故に失せず。爾の時に、舍利弗は意に問ふ、「般若無生なれば、緣處行者も亦た無生なり。是の如くんば般若は何の法と合し、終に何處に歸して住し、何の果報を得るや」と。答へて曰く、「般若波羅蜜(多)は無生の相なるが故に、合する所なし。若し般若波羅蜜(多)に、法の合する者ありて、若くは善、若くは不善等ならば、是を般若波羅蜜(多)と名けず」と。今合する所なきが故に、般若波羅蜜(多)の數中に入るなり。

問うて曰はく、(五) 若し爾らば、帝釋は已に一切法の合せざるを知らし、何を以てか獨り薩婆若の合せざることをのみを問ふや。答へて曰はく、帝釋

は是の般若を貴重し、深く著し、薩婆若に於て、愛未だ斷せざるが故に、乃至薩婆若も亦た合せざるやと言ふ。佛答へたまはく、「般若波羅蜜(多)と薩婆若とも亦た合せず、一切法は畢竟無生なればなり」と。此の中に佛は斷滅の邪見を破するが故に、般若波羅蜜(多)と合すと説きたまへり。凡夫の人の相を取り、名に著し、有爲法を作起して合するが如くならず、佛心の合するが如し。

問うて曰はく、(六) 云何が佛心の合するが如くなるや。答へて曰はく、一切の相は、虚誑なるが故に

【九】 第三問、帝釋は已に一切法の合せざるを知れり、然るに今但一切種智の合せざるを問へるは何故なるか。  
 【一〇】 第四問、云何が佛心の合するが如くなるや。

相を取らず。一切法の中には、無常等の過咎あるが故に受けず。吾心の心は、世間に縛著して、皆動相なるが故に住せず。能く種種の苦惱を生じて、後變異するが故に著せず。一切世間は顛倒し、顛倒の果報は不實にして、幻の如く、夢の如く、滅する所なきが故に斷せず。是の故に佛は法に著せず、高心を生せず。畢竟空、善相の中に入り、深く大悲に入りて、以て衆生を救ひたまふ。菩薩は應に佛心の合するが如くなるべし。帝釋は歡喜し讀じて言はく、「希有なり。是の般若波羅蜜(多)は、諸法を破壊せず、不生、不得、不失なるが故に、而も能く菩薩を成就し、佛に至ることを得せしむ」と。須菩提言はく、「若し菩薩は有所得を用ゐ、是の如く一切智等と一切法の、若くは合し、若くは合せざることを分別せば、是の菩薩は、則ち般若波羅蜜(多)を失す」と。佛は然も其の言を可とし、「是の如し、更に因縁あり。菩薩。若し汝が説く所の一切法に、合と不合となきことを取り、是の空相を取りて、般若は空にして所有なく、牢固ならずと言はば、是も亦た般若波羅蜜(多)を失す」と。須菩提は、般若波羅蜜(多)の不可得の相なることを知り、是の故に問ふ、「若し般若波羅蜜(多)を信せば、何法をか信せん。般若波羅蜜(多)は空にして不可得なり、心を決定せんが爲に何法をか信せん」と。佛の言はく、「色等の一切法は信すべからず。何を以ての故に、色等の一切法の自性は、不可得なるが故に、信すべからざるなり」と。



須菩提、佛に白して言さく、  
 (一) 世尊よ、是の般若波羅蜜(多)を名けて、  
 (二) 摩訶波羅蜜(多)と爲すやと。須菩提言さく、  
 一、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は  
 因縁の故に、是の般若波羅蜜(多)を名けて、摩訶波羅蜜(多)と爲すやと。須菩提言さく、  
 二、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は  
 色を大と作さず、色を小と作さず。受想行識を大と作さず、小と作さず。眼乃至意、色乃至法、眼識乃至意識界を、大と  
 作さず、小と作さず。檀波羅蜜(多)乃至禪波羅蜜(多)を大と作さず、小と作さず。空乃至無法有法空を大と作さず、小と  
 作さず。四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提を大と作さず、小と作さず。諸の佛法を大と作さず、小と作さず。諸佛を大と作さ  
 ず、小と作さず。是の般若波羅蜜(多)は色を合すと作さず、色を散すと作さず、受想行識を合すと作さず、散すと作さず。  
 乃至諸佛を合すと作さず、散すと作さず。色は無量と作さず、非無量と作さず。乃至諸  
 佛は無量と作さず、亦た非無量と作さず。色を狭と作さず、色を廣と作さず。乃至諸佛  
 を廣と作さず、狭と作さず。色を有力と作さず。色を無力と作さず。乃至諸佛を有力と  
 作さず、無力と作さず。世尊よ、是の因縁を以ての故に、是の般若波羅蜜(多)を摩訶波  
 羅蜜(多)と名く。

世尊よ、若し新發意の菩薩摩訶薩に、若し般若波羅蜜(多)を遠離せず、檀波羅蜜(多)を遠離せず、毗梨耶波羅蜜(多)を遠  
 離せず、尸羅波羅蜜(多)を遠離せず、檀波羅蜜(多)を遠離せずして、是の如く念す、  
 是の般若  
 波羅蜜(多)は色を大と作さず、色を小と作さず。乃至諸佛を大と作さず、小と作さず。色を合すと作さず、散すと作さず。  
 若し波羅蜜(多)は色を大と作さず、色を小と作さず。乃至諸佛を大と作さず、小と作さず。色を合すと作さず、散すと作さず。  
 色は無量と作さず、色を非無量と作さず。色を有力と作さず、色を無力と作さず。乃至諸佛を有力と作さず、無力と作さ  
 ずと。

世尊よ、菩薩摩訶薩は、若し是の如く是を知れば、般若波羅蜜(多)を行ぜずと爲す。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は

【一】 以下般若の大度なる所以  
 を明す。  
 【二】 Mahāpariśrutī 是譯して  
 大度といふ。

相に非ざればなり。所謂、色を大小と作し、乃至諸佛を大小と作し、色を有力、無力、乃至諸佛を有力、無力（と作す）。  
尊よ、是の菩薩摩訶薩は、有所得を用ふるが故に大過失あり。

所謂、般若波羅蜜多を行ずる時、色を大と作し、色を小と作し、乃至諸佛を有力と作し、無力と作す。何となれば、右  
所得の相ある者は、阿耨多羅三藐三菩提無ければなり。所以は何となれば、衆生は不生なるが故に、般若波羅蜜多も亦た  
應に不生なるべく、色不生なるが故に、般若波羅蜜多は不生なり。乃至佛不生なるが故に、般若波羅蜜多は不生なり。

衆生の性は無なるが故に、般若波羅蜜多の性は無なり。色性は無なるが故に、般若波羅蜜多の性は無なり。乃至佛性無  
なるが故に、般若波羅蜜多の性は無なり。

衆生は非法なるが故に、般若波羅蜜多は非法なり。色は非法なるが故に、般若波羅蜜多は非法なり。乃至佛は非法な  
るが故に、般若波羅蜜多は非法なり、衆生は空なるが故に、般若波羅蜜多は空なり。色は空なるが故に、般若波羅蜜  
〔多〕は空なり。乃至佛は空なるが故に、般若波羅蜜多は空なり。

衆生は離なるが故に、般若波羅蜜多は離なり。色は離なるが故に、般若波羅蜜多は離なり。乃至佛は離なるが故に、  
般若波羅蜜多は離なり。衆生は有ること無きが故に、般若波羅蜜多は有ること無し。色は有ること無きが故に、般若波  
羅蜜多は有ること無し。乃至佛は有ること無きが故に、般若波羅蜜多は有ること無し。

衆生は不可思議なるが故に、般若波羅蜜多は不可思議なり。色は不可思議なるが故に、般若波羅蜜多は不可思議なり  
乃至佛は不可思議なるが故に、般若波羅蜜多は不可思議なり。衆生は不減なるが故に、般若波羅蜜多は不減なり。色は  
不減なるが故に、般若波羅蜜多は不減なり。乃至佛は不減なるが故に、般若波羅蜜多は不減なり。

衆生は不可知なるが故に、般若波羅蜜多は不可知なり。色は不可知なるが故に、般若波羅蜜多は不可知なり。乃至佛

は不可知なるが故に、般若波羅蜜(多)は不可知なり。

衆生の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜(多)の力は成就せず、色の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜(多)の力は成就せず。

乃至、佛の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜(多)の力は成就せず。世尊よ、是の因縁を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩

の般若波羅蜜(多)を名けて、摩訶波羅蜜(多)と爲す。

釋して曰はく、須菩提は、佛の所説を聞いて、疑心を開解し、般若波羅蜜(多)を讚歎して言は

く、「是の般若を名けて摩訶波羅蜜(多)と爲す」と。佛反問したまはく、

「須菩提よ、汝が意に於いて云何。何を以ての故に、名けて大波羅蜜(多)と

爲すや」と。須菩提は答ふらく、「色等の諸法を大と作さず、小と作さざる

が故なり」と。凡夫人の心は、諸法の中に於いて、意に随つて大小と作す。

人の急なる時は、其の心縮小し、安隱富樂なる時は、心則ち寛大なるが如し。又八背捨の中、心に隨

ふが故に、外色は或は大に、或は小なるが如く、又凡夫の人は眼見の色中に於て、色に非ざる事を亦

た色と言ふが如く、業を指し、量を指し、數を指し、一異等の法の合せるを指して色と爲すが如し。

是を色を大と作すと名く。有る人は、眼見の色の見る可き處を色と名け、見るべからざる處を色と名け

ず。有る人の言はく、「塵色は虚誑にして眞色に非ず但、微塵のみ常なるが故に是は眞色なり。微塵

の和合する時、假に名けて色と作す」と。是を色を小と作すと名く。是の如き等の因縁もて、凡夫の人

【三】微塵とは、極微を七倍せるものをいふ。極微は色即ち物質の極小なるものなり。俱舍論第十一卷を参照せよ。

は色に於て或は大と作し、或は小と作し、憶想分別に隨ふが故に、諸法の性を破す。般若波羅蜜(多)は、色性に隨つて實の如く觀すれば、大小と作さず。(二四)合せず、散せずとは、般若波羅蜜(多)は、微塵の色、和合して更に色生ずること有りて説かず。但假名のみ有りて定相の色あること無し。是の故に合すること無く、散すること無し。色は無邊なるが故に無量なり。處として色あらざること無く、時として色あらざること無きが故に量あること無し。色は是れ作法なり。般若波羅蜜(多)の中には、微塵を以て合するが故に、麤色あるにあらず。麤色の散するを以ての故に、還た微塵に歸するにあらず。是の故に合せず散せずと言ふ。起法は分別、籌量、多少ありて、合せず散せず、無量なりと言ふことを得ず。凡夫の人の如きは、空なるが故に無量と説き、實なるが故に有量と説く。(三五)般若波羅蜜(多)は、空實を遠離するが故に、非量非無量と言ふ。凡夫の人は、心の憶念に隨つて、解を得るが故に、色に於いて廣と作し、狭と作す。般若波羅蜜(多)は、實の法相を觀じて、心に隨はざるが故に、廣に非ず、狭に非ず。凡夫の人は、和合の因縁もて、諸法を生ずることを知らざるが故に、色を有力と言ふ。衆縛を合して以て繩と爲さんに、知らざる者は繩を有力と謂ふが如く、又墻崩れて人を殺さんに、墻は有力なりと言ふが如し。若し各各に分散すれば、則ち力あること無し。般若波羅蜜(多)は、和合の相を知り、一法の有力を説かず、説いて無力なりと言はず。是の故に摩訶波羅蜜(多)と名く。

【四】 合せず散ぜずの義解。

【五】 般若波羅蜜多は非有量非無量なり。

復た大因縁あり。若し菩薩は六波羅蜜〔多〕を遠離せず。色等の諸法を大と作さず、小と作さず。

但般若波羅蜜〔多〕のみを行すれば、則ち心散亂して調順ならず、多く疑悔邪見を生じて、般若波羅蜜

〔多〕の相を失す。若し五波羅蜜〔多〕と和合して行すれば、則ち調柔にして錯らず能く衆事を成辦す。

譬へば、八聖道分の正見は、是れ道なるも、若し七事の佐助なければ、則ち事を辦すること能はず、

亦た正見と名けざるが如し。是の故に佛説きたまはく、「一切諸の善法は、皆因縁の和合より共に生

じ、一法として獨り自ら生ずる者あること無し」と。是の故に和合の時は各各に力あり。但力に大小

あり。是を般若波羅蜜〔多〕を行ずと名く。若し菩薩、五波羅蜜〔多〕を離れ

て、般若波羅蜜〔多〕を行じ、色等の諸法の若くは大、若くは小等を分別せ

ば、是の人は即ち墮して、有所得を用ゐ、有邊の中に墮す。若し色等の諸

法に於いて、若くは大、若くは小なりと分別する所なく、五波羅蜜〔多〕を離れ、是の大ならず小なら

ざる等の空相に著せば、先には諸法の大小を分別する有所得の失を爲し、今大ならず小ならず等の空

相に著するも亦た是れ失なり。何となれば、此の中に須菩提は因縁を説けり、「有所得の相は、乃至

阿耨多羅三藐三菩提無し」と。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提は、寂滅の相、無所得の相、畢竟

清淨の相なればなり。有所得の相は、諸の戲論を生じ、一切法は生なく滅なきを誣競す。無所得の

相は、我、衆生の如きは、十方に求索するに不可得にして、但假名のみ有り、實には不生なり。衆生

【三】菩薩の般若波羅蜜多、共に他の四波羅蜜多を行する理由。

は不生なるが故に、般若波羅蜜〔多〕も亦衆生の相の如く、吾我の顛倒を破するが故に不生不滅なり。  
 如し色等の諸法は、生相不可得なるが故に、二法を生ぜず、一切法を攝す。若くは衆生、若くは法、此の  
 二法は因縁和合の生なり。但假名のみ有りて定性あること無し。若し法に定性なければ、此の法は即  
 ち無生なり。是の二法は無生なるが故に、當に色等の諸法も、亦無生なることを知るべし。衆生の法  
 の無性にして所有なく、空離不可思議・不滅不可知なることも亦た是の如し。衆生の力は成就せざる  
 が故に、般若波羅蜜〔多〕の力は成就せずとは、先に一切法は因縁の和合よ  
 り生じて、各各に自力なきことを説けり。般若波羅蜜〔多〕は、諸法の各各  
 自力なきが故に自性なく、自性なきが故に空なることを知る。般若波羅蜜  
 〔多〕は諸法より生ずるが故に自力なく、自力無きが故に、亦た諸法の畢竟  
 空に同じ。是の故に、衆生及び法力は成就せざるが故に、般若波羅蜜〔多〕  
 の力も亦た成就せずと説く。

問うて曰はく、(三七) 先には色等の諸法は有力と作さず、無力と作さずと説けり。今何を以てか、更に  
 衆生及び色等の諸法の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜〔多〕の力も、亦た成就せずと説くや。答へ  
 て曰はく、上に、般若は諸法を觀じて有力と作さず、無力と作さずと説く。聽く者は謂はく、「般若  
 波羅蜜〔多〕は、能く是の觀を作せば、即ち大力あり」と。是の故に、是の中には、「衆生色等の力は、

【三七】 第五問、先に色等の諸法は、有力と作さず、無力と作さずと説き、今更に色等の諸法の力は成就せざるが故に、智度の力も亦成就せずと説くは何故なるか。

成就せざるが故に、般若波羅蜜(多)の力も、亦た成就せずと説く。是の如き等の種種の因縁の故に摩訶波羅蜜(多)と名く。

二八 信訪品第四十一を釋す。

爾の時に、慧命舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩ありて、是の般若波羅蜜(多)を信解する者は、何處より來りて是の間に生じ、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより來た、幾の時とか爲すや、幾の佛を供養すと爲すや、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行じ來りて、幾の時か、能く隨順して、深般若波羅蜜(多)の義を解すと爲すや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の菩薩摩訶薩は、十方の諸佛を供養したてまつりて、是の間に來生し、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の心か發してより來た、無量無邊阿僧祇百千萬億劫なり。是の菩薩摩訶薩は初發心より、常に檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行じ、無量無邊不可思議の阿僧祇の諸佛を供養したてまつりて、是の間に來生す。舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を、若くは見、若くは聞きて、是の念を作す、「我は佛を見たてまつり、佛より法を聞く」と。「舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩は、能く隨順して深般若波羅蜜(多)の義を解す。無利、無二、無所得を以ての故なり」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は聞くべく見るべきや。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の般若波羅蜜(多)は、聞く者あること無く、見る者あること無し。般若波羅蜜(多)は、聞くこと無く、見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)に作れり。」

釋

【二八】此の品には、般若の信諦を明し、訪法の墮獄を説く。

他本には泥梨品、又は信毀品に作れり。

〔多〕檀波羅蜜(多)は、聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。内空は、聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。乃至無法有法空も、聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。四念處は聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。乃至八聖道分は聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。佛の十力乃至十八不共法も聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。

須菩提よ、佛及び佛道は聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩は幾の時か佛道を行じて、能く是の如き、深般若波羅蜜(多)を習行するや」と。佛曰、須菩提に告げたまはく、「是の中に應に分別して説くべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩あり、初發意に、深般若波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)を習行し、方便力を以ての故に、諸法に於いて、破壞する所なく、諸法に利益なき者を見ず、亦た終に六波羅蜜(多)を行ずることを遠離せず。亦た諸佛を遠離せず、一佛の世界より、一佛の世界に至り、若し善根の力を以て、諸佛を供養したてまつらんと欲せば、意に隨つて即ち得、佛に母人の腹中に生ぜず、終に諸の神通を離れず、終に諸の煩惱及び聲聞辟支佛心を生ぜず、一佛の世界より、一佛の世界に至りて、衆生を成就し、佛世界を淨む。須菩提よ、是の如き等の諸の菩薩摩訶薩は、能く深般若波羅蜜(多)を習行す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩あり、多く諸佛を見たてまつること、若くは無量百千萬億なるも、諸佛に従つて行する所の布施、持戒・忍辱・精進・一心・智慧は、皆有所得なるを以ての故に、是の菩薩は、深般若を説くを聞く時、偈中衆中より起ち去り、深般若波羅蜜(多)、及び諸佛を恭敬したてまつらす。是の菩薩は、今此の衆中に在りて坐し、是の甚深般若波羅蜜(多)を聞くも、樂はずして便ち捨て去る。何となれば、是の善男子、善女人等は、先世に深般若波羅蜜(多)を聞く時、棄捨し去り、今世に深般若波羅蜜(多)を聞くも、亦た棄捨し去る。身心利せず、是の人ば愚癡の因縁の業を種う。是の愚癡の因縁の罪を



聽くこと有りて、其の語を信用せば、亦た是の如き苦を受く。舍利弗よ、若し人、般若波羅蜜(多)を破すれば、當に知るべし。是を名けて破法の人と爲すことをしと。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は破法の人を受くる所の重罪を説き、是の人の受くる所の身體の大小を説きたまはざるや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の人の受くる身の大小を説くことを須あす。何となれば、是の破法人は、若し受くる所の身の大小を聞かば、便ち當に熱血を吐きて、若くは死し、若くは死苦に近づくべし。是の破法の人、足の如き重罪あるを聞かば、是の人は便ち大に愁憂し、箭の心に入るが如く、漸漸に乾枯して、是の念を作さん、「破法の罪の故に、是の如き大醜身を得、是の如き無量の苦を受く」と。是を以ての故に、佛は舍利弗に是の人の受くる所の身體の大小を問ふを聽し給はず。舍利弗、佛に白して言さく、「願はくば、佛之を説いて、未來世の爲に明誠と作し、破法の業の積集の故に、是の如き大醜身を受け、是の如き苦を受くることを知らしめたまへ」と。佛、舍利弗に告げ給はく、「後世の人、若し是の破法の業を積集し、厚重に具足して大地獄の中に、久々しく無量の苦を受くることを聞かば、是の久々しく無量の苦を聞く時、未來世の爲に明誠と作すに足る」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し(二)尤もやくしやう(一)白性の善男子、善女人、是の法を聞かば、依止と作すに足り、寧ろ身命を失するも終に法を破らず。自ら念ずらく、我若し法を破らば、當に是の如きの苦を受くべし」と。

【九一】白性とは、善人のことにて、黒性は其の反對なり。

論 釋して曰はく、舍利弗は般若波羅蜜(多)の甚深微妙なることを聞く、聞くすら尚難し。何に況んや能く行するをや。是の故に言はく、「般若を信解する者は、是を希有と爲す」と。是の故に問ふ、

「世尊よ、若し般若を信解せば、是の人は何處に於て終りて、是の間に來生するべ」と。舍利弗は是の念を作す。「是の人は應に好き世界より終に是の間に來生すべし。是の人は新發意なるべからず。少しく佛を供養すべからず、少しく六波羅蜜(多)を行すべからず。必ず是れ大徳の人なり。未だ聖ならざるも、而も能く聖法を知ればなり」と。是の故に問ふ、「意を發してより、幾時にして幾の佛を供養したてまつり、六波羅蜜(多)を行すること幾時なりや」と。能く隨順して深般若の義を解すとは、是の菩薩は、諸法に於いて相を取らず、空行に著せず、空を行するに五波羅蜜(多)を和合して、般若波羅蜜(多)を行じ、大慈悲心を用つて、一切衆生の爲に、般若波羅蜜(多)を行するが故に、十方諸佛の清淨世界の中より、終に是の間に來生する者は、有縁の衆生を度するが爲に、又釋迦文佛と共なる因縁の故なり。此間に死し此間に生ずる者ありと雖も、但他方の佛所より來る者を貴しとするを以ての故なり。發心より來た、無量阿僧祇劫に、諸の福德力を集むること厚きが故に、能く深義を信解し隨順す。有る人は無量阿僧祇劫に發心すと雖も、久しく功徳を行せざる者あり。是の故に發心より來た、常に六波羅蜜(多)を行することを説く。常に六波羅蜜(多)の福德を行するが故に、能く無量無邊阿僧祇の佛を見ることを得、能く供養することを得。是の菩薩は上の四因縁を成就するが故に、無量無邊の福德智慧を得。是の福德の因縁の故に、諸の煩惱を薄くし、心柔軟なり。菩薩は信慧等の諸根の力を轉増して、力を得るが故に、深く般若波羅蜜(多)に入り、世間の事を汗厭す。若し般若の經

卷を見れば、即時に心生じて、佛を見たてまつるが如し。若し卷を披き義を尋ぬれば、即時に心生じて佛より聞きたてまつるが如し。信力、慧力を成就するが故に、隨順して深般若の義を解す。所謂、一切は無相なるが故に十二入を出づ。二法、不二法の中に心著する所なきが故に、無所得と名け、略して二相を説き、是に順じて般若波羅蜜「多」の義を解す。須菩提は經卷を聞見するに、是の如く佛は經文を讀じたまひ、佛より聞きたてまつるが如く、著すると有るが如きに似たり。是の故に問ふ、「般若は見るべく聞くべきや」と。須菩提意へらく、般若波羅蜜「多」は畢竟空なるを以て、天眼天耳すら猶見聞すること能はず、何に況んや肉眼、肉耳をや。出世間の慧眼も亦た見聞することを得ず、何に況んや世間の眼をやと。

佛、其意に順じて答へたまはく、「般若波羅蜜「多」は見聞することを得べからず」と。此の中に因縁を説きたまはく、「諸法は般若波羅蜜「多」の中に入れば、皆一相無相にして、是の中に聞者、見者、及び可聞、可見を分別すること無し。三界の凡夫の人は是れ眼、是れ色、是れ耳、是れ聲なりとの分別を作す。六情は是れ利、六塵は是れ鈍、色等の諸法は是れ鈍、慧等は是れ利。諸法は、般若波羅蜜「多」の中に入れば、百川の海に歸して、皆一味と爲るが如し。是の故に、般若波羅蜜「多」は見るべからず、聞くべからず」と説く。諸法は鈍なるを以ての故なり。壇波羅蜜「多」、乃至佛道、須陀洹乃至佛も、亦た是の如し。

復次に、衆生は法を離れて、聞くこと能はず、見ること能はず、法は衆生を離れて、亦た聞くこと能はず、見ること能はざるなり。

問うて曰はく、(二〇)上に已に、菩薩は意を發してより幾時にして、幾の佛を供養したてまつり、能く順じて深義を解するやを問へり。今何を以てか更に問ふや。答へて曰はく、上に佛は般若の聞くこと無く、見ること無きことを説き、亦た般若の經卷を見ることは、佛を見たてまつるが如く、般若を讀むことは、佛より二相の説を聞くが如しと説きたまひ、是の般若は亦た見るべく聞くべしと言ひ、亦見るべからず聞くべからずと言ふ。是の故に還た問ふ、「佛、菩薩は幾時か行じて是の方便を得、能く有を行じ、能く無を行じ、有を行じて三界に墮せず、無を行じて斷滅に墮せず、能く般若波羅蜜多の相に隨つて行ずるや」と。佛答へたまはく、「此事あり、定まらず、應當に分別して説くべし」と。或は菩薩あり、初發心に便ち能く甚深の六波羅蜜「多」を習行す。習行とは、一心に信受して、常に行ずるなり。方便力の故には、六波羅蜜「多」を行ずると雖も、福德の因縁を起して、而して心諸法に著せざるなり。破壊する所なしとは、是の菩薩の信力、智慧力は大なるが故に、摩訶衍の深法を聞いて、即時に信じ、聲聞法を聞いても亦た信じ、外道、在家、出家の法を聞いても、亦た破壊せず、而も中に於いて二種の利を出たす。一には是道と非道を分別し、非道を捨てて是道を行す。二には一切法は、般若波羅蜜「多」の中に

【二〇】第六問、今復た菩薩は發意より幾時にして幾佛を供養するや云々と問ふ理由如何。

入れば、是も無く非も無く、破することも無く、受くることも無きなり。

諸法の利益無きを見ずとは、即ち是れ上に説けり。中に於いて利なる者を出す、是れ福德具足するが故に、終に六波羅蜜「多」を遠離せず、乃至佛世界を淨むることを知るなり。略して義を説く。菩薩あり、新發意なりと雖も、深く是の般若波羅蜜「多」を信受す。菩薩あり、久しく意を發して、千萬億の諸佛を供養したてまつるも、有所得を用つて、六波羅蜜「多」を行じ、是の般若波羅蜜「多」を信せず。此の中に佛は自ら因縁を説きたまはく、「是の人は過去世に於て、深般若波羅蜜「多」を聞くも信せず受けず、座より起ちて去る」と。今、佛は信せず、受けず、般若波羅蜜「多」を破する罪の果報を説くが爲の故に説きたまふ。是の人は信せず受けざる業因縁の故に、即ち愚癡の業因縁を起し、愚癡の業因縁を得るが故に、疑悔惡邪著心轉た増す。著心轉た増すが故に、大乘の中に於て、毀訾して般若波羅蜜「多」を破壞し、般若多羅蜜「多」を破壞するが故に、三世十方の諸佛の一切智を破壞し、三世十方の諸佛の一切智を破する罪の故に、身を轉じて大地獄に墮す。

大地獄とは、阿鼻地獄にして無量百千萬億阿僧祇歲に憂愁苦惱を受く。憂愁は是れ心苦にして、苦惱は是れ身苦なり。一大地獄より一大地獄に至るとは、福德の因縁の故に上に六欲天あるが如く、罪業の因縁も亦た是の如し。下に八種の大地獄あり。八種の大地獄には各の下の下に六の大地獄あり。是の中阿鼻は最も大なり。餘の須彌の四天下も、亦た是の如し。是の三千大千世界の中に、百億の須彌山

あり、百億の阿鼻地獄あり。是の故に一阿鼻大地獄より、一阿鼻大地獄に至ると説く。人の會より、會に至るが如く、又正位に入る者の、天上より來りて人間の樂を受け、人中より還た、天上に至りて樂を受くるが如し。若し此の間に火劫起れば、其の罪未だ盡きざるが故に、轉じて他處に至り、十方世界の大地獄の中に罪苦を受け、彼の間に火劫起れば、復た展轉して、他方に至り。他方に火劫起れば、復還つて此の間の阿鼻地獄の中に生じ、展轉すること前の如し。是くして般若波羅蜜(多)を破する罪を小滅し、展轉して生じて勤苦す。畜生の中に此の間に火劫起れば、復た他方の世界の畜生の中に生じ、展轉して苦を受け、彼の間に火劫起れば、此の間に還り來りて、復た展轉すること前の如し。罪轉た微輕にして、或は人身の下賤の家に生ずるとを得、所謂生盲の家に生ず。「そは」般若波羅蜜(多)を見るときを欲せざる罪の故なり。説法の人を輕賤するが故に、旃陀羅、及び除糞、死人を擔ぐ等の下賤の家に生じ、説法者を毀皆するが故に、舌なく、聞くことを欲せざるが故に耳なく、手磨きて非を撥くが故に手なし。此の人は心に佛を愛すと雖も愚癡無智を以ての故に、佛母を毀滅し、法藏を破壞す。法藏を破壞するが故に、無佛法衆の處に生ず。

【三】第七問、餓鬼の中に生ずるを説かざる理由如何。

問うて曰はく、三何を以てか餓鬼の中に生ずるとを説かざるや。答へて曰はく、是の法を破壞する者は、多く二煩惱、所謂、瞋恚と愚癡とを以てし、慳貪を發すが故に餓鬼に墮す。此の中には慳無き

が故に説かず。

問うて曰く、(二三) 舍利弗は何を以てか五逆罪と破法の罪と相似たりと言へるや。答へて曰く、舍利弗は是れ聲聞人にして、常に五逆罪の最も重くして、阿鼻地獄に墮し、一切の苦を受くることを聞く。聲聞の人は悉く般若を供養して、大果報を得ることを知らず、又般若を謗毀して、大罪を得ることを知らず、故に五逆を擧げて、相似せりや不やと對問す。相似せずとは、相去ること懸に遠きを以ての故なり。何となれば、此の人は般若を毀謗すれば自ら大利を失し、亦他をして失せしめ、自ら般若を遠離し、亦た他をして遠離せしめ、自ら善根を破し、亦他の善根を破し、自ら邪見の毒を塗り、亦他に邪見の毒を塗り、自ら其の身を失し、亦た他の身を失す。自ら知らざるが故に、法愛に著するが故に自ら破し、亦他をして般若波羅蜜〔多〕を破せしむ。父母の子を愛するが如きは、恩一世に極まり、又因縁を以ての故に愛す。是の般若波羅蜜〔多〕を行ずる菩薩は、無邊世の中に於いて、深心に衆生を愛念す。父母は子を念ずるも、能く一眼を以て與ふるなし。般若波羅蜜〔多〕を行ずる者は、無邊劫中に於て、頭目髓腦を以て、積むこと須彌に過ぎ、以て衆生に施す。佛身より血を出だし、阿羅漢を殺すは、但肉身を壞して法身を壞せず。僧を壞し、是の眷屬を離れ、五法を讚ずるは、般若を壞せず。是の故に五逆罪は、般若波羅蜜〔多〕を壞するに似ることを得ず。般若波羅蜜〔多〕は能く人をして、佛と作らしむ。般若を

【三】 第八問、舍利弗が五逆罪と、破法の罪と相似たりといへる理由如何。

毀る罪は、則ち喩無し。是の故に、般若を破する人は、我は其名字を聽聞することを欲せず。何に況んや眼に是の般若を破する人を見るをや。或は先世の福德の因縁もて、廣學、多聞、富貴、威徳にして、談語を巧にし、諸魔、官屬常に隨逐佐助するが故に、未だ阿鞞跋致を得ざるも、菩薩は、其の多く人の供養し、多くの出家在家の弟子あるを見る。是の故に若し其の名を讃する者あるも、之れを聽聞せず。何に況んや、親附禮拜して、其の教訓を受けんや。何となれば、菩薩は善法を増長し、衆生を利益せんと欲するに、是の人は法を破し、衆生をして大衰濁に墮せしめんと欲し、二事相違するが故なり。

衰濁とは、人の衰を著くるが如し、好衣、美食すと雖も、常に色力なく、勤身に作務すと雖も、財産日に耗し。是の人は一切の佛の上法寶を壞するが故に、身口の業は善なりと雖も、持戒、布施、讀經、善法は終に増長せず、濁れる水泥の面像を見ず、亦飲むに中らざるが如く、是の人は親近に中らず。若し親近せば、則ち喜んで染著す。是の人は法を破するが故に、邪見を以て疑悔し、常に心を擾亂し、先に聞く所の法に深く染み、愛著して般若波羅蜜「多」の相を解せず。故に言はく、「般若波羅蜜「多」は、所有なく、空にして、堅固ならず、罪福あると無し」と。是の如く濁亂して、其の心を蔽ふが故に、清淨實法の相を見ることを得ること能はず。黒性とは、佛法の中には、善法を白と名け、不善法を黒と名く。是の人は常に不善法を積集するが故に不善性を成ず。若し其の語を信受すると有れ

も、其の罪亦同じ。

問うて曰く、(三)舍利弗は何を以てか、是の人の受くる身の大小あるやを問へるに、而も佛は答へ給はざりしや。答へて曰はく、舍利弗は既に罪を受くる時節、及び處所を聞き、其身の大小を聞かず、意に佛の其大身を説きたまふを聞かんと欲す。又帝釋の如きは、身の長け十里にして、樂を受くること遍滿するが故に、罪を受くる身の大にして、苦を受くることも亦多きことを知らんと欲す。(四) 二の因縁あるが故に、佛は説きたまはざりき。一には上に已に其二惡道の中に在りて、久しく苦惱を受くることを説き、今復た其身の大に醜なることを説かば、惡人は或は信せず、信せざる者は、當に久しく劇しき苦を受くべきが故なり。二には若し佛語を信すれば大に憂怖し、憂怖するが故に風發し、熱血を吐きて死す。若くは死に等しとは、設令死せざるも、身常に乾枯し、若くは後世に重罪を受くることを信せざるが故に、佛は説きたまはざりき。舍利弗、佛に白すらく、「今二因縁を以ての故に、説きたまはずと雖も、願はくは、未來世の人を憐愍するが故に説きたまへ」と。佛の言はく、「若し善根、白性、福德の人あらば、依止を作すに足れり」と。白性は、黒性と相違す。依止とは、是の苦を受くることを聞きて、更に敢へて作さず、若し信せずんば、身の大を説くと雖も亦信せず、若し信せば、上の苦を受くるとも久遠なるともを聞いて信すべきに足れり。

【三】 第九問、舍利弗が是の人の受くる身の大小を問へるに佛答へ給はざりし理由如何。

【四】 二因縁あるが故に、佛は地獄の苦を説かず。



尊よ、何等か四なる」と。「是の愚癡の人は魔の爲に使はるるが故に、深般若波羅蜜(多)を毀訾し破壊せんと欲す。是を初因縁と名く。是の愚癡の人は、深法を信ぜず。信ぜず、解せざれば、心清淨なることを得ず。是の第二の因縁の故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜(多)を毀訾し破壊せんと欲す。是の愚癡の人は、惡知識と相知り、心没して懈怠し、堅く五受衆に著す。是の第三の因縁の故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜(多)を毀訾し破壊せんと欲す。是の愚癡の人は、多く瞋恚を行じ、自ら高うして人を輕んず。是の第四の因縁の故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜(多)を毀訾し破壊せんと欲す。須菩提よ、是の四の因縁を以ての故に、愚癡の人は、深般若波羅蜜(多)を毀訾し破壊せんと欲す」と。

問うて曰はく、

口業は是れ法を破せば、何を以てか身口意業を攝すと言ふや。答へて曰はく、意業は是れ口業の本なり。若し口業を攝せんと欲せば、先づ意業を攝す。意業攝するが故に、身口の業も亦善なり。身

口の業善なれば意業も亦善なり。是の中に須菩提は自ら因縁を説けり。「是の諸苦を受くること莫れ、或は佛を見たてまつらざる等」と。世間の人は、身業を以て重しと爲し、口業をもて輕しと爲す。是の故に須菩提は問ふ、

「但だ口業のみを以て、是の如き罪を得るや」と。佛は其意を可とし、示して言はく、「是の愚癡の人は、自ら急事なく、又作者を使ふなく、亦所得なく、而も自らの舌を以ての故に、是の如きの罪を作す。是を大狂の人と爲す。是の狂人は、未來世に我が法中に在りて出家す」と。出家には、五衆あり。受戒

には、七衆あり。是の聲聞の人は、聲聞法、佛法に著し、五百歳を過ぎて後、各各に分別して

- 【三】 第一問、口業は是れ法を破せば、身口業を攝すといふは何故なるか。
- 【四】 有に執する者は、諸法空なりと聞いて、刀の心を傷くるが如くす。
- 【五】 他本には、五部を五百部に作れり。

部あり。是より以來、諸法の決定相を求むるを以ての故に、自ら其の法を執して佛を知らず、解脱の爲の故に法を説くも、而も堅く語言に著す。故に般若の諸法は畢竟空なりと説くを聞けば、刀の心を傷くるが如くにして、皆言はく、「決定の法をば、今云何が無と言はん」と。般若波羅蜜〔多〕の、無得無著の相中に於て得と作し、著相を作す、故に毀皆し破壊して、佛敎に非ずと言ふ。佛は衆生を憐愍したまふが故に、爲に是道、非道を説きたまへり。今般若の中の、是道非道は、盡く一相たり、所謂無相なり。是の故に先づ疑意を生じ、後、心を定む。空法に於て邪見を生じ、邪見、力を得るが故に、大衆の中に於いて、處處に般若波羅蜜〔多〕を毀壞し、般若波羅蜜〔多〕を毀壞するが故に、則ち十方三世諸佛の一切智等の諸の功德を破し、佛の功德を破するが故に、即ち三寶を破し、三寶を破するが故に、則ち世間の樂の因縁、所謂世間の正見を破し、若し世間の正見を破すれば、則ち世間の樂の因縁、所謂四念處、乃至一切種智を破す。是の法を名けて無量無邊福德の因縁と爲す。是の法を破するが故に、無量無邊の罪を得、無量無邊の罪を得るが故に、無量無邊の憂愁苦惱を受く。

【六】 第二問、已に破法の因縁を説く、今それ須菩提が再問せしは何故なるか。

問うて曰く 先に已に破法の因縁、所謂愛著の法等を説けり、須菩提は何を以てか更に問へるや。答へて曰はく、先には論中に説き、今は經中に説く。先には遍ねく説かず、今は遍ねく廣く説く。所謂四因縁なり。是の人は魔の爲に使はれ、若くは魔、若くは魔人來りて、其の心中に入り、其身口を

轉じて般若波羅蜜〔多〕を破せしむ。阿難に佛三たび閻浮提の樂、壽命を問ひたまひしに、亦樂魔身に入るが故に三たび佛に答へたてまつらざりしが如し。阿難は初道を得るすら猶魔に燒さる。何に況んや凡夫人をや。

復次に、(一)魔に四種あり、五衆魔、煩惱魔、死魔、自在天子魔なり。四魔の中に、煩惱魔、自在天子魔多きが故に、般若を信せざらしめ、自ら法に貪著し、他法を憎嫉し、愚癡顛倒するが故に、能く般若波羅蜜〔多〕を破す。有人の言はく、「初の因縁は煩惱魔にして、後のは第四の天子魔なり。是の二種の魔に使はるるが故に、魔の爲に使はると名く。堅く邪見に著し、自法に貪愛し、慧根鈍なるが故に、佛意を識らず、甚深の般若を信せず、受けざるが故に破す。人あり、利根にして、信受するに堪任すれば、魔は又來らず、但惡師の教に隨ふが故に、亦た般若を破す。有る人は惡知識に屬すと雖も、諸の結使薄きが故に、勤め精進して能く般若波羅蜜〔多〕を信ず。是の故に二事合して一と爲る。亦惡知識に屬し、亦深く五衆の結使に著し、厚く懈怠の心を生ず。是の故に般若を信せず。是の人は、世世に多く瞋恚を集めて、其性を成す。瞋相は是れ不信の相なり。是の人は剛強にして自ら高うし、説法の人を輕賤して、我が智徳の是の如きすら尙ほ解すること能はず、況んや汝愚賤にして而も能く之を知らんや」と。是の瞋恚憍慢多きを以ての故に、般若波羅蜜〔多〕を破するなり。

【七】阿難、魔に燒かれて、佛の間に答へざりし因縁。

【八】四種の魔。

須菩提、佛に白して言さく、「是の深般若波羅蜜(多)をば、勤めて精進せず、不善根を種ふ、惡友を相得る人は、信じ難く解し難きや。」佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)をば、勤めて精進せず、不善根を種ふ、惡友を相得る人は、信じ難く解し難し。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は、云何が甚深にして、信じ難く解し難きや。」須菩提よ、色は縛せず、解せず。何を以ての故に、無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識は縛せず、解せず。何となれば無所有の性は、是れ受想行識なればなり。檀波羅蜜(多)は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ檀波羅蜜(多)なればなり。尸羅波羅蜜(多)は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ尸羅波羅蜜(多)なればなり。羼提波羅蜜(多)は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ羼提波羅蜜(多)なればなり。毗梨耶波羅蜜(多)は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ毗梨耶波羅蜜(多)なればなり。禪波羅蜜(多)は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ禪波羅蜜(多)なればなり。般若波羅蜜(多)は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ般若波羅蜜(多)なればなり。須菩提よ、内空は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ内空なればなり。乃至無法有法空は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ四念處は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ四念處なればなり。乃至、一切智、一切種智は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ一切種智なればなり。須菩提よ、色の本際(ほんさい)は縛せず、解せず。何となれば、本際(ほんさい)の無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識乃至一切種智の本際(ほんさい)は縛せず、解せず。何となれば、本際(ほんさい)の無所有の性は、是れ一切種智なればなり。須菩提よ、色の後際(ごさい)は縛せず、解せず。何となれば、後際(ごさい)の無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識乃至一切種智の後際(ごさい)は縛せず、解せず。何となれば、後際(ごさい)の無所有の性は、是れ一切種智なればなり。須菩提よ、現在の色は縛せず、解せず。何となれば、現在の無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識乃至一切種智の現在の無所有の性は、是れ一切種智なればなり。

【九】般若の信じ難く、解し難きを説く。

須菩提、佛に白して言さく、「是の深般若波羅蜜(多)をば、勤めて精進せず、不善根を種ふ、惡友を相得る人は、信じ難く解し難きや。」佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)をば、勤めて精進せず、不善根を種ふ、惡友を相得る人は、信じ難く解し難し。」



故に、懈怠して惡知識に隨ひ、不善根を種うるが故に、信じ難く、上と相違するを名けて、般若波羅蜜(多)を信ずと爲す」と。佛は其の言を可としたまへり。須菩提、更に是の般若波羅蜜(多)を問ふ、「云何が甚深なるが故に信じ難きや」と。佛答へたまはく、「(一)色等の諸法は縛すること無く、解くこと無し。三毒は是れ縛にして、三解脱門は是れ解なり。是の三毒等の諸の煩惱は虚誑不實にして、和合の因縁より生じ、自性無きが故に、縛すること無し。縛すること無きが故に、解くこと無し。是の三解脱門を破するが故に、三解脱門も亦た空なり」と。

復次に、相を取り法に著するは顛倒なり。一切の煩惱等は是れ縛なり。縛法若し實に定んで自性あらば、則ち解くべからず。若し實に定んで有ならば、誰か能く破する者ぞ。若し破せば即ち斷滅の中に墮す。若し取相顛倒等の諸の煩惱は、虚誑不實にして亦斷する所無し。

【一〇】 無縛無解の理由を説く。

復次に、一切の心心數法は、憶想分別して相を取り、皆緣中に縛在す。若し諸法實相の中に入れば、皆是れ虚誑なることを知る。上品の中に説くが如し。「心清淨の相とは、即ち是れ心相に非ず。是の縛は空なるが故に、解も亦空なり」と。是の如き等の種種の因縁の故に、色等の諸法は縛せず、解せず。此の中に佛、自ら因縁を説きたまはく、「色等の諸法は、有爲の作法にして、因縁の和合より生ずるが故に、定性あること無きが故に、無所有の性は是れ色等の諸法なりと説く」と。

復次に、色等の諸法は、三世の中に縛せず、解せず。三世を破する中に説くが如し、「是の時、須菩提は、般若波羅蜜〔多〕の甚深に非ず、甚深ならざるに非ざることを知る」と。後品の中に説くが如し。「若し般若波羅蜜〔多〕は甚深なりと謂はば、則ち般若波羅蜜〔多〕を遠離す」と。是を以ての故に、佛に白して言さく、「世尊よ、悪人は、般若波羅蜜〔多〕の甚深なるを以て解し難し。〔爾に〕非ざるを善人と謂ふ。悪人は般若と相應せず、一心に勤めて精進せず、般若波羅蜜〔多〕を解する善根を種ゑず、随つて般若を破壊す。悪師、懈怠の者は、世間の樂に著して、出世間を願はず。此の如きの人は、若し精進ありとも、少うして言ふに足らず。諸の煩惱、心を亂すが故に、喜んで善不善の法相を忘れ、憍慢を破せず、邪見戲論を除かざるが故に、諸法實相を求むれども、諸法の相の好醜を分別することを知らず。是を巧便の慧無しと名く。是の如き等の惡法あるが故に、是の人は、甚深の般若を解し難し」と。佛、其の意を可として言はく、「是の如し、是の如し」と。

問うて曰はく、「須菩提の說の中には、魔事あること無し。佛說の中に何を以てか魔事を益すや。答へて曰はく、須菩提は直に内外の因縁を説いて具足せず。佛は今具足して説きたまふが故に言はく、「是の人は魔の爲に使はる」と。佛は更に甚深にして解し難き相を説かんと欲して、須菩提に告げたまはく、「色等の諸法淨なるが故に、果も亦淨なり。四念處は是れ色等の諸法の果なり。何となれ

【二】 第三問、佛說中に魔事を益す理由如何。

ば、色等の諸法は、不淨無常等と觀すれば、即ち身念處を得ればなり」と。餘念は上に説くが如し。是の中、四念處の性は無漏にして煩惱を斷じ、涅槃の爲の故に清淨なり。果、淨なるを見るが故に、因も亦淨なるを知る。

問うて曰はく、(三)先には色の不淨無常なり等を觀じて、身念處を得と説けり。云何が、果淨なるが故に因も亦淨なりと言ふや。答へて曰はく、(三)不淨觀は是れ初入の門にして實觀に非ず。是の故に十六聖行に入らず。是の十六行の中には、無常・苦・空・無我を觀じて不淨を觀せず。淨顛倒の故に姪欲を生じ、淨を破するが故に不淨と言ふ、是れ實に非ず。是の故に不淨は十六聖行に入らず。但是れ解を得るの觀なり。是の般若の中には、常を觀せず、無常を觀せず、淨を觀せず、不淨等を觀せざれば、常・無常・淨・不淨・空・實等の諸觀戲論滅す。是れ色の實相なり。色の實相淨なるが故に果も亦淨なり。

【三】 第四問、先に色の不淨無常を觀じて、身念處を得と説き、今反つて果淨なるが故に、因も亦淨なりといふ理由如何。

【三】 不淨觀は實觀にあらざるが故に十六聖行に入らず。

復次に、佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、「般若波羅蜜(多)は、虚空の如く、畢竟清淨にして、染汗する所なし。是の般若波羅蜜(多)は、色等の諸法實相にして、不生、不滅なるを觀じ、六波羅蜜(多)を行じ、四念處等を修す。是の如くにして般若波羅蜜(多)を得べし。是の般若波羅蜜(多)に三種の因縁あり。正觀と、正行と、正修となり。是の故に言はく、「般若波羅蜜(多)淨なるが故に、

色等の諸法淨なり。色等の諸法淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は淨なり。所以は何となれば、色等の諸法と般若波羅蜜(多)とは、實相の中に無二・無別・不異・不別にして、不離不散なるが故に、不斷・不壞なればなり」と。復次に、我が法は、十方三世の中に求むれども不可得なり。五衆の中に於いて、但假名の衆生のみ有るが如く、乃至知者・見者も亦是の如し、我が空・無所有なるが故に、清淨なるが如く、一切法も亦是の如し。

經

復次に、(四)須菩提よ、姪は淨なるが故に色は淨なり。乃至一切種智は淨なり。何となれば、姪淨と色淨乃至一切種智淨とは、不二不別なればなり。瞋・癡は淨なるが故に色は淨なり。乃至一切種智は淨なり。何となれば、瞋癡淨と色淨乃至一切種智淨とは、不二、不別、無斷、無壞なればなり。

復次に、(五)須菩提よ、無明淨なるが故に諸行淨なり。諸行淨なるが故に識淨なり。識淨なるが故に名色淨なり。名色淨なるが故に六入淨なり。六入淨なるが故に觸淨なり。觸淨なるが故に受淨なり。受淨なるが故に愛淨なり。愛淨なるが故に取淨なり。取淨なるが故に有淨なり。有淨なるが故に生淨なり。生淨なるが故に老死淨なり。老死淨なるが故に般若波羅蜜(多)淨なり。般若波羅蜜(多)淨なるが故に乃至檀波羅蜜(多)淨なり。檀波羅蜜(多)淨なるが故に內空淨なり。內空淨なるが故に乃至無法有法空淨なり。無法有法空淨なるが故に四念處淨なり。四念處淨なるが故に乃至一切智淨なり。一切智淨なるが故に一切種智淨なり。何となれば、是の一切智の淨と一切種智の淨とは、不二・不別、無斷、無壞なればなり。

【四】更に貪瞋癡の三毒、雜染法等に就て淨を明す。  
 【五】十二因縁の法を生死の染法なりと説くも、實性不可得にして淨ならざるなき所以を述ぶ。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)淨なるが故に色淨なり。乃至般若波羅蜜(多)淨なるが故に一切智淨なり。是の般若波羅蜜(多)の淨と一切智の淨とは、不二・不別なればなり。須菩提よ、禪波羅蜜(多)淨なるが故に、乃至一切智淨なり。毗梨耶波羅蜜(多)、屬提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)淨なるが故に、乃至一切智淨なり。內空淨なるが故に、乃至一切智淨なり。四念處淨なるが故に、乃至一切智淨なり。

復次に、須菩提よ、一切智淨なるが故に乃至般若波羅蜜(多)淨なり。是の如きの一は一は先に説けるが如し。復次に、須菩提よ、有爲淨なるが故に無爲淨なり。何となれば、有爲の淨と無爲の淨とは、不二・不別・無斷・無壞なればなり。

復次に、須菩提よ、過去淨なるが故に、未來現在淨なり。未來淨なるが故に、過去現在淨なり。現在淨なるが故に、過去未來は淨なり。何となれば、現在の淨と過去未來の淨とは、不二・不別・無斷・無壞なればなり。

論

問うて曰はく、(二六)佛は、「三毒は是れ垢穢にして不淨なり」と説きた

まへり。此の中には、云何が姪欲等淨なるが故に、色等も亦た淨なりと言ふや。答へて曰はく、佛は「三毒の實性、清淨なるが故に、色等の諸法も、亦清淨なり」と説きたまへり。三毒も淨、色等も淨なるが故に、不二不別なり。廣く三毒の清淨及び三毒清淨の果報、因縁を説かんと欲するが故に、無明淨なるが故に諸行も亦淨なりと説く。(二七)無明淨なりとは、所謂無明は畢竟空なり。無明を破する十喻の中に説くが如し。十二因縁、乃至一切種智も亦是の如し。故に色等無明等の諸法は清淨な

【二六】 第五問、三毒は不淨垢穢なりとは、佛の常説なり。今それ姪欲等淨なるが故に、色等も亦た淨なりといふ理由如何。

【二七】 無明淨なりの義解。

り。故に般若波羅蜜(多)は清淨なり。般若波羅蜜(多)清淨なるが故に、諸の菩薩の行ずる所の法、所謂禪波羅蜜(多)、乃至一切種智清淨なり。禪波羅蜜(多)等の諸法も亦た是の如し。

復次に、十八空を用ふるが故に、色等乃至一切種智は空なり。乃至一切種智空なるが故に、十八空も亦空なり。一切種智は十八空を離れず、十八空は一切種智を離れず、是の故に不二不別と言ふ。空とは、即ち是れ清淨なり。今、色、乃至一切種智の一法を首と爲し、餘法を各各首と爲さんに、展轉して皆清淨なり。

復次に、諸法は多なり、無量なるが故に、略して有爲無爲と説く。有爲法の實相は即ち是れ無爲法なり。如し淨行の者は諸法の中に於て、常樂我淨を求むるに不可得なり。若し不可得ならば、是れ實に有爲法を知れりと爲す。實に不可得を知れば、即ち是れ無爲法なり。是の故に、有爲法淨なるが故に、無爲法清淨なりと説く。

復次に、有爲法に因るが故に無爲法を知る。聖人は是の無爲法を得て、有爲法の相を説く。是の故に、「有爲法清淨なるが故に無爲法清淨に、無爲法清淨なるが故に、有爲法清淨なり」と説く。有爲法は三世の中に在るが故に、過去世清淨なるが故に未來世も亦清淨、未來世清淨なるが故に過去世も亦清淨なりと説く。何となれば、如し過去世は、破壞散滅して所有無きが故に空なり。未來世は未だ生ぜず、未だ有らざるが故に空なり。三世無きが故に現在も亦無し。何となれば、先有り後有

りて現在有ることを知ればなり。

復次に、有爲法は念念生滅するが故に住する時無く、住する時無きが故に現在世無し。三世、空なるが故に、有爲法は空なり。有爲法は空なるが故に、無爲法は空なり。空なれば即ち是れ畢竟清淨にして、破せず、壞せず、戲論無きこと虚空の如し。是の如く般若波羅蜜(多)は、畢竟清淨にして、三世諸佛の法藏なり。是を破して能く實相般若の言說文字を宣示するが故に地獄に墮す。

問うて曰はく、(一九)若し般若を信せざれば、地獄に墮し、信ずる者は佛と作ることを得。若し五逆の罪、破戒邪見懈怠の人有らんに、是の般若を信せば、是の人は佛と作ることを得るや不や。復た持戒精進の者有つて而も般若を信せざらんに、是は云何が地獄に墮するや。答へて曰はく、(二〇)般若を破するに二種あり。一には、佛口づから説きたまへる所を弟子誦習し、書して經卷を作るに、愚人は謗りて言ふ、(三一)是れ佛説に非ず、是れ魔、若しくは魔民の作る所、亦是れ斷滅の邪見の人の手筆し、莊嚴せる口力の者の説なり」と。或は言く、「是れ佛説なりと雖も、其中の處處は餘人(是を)増益す」と。或は有人は、著心もて分別して、相を取り、般若波羅蜜(多)を説く。口に空法を説くも而も心は有に著す。初破の者は大地獄に墮つ。〔そは〕

- 【一八】 畢竟空を破して、文字を宣示すれば地獄に墮つ。
- 【一九】 第六問、若し五逆罪等を犯すも般若を信せば、成佛すべきや。又持戒精進等を修するも、般若を信せざれば地獄に墮すべきや如何。
- 【二〇】 般若を破するに二種あり。
- 【三一】 般若非佛説の提唱。

り、般若波羅蜜(多)を説く。口に空法を説くも而も心は有に著す。初破の者は大地獄に墮つ。〔そは〕

聖人の般若を説く意を得ざるが故なり。第二には、著心もて論議する者を破す。是れを名けて般若を破すと爲さず。(三) 調遣は佛身より血を出だし、祇域も亦佛身より血を出だせり。同じく血を出だすと雖も、心異なるが故に、一人は罪を得、一人は福を得るが如し。(三) 畫して佛像を作り、一人は像を好まざるを以ての故に壞し、一人は悪心を以ての故に破せんに、心同じからざるを以ての故に、一人は福を得、一人は罪を得るが如く、般若波羅蜜〔多〕を破する者も、亦た是の如し。

復次に、或は有る人は般若を破して、瞋らず、佛を輕んぜずと雖も、自ら心を用ゐて是の甚深の法を憶想分別すらく、「一切智人の所説には、應に深妙の法あるべし、云何が都て空なりと言はん。佛は著心無きを以て、衆生を度せんが爲の故に、法を説きたまへり」と。是の人は著心を以て相を取るが故に口業を起し、般若を毀訾し破壞し、能く身業を起し、手に塵き、指に撥き、毀りて去らしむるに非ず。二種の不信と相違するが故に(四) 二種の信と名く。一には般若の實義を知り、信じて説の如き果報を得、二には、經卷の言語文字を信ずることは、功德を得ること少く、邪見の罪重きが故に、持戒等の身口の業好しと雖も、皆邪見惡心に墮す。佛自ら譬喩を説きたまへるが如し。苦種を種うれば、復四大所成たりと雖も、皆苦味と作るが如く、邪見の人も亦是

【三】 調遣 (Devatā) と祇域 (Jiva) は、同じく佛身より血を出せしも、一人は福を得、一人は罪を得たり。

【三】 佛像を破壞して、一人は福を得、一人は罪を得。

【四】 二種の信 —— (一) 般若の實義を信ず、(二) 經卷の言語文字を信ず。





舍利弗の言はく、「云何が是の淨は無知なりや」と。佛の言はく、「諸法は鈍なるが故に是の淨は無知なり」と。「世尊よ、色は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗言さく、「云何が色は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「色の自性は空なるが故に、色は無知にして是の淨は淨なり」と。「受想行識は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「云何が受想行識は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「受想行識の自性は空なるが故に、無知にして是の淨は淨なり」と。

「世尊よ、一切法は淨なるが故に、是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故」に。舍利弗の言さく、「云何が一切法は淨なるが故に、是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故に、一切法淨にして是の淨は淨なり」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は薩婆若に於て益なく損なきや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「云何が般若波羅蜜(多)は薩婆若に於て益なく損なきや」と。佛の言はく、「法は常住の相なるが故に、般若波羅蜜(多)は薩婆若に於て益なく損なきや」と。佛の言はく、「云何が般若波羅蜜(多)の淨は諸法に於て受くる所無きや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言はく、「云何が般若波羅蜜(多)の淨は、諸法に於て受くる所無し」と。

【二七】 二種の淨——(一)智慧淨、(二)緣法淨。

釋して曰く、是の淨は甚深なりとは、淨に二種あり。一には智慧の淨、二には所緣の法の淨なり。此の二淨は相持せり。離智淨と無緣淨、離緣淨と無智淨となり。何となれば、一切の心心數法は緣より生ず。若し緣無ければ則ち智生せず。譬へば、薪火無ければ、然ゆる所無きが如し。智有る

論

淨なり。此の二淨は相持せり。離智淨と無緣淨、離緣淨と無智淨となり。何となれば、一切の心心數法は緣より生ず。若し緣無ければ則ち智生せず。譬へば、薪火無ければ、然ゆる所無きが如し。智有る

を以ての故に、縁を淨と爲すことを知る。無智なれば、則ち縁の淨なることを知らず。此の中に智淨と縁淨と相待するは、世間の常法なり。是の中には離智離縁と説く。諸法の實相は本自ら清淨なり、心心數法を所縁と爲して、則ち染汗不清淨なり。譬へば、百種的美食も毒と同器なれば、則ち食すべからざるが如し。〔二六〕諸法實相は常に淨にして、佛の所作に非ず、菩薩の所作に非ず、辟支佛、聲聞、一切の凡夫の所作に非ず。有佛にも、無佛にも、常住にして、不壞の相なり。顛倒虛誑の法及び果報の中に在れば則ち染汗不清淨なり。是の清淨に種種の名字あり。或は如法性實際と名け、或は般若波羅蜜〔多〕と名け、或は道と名け、或は無生無滅空無相無作無知無得と名け、或は畢竟空等と名く。是の如きの無量無邊の名字有り。舍利弗は是の般若波羅蜜〔多〕の相を觀じ、見る可らず、聞く可らず、説く可らず、破壞す可らずと雖も、而も誹謗して無量の罪を得、正行を信受して、則ち無上の果報を得。舍利弗は希有の歡喜心を發し、而も佛に白して言さく、「世尊よ、是の淨は甚深なりや」と。佛答へたまはく、「汝が見る所の者は以て希有と爲すも、實相の中には復た汝が見る所に過ぎたり。一切の法中、畢竟淨にして、著する所なく、乃至淨體にも亦著せず、是を畢竟清淨と名く」と。

復次に、清淨の主は、所謂十方三世の諸佛なり。諸佛にも亦著せざるは、是れ清淨なり。是の故に畢竟清淨なり。故に是の清淨なる般若波羅蜜〔多〕は、能く一切の賢聖をして無邊の苦を盡さしむ。

是の大利益あるも、而も亦た是の般若波羅蜜(多)に著せず。是の如き無量の因縁あり。畢竟清淨にして、是の淨は甚深なり。舍利弗問ふ、「何の法が畢竟清淨なるが故に、是の淨は甚深なりや」と。佛答へたまはく、「色等の諸法は清淨なるが故に、是の淨は甚深なり。何となれば、色等の諸法は、本末因果、清淨なるが故に、是の淨は甚深なり」と。上の品中に説くが如し。菩薩は色等の法中に於て、觀行を斷するが故に、是の如き清淨を得。是を以ての故に名色等は清淨なり。是の淨は能く一切法中の戲論を破す。無明は能く畢竟空の智慧光明を與ふ。是の故に淨明なりと言ふ。檀波羅蜜(多)等の諸の菩薩の妙法を行するが故に、是の淨の明を得。是の淨は能く有餘涅槃を與ふるが故に、是を淨の明と言ふ。今、無餘涅槃を與ふるが故に、是の淨は相續せずと言ふ。

先づ空空等の三三昧を以て、諸の善法を捨て、後、壽命自然に盡るが故に、色等の五衆は去らず、亦相續せず。故に淨は相續せず。百八の諸の煩惱、遮覆し汗染すること能はずして淨なるが故に、淨にして無垢なりと言ふ。(二五)かく諸法實相不二の道を行じ、苦法忍より乃ち十五心に至るまで、是を得と名く。(二六)第十六心には沙門果を得、是を著と名く。著者の著は墮落せず、得の別名なり。

復次に、六波羅蜜(多)を行するより、乃ち柔順忍を生ずるに至るまで、是を得と名く。能く無生法忍を生じて、菩薩の位に入る、是を著と名く。是の清淨法の中に無所得心を用ふ。此の二事無きが故

【二五】 得の義解。  
 【二六】 著の義解。

に、無得、無著と名く。是の如き法を行じて、一切法の畢竟空を知る。畢竟空なるが故に、相を取らず、相を取らざるが故に、三種の業を起さず作さず。三種の業を作さざるが故に、一切の世間は無生なり。世間とは所謂三界なり。此の中、二因縁の故に不生なり。一には三種の生業は起らざるが故に、二には三界の自性は不可得なるが故なり。此の中に佛は總じて因縁を説きたまへり。所謂三界の自性は空なり。是の故に三界の色等の諸法の自性は不可得なりと説く。是の淨は無知なり諸法鈍なるが故に。上の品中に説くが如し。一切諸法の性は常に不生なり。不生なるが故に不可得なり、不可得なるが故に畢竟清淨なり。舍利弗は聲聞の波羅蜜(多)を得、佛は一切智人たり。是の二人の問答なるが故に、諸の菩薩は是の般若波羅蜜(多)に貪著す。是の故に舍利弗は其貪著を斷せんと欲す。かるが故に説いて言く、一、世尊よ、般若波羅蜜(多)には、是の如き力ありと雖も、畢竟清淨なるが故に、薩婆若に於ても、亦益なく損なきこと、夢幻中に得失ありと雖も、亦益なく損なきが如く、虚空の畢竟清淨にして所有無く、亦是れ虚空に因りて成濟する所あるも、亦空にして所作ありと言ふことを得ず、亦空にして所益なしと言ふことを得ざるが如し。(三)檀波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)に因りて所作あり。是の故に般若波羅蜜(多)は益無く損無しと言ふ。般若波羅蜜(多)は、一切法を觀じて、不淨を失すること有り。無常苦空無我不生不滅非不生非不滅等の種種の因縁を讚歎して、諸觀の戲論を滅し、語言の道を斷ず。是の故に、般若

【三】檀波羅蜜多は般若波羅蜜多によりて所作あり。

波羅蜜(多)は清淨なりと説くなり。諸法に於て受くる所無く、諸觀の戲論を滅し、語言の道を斷ずれば、即ち是れ法の性相に入る。是の故に、此の中に、「法性は不動なるが故に」と説けり。

釋

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我、淨なるが故に、色、淨なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提言さく、「何の因縁を以てか、我淨なるが故に、色淨は畢竟淨なるや」と。佛言はく、「我は所有無きが故に、色は所有なくして、畢竟淨なり」と。世尊よ、我、淨なるが故に、受想行識は淨なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提言さく、「何の因縁の故に、我淨なれば受想行識の淨は畢竟淨なりや」と。佛言はく、「我は所有無きが故に、受想行識は所有なく、畢竟淨なり」と。世尊よ、我、淨なるが故に、檀波羅蜜(多)は淨なりや。我、淨なるが故に、尸羅波羅蜜(多)は淨なりや。我、淨なるが故に、羼提波羅蜜(多)は淨なりや。我、淨なるが故に、毗梨耶波羅蜜(多)は淨なりや。我、淨なるが故に、禪波羅蜜(多)は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、四念處は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、乃至八聖道分は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、佛の十力は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、乃至十八共法は淨なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

須菩提言さく、「何の因縁の故に、我、淨なれば檀波羅蜜(多)淨なりや。我、淨なれば乃至十八共法は淨なりや」と。佛言はく、「我は所有無きが故に、檀波羅蜜(多)は所有無きが故に淨なり。乃至十八共法は所有なきが故に淨なり」と。

世尊よ、我、淨なるが故に、須陀洹果は淨なりや。我、淨なるが故に、斯陀含果は淨なりや。我、淨なるが故に、阿那含

果は淨なりや。我、淨なるが故に、阿羅漢果は淨なりや。我、淨なるが故に、辟支佛道は淨なりや。我、淨なるが故に、佛道は淨なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提言さく、「何の因縁の故に、我淨なれば須陀洹果は淨、斯陀含果は淨、阿那含果は淨、阿羅漢果は淨、辟支佛道は淨、佛道は淨なりや」と。佛言はく、「自相空なるが故なり」と。「世尊よ、我は淨なるが故に、一切智は淨なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

須菩提言さく、「何の因縁の故に、我、淨なるが故に、一切智淨なりや」と。佛言はく、「無相無念なるが故なり」と。「世尊よ、二淨を以ての故に無得、無著なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提言さく、「何の因縁の故に、二淨を以ての故に、無得、無著は是れ畢竟淨なりや」と。佛言はく、「垢無く淨なきが故なり」と。「世尊よ、我は無邊なるが故に、色は淨、受想行識は淨なりや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提言さく、「何の因縁の故に、我は無邊なるが故に、色は淨、受想行識は淨なりや」と。佛言はく、「畢竟空、無始空なるが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く知らば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)と名くるや」と。佛言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提言さく、「何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)と名くるや」と。佛言はく、「道種を知るが故なり」と。

「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行するに、方便力を以ての故に、是の念を作すや。色は色を知らず、受想行識は受想行識を知らず、過去法は過去法を知らず、未來法は未來法を知らず、現在法は現在法を知らず」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行するや、方便力を以ての故に是の念を作さず。我れ彼の人に施與す。我れ戒を持すること、是の如く戒を持す。我れ忍を修すると、是の如く忍を修す。我れ精進すると、是の如く精進す。我れ禪に入ると、是の如く禪に入る。我れ智慧を修すること、是の如く智慧を修す。我れ福德を得ること、是の如く福德を得。我れ當に菩薩

の法位の中に入るべし。我れ當に佛世界を淨め、衆生を成就すべし。當に一切種智を得べし」と。

須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行するに、方便力を以ての故に、諸の憶想分別なし。内空・外空・内外空・

空空・大空・第一義空・有爲空・無爲空・無始空・散空・性空・諸法空・自相空の故に、須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜

〔多〕を行するに、方便力の故に、礙する所無しと名くと。

論

釋して曰はく、佛は初に須菩提に命じて般若を説かしたまへり。若し所説あるも其因縁を求むべからず。若し餘人の所説は、當に因縁を求むべし。舍利弗、已に清淨の相を問ひ、佛、證を作したまへり。今、須菩提、清淨の相を説くに、佛、亦證を作したまふ。我は

淨なるが故に五衆は淨なりとは、我の畢竟所有無く不可得なるが如く、五衆も亦是の如し。畢竟空なれば即ち是れ我は清淨なり。五衆の清淨は解し

難し。我空は解し易く、五衆空は〔解し〕難し。是の故に、解し易きを以て解し難きに喩ふ。六波羅蜜

〔多〕より、乃ち十八不共法に至り、須陀洹果より、乃ち佛道に至るも、亦た是の如し。我は淨なるが

故に、是の法も亦淨なり。

問うて曰はく、三三上に我は所有無きが故に、色乃至十八不共法も、亦所有無しと言へり。我は何を

以てか、須陀洹果乃至佛道は、自相空なりと説くや。答へて曰はく、我は和合の因縁に従つて假名

生じ、無我の中に於て我顛倒あり。是の故に、我は虚妄にして所有無しと説く。五衆は著處の因縁を

【三】第七問、須陀洹果乃至佛道は、自相空なりと説く理由如何。

以ての故に所有無し。檀波羅蜜(多)等の諸法は、善なりと雖も、是れ有爲の作法にして、菩薩の著する所なるが故に、所有無しと言ふ。須陀洹果等は是れ無爲法なり。無爲法は自相空にして、所謂無生無滅・無住・無異なるが故に、是の故に所有無しと説かず、但自相空なりと説くなり。

復次に、有爲法の中には、邪行多きが故に、所有無しと説き、無爲法の中には、無生無滅にして、邪行無きが故に、自相空なりと説く。我、淨なれば一切種智淨なりとは、菩薩は深く著するを以ての故に、無相無念なり。(三) 無相とは、是れ無相三昧なり、無念とは、無相三昧に於ても、亦た念せざるなり。今、須菩提は、般若波羅蜜(多)の眞に清淨なることを知るが故に、佛に白さく、二淨を用ふるが故に、無得、無著なりと。清淨に二種あり。(四) 一には二法の清淨を用る、二には不二法の清淨を用ふ。二法の清淨とは、是れ名字の清淨なり。不二法の清淨を用ふとは、是れ眞の清淨なり。佛の言はく、「諸法は畢竟空の相なり。云何が一法清淨なるを以て、得あり著あらんや」と。此の中に因縁を説く。所謂一切法は無垢無淨なり。一二の清淨の中に、是は垢、是は淨と分別す。我、無邊なるが故に五衆清淨なりとは、我は空なり、空なるが故に無邊なるが如く、五衆も亦是の如し。

問うて曰はく、常に、「畢竟清淨なるが故に」と言ふ。今何を以てか、畢竟空・無始空と言ふや。

【三】 無相無念の義解。

【四】 二種の清淨——(一)二法の清淨(二)不二法の清淨。

【五】 第八間、常に畢竟清淨なるが故にと言ひ、今、畢竟空・無始空と言ふは何故なるか。

答へて曰く、畢竟空とは即ち是れ畢竟清淨なり。人は空を畏るるを以ての故に清淨と言ふ。此の中に「我は無邊なり」と説く。我とは、即ち衆生にして、衆生は空なり。何となれや、無始空の故なり。説いて曰はく、能く是の如く知る、是を般若と名くとは、能く衆生空・法空・一切法畢竟空なるを以て、是を般若波羅蜜〔多〕と名く。般若波羅蜜〔多〕は即ち是れ畢竟清淨なり。佛は常に畢竟空なりと答へたまへり。是の故に問ふ、「若し畢竟空ならば、云何が菩薩の能く是の如く知る、是を菩薩の般若と名くと言ふや」と。佛の言はく、「道理を知るが故なり」と。菩薩は一切法の畢竟空を知るに雖も衆生をして此の畢竟空を得、著心を遠離せしめんと欲す。畢竟空は、但著心を破せんが爲の故に説く。是れ實定には非ず。爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若を行する者は是の念を作す。色は色を知らず等は佛意にして、般若には定相なく、但道種智を以ての故に、分別して説き、菩薩をして般若を行せしめ、方便あるが故に法は畢竟空なりと雖も、亦是の如く知ると。色は色法を知らず等とは、一切法を觀するに、畢竟空にして、唯能觀の智慧のみ在ること有り。畢竟空を以て、衆生の著心を引導し、畢竟空に入らしむべからず」と。佛答へたまはく、「若し菩薩、般若を行じ、方便ありて、能く外法を觀するに畢竟空なり」と。色は色等を知らずとは、内に自ら觀ず、内心も亦是の如し、方便力の故なり。若し檀を行する時は是の念を作さず。「我は施與し、彼は是れ施を受く」と。須菩提の「色は色等を知らず」とは、一切法は空

【三】畢竟空は畢竟清淨と同義なり。

なるが故に相知らず。相知らざるが故に、所作無く二事を破せり。所謂受者と、施す所の物となり。今は與ふる者を破す。乃至我が修する一切禪智も亦是の如し。此の中に因縁を説く。菩薩の般若を行するは方便の故に、是の如き分別無し。内空を以ての故に、乃至自相空、是の十三空は諸法を破し盡せり。後の五種の空は、總相の説なり。是を菩薩の無所礙と名く。無所礙とは、是の諸の空を以て、一切の法に於いて、礙する所無きなり。

# 卷の第六十四

## 歎淨品第四十二の餘を釋す。

經

爾の時に、釋提桓因、須菩提に問ふ、「云何が是れ菩薩道を求むる善男子の礙法なるや」と。須菩提、釋提桓因に報へて言はく、「橋戸迦よ、菩薩道を求むる善男子善女人ありて心相を取る。所謂、檀波羅蜜(多)の相を取り、尸羅波羅蜜(多)の相、羼提波羅蜜(多)の相、毗梨耶波羅蜜(多)の相、禪波羅蜜(多)の相、般若波羅蜜(多)の相を取り、内空の相、外空、内外空乃至無法有法空の相を取り、四念處の相乃至二聖道分の相を取り、佛の十方の相乃至十八不共法の相を取り、諸佛の相を取り、諸佛の種々たまふ善根の相を取り、是の一切の和合の相を取り、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。橋戸迦よ、是を菩薩道を行すること能はず。何となれば、橋戸迦よ、是の色相は廻向すべからず、受想行識の礙無くして般若波羅蜜(多)を行すべからず、乃至一切種智の相は廻向すべからざればなり。」

【一】礙相を明して無礙の眞般若行を明す。

復次に、橋戸迦よ、若し菩薩摩訶薩は他人に阿耨多羅三藐三菩提を示教し、利し喜ばしめんとせば、一切諸法の實相を示教し、利し喜ばしむ。若し菩薩道を求むる善男子善女人は、檀波羅蜜(多)を行する時、是の分別を作して言ふべからず。「我は施與し、我は戒を持し、我は忍辱し、我は精進し、我は禪に入り、我は智慧を修し、我は内空・外空・内外空を行じ、乃至、我は無法有法空を行し、我は四念處を修し、乃至、我は阿耨多羅三藐三菩提を行す」と。善男子、善女人は、應に是の如く、他人に阿耨多羅三藐三菩提を示教し、利喜せしむべし。若し是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を示教し、利喜せば、

自ら錯謬無く、亦佛の所説の法の如く、示教し利喜せば、是の善男子善女人をして、一切の癡法を遠離せしむ」と。爾の時  
に、佛、須菩提に語りたまはく、「善哉、汝が諸の菩薩の爲めに、諸の癡法を説けるが如し。須菩提よ、汝今更に聽け、  
我れ微細に癡相を説かん。須菩提よ、一心に好く聽け」と。佛、須菩提に告げたまはく、「善男子善女人あり、阿耨多羅三藐  
三菩提心を發して、相を取り、諸佛を念す。須菩提よ、有るべき所の相は、皆是れ癡相なり。又諸佛の初發意より乃至法住  
まで、其の中間に於いて、所有る善根に於て、相を取りて憶念し、相を取り憶念し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、  
須菩提よ、有るべき所の相は、皆是れ癡相なり。又諸佛及び弟子の所有る善根、及び餘の衆生の善根に於いて相を取りて、  
阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。有るべき所の相は、皆是れ癡相なり。何となれば、相を取りて諸佛を憶念すべからず。亦た  
應に相を取りて、諸佛の善根を念すべからざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は甚深なり」と。佛の言はく、「一切法は、常に離なるが故な  
り」と。須菩提言さく、「世尊よ、我は當に般若波羅蜜(多)を禮すべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の般若波羅蜜  
(多)は無起無作なるが故に、能く得る者あること無し」と。須菩提言さく、「世尊よ、一切の諸法も亦不可得なりや」と。佛の  
言はく、「一切法は一性にして二性に非ず。須菩提よ、是の一法性は是も亦無性なり。是の無性は即ち是れ性なり。是の性  
は不起・不作なり。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は若し諸法の一性、所謂無性・無起・無作なることを知らば、則ち一切の  
癡相を遠離す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は、知り難く解し難きや」と。佛の言はく、  
「汝が言ふ所の如く、是の般若波羅蜜(多)は、見る者なく、聞く者無く、知る者無く、識る者無く、得る者無し」と。「世尊  
よ、是の般若波羅蜜(多)は不可思議なりや」と。佛の言はく、「汝が言ふ所の如し。是の般若波羅蜜(多)は心より生ぜず、受  
想行識より生ぜず、乃至十八不共法より生ぜず」と。

問うて曰はく、三若し無礙と相違する、是を名けて礙と爲さば、帝釋は何を以てか更に礙を問

ひしや。答へて曰く、菩薩の礙法は微妙にして、諸の善法に入りて和合し、利根の者には覺せられ、

鈍根なる者は覺せず。解し難きを以ての故に、佛前に於いて、更に礙法を問ふ。何者が是なる。三所

謂菩薩は、慳心施心を分別し、慳心を捨てて施心を取る、是を心相を取ると名く。布施物の貴賤を知

り、布施を修集して、能く一切に興ふることを知る。是の檀波羅蜜〔多〕より乃ち隨喜の福徳に至るま

では相を取るなり。諸の善法は是れ妙なりと爲すと雖も、内に我に著し、

外に法に著して、礙法の中に墮す。譬へば、食は香美なりと雖も、過噉す

れば則ち病むが如し。此の中に須菩提は自ら因縁を説けり。「色等の諸法

の相は、畢竟空なるが故に、無上道に廻向することを得べからず」と。上

には礙相を説き、今は無礙の相を説くなり。所謂、菩薩は若し他に無上道

を教へんと欲せば、應に實法を以て、示教し、利喜せしむべし。示教し、利喜せしむるの義は、先に

説くが如し。實法とは、所謂諸の憶想分別を滅するなり。是の故に、檀を行する時、我は與ふ等と分

別せずと説く。若し能く是の如く教化すれば、二種の利あり。一には錯謬無く、二には亦佛の得たま

ふ所の如き法を以て他人を化す。是の如き等の無量の礙相と相違する、是を無礙相と名く。

問うて曰はく、佛は已に須菩提の無礙相を説くことを讚じたまへり。今何を以ての故に復た更に

【二】 第一問、無礙と相違するを礙と爲さば、帝釋が更に礙を問ひし理由如何。  
【三】 心相を取るの義解。  
【四】 第二問、佛已に須菩提の無礙相を説くを讚す、今復た更に微細の礙相を説くは何故なるか。

自ら微細の礙相を説くや。答へて曰はく、佛は須菩提の力の中に就いて讚歎したまはく、「汝は是の衆生人を捨てて而して能く菩薩の礙相を説く」と。微細の礙相は須菩提の力の及ばざる所なり。是の故に佛は自ら説きたまはく、「是の礙相は微細なるが故に汝一心に好く聽け」と。何者か是なる。所謂菩薩は取相を用つて諸佛等を念じ、皆是の無相の相の般若波羅蜜〔多〕を礙ふ。佛、般若の中より出でたまへるは、亦た是れ無相の相なり。諸の善根をば著心〔を以て〕相を取り廻向するは、是れ世間の果報にして、盡く毒を雜ふること有るが故に、無上道を得ること能はず。

問うて曰はく、（運かみ）上には麤なる礙を説いて相を取ると言ひ、今微細の礙中に亦た相を取ると言ふ、何の差別あるや。答へて曰はく、上に、「我は是れ與ふる者、彼は是れ受くる者なり」と説く。是の如き等を今は但相を取ると説く。

復次に、今は諸の菩薩の念佛三昧を説くが故に微細の相なり。微細の心は人中の礙なり。是の故に微細の礙と名く。須菩提は佛の所説の深妙にして、己が及ぶ所に非ざることを知る。故に讚じて言はく、「甚深なり」と。佛答へたまはく、「一切の法は、常に遠離の相なるが故なり」と。佛の説きたまへる是の般若は一切の法を離る。一切の法を離るるが故に、細微の相も、般若の中に入ることを得ず。須菩提歡喜して言はく、「我れ當に般若の爲に禮を作すべし」と。須菩提、意に是の念を作さく、「我

【五】 第三問、麤なる礙相を取ると、細微の礙相を取るとの區別如何。

は是の般若波羅蜜「多」の、甚深の相を解することを得るが故に發心す。我れ應に禮を作すべし」と。  
 佛の言はく、「是の般若波羅蜜「多」は、無起無作なるが故に、十方如恆河沙の佛は能く得る者無し。  
 汝は聲聞の人にして、云何が得と言ふや」と。須菩提言さく、「世尊よ、但般若のみに非ず。一切の法  
 は皆知ること無く、得ること無し」と。佛の言はく、「諸法は一性にして二無し」と。一性とは、所謂  
 畢竟空なり。二無しとは、畢竟、不畢竟無く、一法性にして即ち是れ無性畢竟空なり。著すべから  
 ず、相を取るべからず。何となれば、因縁の和合より生ずればなり。須菩提是の念を作さく、「若し  
 無性ならば、即ち是の性は不起不作なるを以ての故に、後世の苦は相續せず」と。能く是の如く般若  
 波羅蜜「多」を知れば、一切諸の礙皆遠離す。若し諸の礙を遠離すれば、  
 則ち自在に無上道を得。須菩提は是の説を聞いて是の念を作さく、「我は  
 佛を得るが爲を以て不得と謂ふ。是の般若波羅蜜「多」は解し難く知り難し」と。佛答へたまはく、「獨  
 汝のみ難きに非ず、一切衆生は見る者無く、聞く者無く、知る者無く、識る者無く、得る者無く、鼻  
 舌身の知らざる所、意の識らず、得ざる所なり。是の般若は六種の知を出過するが故に、難解なりと  
 言ふ」と。須菩提は深般若の中に入り、智力窮極するが故に、不可思議と言ふ。佛の言はく、「是の般  
 若是心より生ずるに非ず。五衆より生ずるに非ず。乃至十八不共法より生ずるにあらず。生相無きが  
 故なり」と。

【六】一性とは畢竟空なり。





波羅蜜(多)の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜(多)を行するなり。乃至一切種智の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜(多)を行するなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜(多)を行する時、色は是れ不礙なりと知り、受想行識は是れ不礙なりと知り、乃至一切種智は是れ不礙なりと知り、須陀洹果は不礙なりと知り、斯陀含果は不礙なりと知り、阿羅漢果は不礙なりと知り、辟支佛道は不礙なりと知り、阿耨多羅三藐三菩提道は不礙なりと知ると。

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「未曾有なり、世尊よ、是の甚深の法は若し説くも亦増さず減ぜず、若し説かざるも亦増さず減ぜず」と。佛、須菩提に語りたまはく、「是の如し、是の如し。〔是の〕甚深の法は、若し説くも亦増さず減ぜず、若し説かざるも亦増さず減ぜず。譬へば、佛、形壽を盡くすまで、虚空を、若は讚じ、若は毀らんに、讚する時も亦増さず減ぜず、毀る時も亦増さず減ぜざるが如し。須菩提よ、幻人は、若し讚する時も増さず減ぜず、毀る時も亦増さず減ぜず、讚する時喜ばず、毀る時も憂へざるが如し。須菩提よ、諸法の相も亦是の如く、若し説くとも亦本の如くして異なるが如し、若し説かざるも亦本の如くにして異なるが如し。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し。是の般若波羅蜜(多)を修行する時、憂ひす喜ばずして、而も能く般若波羅蜜(多)を修行し、阿耨多羅三藐三菩提に於いても亦轉還せず。何となれば、世尊よ、般若波羅蜜(多)を修すること、虚空を修するが如くなればなり。虚空の中に般若波羅蜜(多)無く、禪波羅蜜(多)無く、毗梨耶(波羅蜜多)無く、鷹提(波羅蜜多)無く、尸羅(波羅蜜多)無く、檀(波羅蜜多)無きが如し。〔又〕虚空の中に色無く、受想行識無き如く、亦内空外空内外空、乃至無法有法空無く、四念處無く、乃至八聖道分無く、佛の十力無く乃至十八不共法無く、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果無く、辟支佛道無く、阿耨多羅三藐三菩提無きが如く、般若波羅蜜(多)を修するも亦是の如し。世尊よ、應に是の諸の菩薩摩訶薩の能く大誓して莊嚴することを禮すべし。世尊よ、是の人は衆生の爲に大誓し莊

嚴し、勤めて精進すること、虚空の爲に大誓し莊嚴し。勤めて精進するが如し、世尊よ、是の人は衆生を度せんと欲すること、虚空を度せんと欲するが如し。世尊よ、是の諸の菩薩摩訶薩の大誓莊嚴すること、虚空に等しき衆生の爲に大誓莊嚴するが如し。世尊よ、是の人は大誓莊嚴して衆生を度せんと欲すること、虚空を擧ぐるが如しと爲す。世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は、大精進力(を以て)、衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。世尊よ、菩薩摩訶薩は大誓莊嚴して、衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は大勇猛にして、虚空の如き等の衆生を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。何となれば、世尊よ、若し三千大千世界の中に滿つる諸佛は、譬へば竹葦・甘蔗・稻麻・叢林の如くならん。諸佛は一劫・若し減一劫に法を説き、一一の佛は無量無邊阿僧祇の衆生を度して涅槃に入らしめん、世尊よ、是の衆生の性も亦減せず亦増さず。何となれば、衆生は、無所有の故に、衆生は離なるが故なり。乃至十方世界中の諸佛の度したまふ所の衆生も亦是の如し。世尊よ、是の因縁を以ての故に我は是の如く説く、是の人は衆生を度せんと欲するが故に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、虚空を度せんと欲することを爲すと。是の時一比丘有りて是の言を作す、「我れ當に般若波羅蜜(多)を禮すべし、般若波羅蜜(多)の中には、法の生ずること無く、法の滅すること無しと雖も、而も戒衆・定衆・慧衆・解脱衆・解脫知見衆有り、而も諸の須陀洹、諸の斯陀含、諸の阿那含、諸の阿羅漢、諸の辟支佛、諸の佛あり、而も佛寶・法寶・比丘僧寶有り、而も轉法輪有ればなり」と。

論

釋して曰はく、須菩提は、佛の般若波羅蜜(多)の無起無作の相を説きたまへるを聞く。是の故に今、佛前に在りて、般若波羅蜜(多)の所作無きとを説けり。若し無作ならば、諸の煩惱を斷すること能はず。諸の善法を修集すること能はず。此の中に、佛、因縁を説きたまはく、「作者乃至一切法は、

不可得なるが故に、知者すら尚ほ無し、何に況んや作者をや」と。須菩提言はく、「若し無作ならば、般若波羅蜜多」は能く作す所無し。應に云何が般若波羅蜜多」を行すべきや」と。佛の言はく、「二〇若し菩薩、一切法を行せずんば、一切法の、所謂若くは常無常、乃至若くは淨、若くは不淨を得ず。是を般若波羅蜜多」を行すと名く。一切法とは、色より乃至一切種智に至る。是れ菩薩の行法なり。是の法の中に、無智の人は、諸法の常等を行じ、智人の諸法の無常等を行す。是の般若波羅蜜多」は、諸法の畢竟實相を示すが故に、諸法の常無常を説かず。無常等は、能く諸法の顛倒を破すと雖も、般若の中には是の法を受けず。「そは」能く著心を生ずるを以ての故なり。思惟籌量して常無常の相を求むるに、定實を得べからず。

問うて曰はく、「二」色等の罪法は不淨苦なりと觀すべきも、餘の善法は云何が不淨苦なりと觀するや。答へて曰はく、「三」是の名字の不淨苦とは、隨意安隱の好法を清淨快樂と名くるが如く、不隨意、非安隱の法を不淨苦と名く。善法の中に於いて愛樂し悦可する者をば、以て淨樂と爲し、厭惡し喜ばざる者をば、以て不淨苦と爲す。須菩提は是の念を作す。「若し諸の觀法を離るる者は、將に菩薩道を具足せざること無きや」と。是の故に佛説きたまはく、「一」色等の不具足を行せざる、是れ般若波羅蜜多」を行するなり」と。「三」色の具足とは、有人は言ふ、「色等の法中に常無常

【一〇】 一切法を行ぜざる是れを般若を行すと名く。

【一一】 第五問、色等の罪法は不淨苦なりと觀すべきも、如何が餘の善法を不淨苦なり等と觀ぜんや。

【一二】 不淨・苦の義解。

【一三】 色等の具足不具足の解。

等を憶想分別する、是を具足と名く。不具足とは、是の中に無常等の觀を用つて常等を破す、是を不具足と名く。少しく常なる等の故に、今、色の中に於いても、亦た無常等を行せず。是の故に色の不具足を行せず、是を般若波羅蜜〔多〕を行ずと爲すと説く」と。

復次に、有人は言ふ、「具足とは、謂はく、補處の菩薩の能く色の實觀、乃至一切種智の如き、是を具足と名け、餘は是れ不具足なり。若し菩薩は色等の不具足を行せずとは、即ち是れ、具足の般若波羅蜜〔多〕を行するなり。何となれば、色は不具足なれば則ち色に非ず、色は常相に非ざるが故なり」と。佛の言はく、「衆生は常の中より出でて、無所有の中に著す。語言音聲に隨ふが故なり」と。

【四】 礙無礙の義解。

【五】 希有の義解。

是の故に、是の如き實清淨をも亦行せざる、是を般若波羅蜜〔多〕を行すと爲すと説く。善く道と非道とを説くが故に、須菩提は希有なりと言へり

〔二四〕 礙とは、是れ非道なり。無礙とは是れ道なり。佛は會衆の心、多く空に廻向して、般若波羅蜜〔多〕の無礙の相を知れるを觀じたまふ。是の故に説きたまはく、「色等の無礙を觀せざるは、是れ般若波羅蜜〔多〕を行するなり」と。能く是の如く行する者は、色等の法に於て礙無し。須菩提は究竟して、畢竟空の理を知ること能はずと唯も、而も常に樂んで是の空法を説けり。〔二五〕 希有とは、一切世間の法と相違するなり。佛は須菩提の所説を可としたまふ。若くは説き、「若くは〕説かざるも、増すこと無く減すること無きは、是れ諸法實相にして、若し身業の毀壞を以ても、亦異ならしむること能はず。

何に況んや口説をや。常に不生の相なるが故なり。譬へば虚空の如し。虚空は是れ般若波羅蜜〔多〕、  
 幻人は是れ行者なり。行者は罪業の因縁を以て、是の虚誑の法を生ずと雖も、般若波羅蜜〔多〕と合す  
 るが故に、異なること有ること無し。種種の諸色は、須彌山の邊に到れば、同じく金色と爲るが如  
 し。是の諸法實相は知るべからず、説くべからざるが故に、若し説くも、説かざるも、本の如くにし  
 て異ならず。爾の時に、須菩提は是の念を作す、一若し諸法は畢竟空にして所有無く、虚空の如く乃  
 至微細の相有ること無く、而も菩薩は能く善法を修集して無上道を得よ、  
 是の事は信じ難く受け難じ」と。是の念を作し已つて佛に白して言さく、  
 「諸の菩薩の爲す所は甚だ難く、能く難事を爲すが故に應に禮拜すべし」  
 と。謂はく、能く大誓莊嚴するが故なり」と。須菩提は希有の心もて説く、  
 「是の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提の爲に大誓莊嚴す。一切の天人は皆應に禮拜すべし」と。  
 問うて曰はく、云何が是の大誓莊嚴を知るや。答へて曰はく、須菩提は此の中に自ら譬喩を説  
 けり。有る人は、虚空の爲の故に勤行精進し、利益するが故に大誓莊嚴するが如く、菩薩の衆生を利  
 益せんが爲に、勤めて精進するも亦是の如し。世尊よ、若し人あり、虚空を度せんと欲し。菩薩摩訶  
 薩の衆生を度せんと欲するも亦是の如し。

問うて曰はく、(二七) 一事をば何を以て再び説くや。答へて曰はく、利益とは、未だ涅槃を得ず、但智

【六】 第六問、云何にして是の  
 大誓莊嚴を知るや。  
 【七】 第七問、一事を再説する  
 理由如何。

慧禪定等の今世後世の樂を得せしむ。度せんと欲すとは、漏を盡くすことを得、三乘の道を成じ、無餘涅槃に入りしむるなり。虚空の如きは、無生・無滅・無苦・無樂・無脫・無縛なり、所有無きが故なり。衆生も亦是の如し。是の故に説く、「世尊よ、虚空等の衆生を度せんが爲の故に、大誓莊嚴す」と。虚空の如きは、無色無形にして、若し虚空を擧げんと欲すること有れば、是を難しと爲す。衆生法も亦是の如く畢竟空なり。而も菩薩は三界の衆生の、涅槃の中に著するを擧げんと欲す。是の故に大誓莊嚴と名く。須菩提は、復た是の菩薩の大精進力を讚す。邪疑の心に隨はざるが故に、未だ佛道を得ず、未だ諸結を滅せずと雖も、而も能く大勇猛にして、能く是の如く菩薩の道を行じ、衆生の爲にす。衆生も亦空なることは、譬へば種種の彩色を以て、虚空を畫かんと欲するが如し。此の中に佛は衆生空の因縁を説きたまへり。所謂十方如恆河沙の諸佛は、神通力を以て、衆生の爲に無量劫に法を説きたまひ、一一の佛は、無量阿僧祇の衆生を度して涅槃に入らしめたまふに、假令是の如くなりとも、衆生に於いては、減少する所無し。若し衆生有りて實に減少有らば、諸佛は應に衆生を減する罪有るべし。若し衆生は實に空にして、和合の因縁「を以て」、假名の衆生有るが故に、定相有ること無し。是の故に爾所の佛、衆生を度したまふも、實に減少すること無く、若し度したまはずとも亦増さず。是の故に諸佛には衆生を減する咎なし。是の故に説く、菩薩の衆生を度せんと欲するは、虚空を度せんと欲すと爲す。爾の時に、一の比丘、畢竟空の相を聞き、驚喜して言はく、「我れ當に般若波

羅蜜〔多〕を禮すべし」と。般若の中には、法として定實の相あること無きも、而も衆生等及び諸の果報有り。

釋

(一八) 爾の時に、釋提桓因、須菩提に語るらく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を習ふは、何の法をか習はんが爲なりや」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「橋戸迦よ、是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を習ふは、空を習はんが爲なり」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善男子善女人、般若波羅蜜〔多〕をば受持して、親近し、讀誦し、説き、正憶念せば、我は當に何等の護を作すべきや」と。爾の時に、須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「橋戸迦よ、汝は頗し是の法の守護すべき者を見るや不や」と。釋提桓因言はく「不なり。須菩提よ、我は是の法の守護すべき者を見ず」と。須菩提言はく、「橋戸迦よ、若し善男子善女人、般若波羅蜜〔多〕

【一八】 行般若の守護を辦す。

の中の所説の如く行すれば、即ち是れ守護なり。所謂常に遠離せずして、所説の如く般若波羅蜜〔多〕を行するに、是の善男子善女人は、若くは人、若くは非人も、其の便を得ず。當に知るべし、是の善男子善女人は、般若波羅蜜〔多〕を遠離せず。橋戸迦よ、若し人、般若波羅蜜〔多〕を行する菩薩を護らんと欲せば、虚空を護らんと欲すと爲す。橋戸迦よ、汝が意に於いて云何、汝は能く夢・影・響・幻化を護るや不や」と。

釋提桓因言はく、護ること能はず」と。「若し人般若波羅蜜〔多〕を行する、諸の菩薩摩訶薩を護らんと欲するも、亦是の如し、徒に自ら疲苦するのみ。橋戸迦よ、汝が意に於いて云何、能く佛の所化を護るや不や」と。釋提桓因言はく、「護ること能はず」と。「若し人、般若波羅蜜〔多〕を行する諸の菩薩摩訶薩を護らんと欲するも亦是の如し。橋戸迦よ、汝が意に於いて云何、能く法性・實際・如・不可思議性を護るや不や」と。釋提桓因言はく、「護ると能はず」と。「若し人、般若波羅蜜

〔多〕を行ずる諸の菩薩摩訶薩を護らんと欲するも亦是の如しと。

爾の時に、釋提桓因、須菩提に問ふ、「云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じ、諸法を見て、夢の如く、餓の如く、影の如く、響の如く、幻の如く、化の如しと知るや。諸の菩薩摩訶薩は、所知の如く見るが故に、夢を念ぜず、是夢を念ぜず、用夢を念ぜず、我夢を念ぜず。餓・影・響・幻・化も、亦是の如くなるや」と。須菩提言はく、「橋戸迦よ、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜〔多〕を行じて、色を念ぜず、是色を念ぜず、用色を念ぜず、我色を念ぜずば、是の菩薩摩訶薩も亦能く夢を念ぜず、是夢を念ぜず、用夢を念ぜず、我夢を念ぜず、是化を念ぜず、用化を念ぜず、我化を念ぜず。是想行識も亦是の如し。乃至一切智も一切智を念ぜず、乃至化も亦化を念ぜず、是化を念ぜず、用一切智を念ぜず、我一切智を念ぜず。是の菩薩摩訶薩も亦能く夢を念ぜず。是夢を念ぜず。是夢を念ぜず、用夢を念ぜず、乃至一切智も一切智を念ぜず、乃至化も亦化を念ぜず、是化を念ぜず、用一切智を念ぜず、我一切智を念ぜず、是の菩薩摩訶薩も亦能く夢を念ぜず。是夢を念ぜず、用夢を念ぜず、乃至化も亦化を念ぜず、是化を念ぜず、用一切智を念ぜず、我一切智を念ぜず、是の菩薩摩訶薩は、諸法の夢の如く、焰の如く、影の如く、響の如く、幻の如く、化の如きことを知るなり」と。

論

釋して曰はく、即時に帝釋は問ふ。佛、須菩提より聞く所の是の甚深の般若は、何の法をか習はんが爲なりや」と。須菩提言はく、「諸法は久久しうして皆涅槃に歸するが故に、當に諸法の空を習ふべし」と。是の故に説けり、「般若を習はんと欲せば、當に空を習ふべし」と。帝釋は是れ人天の王にして、世間に於いて自在に能く須ふる所を與へ、守護を作さんことを願ふ。是の般若波羅蜜〔多〕を聞き、歡喜して佛に白して言さく、「我れ當に何事をか作して守護すべく、其の所宜に隨ひて盡く當に之を與ふべきや」と。須菩提及び一比丘は、出家の法を敬禮するに、已に諸の惡鬼は、常に是の人を惱まし、魔、若くは魔氏は、常に行者を惱ます。是の故に佛に問ふ、「我れ當に何事を以てか守護

を惱まし、魔、若くは魔氏は、常に行者を惱ます。是の故に佛に問ふ、「我れ當に何事を以てか守護

じ、若くは自ら守護し、若くは子弟を遣はし、若くは官屬を遣はして侍衛せしめ佛の教勅に隨ふべきや」と。須菩提は般若の無量の力あることを知り、又佛意を知り、般若波羅蜜(多)をして貴重ならしめんと欲し、思を受くることを用ゐざるが故に、帝釋に語るらく、「憍尸迦よ、般若波羅蜜(多)の中は、皆空にして、幻の如く、夢の如し。汝頗し定んで一法の有るを見て護るべきや不や」と。帝釋の言はく、「不なり。若し見るべくんば、名けて般若波羅蜜(多)を畢竟空と爲さず、「若し見るべからずんば、云何が説いて、我れ當に何事を作してか守護すべきと言ふや」と。」

復次に、憍尸迦よ、若し行者、所説の如く、般若の中に住せば、即ち是れ守護なり。若し菩薩、般若の中の所説の如く、一心に信受し、思惟し、正憶念し、禪定に入りて、諸法の實相を觀じ、畢竟空の智慧を得ば、應に無生法忍(を得て)菩薩の位に入るべし。是の如き人は身命を惜まず、何に況んや外物をや。是の人は守護を須わす。守護の名は、諸の苦惱を遮りて、安樂を得せしむ。是の人は一切の世間の法を離るるが故に、憂愁苦惱有ること無く、世間の事を得て以て喜と爲さず、世間の事を失うて以て憂と爲さず。所謂常に所説の如く、般若波羅蜜(多)の行を離れず。若し人少時く行じて後還つて失すべき者は、宜しく須らく守護すべし。若し常に所説の如く、般若波羅蜜(多)を離れずんば、則ち守護を須わす。

二、迦羅夜叉の拳を以て舍利弗の頭を打つが如し。舍利弗は時に滅盡定に入りて打痛を覺えず、般若

【五】迦羅夜叉 (Kāraṇakya)  
迦羅は譯して黒と云ひ、夜叉は譯して捷疾鬼と云ふ。

波羅蜜(多)の氣分は即ち是れ滅盡定なり。是の故に、若くは人、若くは非人は便を得ること能はず。略して説くに二種の因縁(を以て)守護を須ゐず。若くは人若くは非人は便を得ざるは、一には身よりすなは一切諸法に至るまで皆厭離し、我無く我所無きが故に皆著する所なく、草木を斬るに憂愁を生ぜざるが如し、二には上妙の法を得るが故に、十方の諸佛菩薩諸天の爲に守護せらるるなり。

復次に、譬へば、人の虚空を守護せんと欲するが如し。虚空は雨も壞すること能はず、風日も乾すこと能はず、刀杖等も傷くこと能はず。若し人有り、虚空を守護せんと欲せば、徒に自ら疲苦し、空に於いて益すること無し。若し人、般若波羅蜜(多)を行じ、菩薩を守護せんと欲するも亦是の如し。此の事をして明了ならしめんと欲するが故に問ふ、「汝は能く空及び夢中に見る所の人及び影響幻化の人を守護するや不や」と。答へて曰はく、「不なり」と。此の法は但心眼を誑はし、暫らく現だて已に滅す、云何が守護すべけんや。般若を行ずる菩薩も亦是の如く、五衆を觀すること、夢等の虚誑なるが如し。無爲法如法性實際不可思議性の能く守護する者無く、亦利益する所無きが如く、般若を行ずる菩薩は、身を知ること如法性實際の別に得ざるが如し。供養して利する時喜ばず、破壊して失する時憂ひず。是の如きの人は何ぞ守護を須ゐん。爾の時に、帝釋は、是の夢の如き等の智慧を貪り貴ぶ。菩薩は是の智慧力を得て外に守護を須ゐず。故に問ふ、「須菩提よ、云何が菩薩は是の夢の如き等の空法を知り、知る所の如く見るや」と。夢を念せず等とは、夢等を五衆に喩ふ。五衆は人の

著する所にして、夢等には著せず。著事を離れしめんと欲するが故に、不著の事を以て喩と爲し、五衆を觀すること、夢の如くならしめんと欲す。夢に於いて亦復た著を生ず。是の故に帝釋は問ふ、「夢も亦不著是れ夢なるが如し」と。凡夫の人は、夢を以て五衆に喩ふれば、即ち復た夢に著して、是の言を作す、「定んで夢法有りて眠睡の時に生ず」と。是を夢を念ずと名く。是の夢は悪、是の夢は好。是の如く、分別する、是を夢を念ずと名く。夢に好事を得れば、則ち心高ぶり、惡事を得れば則ち心愁ひ、又此の夢の譬喩を用ふれば、是の夢の如き實智慧を得。是を用夢を念ずと名く。是の譬喩を聞いて、我は此の夢に因りて、諸法の夢の如きことを知ることを得たりと、是を我夢を念ずと名く。餘の喩も亦是の如し。

爾の時に、須菩提は答ふらく、「帝釋よ、若し行者は、色是色・人色・非人色・樹色・山色・是の四大、若くは四大所造の色等を念せず。是の色の常、若くは無常等を念せず。色を以ての故に心に憍慢を生ぜず、色は是れ我所なりと念せず、無我門に入りて、直に諸法實相の中に至る。是の人は能く夢を念せず、是の夢等を念せず、是の夢等の譬喩を用ゐて、五衆に著するを破す。著を破するが故に、夢中に於て亦錯らず。若し色の著を破するとな能はざれば、是の人は、色に於いて錯り、夢に於いても亦錯る。受想行識、乃至一切種智も亦是の如く、幻・響・影・化等も亦是の如し。諸の菩薩は諸法の夢の如きことを知り、夢に於いても亦念せざるなり。

經

爾の時、佛の神力の故に、三千大千世界の中の諸の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵  
轉天、梵衆天、大梵天、少光天、乃至淨居天、是の一切の諸天は、天の梅檀を以て、遙に佛の上に散じ、佛所に來詣し、頭  
於に佛足を禮し、却いて一面に住す。

爾の時、四天王天・釋提・桓因・及び三十三天・梵天王・乃至諸の淨居天は、佛の神力の故に東方千佛の説法、亦是の相の如  
く、是の名字の如きを見る。是の般若波羅蜜(多)品を説く諸の比丘を皆須菩提と字け、般若波羅蜜(多)品を問難する者を、  
皆釋提桓因と字く。南西北方四維上下も亦た是の如く各千佛現じたまふ。

爾の時に、佛、須菩提に告げたまはく、「彌勒菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得  
る時も、亦當に是の處に於いて般若波羅蜜(多)を説くべく、賢劫の中の諸の菩薩摩訶薩  
の阿耨多羅三藐三菩提を得る時の如きも、亦當に是の處に於いて般若波羅蜜(多)を説く  
べし」と。須菩提、佛に白して言はく、「世尊よ、彌勒菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、何の相、何の因、何の義  
を用つてか、是の般若波羅蜜(多)の義を説くや」と。

【10】 諸天佛力に依て、十方に  
千佛を見るを明し、未來彌勒  
會上の説法を示す。

佛、須菩提に告げたまはく、「彌勒菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、色は常に非ず、色は無常に非ず、當に是  
の如く法を説くべし。色は縛に非ず、解に非ず、樂に非ず、色は我に非ず、無我に非ず、色は淨に非ず、不淨に非ず、當に是の如く法  
を説くべし。色は縛に非ず、解に非ず、當に是の如く法を説くべし。受想行識は常に非ず、無常に非ず乃至縛に非ず、解に  
非ず、當に是の如く法を説くべし。色は過去に非ず、色は未來に非ず、色は現在に非ず、當に是の如く法を説くべし。受想行  
識も、亦是の如し。色は畢竟淨なり、當に是の如く法を説くべし。受想行識は畢竟淨なり、當に是の如く法を説くべし。

乃至一切種智も畢竟清淨なり、當に是の如く法を説くべし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。佛の言はく、「色は清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり。受想行識は清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。世尊よ、云何が色は清淨なるが故に

般若波羅蜜(多)は清淨なるや。云何が受想行識は清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なるや」と。

佛の言はく、「若し色は不生・不滅・不垢・不淨ならば、是を色清淨と名け、受想行識は不生・不滅・不垢・不淨ならば、是を

受想行識清淨と名く」と。

「また次に、須菩提よ、虚空は清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。「世尊よ、云何が虚空は清淨なるが故に、

般若波羅蜜(多)は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は不生・不滅なるが故に清淨なり。般若波羅蜜(多)も亦是の如し」と。

「復次に、須菩提よ、色は汚れざるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり、受想行識は汚れざるが故に、般若波羅蜜(多)は

清淨なり」と。「世尊よ、云何が色は汚れざるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なりや、受想行識は汚れざるが故に、般若波

羅蜜(多)は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は汚すべからざるが故に、虚空は清淨なるが如し」と。「世尊よ、云何が虚空

は汚すべからざるが故に、虚空は清淨なるが如きや」と。

佛の言はく、「虚空は取るべからざるが故に、虚空は清淨なり、虚空は清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり。復

次に、須菩提よ、虚空は説くべきが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。「世尊よ、云何が虚空は説くべきが故に、般若波

羅蜜(多)は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空の中に因りて二聲出づ。般若波羅蜜(多)も亦虚空の如く説くべきが故に清

淨なり。須菩提よ、虚空は説くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。「世尊よ、云何が虚空は説くべからざる

が故に、般若波羅蜜(多)は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は説くべきと無きが如き故に般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。

「復次に、虚空は不可得の如きが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。「世尊よ、云何が虚空に不可得の如きが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は無所得の相なるが如く、般若波羅蜜(多)も亦虚空の如く、無所得の相なるが故に清淨なり。復次に、須菩提よ、一切法は不生・不滅・不垢・不淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。「世尊よ、云何が一切法は不生・不滅・不垢・不淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なりや」と。佛の言はく、「一切法は畢竟清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨なり」と。

**論** 釋して曰はく、是の般若波羅蜜(多)は、皆甚深なりと雖も、是の品の中に、了了に諸法實相を

説くが故に、是を以て三千大千世界中の諸天は、諸の供養の具を持し來り、佛を供養したてまつりて一面に立てり。

問うて曰はく、(三)即ち是の上の諸天は今更に來るや。答へて曰はく、有

【三】 第八問、上の諸天は今更に來れりや如何。

人の言はく、「事久しきが故に去り竟つて更に來る」と。有人の言はく、「更に新しく天上より來る者ありて、般若を信せしめんと欲するが故に、十方面に各千佛現す。是の人は福德の因縁を以て」千佛を見たてまつるべきが故なり。佛の神力の故に會に在り、衆人は皆十方の佛を見たてまつる。人天の見る所は限有つて、佛の威神[力]に非ずんば、彼の諸佛を見得るに由無し。佛前に法を説く者を皆須菩提と字け、難問する者を皆釋提桓因と字け、其の同字を取る者千人あり。是の時に、須菩提、帝釋は皆歡喜して言はく、「獨り我等のみ能く説き、能く問ふに非ず」と。佛は其の事を證せんと欲した

まふが故に、廣く其の事を引いて説きたまはく、「彌勒及び賢劫の菩薩は、是の摩伽陀國、王舍城、耆闍崛山に於いて、般若波羅蜜(多)を説きたまふ」と。經中に説くが如し。「彌勒菩薩は大衆を將ゐて著闍崛山に到り足指を以て山頂を開く。摩訶迦葉は骨身に僧伽梨を著け杖を執り鉢を持して出づ。彌勒は大衆の爲に説いて言はく、「過去に釋迦牟尼佛あり、人壽百歲なり。時には是の人は、是れ少欲知足にして、頭陀を行すること、弟子中第一にして、六神通を具へ、三明を得、常に衆生を憐愍し、利益するが故に、神通力を以て是の骨身をして今に至らしむ。此の小身に因りてすらは是の如き利を得。何に況んや、汝等は自身なるをや。大身にして好世に生じ、而も自ら利すると能はざらんや」と。爾の時に、彌勒は是の事に因りて、廣く法を説き、無量の衆生をして、苦際を盡くすことを得せしむ。是の事を以ての故に、彌勒は耆闍崛山中に在りて、法を説くことを知る。是の般若波羅蜜(多)は、過去未來現在の佛の所説にして、應當に信受すべし。須菩提問ふ、「彌勒は何の相何の因を以て、何の法門を以て説くや」と。佛の言はく、「我が説の如きは、色等の諸法は、常に非ず、無常に非ず縛に非ず解に非ざる等と説くが如し。亦色は過去未來現在なりと説かず。涅槃は三世の色等を出づるが如く、諸法も亦是の如しとは、先に説くが如く、一切法は涅槃の相の如し。彌勒の所説も亦是の如しと。爾の時に、須菩提は歡喜して、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は第一清淨なりや」と。佛の言はく、「色等の諸法は清淨なるが故に淨なり、因果相似するが故に」と。色等の法は清

淨なりとは、所謂色等の法は業因縁を失せざるが故に、及び諸法の生相は定實なることを得ざるが故に不生不滅なり。諸法の相は、常に汙染せざるが故に不垢不淨なり。此の中に譬喩を説くは、事をして明了ならしめんと欲するが故なり。虚空の如きは塵水著せず、性清淨なるが故なり。般若波羅蜜〔多〕も亦是の如し。不生不滅なるが故に清淨なり。虚空の染汗すべからざるが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、邪見戲論ありと雖も、染汗すること能はず。刀仗惡事も壞すること能はず。無色無形なるが故に取るべからず、取るべからざるが故に、則ち染汗すべからず。

復次に、諸の菩薩は、辯才樂説・無礙智の中に住し、衆生の爲に十二部

經、八萬四千の法聚を説く。皆是れ般若波羅蜜〔多〕の一事をば、而も分別

して説くことを爲すなり。是の故に、般若波羅蜜〔多〕は説くべきが故に、清淨なること、虚空の如しと説く。虚空及び山谷に因りて、人聲ありて

口中の空より出づ。是の二聲に因るが故に響と名く。響の空なるが如く、口聲も亦是の如し。是の二聲は皆虚誑不實なり。而も人は聲を以て實と爲す。般若も亦是の如し。一切法

は、皆畢竟空にして、幻の如く、夢の如し。凡夫の法、聖法も、皆是れ虚誑なり。小菩薩は、凡夫の法を以て、虚誑と爲し、聖法を實と爲す。

問うて曰く、是の二は皆虚誑なり。何を以ての故に小菩薩は凡夫の法を以て虚と爲し、聖法を實

【三】 響も聲も二ともに空なる所以を論ず。

【三】 第九問、小菩薩が凡夫法を虚となし、聖法を實となす理由如何。

と爲すや。答へて曰はく、聖法は、持戒禪定智慧を修集する功德に因りて、成ずる所なるが故に、以て實と爲し、凡夫の法は、自然に有ること、響の自然に出づるが如く、是れ人の故らに作るに非ざるを以て虚と爲す。衆生は無始世より來かた、此の身に著するが故に、聲の身より出づるを以て實と爲し、小菩薩は深く善法を樂しむが故に以て實と爲す。

復次に、如し虚空中には、音聲語言の相無きが故に所説無し。是の語言音聲は、皆是れ作法にして虚空は是れ無作法なり。般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、第一深義は、畢竟空にして、言説有ること無し。一切の語言の道を斷ずるが故なり。

復次に、虚空の如きは、無所得の相にして、有を得ず、無を得ず。若し有無の相は先に破するが如し。虚空の相は、若し是の虚空に因りて、無量の事を造らず。般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、有無の相は不可得なるが故に清淨なり。復次に、般若波羅蜜〔多〕は諸法の正憶念に因るが故に生ず。正憶念とは、畢竟空にして、清淨なるが故に、一切の法は不生不滅不垢不淨なり。

# 卷の第六十五

無作實相品第四十三の下を釋す。

釋

〔一〕須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善男子善女人の、是の般若波羅蜜(多)を受持し、親近し、正憶念する者は、終に眼を病ます。耳鼻舌身も亦終に病ます、身に形殘無く、亦衰老せず、終に横死せず。無数百千萬の諸天、四天王天乃至淨居の諸天、皆悉く隨從して聽受す。六齋日なる、月の八日、二十三日、十四日、二十八日、十五日、三十日には、諸天衆會し、善男子の法師たる者、在所に般若波羅蜜(多)を説くに皆悉く來集す。是の善男子善女人は、大乘の中に在りて是の般若波羅蜜(多)を説き、無量無邊阿僧祇の不可思議不可稱量の福德を得しと。

【一】以下、般若を受持する利益、即ち無病無老不横死等を明す。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。是の善男子、善女人は、若し六齋日なる、月の八日、二十三日、十四日、二十八日、十五日、三十日に諸天衆の前に在りて、般若波羅蜜(多)を説かば、是の善男子、善女人は、無量無邊阿僧祇の不可思議不可稱量なる福德を得。何となれば、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は、是れ大珍寶なり。是の般若波羅蜜(多)は、能く地獄・畜生・餓鬼及び人中の貧窮を抜き、能く刹利、婆羅門の大家、居士の大家を與へ、能く四天王天處、乃至非有想非無想處を與へ、能く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を與ふ。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中に、廣く十善道、四禪、四無量心、四無色定、四念處乃至八聖道分、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を説き、廣く內空乃至無法有法空を説き、廣く佛の十



亦捨てず、乃至無法有法空を與へず、亦捨てず、四念處を與へず亦捨てず、乃至八聖道分を與へず、亦捨てず、佛の十力を與へず、亦捨てず、乃至十八不共法を與へず、亦捨てず、須陀洹果を與へず、亦捨てず、乃至阿羅漢果を與へず亦捨てず、辟支佛道を與へず、亦捨てず、乃至一切智を與へず亦捨てず。是の般若波羅蜜(多)は阿羅漢法を與へず、凡夫法を捨てず、辟支佛法を與へず、阿羅漢法を捨てず、佛法を與へず、辟支佛法を捨てず。是の般若波羅蜜(多)は亦無爲法を與へず、有爲法を捨てず。何となれば、若くは諸佛有るも、若くは諸佛無きも、是の諸法の相は常住にして異ならず。法相、法住、法位常住にして謬らず、失せざるが故なり」と。

論

問うて曰はく、(二)若し般若を受持し正憶念するも猶ほ衆患あり、云

何が終に眼等を病まずと言ふや。答へて曰はく、是の事は上の功德地獄品の中に已に廣く説けり、所謂必受報業に非ざるが故に衆患無く、又常に受持し正憶念し、所説の如く般若を行ずるが故に衆患無し。譬へば良藥は能く衆病を破するも、苦し能く將つて順はざれば、則ち患を除かず、「これ」藥の失に非ざるが如く、又

【二】第一問、般若を受持して、眼耳等を病まざる理由如何。

【三】第二問、諸天が六齋日に不淨の人の身を隨逐して、般若を求め聞く理由如何。

摩人の利器を得と雖も、難を禦ぐこと能はざるは、器の過に非ざるが如し。行者も是の如く、先世の重罪もて、今世に所説の如く行せざるが故に、般若の力を得ざるも、般若の過に非ざるなり。

問うて曰はく、天上にも亦般若波羅蜜(多)有り、諸天は何を以てか六齋日に於いて、不淨人の身を隨逐して、般若を求め聞くや。答へて曰はく、天上に經卷有りと、傳へ聞くこと是の如きも、亦

佛説に非ず。若し有らしめば、初利天上、兜率天上にも當に有るべし。何を以ての故に阿脩羅の初

利天と闘ふ時、佛、帝釋に勅して、「汝、當に般若を誦念すべし」と宣ひしや。兜率天上には、常に補

處の菩薩ありて、諸天の爲に説くが故に有るべし。色界の諸天は、身及び衣服輕微なるより、乃ち

兩數無きに至るまで、常に寂靜を樂しみ、禪定味を受く。是の故に經卷あるべからず。諸天は二種

の樂に著す。欲樂と定樂となり。勤苦して般若波羅蜜(多)を書持するこ

と能はず。閻浮提の人は能く精進して、書持し學し正憶念す。經に説

くが如きは、閻浮提の人は、三因縁を以て、諸天及び鬱單越の人に勝る

一には能く姪欲を斷じ、二には識念の力強し。三には能く精勤勇猛なり。

是の閻浮提の人は、能く書寫し讀誦し受持す。是を以ての故に、諸天は來

り下りて、般若の經卷を禮拜し、或は説を聞かんと欲す。

復た有人の言はく、天上に若し經卷有るも遠く來りて供養し、福德を増益し、般若波羅蜜(多)を求

めて厭足無し。有る菩薩の天は、般若を尊重せしめんと欲するが故に來り下り、衆生をして益信敬

を加へしめんと欲す。諸天すら尙來る、何に況んや我等行者をや。若くは好香を聞き、若くは光明を

見、是の如き希有の事有るが故に、深心に般若を信樂す、又未だ欲を離れざる人は、惡鬼魔民、常に

逐うて便を伺ひ、惡處に墮せしむ。四天王天より乃ち淨居天に至るまで、是の大力の諸天來れば、小

【四】 初利天、兜率天にも般若の經卷あり。

【五】 色界には經卷なし。

【六】 諸天の著する二種の樂。ヂヤンブドギーバ

【七】 Jambudvīpa の人は三因縁の故に、諸天及び北州に勝る。

【八】 Utaakuru.

鬼は避け去る。菩薩は能く清淨の小心を生ずると、先の品の中に説くが如し。是の故に來りて法師を隨逐す。六齋日には諸天來りて、人心を觀る。十五日、三十日は上りて諸天に白す。

復次に、是の六齋日は、是れ惡日にして、人をして衰凶ならしむ。若し是の日に八戒を受け、持齋布施、聽法すること有れば、是の時、諸天は歡喜し、小鬼は其の便を得ず、行者を利益す。是の日、法師は、高座に法を説く。是の如き等の種種の因縁の故に、諸天は皆來り下る。説法者は無量無邊無上の法、所謂般若波羅蜜(多)を讃じ、亦無量無邊の福德を得。若し人の爲に説くに、人は鈍根にして福德薄きが故に、福を得ること少く、諸天は利根にして福德多く、福田勝るが故に福を得ること多し。故に佛説き給はく、「行者は、齋日に諸天及び大衆の中に、般若を説くに福を得ること無量なり」と。此の中に、佛、須菩提の言ふ所を可とし、復自ら無量の福德の因縁を説きたまへり。所謂般若波羅蜜(多)は是れ大珍寶波羅蜜(多)なり。如意寶珠の能く一切の人の願を滿すが如く、是の般若波羅蜜(多)は、能く一切衆生の願を滿す、所謂苦を離れて樂を得せしむ。苦を離るとは、般若波羅蜜(多)は、能く衆生の地獄畜生・餓鬼、及び人中の極貧を抜く。樂を能ふとは、能く刹利の大姓、乃至阿耨多羅三藐三菩提を與ふるなり。是の樂の因縁は、善法般若波羅蜜(多)の中に廣く説けり。所謂十善道、乃至一切智なり。(二)如意寶の能く衣服・飲食・金銀等の、意に隨つて須ふる所を出すが如く、般

【九】般若波羅蜜多是如意寶珠の如し。

【一〇】般若波羅蜜多是珍寶波羅蜜多と名く。

般若波羅蜜(多)は、能く衆生の地獄畜生・餓鬼、及び人中の極貧を抜く。樂を能ふとは、能く刹利の大姓、乃至阿耨多羅三藐三菩提を與ふるなり。是の樂の因縁は、善法般若波羅蜜(多)の中に廣く説けり。所謂十善道、乃至一切智なり。(二)如意寶の能く衣服・飲食・金銀等の、意に隨つて須ふる所を出すが如く、般

若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、能く十善道、乃至一切智、刹利の大姓、乃至佛を得せしむ。是の事を以ての故に、名けて珍寶波羅蜜〔多〕と爲す。

復次に、珍寶波羅蜜〔多〕とは、人の如意寶を得れば、則ち意に隨つて須ふる所を皆得、失すれば則ち憂惱するが如く、是の般若波羅蜜〔多〕は、不生、不滅にして常に失せず、世世に衆生に樂を與へ、末後に佛道を得せしむ。人の如意寶を得れば、則ち心に自ら高うし、他人を輕賤することを生じ、是を衰の因縁と爲すが如し。(二)若し人世間の般若波羅蜜〔多〕を得るも亦是の如し。分別して諸の善法に著し、諸の惡法を捨て、高心を生じて餘人を輕懷すれば、則ち諸罪の門を開く。是れ珍寶般若波羅蜜〔多〕なり。出世間の般若波羅蜜〔多〕の中には善不善を分別せず、是を大珍寶波羅蜜〔多〕と名け、能く衆生を利し、畢竟して憂なし。是の珍寶波羅蜜

【二】 世間の般若ば諸罪の門、出世間の般若は大珍寶なり。

〔多〕は、善法すら尙汗染すること能はず、何に況んや不善法をや。此の中に説くが如し。是の如きも亦知らずとは、上に説くが如く、般若の相は亦是の知を作さず、知を作さざる者は相を取らず、亦著を生せず、分別せず、定相を得ず、是を過患すること無く、法愛有ること無く、諸の戲論を斷ずと名く。是の如き人は、能く實に般若波羅蜜〔多〕を修行し、法を以て佛を禮し、自ら實法の利益を得るが故に、能く衆生を利し、能く自ら惡を離れ、能く衆生をして、惡を離れしむるが故に、佛世界を淨むることを得。無所得の方便力を用ふるが故に、諸法の畢竟寂滅相を知り、而して能く衆生の爲の故

に、諸の善法を起す。般若波羅蜜〔多〕は、畢竟清淨なるが故に力無く、力に非ざること無し。譬へば、虚空の如きは、法有ること無しと雖も、而も虚空に因りて所作有ることを得。一法の定相の著すべきこと有ること無きが故に、力有ること無く、諸法實相を得。諸の善法に於いて礙無きより、乃ち魔を降し、佛を成ずるに至るまで、力有ること無きに非ず、受けず、與へず、生ぜず、滅せざる等より、乃ち有爲法を捨てず、無爲法を與へざるに至るも亦是の如し。此の中に因縁を説く、「佛有るも、佛無きも、諸法の性は常住なり」と。世間の諸法の性とは、即ち是れ諸法實相なり。諸法實相とは、即ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり。若し常無常等を以て、諸法實相を求むるは、是れ皆錯と爲す。若し人法性の中に入れば、則ち錯謬有ること無く、法性は常なるが故に失せざるなり。

經

(二三) 爾の時、諸天子は虚空の中に立ち、大音聲を發して踊躍歡喜し、(二四) 溫鉢羅華、(二五) 波頭摩華、(二六) 拘物頭華、(二七) 分陀利華を以て、而して佛の上に散じ、是の如くの言を作せり。「我等は閻浮提に於いて

第二の法輪轉を見る」と。是の中に無量百千の天子は無生法忍を得たり。佛、須菩提に告げたまはく、「是の法輪は第一轉に非ず、第二轉に非ず、是の般若波羅蜜〔多〕は、轉を爲さざるが故に出て、還を爲さざるが故に出づ。無法有法空の故なり」

- 【三】 諸法實相とは般若波羅蜜多なり。
- 【三】 諸天讚じて、「我等は閻浮提に於いて、第二の法輪を見る」と言へり。
- 【四】 溫鉢羅(Utpala)
- 【五】 波頭摩(Padmā)
- 【六】 拘物頭(Kumuda)
- 【七】 分陀利華(Pundarikā)
- 【八】 第二の法輪とは、鹿苑最初の法輪に對していふなり。

と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が無法有法空の故に、般若波羅蜜(多)は轉を爲さず、還を爲さざるが故に出づるや」と。

佛の言はく、「般若波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)の相は空なり。乃至檀波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)の相は空なり。内空、内空の相は空なり。乃至無法有法空、無法有法空の相は空なり。四念處、四念處の相は空なり。乃至八聖道分、八聖道分の相は空なり。佛の十方、佛の十方の相は空なり。乃至十八不共法、十八不共法の相は空なり。須陀洹果、須陀洹果の相は空なり。斯陀含果、斯陀含果の相は空なり。阿那含果、阿那含果の相は空なり。阿羅漢果、阿羅漢果の相は空なり。辟支佛道、辟支佛道の相は空なり。一切種智、一切種智の相は空なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。亦法として得べきこと無く、轉法輪も亦法として轉すべきこと無く、亦法として還るべきこと無し。是の摩訶波羅蜜(多)の中にも、亦法として見るべきもの有ること無し。何となれば是の法は不可得なればなり。若くは轉じ、若くは還る。一切法は畢竟不生なるが故なり。何となれば、是の空相は轉すること能はず、還ること能はず。無相の相は轉すること能はず、還ること能はず。無作の相は轉すること能はず、還ること能はず。若し能く是の如くなれば般若波羅蜜(多)を説き、教詔し、開示し、分別し、顯現し、解釋し、淺易にし、能く是の如く教ふる者有らば、是を清淨にして、般若波羅蜜(多)を説くと名く、亦説く者も無く、亦受くる者も無く、亦證する者も無し。若し説くこと無く、受くること無く、證すること無く、亦滅する者無ければ、是の説法の中には、亦畢竟福田も無し」と。

釋して曰く、諸天は般若を聞いて大に歡喜踊躍す。諸天は身輕く利根にして、相を分別し著し



輕重あることを知る。般若波羅蜜「多」の畢竟清淨にして、平等實相、大に衆生を利益し、「之に」過る者有ること無きを聞く。是の故に踊躍歡喜して、身業、口業を起し、供養の具、蓮華等を持して、佛を供養したてまつり、是の言を作せり。「我等は閻浮提に於いて、第二の法輪轉を見る」と。

問うて曰はく、(一)初の說法は人をして道を得せしむれば、是を轉法輪と名け、今何を以てか第二を法輪轉と言ふや。若し佛説を以て、名けて轉法輪と爲さば、皆是れ法輪なり、何を第二に限らんや。

答へて曰はく、初の說法は定んで實に一法輪と名け、初轉より乃ち法を盡くすに至るまで、通じて名けて轉と爲す。是の諸天は、是の會中に多く人有りて、無上道を發して、無生法忍を得るを見、是の利益を見るが故に、

讚じて第二轉法輪と言ふ。初轉法輪には、八萬の諸天無生法忍を得、阿若憍陳如一人初道を得、今は無量の諸天無生法忍を得。是の故に第二法輪轉と説く。(二)今の轉法輪は初轉の如くに似たり。

問うて曰はく、(三)今の轉法輪は多くの人得道し、初轉法輪には得道の者少し、云何が大を以て小に喩ふるや。答へて曰はく、(三)諸佛の事に二種あり。一には密、二には現なり。初轉法輪に、聲聞の人は、一萬一人の初道を得るを見、諸の菩薩は無數阿僧祇の人、聲聞道を得、無數の人辟支佛道の因縁を得、無數阿僧祇の人無上道心を發し、無數阿僧祇の人六波羅蜜「多」の道を行じて諸の深三昧、陀羅尼

【一九】 第三問、般若を第二の轉法輪といふ理由如何。

【二〇】 今轉は初轉に似たり。

【二一】 第四問、今の轉法輪と初轉法輪とは、得道の人数、大に相違あり、何故に大を以て小に喩ふるか。

門を得、十方無量の衆生は無生法忍を得、無量阿僧祇の衆生は初地中より乃ち十地に至るまで住し、無量阿僧祇の衆生一出生處を得、無量阿僧祇の衆生道場に坐することを得、是の法を聞いて疾く佛道を成するを見る。是の如き等の不可思議の相は、是を密轉法輪の相と名く。譬へば大に雨ふれば大樹は則ち多く受け、小樹は則ち少しく受くるが如し。是を以ての故に、當に知るべし、初轉法輪も亦大にして、後を前に喩ふるに咎なきことを。轉法輪は一に非ず、二に非ずとは、畢竟空、及び轉法輪は、果報涅槃と爲すが故に、是の如く説くなり。是れ則ち因中に果を説く。法輪は即ち是れ般若波羅蜜「多」なり。是の般若波羅蜜「多」は、無起無作の相なるが故に、轉ずること無く、還ること無きこと、十二因縁の中に説くが如し。無明は畢竟空なるが故に、實に諸行等を生ずること能はず。無明は虚妄顛倒にして、實に定んで有ること無きが故に法の滅すべきもの無し。世間の生法を説くが故に名けて轉ずると爲し、世間の滅法を説くが故に名けて還ると爲す。般若波羅蜜「多」の中には、此の二事無きが故に轉ずること無く。還ること無しと説く。「そは」無法有法空の故なり。轉ずること無きは、是れ有法空、還ること無きは是れ無法空なり。

問うて曰はく、須菩提は何を以てか是の問を作すや、「有法無法空の故に、般若波羅蜜「多」は轉

【三】 諸佛の事に二種あり、一には密の轉法輪、二には現のそれり。

【三】 大に雨降れば、大樹は多く受け、小樹は少しく受く。

【四】 法輪は般若波羅蜜多なり。

【五】 第五問、須菩提の有法無法空の故に云云の間に對して、佛は還た何故に空を以て答へたまひしか。

を爲さず、還を爲さざるが故に出づるや」と。而も佛は還つて空を以て答へたまひしや。答へて曰く、  
 行人は説く、三六「諸法に四種の相あり。一には有と説き、二には無と説き、三には亦有亦無と説き、四  
 には非有非無と説くなり。是の中、邪憶念の故に、四種の邪行あり。此の四種に著するが故に、名け  
 て邪道と爲す。是の中に正憶念するが故に四種の正行あり。中に著せざるが故に名けて正道と爲す。  
 是の中に、有に非ず無に非ざることを破するが故に、無法有法空と名く。佛は乃至有に非ず無に非ざ  
 るを破するを説きたまふが故に、轉すること有ること無く、還ること有る  
 こと無しと説く。三〇有に非ず無に非ざることを破するに二種有り。一には  
 上の三句を用つて破し、二には涅槃實相を用つて破す。須菩提は佛の涅槃  
 を以て有無を破したまふを知ると雖も、是の中に新發意の菩薩ありて、或  
 は錯謬するが故に三句を用つて、有に非ず無に非ざるとを破せり。無法有  
 法空の中に於いて還つて邪見を生ずるが故なり。佛説きたまはく、「有法無法も亦自相空なり」と。是  
 の故に、「般若波羅蜜多」は轉すること無く還ること無し」と説く。般若波羅蜜多の中には、般若波  
 羅蜜多の相無し、一切の法は無相なるが故なり。乃至檀波羅蜜多も亦是の如く、内空、乃至一切  
 種智の相の空なるも亦是の如し。爾の時に、須菩提及び大衆は歡喜し、般若波羅蜜多を讀じて是の  
 言を作せり、「大波羅蜜多」と。所謂般若波羅蜜多なり。大波羅蜜多とは、所謂一切の法は、自

【三六】 諸法には四種の相あり、  
 一には有、二には無、三には  
 亦有亦無、四には非有非無な  
 り。  
 【三〇】 非有非無を破するに二種  
 あり。

性空なりと雖も、而も般若波羅蜜(多)は、能く菩薩を利益して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、得と雖も亦所得無く、法輪を轉ずと雖も、亦轉ずる所無きなり。

問うて曰はく、(二六) 若し諸法空ならば、般若波羅蜜(多)も空、阿耨多羅三藐三菩提も亦空にして、般若を讚じて摩訶波羅蜜(多)と爲すべからず。答へて曰はく、此の中に、「一切の法は自性空なり」と説く。故に自性空の中にも、亦自性空無し。是の故に摩訶波羅蜜(多)と名く。若し空相無ければ難を作すべからず。畢竟空なるを以ての故に、破する所無く、而も能く諸の善法を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得。世俗法の故に第一義に非ず。諸佛は法を説き、他をして道を得煩悩を破せしめ、此より彼に至るを名けて轉と爲すと雖も、今我等は諸の煩悩(を以て)虚誑、顛倒、妄語して定相あること無し。若し定相無くんば何の斷ずる所とか爲ん。若し斷ずる所無くんば、亦轉ずること無く還ること無し。是の故に、法輪を轉ずると雖も、亦轉じ還ること無しと説く。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中には、法有りて、五眼の、能く若くは轉じ、若くは還るを見るところ無し。一切法は本より已來、畢竟不生なるが故なり。是の自性空は、畢竟空にして轉相に非ず、還相に非ず。常に墮することを畏るるが故に轉せず、滅に墮することを畏るるが故に還らず、有に墮することを畏るるが故に轉せず、無に墮することを畏るるが故に還らず、世間に著することを畏るるが故に轉せず、涅槃に著することを畏るるが故に還らず。

【二六】第六問、諸法空ならば、何を以てか般若を讚じて、摩訶波羅蜜多と言ふか。

是の如く自性空、畢竟空、十八空等の無量の諸空、是の空解脱門は轉せず還らず、無相無作たるも、  
 亦是の如し、是の三解脱門に入りて、我、我所の心を捨つる、是を名けて解脱を得と説く。能く是の  
 如く相を取らず、心に著せざれば、般若波羅蜜〔多〕を説くなり。〔元〕教照等の説は若くは文を案じ、若  
 くは口に傳ふるなり。教とは、人の爲に般若を讚じて受持し、讀誦し、正憶念せしむるなり。照とは  
 人の燈を執りて物を照らすが如く、若し人般若を知らざれば、智慧を以て明に之を照らして知らしむ  
 るなり。〔三〕聞とは、寶藏の門を開れば、好物ありと雖も、而も得ること能はず、若し其の門を開けば  
 意に隨つて取る所あるが如く、人の疑つて般若を信せざる如きを、邪疑の  
 扉を開き、無明の關を折れば、是の人は則ち意に隨つて取る所あり。示と  
 は、人の眼に視て、明らかならざれば、指して好醜を示すが如く、人の小  
 信小智有る者に、是道、非道、是れ利、是れ失等と示すが如し。〔三〕分別と  
 は、諸法の是れ善、是れ不善、是れ罪、是れ福、是れ世間、是れ涅槃の經書を分別して、略説し解し  
 難く信じ難きを、能く爲に分別解説して、信解することを得せしむ。〔三〕顯現とは、佛は種種の衆生の  
 爲に、種種の法を説きたまひ、或時は善法を毀訾して不善法を助け、輕重の相を知らしむ。〔三〕解釋とは、  
 まひ、説法者は佛意を説きて趣ち以て衆生に應じ、輕重の相を知らしむ。〔三〕解釋とは、囊中の寶物の  
 如きは、口を繋げば則ち人知らず、若し人の爲に、經卷の囊を解きて、義理を解釋し、又重物を披き

〔元〕 教照の義解。

〔三〕 開示の義解。

〔三〕 分別の義解。

〔三〕 顯現の義解。

〔三〕 解釋の義解。

拵つちかちて、輕かろからしむるが如ごとく、種種しゆじゆの因緣いんねん、譬喻ひゆ「を以て」本末ほんまつを解釋げしやくして、解げし易やすからしむ。〔三〕淺易せんやく  
 とは、深水じんすゐは渡わたり難がたきも、人ひとあり、此この水みづを分散さんさんして淺あさまからしむれば、則すなはち渡わたる者もの皆みな易やすきが如ごとく、般はん  
 若波羅蜜にほらみつた「多」は、水みづの甚はなはだ深ふかきが如ごとく、論議ろんぎの方便ほうべん力の故ゆゑに、種種しゆじゆに説といて、能よく淺易せんやくならしむれば、  
 乃すなはち小智せうちの人ひとに至いたるまで皆みな能よく信解しんげす。能よく十種じゆしゆを以て首はじめと爲なして甚深じんじんの  
 義ぎを説とく。これし清淨じやうじやうに般はん若波羅蜜にほらみつた「多」の義ぎを説とくと名なく。第一だいいち義ぎの中なかには  
 實じつに所説しよせつ無なく、畢竟ひつぎやう空くうなるが故ゆゑに、説とくこと無なく、説とくこと無なきが故ゆゑに受  
 くること無なく、受うくること無なきが故ゆゑに證しやうすること無なく、證しやうすること無なきが  
 故ゆゑに諸しよの煩惱ぼんノウを滅めつする者ものなし。若もし煩惱ぼんノウを滅めつする者もの無なければ、則すなはち福田無ふくでん  
 し。受うくとは、信受しんじゆし讀誦どくじゆして是この法ほふを行ぎやうするに名なけ、沙門果しゃもんくわ、無生法忍むじやうほふにん  
 を得うる、是これを名なけて證しやうと爲なし、證しやうする時諸しよの煩惱ぼんノウ滅めつして有餘涅槃うよねはんを得うる。有  
 餘涅槃うよねはんを得うるが故ゆゑに是れ畢定福田ひつぢやうふくでんなり。畢定ひつぢやうとは、諸法しよほふは無餘涅槃むよねはんの性じやうに  
 同おなじきが故ゆゑに、畢定福田無ひつぢやうふくでんしと説とく。

意いしよはらみつたはんたい  
 諸波羅蜜「多」品第四十四を釋す。

釋

爾その時ときに慧命須菩提、佛ぼつに白まをして言まをすく、「世尊せそんよ、〔三六〕無邊波羅蜜「多」は是れ般若波羅蜜「多」なり」と。佛ぼつの言まをはく、「虚

〔三四〕 淺易の義解。  
〔三五〕 此の品には、須菩提、十の波羅蜜多を列れて、般若を讚歎し、佛一一その義を示し給ふ。これ此の品名ある所以なり。他本には、或は遍歎品、百波羅蜜多品、百波羅蜜多遍歎品に作れり。  
〔三六〕 須菩提、無邊等の義を以て般若を讚す、此に列ゆる所十七波羅蜜多なり。

空の如く無邊なるが故なり」と。「世尊よ、等波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「諸法は等しきが故なり」と。「世尊よ、離波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「畢竟空なるが故なり」と。「世尊よ、不壞波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無彼岸波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「名無く身無きが故なり」と。「世尊よ、空種波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「入出の息は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不可説波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「覺觀は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無名波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「受想行識は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不去波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「一切法は來らざるが故なり」と。「世尊よ、無移波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「一切法は伏すべからざるが故なり」と。「世尊よ、盡波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「一切法は來らざるが故なり」と。「世尊よ、不生波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「一切法は不生なるが故なり」と。「世尊よ、無作波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「作者は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無知波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「知者は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不到波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「生死は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不失波羅蜜多」は是れ般若波羅蜜多なり」と。佛の言はく、「一切法は失せざるが故なり」と。

論

因つて自ら般若を讚じて摩訶波羅蜜多」と爲す、又智慧を以て深く種種の法門に入りて、般若波羅蜜

【三七】 般若波羅蜜多を無邊波羅蜜多なりと讚する理由。

〔多〕は、大海の水の如く無量無邊なるを觀し、深く般若波羅蜜〔多〕の功德を知り因つて大歡喜心を發し、種種の因縁を以て般若を讚歎せんと欲す。是の故に佛に白して言さく、「世尊よ、無邊波羅蜜〔多〕は是れ般若波羅蜜〔多〕なり」と。無邊の義は品の初より竟に至るまで皆是れ無邊の義なり。餘事を説くことを妨ぐるが故に略して説く。若し廣く説かば則ち無量なり。

復次に、常は是れ一邊、無常も是れ一邊にして、我無我有無世間の有邊無邊衆生の有邊無邊是等の如き法を名けて、邪見の邊と爲す。般若波羅蜜〔多〕を得れば、則ち是の諸邊無きが故に、無邊と言ふ。

復た次に、譬へば、物の盡くる處を名けて有邊と爲し、虚空は無色無形なるが故に、無邊なるが如く、般若波羅蜜〔多〕は、畢竟清淨なるが故に、邊あること無く、盡くる處あること無く、取る處あること無く、受くる處あること無く、著する處無し。是の故に佛答へたまはく、「虚空の如く無邊なるが故に、般若波羅蜜〔多〕も亦無邊なり」と。

菩薩は法忍を得て、一切法を觀するに皆平等なり。是の故に、一切法は等しきが故に等波羅蜜〔多〕と言ふと説く。菩薩は畢竟空心を用つて諸の煩惱を離れ、亦諸法をも離る。是の故に離波羅蜜〔多〕と名く。菩薩は是の般若波羅蜜〔多〕の總相別相を用つて、諸法を求むるに定相を得ず、毛髮許の如きも、不可得なるを以ての故に、一切法に於いて心著せず。若し邪見戲論

- 【三八】 無邊の義解第一。
- 【三九】 無邊の義解第二。
- 【四〇】 等波羅蜜多の意義。
- 【四一】 離波羅蜜多の意義。
- 【四二】 不壞波羅蜜多の意義。

の人ありて、邪見戲論を用つて、是の菩薩を破壞せんと欲するに、是の菩薩は著する所無きが故に破壊すべからず。是れを不壞波羅蜜〔多〕と名く。〔四三〕此岸を名けて生死と爲し、彼岸を涅槃と名け、中に

諸の煩惱の大河有り、一切の出家の人は、此岸を捨てんと欲して、彼岸に貪著す。而して般若波羅蜜

〔多〕には彼岸無し。彼岸は是れ涅槃にして無色無名なり。是の故に無色無名と説き、故に是を無彼岸

波羅蜜〔多〕と名く。〔四四〕虚空有れば、則ち出入の息有り、出入の息は、皆虚誑の業因縁より生じ、出づ

る者は入るに非ず、入る者は出づるに非ず、念念に生滅する不可得の實相

なり。息は不可得なるが故に一切法も亦不可得なり。不可得なるが故に空

種波羅蜜〔多〕と名く。〔四五〕一切法は空寂の相なるが故に覺觀を須ゐず、覺觀

無きが故に則ち言説無く、言説無きが故に、般若波羅蜜〔多〕は語言の道を

斷すと説く。是の故に不可説波羅蜜〔多〕と名く。〔四六〕二法は一切法を攝す。

所謂名と色なり。四大及び造色は、色の攝する所、受等の四衆は名の攝する所なり。諸法を分別する

者は、般若波羅蜜〔多〕は是れ智慧の相なりと説く、故に名に攝せらる。今實に色を離れず、是を不離

と名け、名は是れ色、是の般若波羅蜜多は、相知無きが故に受想行識は不可得なりと説く。故に無名

波羅蜜〔多〕と名く。〔四八〕一切法は、無來無去なるが故に、無去波羅蜜〔多〕と名く。般若波羅蜜〔多〕は、

是れ三世十方の佛の法藏にして、三法印を以て印し、無天、無人能く破するが故に、無移波羅蜜〔多〕

- 〔四三〕 無彼岸波羅蜜多の意義。
- 〔四四〕 空種波羅蜜多の意義。
- 〔四五〕 不可説波羅蜜多の意義。
- 〔四六〕 無名波羅蜜多の意義。
- 〔四七〕 不去波羅蜜多の意義。
- 〔四八〕 無移波羅蜜多の意義。

と名く。〔兜の有り法は、念念に盡く滅して、住する時有ること無し。若し爾れば過去の法は盡きず、未來の法も亦盡きず、現在の法は住せざるが故に盡きず、三世盡く不可得なるが故に、名けて畢竟盡と爲し、畢竟盡の故に盡波羅蜜〔多〕と名く。〔一〕一切法は三世の中より生じて、不可得なるが故に無生なり、無生なるが故に無生波羅蜜〔多〕と名く。〔二〕不滅波羅蜜多も亦是の如し。〔三〕作に二種あり。一には衆生作、二には法作なり、衆生作とは、布施持戒等なり。法作とは、火の燒き、水の爛らする心識の所知なり。〔四〕無生は空なるが故に作者無く、一切法は鈍にして不起不作の相なるが故に法も亦不作なり。是の二無作なるが故に、無作波羅蜜〔多〕と名く。〔五〕無知波羅蜜〔多〕も亦た是の如し。一切法は鈍なるが故に、所知無し。〔六〕天眼は生死有ることを見る。空の慧眼を用つて生死を見るに不可得なり。生死は不可得なるが故に今世の衆生は死して後世に到る者なく、但五衆の先業の因縁相續の生なるが故に不到波羅蜜〔多〕と名く。〔七〕般若若波羅蜜〔多〕は諸法實相を失せず、亦能く一切法をして實相を失せざらしむ。般若波羅蜜〔多〕を離れば一切法は皆失す。一切法の實相を觀すれば、般若波羅蜜〔多〕を得。是の故に不失波羅蜜〔多〕と名く。

- 〔四九〕 盡波羅蜜多の意義。
- 〔五〇〕 無生波羅蜜多の意義。
- 〔五一〕 不滅波羅蜜多の意義。
- 〔五二〕 二種の作。
- 〔五三〕 無作波羅蜜多の意義。
- 〔五四〕 無知波羅蜜多の意義。
- 〔五五〕 不到波羅蜜多の意義。
- 〔五六〕 不失波羅蜜多の意義。



羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「衆生は無所有なるが故なり」と。「世尊よ、斷波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「諸法は不起なるが故なり」と。「世尊よ、無二邊波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「二邊を離るるが故なり」と。「世尊よ、不取波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「聲聞・辟支佛地を過切法は不離なるが故なり」と。「世尊よ、不分別波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「諸の妄想は不可得なるが故なるが故なり」と。「世尊よ、無量波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は無所有なるが故なり」と。

釋して曰はく、須菩提は般若波羅蜜(多)を讚じて衆生に示す。世間は空にして夢の如し、佛の言はく、夢も亦不可得なるが故に夢波羅蜜(多)と名くと。響・影・焰・幻も亦是の如し。人は心に聲を以て實と爲し、響を以て虚と爲し、影は面鏡を以て實と爲し、像を虚と爲す。燄は風・塵・日光を以て實と爲し、水を虚と爲す。幻は祝術を以て實と爲し、祝術の所作を以て虚と爲す。須菩提は般若を讚じ、喩を以て空と爲す。佛の言はく、喩の本事は皆空なり。本事皆空なるが故に是の喩も亦空なり。是の般若波羅蜜(多)には垢なく、能く一切の垢を斷滅すと、佛の言はく、諸の煩惱は本より已來常に無なり。今に何の斷ずる所あらんと。是の故に無垢波羅蜜(多)と名く。無淨波羅蜜(多)も亦是の如し。煩惱無ければ即ち是れ淨なり。姪欲瞋恚等の、諸の煩惱を名けて汗と爲す。是の般若波

論

釋して曰はく、須菩提は般若波羅蜜(多)を讚じて衆生に示す。世

【五】 夢・響・影・焰・幻波羅蜜多の意義。

【六】 無垢無淨波羅蜜多の意義。

【七】 不汗波羅蜜多の意義。

羅蜜(多)は一切の垢法の汗さざる所なり。六情は是れ諸の煩惱の處、六情及び一切法は諸の煩惱の縁處住處なり。皆不可得なるが故に、不汗波羅蜜(多)と名く。是の般若波羅蜜(多)を得れば一切の戲論憶想分別滅するが故に、不戲論波羅蜜(多)と名く。一切法は畢竟空なるが故に、憶無く念想なし。憶無く念想なきが故に、無念波羅蜜(多)と名く。菩薩は一切の論議する者の勝つこと能はざる所、一切の結使、邪見の覆ふ能はざる所、一切法の無常にして破壊するも心ころ憂を生ぜず。是の如き等の因縁の故に、不動波羅蜜(多)と名く。(四)一切法は妄解にして、但愛染のみに非ざるが故に、無染波羅蜜(多)と名く。

憶想分別は、是れ一切の結使の根本にして、結使有りて能く後身の業を起し、憶想分別の虚妄なることを知れば、一切後生の生業、更に復た起らず、故に是れを不起波羅蜜(多)と名く。(六)般若波羅蜜(多)の中には、三毒の火相を取らざるが故に寂滅波羅蜜(多)と言ふ。佛の言はく、(七)但三毒の相寂滅なるのみに非ず、一切の法相は不可得なるが故に、是の般若波羅蜜(多)より、乃ち善法中に至るまで尙負らず、何に況んや餘の欲をやと。佛の説きたまはく、「欲は本より已來、不可得なるが故に、貪欲は虚誑にして、自性は不可得なるが故に、無欲波羅蜜(多)と名く。是れ欲を離るるに非ざるが故に無欲と名く。(八)瞋

悲の性は、畢竟無所有なるが故に、無瞋波羅蜜(多)と名く、是れ瞋を離るるに非ざるが故に無瞋と名

- 【六一】 不戲論波羅蜜多の意義。
- 【六二】 無念波羅蜜多の意義。
- 【六三】 不動波羅蜜多の意義。
- 【六四】 無染波羅蜜多の意義。
- 【六五】 不起波羅蜜多の意義。
- 【六六】 寂滅波羅蜜多の意義。
- 【六七】 無欲波羅蜜多の意義。
- 【六八】 無瞋波羅蜜多の意義。

一切法の中の、無明の黑暗を破するが故に、無癡波羅蜜(多)と名く。是れ癡を滅するに非ざるが故に無癡と名く。無煩惱波羅蜜(多)とは、菩薩は無生法忍を得るが故に、一切の煩惱を滅す。佛の言はく、「憶想分別は是れ煩惱の根本なり。憶想すら尚無し、何に況んや煩惱をや」と。故に無煩惱波羅蜜(多)と名く。(三)般若は能く破す。衆生無なる中に、衆生有りて顛倒するが故に、無衆生波羅蜜(多)と名く。佛の言はく、「是の衆生は本より已來、不生にして所有無きが故に、無衆生と名く」と。

須菩提意へらく、「般若波羅蜜(多)は、能く一切の有漏法を斷ずるを以ての故に、斷波羅蜜(多)と名く」と。佛の言はく、「諸法は不起不生、所作無く、諸法は自然に斷相なるが故に斷と名く」と。(三)二邊とは、所謂我無我、斷無斷、可斷法無斷法、常滅、有無、是の如き等の無量の二邊なり。般若波羅蜜(多)の中には、是の諸邊無きが故に、無二邊波羅蜜(多)と名く。佛の言はく、「是の諸邊は本より已來無にして、但虚誑顛倒を以ての故に著す。菩薩は實事を求むるが故に是の顛倒の邊を離る。是の般若波羅蜜(多)は一相にして空なるが故に破すべからず」と。佛の言はく、(四)但般若波羅蜜(多)のみにあらず。一切法には皆定異の相無し。果は因を離れず、因は果を離れざるが如く、有爲法は無爲法を離れず、無爲法は有爲法を離れず、般若波羅蜜(多)は一切法を離れず、一切法は般若波羅蜜(多)を離れず、一切法の實相は、即ち是れ般若波羅蜜(多)なるが故に、

【六九】 無癡波羅蜜多の意義。

【七〇】 無煩惱波羅蜜多の意義。

【七一】 無衆生波羅蜜多の意義。

【七二】 無斷波羅蜜多の意義。

【七三】 無二邊波羅蜜多の解。

【七四】 不破波羅蜜多の意義。

不破波羅蜜〔多〕と名く。破とは、所謂諸法は各各離散し、一切法は常無常等の過失あり、是の故に般若波羅蜜〔多〕は、一切法を取らず。佛の言はく、一切法は乃至二乗、出世間の清淨法をも亦取らざるが故に不取波羅蜜〔多〕と名くと。分別とは、相を取るに名け、心を生じて妄想分別するなり。般若は是れ實相なるが故に是の妄想分別無し。佛の言はく、憶想分別に因りて有無を分別す。今憶想分別は、本より已來無なるが故に、無分別波羅蜜〔多〕と名くと。般若波羅蜜〔多〕は四無量を出すが故に無量波羅蜜〔多〕と名く。復次に、畢竟空は涅槃の無量法を得るが爲の故に無量と名く。

復次に、智慧の到る能はざる所の邊崖、是を無量と名く。籌量は六情の度する所に名く。是の法空は無相にして生滅無く、六情の量ること能はざる所なり。何となれば物は多く、而も量器は小なるが故なり。佛の言はく、但是の般若波羅蜜〔多〕のみ無量なるに非ず、色等の一切法は、不可得なるが故に、皆無量なり。虚空の無色無形にして、能く作す所無きが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦是の如し。佛の言はく、「但虚空のみ無所有なるに非ず、色等の諸法は皆無所有なるが故に、虚空波羅蜜〔多〕と名くと。」

- 【七五】 不取波羅蜜多の意義。
- 【七六】 無分別波羅蜜多の意義。
- 【七七】 無量波羅蜜多の意義。
- 【七八】 虚空波羅蜜多の意義。
- 【七九】 以下出世間の淨法に就て四十八の波羅蜜多を明す。

「世尊よ、无常波羅蜜〔多〕に、是れ般若波羅蜜〔多〕なり」と。佛の言はく、「一切法は破壊なるが故なり」と。「世尊よ、苦

波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は苦惱の相なるが故なり」と。「世尊よ、無我波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法に著せざるが故なり」と。「世尊よ、空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無相波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は不生なるが故なり」と。「世尊よ、内空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「内法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、外空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「外法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、内外空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「内外法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、空空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「第一義空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、有爲空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「有爲法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無爲空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「諸法は畢竟不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無始空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「諸法の無始は不可得たるが故なり」と。「世尊よ、散空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「散空は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、性空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「有爲法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、諸法空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「無所得空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「無所有なるが故なり」と。「世尊よ、自相空波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「自相を離るるが故なり」と。「世尊よ、無法空波羅蜜(多)は是



の言はく、「定亂は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「藥慧は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、十力波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は伏すべからざるが故なり」と。「世尊よ、無所畏波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「道種智は没せざるが故なり」と。「世尊よ、無礙智波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は無障、無礙なるが故なり」と。「世尊よ、佛法波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法を過ぐるが故なり」と。「世尊よ、如實說波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法は自然波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法中に自在なるが故なり」と。「世尊よ、佛波羅蜜(多)は、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。佛の言はく、「一切法、一切種智を知るが故なり」と。

釋して曰はく、

般若波羅蜜(多)の中に、無常の聖行有り、故に無

【八〇】 無常波羅蜜多の意義。  
 【八一】 第七問、上に智度の法性常性なるを説き、今却つて無常を説くは何故なるか。

常波羅蜜(多)と名く。佛の言はく、但般若の中にのみ無常あるに非ず、一切法の無常を觀するが故に、無常波羅蜜(多)と名くしと。

問うて曰はく、上來、般若波羅蜜(多)の法性常住なることを説けり。今何を以てか無常なりと

説くや。答へて曰はく、般若波羅蜜(多)は是れ智慧觀法なり。因縁和合より生ず。是れ有爲法なるが故に無常なり。般若波羅蜜(多)の所緣處なる、如法性實際は無爲法なるが故に常なり、須菩提は有爲の般若を説くが故に、般若は無常なりと言ふ。

問うて曰はく、(八二)若し爾らば、佛は何を以てか、一切法は盡く是れ破壊し無常にして、無爲法は破壊無きの相なりと説きたまへるや。答へて曰く、一切法は六情に名く。内外は皆是れ作法なり。作法なるが故に必ず破壊の相に歸す。有爲法を離れて無爲法無く、亦更に法相有ること無し。有爲法相に因るが故に無爲法は不生不滅なりと説く。

復次に、一切の有爲法に二種あり。一には名字一切、二には實の一切なり。一切の有爲法は破壊するが故に、一切の無常苦等に名く。乃至、無法有法空も亦是の如し。須菩提は一切の法相を説いて般若を讃じ、佛は一切法を擧げて答へたまへり。

正しく身等を觀することは、四念處より生じ、四念處は是れ四諦の初門、四諦は是れ四沙門果の初門。阿羅漢果は分別すれば、即ち是れ三乘なり。

四念處は般若波羅蜜(多)の中に種種に廣く説けり。(八三)佛の言はく、是の四種の法の緣處は、本より已來、皆不可得なるが故に、念處波羅蜜(多)と名

くしと。四正勤乃至般若波羅蜜(多)も亦是の如し。

問うて曰はく、(八四)餘法を以て般若を讃ずべし、云何が復た般若を以て般若を讃ずるや。答へて曰はく、(八五)二種の般若あり。一には常住の般若、二には五波羅蜜(多)と共に行じて般若波羅蜜(多)を用ふ

ること有り。須菩提の讚するは般若波羅蜜(多)を用つて能く無明の黒闇を破し、能く眞智慧を與ふる

- 【八二】 第八問、若し爾らば、佛が無爲法は破壊なきの相と説き給ひし理由如何。
- 【八三】 念處波羅蜜多の意義。
- 【八四】 第九問、般若を以て般若を讃する理由如何。
- 【八五】 二種の般若。

こと有り。是の故に佛は常住般若波羅蜜〔多〕を説きたまへり。癡と慧とは、不可得なるが故なり。是の般若波羅蜜〔多〕を行ずる菩薩は、初に菩薩の十力を得、後に佛の十力を得。是の故に、十力波羅蜜〔多〕を説く。佛の言はく、「但十力の者のみ破すべからず、伏すべからざるに非ず、一切法の實相も亦破すべからず、亦伏すべからず」と。佛意は衆生の爲の故に十力を説きたまへり。佛力は無量無邊なり。佛力の如く、一切法の實相も、亦是の如し。伏すべからざるが故に、十力波羅蜜〔多〕と名く。〔六六〕菩薩は是の般若波羅蜜〔多〕の力を得て、佛前に於て能く説法論議す、何に況んや餘處をや。尙ほ魔王をすら畏れず、何に況んや外道をや。故に無所畏波羅蜜〔多〕と名く。佛の言はく、「道種智は没せざるが故に、道種智は法眼に名く」と。一切衆生の何の道を以て涅槃を得るかを知るなり。般若波羅蜜〔多〕は常寂滅の相にして不可説なり。此の菩薩は道種智を以ての故に衆生を引導し、大衆の中に於いて師子吼し、道種智を増益するが故に没せず、畏るる所無く、自ら我に是の法ありて無畏波羅蜜〔多〕と名くと憍慢せず。須菩提は佛より法を聞き、畏るること無きこと、轉た深きが故に、般若波羅蜜〔多〕を讀じて無礙波羅蜜〔多〕と言ふ。佛の言はく、「但四無礙のみに非ず。一切法は如法性實際に入るが故に、皆是れ無礙相なり」と。菩薩は般若波羅蜜〔多〕に因りて、能く十力四無所畏四無礙智大慈大悲等の諸の佛法を集むるが故に、佛波羅蜜〔多〕を説く。佛の言はく、聲聞法は凡夫法より勝れりと爲し。辟支佛法は聲聞法より勝れりと

【六六】 無畏所波羅蜜多の意義。  
 佛法波羅蜜多の意義。

爲し、佛法は一切の法に於て最勝なり。一切の色中にて虚空は廣大なるが如く、佛法は最勝にして、能く及ぶもの無く、喩ふべきもの無し。一切法を過ぐるが故に佛法波羅蜜〔多〕と名く。〔八六〕過去佛の六波羅蜜〔多〕を行じて、諸法の如相を得たまふが如く、今佛も亦是の如し。六波羅蜜〔多〕を行じて佛道を得たまへり。故に多陀阿伽陀波羅蜜〔多〕と名く。多陀阿伽陀とは、或は如來と言ひ、或は如實説と言ひ、或は如實知と言ふ。此の中に佛の説きたまはく、「但だ佛説を如實説と名くるのみに非ず、一切の語言は、皆是れ如實なるが故に、如實説波羅蜜〔多〕と名く」と。〔八七〕是の般若波羅蜜〔多〕を具足し、後身に自然に作佛するが故に、自然波羅蜜〔多〕と名く。自然を佛と名け、佛の説きたまふ所なるが故に、自然波羅蜜〔多〕と名く。

復次に 是の般若波羅蜜〔多〕の實相は自然にして他に由りて作らざるが故に自然と名く。佛の言はく、「佛は一切法の中にて、自在力を得たまふが故に、自然波羅蜜〔多〕と名く」と。〔八八〕十地を具足し、十力四無所畏を得、法輪を轉じ、法鼓を撃つて、世間の無明に睡れる衆生を覺するが故に、名けて佛波羅蜜〔多〕と爲す。〔八九〕佛は秦には覺者、知者と言ふ。何者が是なる。所謂正しく一切法、一切種を知るが故に覺と名く。一切法とは、所謂五衆十二入十八界等なり。

また次に、一切法は、外道の經書、伎術、禪定等に名け、略説するに五種あり。所謂、凡夫法、聲聞

- 〔八六〕 如來波羅蜜多の意義。
- 〔八七〕 自然波羅蜜多の意義。
- 〔八八〕 自然の義解。
- 〔八九〕 佛波羅蜜多の意義。
- 〔九〇〕 佛陀即ち覺者の意義。

法、辟支佛法、菩薩法、佛法なり。佛には略して知るに二種の相あり。所謂總相と別相となり。又分別相と畢竟空相とを以てす。廣く知れば則ち一切種なり。一切種は是れ一切無量無邊の法門なり。是の事を以ての故に、名けて佛波羅蜜(多)と爲す。佛身を以ての故に、名けて佛波羅蜜(多)と爲すにあらず、但一切種智を以ての故なり。

# 卷の第六十六

## 二 歎信行品第四十五の上を釋す。

經

爾の時に、釋提桓因は是の念を作さく、「若し善男子、善女人、般若波羅蜜(多)經を聞く耳を得ば、是の人は前世に佛の所に於て、功德を作し、善知識と相隨ふ。何に況んや受持し、親近し、讚誦し、正憶念し、説の如く行ぜんをや。當に知るべし。是の善男子、善女人は、多く諸佛に親近し、能く聽受し、乃至正憶念し、説の如く行じ、能く問ひ、能く答ふるを得ることな。當に知るべし、是の善男子善女人は、前世に於て、多く諸佛を供養し親近するが故に、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、驚かず怖かず畏れずと。當に知るべし、是の人は亦無量億劫に於いて、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行ぜりと。」

【一】此の品には、般若の聞持信行を讚す、これ此の品名ある所以なり。他本には聞持品、又は經耳聞持品に作れり。

【二】先づ般若を聞持すると、聞持せざるとの罪福を辨じ、般若の禮すべき所以を説く。

爾の時に、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善男子善女人ありて、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、驚かず、怖かず、畏れず、聞き已つて受持し、親近し、説の如く習行せば、當に知るべし、是の善男子善女人は、阿耨跋致の菩薩摩訶薩の如しと。何となれば世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は甚深なればなり。若し先世に久しく檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行ぜずんば、終に深般若波羅蜜(多)を信解すること能はず。世尊よ、若し善男子、善女人有りて、深般若波羅蜜(多)を特敬せば、當に知るべし、是の人は前世にも、亦た深般若

波羅蜜(多)を毀壞すと。何となれば、是の善男子、善女人は、深般若波羅蜜(多)を説くを聞く時、信すること無く、樂ふこと無く、心清淨ならざればなり。當に知るべし、是の善男子、善女人は、先世に諸佛及び弟子に問はず難せず、「所謂」、云何が應に檀波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行すべきや。云何が應に内空を修すべきや。乃至云何が當に無法有空を修すべきや。云何が應に四念處を修すべきや。乃至云何が應に入聖道分を修すべきや。云何が應に佛の十力を修すべきや。乃至云何が應に十八不共法を修すべきや」と。

釋提桓因、舍利弗に語るらく、「是の深般若波羅蜜(多)は、若し善男子、善女人ありて、久しく檀波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行ぜず、内空乃至無法有空を行ぜず、四禪・四無量心・四無色定を行ぜず、四念處乃至八聖道分を行ぜず、佛の十力乃至十八不共法を行ぜずんば、是の如き人は是の般若波羅蜜(多)を信解せず、何の恆むべきことが有らん。大徳舍利弗よ、我は般若波羅蜜(多)を禮す。般若波羅蜜(多)を禮するは、是れ一切智を禮するなり」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。橋尸迦よ、般若波羅蜜(多)を禮するは、是れ一切智を禮するなり。何となれば、橋尸迦よ、諸佛の一切智は、皆般若波羅蜜(多)より生じ、一切智は即ち是れ般若波羅蜜(多)なればなり。是を以ての故に、橋尸迦よ、善男子、善女人は、一切智に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)に住すべし。若し善男子、善女人にして、道種智を生ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし。一切の諸の結及び習を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし。善男子、善女人にして、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし。善男子、善女人にして、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし。衆生をして須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし。

欲せば、當に般若波羅蜜(多)を修行すべし。若し善男子、善女人、衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんと欲し、若くは比丘僧を總攝せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を修行すべし」と。

論

釋して曰はく、釋提桓因は是れ諸天の主なり。利根にして智勝れ、佛法を信するが故に、倍

復増益す。火の風を得れば、愈更に熾盛なるが如し。須菩提、種種の因縁を以て、般若波羅蜜(多)

を讀じ、佛の深理を以て、其の讀する所を成じたまふを聞き、帝釋は希有の心を發して、是の念を作

さく、**【三】**「若し善男子、善女人、般若經を聞く耳を得る者も、是の人は前世に於いて、多く諸佛を供養したてまつりて大功德を作し、今世に好師、

同學等の善知識に遇ふことを得。先世に佛を供養するを因とし、今世の善知識を縁とするが故に、般若波羅蜜(多)を聞いて能く信ず。何に況んや讀誦し、思惟し、正憶念し、禪定を修習し、義趣を籌量分別して、能く事を

成辦する者をや」と。當に知るべし、是の人は過去の諸佛及び弟子より深般

若波羅蜜(多)の義を聞き、信受して怖かす畏れざるなり。何となれば、是の人は無量阿僧祇劫に於いて、六波羅蜜(多)等の諸の功德を行す。是の故に未だ阿鞞跋致地を得ずと雖も、深法の中に於いて、

疑はず悔いざればなり。**【四】**譬へば、新擧乾毘は風に隨つて東西し、濕毘練緻は則ち動すべからざるが

如し。新發意の菩薩も亦是の如く、久しく徳を修し福を作さざれば、淺薄にして他人の語に隨ひ、般

**【三】** 耳に聞いて能く信する者は、先世に多く諸佛を供養し、今世に善知識に遇ふ。何に況んや讀誦し思惟するをや。  
**【四】** 新發意の菩薩は、新擧乾毘の風に隨つて動くが如く、舊菩薩は濕毘練緻の動かざるが如し。

若波羅蜜(多)を信受すること能はず。若し久しく福德を修すれば、他語に隨はずして、則ち能く深般  
 若波羅蜜(多)を信受し、驚かず怖かず」と。帝釋は思惟すらく、「般若波羅蜜(多)を念ずるに、無量の功  
 徳有り」と。時に舍利弗は帝釋の念ずる所を知り、而して佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女  
 人は、未だ菩薩位に入らずと雖も、能く深般若波羅蜜(多)を信受して、驚かず、怖かず、説の如く行  
 ず。是の人は大福德・智慧・信力の故に、當に知るべし、阿鞞跋致の如くにして、異なること無し」と。  
 此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「般若波羅蜜(多)は甚深にして相無く、取るべく信すべく受く  
 べし。若し能く信受すれば、是を希有と爲すと、人の空中に種を植うる、  
 是を甚だ難しと爲すが如し」と。一切の凡人は勝法を得れば、則ち本事を  
 捨つ。禪定の樂を得れば、五欲の樂を捨て、乃至有頂處に依りて、無所有處の功德を捨つるが如し。  
 依止する所無ければ、而も捨つる所有ること能はず。尺蠖の條を尋ねて前足を安じ、後足を進め、  
 樹の端を盡くせば、更に依止する所無くして、本處に還歸するが如し。是の菩薩は、未だ道を得ざれ  
 ば、般若波羅蜜(多)に於いて、依止する所無く、而も能く福德を修し、五欲を捨つ。是の事は希有な  
 り。是の中に因縁を説く。是の人は先世に信受して、久しく六波羅蜜(多)を行じ、大に諸の福德を  
 集む。信と相違すれば、則ち般若も毀皆す。福德を厚くする者の久しきより積集するが如く、不信に  
 して毀皆する者も亦久しきより習ふ。

【五】尺蠖の本處に歸る喩。

問うて曰はく、若し先世に毀咎し誹謗せば、應に地獄に墮すべし。何の縁あつてか復た般若を聞くことを得るや。答へて曰はく、有人の言はく、「是の人は地獄に墮し罪畢り還り來りて毀咎す。次の後身を説かず」と。有人の言はく、「作業を積集すること厚重なれば、則ち能く果報を與ふ。是の人は前世に信せずと雖も、而も業を積むこと、未だ厚からざれば、則ち未だ果報を得ず。餘の福德を以ての故に人中に生じ、續いて復信せず」と。

復次に、有人の言はく、「五逆罪は次後の身に必ず餘罪を受くることは爾らず。或は次の後身、或は久しくしての後身なり」と。爾の時に、帝釋、舍利弗に語るらく、「是の般若波羅蜜(多)は、畢竟空にして、所有無きが故に、甚深なり。菩薩は久しく功德を行せざれば、則ち著心堅固にして、信力微弱なり。般若波羅蜜(多)、乃至一切智を信せざるは、何ぞ怪しむに足らん」と。帝釋思惟壽量

【六】 第一問、若し先世に毀咎せば、應に地獄に墮つべし。何の縁あつてか、復た般若を聞くことを得ん。

すらく、「般若波羅蜜(多)を信すれば、福德無量にして、信せざる者は罪を得ること深重なり」と。深く般若波羅蜜(多)を愛敬するが故に、是の言を發すらく、「我れ當に是の般若を禮すべし。何となれば、般若を禮することは、則ち一切智を禮すと爲し、一切智を禮する者は、則ち十方三世の諸佛を禮すればなり」と。爾の時に、佛、其の言を可とし、復た般若波羅蜜(多)を讚する因縁を説きたまふ。「所謂諸佛の一切智慧は皆般若の中より生ず」と。是の故に言はく、「菩薩ありて一切智の中に住し、

乃至比丘僧を總攝せんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を習行すべし」と。



釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ぜんと欲する時、云何が般若波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・檀波羅蜜(多)に住すと名くるや。云何が内空乃至無法有法空に住し、云何が四禪・四無量心・四無色定・五神通に住し、云何が四念處乃至八聖道分に住し、云何が佛の十力乃至十八不共法に住するや。世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)、内空乃至十八不共法を習行するや」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「善い哉、善い哉、橋尸迦よ、汝は能く樂んで是の事を問ふ。皆是れ佛の力なり。橋尸迦よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、若し色中に住せざるを、般若波羅蜜(多)を習行すと爲し、若し受想行識中に住せざるを、般若波羅蜜(多)を習行すと爲し、眼・耳・舌・身・意・色・聲・香・味・觸・法・眼界乃至意識界も亦是の如し。橋尸迦よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)の中に住せざるを、般若波羅蜜(多)を習行すと爲し、禪波羅蜜(多)の中に住せざるを、禪波羅蜜(多)を習すと爲し、毗梨耶波羅蜜(多)の中に住せざるを、毗梨耶波羅蜜(多)を習すと爲し、羼提波羅蜜(多)の中に住せざるを、羼提波羅蜜(多)を習すと爲し、尸羅波羅蜜(多)の中に住せざるを、尸羅波羅蜜(多)を習すと爲し、檀波羅蜜(多)の中に住せざるを、檀波羅蜜(多)を習すと爲す。是の如く、橋尸迦よ、是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)に住せざるを、般若波羅蜜(多)を習すと爲す。是の如く、橋尸迦よ、内空に住せざるを、内空を習すと爲し、乃至無法有法空に住せざるを、無法有法空を習すと爲し、四禪に住せざるを、四禪を習すと爲し、四無量心に住せざるを、四無量心を習すと爲し、四無色定に住せざるを、四無色定を習すと爲し、五神通に住せざるを、五神通を習すと爲し、四念處に住せざるを、四念處を

【七】般若の行者の住不住を明す。

習すと爲し、乃至八聖道分に住せざるを、八聖道分を習行すと爲し、佛の十力に住せざるを、佛の十力を習行すと爲し、乃至十八不共法に住せざるを、十八不共法を習行すと爲す。何となれば橋尸迦よ、是の菩薩は色の住すべく習すべき處を得ず、乃至十八不共法は十八不共法の住すべく習すべき處を得ざればなり。

復次に、橋尸迦よ、菩薩摩訶薩は色を習せず。若し色を習せざれば、是を色を習すと名く。受想行識乃至十八不共法も亦是の如し。何となれば、是の菩薩摩訶薩には、色の前際も不可得、中際も不可得、後際も不可得なればなり、乃至十八不共法も亦是の如し」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は甚深なり」と。佛の言はく、「色如は甚深なるが故に、般若波羅蜜(多)は甚深なり、受想行識如は甚深なるが故に、般若波羅蜜(多)は甚深なり。乃至十八不共法も亦是の如し」と。舍利弗言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は測量すべきこと難し」と。佛の言はく、「色は測量すべきこと難きが故に、般若波羅蜜(多)は測量すべきこと難く、受想行識乃至十八不共法は測量すべきこと難きが故に、般若波羅蜜(多)は測量すべきこと難し」と。

世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は無量なり」と。佛の言はく、「色は無量なるが故に、般若波羅蜜(多)は無量なり。受想行識乃至十八不共法は無量なるが故に、般若波羅蜜(多)は無量なり」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行ずる時、色の甚深を行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲し、受想行識を行ぜず、乃至十八不共法の甚深を行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。何となれば色の甚深の相を、色に非すと爲し、受想行識乃至十八不共法の甚深の相を十八不共法に非すと爲す。是の如く行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、色の測量し難きを行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲し、受想行識を行ぜず、乃至十八不共法の測量し難きを行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。何となれば、色の測量し難き相は色に非すと爲す。乃至十八不共法の測量し難きを行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。何となれば、色の測量し難き相は色に非すと爲す。

乃至十八不共法の測量し難きを

乃至十八不共法の測量し難きを

し、受想行議乃至十八不共法の測量し難き相を、十八不共法に非すと爲せばなり。

舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行ずる時、色の無量を行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。何となれば、色は是れ無量相なれば、色に識を行ぜず、乃至十八不共法の無量を行ぜざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。何となれば、色は是れ無量相なれば、色に非すと爲し、受想行議乃至十八不共法の無量相は十八不共法に非すと爲せばなり」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は甚深にして、甚深の相は、見難く解し難く思量すべからず。新發意の菩薩の前に在りて説くべからず。何となれば、新發意の菩薩は、是の甚深の般若波羅蜜(多)を開かば、或は當に驚怖し、心に疑悔を生じ、是の甚深の般若波羅蜜(多)を信ぜず、行ぜざればなり。當に阿耨跋致の菩薩摩訶薩の前に在りて説くべし。是の菩薩は、是の甚深の般若波羅蜜(多)を開きて、驚かず怖かず、心に疑悔せざれば、則ち能く信行す」と。

釋提桓因、舍利弗に問ふ、「若し新發意の菩薩摩訶薩の前に在りて、是の深般若波羅蜜(多)を説かば、何等の過ありや」と。舍利弗、釋提桓因に報ふ、「橋尸迦よ、若し新發意の菩薩の前に在りて、是の深般若波羅蜜(多)を説かば、或は當に驚怖し毀訾して信ぜざるべし。是の新發意の菩薩或は是處に有り。若し新發意の菩薩、是の深般若波羅蜜(多)を開き、毀訾して信ぜざれば、三惡道の業を種ふ、是の業因縁の故に、久久しく阿耨多羅三藐三菩提を得ること難からん」と。

論

釋して曰く、爾の時に、帝釋は佛より般若波羅蜜(多)の具足を讚じたまふを聞くが故に、今佛

に問ふ、「菩薩は云何が般若波羅蜜(多)禪波羅蜜(多)乃至、十八不共法に住するや」と。佛讚じて、「善哉、善哉」と言へるは、釋提桓因は諸天中の主たるを以て、言必ず信すべく、是の事を問うて、大衆の疑を斷じ、通達無礙にして、能く大に利益するが故に、善哉、善哉と言へるなり。

復次に、佛は帝釋の能く上妙の五欲・七寶の宮殿を捨てて、以て能く佛に賢聖の所行の事を問ふ。是の故に善い哉と言へり。佛の神力を以ての故に、汝は能く樂んで此の事を問ふ。是の中、更に上妙の諸天ありて、佛の神徳無量なることを觀す。今帝釋は能く大衆の中に於て、佛事を諮問するが故に、是れ佛の威神なり。持心經に説くが如し。佛の光明身中に入りて能く佛事を問ふ。「佛、憍尸迦に答へたまはく、若し菩薩は色等に住せず、是れ般若波羅蜜〔多〕を習行するなり」とは、是の菩薩は色の無常苦等の過罪を見るが故に色に住せず、若し色に住せざれば、即ち是れ能く般若波羅蜜〔多〕を習行するなり。凡夫の人は色を見て色に著するが故に、顛倒煩惱を起し、是の般若波羅蜜〔多〕の道を失す。是を以ての故に、住せざる者は、能く般若波羅蜜〔多〕を習行す。五衆十二入十八界も亦是の如し。

【八】 第二問、六度の各々に住せずして、自ら其の行を習ふ理由如何。

問うて曰はく、何を以ての故に、六波羅蜜〔多〕等の各々に住せずして、自ら其の行を習ふや。答へて曰はく、是の六波羅蜜〔多〕等は、皆是れ善法の行法なり。是を以ての故に、六度等に住せざるを説いて、各各其行を習ふと言ふ。衆界入も、般若波羅蜜〔多〕を習行すと爲す。若し是の法中に於いて著せざれば、則ち愛著を斷ず、愛著を斷ずるが故に、色等の諸法の中は清淨の習なり。此の中に住せざる因縁を説く、所謂色等の法の住處を得ず、色等の法の習處を得ざるなり」と。

復次に、佛は此の事は解し難きを以ての故に更に因縁を説きたまへり。色を習せずとは、是の菩薩

は色の過を見るが故に色中に住せず、住せざるが故に習せず。色を習せば、色相の若くは常、若くは無常等を取ると名く。

復次に、菩薩は常に善法を行じ、正語正業等を積習して、純厚なるが故に、色を習すと名く。今菩薩は般若を行せんと欲するが故に、是の色を散壞して習はず。何となれば、過去の色は已に隨つて滅し、未來の色は未だ有らざるが故に習ふべからず。現在の色は生ずる時、即ち滅するが故に住せざるなり。若し一念住するすら尙習ふこと無し、何に況んや念念に滅するをや。是の故に是の中に色を習はざる因縁を説く。三世の色は不可得なり、乃至十八不共法も亦是の如し。若し能く是の如く諸法の散壞を觀じて相を取らざれば、是れ能く色等を習ふと名く。色等の諸法の實相を習ふなり。爾の時、舍利弗は佛より是の義を聞き、歡喜して深く空智に入り、佛に白さく、「般若波羅蜜(多)は甚深なり」と。佛は然も可して其の讚する所を成じたまはく、「色等の諸法は如なるが故に甚深なり」と。佛語りたまはく、「但眼に色の甚深なるを見のみにあらず、般若波羅蜜(多)を以て色を分別して如實に入るが故に甚深なり。雨の滂滂を甚深と名けず、和合せる衆流の大海に入るを乃ち甚深と名くるが如し。色等も亦是の如く天眼肉眼は、見ること淺くして深からず。若し慧眼を以て觀れば、則ち深くして測るべからず。甚深なるが故に測量すべきこと難く、唯諸佛のみ有りて乃ち其の底を盡くしたまふ。甚深にして測量すべからざるが故に無量と名く。智慧あること無ければ、能く色等の實相の

若くは常、若くは無常を取る。籌量して過罪あるが故に。是の時、舍利弗及び諸の聽者は是の念を作す、一般若波羅蜜(多)は測量すべからず、量あること無し。菩薩は當に云何が行すべきや」と。佛其の念を知り、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、若し色等の甚深を行すれば、則ち般若波羅蜜(多)を失すと爲し、若し色の甚深を行せざれば、是れ般若波羅蜜(多)を得と爲す」と。凡夫は鈍根なるが故に甚深と言ひ。若し一心に福德ありて、利根なる者は、其深に非ずと爲す。譬へば(水)の深淺に定無く、若し小兒に於いては則ち深きも、長者には則ち淺く、乃至大海は人に於いては則ち深く、羅睺阿修羅王に於ては則ち淺きが如し。是の如く凡夫の人と、新發意の懈怠の者とに於ては甚深と爲すも、久しく徳を積みたる阿鞞跋致に於ては則ち淺し。(一)諸佛は羅睺阿修羅王の如く、一切の法に於て深き者あること無し。衆生及び時節・利鈍・初無礙解脱を得るが故なり。是を以ての故に知りぬ、衆生及び時節・利鈍・初久の懈怠精進の爲の故に分別して深淺を説くとを。測量すべからず、量あると無きも亦是の如し。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、色等の法の甚深の相なるを色に非ずと爲す。何となれば怖畏心疑悔心を没すればなり。色を以て甚深と爲すに、色相には則ち深なること無きこと、先に説くが如し。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は甚深なり」と。甚深の相は見難く、解し難し。

【九】理の深淺は機根の利鈍による、猶ほ水の深淺の不定なるが如し。  
 【一〇】法の深淺を分別して説く所以。

問うて曰はく、(二)上には菩薩の甚深を行せざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲すと説けり。今舍利弗は何を以てか復甚深を説けるや。答へて曰く、舍利弗は定心に甚深を説くに非ず。佛の意趣を得、人の爲の故に甚深を説くなり。是の故に是の中に説けり、「世尊よ、新發意の菩薩の前に於いて、是の般若波羅蜜(多)を説くべからず。新學の菩薩、是の深智慧を聞かば、則ち心没せん。應當に阿鞞跋致の菩薩の前に在りて説くべし。阿鞞跋致は智慧深きが故に、信じて而も没せず。譬へば深水は小兒をして渡らしむべからず、應に大人をして渡らしむべきが如し」と。帝釋、舍利弗に問ふ、「若し新發意の菩薩の爲に説かば、何等の過有りや」と。舍利弗答ふ、「是の新發意の者は、則ち信せずして心没し、心没するが故に、疑悔怖畏を生じ、若し一切空法を受くれば、我云何が當に斷滅の中に墮すべき」と。若し受けずんば、佛の所説の法を、何が受けざる可けん。是の故に怖畏して疑悔を生ず。若し心定まれば、則ち亞邪毀咎を生ず。毀咎の果報は地獄品の中に説くが如し。此の中には、略して三惡道の業因縁を種うれば、久久うして無上道を得難しと説く。

經

(三)釋提桓因、舍利弗に問ふ、頗し未だ記を受けざる菩薩摩訶薩ありて、是の深般若波羅蜜(多)を聞かんに、驚かす怖れ

【一】 第三問、已に菩薩の甚深を行せざるを智度を行すと説く。今、舍利弗が復た甚深を説くは何故なるか。

【二】 受記せざるものにして、般若に驚動せず、信受する類を明し、種種の譬喩を擧ぐ。

ざる者ありや不やしと。舍利弗言はく、「是の如し、橋尸迦も、若し菩薩摩訶薩ありて、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、驚かす怖れずんば、當に知るべし、是の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提の記を得ること、久しからず、一佛、兩佛に過ぎざらん」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し、是の如し、是の菩薩摩訶薩は久しく意を發し、六波羅蜜(多)を行じ、多く諸佛を供養したてまつり、是の深般若波羅蜜(多)を聞くも驚かす、畏れず怖かす、聞いて即ち受持し、般若波羅蜜(多)の所説の如く行ぜん」と。爾の時に、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、我れ譬喩を説かんと欲す。」(二三) 菩薩道を求むる善男子

善女人の、夢中に般若波羅蜜(多)を修行し、禪定に入り、勤めて精進し、忍辱を具足し、戒行布施を守護し、内外空を修行し、乃至道場に坐するが如きは、當に知るべし、戒行男子、善女人は、阿耨多羅三藐三菩提に近し」と。何に況んや、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲して、覺せる時、般若波羅蜜(多)を修行し、禪定に入り、勤めて精進し、忍辱を具足し、戒行布施を守護して、而も疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就し、道場に坐せざらんや。世尊よ、善男子、善女人の善根を成就し、般若波羅蜜(多)を

聞くもを得て受持し乃至説の如く行するに至らば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は久しく意を發して善根を種ふ、多く諸佛を供養し、善知識と相隨ふと。是の人は能く般若波羅蜜(多)を受持し、乃至正憶念せば、當に知るべし是の人は近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを。當に知るべし、是の善男子、善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の如く、阿耨多羅三藐三菩提に於いて動轉せず、能く深般若波羅蜜(多)を得、得已りて能く受持し、讀誦し、乃至正憶念す。世尊よ、譬へば(二四) 人の百由旬、若くは二百・三百・四百由旬の曠野險道を過ぎんと欲し、先づ諸相の、若くは救救の者、若くは羶臭、若くは園林、是の如き等の諸相を見るが故に、城邑聚落到に近けるを知

- 【三】 夢中に般若を行するすら 尚は無上道に近づく、況んや 覺する時の實心を以てするをや。
- 【四】 旅行者の放牧園林を見て、聚落の近きを知るが如く、般若を受持し、讀誦する相を見て、菩提を得るの近きを知る。

り、是の人は是の相を見已りて是の念を作す、我が見る所の相の如くんば、當に城邑聚落の遠からざることを知るべしと。  
 心に安隱を得て感難・惡蟲・飢渴を畏れざるが如し。世尊、菩薩摩訶薩も亦是の如く、若し是の深般若波羅蜜(多)を得、受  
 持し讀誦し、乃至正憶念せば、當に知るべし、近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得ること久しからずと。當に知  
 るべし、是の菩薩摩訶薩は、摩訶辟支佛地に墮つることを異るべからず。是の諸の先相、所謂深般若波羅蜜(多)なり、聞く  
 ことを得、見ることを得、受くることを得、乃至正憶念することを得るが故なり」と。  
 佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝復た説かんと欲せば、便ち説  
 け」と。「世尊よ、譬へば (五)人の大海を見んと欲し、心を發して往趣し、樹相を見ず、  
 山相を見ざれば、是の人は未だ大海を見ずと雖も、大海の遠からざることを知るが如し。  
 何となれば、大海(の邊)は處平らかにして、樹相無く、山相無きが故なり。是の如く世  
 尊よ、菩薩摩訶薩は是の深般若波羅蜜(多)を聞きて、受持し乃至正憶念する時、未だ佛  
 前に劫數の記、若くは百劫・千劫・萬劫・百千億劫を受けずと雖も、是の菩薩に自ら阿耨  
 多羅三藐三菩提の記を受くるも、近くして久しからざるを知る。何となれば、我れ是の  
 深般若波羅蜜(多)を聞き、受持し讀誦し、乃至正憶念することを得るが故なり。世尊よ、譬へば (六)初春に諸樹の陳葉已に  
 墮つるが如きは、當に此の樹に新しき葉・華・果の出づることを知り、久しからざるを知るべし。是の諸樹の先相を  
 見ればなり。今久しからずして葉・華・果の出づることを知り、是の時、闍浮提の人は樹の先相を見て、皆大に歡喜す。世尊  
 よ、菩薩摩訶薩、是の深般若波羅蜜(多)を聞くとを得、受持し讀誦し乃至正憶念し、説の如く行ぜば、當に知るべし、是の  
 菩薩は善根を成就し多く諸佛を供養してまつるとを、是の菩薩は應に是の念を作すべし、先世の善根の追ふ所(によりて)

【五】 海邊に往かんと欲する人の、山相を見ず、樹相を見ざれば、海に近づけることを知るが如く、受記の相も亦然なり。  
 【六】 陳葉已に墮つるを見て、新葉の出でんと欲するを知るが如く、行人の受記も亦然なり。

阿耨多羅三藐三菩提に趣くと。是の因縁を以ての故に、是の深般若波羅蜜(多)を見ることを得、聞くことを得、受持し讀誦し乃至正憶念し、説の如く行ぜば、是の中の諸天子の、曾て佛を見たてまつる者は歡喜踊躍して是の念を作して言く、「先の諸の菩薩摩訶薩も、亦是の如き愛記の先相あり。今是の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるも亦久しからず」と。世尊よ、譬へば(二七)母人の懷妊して身體の苦重く、行歩便ならず、坐起安からず、眠食轉た少く、言語を喜ばず、本習する所を厭ふ、苦痛を受くるが故に、異なる母人ありて其の先相を見、當に産生の久しからざるを知るが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、善根を種ふ、多く諸佛を供養してまつり、久しく六波羅蜜(多)を行じ、善知識と相隨ひ、善根を成就し、深般若波羅蜜(多)を聞くことを得、受持し讀誦し乃至正憶念し、説の如く行ぜば、諸人も、亦是の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の記を得ること久しからざることを知りしなり」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「善い哉、善い哉、汝が樂説する所は皆是れ佛力なり」と。

爾の時須菩提、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、諸の多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀は、善く諸の菩薩摩訶薩に付する事なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、多くの衆生を安隱にし、無量の衆生をして、樂を得せしめ、諸の天人を憐愍し饒益するが故に、是の諸の菩薩は、(一)菩薩道を行する時、四事を以て無量百千の衆生を攝す。所謂布施、愛語、利益、同事なり。亦十善道を以て衆生を成じ、自ら初禪を行じ、亦他人を教へて、初禪を行ぜしめ、乃至自ら非有想・非無想處を行じ、亦他人を教へて行ぜしめ、乃至非有想・非無想處に至り、自ら檀波羅蜜(多)を行じ、亦他人を教へて檀波羅蜜(多)を行ぜしむ。自ら尸羅波羅蜜(多)を行じ、亦他人を教へて、尸羅波羅蜜(多)を行ぜしめ、自ら瞿提波羅蜜(多)を行じ、亦他人を教へ

- 【二七】 懷妊の體重きを見て、出産の久しからざるを知るが如く、行人の受記も亦然り。
- 【二八】 菩薩は道を行する時、四事所謂布施、愛語、利益、同事を以て衆生を攝す。

て、麤提波羅蜜(多)を行ぜしむ。自ら毗梨耶波羅蜜(多)を行じ、亦他人を教へて、毗梨耶波羅蜜(多)を行ぜしむ。自ら禪波羅蜜(多)を行じ、亦他人を教へて、禪波羅蜜(多)を行ぜしむ。自ら般若波羅蜜(多)を行じ、亦他人を教へて、般若波羅蜜(多)を行ぜしむ。自ら内に於いて證せず、衆生を教へて、斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得せしめ、(一九)内に自ら證せず衆生を教へて、辟支佛道を得せしむ。自ら内に證せず自ら六波羅蜜(多)を行じ、亦無量百千萬の諸の菩薩を教へて、六波羅蜜(多)を行ぜしむ。自ら阿鞞跋致地に住し、亦他人をして阿鞞跋致地に住せしむ。自ら佛世界を淨め、亦他人をして佛世界を淨めしむ。自ら衆生を成就し、亦他人をして衆生を成就せしむ。自ら菩薩の神通を得、亦他人をして菩薩の神通を得せしむ。自ら陀羅尼門を淨む。亦他人をして陀羅尼門を淨めしむ。自ら樂說辯才を具足し、亦他人をして樂說辯才を具足せしむ。自ら色の成就を受け、亦他人を教へて色の成就を受けしむ。自ら三十二相を成就し、亦他人をして三十二相を成就せしむ。自ら童真地を成就し、亦他人をして童真地を成就せしむ。自ら佛の十力を成就し、亦他人を教へて佛の十力を成就せしむ。自ら四無所畏を行じ、亦他人をして四無所畏を行ぜしむ。自ら十八不共法を行じ、亦他人をして十八不共法を行ぜしむ。自ら大慈大悲を行じ、亦他人を教へて大慈大悲を行ぜしむ。自ら一切種智を得、亦他人を教へて一切種智を得せしむ。自ら一切の結使及び習を離れ、亦他人を教へて一切の結使及び習を離れしむ。自ら法輪を轉じ、亦他人をして法輪を轉ぜしむ」と。

論

釋して曰はく、爾の時に、帝釋、舍利弗に問ふ、「頗し未だ記を受けざる菩薩ありて、是の深般若を聞かんに驚怖せざる者ありや不や」と。舍利弗言はく、「記を受けずして般若を聞くも能く信する

【一九】菩薩は自ら證せず、他をして證せしむ。

者あること無し。若し或時は能く信する者あるも、當に知るべし、「是の如きは」記を受けんと欲するに垂んとして、一佛二佛を見たてまつるに過ぎずして、便ち記を受くることを得るものなり」と。佛、舍利弗の語を可したまへば、舍利弗は佛の其の所説を可したまふを聞いて、歡喜を生じ、復是の事を分明了了にせんと欲するが故に、譬喩を説きて是の事を作す。夢中の心は睡の爲に覆るるが故に、眞心の所作に非ず。若し善男子善女人、夢中に於て意を發し、六波羅蜜〔多〕を行じ、乃至道場に坐せば、當に知るべし、是の人は福德輕微なれども、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるに近し。何に況んや菩薩摩訶薩の覺する時、實に心に阿耨多羅三藐三菩提を發し、行じて而も近く記を受けざらんや。世尊よ、若し人六道生死の中に往來し、或時は般若波羅蜜〔多〕を聞くことを得て、受持し讀誦し正憶念せば、必ず是の人の久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得ることを知る。(一〇) 鈎を吞める魚は復池中に遊戲すと雖も、當に外に出在すること久しからざるを知るべきが如し。行者も亦是の如く、深く般若波羅蜜〔多〕を信樂すれば、久しく生死に住せず。此の中に舍利弗は自ら譬喩を説けり。人の險道を過ぎんと欲するが若しと。(一一) 險道とは、即ち是れ世間なり。(一二) 百由旬とは、是れ欲界、二百由旬とは、是れ色界、三百由旬とは、是れ無色界、(一三) 四百由旬とは、是れ聲聞辟支佛道なり。

【一〇】 吞鈎の魚は池中に遊戲すること久しからず、深く般若を信樂する行者は、久しく生死に住せず。

【一一】 險道の意義。

【一二】 二百三百由旬は、所謂欲・色・無色等の三界なり。

【一三】 四百由旬は二乘。

復次に、(四) 四百由旬は、是れ欲界、三百は、是れ色界、二百は、是れ無色界、(五) 百由旬は、是れ聲聞辟支佛なり。出でんと欲すとは、是れ信受して般若波羅蜜(多)を行ずる人なり。先づ諸法の相を見るときは、大菩薩の世間の欲樂を捨てて深心に般若波羅蜜(多)を樂しむを見るなり。壇界とは、諸法を是れ聲聞法、是れ辟支佛法、是れ大乘法、是の如き小利は是れ聲聞、大利は是れ菩薩、魔界は是れ生死、佛界は是れ般若波羅蜜(多)の甘露味不死の處なりと分別するなり。園林とは、佛道の禪定智慧等の樂に隨ふ、是の如き等の無量の善法の相なり。聚落とは、是れ柔順法忍、邑とは、是れ無生法忍、城とは、是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。安隱を得とは、菩薩は是の法を聞いて思惟し籌量して行じ、我は是の法を得て心安隱なり、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。賊とは、是れ我等の六十二邪見なり。

【四】 四百三百二百由旬は、所謂欲・色・無色等の三界をいふなり。

【五】 百由旬は二乘なり。

惡蟲とは、是れ愛・恚等の諸の煩惱なり。賊を畏れずとは、人の便を得ざるなり。惡蟲を畏れずとは、非人の便を得ざるなり。飢を畏れずとは、聖人の眞智慧を得ること能はざるを畏れざるなり。渴を畏れずとは、禪定・解脫等の法樂の味を得ること能はざるを畏れざるなり。此の中に自ら因縁を説く、菩薩摩訶薩の先相を得る者は久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、惡道の中に墮するとを畏れざるなり。飢餓して死すとは、聲聞辟支佛地に墮するを畏れず。佛は然も其の喻を可としたまふ。蠶を以て細に喩へ、世間を以て出世間に喩ふ。餘の三の譬喻も亦應に上の如く分別して説くべ

し。大海の水は是れ無上道、平地の樹無く山無きは是れ般若波羅蜜(多)の經卷等なり。樹果は是れ無上道、樹華は是れ阿鞞跋致地なり。春時に陳葉落ちて更に新葉を生ずるは、是れ諸の煩惱の邪見疑等滅して、能く般若波羅蜜(多)の經卷等を得るなり。母人は是れ行者、姪する所の身は是れ無上道、産せんと欲する相は、是れ菩薩の久しく般若波羅蜜(多)を習行するなり。本習ふ所を厭ふとは、是れ世間の淫欲の樂を思とし、復喜んで著せざるなり。佛は其の所説を讚じて、善い哉とのたまへり。爾の時に須菩提は佛の然も須菩提の所説を讀じて、「善い哉」とのたまふを聞き、佛の意に深く是の菩薩を敬ひ念じたまふを知る。是の故に佛に白して言さく、「世尊よ、甚だ希有と爲す。善く菩薩の事を付したまふ」と。菩薩の事とは、空道と福德道となり。亦佛の種種の總相別相の説の如きは、以て阿難彌勒等に寄付し、無餘涅槃に入り、後好んで自ら奉行し、教示して衆生を利益し、謬錯せしむること無し。佛は善く付する因縁を説きたまへり。諸の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發して、多くの衆生を安隱にすとは、一切衆生の中は、無量無邊阿僧祇にして、佛を除き、能く計り知る者無く、佛の利益を得る者は、數へ知るべからざるが故に多と名く。安隱とは、衆生の常に著する者には無常を教へ、樂に著する者には苦を教へ、實に著する者には空を教へ、我に著する者には無我を教ふ。是の如き等を安隱と名く。凡夫の人は是を聞き當時は喜樂せずと雖も、久久しうせば諸の煩惱を滅して安隱の樂を得。苦樂を服して、當時は苦なりと雖も、後患を除くことを得るが如し。無量の衆生樂を得とは、

菩薩は般若波羅蜜(多)を求めて、未だ成就することを得ざる時、今世後世の樂を以て衆生を利益するなり。菩薩本生經に説くが如し。若し般若波羅蜜(多)を得已れば、諸の煩惱を滅して、亦世間の樂、出世間の樂を以て衆生を利益す。若し無上道を得る時は、但だ出世間の樂を以て衆生を利益す。安樂に饒益すとは、但憐愍の心を以ての故に安樂なり。饒益とは、多く天人を利益し、餘道の中には饒益少きが故に説かず。利益の事とは、所謂 四攝法なり。財施・法施の二種を以て衆生を攝取す。(三七) 愛語に二種あり。一には随意的の愛語、二には愛する所の法に隨つて爲に説く。是の菩薩は未だ道を得ざれば衆生を憐愍し、自ら高慢を破し、意に隨つて法を説く。若し道を得れば度すべき所の法に隨つて爲に説く。高心の富人には布施を讃することを得ず、是の人は能く他の物を得て利す、名聲・福德の故なり。若し持戒を讃じて、破戒を毀することを爲せば、則ち心に喜樂せず。是の如き等には其の應ずる所に隨つて爲に法を説く。利益にも亦二種あり。一には今世の利、後世の利の爲に法を説き、法を以て生を治め、勤修利事す。二には不信を教へて信せしめ、破戒をして持戒せしめ、寡識をして多聞ならしめ、施を好まざる者をして布施せしめ、癡者に智慧を教へ、是の如き等の善法を以て利益す。同事とは、菩薩は衆生を教化して善法を行せしめ、其の所行を菩薩の善心に同じくし、衆生の惡心は能く其の惡を化して己が善に同せしむ。是の菩薩は四種を以て衆生を攝し、十善道に住せしむ。二施の中

【三】 四攝法の解釋。

【七】 二種の愛語。

【八】 二種の利益。

に於て、法施は其の樂む所に隨つて爲に法を説く。是れ愛語中の第一なり衆生は壽命を愛惜せり。  
 十善道を行せしむれば則ち久壽を得。利益とは、一切寶物の利中に於て、法利は最勝なり。是を利益  
 と爲す。同事の中には、同じく善法を行ずるを勝れりと爲す。是の菩薩は自ら十善を行じ、亦以て他  
 人に教ふ。有人の言はく、「後に自ら十善等を行ずるは、是れ第四の同の義なり」と。是の故に説く、  
 「自ら十善を行じ、亦人に教へて行せしめ、自ら初禪を行じ、亦他を教へて行せしむ」と。初禪等は同  
 じく欲を離れ、同じく戒を持す。是の故に相攝すと名く。相攝するが故に、漸漸に三乗の法を以て度  
 す。乃至非有想非無想處も亦是の如し。自ら六波羅蜜(多)を行じ、亦以て他を教へ、般若に因つての  
 故に衆生をして般若の分を得せしむ。所謂須陀洹等の方便力を得るが故に自ら證せず。是の人の福德  
 智慧力増益するが故に、無量阿僧祇の衆生を教へて、六波羅蜜(多)に住せしめ、自ら阿鞞跋致地等に  
 住し、亦以て他に教へ、乃至自ら法輪を轉じ、亦他を教へて法輪を轉せしむ。是の故に我は慈悲心を  
 以ての故に、善く菩薩に事を付す。以て愛著せざるが故なり。

# 卷の第六十七

## 二歎信行品第四十五の下を釋す。



須菩提、佛に白して言さく、「希有なり、世尊、諸の菩薩摩訶薩は大功德を成就す、所謂、一切衆生の爲に般若波羅蜜(多)を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。世尊よ、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を具足し修行するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「(一)若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、色の増相を見ず、色の減相を見ず、受想行識の増相を見ず、亦減相を見ず、乃至一切種智の増相を見ず、亦減相を見ず。菩薩摩訶薩は、是の時、般若波羅蜜(多)を具足す。

復次に、(二)須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、是れ法、是れ非法を見ず。是れ過去法、是れ未來、現在法を見ず。是れ善法不善法、有記法無記法を見ず。是れ有爲法無爲法を見ず。欲界、色界、無色界を見ず。檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、

瞋提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を見ず、乃至一切種智を見ず。是の如く、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を具足し修行す。何となれば、諸法は無相なるが故に諸法は空なり、欺誑にして堅固なる無く、覺者無く、壽命者無ければなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、世尊の所説は不可思議なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。受想行識は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。六波羅蜜(多)は不可思議な

- 【一】 以下菩薩は如何にして般若波羅蜜多を具足するかを明す。
- 【二】 般若を行する時、五蘊の増減の相を見ず、乃至一切種智の増減の相を見ず。
- 【三】 菩薩は般若を行する時は法・非法・三世・三性・有爲・無爲・三界・六度等を見ず。
- 【四】 色乃至一切不可思議の義解。

るが故に所説は不可思議なり。乃至一切種智は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、色は是れ不可思議なり、受想行識は是れ不可思議なりと知り、乃至一切種智は是れ不可思議なりと知れば、菩薩は則ち般若波羅蜜(多)を具足すること能はずと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)は當に誰か信解すべき者ぞと。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩ありて、久しく六波羅蜜(多)を行じ、善根を種ふ、多く諸佛に親近して供養したてまつり、善知識と相隨はば、是の菩薩は能く深般若波羅蜜(多)を信解す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、久しく六波羅蜜(多)を行じ、善根を種ふ、諸佛に親近して供養したてまつり、善知識と相隨ふや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩は色を分別せず、色相を分別せず、色性を分別せずんば受想行識を分別せず、識相を分別せず、識性を分別せず。眼・耳・鼻・舌・身・意・色・聲・香・味・觸法、眼界乃至意識界も亦是の如し。欲界・色界・無色界を分別せず、三界の相、性を分別せず、檀波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、乃至八聖道分、佛の十力乃至十八不共法を分別せず、檀乃至十八不共法を分別せず、十八不共法の相、性を分別せず、道種智の相、性を分別せず、一切種智の相を分別せず、一切種智の性を分別せず。何となれば、須菩提よ、色は不可思議、受想行識は不可思議、乃至一切種智は不可思議なればなり。是の如く須菩提よ、是な菩薩摩訶薩は、久しく六波羅蜜(多)を行じ、善根を種ふ、多く諸佛に親近して、供養したてまつり、善知識と相隨ふと名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、色は甚深なるが故に、般若波羅蜜(多)は甚深なり。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は珍寶聚なり。須陀洹果の寶あるが故

一切種智は甚深なるが故に、般若波羅蜜(多)は甚深なり。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は珍寶聚なり。須陀洹果の寶あるが故

一切種智は甚深なるが故に、般若波羅蜜(多)は甚深なり。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は珍寶聚なり。須陀洹果の寶あるが故

【五】菩薩は、五蘊の相性、乃至一切種智の相性を分別せず。

に、斯陀舍果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提の實あるが故に、四禪・四無色定・四無色定・五神通・四念處乃至八聖道分・佛の十力・四無所畏・四無礙智・大慈大悲・十八不共法・一切智・一切種智の實(有るが)故なり。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は清淨聚なり、色は清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨聚なり。受想行識は清淨なり、乃至一切種智清淨なるが故に、般若波羅蜜(多)は清淨聚なり」と。

【論】 釋して曰く、是の菩薩は大功德を成就すとは、先に説くが如く自ら行じ、亦他人に教ふ。

復次に、多くの功德とは、衆生は里に親しむに非ず、又利を貪る所無し。而も是の衆生の爲に勤苦して、般若波羅蜜(多)を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得。是を菩薩摩訶薩と名け、大恩分有るが故に大功德と名く。般若波羅蜜(多)を修する相は、先の品の中に種種の因縁を「以て」説くが如し。今般若を修する具足の相を問ふに、佛の言はく、「般若

【六】 菩薩摩訶薩の義解と大功德の意義。

若を修する具足の相の如きも亦是の如し。何となれば、若し菩薩は色等の諸法の増減を見ず、是の如きを具足と名く」と。是の菩薩は十地を得、道場に坐し、爾の時に、般若波羅蜜(多)の具足を修すと雖も、夢の如く、幻の如く、増さず、減らず。畢竟空を以ての故に説くなり。

復次に、若し菩薩は一切の法に於て、是れ法、是れ非法と分別せず。悉く皆是の法は、大海の水の百川萬流の皆合して一味となるが如し。爾の時に、般若波羅蜜(多)の具足を修す。

復次に、若し菩薩は法空の中に入れば、法として三世善不善等あるを見ず、六波羅蜜(多)、乃至

一切種智を見ず、爾の時、般若波羅蜜〔多〕の具足を修す。何となれば、諸法は無相、是れ實相なればなり。若し諸法を分別するは、皆是れ邪見の相なり。十八空を用ふるが故に、諸法は空なりと名く。諸法は和合因縁の生なり、以て諸縁ありと爲し、離るれば則ち破壊するが故に虚誑なり。一切の有爲法の中には、常無く實無きが故に、是を堅固ならずと名く。苦樂を受くる者無く、衆生は空なるが故に、覺者無く、苦樂を覺せず、壽命者無し。壽は命根に名く。有人の言はく、「是の命根に我相あり。是の故に壽命を我と爲す」と。衆生の中に已に種種の因縁〔を以て〕破す。是の故に行法の者無く、受法の者無し。若し諸法空を觀ずれば、衆生も空なり、法も空なり。是の如くなれば、即ち般若波羅蜜〔多〕を具足し修す。須菩提は、是の時、驚喜して自ら安んずる能はず、説く所の般若波羅蜜〔多〕は不可思議なり。佛の言はく、「色等の諸法は不可思議なるが故に不可思議なり。何となれば、因果相似するが故なり」と。

復次に、若し菩薩は色等の法も亦不可思議なることを知り、若し是の不可思議の中に住すれば、則ち般若波羅蜜〔多〕を具足せず。不可思議の相を取るが故なり。是の故に説けり、「若し菩薩は色等の法の不可思議の相を知るが故に則ち般若波羅蜜〔多〕を具足せず」と。爾の時に須菩提は般若の中に於

【七】命根とは、命とは生命なり。小乗有部の義によれば、別に非色非心の體ありて過去の業より生じ、以て一期の間煖と識とを維持す。之を命と名け、命よく煖と識とを持すれば根と名くと云ふ。然るに大乘唯識の義によれば、第八識の種子に於て住識の功能あり、以て一期の間色心を相續せしむるを假に名けて命根となす、別に命の實體あるに非すと云ふ。

いて、えし止する處ところを得ず、大海だいかいに没もつするが如ごとくす。是この故ゆゑに佛ほとけに白まをさく、「是この深般じんぱんにや若ふかしは不可思議ふかしぎなり。不可思議ふかしぎも亦また不可思議ふかしぎなるが故ゆゑに、誰たれか當まさに信解しんげすべき者ものあらん」と。若もし但ただ不可思議ふかしぎなるすら猶なほ信しんずべからず。何いかに況いはんや。不可思議ふかしぎも復またた不可思議ふかしぎなるをや。佛答ほとけこたへたまはく、「若もし菩薩ぼさつは久ひさしく六波羅蜜はらみつた〔多た〕を行ぎやうじ、久ひさしく善根ぜんこんを種うゑ、久ひさしく諸佛しよぶつを供養くやうし親近しんこんしたてまつらば、久ひさしく善知識ぜんしきと相隨あひしたがはん。是この因縁いんねんの故ゆゑに信心しんじん牢固らくこにして、能よく深般じんぱんにや若ふかし波羅蜜はらみつた〔多た〕を信受しんじゆす」と。餘品よほんの中に説とく、「新發意しんはつちの者ものありて、亦また能よく深般じんぱんにや若ふかし波羅蜜はらみつた〔多た〕を信しんず」と。今佛いまほとけは説ときたまはく、「久ひさしく意こころを發おこすが故ゆゑに能よく信しんず」と。是こを以もつて須菩提しよぼだいは問とふ、「云何いかんが是これ久ひさしく意こころを發おこす者ものなる」と。佛ほとけの言たまはく、「若もし菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ、了了れうれうに般はん若にや波羅蜜はらみつた〔多た〕の相さうを知しれば、一切法いっせふほふを分別ふんべつせず」と。所謂いはゆる、色しきの四大だいざう、若もしくは四大造色だいざうしきを分別ふんべつせず。色相しきさうを分別ふんべつせずとは、色しきは是これ見みる可べく、聲しやうは是これ聞きくべく、是この色しきは若もしくは好かう、若もしくは醜しゆう、若もしくは短たん、若もしくは長ちやう、若もしくは常じやう、若もしくは無常むじやう、若もしくは苦く、若もしくは樂らくなり等とうと分別ふんべつせざるなり。色性しきしやうを分別ふんべつせずとは、色しきの常法じやうほふ、所謂いはゆる地ちの堅性けんしやう等とうを見みざるなり。

復次またつぎに、色しきの實性じつしやうを法性ほふしやうと名なづく。畢竟空ひつぎやうくうなるが故ゆゑなり。是この菩薩ぼさつは法性ほふしやうを分別ふんべつせず、法性ほふしやうは不壞ふゑの相さうなるが故ゆゑなり。乃至なほ一切種智いっさいしゆちも亦是また是この如ごとし。

問とうて曰いはく、(八)ち地ちは是これ堅相けんさうなり、何なにを以もつてか性しやうと言いふや。答こたへて曰いはく、是この相積習さうしゆくじふして性しやうを

【八】第一問、地は是れ堅相なり、何を以てか性といふや。

成ず。譬へば、人瞋りて、日に習つて已まざれば、則ち惡性と成るが如し。或は性と相とは異なる

り。烟を見て火を知るも、烟は是れ火の相にして火に非ざるが如し。或は性と相とは異なるらず、熱は是

れ火の相にして亦是れ火の性なるが如し。此の中に、佛、因縁を説きたまはく、「色等の諸法は不可

思議なり」と。不可思議は、即ち是れ畢竟空、諸法實相、常に清淨なり。須菩提言はく、「菩薩は日月

年歳久しからずと雖も、能く是の如く行す。是を久しと名く」と。須菩提は般若波羅蜜(多)を聞いて、

更に深き利益を得るが故に、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)は甚深なり。色等は甚深

【九】相と性とは、或は同、或は異なり。

般若波羅蜜(多)の清淨聚を破壊せんと欲せず。如意寶聚の瑕穢あること無きが如く、虚空の塵垢ある

こと無きが如く、般若波羅蜜(多)は畢竟清淨聚なり。而も人は自ら邪見の因縁を起し。留難を作して破壊せんと欲す。譬へば人の眼翳にして妙珍寶を見、謂つて不淨と爲すが如し」と。是の念を作し已れり。

經

須菩提言さく、「(一)世尊よ、甚だ怪しむべし、是の般若波羅蜜(多)を説く時多く留難あり」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、是の甚深の般若波羅蜜(多)は多く留難あり。是の事を以ての故に、善男子善女人、若し是の般若波羅蜜(多)を書せん、亦應に疾かに修行すべし。何となれば、是の甚深の般若波羅蜜(多)を若くは書する時、(若くは)讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行する時、諸難をして起らしめんと欲せざるが故なり。善男子善女人、若し能く一月に書なせんとせば、當應に勤めて書すべし。若し二月・三月・四月・五月・六月・七月・若くは一歳に書なせんとせば、亦た應に勤めて書すべし。讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行することも、若し一月に成就することを得、乃至一歳に成就することを得んと欲せば、應當に勤めて成就すべし。何となれば、須菩提よ、是の珍寶の中には多くの難起ること有ればなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、是の甚深の般若波羅蜜(多)の中には、惡魔喜んで留難を作すが故に、書せしむることを得ず。讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行せしむることを得ざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「惡魔は是の甚深の般若波羅蜜(多)を留難し、書し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行することを得ざらしめんと欲すと雖も、亦是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行することを破壊すること能はず」と。

【一〇】留難とは、般若を障礙する邪魔をいふ。  
【一一】留難に妨げられざらんが爲に、速に修行すべきを明す。

爾の時に、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、誰の力の故に、惡魔をして、菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行するを留難すること能はざらしむるや」と。佛の言はく、「是の佛力の故に、惡魔は菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行するを留難すること能はず。舍利弗よ、亦是の十方世界に現在する諸佛の力の故なり。是の諸佛は是の菩薩を擁護し念じたまふが故に、魔をして菩薩摩訶薩を留難し、般若波羅蜜(多)を書成し、乃至修行せざらしむること能はざらしむ。何となれば、十方世界の中に現在せる無量無邊阿僧祇の諸佛、是の菩薩の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行するを擁護し念ずる法應に關るべく、亦た能く留難を作すこと無ければなり。

舍利弗よ、善男子善女人は應當に是の念を作すべし、「我れ是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行するは、皆是れ十方諸佛の力なり」と。舍利弗言さく、「世尊よ、若し善男子善女人ありて、是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行することは皆是れ佛力なるが故に、當に是の人は是の諸佛に護らるるを知るべきや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、當に知るべし。若し善男子善女人ありて、是の般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行するは皆是れ佛力なるが故に、當に知るべし、亦是れ諸佛の護る所なり」と。

舍利弗言さく、「世尊よ、十方現在の無量無邊阿僧祇の諸佛は皆識り、皆佛眼を以て、是の善男子善女人の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行する時を見たまふ」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、十方現在の無量無邊阿僧祇の諸佛は皆識り、皆佛眼を以て、是の善男子善女人の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至修行する時を見たまふ。舍利弗よ、此の中に、菩薩道を求むる善男子善女人、若し是の深般若波羅蜜(多)を書し、受持し、讀誦し、正憶念し、説の如く修行せば、當に知るべし、是の人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくも久しからず」と。舍利弗よ、善男子善女人の、是の深般若波羅蜜(多)を書し、受持し、讀誦し、乃至正憶念せば、是の人は深般若波羅蜜(多)に於いて信解の相多く、亦た是の深般若波羅蜜(多)

を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞乃至幡蓋をもて供養す。

舍利弗よ、諸佛は皆譏り、皆佛眼を以て、是の善男子善女人を見たまふ。是の善男子善女人は供養の功德もて、當に大利益、大果報を得べし。舍利弗よ、是の善男子善女人は、是の供養の功德因縁を以ての故に、終に惡道中に墮せず。乃至阿鞞跋致地に至るまで、終に諸佛を遠離せず。舍利弗よ、是の善男子善女人は、是の善根の因縁を以ての故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に六波羅蜜(多)を遠離せず、終に内空乃至無法有法空を遠離せず、終に四念處乃至八聖道分を遠離せず、終に佛の十力乃至阿耨多羅三藐三菩提を遠離せずと。

論 釋して曰はく、留難とは、魔事等の、般若波羅蜜(多)を壞する因縁なり。佛は須菩提の所説を

可したまふ。(三)若し善男子善女人、是の般若波羅蜜(多)を書せんと欲せば

當に疾疾に書し、乃至正憶念し、説の如く行する時も疾かに修行すべし。

疾かにする所以の者は、是の有爲法は信すべからず、多く留難起ること有

ればなり。是の般若波羅蜜(多)の部黨經卷に多あり、少あり。上中下、所謂光讚、放光、道行あり。

書寫すること有る者は、書するに遲疾あり、一心に勤め書する者あり、懈惰して精勤せざる者あり。

人身は無常有爲の法にして信すべからず。釋迦文佛は惡世に出でたまふが故に多く留難あり。是の故

に説きたまはく、「若し一月に書き竟るべくんば、當に勤めて書成すべし。中に廢すること有ること

莫れ」と。留難あることを畏るるが故なり。乃至一歳に書くが如きより乃ち修行に至るも亦是の如し。

【三】魔民を起らざらしめんと欲せば、應に疾かに此の般若を書寫し讀誦すべし。

人根の利鈍に随つて遲疾あることを得。此の中に佛、更に因縁を説きたまはよく、(三)世間は珍寶を以ての故に、多く賊出づること有り。般若は即ち是れ大珍寶なるが故に多く留難あり」と。留難には、

疾病飢饉等なりと雖も、但魔事は大なるを以ての故に、説いて魔事と言ふ。若くは魔、若くは魔民、

惡鬼惡因縁と作りて人身の中に入り、人心を燒亂し、般若を書するを破し、或は書する人をして疲厭

せしめ、或は國土に事を起らしめ、或は書する人供養することを得ず。是の如き等なり。讀誦の時師

徒和合せず、大衆の中に説く時、人あり來りて、法師の過罪を説き、或は言はく、「説の如く行する

こと能はず、何ぞ聽受するに足らん」と。或は言はく、「能く戒を持すと雖

も、而も復た鈍根にして、深義を解せず、其の所説を聴くも了に所益無し」

と。或は説く、「般若波羅蜜(多)は空にして所有無く、一切法を滅して行

すべき處無し、譬へば裸人の自ら我は天衣を著くと言ふが如し」と。是の如き等の留難は説くことを

得ざらしむ。不正の憶念とは、魔は好身、或は善知識と作り、或は敬信せらるる沙門の形と作りて爲

に、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く、罪福の名ありと雖も、而も道理無しと説き、或は般若波羅

蜜(多)は空なり、即ち涅槃を取るべしと説く。是の如き等は、佛道の正憶念を修する事を破す。新發

意の菩薩は、是の事を聞きて、心大に驚怖すらく、「我等は生死の身、魔は是れ欲界の主にして、威

勢甚だ大なり。我等は云何が般若波羅蜜(多)を行じて無上道を得ん」と。是の故に佛説きたまはよく、

【三】世間には珍寶あるを以て多く賊出づ。般若は大珍寶なり、是故に留難あり。

「惡魔は留難せんと欲すと雖も、亦た破壊すること能はず。何となれば、大因縁は常に能く小因縁」  
 を破するが故なり。離欲の人は常に貪欲の者に勝り、慈悲の人は、常に瞋恚の者に勝り、智人は常に  
 無智の者に勝るが如し」と。般若波羅蜜(多)は是れ眞智慧にして其の力甚だ大なり。魔事は虚誑なり。  
 この菩薩は未だ般若波羅蜜(多)を具足することを得ずと雖も、其の氣分を得るが故に、魔は壞すこ  
 と能はず。是の事の因縁の故に、舍利弗は佛に白さく、「誰の力の故に、魔は破ること能はざるや」  
 と。佛答へたまはく、「佛力の故に」と。惡人の中には、魔を大と爲し、善人の中には、佛を大と爲  
 し、縛人の中には、魔を大と爲し、解人の中には、佛を大と爲し、留難の人の中には、魔を大と爲  
 し、通達の人の中には、佛を大と爲すが如し。初に説く佛力とは釋迦文佛  
 なり、後に説くは十方現在の佛なり。是の餘の佛は、(四)阿閼、(五)阿彌陀等  
 なり。惡賊の餘の惡相を助くるが如く、諸佛の法も亦是の如し。常に一切衆生の爲の故に、意を發す  
 者あれば便ち爲に護ることを作す。何となれば、般若波羅蜜(多)は、是れ十方諸佛の母にして、人の  
 沮壞せんと欲すれば、護らざることを得ざればなり。應當に知るべし、其の書き讀み、乃至正憶念す  
 る者あるは、皆是れ十方の佛の力なり。是れ諸の留難の力大なるが故なり。舍利弗言はく、「若し書  
 持し、乃至修行すること有れば、皆是れ諸佛に護らる」と。佛其の言を可としたまふ。舍利弗復た説  
 く、「世尊よ、書持する等の善男子善女人を、十方現在の諸佛は、皆佛眼を以て見知り念じたまふ

●●●  
 【一】阿閼(Aśvini)  
 【二】阿彌陀(Amita)

や」と。佛可して言はく、「是の如し、先づ惡魔來りて破壞せんに、佛及び十方の諸佛は、守護して沮壞せしめず、今、佛眼を以て、是の善男子善女人を見、是の人の功德の有り難きことを知る」と。未だ魔網を破せずして、而も能く是の般若波羅蜜「多」の大事を行す。是の故に、十方の佛は佛眼を以て見知り、是の人を念じたまふ。

問うて曰はく、(一六)天眼を以て見ること爲すや、佛眼を以て見るや。若し天眼を以て見ば、云何が此の中に佛眼を説くや。若し佛眼を以てせば、衆生は虚誑なり、云何が佛眼を以て見るや。答へて曰はく、(一七)天眼に二種あり、一には佛眼に攝せらる、二には佛眼に攝せず。攝せざる所とは、現在の衆生を見るに、限あり量あり。佛眼に攝せらるる者は、三世の衆生を見るに、限無く量無し、法眼は佛眼の中に入るも、但諸法を見るのみにして衆生を見ず。慧眼は佛眼の中に入るも、法を見ずして但畢竟空のみを見る。

問うて曰はく、(一八)佛眼に攝する所の天眼は實と爲すや、虚妄と爲すや。若し虚妄ならば、佛は虚妄を以て見るべからず、若し實ならば、衆生は空なり、現在の衆生すら尙實ならず、何に況んや、未來過去「の衆生をや」。答へて曰はく、佛眼に攝する所は、皆是れ實なり。衆生は涅槃に於いては是れ虚妄なれども、世界の見る所に於いては是れ虚妄に非ず。若し人衆生に於いて定相を取るが故に、説い

- 【一六】 第二問、天眼を以て見ると爲すか、將た佛眼を以て見ると爲すか。
- 【一七】 二種の天眼。
- 【一八】 第三問、佛眼所攝の天眼は、實と爲すか、將た虚妄となすか。

て虚妄と言ふ。世諦の爲の故に説いて虚妄と言ふに非ず。是を以ての故に佛眼に攝する所の天眼は衆生を見る。

問うて曰はく、(一九)若し爾らば何を以てか佛眼に攝する所の慧眼を以て衆生を見ざるや。答へて曰はく、慧眼は無相にして利なるが故に、慧眼は常に空無相無作を以て、共に相應し、衆生を觀するに中らず。何となれば、五衆和合して假名の衆生あればなり。譬へば小兒は小杖を以て之を鞭つべく、大杖を與ふるべからざるが如し。此の中に、菩薩の般若波羅蜜(多)を讚ずるは、世諦の爲の故に説く、第一義諦には非ず。

問うて曰はく、(二〇)未來世は未だ有らず、念じ知ることすら尙難し、何に況んや眼に見ることをや。答へて曰はく、過去法は滅して所有無しと雖も而も心數法の中の念力の故に、能く過去の事を憶し、其の宿命を盡くすが如し。聖人も亦是の如く、聖智力あり、未だ起らずと雖も、而も能く知り能く見る。

復次に、是の般若の中には、三世は分別無し、未來・過去・現在に異ならず。若し現在を見れば過去未來も亦應に見るべく、若し過去、未來を見ざれば、亦現在を見るべからず。

問うて曰はく、(二一)北方の末法の衆生は漏結未だ盡さず、是れ罪惡の人なり。佛は何を以ての故に見

【一九】第四問、佛眼所攝の慧眼を以て衆生を見る理由如何。  
【二〇】第五問、未來世を見ること如何にして可能なるか。  
【二一】第六問、北方の末法の衆生は漏結未だ盡さず、佛は何故に此の罪惡の人を見知り念じ給ひしや。

知り念じたまへるや。答へて曰く、佛は大悲なり相愛骨髓に徹し給ふ。是の菩薩は能く無上道心を發し、衆生の爲にするが故に、佛は是の法の末後に熾盛にして、我が涅槃の後、是の人佛法を佐助することを觀ず、故に是を以て念知したまふ。

復次に、北方の末後の人は、邊地惡世に生れ、三毒熾盛にして刀兵劫中にあり、賢聖希少なり。是の人は自ら罪福の業因縁を知らず、但人より聞き、若くは經を讀みて、便ち能く信樂し供養し、疾かに無上道に近づくと久しからず。是の事は難しと爲す。若し佛在世に阿鞞跋致と作り、般若波羅蜜〔多〕を信行することは、難しと爲すに足らず。是の如き等の種種の無量の因縁の故に、佛は應に見念じ、知りたまふべし。是の人は信解の相大なるが故に、能く般若波羅蜜〔多〕を供養す。供養の具の華香等は先に説くが如し。是の供養の故に大果報を得。如し毀弊する者は、大苦惱を受く。大果報とは、須陀洹の終に三惡道に墮せざるが如く、是の菩薩の一心に般若波羅蜜〔多〕を信解し供養するも亦是の如し。諸佛を愛念するが故に、常に念佛三昧を行ずるが故に、終に諸佛に離れてまつらす、乃至阿鞞跋致地に到りて衆生を教化し、諸佛を離るるも咎なし。小兒の其の母を離れざるは、諸難に墮することを恐るるが故なるが如し。常に深く善法を愛念するが故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るも、終に六波羅蜜多等を離れず、是の如き等の今世、後世の大果報を得。

「舍利弗よ、(三)是の深般若波羅蜜(多)は、佛の般涅槃の後、當に南方に至るべく、是の中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、當に是の深般若波羅蜜(多)を書すべく、當に受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行すべし。是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜(多)を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て、而も涅槃を得。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜(多)は、南方より當に轉じて西方に至るべし。所在の處の此の中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、當に是の深般若波羅蜜(多)を書すべく、當に受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行すべし。是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜(多)を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て、而も涅槃を得ん。

舍利弗よ、是の深般若波羅蜜(多)は西方より當に轉じて北方に至るべし。所在の處の此の中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は當に是の深般若波羅蜜(多)を書すべく、當に受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行すべし。是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜(多)を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て涅槃を得ん。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜(多)は、是の時、北方に當に佛事を作すべし。何となれば、舍利弗よ、我が法盛なる時は、滅相あること無ければなり。

舍利弗よ、我れ已に是の善男子善女人の是の深般若波羅蜜(多)を受け、乃至修行すること念す。亦た是の善男子善女人、能く是の深般若波羅蜜(多)を書し、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎するに、華香乃至幡蓋もてせば、舍利弗よ、是の善男子

【三】佛滅後に於ける般若の流傳を明す。

【三】佛は東方に出世し、其の教法は次第して南西北方に行はるべしとす。これ日月の循行するが如く、般若は無著にして、一處に住せざるを表するも、空法の南方より西方北方に流布せる歴史と照合して考ふべきものなり。

子善女人は、是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず。天上人中の樂を受け、六波羅蜜(多)を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て、而も涅槃を得。何となれば、舍利弗よ、我れ佛眼を以て是の人を見、我れ亦た稱譽し、讚歎し、十方世界の中の無量無邊阿僧祇の諸佛も亦佛眼を以て、是の人を見、亦た稱譽し、讚歎すればなり」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)は、後時に、當に北方に在りて、廣く行はるべきや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜(多)は、後時に、北方に在りて當に廣く行はるべし。舍利弗よ、後時、北方に於いて、是の善男子善女人は、若くは是の深般若波羅蜜(多)を聞き、若くは書し、受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、説の如く修行せば、當に知るべし、是の善男子善女人は、久しく大乘の心を發し、多く諸佛を供養し、善根を種ふ、久しく善知識と相隨はん」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、後時、北方に當に幾所の善男子善女人ありて、佛道を求め、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至説の如く修行すべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「後時、北方に多く佛道を求むる善男子善女人ありと雖も、少く、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、没せず、覺かず、怖かず、畏れざるものあるのみ。何となれば、是の人は、多く諸佛に親近し、供養し、多く諸佛に請問すればなり。是の人は、必ず能く、般若波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・厲提波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・檀波羅蜜(多)を具足し、四念處を具足し、乃至十八不共法を具足せん。」

「舍利弗よ、是の善男子善女人は、善根淳熟するが故に、能く多く衆生を利益し、阿耨多羅三藐三菩提の爲にす。何となれば、我れ今、是の善男子善女人の爲に、薩婆若に應ずるの法を説き、過去の諸佛も、亦た是の善男子善女人の爲に、薩婆若に應ずるの法を説きたまへり。是の因縁を以ての故に、是の人は後に生る時、續いて阿耨多羅三藐三菩提心を得、亦

他人の爲に、阿耨多羅三藐三菩提の法を説く。是の善男子善女人は、皆一心に和合し、魔若くは魔民の阿耨多羅三藐三菩提心を沮壞すること能はず、何に況んや、悪行の人、深般若波羅蜜(多)を行する者を毀害して、能く其の阿耨多羅三藐三菩提心を壞せんや。舍利弗よ、是の菩薩道を求むる諸の善男子善女人は、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、大に法喜法樂を得、亦多く人を善根に立て、阿耨多羅三藐三菩提を爲す」と。

論

釋して曰はく、是の深般若波羅蜜(多)は佛の滅度の後、當に南方の國土に至るべしとは、佛は東方に出で、中に於いて般若波羅蜜(多)を説いて、魔及び魔民外道を破し、無量の衆生を度し、然る後に、拘夷那竭雙樹の下に於いて滅度したまへり。後、般若波羅蜜(多)は、東方より南方に至る。日月五星二十八宿の、常に東方より南方に至り、南方より西方に至り、西方より北方に至りて須彌山を圍遶するが如し。又供養の常法の如く右遶して應に遍ねく閻浮提の人を度すべし。是の因縁を以ての故に、東方より南方に至り、南方より西方に至る。佛は著心無きが故に一處に定まらざるが如し、般若波羅蜜(多)も亦是の如く、定んで一處に住せず、西方より北方に至る。二方の衆生は、好んで供養し、書し、讀み、乃至修行し、華香乃至幡華もて「供養して」、大果報を得ること、經の中に説けるが如く、後、展轉して北方に至る。此の中の供養の所得の果報は上に説くが如し。舍利弗よ、是の般若波羅蜜(多)は北方に當に佛事を爲すべし。是の中に因縁を説く、佛の在す時は、能く衆疑を斷じ、佛法興盛して法の滅することを畏れず。佛の滅後五百歳を過ぎて、正法漸く滅す。是の時、佛事轉

難し。是の時、利根の者は讀誦し、正憶念し、亦華香を供養し、鈍根の者は書寫し、華香等を供養す。是の二種の人は久久しうして皆當に得度すべきが故に、當に佛事を作すべしと説く。佛の言はく、「是の善男子善女人を、我れ及び十方の諸佛は、皆佛眼を以て見、念じ知り、讚歎す」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「是の深般若者は北方に在りて、廣く行はるるや」と。廣く行はるとは、闍浮提に於いて、北方は廣大なるが故なり。又北方の地には雪山あり。雪山は冷やかなるが故に、藥草は能く諸毒を殺し、食す所の米穀に、三毒大に發すること能はず。三毒大に發すること能はざるが故に、衆生は柔軟にして、信等の五根は皆勢力を得。是の如き因縁もて、

北方に多く、般若波羅蜜(多)を行ふ。是の人は、是の深般若波羅蜜(多)を

【四】 親近諸佛の義解。

聞き、書持し、乃至正憶念し、説の如く行す。當に知るべし、是の人は久しく大乘の意を發し、多く佛を供養したてまつり、善根を種る、善知識と相隨ふとを。是の故に能く惡世に於て書持し信受し、乃至、説の如く修行す。舍利弗、問ふ、「北方に幾許の人ありてか、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、能く書し、讀誦し、乃至、説の如く修行するや」と。佛答へたまはく、「是の深般若者は知り難く、行じ

難く、多くの人ありて、無上道心を發し、菩薩と名くることを得と雖も、少しの人ありて、是の般若波羅蜜(多)を聞き、心通達して、驚かず没せず」と。心通達して、驚かず怖れざる相は、佛、此の中に自ら説きたまはく、「是の人は多く諸佛に親近す」と。諸佛に親近すとは、無量世に於いて、常に諸佛

を見、恭敬し供養するなり。問難とは、直に其の事を問ふも、疑心解けず、重ねて種種に問ふを名けて難と爲す。是の人は、世世に諸佛に從つて、般若波羅蜜(多)の事を問難す。是の人の功德の果報は未だ成せずと雖も、當に知るべし、是の人は六波羅蜜(多)三十七品乃至十八不共法を具足し、是の福徳を具足して、淳熟するが故に多く衆生を利益するとを。所謂、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)の因縁の故に、富貴の家に生れ、自ら布施を行じ、人をして布施せしめ、(三)辱提波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)の因縁の故に、無量の衆生をして、出家し受戒し、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむ。此の中に、佛、因縁を説きたまはく、「是の人は我れ及び過去の諸佛より、薩婆(サルワテ)若に應ずる大乘の法を聞く。是の故に後生に、是の心を失せざるなり。是の人は、亦他人をも教化して、是の如き事を説く。一燈を然せば展轉して皆然ゆるが如し。是の人は、諸の煩惱薄く、慳貪嫉妬瞋恚無きが故に、相讒謗せず、常に一心に和合す。是の故に魔、若くは魔民は、沮壞すること能はず」と。若し人少しく錯あるが故に魔其の便を得、人の瘡あれば、毒を受くるが如し。魔は是れ欲界の主なるすら尚ほ沮壞すること能はず、何に況んや悪行の人をや。或は人あり、悪行するも、而も惡に非ず。未だ欲を離れざる聖人の如し。是を以ての故に、悪行の人、般若波羅蜜(多)を毀咎し、菩薩を毀壞すと説く。

復次に、諸の善男子善女人は、無量世より來た、佛法を愛し、深く實法に著し、信心・慧力多きが

【五】 布施持戒の因縁の故に富豪の家に生る。

【六】 忍辱禪定の因縁の故に衆生をして出家授戒し、無上道を得せしむ。

故に、深般若波羅蜜「多」を聞き、大慈悲心を得るが故に、衆生の力に隨つて、深般若波羅蜜「多」に入らしめ、若くは般若の因縁、所謂、布施持戒等の諸の善根を得せしむ。阿耨多羅三藐三菩提の爲の故にとは、是の善男子善女人は無上道を求むるが故に、他を教へて諸の善根福德に住せしむるなり。

經

「是の善男子善女人は、我が前に於て誓願を立つ、「我れ菩薩道を行する時、當に無數百千萬億の衆生を度し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、示教し利喜し、乃至阿耨跋致地を受記せしむべし」と。我れ其の心を知りて亦隨喜す。是の善男子善女人は、亦た過去の諸佛の前に於いても誓願を立て、「我れ菩薩道を行する時、當に無數百千萬億の衆生を度し、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしめ、示教し利喜し、乃至阿耨跋致地を受記せしむべし」と。諸の過去の佛も亦其の心を知りて而して隨喜したまふ。

舍利弗よ、是の諸の善男子善女人の、爲す所の心は大なり、受くる所の色・聲・香・味・觸・法も亦た大なり。亦た能く大に施し、能く大に施し已りて、大善根を種ふ、大善根を種ふ已りて、大果報を得。衆生を攝するが爲の故に身を受け、能く衆生の中に於いて、内外の所有の物を捨つ。是の善根の因縁を以て、願を發して他方の世界に生ぜんことを欲す。現在の諸佛の深般若波羅蜜「多」を説きたまふ處に、諸佛の前に於いて、是の深般若波羅蜜「多」を聞き已りて、亦彼に於いて百千萬億の衆生を示教し利喜し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、佛は過去・未來・現在の法に於いて、法として知らざるもの無く、法如の相として知らざるもの無く、衆生の行は事として知らざること無し。今、佛は悉く過去の諸佛及び菩薩聲聞を知りたま

ひ、亦た今現在の十方諸佛の菩薩及び聲聞をも知りたまひ、亦た未來の諸佛及び菩薩聲聞をも知りたまふ。世尊よ、未來世に善男子善女人ありて、六波羅蜜(多)を勤求し、受持し、讀誦し、乃至修行せば、得有りや、不得有りや」と。

佛、舍利弗に告げたまはく、「若し善男子善女人、一心に精進し勤求すれば、當に六波羅蜜(多)に應ずる諸經を得べし」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「善男子善女人、是の如く修行する者は、當に是の六波羅蜜(多)に應ずる深經を得べきや」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、「是の善男子善女人は、是の六波羅蜜(多)に應ずる深經を得。何となれば、善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、衆生の與に法を説き、示教し利喜し、六波羅蜜(多)の中に住せしむ。是の因縁を以て

の故に、是の善男子善女人は、後身に轉生して、易く六波羅蜜(多)に應ずる深經を得、得已つて六波羅蜜(多)の所説の如く修行し、精勤して息ます、乃至佛世界を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得」と。

論

釋して曰はく、佛説きたまはく、「善男子善女人は、我が前及び過去の諸佛の前に於いて、誓願を立て、「我は菩薩道を行じ、當に無量百千萬億の衆生をして、無上道の意を發さしめ、示教し、利喜せしめ、阿鞞跋致(地)の記を得せしむべし。我れ及び過去の佛は、是の善男子の心に、大いに能く作す所あるを知るが故に隨喜す。善男子善女人は、佛の其の心を知りたまふを聞いて、則ち歡喜を生じ、自ら過去に「於て」、誓願を作せし事を「憶」念して、倍倍精進を加ふ」と。大心とは、一切衆生の心は、皆樂んで六塵を緣す。有る人は、雜の福德を行す、所謂福を作す時、心に疑悔を生じ、是の福德の果報は富貴を得と雖も、好く用ふること能はず、亦他に罪業の因縁を與ふること能はざるが故に

諸根の關鈍にして、好醜を擇ばず、是の善男子は未だ道を得ざる時、清淨なる福德の故に、上妙なる五欲を得、能く意を盡して用ゐ、亦た能く意に隨つて施與し、或は窮乏に施し、或は福田を種ゑ、若くは善知識を得て佛法を聞き、欲に著する心を息め、衆生を憐愍し、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、内外の所有る布施をば愛惜する所無く、若くは戒を持し、遍ねく十善道を行じ、戒律の儀を具へ、慈悲心を以て共に行ず。餘の善法も亦是の如く、皆深心を以て自ら行じ、及び他人を引導して、善道を行せしむ。是の福德の因縁の故に、世樂・天王・人王の富貴の處を求めず、現に佛在す處あるとを聞いて、彼に往生せんことを願ふ。是の菩薩は、諸法實相を知るが故に、生を樂しまず。若し衆生の爲に十方の佛の前に生じて、深般若波羅蜜(多)を聞き、聞き已つて彼に於いて、無量百千の衆生を開發して、無上道心を發さしむ。舍利弗は、一切智無く、三世の菩薩の願行の事を説くを聞いて、希有の心を發し、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は三世の中に於いて、法として知らざるもの無く、如法性實際に從つて知らざるもの無く、諸の衆生の心、所行の業果報・因縁、事として知らざること無く、十方現在の諸佛より及び過去、未來世の佛及び世界の弟子、及び所行の事、皆悉く遍ねく知りたまふ。佛の一切智は其の力甚大にして不可思議なり」と。

舍利弗意に謂へらく、「同じく是れ出家の人にして、俱に般若波羅蜜(多)を求むるに、何を以ての故に得る[者]あり、得ざる者ありや」と。佛答へたまはく、「若し是の菩薩は、常に一心に、六波羅蜜

「多」を求め、身命を惜まざれば、是の人は内に好心あり、外に諸佛菩薩及び諸天に護助せらるるが故なり」と。舍利弗意へらく、「復た精進すと雖も、佛世に在らずんば、魔力復た大ならん。是の菩薩は云何が是の般若波羅蜜〔多〕の深經を得ん」と。是の故に更に是の六波羅蜜〔多〕に應ずる深經を得ることを問ふ。佛の言はく、「得」と。是の中に得る因縁を説く。所謂、善男子善女人は、無上道の爲の故に衆生の爲に法を説きて、示教し利喜せしめ、六波羅蜜〔多〕に住せしめ、佛道を開く。是の業の果報の故に、身を轉じて易く六波羅蜜〔多〕に應ずる深經を得。若し能く疾く受持することを得、乃至所説の如く、修行し、精進して捨てず、世世に常に離れずんば、六波羅蜜〔多〕を用ふる果報の故に佛世界を淨め、衆生を成就し、乃ち無上道に至らん。

(三毛) 若し法を憍惜すれば、則ち常に邊地の佛法無き處に生ず。

【三毛】 佛法を憍惜せば、常に邊地無佛法の處に生ぜん。

# 卷の第六十八

## 二(五) 魔事品第四十六を釋す。

經

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の善男子、善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、六波羅蜜〔多〕を行じ、衆生を成就し、佛世界を淨む。佛已に讚歎して其の功德を説く。世尊よ、云何が善男子、善女人は、佛道を求むるに諸の留難を生ずるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「樂說辯即生せざれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、樂說辯即生せざれば、是れ菩薩の魔事なるや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩ありて般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、六波羅蜜〔多〕を具足すること難し。是の因縁を以ての故に、樂說辯即生せざるは、是れ菩薩の魔事なり」と。

復次に、須菩提よ、樂說辯卒に起らば、當に知るべし、亦是れ菩薩の魔事なりと。

「世尊よ、何の因縁の故に、樂說辯卒に起らば、復た是れ魔事なるや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜〔多〕乃至般若波羅蜜〔多〕を行じ、樂に著して法を説く。是の因縁を以ての故に、樂說辯卒に起らば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり」と。

復次に、須菩提よ、是の般若波羅蜜〔多〕經を書する時、假使傲慢なるは、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。復次に、須菩提よ、是の經を書する時、戲笑亂心なるは、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。復次に、須菩提よ、若し是の經を

【一】魔事とは、行者の被むる留難なり。此の品以下種種の留難を細説するが故に此の名あり。

【二】即生とは、速疾に説法するをいふ。

書する時、輕笑して敬せざるは、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。

復次に、須菩提よ、是の經を書する時、心亂れて定まらざるは、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。復次に、須菩提よ、善男子、善女

よ、若し是の經を書する時、各各和合せざるは、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。復次に、須菩提よ、善男子、善女人は、是の念を作す、「我れ是の經中に滋味を得ざれば、便ち棄捨し去らん」と。當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)を受持し讀誦し説き、若くは正憶念する時、僣憍傲慢なれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。復次に、須菩提よ、若し般若波羅蜜(多)經を受持し、親近し、正憶念する時、轉相し形笑せば、當に知る

べし、是れ菩薩の魔事なりと。

復次に、須菩提よ、若し般若波羅蜜(多)經を受持し讀誦し正憶念し修行する時、共に相輕慢せば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。若し般若波羅蜜(多)を受持し讀誦し、乃至正憶念する時、心を散亂するは、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。若し般若波羅蜜(多)をば受持し、讀誦して、乃至正憶念する時、心和合せざれば、當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は、善男子、善女人は、是の念を作す、我は經中に滋味を得ざれば、便ち棄捨し去らんと。當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと説きたまふ。世尊よ、何の因縁の故に、菩薩は經中に滋味を得ざれば、便ち棄捨し去るや」と。佛の言はく、「是の菩薩摩訶薩は、前世に久し般若波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・檀波羅蜜(多)を行ぜず。是の人は是の般若波羅蜜(多)を説くを聞いて、便ち座より起つて、是の念を作す、「我は般若波羅蜜(多)の中に於いて、無記心にして清淨ならず」と、便ち座より起つて去る。當に知るべし、是れ菩薩の魔事なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、愛記を與へざれば、是の般若波羅蜜(多)を説くを聞く時、便ち座より起つて去るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩、未だ法位の中に入らざれば、諸佛は阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授けたまはず。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)を説くを聞く時、菩薩は是の念を作す、「我は是の中に名字無く、心清淨ならず」と。當に知るべし、是れ菩薩の魔事なりと。須菩提言はく、「何の因縁の故に、是の深般若波羅蜜(多)の中に、是の菩薩の名字を説かざるや」と。佛の言はく、「未だ記を受けざる菩薩は、諸佛の名字を説かず」と。

復次に、須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は是の念を作す、是の般若波羅蜜(多)の中に我が生ずる處の名字、若くは衆落・城邑無しと。是の人は、般若波羅蜜(多)を聽くことを欲せず、便ち會中より起ち去る。是の人は所起の念時の如く、念念に一劫を却き、甫めて當に更に勤めて精進し、阿耨多羅三藐三菩提を求むべしと。

論

釋して曰はく、一切有爲の法には、各増上有り。増上とは、共に相違するなり。相違は即ち是

れ怨賊なり。水の増上力を得れば火を滅し、火の増上力を得れば則ち水を消し、乃至草木に各相害あるが如し。何に況んや衆生をや。菩薩摩訶薩は大慈心有り、衆生の與に怨を作さずと雖も、而も衆生は菩薩の與に怨を作す。菩薩の身は有爲法なるが故に、能く留難を作す。佛は上に菩薩の功德を説きたまへり。所謂「諸佛・菩薩・諸天に護らる」と。而も未だ怨賊の相を説きたまはず。今佛は憐愍するが故に、先づ略説したまふと雖も、今、須菩提は佛に廣く留難の事を説きたまはんことを請ふ。佛は一切衆生一切法に於いて、心平等なりと雖も、是の菩薩の能く大に世間を利益するを以ての故に、

好醜かうしゆうの相さ及びおよ利害りが是ぜ道だう非道ひだう留難りうなんの事じを説ときたまへり。佛ほとけは行人ぎやうにんをして、毀害きがい留難りうなんせしめずとは、但ただ覺知かくちして、其その事じに隨したがはざらしむ。何者なにものか是これ怨賊おんぞくなる。略りやくして説とかば、若もしくは衆生しゆじやう法ほふ・非衆生ひしゆじやう法ほふの能よく苦薩くさつの無上むじやう道だう心しんを沮壞そするなり。三さん 非衆生ひしゆじやうとは、若もしくは疾病しつびやう・飢渴きかつ・寒熱かんねつ・推落すいらく・墜落ついらく等とうなり。衆生しゆじやうとは、魔ま及びおよ魔民まみん・惡鬼あくき・邪疑じやぎ・不信ふしんの者もの善根ぜんこんを斷たする者もの・定さだんで所得しよとくある者もの・實じつに定さだんで諸法しよほふを分別ぶんべんする者もの深ふかく世間せけんの樂らくに著ちやくする者もの・怨賊おんぞく・官事くわんじ・師子しし・虎狼こらう・惡獸あくじゆう・毒蟲どくちゆう等とうの衆生しゆじやうなり。四し 賊ぞくに二種しゆにしゆあり。若もしくは内ない、若もしくは外げなり。内ないとは、自みづから心こころに從したがつて憂愁うしゆうを生しやうじ、法味ほふみを得えず、邪見じやけん・疑悔ぎげ・不信等ふしんとうを生しやうずるなり。外げとは、上かみに説とくが如ごとし。是かくの如ごとき諸しよの難事なんじを佛ほとけは總そうじて名なづけて魔まと爲なしたまへり。五ご 魔まに四種しゆにしゆあり。煩惱はんなん魔ま・五衆魔しゆしゆま・死魔しまた・天子てんし魔まなり。六ろく 煩惱はんなん魔まとは、所謂いはゆる百八煩惱ひゃくはちはんなん等とうにして八萬四千はちまんしよせんの諸しよの煩惱はんなんに分別ぶんべんす。七しち 五衆魔しゆしゆまとは、是この煩惱はんなん業ごふの和合わがふの因緣いんねんを以もつて是この身みを得え。四大だいだい及びおよ四大造色だいだいぞうしきの眼根等がんこんとうの色しき、是これを色衆しきしゆと名なづけ、百八煩惱ひゃくはちはんなん等とうの諸受しよじゆうの和合わがふせるを名なづけて受衆じゆうしゆと爲なし、小大無量無所有せうだいむりやうむしゆうの想さう・分別ぶんべんの和合わがふせるを名なづけて想衆さうしゆと爲なし、好醜かうしゆうの心發こころはつするに因よりて、能よく貪欲こんよく・瞋恚等しんさいとうの心相應しんさう・木相應もくさうの法ほふを起おこすを名なづけて行衆ぎやうしゆと爲なし、六情六塵和合りくじやう りくじんわがふするが故ゆゑに六識りくしきを生しやうじ、是この六識りくしきは、無量無邊むりやうむへんの心こころを分別ぶんべんし和合わがふす、是これを識衆しきしゆと名なづく。八はち 死魔しまたとは、無常むじやうの因緣いんねんの故ゆゑに、相續さうぞくせる五衆しゆしゆの壽命じゆみやうを破やぶし、盡つくく三法さんほふ、「所謂いはゆる」識しき・熱壽ねつじゆを離はなるるが故ゆゑに、名なづけて死魔しまたと爲な

- 【三】 非衆生の義解。
- 【四】 二種の賊——(一)内、(二)外。
- 【五】 魔羅(Māra)略、能奪命と譯す、之に三魔・四魔・八魔・十魔等の類あり
- 【六】 (一)煩惱魔の義解。
- 【七】 (二)五蘊魔の義解。
- 【八】 (三)死魔の義解。

す。天子魔とは、欲界の主の深く世間の樂に著し、有所得を用ふるが故に邪見を生じ、一切の賢聖涅槃の道法を憎嫉する、是を天子魔と名く。魔は秦に能く命を奪ふ者と言ふ。唯死魔は實に能く命を奪ふ。餘の者も亦能く奪命の因縁と作り、亦智慧の命をも奪ふ。是の故に殺者と名く。

問うて曰はく、(二) 一の五衆魔は三種の魔を攝す。何を以ての故に、別して四を説くや。答へて曰はく、實には是れ一魔なるも、其の義を分別するが故に四有り。煩惱魔は、人の貪欲瞋恚に因るが故に死し、亦能く奪命の因縁と作る。是は奪命の因縁に近きが故に別に説く。天子魔は、雜福德の業因縁の故に力勢大に、邪見力の故に能く慧命を奪ひ、亦能く死の因縁と作る。是の故に別に説く。無常の死力は大にして、一切能く免るる者無く、甚だ畏れ厭ふべし。故に別に説くなり。

問うて曰はく、(三) 一の魔は何を以てか行道の者を惱亂するや。答へて曰はく、先に已に廣く説けり。是の品のの中に、皆四種の魔の義あり、但隨處に説くのみ。復次に、三魔は相遠離せず。若し五衆あれば、則ち煩惱あり。煩惱あれば、則ち天魔ありて、其の便を得。五衆とは煩惱と和合するが故に天魔あり。是の故に須菩提は問ふ、佛は上に已に菩薩の功德を讚歎し説きたまへり。今云何が是の菩薩の魔事起るやと。(三) 佛答へたまふ、樂説辯即生せざる、是を魔事と爲すとは、

- 【九】 (四) 天子魔の義解。
- 【一〇】 魔の意義。
- 【一一】 第一問、五蘊魔の中に他の三魔は攝せらるべし。今それ四魔を説くは何故なるか。
- 【一二】 第二問、魔が行道者を惱亂する理由如何。
- 【一三】 樂説辯即生せざるを魔事と爲す理由。

若し菩薩摩訶薩は衆生を憐愍するが故に高座に法を説く。而も樂說辯即生せざれば聽者憂愁し、「我等は故ら來るに而も法師は説かず」と。或は是の念を作す、「法師は怖畏するが故に説くこと能はず」と。或は言はく、「知らざるが故に説かず」と。或は、「自ら惟れ過咎深重なるが故に説かず」と。或は謂はく、「供養を得ざるが故に肯へて説かず」と。或は謂はく、「我等を輕賤するが故に説かず」と。或は、「樂を申すが故に説かず」と。是の如き等の種種の因縁「を以て」、聽者の心壞するが故に、以て樂說せざるを名けて魔事と爲す。

復次に、是の菩薩は衆生を憐愍するが故に來りて法を説かんと欲し、聽く者も聞かんと欲し、而して法師は心生じて説かんと欲するも、而も口に言ふこと能はず。現に是れ魔事なり。魔・阿難の心に入り、佛三たび問ひたまふも、而も三たび答へず、久しうして乃ち説けるが如し。此の中に須菩提問ふ、「世尊よ、何の因縁の故に辯即生せざるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は六波羅蜜「多」を行する時、六波羅蜜「多」を具足すること難し。何となれば、是の人は、先世の因縁の故に、鈍根懈怠にして、魔、其の便を得、一心に六波羅蜜「多」を行せざるが故に、樂說辯即生せざればなり」と。

問うて曰く、(四) 如し樂說辯即生せざるは、是れ魔事なり。今、樂說辯卒に起るは、何を以てか、復た是れ魔事なるや。答へて曰く、是の法師は法を愛し名聲を求むるが故に、自ら恣まに樂說して義

【四】 第三問、樂說辯卒に起るは何故に魔事なるか。

理あること無く、逸馬の制し難きが如く、又大水の暴浪すれば衆穢渾雜するが如し。是の故に此の中に、佛は自ら説きたまはく、「菩薩の六波羅蜜〔多〕を行じて説法に樂著する、是を魔事と爲す」と。

復次に、是の般若波羅蜜〔多〕は憍慢を破するが爲の故に出づ。而も是の經を書する者は我心憍慢を生じ、憍慢の故に身も亦高く、所謂憍慢傲慢にして、是の般若波羅蜜〔多〕を書する時、輕心瞋心を用つて戲笑して敬せず。

復次に、是の般若波羅蜜〔多〕は、若し一心に心を攝するすら猶尙得難し、何に況んや、散亂の心〔を以て〕書するをや。書する時、人口より受け、或は經卷を寫し、若くは一心に和合して則ち得、若くは授者與へず。

是の如き等の種種の因縁〔を以て〕是れ和合せず。

復次に、是の般若經を觀看する時、品品は皆空にして、樂ふべき處無く、是の念を作す、「我は是の經に於いて滋味を得ず」と。便ち棄捨し去る。般若波羅蜜〔多〕は是れ一切諸樂の根本なり。是の人は其の味を得ず、是を魔事と爲す。

復次に、〔一八〕受持し讀誦し説き正憶念する時、優儼し形笑し、散亂の心〔を以て〕和合せざること、上に説くが如し。共に相輕賤すとは、人より受けて讀誦し正憶念する時、師徒互に相輕賤す。經を書寫する時は、但捨て去ること有るも、相輕賤すること無し、是を以ての故に無なり。

- 【一五】 般若を書寫し、優儼傲慢なる、これ魔事なり。
- 【一六】 散亂の心、これ魔事なる理由。
- 【一七】 滋味を得ざる、これ魔事なる理由。
- 【一八】 受持讀誦の時、優儼形笑する、是れ皆魔事なる理由。

問うて曰はく、(二)上の事の中に何を以てか、但經中の滋味を得ざることを問ひ、餘の者を問はざるや。答へて曰はく、般若波羅蜜(多)は、聖人の所説にして、凡人の説と異なる。是の故に凡夫の人は滋味を得ず。須菩提、意に謂へらく、「般若波羅蜜(多)は、是れ清淨なる珍寶聚にして、能く衆生を利益し、過惡あること無し。是の人、云何が滋味を得ざるや」と。佛答へたまはく、「是の人は先世に久しく六波羅蜜(多)を行せざるが故に、菩薩の信等の五根薄きが故に、空・無相・無作を信すること能はず、依止の法無く、憊亂の心起りて、是の言を作す、「佛は一切智なるに、何を以てか我に授記を與へざるや」と。便ち捨て去る。餘は解し易きが故に問はず。須菩提問ふ、「若し爾らば、何を以ての故に授記を與へざるや。佛は是れ大慈にして、應當に愍念して、其の心を防護し、惡に墮せしめざるべし」と。(三)佛の言はく、未だ法位に入らざる人には、諸佛は授記を與へたまはず。所以は何となれば、諸佛は悉く衆生の久遠の事、五通の仙人及び諸天たりしとを知らずとも、是の人の未だ善行の業因縁あらざるを見て授記したまふべけんや。若し授記を爲さば、佛を輕んじて信せず、因縁あること無し、云何が授記を與ふべけんや。是の故に法位に入る者に授記を與ふ。是の人の名字及び聚落處も亦是の如し。是の人は座より起つて去り、其の起す念(多少)に隨つて、一念に一劫を却き、罪を償ひ畢りて、還た人身を得。甫めて當に復た、爾所の劫をば行す

【九】 第四問、經中に但滋味を得ざるのみを問ひ、餘の事項を問はざる理由如何。  
 【一〇】 未だ法位に入らざれば授記を與へず。法位とは、慧眼無生忍を得たる位なり。

べしと。

經

「復次に、(三)須菩提よ、菩薩は餘經を學して般若波羅蜜(多)を棄捨せば、終に薩婆若に至ること能はず。善男子善女人にして、其の根を捨てて枝葉に攀づるを爲さば、當に知るべし、亦是を菩薩の魔事なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ餘經にして、善男子、善女人の學する所、薩婆若に至るべと能はざるや」と。佛の言はく、「是は聲聞の行すべき所の經なり。所謂、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・空・無想・無作・解脫門なり。善男子善女人は、是の中に住して、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得。是を聲聞の行する所にして、薩婆若に至ること能はずと名く。是の如きの善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を捨てて、是の餘經に親近す。何となれば、須菩提よ、般若波羅蜜(多)の中より諸の菩薩摩訶薩を出生し、世間・出世間の法を成就すればなり。須菩提よ、(三)菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を學する時、亦世間・出世間の法を學す。須菩提よ、譬へば狗の大家に從つて食を求めず、反つて作務者に從つて索むるが如し。是の如く、須菩提よ、當來世に善男子、善女人ありて、深般若波羅蜜(多)を棄て、而して枝葉に攀ぢ、聲聞辟支佛の行すべき所の經を取らば、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲すと。

須菩提よ、譬へば人あり、象を見ることを得んと欲し、見已つて反つて其の跡を觀るが如し。須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の人を點すと爲すや不や」と。須菩提言さく、「點せずと爲すと。佛の言さく、「佛道を求むる善男子、善女人も、亦た復た是の如く、深般若波羅蜜(多)を得て、(是を)棄捨し、去つて聲聞辟支佛の行すべき所の經を取る。須菩提よ、當に

【三】般若を棄てて小乘を學するも、即ち是れ魔事なる所以を説く。  
 【三】般若を學する時、亦た出世の法を學するは、狗の大家より食を求めず、労働者より求むるが如し。

知るべし是を菩薩の魔事と爲すと。

須菩提よ、譬へば人の大海を見んと欲して、反つて牛跡の水を求め、是の念を作すが如し、大海の水能く此と等しきや

不やと。須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人は點すと爲すや不や」と。須菩提言さく、「點せずと爲すと。佛の言はく、

當來世に佛道を求むる善男子、善女人ありて、亦是の如く、深般若波羅蜜(多)を得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の行すべ

き所の經を取らば、當に知るべし、是も亦菩薩摩訶薩の魔事なりと。

須菩提よ、譬へば工匠若くは工匠の弟子の、釋提桓因の勝殿を擬作せんと欲して、而も則ち日月の宮殿に揆ぶが如し。

須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人を點すと爲すや不や」と。須菩提言さく、「點せずと爲すと。是の如く、須菩提よ、

當來世に薄福徳の善男子、善女人、佛道を求むる者ありて、是の深般若波羅蜜(多)を得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の行す

べき所の經中に於て、薩婆若を求めば、須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人を點すと爲すや不や」と。須菩提言さく、

「點せずと爲すと。佛の言はく、當に知るべし、亦是れ菩薩の魔事なりと。須菩提よ、譬へば人あり、轉輪聖王を見んと

欲し、見るも而も識らず、後諸の小國の王を見て、其の相貌を取りて、是の如く言ふが如し、轉輪聖王は、此と何ぞ異

ならんと。須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人を點すと爲すや不や」と。須菩提の言さく、「點せずと爲すと。須菩提

よ、當來世に薄福徳の善男子、善女人、佛道を求むる者ありて、是の深般若波羅蜜(多)を得て棄捨し去り、聲聞辟支佛の

行すべき所の經を取りて持し、薩婆若を求めんに、須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人を點すと爲すや不や」と。須菩提言

さく、「點せずと爲すと。(佛の言はく)、當に知るべし是を菩薩の魔事と爲すと。須菩提よ、譬へば飢人の百味の食を得て

棄捨し去りて反つて六十日の穀飯を食するが如し。須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人を點すと爲すや不や」と。須菩提の

言さく、「點せずと爲すと。佛の言はく、當來世に佛道を求むる善男子、善女人ありて、深般若波羅蜜(多)を聞くことな

得て、〔是を〕棄捨し去り、聲聞辟支佛の行すべき所の纏を取り、持して薩婆若を求めば、汝が意に於て云何、是の人は  
 點すと爲すや不や」と。須菩提言さく、「點せずと爲す」と。〔佛の言はく〕、「當に知るべし、是れ亦菩薩の魔事なりと。須菩  
 提よ、譬へば人の無價の摩尼珠を得、反つて持つて水精珠に比するが如くんば、須菩提よ、汝が意に於て云何、是の人を點す  
 と爲すや不や」と。須菩提言さく、「點せずと爲す」と。佛の言はく、「當來の世に、佛道を求むる善男子、善女人ありて、深  
 般若波羅蜜〔多〕を聞くことを得、〔是を〕棄捨し去り、聲聞辟支佛の行すべき所の纏を取り持して、薩婆若を求めば、是  
 の人は點すと爲すや不や」と。須菩提言さく、「點せずと爲す」と。〔佛の言はく〕、「當に知るべし是れ亦菩薩の魔事なりと。  
 復次に、須菩提よ、佛道を求むる善男子、善女人、是の深般若波羅蜜〔多〕を書する時、樂説すること法事の如くならば、檀  
 般若波羅蜜〔多〕を書成することを得ず、所謂樂んで色・聲・香・味・觸・法を説き、樂んで持戒・禪定・無色定を説き、樂んで檀  
 波羅蜜〔多〕乃至般若波羅蜜〔多〕を説き、樂んで四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提を説く、何となれば、須菩提よ、是の般若波  
 羅蜜〔多〕の中には、樂説の相無ければなり。須菩提よ、般若波羅蜜〔多〕は不可思議の相なり。般若波羅蜜〔多〕は不生不滅の  
 相なり。般若波羅蜜〔多〕は不垢不淨の相なり。般若波羅蜜〔多〕は不亂不散の相なり。般若波羅蜜〔多〕は無説無示の相なり。  
 般若波羅蜜〔多〕は無言無義の相なり。般若波羅蜜〔多〕は、無所得の相なり。何となれば、須菩提よ、般若波羅蜜〔多〕の中  
 に、是の諸法の相無ければなり。須菩提よ、若し善男子、善女人、菩薩道を求むる者ありて、是の般若波羅蜜〔多〕を書する  
 時、是の諸法の散亂心を以てせば、當に知るべし、是も亦菩薩の魔事なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜〔多〕は書すべきや」と。佛の言はく、「書すべからず。何となれば、  
 般若波羅蜜〔多〕は自性無きが故なり。禪波羅蜜〔多〕、毗梨耶波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、檀波羅蜜〔多〕乃至  
 一切種智は自性無きが故なり。若し自性無ければ、是を名けて性と爲さず、無法なれば無法を書すべからず。須菩提よ、若

し菩薩道を求むる善男子、善女人、是の念を作す。「無法は是れ深般若波羅蜜(多)なりとせば、當に知るべし即ち是れ菩薩の魔事なり」と。「世尊よ、是の菩薩の道を求むる善男子、善女人、文字を用て般若波羅蜜(多)を書し、自ら念すらく、我は是の般若波羅蜜(多)を書すと。字を以て般若波羅蜜(多)に著す、當に知るべし、亦た是れ菩薩の魔事なり」と。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は文字無く、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、唐提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)も文字あること無し。世尊よ、色も文字無く、受想行識も文字無く、乃至一切種智も文字無ければなり。世尊よ、若し菩薩道を求むる善男子、善女人、無文字の般若波羅蜜(多)に著し、乃至無文字の一切種智に著せば、當に知るべし、亦是れ菩薩の魔事なり」と。讀誦して説き、正憶念し、説の如く修行するも亦是の如し」と。

「復次に、須菩提よ、佛道を求むる善男子、善女人は、般若波羅蜜(多)を書する時、國土の念起り、聚落の念起り、城邑の念起り、方の念起り、若くは其の師を謗毀するを聞く念起り、若くは父母及び兄弟、姉妹、諸餘の親里を念じ、若くは賊を念じ、若くは旃陀羅を念じ、若くは衆女を念じ、若くは姪女を念す。是の如き等の種種諸餘の異念は、留難にして、惡魔復其の念を益して、般若波羅蜜(多)を書するを破壊し、讀誦して説き、正憶念し、説の如く修行するを破壊す。須菩提よ、當に知るべし、是も亦魔事なり」と。

復次に、須菩提よ、佛道を求むる善男子、善女人、名譽、恭敬、布施、供養、所穿衣服、飲食、臥床、疾藥、種種の樂具を得て、善男子、善女人は是の般若波羅蜜(多)經を書し受持し讀誦し、乃至正憶念する時、是の事に愛著せば般若波羅蜜(多)を書成し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是れ亦た菩薩の魔事なり」と。

復次に、須菩提よ、佛道を求むる善男子善女人の、般若波羅蜜(多)を書し、乃至説の如く修行する時、惡魔は方便もて諸餘の深經を持し是の菩薩に與ふ。方便力ある者は、惡魔の與ふる所の諸餘の深經に貪著すべからず。何となれば、是の經は

人をして薩婆若に至らしむること能はざればなり。是の中に方便無し。菩薩摩訶薩は是の諸餘の深經を聞いて、便ち深般若波羅蜜(多)を捨つ。須菩提よ、我は是の般若波羅蜜(多)の中に、廣く諸の菩薩摩訶薩の方便道を説けり。諸の菩薩摩訶薩は應當に是の中より求むべし。須菩提よ、今、善男子善女人は、菩薩道を求むるに、是の深般若波羅蜜(多)を捨て、魔の與ふる所の聲聞辟支佛の深經の中に於いて、方便道を求めば、當に知るべし、亦た是れ菩薩の魔事なりと。

論

釋して曰はく、餘經を學して、般若波羅蜜(多)等を捨つる人有り。聲聞の師僧の中に於いて、

戒を受け法を學し、初より般若波羅蜜(多)を聞かず、或時は餘處に聞いて、深く先に學する所の法に著し、般若波羅蜜(多)を捨てて、先に學する所の法中に於いて、薩婆若を求むる聲聞の弟子有り、先に般若波羅蜜(多)を得るも義趣を知らず、滋味を得ず、聲聞經を以て菩薩道を行ずる人有り。是の聲聞の弟子は、般若波羅蜜(多)經を得て、信受せんと欲するに、餘の聲聞の人は、其の心を沮壞し、語つて言はく、「是の經の初後には、相應せず、定相あること無し。汝は宜しく之を捨つべし。聲聞法の中に何ぞ有らざる所あらん。六足阿毗曇及び其の論議の諸法の相を分別するは、則ち是れ般若波羅蜜(多)なり。八十部律は即ち是れ尸羅波羅蜜(多)なり。阿毗曇の中に諸禪・解脫・諸の三昧等を分別するは是れ禪波羅蜜(多)なり。三藏の本生(經)中に解脫を讚歎する布施・忍辱・精進は、即ち是れ三波羅蜜(多)なり」と。是の如き等の種種の因縁を以て般若波羅蜜(多)を捨て、聲聞經の中に於いて薩婆若を求む。人の堅實の好木を得んと欲し、其の根莖を捨てて、而して枝葉を取らば、是を木と名くと雖

も、而も用ゆうに中ちゆうらざるが如ごとし。

復次に、三般若波羅蜜多は、是れ三藏さんざうの根本こんぽんなり。般若波羅蜜多を得えれば、衆生しゆじゆうを度たせんが爲ための故ゆゑに、餘事よじを説とく。是この故ゆゑに枝葉しえふと名なづく。

復次に、聲聞經しやうもんきやうの中に、諸法實相しよほふじつさうを説とくと雖も、而も了れう了れうならず。般若波羅蜜多經きやうの中には、分明みやうけんげんに顯現けんげんして見易みやすく得易えやすし。人ひとの枝葉しえふに攀緣はんえんすれば、則ち墜落たふさくし、若し莖幹きやうかんを捉とらふれば、則ち堅固けんこなるが如ごとく、二若し聲聞經しやうもんきやうに執しゆすれば、則ち小乘せうじやうの中に墮だし、若し般若波羅蜜多經きやうを持もすれば、易たやすく無上道むじやうだうを得え。是この故ゆゑに根幹こんかんを捨すてて枝葉しえふを取とると説とく。

問とうて曰いはく、三三十七品さんじちひん三解脱門さんげだつもんは般若經はんにやきやうの中なかにも亦また有あり、今何いまなにを以もつての故ゆゑに、但ただ聲聞しやうもん辟支佛經びやくしふつきやうと名なづくるや。答こたへて曰いはく、摩訶衍まかえんの中なかに、是この法有ほふありと雖も、畢竟空ひつぎやうくうと合がっして心こころに著ちやくする所無ところなく、薩婆若サルワヂニヤードの大悲だいいひ心しんを捨すてざるを以もつて、一切衆生いつしやうじゆうの爲ための故ゆゑに説とくなり。聲聞經しやうもんきやうは則ち爾しからず、小乘せうじやうの證しやうの爲ための故ゆゑなり。

復次に、菩薩ぼさつは般若波羅蜜多を行ぎやうするが故ゆゑに、能よく世間せけん出世間しゆつせけんの法ほふを成じやう就じゆす。是この故ゆゑに菩薩ぼさつ、若もし佛ほとけを求もとむれば、應當まさに般若波羅蜜多を學まなすべし。譬たとへば狗いぬは主あるじの守備しゆびを爲なし、應まさに主あるじより食いきを索もとむべきに、而も反かへつて奴客ぬきやくに於おいて求もとむるが如ごとく、菩薩ぼさつも亦是またの如ごとし。狗いぬを行ぎやう者に喻たとへ、般若波羅蜜多

【三】 般若以外の三藏を枝葉と名くる所以。

【四】 般若を棄てて小乘を習ふ者は、枝葉に攀ちて、根幹を棄つるが如し。

【五】 第五問、般若經の中にも三十七品、三解脱門あり、然るを之を二乘經と名くるは何故なるか。

〔多〕を主人に喩ふ。般若の中には種種の利益あるに、而も捨てて餘經を求む。佛は今分明に見易からしめんと欲するが故に譬喩を説きたまへり。象大海帝釋の殿・轉輪聖王・無價の寶も亦是の如し。

問うて曰はく、(二五) 五欲は五蓋を生ず、五蓋は智慧を覆ふを以ての故に樂説すべからず、何を以ての故に、餘の六波羅蜜〔多〕、乃至、無上道を樂説するを而も不如法と言ふや。答へて曰はく、不如法とは、般若波羅蜜〔多〕の實相の如くならず。般若波羅蜜〔多〕の實相の中には、定相の法ある無し、云何が定んで説くべけんや。若し定相あらば、則ち心樂説に著す。諸佛及び菩薩は、大悲心を以ての故に、衆生の爲に法を説くも、語言に著せず、無所得の法を用つて、衆生に畢竟空相、般若波羅蜜〔多〕を示す。是の人は書し讀誦する等に、染著の心を以て、六塵の相乃至無上道を取るが故に不如法と言ふなり。

問うて曰はく、(二六) 若し般若波羅蜜〔多〕は畢竟空無所有の法ならば書し讀

【二六】 第六問、六度乃至無上道を樂説するを不如法と言ふ理由如何。  
【二七】 第七問、畢竟空にして無所有なる智度は書寫し讀誦すべからず、何ぞこれに魔事あらんや。

誦する等すべからず。是の如くなれば、則ち魔事あるべからず。答へて曰はく、畢竟空・無所有も、亦般若波羅蜜〔多〕の相に非ず。何となれば、是れ魔事なればなり。是の中に説けり、「若し是の人、無所有は是れ般若波羅蜜〔多〕の相なりと知れば、即ち是れ魔事なり。若し文字を用つて、般若波羅蜜〔多〕を書し、自ら我は般若波羅蜜〔多〕を書すと知りて、此の著心あらば、即ち是れ魔事なり。若し

人、般若波羅蜜〔多〕の相を知れば、著心を以て書し、讀誦する等をなさず。若し來りて〔是の人を〕破する者有れば、是れ般若波羅蜜〔多〕を破すと爲す。

復た次に、内に煩惱魔有り、外に天子魔有り。是の二事の因縁の故に、般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至修行する時、般若波羅蜜〔多〕を壞す。念起とは、所謂此の國土は安隱ならず、彼の國土は豊樂なりと念するなり。聚落・城邑・方も亦是の如し。或は其の師を謗毀するを聞いて、般若波羅蜜〔多〕を捨て、師を助け惡名を除滅せんと欲す。或は父母の疾病・官事を聞き、或は賊を念じて恐怖し、心發して餘處に詣らんと欲す。旃陀羅も亦是の如し。賊と旃陀羅と共に住すれば、則ち瞋恚を發し、衆女・姪女と共に住するが故に、姪欲の心發る。是の如き等の種種の因縁〔を以て〕、般若波羅蜜〔多〕を破壞す。菩薩は覺知して、當に念すること莫く説くこと莫るべし。或は般若波羅蜜〔多〕を書する時、鈍根なる者は、多く恭敬供養の事の中に於いて、愛著して自ら念ず、「我は能く書し、能く隨つて行するが故に是れ有り」と。是の利養に著す、即ち是れ魔事なり。或は利根の者有り、魔或は思惟すらく、「是の菩薩は世間の樂に著せず、一心に般若波羅蜜〔多〕を受く、此の人は沮壞すべからず。我れ今當に聲聞の深經を以て、其の心を轉じ、阿羅漢を成せしむべし」と。佛の言はく、「聲聞經は深しと雖も貪著すべからず、譬へば、燒然せる金丸は、色は妙なりと雖も、捉ふべからざるが如し」と。若し菩薩に方便無く、大利根ならざれば、是の經を得て歡喜す。是の空・無相・無作は苦を盡くす本にして、何ぞ復た

是に過ぎん。便ち般若波羅蜜(多)を捨つるも、亦是れ魔事なり。何となれば、此の中に、佛は因縁を説き、般若波羅蜜(多)の中に於て、廣く諸の菩薩摩訶薩の方便道を説きたまへばなり。所謂聲聞辟支佛道を觀じて而も證せず。大悲心を以て三解脱門を行するが故なり。譬へば、人の酥を以て毒に和すれば、毒勢則ち歇みて、人を害すること能はざるが如し。般若も亦是の如く、菩薩は般若の中に於いて、無上道を求むれば、得易く、餘經に於いては則ち(得)難く、但毒を服するが如し。是の故に、聲聞經の中より菩薩道を求むべからず。

【二八】兩不和合品第四十七の上を釋す。

經

復次に、須菩提よ、聽法の人は、般若波羅蜜(多)を書持し、讀誦し、義を問ひ、正憶念せんと欲するも、説法の人は憍墮して、爲に説くことを欲せずんば、當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の魔事なりと。須菩提よ、説法の人は、心に憍墮せず、般若波羅蜜(多)を書持せしめんと欲するも、聽法の者は、之を受くることを欲せず、二心和ざれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。

復次に、須菩提よ、聽法の人は、若し般若波羅蜜(多)を書持し、讀誦し乃至正憶念せんと欲するも、説法の者、他方に至らんと欲すれば、當に知るべし、是を魔事と爲す。須菩提よ、説法の人は、般若波羅蜜(多)を書持せしめんと欲するも、聽法の者、他方に至らんと欲せば二心和せず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の人は、衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の物を布施することを貴重し、聽法の人は、少欲知足にして、遠

【二八】此の品には、聽者説者の心、不和合の過失は魔事なり。所以を説く。異本には、兩不和合過品、又は兩過品に作れり。

離を行じ、念を攝して精進、一心・智慧を行じ、兩つながら和合せざれば、般若波羅蜜(多)を書し、受持し、讀誦し、義を問ひ、正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

須菩提よ、説法の人、少欲知足にして、遠離を行じ、念を攝して精進、一心・智慧を行じ、聽法の者、衣服・飲食・臥具・醫藥・養生の物を布施すること貴重し、兩つながら和合せざれば、般若波羅蜜(多)を書し、讀誦し、義を問ひ、正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は十二頭陀を受く。一には阿蘭若を作し、二には常に乞食し、三には納衣、四には一坐食、五には節量食、六には中後に糞を飲まず、七には塚間住、八には樹下住、九には露地住、十には常に坐して臥せず、十一には次第乞食、十二には但三衣なり。聽法の人には十二頭陀を受けず、阿蘭若を作さず、乃至但三衣を受けず、兩者和合せざれば、般若波羅蜜(多)を書し、讀誦し、義を問ひ、正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。須菩提よ、聽法の者は、十二頭陀を受けて阿蘭若を作し、乃至但三衣を受くも、説法の人には、十二頭陀を受けず、阿蘭若を作さず、乃至但三衣を受けず、兩者和合せざれば、般若波羅蜜(多)を書し、讀誦し、義を問ひ、正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

【二元】 師弟和合の故に般若を得。

論

釋して曰はく、一切の有爲法は、因縁和合の故に生じ、衆縁を離るれば則ち無し。譬へば、燈を鑽りて、火を求むるに、鑽あり母あり、二事の因縁もて、火を得るが如く、般若を書寫し、乃至正憶念するも亦是の如し。内外の因縁の和合の故に生ず。所謂、師と弟子と心を同じうし、事を同じうするが故に、乃ち書成することを得。是の故に、佛、須菩提に告げたまはく、「聽法の人には、信等の

五善根發するが故に般若を書持し、乃至正憶念せんと欲するに、説法の者は、五蓋、心を覆ふが故に、説くことを欲せず。

問うて曰はく、**【三〇】** 若し五蓋、心を覆ふが故に、説くことを欲せずんば、何を以てか師と作るや。答へて曰はく、是の人は世間の樂に著して、空、無常を觀せず、能く心に知り、口に説くと雖も、自ら行すること能はず。弟子は必ず行せんと欲すと雖も、而も知ること能はざるが故に、更に餘處無くして、必ず此の人に諮る。或時は師に悲心發するが故に、般若を書持せしめんと欲するも、弟子の信等の五善根鈍にして發せざるが故に、**【又】**世間の樂に著するが故に、受け、書持し、乃至正憶念するを欲せず。

問うて曰はく、**【三一】** 若し受持することを欲せずんば、何を以てか聽法の者と名くるや。答へて曰はく、少多聽受し、讀誦するも、究竟して、成就す

ること能はざるが故に、但聽法と名く。若し二人の善心、共に同じければ、能く般若波羅蜜**【多】**を得。若し同じからざれば、則ち得ること能はず、是を魔事を名く。内に煩惱發り、外に天子魔因縁と作りて、是の般若を離る。菩薩は應に是の魔事を覺し、防ぎて起らざらしむべし。若し自ら失すれば、當に具足すべく、若し弟子失せば、當に教へて得せしむべし。

復次に、師或は慈悲心薄くして、弟子を捨てて他方に至る。或は水土宜しからずして四大和せず、

**【三〇】** 第八問、五蓋、心を覆ふが故に説くことを欲せずんば、何故に師となるか。  
**【三一】** 第九問、若し受持すること能はずんば、何を以てか聽者と名くるや。

或は善法増益する所無く、或は水旱して適せず、或は土地荒亂し、是の如き等の種種の因縁の故に他方に至り、弟子も亦種種の因縁もて追隨すること能はず。利養を貴重する者は、上の如く五蓋、心を覆ふ等あり。復次に、是の二人は皆信あり戒あり。而して一人は十二頭陀を以て、戒を莊嚴するも、一人は能はず。

問うて曰はく、一人は何を以てか能はざるや。答へて曰はく、佛の結したまふ所の戒は弟子受持す。十二頭陀は名けて戒と爲さず。能く行すれば則ち戒を莊嚴し、行すること能はざるも戒を犯さず。譬へば布施を能く行すれば、則ち福を得、行すること能はざる者も、罪無きが如く、頭陀も亦是の如し。是の故に兩〔者〕和合せざるは則ち是れ魔事なり。十二頭陀とは、行者は家に居るを以て多く惱亂す。故に父母・妻子・眷屬を捨て、出家して道を行す。而も師徒・同學還つて相結著すれば、心復た擾亂す。是の故に、阿蘭若の法を受け、身をして慣閑を遠離せしめ、空閑に住す。

遠離することは、最も近くして三里、能く遠ければ益善し。是の身を遠離することを得已りて、亦た當に心をして五欲・五蓋を遠離せしむべし。若くは請を受けて食し、若くは衆僧の食は諸漏を起す因縁なり。何となれば、請を受けて食する者は、若し是の念を作すことを得、我は是れ福德の

- 【三】 第一〇問、二人の内一人は十二頭陀を以て戒を莊嚴する能はざる理由如何。
- 【三】 十二頭陀は戒にあらず、故に之を行ぜずと雖も、犯戒にあらざるなり。
- 【三四】 十二頭陀の相貌。
- 【三五】 阿蘭若(Āraṇya) (Aranyaka) 阿蘭若。
- 【三六】 五欲とは、財・色・食・名・睡なり。
- 【三七】 五蓋とは、貪欲・瞋恚・睡眠・掉舉・悔疑なり。

好人なるが故に得」と。若し得ざれば則ち請者を嫌恨し、「彼は別識する所無きが爲に、請すべからざる者を請じ、請すべき者を請せず」と。或は自ら鄙薄懊惱し、自ら責めて而も憂苦を生ず。是れ憂憂の法にして、則ち能く道を遮す。僧食とは、衆中に入りては、當に衆法に隨ふべく、事を斷ずる憊人僧事の處分を料理し、心をして則ち散亂せしむることを作し、行道を妨廢す。是の如き等の惱亂の事あるが故に、常に乞食の法を受く。

好衣の因縁の故に、四方に追逐して、邪命の中に墮す。若し人の好衣を受くれば、則ち親著を生じ、若し親著せざれば、檀越則ち恨む。若し僧中に衣を得れば、上に説くが如く、衆中の過なり。又好衣は、是れ未だ道を得ざる者には、貪著を生ずる處なり。好衣の因縁は、賊難を招致し、或は命を奪ふに至る。是の如き等の患あるが故に、弊納衣の法を受く。

行者は是の念を作す、「一食を求むるすら、尙多くの妨ぐる所あり、何に況んや、小食・中食・後食をや。若し自ら損せざれば、則ち半日の功を失ひ、一心に道を行ずる能はず。佛法は行道の爲の故にして、身を益せんが爲にあらす。馬を養ひ、猪を養ふが如し」と。是の故に、**〔三〕** 數數の食を斷じて、一食の法を受く。有人は一食すと雖も、而も貪心にして、極めて噉ひ、腹脹り氣塞ぎて、行道を妨廢す。是の故に食を節量するの法を受く。

**〔三〕** 佛法は行道の爲なり、應に馬を養ひ、猪を養ふが如くすべし。

**〔三〕** 數數の食とは、世人一般の風習たる日に二度乃至三度の食をいふ。

**〔三〕** 佛法は行道の爲の故に、數數の食を斷じて、一

節量とは、略説すれば能く食する所に随つて三分を一分に留むれば則ち身軽く安隱に、消し易く患無く損すること無く、則ち道を行じて廢するのと無し。經中に舍利弗の説けるが如し。「我若し五口六口を食し、之に足すに水を以てすれば、則ち身を支ふるに足る」と。秦人は中食に於ては十口許りすべし。有人は食を節量すと雖も中を過ぎて漿を飲めば則ち心に樂著を生じ、種種の漿・菓・蜜・漿等を求め、求め欲して厭ふと無く、一心に善法を修習すると能はず。馬の轡勒を著げざれば、左右に草を噉ひ、肯へて路を進まざるも、若し轡勒を著ぐれば、則ち草を噉ふ意を斷ち、人の意に随つて去るが如し。是の故に 中後に漿を飲まざることを受く。

無常空觀は、是れ佛法に入る初門にして、能く三界を厭離す。塚間には常に悲啼哭聲あり。死屍狼藉として、眼に無常を見る。後或は火もて燒き、鳥獸に食はれ、久しからずして滅盡す。是の屍を觀するに因りて、一切法の中に無常相・空相を得易し。又塚間に住すれば、若くは死屍の臭爛せるを見て不淨〔觀を〕得易し。

(四) 九想觀は是れ離欲の初門なり。是の故に塚間に住するの法を受く。不淨・無常等の觀已れば道を得。事を辨じ、捨てて

【四〇】 中後に漿を飲まずとは、晝食及藥石後のこと。

【四一】 九想觀とは、一に、脹想、死屍の膨脹するをいふ。二に、背瘡想、風に吹かれ、日に曝されて、死屍の色を變ずるをいふ。三に、壞想、死屍の破壞するをいふ。四に、血塗想、破壞し已つて、血肉地に塗るをいふ。五に、膿爛想、膿爛腐敗するをいふ。六に、噉想、鳥獸の來て死屍を噉ふをいふ。七に、散想、鳥獸に噉はれて、筋骨頭手分裂破散するをいふ。八に、骨想、血肉已に盡きて、只白骨のみ狼藉するをいふ。九に、燒想、死屍の火に燒かれ、灰土に歸するをいふ。これ蓋し人の貪著心を止息せしめんが爲に此等九種の相を觀せしむるなり。

樹下に至り、或は未だ道を得ざる者は、心則ち大に厭はざるも、是の相を取りて、樹下に思惟す。佛の如きは、生るる時、成道の時、轉法輪の時、般涅槃の時、皆樹下に在り。行者も諸佛の法に隨つて、常に樹下に處す。是の如き等の因縁の故に、樹下の坐法を受く。

行者、或は樹下を觀すること、半舍の如くして、異なること無く、陰覆うて涼を樂しみ、又愛著を生じ、我が所住は好し、彼の樹は如かずと。是の如き等の漏を生ずるが故に、露地に至りて住し、是の思惟を作す、「樹下に二種の過有り。一には雨露濕冷なり、二には鳥屎身を汗し、毒蟲の住する所なり。是の如き等の過有り。空地には、則ち此の患無く、露地に住すれば、則ち衣を著くるも、衣を脱するも、意に隨つて快樂に、月光遍ねく空中を照らすこと明に、淨心にして空三昧に入り易し」と。

【四二】 樹下に二種の過あり。

身の四儀の中には、坐を第一と爲す。食は消化し易く、氣息調和す。道を求むる者、大事未だ辦せざれば、諸の煩惱の賊、常に其の便を伺ふ、宜しく安臥すべからず。若くは行き、若くは立てば、則ち心動じて攝し難く、亦久しうす可からざるが故に、常に坐する法を受く。若し睡らんと欲する時は脇を席に著けず。

行者は味に著せず、衆生を輕んぜず、等心に憐愍するが故に、次第に乞食し、貧富を擇ばざるが故に、次第乞食の法を受く。行者は少欲知足にして、衣趣形を蓋へば、多からず、少からざるが故に、

但三衣のみを受く。〔三〕白衣は樂を求むるが故に、多く種種の衣を蓄へ、或は有外道は、苦行の故に、裸形にして恥無し。是の故に佛弟子は二邊を捨て、中道に處して行ず。住處食處は常に用ふるが故に事多く、衣は日月に求むることを須るざるが故に略説す。是の十二頭陀は、佛は意に弟子をして、道行に隨つて、世樂を捨てしめんと欲したまふが故に、十二頭陀を讚じたまへり。是れ佛意は常に頭陀を以て本と爲す。因縁あれば、已むを得ずして、而して餘事を聽す。轉法輪の時の如きは、〔四〕五比丘は初めて道を得、佛に白して言さく、「我等、何等の衣をか著けん」と。佛の言はく、「應に納衣を著くべし」と。又受戒の法は、壽を盡くすまで、納衣を著けて、乞食し、樹下に住し、弊れ棄てたるを棄とす。古の四聖種の中に於いて、頭陀は即ち是れ三事なり。〔五〕佛法は唯智慧を以て本と爲し、苦を以て先と爲さず。是の法は皆助道なり。道に隨ふが故に、諸佛は常に讚歎したまふ。

〔三〕白衣とは、俗人のことなり。

〔四〕五比丘初めて道を得る時納衣を著く。

〔五〕佛法は智慧を以て本と爲す、苦を先とせざるが故に、頭陀は是れ助道の法なり。

# 卷の第六十九

## 兩不和品第四十七の下の釋す。

經

復次に、須菩提よ、説法の者は信あり善あり、深般若波羅蜜(多)を書持し、乃至正憶念せんと欲するも、聽法の者は信無く、破戒惡行にして、深般若波羅蜜(多)を書持し、乃至正憶念することを欲せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲すと。須菩提よ、聽法の者は信有り善有るに、説法の者は信無く、破戒惡行にして、兩ながら和合せざれば、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は能く一切に施して心慳惜ならざるも、聽法の者は能く施して心慳惜ならざるも、説法の者は法を惜みて施さず、兩ながら和合せざれば般若波羅蜜(多)を書持し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、聽法の者に説法の人に衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の所須を供養せんと欲するも、説法の者は之を受くるも、聽法の者は之を受くることを欲せず、兩ながら和合せずして般若波羅蜜(多)を書持し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は悟り易きに、聽法の人には開鈍なれば、當に知るべし、是を魔事と爲すと。須菩提よ、聽法の者は悟り易きに、説法の人には開鈍にして、兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜(多)を書持し乃至正憶念することを得ず、當

【一】以下更に兩不和合の相を廣説す。

に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は十二部經の次第の義、所得修妬路乃至優波提舍を知るも、聽法の人ば十二部經の次第の義を知らざれば、當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の者は、十二部經の次第の義を知るに、説法の人ば、十二部經の次第の義を知らず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は六波羅蜜(多)を成就するも、聽法の人ば六波羅蜜(多)を成就せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の人ば六波羅蜜(多)を有するも、説法の人には六波羅蜜(多)無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は六波羅蜜(多)に於いて方便力有るも、聽法の人ば六波羅蜜(多)に於いて方便力無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の人ば、六波羅蜜(多)に於いて方便力有るも、説法の人ば、六波羅蜜(多)に於いて方便力無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は陀羅尼を得るも、聽法の人には陀羅尼無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の人ば陀羅尼を得るも、説法の人には陀羅尼無く、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

〔多〕を書持し、讀誦し、乃至正憶念するを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の者は般若波羅蜜〔多〕を書し、讀誦し、説かんと欲するも、説法の者は般若波羅蜜〔多〕を書せしむることを欲せず、乃至説かしむることを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は貪欲・瞋恚・睡眠・掉・悔・疑を離るるも、聽法の人には貪欲・瞋恚・睡眠・掉・悔・疑あらば當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の者は貪欲・瞋恚・睡眠・掉・悔・疑を離るるも、説法の人には貪欲・瞋恚・睡眠・掉・悔・疑あり、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、是の深般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至正憶念する時、或は人有り、來りて三惡道中の苦劇を説く、汝何ぞ是の身に於いて、苦を盡くして涅槃に入らざるや、何ぞ是の阿耨多羅三藐三菩提を用ゐんやと。爲めに兩ながら和合せざれば、般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、是の深般若波羅蜜〔多〕を書し、受持し、讀誦し、説き、正憶念する時、或は人有り、來つて四天王の諸天を讚じ、三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵天乃至非有想非無想定を讚じ、初禪乃至非有想定を讚じて、是の言を作す、善男子よ、欲界の中に五欲の快樂を受け、色界の中に禪を受けて樂を生じ、無色界の中に寂滅の樂を受く。是の事も亦無常・苦・空・無我・變相・盡相・離相・滅相なり。汝何ぞ是の身中に於いて、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道を取らざるや、何ぞ是の世間の生死の中に、種種の苦を受けて、阿耨多羅三藐三菩提を求むることを用ゐんやと。爲めに兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜〔多〕を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は一身にして累無く自在無礙なるも、聽法の人は多く人衆を將り、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし是を魔事と爲すも。聽法の者は一身にして累無く自在無礙なるも、説法の者は多く人衆を將り、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は是の如く言ふ、「汝能く我が意に隨はば、當に汝に般若波羅蜜(多)を與へて、書し、讀誦し、説き、正憶念せしむべし。若し我が意に隨はずんば、則ち汝に與へず」と。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、讀誦し、説き、正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、聽法の者は追隨して其の意の如くなることを得んと欲するに、説法の者は聽かず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は財利を得んと欲するが故に、般若波羅蜜(多)を與へて、書持し、乃至正憶念せしむるも、聽法の者は是の因縁を以ての故に、從ひ受くることを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の者は財利の爲の故に、深般若波羅蜜(多)を書し、讀誦し、説かんと欲するも、説法の者は是の因縁を以ての故に與ふることを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、讀誦し、説くことを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に須菩提よ、説法の者は他方の危命の處に至らんと欲するも、聽法の者は隨ひ去ることを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の者は他方の危命の處に至らんと欲するも、説法の者は去ることを欲せず。兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを

得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は他方の飢餓にして穀貴く水無きの處に至らんと欲するも、聽法の者は隨ひ去るを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。聽法の者は他方の飢餓にして穀貴く水無きの處に至らんと欲するも、説法の者は去るを欲せず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は他方の豐樂の處に至らんと欲し、聽法の者も隨從して去らんと欲するも、説法の者は言ふ、善男子よ、汝は利養の爲の故に我に追隨す。汝善く自ら思惟して、若くは得、若くは得ざるも、後悔せしむること無れと。是の少因縁を以ての故に、兩ながら和合せず、聽法の者は之を聞いて心に厭ひ、是の念を作す、是を距逆と爲す。我と相隨ふことを欲せざるなりと。便ち止まりて去らず、兩ながら和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は曠野を過ぎんと欲するに賊を怖れ、旃陀羅を怖れ、獵師を怖れ、惡獸、毒蛇を怖れて、聽法の者は隨逐して去らんと欲するも、説法の者の言ふ、善男子よ、汝は何を用てか彼に到るや。彼の中には多くの諸の怖ありて賊の怖乃至毒蛇の怖ありと。聽法の者は之を聞き其の般若波羅蜜(多)を與へて書持し、乃至正憶念することを欲せざるを知り、心に厭うて隨逐することを欲せず。是の少因縁を以ての故に、兩ながら和合せざれば、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、説法の者は多くの權越有りて數往いて問訊す、是の因縁を以ての故に、聽法の者に語るらく、「我れ因縁ありて應に往到すべし」と。彼の聽法の人は其の意を知りて、便ち止まりて去らず、兩ながら和合せざれば、深般若波

羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

問うて曰はく、(三) 有る人は、般若波羅蜜(多)を書持し讀誦するも、行すること能はずして、戒

を犯すること或は是れ有るべし、若し信せざれば云何が従つて法を受くるや。答へて曰はく、是の人

は般若波羅蜜(多)、所謂畢竟空を信せずして、但名を求めんと欲するが故に、讀誦し廣説す。佛弟子

は外道の經書を信せざるも、亦人の爲に講説するが如し。復次に、深心に

般若を信樂すること能はざるが故に、不信と名くるも、都べて信せざるに

は非ず。

問うて曰はく、(三) 弟子の法は應に師を供養し、諸の所有を奉るべし。何

を以てか師は施すこと能はずと言ふや。答へて曰はく、(四) 弟子は是の念を

作さく、「師は少物を捨つること能はず、何に況んや身を捨つることをや。

布施を讚説すと雖も是を欺誑と爲す」と。是の故に和合せすと名く。弟子

は四事を以て、師を供養せんと欲するも、師は少欲知足の故に受けず。或は法を賣るが如きに似たる

を羞愧するが故に受けず。或は師は多知多識にして、乏少する所無く、能く弟子に供給するに、弟子

は自ら念すらく、「人は當に我を師の衣食を貪るが故に法を受くと謂ふべし」と。或は自ら徳薄きを以

て所給を消せず。此の心は好しと雖も、般若を成すること能はざるが故に、亦是れ魔事なり。師の鈍

- 【二】 第一問、人或は般若を書持し、讀誦するも、行すること能はずして、戒を犯すことと能あるべし。若し信せざれば、云何が従つて法を受くるや。
- 【三】 第二問、弟子は應に師を供養すべし、何故に師は施すこと能はざるか。
- 【四】 師弟不和合の因縁。

根とは、是れ誦經の師にして、解義の師に非ず、十二部經も亦是れ誦經の師なり。

復次に、六波羅蜜〔多〕を有する者は、是の念を作す、「弟子は罪人鈍根にして六波羅蜜〔多〕を行す

こと能はず、世間の事に著し、但弟子の名有るも、實事有ること無し」と。是の師は弟子の般若を聞

き已りて、後大事を成すことを知らず。但現前に六波羅蜜〔多〕無きを以て、肯へて教化せず。弟子

も亦是の念を作す、「六波羅蜜〔多〕の義は、我も亦能く行ず、師は但能く口に説けども、修行するこ

と能はず」と。師の轉身の因縁〔を以て〕、當に大事を成すべきことを知らず。又師に別に讀誦の利益

の因縁あることを知らざるが故に和合せざるなり。

復た次に弟子は直信にして、善法に著し、師は法に著せずして、方便を

以て、六波羅蜜〔多〕を行するに、弟子は謂つて、「師は深く六波羅蜜〔多〕を樂しまずと爲す。何を以

てか之を知る、師は或時は六波羅蜜〔多〕を讚歎し、或時は人の著を斷するが故に、六波羅蜜〔多〕を破

散すればなりと。弟子の方便あるも亦是の如し。

問うて曰はく、若し弟子は陀羅尼を得るに、師に陀羅尼無くんば、何を以てか師と爲るや。答へ

て曰はく、陀羅尼に種種有り、有る弟子は、聞持陀羅尼を得て、能く持し、能く誦するも、義を解す

ること能はず。師は能く解説を爲す、弟子は或は能く諸法實相、陀羅尼の義を得るも、而も次第に讀

誦すること能はず。或は師は聞持陀羅尼を得るも、未だ大悲を得ざるが故に、弟子を輕賤して教導す

【五】 第三問、師に陀羅尼なくして、師と爲る理由如何。

ること能はず。

問うて曰はく、(六)弟子は般若波羅蜜(多)を受けせんと欲するも、師は與へざることは或は是あるべし。云何が師は法を與へんと欲するに、弟子は受けざるや。答へて曰はく、先に答ふるが如く、弟子は師に過ぐるること有るを見るが故に、法を受くることを欲せざるなり。

復次に、師は前人を教化して、弟子と爲さんと欲するも、而も是の人は、邪見・諸惡の因縁の故に、肯へて教を受けざるなり。

復次に、一切衆生の所行の法は、同じければ則ち和合す。一人は五蓋を離るるに、一人は離れざるが故に、相輕んじ、相輕んずるが故に和合せず。一切の上法は皆爾なり。

復次に、般若波羅蜜(多)を書し、誦し、乃至正憶念する時、一人は三惡

【六】 第四問、弟子の師より法を受けざる理由如何。

道を呵し、一人は諸天を讚歎す。是の事は先に答ふるが如く、都べて其の善行を破すること能はずと雖も、但其の大乗を壞して小乗の法を授くるなり。

復次に、師は少欲知足にして、衆聚を樂しまざるに、弟子は多くの人衆あり。師は是の念を作す、「弟子は好く度すべしと雖も而も徒衆多し」と。師は深く善法に著して弟子を捨離す。弟子の一身なるも亦是の如し。

復次に、説法者は、意へらく、若し弟子は我が意に隨つて行き、若くは去り、若くは住し、時に隨

つて問訊すること、是の如き等ならん」と。聽法者は、但從つて法利を求めんと欲して、此の衆事を行すること能はず、是くして和合せず。或時は聽法者は意に隨つて進止し問訊等するに、說法者は聽かずして是の念を作す、「何ぞ是の事を用つて我が功德を損せん」と。聽法者は意に謂へらく、「輕賤して相好喜せず」と。是くて和合せず。

復次に、師は利養の爲の故に、法を與へんと欲するに、弟子は心に則ち師を敬せず、云何が經法を賣らんと欲するや。弟子も亦是の如く、財利の爲め故に、般若を讀誦し、清淨心に非ざるが故に、師は弟子の心の是の如きを知りて、則ち薄賤して與へず、故に和合せざるなり。

復次に、師は他方に至らんと欲するに、路嶮難を經る、弟子は身命を惜むが故に、隨ふこと能はずして、是の念を作す、「我は身有つて、然る後に法を求む」と。弟子の去らんと欲するも、亦是の如し。飢餓すれば穀貴く、水無き處も亦是の如し。

復次に、師は豐樂の處に至らんと欲するに、弟子は師に隨はんと欲するも、或は羞愧して將に去ることを欲せず。或は弟子は樂を申ひて遠きに涉るに任へず。或は道里懸に遠し。或は師は彼の國を諳んずるも、弟子は悉くきずして謂へらく、「師は彼の國を稱美するも、必ずしも實に爾らざらん」と。或は師を慮りて謂へらく、「食を食ひ欲するが故に去る」と。是の如き等の種種の因縁あり。師は弟子に語るらく、「汝が聞く所の如く、彼の國土の所有は必ず盡く爾らず。好んで自ら籌量し、若し自

ら去らんと欲せば便ち去れ、財物の豊樂を以ての故に去ること勿れ、彼に至りて意に隨ふことを得ずして、以て師を見怨むること勿れ」と。復た爲に説く、「汝は彼の國土の豊樂を聞くが故に去らば、法の爲に非ざるが故に我に隨ふべからず」と。師は好心もて弟子を止め、是が般若波羅蜜(多)を壞する因縁なることを知らず。弟子は是の説を聞き、師を敬ひ難かるが故に、答ふること能はず。便ち止まつて去らざるが故に和合せず。師は復た遠國に至らんと欲するに、彼の中に種種の虎狼、賊盜有り、弟子に語りて言はく、「彼の間は難多し。汝は去るべからず」と。弟子は聞き已りて便ち止まる。師は但彼に難事あることを知るが故に、弟子を止め、是を般若波羅蜜(多)を壞する因縁なりと知らざるなり。

問うて曰はく、若し遠國にして難多ければ何を以てか自ら去るや。答

【七】第五問、若し遠國にして難多ければ、何を以てか自ら去らざるや。

へて曰はく、有る人は言ふ、「師は彼の國に生ずるが故に、服を彼の土に習うて、能く自ら防護す」と。有る人は言ふ、「彼(土)に好師經書ありて、身命を惜まざるが故に去る」と。師は是の念を作さく、「我が身は自ら死するも則ち可なり、云何が他を枉げん」と。是の如き等の因縁の故に弟子を止めて去らしめず。師は多く知識檀越有りて、心に樂著を生ずるも、弟子は少欲知足にして檀越に著せず。師は常に時に隨つて檀越を問訊するも、弟子は但法を求めんことを欲して、是の事を喜はず。師は其の意を知りて語つて言はく、「我は因縁ありて汝が爲に説法することを得ず」と。弟子は聞き已つ

て悦ばず、「師は俗縁を貴びて法を貴ばず」と言ふ。是くて和合せざるなり。

經

復次に、須菩提よ、ハ惡魔は比丘の形像と作り來りて、方便もて般若波羅蜜(多)を破壞し、書持し、讀誦し、説き、正憶念せしむることを得ず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、惡魔は比丘の形像と作り、方便もて般若波羅蜜(多)を破壞し、書持し、乃至正憶念せしむるを得ざるや」と。佛の言はく、「惡魔は比丘の形像と作りて來り、善男子善女人の心を壞し、般若波羅蜜(多)を遠離せしめて、是の言を作す、我が所説の經の如きは、即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。此の總は般若波羅蜜(多)に非ずと。須菩提よ、是の中に諸の比丘を破壞する時、未だ記を受けざる菩薩ありて、便ち疑に墮す。疑に墮するが故に、深般若波羅蜜(多)を書せず受けず、乃至正憶念を作さず、和合せざれば、般若波羅蜜(多)を書成し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

【八】 惡魔變化して妨礙するを説く。

復次に、須菩提よ、惡魔は比丘の身と作り、菩薩の所に到りて、是の如き言を作す、「若し菩薩、般若波羅蜜(多)を行ぜんに、實際に於いては證を作して、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得、辟支佛道を得」と。是を以て和合せざれば、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)を説く時、多くの魔事ありて起り、般若波羅蜜(多)を留難す、是を魔事と爲す。

菩薩摩訶薩は、應當に覺知し、知り已りて遠離すべし」と。須菩提言さく、「世尊よ、何等か是れ魔事の留難にして、菩薩は應當に覺知し、知り已りて遠離すべきや」と。佛の言はく、「般若波羅蜜(多)に似たる諸の魔事起る。禪波羅蜜(多)に似、毗耶波羅蜜(多)に似、屠提波羅蜜(多)に似、尸羅波羅蜜(多)に似、檀波羅蜜(多)に似たる魔事起る。菩薩は應當に覺知し、

知り已りて遠離すべし。復次に、須菩提よ、摩訶薩行すべき所の經を、是の菩薩摩訶薩は、應當に是を魔事なりと知りて、之を遠離すべし。

復次に、須菩提よ、内空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、空・無相・無作の解脫門、是の法を用ゐて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道を得。是の如き等の諸經をば、惡魔は比丘の形像と作り、方便もて菩薩摩訶薩に與ふ。是くして和合せざるが故に、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず、當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、惡魔は佛身と作り、金色の丈光もて菩薩の所に到るに、是の菩薩は貪著と貪著の因縁の故に薩婆若を耗滅す。是くして和合せざるが故に、般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、惡魔は佛身及び比丘僧と作りて、菩薩の前に到るに、是の菩薩は貪著を起し、意に是の念を作す、我れ當來世に於いて、亦當に是の如き比丘僧に従つて、爲に法を説くべしと。是の菩薩は魔身に貪著するが故に薩婆若を耗滅し、般若波羅蜜(多)を書成し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。

復次に、須菩提よ、惡魔化して無數百千萬億の菩薩と作り、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行じ、善男子善女人に指示するに、善男子善女人は、見已つて貪著す、貪著するが故に、薩婆若を耗滅して般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得ず。當に知るべし、是を魔事と爲すと。何となれば、是の深般若波羅蜜(多)の中には、色有ること無く、受想行識あること無く、乃至阿耨多羅三藐三菩提あること無ければなり。須菩提よ、般若波羅蜜(多)に、若し色あること無く、乃至阿耨多羅三藐三菩提無くんば、是の中に佛無く、聲聞無

く、辟支佛無く、菩薩無し。何となれば、一切諸法は自性空なればなり。

復次に、須菩提よ、善男子善女人、是の深般若波羅蜜(多)を書し、受け、讀誦し、説き、正憶念する時、多くの留難起ること有り。須菩提よ、譬へば閻浮提の中の珍寶なる、金・銀・琉璃・車渠・珊瑚等の寶には、難多く、賊多きが如く、是の如く須菩提よ、善男子善女人の、是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念する時、多くの留難起ると。須菩提、佛に白して言さく、「是の如く、世尊よ、閻浮提の中の、珍寶なる金・銀・琉璃・車渠・珊瑚等には、賊多し。世尊よ、善男子善女人も亦是の如く、是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念する時、多くの留難起り、多くの留難あり、何となれば、是の愚癡の人は魔の爲に使はるればなり。善男子善女人は、是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念する時、破壊して遠離せしむ。世尊よ、是の愚癡の人は、少智少慧なり。是の善男子善女人の般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念する時、破壊して遠離せしむ。世尊よ、是の愚癡の人は心に大法を樂します。是の故に是の深般若波羅蜜(多)を書せず、受けず、讀まず、誦せず、正憶念せず、説の如く修行せず。亦他人を壞して、深般若波羅蜜(多)を書し、乃至説の如く修行することを得ざらしむ」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、新に大乘の意を發する善男子善女人は、魔の爲に使はれて善根を種ふす、諸佛を供養せず、善智識に隨はざるが故に、深般若波羅蜜(多)を書せず、乃至正憶念せず、而も留難を作す。是の善男子善女人は、少智少慧にして、心に大法を樂します。是の故に是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念すること能はず、魔事起るが故なり。須菩提よ、若し善男子善女人、能く是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念する時は、魔事起らず、能く禪波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)を具足し、能く四念處乃至一切種智を具足す。須菩提よ、當に知るべし、佛力の故に是の善男子善女人は、能く是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念し、亦能く禪波羅蜜(多)乃至檀波羅蜜(多)を具足し、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智を具足す。須菩提よ、十方現在の無量無

【九】般若を尊勝なるが故に、魔障留難起ることを譬説す。魔障留難起ることを譬説す。

【多】内空乃至無法有法空を具足し、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智を具足す。須菩提よ、十方現在の無量無

遠阿僧祇の諸佛も、亦是の善男子善女人を助けて、是の深般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを得せしむ。十方の阿耨跋致の諸の菩薩摩訶薩も、亦是の善男子善女人の、般若波羅蜜(多)を書し、乃至正憶念することを推護補助す」と。

釋して曰はく、魔は大沙門の形と作りて重き威徳有り、人をして其の語を受けしめ、多くの經

卷を持し、衆の弟子と俱に諸の比丘に語るらく、「般若波羅蜜(多)」。我が經の所説の如きは、眞實の佛語なり。汝が先に聞く者は實ならず。佛の所説に非ず」と。先の經を呵毀し、種種に自ら説く所を讀するに、鈍根の菩薩は是の語を信受して邪見を生じ、若し利根にして、未だ記を受くることを得ざる者は疑を生ず。何となれば、諸佛の畢竟空、無相の智慧は、解し難きが故に、和合せざればなり。或時は魔菩薩に語るらく、「般若波羅蜜(多)に三解脱門を廣く説くは、但是れ空なり。汝は常に此の空を習ひ、中に於いて證を得。證を得ずんば、云何が佛と作なん。佛と作る法は、先づ布施持戒等を行じ、三十二相の福徳を修し、道場に坐する時、爾より乃ち空を用ふ」と。菩薩は或は信じ、或は疑つて般若波羅蜜(多)を離る。

問うて曰はく、「(100)云何が六波羅蜜(多)に似たるを魔事と名くるや。答へて曰はく、相似の般若波羅蜜(多)の中に説くが如し。復次に、著心を以て六波羅蜜(多)を行する、是を聲聞辟支佛の經に似たりと名く。慈悲心有ること無く、佛道を求めず、但自度を欲す。是は好事なりと雖も、菩薩道を破するが故に、魔事と名く。

【100】第六問、六度に似たるを魔事とする理由如何。

問うて曰はく、**〔二〕**若し菩薩、佛身を見れば、則ち信心清淨なり。云何が魔事と名くるや。答へて曰はく、一切の煩惱は相を取る、皆是れ魔事なり。是の小菩薩は未だ佛身を見るべからず。魔は佛の妙形と作るに、菩薩は心著して是の好身の爲の故に道を行す。未だ欲を離れざる人の天女の形を見て深心に染著し、天を受くるに堪ふる能はずして、迷悶して死せんと欲するが如し。是の故に魔は願を満すことを得、菩薩は少しく淨心を得と雖も、而も實相の智慧を失す。人の手に重寶を捉ふるに、人あり、少金を以て之を誑らせば、大價寶を捨てて、而して賤物を取るが如し。是を耗滅と名く。魔は佛身と作り、諸の比丘を將ゐて、多くの菩薩に示す。六波羅蜜**〔多〕**を行するも亦上の如し。此の中に佛、因縁を説きたまはく、色等の一切法の自性は空なり」と。

**復次に、**衆會は疑を生ずらく、**一般若波羅蜜**〔多〕**は、是れ無上法にして、**

多くの利益あり、云何が人ありて憎嫉するや」と。是の故に佛、譬喩を説きたまはく、**〔三〕**閻浮提の金銀等には、多怨多賊、是の爲めの故に出で、瓦石等の爲めに生ぜざるが如く。一般若波羅蜜**〔多〕**は、是れ佛寶藏中の妙寶、微妙甚深、懈怠鈍根の者の解せざる所なり。是の故に魔に皆毀せらる。一般若波羅蜜**〔多〕**は、多くの衆生をして、涅槃に入らしむるを以ての故に、魔は怨賊と作る。須菩提は喜んで佛の教を受け、其の所説を述べ、般若を毀皆し破壊する者は、世尊よ、是れ狂癡の人なり。魔の爲に使は

**〔一〕** 第七問、若し菩薩、佛身を見れば信心清淨なり、云何が魔事といふか。  
**〔二〕** 閻浮提の金銀等の多怨多賊なるが如く、般若の珍寶も亦然り。

れて、自在を得ず。少智なるを以て、佛意に通達すること能はず。是の人は大心有ること無く、清淨の法味を知らず、但三相〔所謂る〕貪味・婬欲・瞋恚を知るのみにして、畜生の法の如し。般若波羅蜜〔多〕を興ふれば留難を生ずと。佛、須菩提の所説を可としたまひ、須菩提に語りたまはく、若し菩薩摩訶薩の般若を書し、乃至正憶念すれば、魔事起らず。當に知るべし、是れ佛力にして、亦是れ十方の諸佛、及び諸の菩薩に擁護せられて、而して能く五波羅蜜〔多〕、乃至一切種智を具足す。亦是の十方現在の佛の力なり。何となれば、魔は是れ欲界の主にして、世間の福德智慧を具足す。魔は是れ世間の生死の根本なり。色界の諸天は邪見ありと雖も、常に禪定に入るが故に、心柔軟にして破壊する所あること能はず。無色界の中は無形なるが故に、又心微細にして所作あること能はず。下の諸天は力勢あること無きが故に、是の如く破壊すると能はず。是の魔は先世の業因縁の力なり。又住處の因縁もて、他より奪取することを作す。是の中の賊主を名けて魔と爲す。是の魔の相は爾も好事を破壊す。初發心の菩薩は、福德智慧薄きが故に身を惜み、若し十方の諸佛、菩薩擁護佐助せずんば成ずること能はず。是の故に、諸佛・菩薩・諸天は、魔事を破壊することを爲す。是の菩薩は或は覺し、或は覺せず。賊城を繞り、大人守護するも、小兒は覺せざるが如し。略して魔事を説くこと是の如し。廣く説けば則ち無量無邊なり。然るに、佛意は但行者をして般若の大事を成せしめんと欲す。是の故に師徒宜しく應に和合すべく、一切の惡事を計念すべからず。

佛母品第四十八の上を釋す。

經

佛、須菩提に告げたまへく、「譬へば母の子有るが如し、若くは五、若くは十、若くは二十、若くは三十、若くは四十、若くは五十、若くは百、若くは千にして、母中に病を得んに、諸子各勤めて救療を求め、是の念を作す、我等は云何が母をして安きことを得、諸の患苦、不樂の事無からしめん。風・寒・冷・熱・蚊・虻・蛇・蠅の母の身を侵犯す、是れ我等が憂なり」と。其の諸子等常に樂具を求めて其の母を供養す。何となれば、我等を生育し、我に世間を示せばなり。

是の如く、須菩提よ、佛は常に佛眼を以て、是の深般若波羅蜜多を視る。何となれば、是の深般若波羅蜜多は能く世間の相を示せばなり。十方現在の諸佛も亦佛眼を以て、常に是の深般若波羅蜜多を視たまふ。何となれば、是の深般若波羅蜜多は、能く諸佛を生じ、能く諸佛に一切智を與へ、能く世間の相を示せばなり。是を以ての故に、諸佛は常に佛眼を以て、是の深般若波羅蜜多を視たまひ、又般若波羅蜜多を以て、能く

【三】 般若を母に喩ふ。子の母の恩を思ふが如く、般若は諸佛の母なるが故に、佛は恩を知り、慈悲の故に、行者を守護するを明す。

禪波羅蜜多乃至檀波羅蜜多を生じ、能く内空乃至無法有法空を生じ、能く四念處乃至八聖道分を生じ、能く佛の十力乃至一切種智を生ず。是の如く般若波羅蜜多は、能く須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・佛道を生ず。須菩提よ、所有る諸佛は已に阿耨多羅三藐三菩提を得、今得、當に得べし。皆深般若波羅蜜多の因縁に因るが故に得るなり。

須菩提よ、若し佛道を求むる善男子善女人は、是の深般若波羅蜜多を書し、乃至正憶念すべし。諸佛は常に佛眼を以て是の人を視たまふ。須菩提よ、是の善隣道を求むる善男子善女人は、諸の十方の佛は常に守護して、阿耨多羅三藐三菩提を込せざらしめたまふと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊の説きたまふ所の如くんば、般若波羅蜜多は能く諸佛を生

じ、能く世間の相を示す。世尊よ、般若波羅蜜(多)は、云何が、能く諸佛を生じ、云何が能く世間の相を示し。云何が諸佛は般若波羅蜜(多)より生じ。云何が諸佛は世間の相を説きたまふや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の深般若波羅蜜(多)の中には、佛の十力乃至十八不共法、一切種智を生ず。須菩提よ、是の諸法を得るが故に、名けて佛と爲す。須菩提よ、是の故に深般若波羅蜜(多)は能く諸佛を生ず。須菩提よ、諸佛は、五衆は是れ世間の相なりと説きたまふ」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が深般若波羅蜜(多)の中に五衆の相を説き、云何が深般若波羅蜜(多)の中に五衆を示すや」と。

「須菩提よ、般若波羅蜜(多)は五衆の破を示さず、壞を示さず、生を示さず、滅を示さず、垢を示さず、淨を示さず、増を示さず、減を示さず。入を示さず、出を示さず、過去を示さず、未來を示さず。現在を示さず。何となれば、空相は破せず壞せざればなり。無相相・無作相の不破不壞の相も是の如く示し、不起法・不生法・無所有法・法性の不破不壞の相も是の如く示す。是の如く、須菩提よ、佛は深般若波羅蜜(多)を説いて能く世間の相を示したまふ。

復次に、須菩提よ、諸佛は般若波羅蜜(多)に因りて、悉く無量無邊阿僧祇の衆生の心に行ずる所を知りたまふ。須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)の中には、衆生無く、衆生の名無く、色無く、色の名無く、受想行識無く、受想行識の名無く、眼無く乃至意無く、眼識無く乃至意識無く、眼觸無く乃至意觸無く、乃至一切種智無く、一切種智の名無し。

是の如く、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)は能く世間の相を示す。須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)は亦色を示さず、受想行識を示さず。乃至一切種智を示さず。何となれば、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)の中には、尚ほ般若波羅蜜(多)すら無し。何に況んや、色乃至一切種智をや。

復次に、須菩提よ、所有る衆生の名数は若くは有色、若くは無色、若くは有想、若くは無想、若くは非有想非無想、若く

は此の間の世界、若くは通十方世界の是の諸の衆生は、若くは攝心し、若くは亂心せば、是の攝心亂心をば、佛は實の如く知りたまふ。須菩提よ、云何が佛は衆生の攝心・亂心の相を知るや。法相を以ての故に知る。何等の法相を用ふるが故に知るや。須菩提よ、是の法相の中には、尙ほ法相の相すら無し。何に況んや、攝心亂心有らんや。須菩提よ、是の法相を以ての故に、佛は衆生の攝心亂心を知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は衆生の攝心亂心を知るに、云何が知りたまふや。須菩提よ、盡相を以ての故に知る、無染相を以ての故に知る、滅相を以ての故に知る、斷相を以ての故に知る、寂相を以ての故に知る、離相を以ての故に知る。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の攝心亂心を知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて衆生の染心を知り、實の如く、染心・瞋心・癡心を知り、實の如く、瞋心・癡心を知りたまふ」と。須菩提、佛に白して言はく、「世尊よ、云何が佛は衆生の染心を知り、實の如く、染心を知り、實の如く、瞋心・癡心を知りたまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「染心は如實の相なれば則ち染心の相無し。何となれば、如實の相の中には心心數法すら尙ほ得べからず、何に況んや、當に染心不染心を得べけんや。須菩提よ、瞋心・癡心は如實の相なれば、瞋心の相無く、癡心の相なし。何となれば、如實の相の中には、心心數法すら、尙ほ不可得なり、何に況んや、當に瞋心・不瞋心・癡心・不癡心を得べけんや。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の染心を、實の如く、染心と知り、瞋心・癡心と知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の染心無きことを、實の如く、染心無しと知り、瞋心無く、癡心無きを、實の如く、瞋心無く、癡心無しと知る」と。須菩提、佛に白して言はく、「世尊よ、云何が衆生の染心無きを、實の如く、染心無しと知り、瞋心無きを、實の如く、瞋心無しと知り、癡心無きを、實の如く、癡心無しと知りたまふや」と。佛、

須菩提に告げたまはく、「是の心の無染相の中には、染相無染相は不可得なり。何となれば、須菩提よ、二心は俱ならざればなり。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の染心無きを、實の如く、染心無しと知りたまふ。須菩提よ、是の無瞋心・無癡心の相の中には、癡心・不癡心は不可得なり。何となれば、二心は俱ならざればなり。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の瞋心無く、癡心無きことを實の如くに知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生の廣心を如實に廣心なりと知り給ふ。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生の廣心を、如實に廣心なりと知り給ふや」と。「須菩提よ、佛は諸の衆生の心相の廣からず、狹からず、増さず、減らず、來らず、去らざることを知りたまふ。心相は離なるが故に、是の心は廣からず、乃至來らず去らず。何となれば、是の心性は無なるが故に、誰か廣と作し、狹と作し、乃至來去せん。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生の廣心を、如實に廣心なりと知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生の大心を如實に大心なりと知りたまふ」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生の大心を如實に大心なりと知りたまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生心の來相・去相を見ず、衆生心の生相・滅相・住相・異相を見ず。何となれば、是の諸の心性は無なるが故に、誰か來り、誰か去り、誰か生・滅・住・異ならん。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生の大心を、如實に大心なりと知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の無量心を、如實に、無量心なりと知り給ふ」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の無量心を如實に無量心なりと知り給ふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「佛は般若波羅蜜(多)に因りて、是の衆生心の住することを、住せざることを見ざることを知

たまふ何となれば、是の無量心の相は依止すること無きが故に、誰か住し住せざる處有らん。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて衆生の無量心を、如實に、無量心なりと知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の不可見心を、實の如く、不可見なりと知りたまふ」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の不可見心を、實の如く、不可見心なりと知りたまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「衆生の心は是れ無相なり、佛は如實に、無相なりと知りたまふ。自相空なるが故なり。

復次に、須菩提よ、佛は衆生の心は、五眼もて見ることも能はずと知りたまふ。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の不可見心を、實の如く、不可見なりと知りたまふ」と。

釋して曰く、上に十方の諸佛及び大菩薩般若波羅蜜(多)を擁護し、乃至正憶念するに、魔をして其の便を得ざらしむることを説けり。會中に聽く者は是の事を聞き已りて、或は是の念を作す、

論

「諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は、寂滅の相にして、諸法及び衆生に於て、憎無く愛無し、何を以ての故に般若を書持し、乃至正憶念する者を擁護するや」と。是の故に、佛、須菩提に告げ爲に譬喩を説きたまへり。子の恩を知るが故に其の母を守護するが如く、般若は是れ十方諸佛の母なるが故に、若し魔等の留難ありて、般若波羅蜜(多)を破壊せんと欲する者を、諸佛は寂滅相を行すと雖も、衆生を憐愍するが故に、恩分を知るが故に、慈悲心を用つて常に念じ、佛眼を以て常に見、是の般若を行する者を守護し、増益することを得て、佛道を失せざらしめたまふ。此の中に佛、因縁を説きたまは

る者を守護し、増益することを得て、佛道を失せざらしめたまふ。此の中に佛、因縁を説きたまは

く、「諸の賢聖及び賢聖の法は、皆般若の中より生ず」と。

問うて曰く、「(四)須菩提は四種を問へるに、佛は何を以てか正しく三事を答へて、而も諸佛の般若中より生ずるを説きたまはざりしや。答へて曰く、般若は諸佛を生じ、諸佛は般若より生じ、義異なること無し。有る人の言はく、「諸法和合の故に、能く般若波羅蜜(多)を生じ、般若波羅蜜(多)は、能く諸佛を生ず」と。有る人は般若波羅蜜(多)及び衆行を行じて成佛することを得。初を作者と謂ひ、二を法と謂ふ。若くは墮ちたる枝人を殺すと言ひ、若くは墮ちたる樹人を殺すと言はんには、是の事は同じきを以ての故に別して答へず。若し般若波羅蜜(多)は能く諸佛を生ずと説けば、即ち諸佛は般若より生ずと説くなり。

問うて曰はく、「(五)餘經の如きは、五衆は破壊するが故に世間と名くと説く。此の中には何を以てか、般若波羅蜜(多)は、五衆の破壊生滅等無きことを示すと言ふや。答へて曰く、彼は是れ小乗の事、此は是れ大乘の法なり。小乗の法には多く無常を説き、大乘法の中には多く法空を説く。小乘法の中には、先無常を説きて、後に法空を説き、大乘法の中には、初に便ち法空を説く。小乘法の中には、無常を説いて、衆生をして怖畏せしめ。大乘は則ち然らず。是の故に破壊等無しと説く。此の中に佛、自ら因縁を説きたまはく、「空無相無作は、終に般若波羅蜜(多)を破せず」と。是の如き等の世間の相を示す。

【四】 第八問、須菩提の四問に對して、佛は但三答を與へ給ひし理由如何。

【五】 第九問、餘經には五蘊破壊を説き、此の經には五蘊無生滅を説く理由如何。

復次に、五衆を世間の衆生の身に名く。形色は知り易く、餘の心數法は、形無きが故に知り難し。是の故に、佛、須菩提に語りたまはく、「無量阿僧祇の衆生の心に行ずる所を皆知る。深般若の中に、衆生及び色等の法、乃至一切種智無しと雖も、般若の方便力を以て、而も能く衆生の心に行ずる所を知る」と。是の般若波羅蜜〔多〕の中には、畢竟空なるが故に、色等の法、乃至一切種智を示さず。此の中に、佛、因縁を説きたまはく、「般若波羅蜜〔多〕の中にすら、尚般若の相無し。何に況んや、色等の法にをや」と。

復次に、般若波羅蜜〔多〕は世間を示すとほ、一切衆生は、若くは色、若くは無色なり。色とは欲〔界〕、色界の衆生なり。無色とは、無色界の衆生なり。有想とは、無想天及び非有想非無想天を除きて、餘は是れ有想なり。無想とは是れ無想の衆生なり。非有想非無想とは是れ有頂處天なり。此の間の世界とは是れ三千大千世界なり。遍十方とは、餘の無量無邊阿僧祇の世界なり。是の世界の六道の中の三世の衆生をば、佛は悉く其の攝心亂心なりと知りたまふ。須菩提聞き已りて、心に疑ひ怪しむらく、「諸佛は常に樂んで、寂滅の諸法空を行じたまふ。今云何が遍ねく無始無邊の衆生の攝心亂心佛心、衆生心の無量種を知りたまふや。云何が一時に一切衆生の心を知りたまふや」と。是を以ての故に、佛に問ふ、「云何が知るや」と。佛答へたまはく、「諸法實相の智慧の故に、衆生の攝心亂心を知る」と。須菩提は問ふ、「何等か是れ諸法實相なるや」と。答へて曰く、所謂畢竟空なり。是の畢竟

空の畢竟空性も亦不可得なり、何に況んや、攝心亂心をや。

問うて曰く、(空)諸法實相畢竟空の中には、心・心數法を分別すること無し。佛は云何が其の心を知

りたまへるや。答へて曰く、此の中に、佛自ら説きたまはく、「諸法實相の性も亦不可得なり」と。是

の智慧を以て衆生の攝心亂心を知りたまふ。何となれば、若し空性にして得べくんば、應に難あるべ

し。空性にして得べからずんば、云何が難を作さん。今佛は一切の憶想分別、虚妄の法を過ぎて、實

相に安住し、實の如く、一切衆生の心を知りたまふ。衆生の心は虚妄法の中に住するが故に、他の衆

生を實の如く知ること能はず。先に略して他人を知んことを説き、次に衆

生の攝心亂心、所謂三毒を分別す。三毒無き者は、廣大無量にして、出沒

屈伸等を見るべからず。須菩提は事に問ふ。初の答は諸法實相を以ての

故に攝心亂心を知ると。次には、盡・無染・滅・斷・寂・離を以ての故に知ると。

盡とは、無常の慧なり。菩薩は是の無常の慧を行じて、心に一切世間の染を離る。世間の道を用ひ

て、結使を遮滅する。是を滅と名け、無漏の道を用ゐて斷するが故に斷と名く。諸の結使を斷じ已りて

涅槃寂滅離相を觀じ、是の因縁を以て、諸法實相を得。諸法實相を以て、他の攝心亂心は、皆是れ實

相なることを知る。

復次に、是の心は念念に生滅し、未來は無なるが故に知るべからず。現在に念念に滅して住する時

【六】第一〇問、諸法實相畢竟空の中には、心王心所を分別することなし。佛は如何が其の心を知り給へるか。

無きが故に知るべからず。凡夫の人は、相を取りて分別し、三世の中に於いて、憶想妄見もて、心を知る」と謂へり。今、盡門を以て觀ずれば、即ち是れ畢竟空なり。畢竟空なるが故に、著する所無く、是の時道を得て、諸法實相を知り、一切法に於いて、妄想分別せざれば、則ち如實に、他心を知る。染心とは、一切法は法性の中に入れば皆清淨なり。是の故に染心を實相なりと説く。是の中には染心無し。何となれば、如實の中には、心無く心數法無ければなり。何に況んや染心をや。瞋心癡心も亦是の如し。無染心の相中には、是の中染心の相あると無し。染心は本より來た無なるが故に、亦不染心も無し。無染心は、是れ寂滅の相にして、分別する所無し。此の中に、佛、自ら因縁を説きたまはく、「須菩提よ、一心は俱ならざるが故に、衆生法は心心次第す。無染心を生ずる時則ち染心無し。何となれば、過去の染心は已に滅し、未來は未だ有らず、現在には染心無ければ、則ち染心あると無く、染心無きが故に亦不染心無し、相待の法無きが故なり。」是の故に無染の實相中には、染心不染心有ると無し。無瞋心・無癡心亦是の如し。廣狹増減の心は皆是れ衆生相を取りて分別するなり。佛は是の如く知りたまはず。何となれば、是の心は、色無く、形無く、住處無く、念念に滅して、則ち廣狹増減の差別無ければなり。此の中に佛因縁を説きたまはく、「心の性相は、無なるが故に、廣狹等は得べからず」と。廣狹・増減・大小の義は、四無量心の中に説くが如し。無量心とは、廣心大心は、即ち是れ無量なり。又無量の衆生を緣するが故に、無量と名け、又涅槃の無量法を緣するが故に無量と名け、

又心相は取るべからざるが故に無量と名く。眼有り色有るが如きは因縁の故に眼識生ず。是の識は眼に在らず、色に在らず、中間に在らず、此に在らず、彼に在らず、是の故に住處無し。若し實に住處無ければ、云何が能く所作有りて、若くは好、若くは醜ならん。夢に見る所の事は、其の實定の相を求むべからざるが如し。心も亦是の如く、依止無きが故に、定相無きが故に、無量と名く。廣大も亦應に是の如く、義に隨つて分別して説くべし。

問うて曰はく、(三七) 若し心は見るべからずと知らば、佛は何を以ての故に、如實に、不可見の心を知ると説きたまひしや。答へて曰く、坐禪の人あり。憶想分別して、是の心を見ること、清淨の珠の中に縷を觀、白骨の人の中に心を見るが如く、次第に相續して生じ、或時は心は身に在りと見、或は縁に在りと見る。無邊の識處の如きも、但識は無量無邊なりと見る。是の如き等の處の虚妄を破するが故に、佛の言はく、「如實に、衆生の心を知るに、衆生の心は、自相空なるが故に、無相の相なり」と。

復次に、佛は五眼を以て、此の心を觀たまふに、不可得なり。肉眼天眼は色を緣するが故に見ず、慧眼は涅槃を緣するが故に見ず、初學の法眼は分別して諸法の善不善有漏無漏等を知る。是の法眼は實相の中に入れば、則ち分別無きこと先に説くが如し。一切法は知者無く、見者無し。是の故に見

【七】 第一問、若し心は見る可らずんば、佛は何を以てか、如實に不可見の心を知ると説き給ひしか。

るべからず。佛眼ぶつげんは寂滅じやくめつの相さうを觀くわんするが故ゆゑに見みるべからず。衆生しゆじやうの心こころを見みるとは、如實にょじつに見みるなり。

凡夫はんぶの人の憶想おくさう分別ぶんべつして見るが如ごとくならず。

復次またつぎに、五眼いんげんは因緣いんねん和合わがふして生しやうじ、皆是みなこれ作法さほふにして、虛誑こわう不實ふじつなり。佛ほとけは信しんせず、用もちゐたまはず。是この故ゆゑに天眼てんげんを以もつて見みずと言いふ。





識も亦是の如し。是の如く、須菩提よ、佛は般若波羅蜜(多)に因りて、衆生の出沒屈伸を如實に知りたまふ。

復次に、須菩提よ、佛は色相を知りたまふ。云何が色相を知るや。如は不壞・無分別・無相・無徳・無戲論・無得なるが如く、

色相も亦是の如し。須菩提よ、佛は受想行識の相を知りたまふ。云何が受想行識の相を知るや。如は壞せず、分別無く、相無

く憶無く、戲論無く、得無きが如く、受想行識も亦是の如し。是の如く、須菩提よ、佛は衆生の如相、及び衆生心の数の出

沒屈伸の如相、是の五衆如相、諸行如相、即ち一切法如相なりと知りたまふ。何等か是れ一切法の如相なる、所謂六波羅蜜

〔多〕の如相なり。六波羅蜜(多)の如相は即ち是の三十七品の如相なり。三十七品の如相は即ち是れ十八空の如相なり。十八

空の如相は即ち是れ八背捨の如相なり。八背捨の如相は即ち是れ九次第定の如相なり。九次第定の如相は即ち是れ佛の十方

の如相なり。佛の十方の如相は即ち是れ四無所畏・四無礙智・大慈大悲乃至十八不共法の如相なり。十八不共法の如相は、即

ち是れ一切種智の如相なり。一切種智の如相は、即ち是れ善法・不善法・世間法・出世間法・有漏法・無漏法の如相なり。有漏

法・無漏法の如相は、即ち是れ過去・未來・現在の諸法の如相なり。過去・未來・現在の諸法の如相は、即ち是の有爲法・無爲法

の如相なり。有爲法・無爲法の如相は、即ち是れ須陀洹果の如相なり。須陀洹果の如相は、即ち是れ斯陀含果の如相なり。

斯陀含果の如相は、即ち是れ阿那含果の如相なり。阿那含果の如相は、即ち是れ阿羅漢果の如相なり。阿羅漢果の如相は、即

ち是れ辟支佛道の如相なり。辟支佛道の如相は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提の如相なり。阿耨多羅三藐三菩提の如相は、即

ち是れ諸佛の如相なり。諸佛の如相は、皆是れ一如の相にして、不二不別、盡きす壞せず、是を一切諸法の如相と名く。佛

は般若波羅蜜(多)に因りて、是の如相を得たまふ。是の因縁を以ての故に、般若波羅蜜(多)は能く諸佛を生じ、能く世間の

相を示す。是の如く、須菩提よ、佛は一切法の如相にして、不如相・不異相に非ざることを知りたまふ。是の如相を得るが

故に、佛を如來と名くと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の諸法は、不如相・不異相に非ずして甚深なり。世尊

よ、諸佛は是の如きを用つて人の爲に阿耨多羅三藐三菩提を説きたまふ。世尊よ、誰か能く是を信解する者ぞ」と。「唯阿耨  
 跋致の菩薩及び正見を具足する人、漏盡の阿羅漢有るのみ。何となれば、是の法は甚深なればなり。須菩提よ、是の如は無  
 盡の相なるが故に甚深なり」と。須菩提言さく、「何法が無盡の相なるが故に甚深なりや」と。佛の言く、「一切法は無盡なる  
 が故なり。是の如く、須菩提よ、佛は是の一切諸法の如を得已りて、衆生の爲に説きたまふ」と。

論

釋して曰はく、佛は悉く一切衆生の所作・所行・六十二の邪見等の諸の邪見・九十八結使等の

諸の煩惱を知りたまふ。是の故に、佛は衆生の心心數法の出沒屈伸を知りたまふと説く。家に在る者は、愛等の諸の煩惱の爲に沒せられ、名けて沒と爲す。九十六種の邪見なり。出家は名けて出と爲す。

復次に、常に世樂に著するが故に沒と名け、或は無常を知り、怖畏して道を求むるが故に出と名く。

復次に、九十六種の道法を受けて、正道を得ることが能はざるが故に、還つて世間に沒在す。屈とは欲界を離れず、伸とは、欲界を離るるなり。離不離も亦是の如し。人の清池の上に立ちて、魚を見るに、或は常に水中に在る有り、或は暫らく出でて還つて沒する有り、或は出でて四方を觀る有り、出でて渡らんと欲する者有るも、岸に近づけば、還つて沒するが如し。佛も亦是の如く、佛眼を以て十方六道の衆生を觀るに、常に五欲に著し、諸の煩惱心を覆ひ、出づることを求めざる者有り。或は

【三】 出沒の義解。

【四】 魚の水中に有つて出沒するが如く、人は煩惱の中に有つて出沒す。

好心もて能く布施し、能く持戒するも、而も邪疑を以て心を覆ふが故に、還つて没する有り。有人は五欲を出でて、能く煖法頂法等を得、四諦を觀するも、未だ實法を得ざるが故に還つて没す。有人は欲を離れ、乃ち無所有處に至るも涅槃を得ざるが故に還つて没す。何等か是れ出沒屈伸の相なる。此の中に佛の説きたまはく、「所謂神及び世間は常なり」と。凡夫の人は、憶想分別して、我心に隨ひ、相を取るが故に、神ありと計す。(一五) 外道に神を説くに二種有り。一には常、二には無常なり。若し神を常と計する者は、常に福德を計し、後に果報を受くるが故に、或は行道によるが故に、神は解脱を得。若し神を無常と謂ふ者は、今世の名利の爲の故に所作有り。常無常とは、有人の謂く、神に二種有り、一には細微は常住なり。二には現有の所作なり。現有の所作とは、身死する時無常なるも細神は是れ常なりと。有人の言く、神の非非無常、常無常の中には、俱に過有り。若し神、無常ならば、即ち罪福無く、若し神、常なるも、亦罪福無し。何となれば、若し常なれば、則ち苦樂は異ならざればなり。譬へば虚空は雨も濕ほす能はず、風日も乾かす能はざるが如し。若し無常なれば、則ち苦樂は變異す。譬へば風雨も牛皮の中に在れば、則ち爛壞するが如し。我心を以ての故に、必ず神有りと説く。但常に非ず、無常に非ずと。佛の言く、四種の邪見は皆五衆を縁じ、但五衆に於て、謬計して神と爲すのみと、神及び世間とは、(一六) 世間に三種有り。一には五

【一五】 外道の二種の神——(一)常(二)無常。此に謂ふ所の神とはカミの義にあらず、個人の精神或は靈魂を云ふなり。

【一六】 三種の世間——(一)五蘊世間、(二)衆生世間、(三)國土世間。

衆世間、二には衆生世間、三には國土世間なり。此の中には二種の世間を説く。五衆世間と、國土世間となり。衆生世間は、即ち是れ神なり。世間の相中に於いても、亦四種の邪見あり。

問うて曰く、(七)神は本より已來、無なるが故に、應に錯なるべきも、世間は是れ有なるに、云何が神の邪見に同するや。答へて曰く、(八)但世間に常、無常の相を起すを破して、世間を破せず。譬へば

無目の人は、蛇を得て以て纏絡と爲んに、有目の人は、是れ蛇にして、纏絡に非ずと語るが如し。佛は世間の常顛倒を破して、世間を破したまは

ず。何となれば、現に無常を見るが故に、亦無常と云ふことを得ず。罪福は失せざるが故に、過去の事に囚りて、所作あるが故なり。常と無常の二

は、俱に過有るが故に、非常非無常なり。世間に著する過の故なり。世間は有邊なりとは、有人は世間の根本を求むるに、其の始を得ず、其の始を得ざれば、則ち中無く後無し。若し初中後無ければ、則ち世間無し。是の

故に世間に應に始あるべしとは、即ち是れ邊なり。(九)神を得る者は、宿命智力もて、乃ち八萬劫の

事を見、是を過ぎて已往は、復た知ること能はず。但身の始なる中陰の識を見て、而して自ら思惟す

らく、「此の識は無因無縁なるべからず、必ず應に因縁あるべし」と。宿命智の知ること能はざる所

にして但憶想分別す。法あり、世性と名く。五情の知る所に非ず。極めて微細なるが故なり。世性の

【七】 第一問、靈魂實有説の邪見は則ち可なり、世間實有説の邪見なる理由如何。  
【八】 佛は世間の常無常を破するも、世間そのものを破し給はず。  
【九】 得神の外道は八萬劫以前を知らず、但身の始たる中陰の識を見るのみ。

中に於いて、初めて覺を生ず。覺は即ち是れ中陰の識なり。覺より我を生じ、我より五種の微塵、所謂色聲香味觸を生じ、聲微塵より虚空大を生じ、聲觸より風大を生じ、色聲觸より火大を生じ、色聲觸味より水大を生じ、色聲觸味香より地大を生じ、空より耳根を生じ、風より身根を生じ、火より眼根を生じ、水より舌根を生じ、地より鼻根を生ず、是の如き等漸漸に細より麤に至る。(二〇)世性は、世性より已來麤に至り、麤より細に轉じ、還た世性に至る。譬へば泥丸の中に瓶盆等の性を具有し、泥を以て瓶と爲し、瓶を破すれば瓮と爲る、是の如く轉變して、すべて失ふ所無きが如し。世性も亦是の如く、轉變して麤と爲る。世性は是れ常法にして、從來する所無きこと是の如し。僧佉經に廣く世性を説けり。

復次に、有人は説く、(三一)世間の初邊を微塵と名く。微塵は常法にして破すべからず、燒くべからず、爛くべからず、壞すべからず、微細なるを以ての故なり。但罪福の因縁を待つて和合するが故に身有り。若くは天、若くは地獄等は、父母無きを以ての故に、罪福の因縁盡くれば、則ち散壞すと。(三二)有人は、自然を以て世界の始と爲し、貧富貴賤は願行の所得に非すと。(三三)有人の言く、天主は即ち是れ世界の始にして吉凶禍福天地萬物を造作し、此の法滅する時、天還た攝取すと。是の如き邪因は、是れ世界邊なり。(三四)有人は説く、衆生は世世に苦樂を受け、盡く自ら邊に到る。譬へば山上に縷丸を投ぐるに、縷盡

- 【一〇】 世性の相貌。
- 【一一】 世間の初は微塵にして、住なりとの説。
- 【一二】 自然を世界の始とするの説。
- 【一三】 天主を世界の始とするの説。
- 【一四】 世間有邊の説。

くれれば自ら止まるが如く、罪を受け福を受くることも盡に會歸すれば、精進と懈怠は異なること無しと。有人は説く、國土世間には八方に邊有りて唯上下のみ邊無しと。有人は説く、下は十八地獄に至り、上は有頂に至りて、上下に邊有り、八方には邊無しと。是の如く種種に世界の邊を説く。有人は説く、衆生世間には邊有りと。神を説くが如きは、體中に在りて、芥子の如く、棗の如しと。或は言く、一寸なりと。大人は則ち神大にして、小人は則ち神小なり。神は是れ色法にして分有りと説くが故に神は有邊なりと言ふ。無邊とは、有人は説く、神は虚空に遍滿し、處として有らざること無く、身處は能く苦樂を覺することを得と。是を神は無邊なりと名く。有人の言く、國土世間には始無し、若し始有れば則ち因縁無し。後亦窮無く常に身を受けば、是は則ち涅槃を破す。是を無邊と名くと。

復次に、國土世間は、十方に無邊なりと説く。是等の如く、神・世間・國土世間の有邊・無邊を説くなり。無邊とは、有人の言く、神世間は無邊にして、國土世間は有邊なりと。或は言く、神世間は有邊にして國土世間は無邊なり。上に説くが如く、神は是れ色なるが故なりと。或は言く、上下は邊有りて八方は邊無しと。是の如く、總じて上の二法を名けて、有邊無邊と爲す。世間は有邊に非ず、無邊に非ずとは、有人は世間の有邊に過有り、無邊にも亦過有ることを見るが故に、有邊を説かず、無

- 【五】 靈魂は體中にありて、芥子の如く、棗の如し。
- 【六】 縮藏には、米に作る。
- 【七】 世間無邊の説。
- 【八】 世間の非有邊、非無邊の説。

邊を説かず。非有邊、非無邊に著し、以て世間の實と爲す。神は即ち是れ身なりとは、有人の言

く、身は即ち是れ神なり。何となれば、此の身を分折して、神を求むるに、不可得なるが故なりと。

復次に、好醜苦樂を受くるは、皆是れ身なり。是の故に、身は即ち是れ神なりと言ふ。身異なり

神異なるとは、有人の言く、神は微細にして、五情の得ざる所、亦凡夫の

人の見る所に非ず。心を攝し、清淨にして禪定を得る人、乃ち能く見るこ

とを得。是の故に身異なり神異なりと言ふと。

復次に、若し身は即ち是れ神ならば、身滅すれば神も亦滅す。是れ邪

見なり。身異なり、神異なると説かば、身は滅すとも神は常に在り。是れ

邊見なり。死後に去るが如きこと有りとは、〔次の如し〕。

問うて曰く、先に常無常等を説けるは、即ち是れ後世は或有、或は

無なり。今何を以てか別して去るが如しの四句を説くや。答へて曰く、上

には總じて一切世間の常、非常を説き、後世の有無の事は〔重〕要なるが故

に別して説く。去るが如しとは、人の此の間に來りて生ずるが如く、去つて後世に至るも亦是の如

し。有人の言く、先世は從來する所無く、滅するも亦去る所無し。有人の言く、身と神と和合して

人と爲り、死後に神去るも身は去らず、是を去るが如く、去るが如くならずと名く。去るが如きこ

【元】 神は即ち是れ身なりとの説。

【一】 身異神異の説。

【二】 身即神は邪見、身異神異は邊見なり。

【三】 第二問、死後去るが如きあり、去るが如きなし、去るが如きこと有るに非らず、去るが如きこと無きに非ずの四句を説く理由如何。

【四】 去るが如しの解。

【五】 去るが如くならずの解。

【六】 非有如去、非無如去の解。

と有るに非ず、去るが如きこと無きに非ずとは、去と不去とを見るは失有るが故に、去るに非ず、去らざるに非ずと説くなり。是の人は神を捨つること能はず。而も非去非不去に著す。是の如き諸の邪見煩惱等は、是を心の出沒屈伸と名く。何となれば、邪見の者は種種の道もて、出を求むるも得ざるが故に、出でんと欲して而も沒す。邪見の力は、多く解し難きが故に、常無常等の十四事を説く。外道は種種に憶想分別すと雖も、佛は皆五衆を緣じ、五衆に依止として、神無く無常なりと言へり。佛は五衆の空無相無作にして戲論無きことを知りたまひ、但五衆の如なることを知りたまふ。凡夫の虚誑顛倒して見るが如くならず。五衆の如の如く、一切法の如も亦是の如し。何となれば、二法に一切法を攝す、所謂有爲と無爲となり。五衆は是れ有爲法、五衆の如は即ち是れ無爲法なり。五衆を觀察し、籌量し思惟して、能く六波羅蜜(多)を行す。是の故に、五衆の如は即ち是れ一切法の如なりと説く。一切法の如は即ち是れ六波羅蜜(多)の如なり。六波羅蜜(多)を行する菩薩は實道を求め、五衆の無常空を觀じて、三十七品八背捨九次第定等を生ず。是れ聲聞道なり。知り已つて直に過ぎて、十八空・十力等の諸佛の法を行じ、皆正しく五衆を觀す。五衆の如は分別無きが故に、皆是れ一切諸法の如なり。是の故に、善法の如は即ち是れ不善法の如なり。不善法の如は、即ち是れ善法の如なりと説く。世間出世間の法も亦是の如し。是を以て行者は、善法に著して、不善法を捨つることを得ず。乃至阿耨多羅三藐三菩提、佛の如相も亦是

【三六】五蘊の如は一切法の如なり。

の如く、皆是れ一如の相にして、不二不別なり。何となれば、諸法の實を求めて、竟畢空に到れば、復  
 異なる無く、是の如き等の諸法の如を、佛は般若波羅蜜(多)に因りて得たまへばなり。是の故に般若  
 波羅蜜(多)は能く諸佛を生じ、能く世間の相を示すと云ふ。須菩提は未曾有なりと歎じ、佛に白して  
 言さく、世尊よ、一切諸法の如は甚深なり、隨順して三世十方諸佛の如に相違せず。即ち是れ諸法の  
 如なり。是の諸法の如を解するが故に、衆生の爲に種種の法を説く。是の甚深の如は解し難く信じ難  
 く、阿鞞跋致の菩薩の法位に入り、記を受くる者能く信ず。正見を具足する人とは、三道の人なり。  
 漏盡の阿羅漢は一切法を受けざるが故に能く信じ、其の信有る者は阿鞞跋致の中に近くが故に別して  
 説かず。佛、須菩提に語りたまはく、「一切法は盡くすること無きが故に、  
 是の如は盡くすること無し」と。如は盡くすること無きが故に、聖道を得る者  
 は能く信ず。無爲法の中に差別あるが故に、須陀洹の諸道有り、自ら所得の法を聞くが故に能く信  
 ず。凡夫の人は、虚誑顛倒の法に著するが故に、信すること能はず。佛、須菩提に告げたまはく、「諸  
 佛は是の諸法の如を得るが故に、名けて如來と爲し、名けて一切智人と爲し、能く衆生を教へて涅槃  
 に至らしむ」と。

【三七】 諸天深般若の相を問へるに答ふ。

(三七) 問相品第四十九を釋す。

爾の時に、三千大千世界の中の所有欲界の天子、色界の天子は遙に華香を散じ、佛の所に來至して、佛足を頂禮し、一面に住して佛に白して言さく、「世尊よ、(三八)所説の般若波羅蜜(多)は甚深なり。何等か是れ深般若波羅蜜(多)の相なりや」と。

佛、欲界・色界の諸の天子に告げたまはく、「諸の天子よ、空相は是れ般若波羅蜜(多)の相なり。無相・無作・無起・無生・無滅・無垢・無淨の無所有の法と、無相無依止の虚空相とは、是れ般若波羅蜜(多)の相なり。諸天子よ、是の如き等の相は、是れ深般若波羅蜜(多)の相なり。佛は衆生の爲に、世間の相を用ふるが故に、第一義に非ずと説きたまふ。諸天子よ、是の諸相を一切世間の天人、阿修羅は破壞すること能はず。何となれば、是の一切世間の天人、阿修羅も亦是れ相なればなり。諸天子よ、相は相を破すること能はず、相は相を知ることを能はず、相は無相を知ること能はず、無相は相を知ること能はず、是の相是の無相、相と無相と皆知る所無し。謂ゆる知

相・知法・知者、皆不可得なればなり。何となれば、諸天子よ、是の諸相は色の作に非ず、受相行議の作に非ず、檀波羅蜜(多)の作に非ず、尸羅波羅蜜(多)・麤提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)の作に非ず、内空の作に非ず、外空の作に非ず、内外空の作に非ず、無法空の作に非ず、有法空の作に非ず、無法有法空の作に非ず、四念處の作に非ず、乃至一切種智の作に非ず。諸天子よ、是の諸相は人の所有に非ず、非人の所有に非ず、世間に非ず、出世間に非ず、有漏に非ず、無漏に非ず、有爲に非ず、無爲に非ざればなり」と。佛復た諸天子に告げたまはく、「譬へば人有り、何等か是れ虚空の相なりやと問ふが如し、此の人は正しき間を爲すや不や」と。諸天子言さく、「世尊よ、是は正しき間にあらず。何となれば、世尊よ、是の虚空は相の説くべき無く、虚空は無爲・無起なればなり」と。佛、欲界・色界の諸天子に告げたまはく、「有佛・無佛の相・性は常住なり。佛は如實の相性を得るが故に名けて如來と爲す」と。諸天子、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊の得たまふ所の諸の相性は甚深なり。」

【三六】 般若波羅蜜多の相を説く。

【三九】 佛を如來と名くる所以。

三九 佛は如實の相

是の相を得るが故に無礙智を得て是の實相の中に住す。般若波羅蜜(多)を以て諸法の自相を集めたまふ」と。諸天子言さく、  
 「希有なり、世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)は、是れ諸佛の常に修行する所の道にして、是の道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、  
 阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、一切の法相、若くは色相、若くは受想行識相、乃至一切種智相に通達したまふ」と。  
 佛の言はく、「是の如し、是の如し。諸天子よ、惱壞の相は是れ色相なり、佛は是の無相を得。覺は受相、取は想相、  
 起作は行相、了別は識相なり、佛は是の無相を得。能捨は檀波羅蜜(多)の相、熱惱無きは檀波羅蜜(多)の相、變異せざる  
 は厲提波羅蜜(多)の相、伏すべからざるは毗梨耶波羅蜜(多)の相、心を攝するは禪波羅蜜(多)の相、捨離は般若波羅蜜(多)  
 の相なり、佛は是の無相を得。心憊惱する所無きは、是れ四禪・四無量心・四無色定の相なり、佛は是の無相を得。出世間は  
 三十七品の相なり、佛は是の無相を得。苦は無作脫門の相、離は空脫門の相、寂滅は無  
 相脫門の相なり、佛は是の無相を得。勝は十力の相、恐怖せざるは無所畏の相、遍れく  
 知るは四無礙智の相、餘人得ること無きは十八不共法の相なり、佛は是の無相を得。衆  
 生を愍念するは大慈大悲の相、實は謬錯無き相、取る所無きは常捨の相、現に了知するは一切種智の相なり、佛は是の無  
 相を得。是の如く、諸天子よ、佛は一切諸法の無相を得。是の因縁を以ての故に佛は無礙智と名く」と。

【四〇】 第三問、諸天子が般若の相を問へる理由如何。

論

問うて曰く、(四〇) 上に處處に已に空無相無作、乃至無起無所有を説けり。是れ般若の相なり。  
 諸天子は何を以てか、復た何等か是れ般若の相なりやと問ふや。答へて曰く、佛は處處に般若波羅蜜  
 「多」を説きたまふと雖も、或は空等と説き、或は有と説き、或は果報と説き、或は罪福と説いて不定  
 なるが故に、是を以て、今何者か定んで是れ般若の相なりやと問ふなり。

復次に、是の般若波羅蜜(多)は、幻化の如く、得べきが如くに似て、而も定相の取る可き無く、唯諸佛のみ能く正しく遍ねく其の相を知り、諸天は利智有りと雖も、了知すること能はざるが故に問ふなり。

復次に、有人の言く、「是の諸天子の後に來る者ありて、聞かざるが故に問ふ。佛、諸天子に答へ

たまはく、空等は是れ般若波羅蜜(多)の相なり」と。空相とは、内外空等の諸の空なり。若し諸法

空ならば、即ち是れ男女長短好醜等の相あること無し。是を無相の相と名く。若し空無相ならば、

復た願を生じて後世の身に著せず、是を無作の相と名く。三解脱門は是れ

初めて般若の相に入り、三乘共に不生不滅不垢不淨無依止虚空等有り。

【四一】 無相の相の義解。  
【四二】 無作の相の義解。

是の般若波羅蜜(多)は深相なり。上の三解脱門の中には相無く、男女等の外相無く所有無し。下は無相

の相にして、一切法は相無く空なり。是れ一人なりと雖も、根に利鈍有り、入るに深淺有るが故に、

差別して空を説くなり。無生無滅等の論議は先に説くが如し。佛は天子の必ず是の如き、念有るとを

知りたまへり。〔所謂〕若し般若波羅蜜(多)は空にして所有無く、虚空の相の如くならば云何が説くべ

き。若し説けば即ち是れ有相なり。諸天は佛の威徳大なるを以ての故に敢へて難を致さず。是の故に

佛は自ら爲に説きたまへり。佛は衆生を憐愍し、世諦を以ての故に、空等の諸相を説き、第一義諦を

以てするに非ず。若し第一義を以てするが故に應に難すべく、世諦を以ての故に説くは則ち難すべか

らず。

復次に、空を説くと雖も著心を以てせず、相を取て法を示さず。若くは是、若くは非の一切法は、同一相にして分別無し。是の故に復了了に説く。所謂無所有にして、虚空の相の如く、一法として、此の相に入らざる者無し。是の故に、一切世間を能く破壊すること無しと説く。何となれば、一切世間の天人阿修羅は、即ち是の相なればなり。若し異法にして相違すれば、則ち破すべきこと有り。水は能く火を滅するも、火は自ら火を滅すること能はざるが如し。口に如實を言ひて、破せんと欲するものは、竟に破すること能はず。何に況んや、不實なる者をや。譬へば盲人の珍寶を踏踐し、口に珍寶に非ずと言ふも、竟に珍寶に非ざらしむると能はざるが如し。此の中に、佛は更に般若波羅蜜〔多〕の、畢竟空無相なることを説きたまふが故に、相は相を破すること能はざるなり。

復次に、有人の言く、「相は相を破すると能はずとは、法有り、能く諸法の和合を解散するも、竟に破する所無く、失する所無し。斧の薪を折りて分分に解散するも、竟に失する所無きが如し」と。復次に、諸法は定相無し。樹の根莖枝葉和合するが故に名けて樹と爲し、樹は定相無きが故に破する所無きが如し。是等の如きを名けて、相は相を破すること能はずと爲す。

問うて曰く、色等の諸法は覺に非ざるが故に相を知るべからず。心數法は相を知る、云何が知ら

【四三】 第四問、心所法は相を知  
る、何故に知らずといふか。

ずと言ふや。答へて曰く、此の中には、實相を以てするが故に、凡夫の人の虚妄の知を説かず。是の智慧は、有爲法なるが故に、因縁和合より生ず。虚妄の法は實に知る所あること能はず。是の故に、捨てて無餘涅槃に入る。若し智慧もて、常無常、乃至空寂滅等を知ることは、上來已に廣く破滅して有る所無し。若し是の如くんば、云何が當に知ること有るべけんや。是を以ての故に、相は相を知らず。相は無相を知ること能はずとは、内に智慧有りと雖も、外は空なるが故に、法として知るべきもの無し。外に縁無くんば云何が智慧を生ぜん。是の故に相は無相を知ること能はずと言ふ。譬へば、刀は利なりと雖も、空を破すること能はざるが如し。無相は相を知ること能はずとは、有人の言く、内の智慧に定相無く、外の所縁の法に定相有りて、心は縁に隨つて生ず。是の故に無相は相を知るべからずと説く。譬へば刀無ければ物有りと雖も、刀もて破すべきこと無きが如し。是の相は是れ無相にして、相無相は皆不可得なりとは、相は相に入らず、何となれば、先づ相有ればなり。相は無相に入らず。何となれば、相に入る處無ければなり。是の相と、無相とを離るれば、更に處として入るべき無し。

復次に、相を相とする所の法は、不定なるが故なり。相とする所に因るが故に相有り。何となれば、若し先づ相有りて、相とする所無ければ、則ち相無し。因る所無ければなり。若し先づ相とする所有りて、而も相無くんば、云何が相とする所有らん。因つて待つ所無ければなり。

復次に、相は相とする所を以て不定なり。相は或時は所相と作り、所相は或時は是れ相なり。是の故に相は不定なり、不實の故に所相も亦無く、若し所相不定なれば、不實の故に相も亦無し。是の故に、是の相は是れ無相にして、是の相と無相は不可得なりと説く。先に説くが如く、空等の諸相は是れ實なり。何となれば是の相は五衆の所作に非ず、六波羅蜜〔多〕、乃至一切種智の所作に非ず。是の相は無爲なるが故に、法として作すべき無く、亦若くは人、若くは非人の能く作すと無し。人とは、菩薩諸佛等なり、非人とは、諸天等なり。是の相は畢竟空なるが故に、有漏に非ず、無漏に非ず、世間に非ず、出世間に非ず。先に無爲の相を説くと雖も、但有爲を破するが故に無爲を説く。無爲にも亦定相無し。佛は是の事をして明了ならしめんと欲するが故に、譬喩を説きたまへり。聽者は是の念を作す、「若し佛無くんば、則ち是の相を聞かず。佛は衆生に於いて、最上なるが故に、應當に是の相を作すべし」と。是の故に佛、諸天に語りたまはく、「佛有るも、佛無きも、此の相は常住なり。佛は能く是の相を知るが故に名けて佛と爲す」と。爾の時に、諸天は歡喜して、復た佛に白して言さく、世尊よ、是の諸相は甚深にして、相を取るべからずと雖も、而も行すれば、能く人に無上の果報を與ふべし。佛は是の相を得るが故に、一切の法に於て、無礙智を得たまへり。若し諸法を分別して定相有らば、則ち是は有礙智なり。世尊よ、是の諸法實相の中に住すれば、則ち通達無礙にして、能く諸法の各々の別相を説く。所謂惱壞相、是れ色相なり。乃至現了知とは、是れ一切種智相なりと。



般若波羅蜜(多)は能く諸佛を生じ、能く世間の相を示す」と。(四)須菩提言さく、「世尊よ、若し一切法に知者無く見者無く

んば、云何が般若波羅蜜(多)は、能く諸佛を生じ、能く世間の相を示すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是

の如し。一切法には、實は知者無く、見者無し。云何が知者無く見者無きや。一切法は空・虚誑にして堅固ならず。是の故

に一切法には知者無く見者無し。

復次に、須菩提よ、一切法は云何が知者無く、見者無きや。一切法には依止無く、繫る所無し。是を以ての故に、一切法

は知者無く、見者無し。是の如く、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は能く諸佛を生じ、能く世間の相を示す。色を見ざるが故に

世間の相を示し、受相行識を見ざるが故に、世間の相を示し、乃至一切種智を見ざるが

故に、世間の相を示す。是の如く、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は、能く諸佛を生じ、能

く世間の相を示す」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が色を見ざるが故に、般若波羅蜜

(多)は世間の相を示し、受相行識乃至一切種智を見ざるが故に、世間の相を示すや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「若し色を縁して識を生ぜざれば、是を色相を見ざるが故に示すと名け、受相行識を縁して識を

生ぜず、乃至一切種智を縁して識を生ぜざれば、是を一切種智の相を見ざるが故に示すと名く。是の如く、須菩提よ、是の

深般若波羅蜜(多)は、能く諸佛を生じ、能く世間の相を示す。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は、云何が能く諸佛を生じ、能く世間の相を示すや。須菩提よ、般若波羅蜜(多)は世

間の空を示す。云何が世間の空を示すや。(四八)五衆世間の空を示し、十二入世間の空を示し、十八界世間の空を示し、十二

因縁世間の空を示し、我見・根本六十二見世間の空を示し、十善道世間の空を示し、四禪・四無量心・四無色定世間の空を示

し、三十七品世間の空を示し、六波羅蜜(多)世間の空を示し、内空世間の空を示し、外空世間の空を示し、内外空世間の空

【四七】 一切法には知者なく見者なし。  
【四八】 五蘊乃至一切種智空なるが故に世間の空なりと説く。



復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は佛に世間の無法空を示す。云何が世間の無法空を示すや。五衆世間の無法空を示す。乃至一切種智世間の無法空を示す。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は佛に世間の無法有法空を示す。云何が世間の無法有法空を示すや。五衆世間の無法有法空を示し、乃至一切種智世間の無法有法空を示す。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は佛に世間の獨空を示す。云何が世間の獨空を示すや。五衆世間の獨空を示し、乃至一切種智世間の獨空を示す。是の如く、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は能く諸佛を生じ、能く世間の相を示す。須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)は世間の相を示す。所謂今世後世の相を生ぜず。何となれば、諸法は用つて今世後世の相を生ずべきこと無きが故なり」と。

釋して曰く、般若波羅蜜(多)は是れ諸佛の母なり。是の因縁の故に

諸佛は般若波羅蜜(多)に依止して住す。餘經の中に説く、「諸佛は法に依止し、法を以て師と爲す」と。佛は此の中に、須菩提に告げたまはく、「法とは、即ち是れ般若波羅蜜(多)なり」と。一切の不善法の中に、邪見に過ぎたるは無し。邪見の故に恩分を識らず。我は自然に應に爾も恩を知る者なるべし。諸の世間の善法中に最上にして、能く今世に好き名聲を興へ、後に上妙の果報を興ふ。是の故に佛は自ら説きたまはく、「恩を知るは報恩中に第一なり」と。我すら尙ほ布施持戒等の恩を知る。何に泥んや般若波羅蜜(多)をや。

【四九】 法とは智度なり。  
【五〇】 恩を知るは、報恩中第一なり。

復次に、諸天子は是の念を作す、「般若波羅蜜(多)は畢竟空なり。定相無きが故に」と。或は有人は貪らず貴ばず。是の故に佛は説きたまはく、「我れ三界の尊たるすら、尚ほ般若波羅蜜(多)を供養す、何に況んや餘人をや」と。復た有人は疑を生ずらく、「佛は一切世間に於いてすら、虚空の如く、著する所無し。何を以ての故に、是の般若波羅蜜(多)を貪り、尊重し供養すること、貪著するが如くに似たるや」と。是の故に佛説きたまはく、「我に貪心無し。但分別して諸法の好醜、力用の多少を知り、是の般若波羅蜜(多)の能く一切の戲論を斷じ、三乘の道を開き、能く衆苦等を滅して、無量無邊の功德あることを知る。是の故に讚歎尊重供養す」と。譬へば、人の安隱の道を行きて、諸の患難を免れ、常に此の道を念じて以て人に示すが如し。

【五】 佛は作人を知るの義解。

佛は作人を知るとは、他の恩を作すことを知るは、已に餘處に於いて説けり。佛は作人知らずば、恐らくは人疑はん。是の故に、佛は一切法の無作相を知ると説く。一切法の無作相を知るが故に無作の人と言ふ。恩分を知らざるを以ての故に作人を知らずと名けず。作人を知り、作人知らずと言ふことは咎無し。爾の時に、須菩提は畢竟空を以て難ずらく、「世尊よ、若し一切法は畢竟空なるが故に、知者無く作者無くんば、云何が般若波羅蜜(多)は、能く諸佛を生じ、能く諸佛の世間を示すや」と。佛は其の問を可とし、此の中に自ら因縁を説きたまはく、「一切の法は空虚誑にして堅固なること無し」と。須菩提意へらく、「一切法は鈍相にして見無く知無し。云何が般若波羅蜜(多)のみ獨り

能く知見するや」と。佛意ひたまはく、「一切法は但知ること無く、見ること無きのみにあらず、一切法は空にして牢固ならず。知者無く、見者無く、亦不可得なるが故に難すべからず」と。

復次に、一切法は依止する所無く、繫無きが故に知者無く、見者無く、種種の門もて、諸法を破して空ならしめ、或は常を破し、無常を行じて空に入り、或は實を破して空に入り、或は畢竟して盡くるが故に空に入り、或は一切法を遠離するが故に空に入り、是等の如くして空に入る。今一切法は住處無きを以ての故に、依止無く繫無し。依止無きが故に、亦生滅無し。是を以ての故に、即ち是れ空なり。【五】不繫とは、一切の法は實相にして繫ならず、三界を出づ。何とな

【五】 不繫の義解。  
【五】 第五問、色の不生なる理由如何。

れば、三界は虚誑なるが故なり。是を以て、一切法には、知者無く、見者無し。是の如くして世間の般若を示し、色等の諸法を見ざるが故に、世間の色等の法を示す。依止無く繫無く、虚誑なるが故に見ざるなり。此の中に佛は自ら見ざるの因縁を説きたまへり。所謂色を縁じて識を生ぜず、乃至一切種智を縁じて識を縁ぜず、是を色等の法を見ず名くと。

問うて曰く、【五】 識は不生なるべきも、色は云何が不生なるや。答へて曰く、惱壞の相は是れ色にして、識に因るが故に分別して知る。識無くんば亦惱壞の相も無し。

復次に、一切諸法は、因縁の和合に従るが故に相を生じ、自性有ること無し。身識有りて、諸縁の

和合に觸るるが故に、地の堅相なることを知る、堅相は身識を離れざるが如し。是の故に諸法は皆和合に由りて生じ、自性有ること無し。〔五〕般若波羅蜜〔多〕は世間の空を示すとは、世間には五衆、乃至一切種智に名く。菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行する時、是の法の、若くは大、若くは小、若くは大の空ならざる者無きを觀ず。是を般若波羅蜜〔多〕は、世間の空を示すと名く。〔重〕佛は世間の空を示すとは、

人有り疑ふらく、「佛は法を愛著するが故に、般若波羅蜜〔多〕は、世間の空を示すと説く。是は諸法の常實の相に非ず」と。是の故に佛説きたまはく、「我は法を愛するに非ざるが故に説く。佛は諸法の相を知り、本末を籌量し、思惟するに、法として空を出づる者有ること無し。我は但だ讀誦するのみに非ず。他より聞くが故に説く。我は内心を以て覺知し、思惟し分別するが故に、世間の空を説示す」と。此の一段に世間の空を説示するは上に廣く雜して六十二見等を説けり。今但五衆乃至一切種智を説く時、會者は般若波羅蜜〔多〕は、是れ畢竟空なりと謂つて心想もて取著す。是の故に不可思議と説く。不可思議とは、畢竟空も亦不可得なるなり。畢竟空は或は離と名け、或は寂滅離と名け、分散と名く、諸法は久しくして後遺餘無く、又自ら其の性を離る。畢竟空を知り已れば、心數法無く、語言無きが故に、寂滅畢竟空等と名くること、先に説くが如し。

問うて曰く、云何が是れ獨空なるや。答へて曰く、十八空は皆因縁相待す。内空は内法に因るが

【五】 智度は世間の相を示すの義解。

【五】 佛は世間の空を示すの義解。

【五】 第六問、云何が是れ獨空なるや。

【五】 第六問、云何が是れ獨空なるや。答へて曰く、十八空は皆因縁相待す。内空は内法に因るが

問うて曰く、云何が是れ獨空なるや。答へて曰く、十八空は皆因縁相待す。内空は内法に因るが

故に内空と名け、若し内法無ければ則ち内空無きが如く、十八空も皆爾なり。是の獨空は、因無く待無きが故に、獨空と名く。

復次に、獨空とは、「虚空如法性實際涅槃の如し。世間は今世の相に非ず、後世の相に非ず」と示すは、諸の外道有りて、但今世を説きて後世を説かず、是の人の邪見は斷滅の中に墮す。有人は説いて、今世後世とは、今世の神後世に入るなりと言ふ。是の人の邪見は常の中に墮す。般若波羅蜜(多)は二邊を離れて中道を説く。空なりと雖も、而も空に著せざるが故に爲めに、罪福を説き、罪福を説くと雖も、常に邪見を生ぜず。亦空に於いて礙無し。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「此の中に畢竟空なるが故に、云何が今世後世有りて、若くは斷、若くは常を見んや」と。

釋

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、(一〇)是の般若波羅蜜(多)は大事の爲の故に起る。世尊よ、(一一)不可思議の事の爲の故に起る。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は不可稱の事の爲に起る。世尊よ、(一二)量(一三)の事の爲の故に起る。世尊よ、(一四)是の般若波羅蜜(多)は無等等の事の爲の故に起る」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、般若波羅蜜(多)は大事の爲の故に起り、不可思議の事の爲の故に起り、不可稱の事の爲の故に起り、無量の

- 【五】 斷見外道の例。
- 【五】 常見外道の例。
- 【五】 智度は中道なり。
- 【六〇】 般若は大事の爲めの故に起る。
- 【六一】 般若は不可思議の事の爲の故に起る。
- 【六二】 般若は無量の事の爲の故に起る。
- 【六三】 般若は無等等の事の爲の故に起る。

事の爲の故に起り、無等等の事の爲の故に起る。須菩提よ、云何が是の般若波羅蜜(多)は大事の爲の故に起るや。須菩提よ諸佛の大事とは、所謂一切衆生を救ひ、一切衆生を捨てざるなり。須菩提よ、云何が是の般若波羅蜜(多)は不可思議の事の爲に起るや。須菩提よ、不可思議とは、所謂諸佛の法如來の法、自然人の法、一切智人の法なり。是を以ての故に、須菩提よ、諸佛の般若波羅蜜(多)は不可思議の事の爲に起る。須菩提よ、云何が般若波羅蜜(多)は不可稱の事の爲に起るや。須菩提よ、一切衆生の中には、能く佛法・如來法・自然法・一切智人の法を思量すること有ること無し。是を以ての故に、

須菩提よ、般若波羅蜜(多)は不可稱の事の爲に起る。須菩提よ、云何が般若波羅蜜(多)は無量の事の爲に起るや。須菩提よ、一切衆生の中には、能く佛法・如來法・自然法・一切智人の法を量ること有ること無し。是を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は量るべからざる事の爲に起る。須菩提よ、云何が般若波羅蜜(多)は無等等の事の爲に起るや。須菩提よ、一切衆生の中には、能く佛と等しき者あること無し。何を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は無

等等の事の爲に起る」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、但だ佛法・如來法・自然法、一切智人の法にのみ不可思議、不可稱・無量・無等等の事起るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。佛法・如來法・自然法、一切智人の法は不可思議にして稱るべからず、量有ること無く、等等なきなり。色も亦不可思議にして、稱るべからず、量有ること無く、等等無し。受想行識も亦不可思議にして、稱るべからず、量有ること無く、等等なし。乃至一切種智・法性・法相も不可思議にして、稱るべからず、量無く、等等なし。是の中に心心數法は不可得なり。

復次に、須菩提よ、色の不可思議は是れ亦不可得なり。乃至色の無等等は是れ亦不可得なり。受想行識乃至一切種智の無等等は是れ亦不可得なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁もて、色の不可思議乃至無等等は是れ亦不可得、受想行識乃至一切種智の無等等は是れ亦不可得なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色の量は不可得なるが故に、

受想行識乃至一切種智の無等等は是れ亦不可得なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色の量は不可得なるが故に、

受想行識乃至一切種智の無等等は是れ亦不可得なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色の量は不可得なるが故に、

受想行識の量は不可得なるが故に、乃至一切種智の量は不可得なるが故なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁もてか、色の量は不可得乃至一切種智の量は不可得なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色は不可思議なるが故に、乃至色は無等等なるが故に量は不可得なり。乃至一切種智は無等等なるが故に、量は不可得なり。須菩提よ、汝が意に於いて云何、不可思議乃至無等等は寧ろ得べきや不や、色受想行識乃至一切種智は得べきや不や」と。須菩提言さく、「世尊よ、不可得たり」と。「是を以ての故に須菩提よ、一切法は不可思議、乃至無等等なり。是の如く、須菩提よ、諸佛の法は不可思議にして、稱るべからず、量あると無く、等等無きなり。須菩提よ、是を諸佛の法は不可思議乃至無等等なりと名く。須菩提よ、是の諸佛の法は不可思議なり。思議の想に過ぐるが故なり、稱るべからず、稱るに過ぐるが故なり。量有ること無し、量に過ぐるが故なり。無等等なり、等等に過ぐるが故なり。須菩提よ、是の因縁を以ての故に一切法も亦不可思議相、乃至無等等なり。須菩提よ、不可思議は、是の義不可思議なるに名け、稱るべからざるは、是の義稱るべからざるに名け、量有ること無きは、是の義量るべからざるに名け、無等等は、是の義無等等なるに名く。須菩提よ、是の諸佛の法は不可思議、乃至無等等なり。不可思議なることは、虚空の不可思議なるが如く、稱るべからざるは、虚空の稱るべからざるが如く、量有ること無きは、虚空の量有ること無きが如く、無等等なることは、虚空の無等等なるが如し。須菩提よ、是を亦諸佛の法は、不可思議乃至無等等なりと名く。佛法は是の如く無量なれば一切の世間天人阿修羅の能く思議し籌量する者無し。是の諸佛の法の不可思議不可稱無有量無等等品を説く時、五百の比丘は、一切法を受けざるが故に、漏盡き、心解脱して、阿羅漢を得、二十の比丘も、亦一切法を受けざるが故に、漏盡き、阿羅漢を得、六萬の優婆塞と、三萬の優婆夷とは、諸法の中に塵を違かり、拵を離れて、諸法の中に法眼を生じ、二十の菩薩摩訶薩は、無生法忍を得て、是の賢劫の中に於いて當に記を受くべし」と。

釋して曰はく、須菩提は深く般若の相を解し、諸法の中に於いて、著無く、礙無く、心に歡喜

を生じ、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は大事の爲の故に起る等」と。(六四) 大事とは、一

切衆生の大苦惱を破して、能く佛の無上大法を與ふ。故に名けて大事と爲す。不可思議は先に已に答

へたり。(六五) 不可稱とは、稱は智慧に名く。般若の定實の相は、甚深極重なるに、智慧は輕薄なり。是

の故に稱ること能はず。又般若は多く、智慧は少きが故に、稱ること能はず。又般若は利益の處廣

く、未だ成せざるも、能く世間の果報を與へ、成じ已れば道の果報を與

へ、又究竟して知るが故に、名けて般若波羅蜜(多)を稱ると名く。能く若

くは常、若くは無常、若くは實、若くは虛、若くは有、若くは無を稱り知

ること無し。是等の如く、不可稱の義應當に知るべし。(六六) 無量の事とは、

有人の言く、「稱は即ち是れ量なり」と。有人の言く、「相を取るを名けて

量と爲す」と。是の般若波羅蜜(多)は相を取るべからざるが故に無量なり。又菩薩は四無量心を以て、

般若を行ずるが故に無量と名く。又量は智慧に名く。凡夫の智慧・二乗の智慧・菩薩の智慧は能く般若

を量りて邊を得る者無きを無量と名く。(六七) 無等等とは、無等を涅槃に名く。一切の有爲法は涅槃と等

しき者有ること無し。(六八) 涅槃に三分有り。聲聞の涅槃、辟支佛の涅槃、佛の涅槃なり。般若は能く大

乗の涅槃を與ふるが故に無等等と名く。

【六六】 大事の義解。

【六五】 不可稱の義解。

【六四】 無量事の義解。

【六三】 無等等の義解。

【六二】 三種の涅槃。

復次に、一切衆生は、佛と等しきこと無きが故に、佛を無等と名け、般若波羅蜜〔多〕は、衆生を利益して、佛と相似ならしむるが故に、無等等と名く。

復次に、諸佛の法は、第一微妙にして、能く〔是れと〕等しきもの無く、能く及ぶ者無く、此を爲すべきもの無く、般若波羅蜜〔多〕は、能く衆生をして是の心を得せしむるが故に、無等等と名く。

復次に、無等とは、諸法實相に名く。諸觀諸行の能く及ぶ者無く、戲論無く、能く破壞すること無きが故に、無等と名く。菩薩は是の無等を得て、能く衆生の中に於いて、慈悲心を生ずるが故に、

無等等と名く。是を無等等の義と名く。須菩提は聲聞人にして一切智無く、而も能く是の不可思議の般若等を説き、佛は其所説を可としたまへり。佛

は自ら五事を説きたまふ。衆生は無量無邊にして多し。十方恆河沙等の世界の中に於ける微塵の諸佛は、十方等の法を以て盡く救濟せんと欲したまふ。是を大事と名く。復た

菩薩あり、久しく無生法忍を得て、衆生を捨てざるが故に、無餘涅槃に入らず。

復次に、是の菩薩は佛道を得る時、衆生の爲の故に五事を受く。一には諸の勞苦を受け、二には寂定の樂を捨て、三には惡人と事を共にし、四には人と接對し、五には大衆會に入る。佛は深く離

欲の樂を得、而して衆生の爲の故に、甘んじて是の五事等の種種の疲苦を受くること、功德を受くるが如し。是を大事と爲す。不可思議とは、所謂る、佛法・如來法・自然入法・一切智入法なり。佛法と

【六】 諸の菩薩は衆生の爲に五事を受く。

【七】 佛陀の義解。

は、佛を名けて覺と爲し、一切の無明の睡眠中に於いて、最初に覺するが故に。名けて覺と爲す。  
 (七二) 如來とは、過去の諸佛の六波羅蜜(多)を行じ、諸法の如相を得て、佛道に來至するが如し。今佛も亦是の如く、道に來ること諸佛の來るが如し。是を如來と名く。自然人の法とは、聲聞人も亦覺有り、亦如有り。而も他より聞く。是れ弟子の法なり。是の故に、佛は自然人にして、他より聞かずと説く。(七三) 一切智人の法とは、辟支佛も亦自然に得て、他より聞かず、而も一切智無し。是の故に佛を一切智人と説く。是の四種の法は、人の能く思惟し、稱量すること有ること無し。是の故に、不可思議不可稱無量なりと名く。更に法ありて、是の法と相似する者無し。

【七二】 如來の義解。  
 【七三】 自然人の義解。  
 【七四】 一切智人の義解。

是の故に無等等と名く。  
 須菩提は意に新學の菩薩の是の四法に著せんことを恐れ、是の故に佛に白して言さく、「但是の四法のみ不可思議にして(是と)等しきもの有ること無きや」と。佛答へたまはく、「色等の諸法も亦不可思議にして稱無く量無く無等等なり」と。佛は自ら是の中に因縁を説きたまはく、「色等の一切法は、不可得なるが故に是の如し」と。須菩提よ、諸佛の法は不可思議なりとは、是れ上の事の如し。是を不可思議と名くとは結句なり。論者は先に廣く解せり。佛は此の中に略して説きたまへり。不可思議とは、思議の相に過ぎ、等等相の義趣に過ぎたるなり。涅槃の法は不可思議なれども、名字世諦の故に思議すべし。虚空の如く不可思議なりとは、先の品の中に説くが如し。虚

空の相は不可思議なり、是の故に不可思議なりと説く。乃至無等等なること虚空の如しとは、虚空は  
喩ふべきもの無きが故に、無等等と名く。般若波羅蜜(多)の相は、即ち是れ佛法の相なり。不可思議  
にして、量無く、稱無く、無等等なるは、即ち是れ佛法の相なり。是の佛法を一切の世間天人阿修  
羅は、能く思議稱量する者無し。六道の中に但だ三道を説くは、三善道の衆生すら尙稱量すること  
能はず。何に況んや三惡道をや。

問うて曰く、(西) 是の品を説く時、何を以ての故に、比丘尼菩薩の道を得し者少きや。答へて曰く、  
此の中に、多く諸佛の法の所謂不可思議にして、稱無く、量無く、無等等なることを讚歎するに、  
此の者は、多く信根を増益するが故に、是の故に白衣の道を得る者多し。女  
人は復信多しと雖も、智慧少きが故に、道を得る者も亦少し。白衣は、世事  
に貪著し、智慧淺薄鈍根なれば、漏を盡くすこと能はず。諸の比丘は、智慧諸根等しくして、一心に  
道を求むるが故に、漏を盡くす者多し。比丘尼は智慧少きが故に、二十人漏を盡くすことを得るが故  
に、白衣に異ならず。此の中に無生忍法に入ることを説かず。甚深にして得難きが故に少し。又此の  
法に於いて因縁を種うる者少きを以てなり。賢劫の中に當に記を受くべき者は、或は有人の言く、  
「賢劫の中の千佛は、四佛を除きて、當に授記を興ふべし」と。或は有人の言く、「釋迦文佛は授記を  
興へ、賢劫の中に於いて、餘の世界に在りて作佛す」と。

【西】第七問、比丘尼及び菩薩の道を得る者少き理由如何。

卷の第七十一

大事起品第五十を釋す。



爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)は大事の爲の故に起り、不可思議の事の故に起り、不可稱の事の故に起り、量有ること無きが故に起る。世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)は無等等の事の故に起る」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。深般若波羅蜜(多)は、大事の爲の故に起り、乃至無等等の事の故に起る。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には、五波羅蜜(多)を containment し、般若波羅蜜(多)の中には、内空、乃至無法有法空を containment し、四念處、乃至八聖道分を containment し、是の深般若波羅蜜(多)の中には、佛の十力、乃至一切種智を containment す。譬へば、灌頂せる王は國土中の尊にして。諸の官事あるも、皆大臣に委せ、國王は安樂無事なるが如し。

是の如く、須菩提よ、所有る聲聞辟支佛の法、若くは菩薩法、若くは佛法は、一切皆般若波羅蜜(多)の中に在り、般若波羅蜜(多)は能く其の事を成辦す。是を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)は大事の爲の故に起り、乃至無等等の事の故に起る。

復次に、須菩提よ、(二)是の般若波羅蜜(多)は色を取らず、色に著せざるが故に能く成辦し、受想行識を取らず、著せざるが故に能く成辦し、乃至一切種智を取らず、著せざるが故に能く成辦し、須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、乃至阿耨多

【一】 前品に説く所の般若甚深の因縁を以て、大事乃至無等等の爲なりとする旨を重説し讚歎す。異本には、大事起成辦品といひ、或は成辦品といふ。

【二】 不取不著の故に containment し成辦するを明す。初めて染するを取といひ、續いて愛を生ずるを著といふ。

羅三藐三菩提を取らず、著せざるが故に能く成辦す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「云何が色を取らず著せざるが故に、般若波羅蜜(多)は能く成辦す、云何が受想行議、乃至阿耨多羅三藐三菩提を取らず、著せざるが故に、般若波羅蜜(多)は能く成辦するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、是の色を取るべく、著すべきを見るや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。

須菩提よ、汝が意に於いて云何。頗る受想行議、乃至阿耨多羅三藐三菩提の取るべく、著すべきを見るや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。

善提言さく、「不なり、世尊よ」と。佛の言く、「善い哉、善い哉、須菩提よ、我も亦是

の色を取るべく、著すべきを見ず、見ざるが故に取らず、取らざるが故に著せず。我も

亦受想行議、乃至阿耨多羅三藐三菩提、及び一切種智の取るべく、著すべきを見ず。見

ざるが故に取らず、取らざるが故に著せず。須菩提よ、我も亦佛の法、如來の法、自然

人の法、一切智人の法の取るべく、著すべきを見ず、見ざるが故に取らず、取らざるが

故に著せず。是を以ての故に須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩は、色をも亦取るべからず、亦

著すべからず。受想行議、乃至佛の法、如來の法、自然人の法、一切智人の法をも亦

取るべからず、亦著すべからず」と。

爾の時に、(四) 欲(界)、色界の諸の天子、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は、甚深にして、見難く解し

難く、思惟し比類して知るべからず。微妙善巧の智慧もて、寂滅なる者は知るべし、能く是の般若波羅蜜(多)を信す。當に

知るべし、是の菩薩は多く佛を供養したてまつり、多く善根を種ふ、善知識と相隨ひ、能く深般若波羅蜜(多)を信解すと。

世尊よ、若し三千大千世界中の、所有る衆生、皆信行法行の人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の、若く

著すべきを見るや不や」と。須

【三】 此の説明法を四答中の反

問答といふ。

【四】 諸天子、般若及び行者を

讚歎す。

【五】 信行法行。信行は法行に

對するの術語なり。自ら聖法

に依つて行するを法行と云

ひ、他の教を信じて行するを

信行と云ふ。

は智、若くは斷を作さんには、是の菩薩の一日、深般若波羅蜜(多)を行じ、忍欲し、思惟し、籌量せんに如かず。何となれば、是の信行、法行の人、八人、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛の、若くは智、若くは斷は、即ち是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なればなり」と。

佛、欲(界)色界の諸天子に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸天子よ、若し信行、法行の人、八人、須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛は、即ち是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なり。諸天子よ、若し善男子善女人は、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、書し、受持し、讀誦し、説き、正憶念せば、是の善男子善女人は、疾かに涅槃を得ること、聲聞辟支佛乘を求むる善男子善女人の、深般若波羅蜜(多)を遠離して、餘經を行すること、若くは一劫、若くは減一劫なるに勝れたり。何となれば、是の深般若波羅蜜(多)の中には、廣く上妙の法を説き、是の信行、法行の人、八人、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛の學すべき所、菩薩摩訶薩も亦學すべき所にして、學し已りて阿耨多羅三藐三菩提を得」と。是の時、欲(界)色界の諸天子は、俱に聲を發して言く、「世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)を摩訶波羅蜜(多)と名く。世尊よ、是の般若波羅蜜(多)をば不可思議にして、稱るべからず、量あること無く、無等等なる波羅蜜(多)と名く。信行、法行の人、八人は、是の深般若波羅蜜(多)を學して、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛を成就することを得、是の深般若波羅蜜(多)を學して、菩薩摩訶薩を成就することを得、是の深般若波羅蜜(多)の中より學して、阿耨多羅三藐三菩提を得、是の深般若波羅蜜(多)は亦増さず、亦減ぜず」と。

是の時、諸の欲(界)色界の天子は、佛の足を頂禮し、佛を遶りて而して去り、是を去ること遠からずして、忽然として現ぜず、各本處に還れり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の般若波羅蜜(多)を聞き、即時に信解する者は、何處より終りて、是の間に來り生するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、即時に信解し、沒せず、怯まず、疑はず、悔いず、歡喜し、樂んで聽き、聽き已りて憶念し、終に

〔多〕を聞いて、即時に信解し、沒せず、怯まず、疑はず、悔いず、歡喜し、樂んで聽き、聽き已りて憶念し、終に

是の深般若波羅蜜(多)を遠離せず、若くは行じ、若くは住し、若くは坐し、若くは臥するも、終に廢忘せず、常に法師に隨ふ。譬へば、新に生ぜる犢子の其の母を離れざるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、深般若波羅蜜(多)を聞かんが爲の故に、終に法師を遠離せず、乃至是の深般若波羅蜜(多)を得て、口に誦し、心に解し、正見に通達せん。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩は人道の中より終りて、還つて是の間の人中に生ず。何となれば、是の佛道を求むる者は、前世の時、深般若波羅蜜(多)を聞き、書し、受け、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至罍蓋を供養す。是の因縁を以ての故に、人中に命終し、還た人中に生じ、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて即時に信解す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、頗し菩薩摩訶薩有り、是の如き功德を成就し、他方世界に諸佛を供養し、彼に於いて命終して、是の間に來生し、深般若波羅蜜(多)を聞いて、即時に信解し、書持し、讀誦し、正憶念す。是の者有りや不や」と。佛の言はく、「有る菩薩は是の如き功德を成就し、他方世界に諸佛を供養し、彼に於て命終して、是の間に來生し、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、即時に信解し、書持し、讀誦し、正憶念す。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、他方の諸佛の所より、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、信解し、書持し、讀誦し、説き、正憶念し、彼の間に終りて、此の間に來生すればなり。當に知るべし、是の人は是れ先世に功德を成就することなむ。

復次に、須菩提よ、有る菩薩は、彌勒菩薩摩訶薩より、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、是の善根の因縁を以つての故に、此の間に來生す。須菩提よ、復た有る菩薩摩訶薩は、前世の時、深般若波羅蜜(多)を聞くと雖も、中事を問はず。人中に來生して、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、心に疑悔ありて悟り難し。須菩提よ、是の如き菩薩は、當に知るべし、先世に是の深般若波羅蜜(多)を聞くと雖も、問はざるが故に、今續生に疑悔して悟り難きことを。須菩提よ、若し菩薩は、先世に禪(那)波羅蜜(多)を聞くと雖も、中事を問はざれば、今世に般若波羅蜜(多)を聞く時、問はざるが故に、續生に疑悔す。須菩提よ、

若し善薩は、先世に毗梨耶波羅蜜(多)を聞くとも雖も、中事を問はず。今世に般若波羅蜜(多)を聞いて、問はざるが故に、續いて復た疑悔す。須菩提よ、若し善薩は、先世に尸羅提波羅蜜(多)を聞くとも雖も、中事を問はず、今世に般若波羅蜜(多)を聞いて、問はざるが故に、續いて復た疑悔す。須菩提よ、若し善薩は、先世に尸羅波羅蜜(多)を聞くとも雖も、中事を問はず、今世に般若波羅蜜(多)を聞いて、問はざるが故に、續いて復た疑悔す。須菩提よ、若し善薩は、先世に檀(那)波羅蜜(多)を聞くとも雖も、中事を問はず、今世に般若波羅蜜(多)を聞いて、問はざるが故に、續いて復た疑悔す。

復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、先世に内空・外空・内外空・乃至無法有法空を聞くとも雖も、中事を問はず、人中に來生して、是の深般若波羅蜜(多)を聞くも、問はざるが故に、續いて復た疑悔して悟り難し。

復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、先世に、四念處、乃至八聖道分、四禪、四無量心、四無色定、五神通、佛の十力、乃至一切種智を聞くとも雖も、中事を問はず、人中に來生して、是の深般若波羅蜜(多)を聞くも、問はざるが故に、續いて復た疑悔して悟り難し。

復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、先世に深般若波羅蜜(多)を聞き、中事を問ふも、而も行はず、身を捨てて生ずる時、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、若くは一日・二日・三日・四日・五日は、其の心堅固にして、能く壞する者無きも、若し聞く所を離るる時は、便ち退失す。何となれば、先世に是の般若波羅蜜(多)を聞く時、中事を問ふとも雖も、説の如く行ぜざればなり。是の人ば或時は聞かんと欲し、或時は聞くことを欲せず、心輕く固からず、志亂れて定まらざるなり。譬へば輕毛の風に隨つて東西するが如し。須菩提よ、當に知るべし、是の善薩は、意を發すること久しからず、善知識と相隨はず、多く諸佛を供養せず、先世に是の深般若波羅蜜(多)を書せず、讀まず、誦せず、正憶念せず、般若波羅蜜(多)を學せず、禪(那)波羅蜜(多)を學せず、毗梨耶波羅蜜(多)を學せず、尸羅波羅蜜(多)を學せず、檀(那)波羅蜜(多)を學せず、

學せず、乃至無法有法空を學せず、四念處、乃至八聖道分を學せず、四禪、四無量心、五神通、佛の十力を學せず、乃至一切種智を學せざるなり。是の如く、須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、新に大乘の意を發し、信少く樂少き故に、是の深般若波羅蜜(多)を書せざる能はず、受持し、讀誦し、説き、正憶念すること能はざることを。

須菩提よ、若し佛道を求むる善男子善女人は、是の深般若波羅蜜(多)を書せず、受持讀誦せず、正憶念せざるも、亦た深般若波羅蜜(多)の爲に護られず、乃至一切種智の爲に護られず。是の人も亦説の如く、深般若波羅蜜(多)を行ぜず、乃至説の如く、一切種智を行ぜず。是の人は或は二地、若くは聲聞地、若くは辟支佛地に墮す。何となれば、是の善男子善女人は、是の深般若波羅蜜(多)を書せず、讀まず、誦せず、説かず、正憶念せざればなり。是の人も亦た深般若波羅蜜(多)の爲に護られず、亦説の如く行ぜず。是を以ての故に、是の善男子善女人は、二地の中に於いて、當に一地に墮すべし。

論

問うて曰く、上來數數是の般若波羅蜜(多)の甚深の因縁を説けり、

今何を以てか復た重ねて説くや。答へて曰く、處處に甚深なることを説けば、多く利益する所有るも、凡夫の人は知らずして、謂つて重ねて説くと爲す。譬へば、大國王の未だ嫡子有らず、求めて神祇に禱り、年を積むも應(驗)無し、時に王出行するに夫人男子を産するが如し。信を遣はして王に告ぐ、「大夫人は男を産せり」と。王は聞き喜んで、而も答へず。乃ち十反に到る。使者、王に白すらく、「向に白す所を王は聞かざるや」と。王の曰く、「我は即ち之を聞けり。久しきより來た、願を滿すが故に、喜心内に悦び、樂み聞きて已まざるのみ」と。即ち有司に勅して此の人に百萬兩金を賜

【六】 第一問、已に數數智度の甚深の因縁を説き、今復た重ねて説くは何故なるか。

ふ。一語にして十萬兩なり。王は使者の言を聞き、言語の中に利益あり。重ねて説かず。知らざる者は謂つて重ぬと爲す。處處に甚深を説くも、亦是の如し。佛は菩薩、須菩提と大に利益あることを知りたまふ。須菩提は佛の深般若を説きたまふを聞いて底を得ること能はず、轉た甚深なることを覺す。聽者は處處に甚深を聞いて、禪定・智慧・利益等を得るを、凡夫の人は謂つて重ねて説くと爲す。

復次に、深淺は定まり無く衆生に隨ふ。解する者は深きこと無く、解せざる者は謂つて深しと爲す。般若波羅蜜(多)は佛を除きて能く遍ねく知るもの無きが故に、常に甚深と言ふ。是の故に、佛は衆生の爲の故に、甚深に定んで甚深の相無しと説きたまへり。若し定んで甚深ならば、人の能く行するもの無し。是の故に言ひ、「菩薩は般若を甚深なりと謂つて、爲に般若波羅蜜(多)の甚深の因縁を行せず」と。「甚深の因縁とは」、所謂、大事の爲に故に起り、乃至無等等の事の故に起る。大事等の義は先に説くが如し。此の中に、佛自ら大事等の因縁を説きたまへり。所謂般若波羅蜜(多)は五波羅蜜(多)等の諸法を containment 受す。

問うて曰く、五波羅蜜(多)等は、各相を異にす。云何が般若波羅蜜(多)の中に containment 受すと云ふや。答へて曰く、是の中の説は經卷の中に containment 受す。

復次に、五波羅蜜(多)等の諸法は、般若波羅蜜(多)と和合し、方便もて廻向するが故に、五波羅蜜

【七】 第二問、五波羅蜜多は各相を異にす、今それ智度の中に五度を containment 受すといふ理由如何。

〔多〕等の諸法は、佛道に至ることを得。灌頂王は佛の如く、國事は種種に衆生を度するの法にして、大臣は是れ般若波羅蜜〔多〕なり。佛は般若波羅蜜〔多〕に委仗して、種種の法を成辦したまふが故に、禪定に安處し、快樂無事なり。又乾ける薪草木を除かんと欲し、火を以て中に投ずれば、則ち火力能く燒きて盡くさしめ、人便ち無事なるが如し。

復次に、是の般若波羅蜜〔多〕は、色等の諸法を取らず、著せざるが故に含受すと名く。初に染むるを取ると曰ひ、愛を生ずるを著すと曰ふ。須菩提問ふ、「云何が般若は色等の諸法を取らず、著せざるが爲の故に含受と名くるや」と。佛四答の中に於いて、反問を以て答へ

たまはく、「汝が意に於いて云何、智慧の眼を以て、是の色等の法の取るべく著すべきを見るや不や」と。須菩提意に念ずらく、「若し智慧の眼は

空無相・無作・無量・不可思議の相を見る。云何が當に色等の法の定相の取るべく著すべきを見るべけんや」と。佛は其の所説を可とし、「汝、未だ一切智を得ずして、色等の諸法を見ず、我は一切智人なるも、亦色等の諸法を見ず」と宣ふ。是の故に歎じて言く、「善哉」と。是の時、諸の天子は、般若波羅蜜〔多〕、及び般若波羅蜜〔多〕を行する者を讚歎して、是の言を作す、「若し三千大千世界の中の衆生は、皆信行法行乃至辟支佛、若くは智、若くは斷と作る」と。智とは、十智、斷とは、二種の斷にて、殘有る斷と、殘無き斷なり。〔有〕學の人は殘有る斷にして、無學の人は殘無き斷なり。是れ菩薩

【八】灌頂せる王は佛、大臣は般若波羅蜜多、國事は度生の法に喩ふ。

の一日、深般若波羅蜜(多)を行するに如かず。何となれば、是の諸の賢聖の智斷は、皆是れ菩薩の無  
生法忍なればなり。

問うて曰く、若し諸の賢聖の智と斷とは、即ち是れ無生法忍ならば、何を以てか如かずと言ふ  
や。答へて曰く、信行等の人は大悲無く、衆生を捨つるが故に如かず。方  
便力無くして、涅槃に於いて、自ら反ること能はず。譬へば、衆水恆河に  
會して、俱に大海に入るに、海に入らんと欲する時、水勢湊り急にして、  
衆生は中に在りて、能く自ら反ること無く、唯大力有る者のみ、乃ち能く  
自ら出づるが如し。

復次に、諸餘の賢聖の智斷を成就するに、菩薩は始めて無生法忍を  
得て、而も力能く之に過ぐ。是の故に勝れたり。智斷の功德は成就すと雖  
も、菩薩の初忍に及ばず。譬へば、大臣は功業大なりと雖も、太子に及ば  
ざるが如し。

復次に、煖頂忍法は、是れ小乗の初門にして、菩薩の法忍は、是れ大乘の初門なり。  
聲聞辟支佛は、終に成すと雖も、尙ほ菩薩の初入の道門に及ばず。何に況んや、佛を成ずるをや。

問うて曰く、(一)聲聞辟支佛の法は、是れ小乗、菩薩は是れ大乘なり。云何が二乗の智斷は、是れ菩

【九】 第三問、諸の賢聖の智と斷とは無生法忍ならば、何故に如かずといふか。  
【一〇】 智斷とは、智徳及び斷徳の謂なり。眞理を照了せるを智徳と云ひ、煩惱を斷盡するを斷徳と云ふ。換言せば菩提及び涅槃の事なり。  
【一一】 第四問、二乗の智斷を菩薩の無生法忍なりといふ理由如何。

薩の無生法忍なりと言ふや。答へて曰く、所縁同じく、如法性實際も亦同じく、利鈍の智慧を異と爲す。又無量の功德、及び大悲心有りて、守護するが故に、餘の種種の説に勝る。是の般若波羅蜜〔多〕を讀じ、般若波羅蜜〔多〕を行ずる人に上中下あり。下は般若波羅蜜〔多〕を聞いて直に信じ、聽受して中の義を問はず。中は既に聞き、已に義を問ふも、而も行ずること能はず。上は聞いて解し、能く行ず。下は人身を得て般若を聞くと雖も疑悔して悟り難し。〔そは〕根鈍に福薄きが故なり。中は人身を得て般若を聞き、一心に信樂して能く義趣を知り、一日より、四五日に至るまで、心能く堅固なるも、是を過ぎて已往は、信樂すること能はず、或は聞かんと欲し、或は聞くことを欲せず。是れ宿世に義を解すと雖も行ずると能はず、〔そは〕根鈍にして福薄きを以ての故なり。上は人身を得て般若を聞き、心に即ち深く解し、信樂して捨てず。常に法師に隨ふ。

上の二種の菩薩は、上地を得ること能はざるが故に、當に二乘に墮すべし。般若の爲に守護せられざるが故なり。更に是の事を明了に爲さんが故に、佛は後品の中に於て爲に譬喩を作したまはく、大海の水中の船破し、若し所依を得れば則ち能く渡り、所依を得ざれば、則ち渡ること能はざるが如しと。

譬喩品第五十一を釋す。

【三】 智度を行ずる人に上中下の三種あり。

【三】 此の品には、譬喩を以て、前品に説く所の中下人は般若に護られずして退轉する旨を明し、般若の護持を要するを説く。

經

佛、須菩提に告げたまはく、(二四)譬へば、大海の中にて船破壞し、其の中の人、若し木を取らず、死屍を取らざるが如くんば、須菩提よ、當に知るべし、是の人は彼岸に到らずして、海中に没し死することを。須菩提よ、若し船破する時、其の中の人木を取り、器物・浮囊、死屍を取らば、當に知るべし、是の人は終に没して死せず、安穩にして礙無く、彼岸に到ることを得ることを。須菩提よ、佛道を求むる善男子善女人も、亦復是の如く、若し但だ信樂のみ有りて、深般若波羅蜜(多)に依らず、書せず、讀まず、誦せず、正憶念せず、禪波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・廣提波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・檀波羅蜜(多)に依らず、書せず、讀まず、誦せず、正憶念せず、乃至、一切種智に依らず、書せず、讀まず、誦せず、正憶念せずんば、當に知るべし、是の善男子は、中道に衰耗し、是の人は、未だ一切種智に到らず、聲聞辟支佛地に於いて證を取ることを。須菩提よ、若し佛道を求むる善男子善女人有り、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に信有り、忍有り、淨心有り、深心有り、欲有り、解有り、捨有り、精進有り。是の人は深般若波羅蜜(多)に依り、書持し、讀誦し、説き、正憶念し、是の善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、諸の信・忍・淨心・深心・欲・解・捨・精進有り。深般若波羅蜜(多)の爲に護られ、乃至一切種智に護られ、深般若波羅蜜(多)の所護の爲の故に、乃至一切種智の所護の故に、終に中道に衰耗せず、聲聞辟支佛地を過ぎて、能く佛世界を淨め、衆生を成就して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提よ、譬へば、如し男子女人、(三五)坏瓶を持して、水を取らば、當に知るべし、是の瓶は久しからずして爛壞すること。何となれば、是の瓶は未だ熟せざるが故に地に還歸すべければなり。是の如く、須菩提よ、善男子善女人あり、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、信有り、忍有り、淨心有り、深心有り、欲有り、解有り、捨有り、精進有り、と雖も、般若波

【四】 船難破する時、人もし浮囊等を取らずんば、則ち死すべく、般若の方便なくんば、則ち二乗の地に墮せん。

【五】 坏瓶とは、火にかけざる土器をいふ。菩薩道に喩ふ。火は般若方便なり、水は六度の功德に譬ふ。

羅蜜(多)の方便力の守護する所と爲らず、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、屠提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀(那)波羅蜜(多)の守護する所と爲らず。内空、乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道、佛の十力、乃至一切種智の守護する所と爲らず。須菩提よ、當に知るべし、是の人は中道にして衰耗し、聲聞辟支佛地に墮す。須菩提よ、譬へば男子女人の(二六)熱瓶を持して、水を、若くは河、若くは井、若くは池、若くは泉に取るが如し、當に知るべし、是の瓶は、水を持すること安穩なるを。何となれば、是の瓶は成熟するが故なり。是の如く、須菩提よ、善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提を求め、諸の信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有れば、般若波羅蜜(多)の方便力の守護する所となる。禪・定・精進・忍・戒・施、乃至一切種智の守護する所と爲るが故に、須菩提よ、當に知るべし、是の人は中道にして衰耗せず、聲聞辟支佛地を過ぎて、能く佛世界の淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得ることを。須菩提よ、譬へば、大海の邊の船未だ莊治せず、便ち財物を持して、上に著くるが如し。須菩提よ、當に知るべし、是の船は中道にして壞没し、人船財物各一處に在り、是の賈客、方便力無きが故に、其の重寶を亡ふことを。是の如く、須菩提よ、是の佛道を求むる善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする心有り、信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進ありと雖も、般若波羅蜜(多)の方便力の爲に守護せられず。乃至一切種智の爲に守護せられざるが故に、當に知るべし、是の人は中道にして衰耗して、大珍寶を失する。ことを。大珍寶とは、所謂一切種智なり。衰耗とは、聲聞辟支佛地に墮するなり。須菩提よ、譬へば、人智あり、方便して海邊に大船を莊治し、然る後水中に推著して、財物を持して上に著け、船に上りて去るが如し。當に知るべし、是の船は中道にして沒壞せず、必ず安穩に所至の處に到ることを得ん。是の如く、須菩提よ、善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有り、般若波羅蜜(多)の方便力の守護する所と爲り、禪(那)精進、忍辱、戒、施、乃至一切種智の守護する所と爲るが故

【二六】熱瓶とは、火にかけたる陶器なり、淨菩薩道に喩ふ。

に、當に知るべし、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に到ることを得て、中道にして聲聞辟支佛地に墮せざることを。須菩提よ、譬へば人有り、年百二十歳、年若い、根熟して、又風冷・熱病・若くは雜病有るが如し。須菩提よ、汝が意に於いて云何。是の人は能く牀より起つや不や」と。須菩提言さく、「能はず」と。佛の言はく、「是の人は、或は能く起つ者有りや云何」と。須菩提言さく、「是の人は能く起つと雖も、遠く行くこと、若くは十里、若くは二十里なること能はず。其の老病を以ての故なり」と。是の如く、須菩提よ、善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする心有り、信・忍・淨心・深心・欲・捨・精進ありと雖も、般若波羅蜜(多)の方便力の守護する所とならず、乃至一切種智の守護する所と爲らざるが故に、當に知るべし、是の人は、中道にして聲聞辟支佛地に墮することな。何となれば、般若波羅蜜(多)の方便力の守護する所と爲らざればなり。須菩提よ、向の老人の、百二十歳、年若い根熟し、又風冷・熱病・若くは雜病有るが如し。是の人は、起つて行かんと欲するに、兩の健人有り、各一腋を扶け、老人に語りて言く、「難かる所有ること莫れ、欲する所に隨つて至らん、我等二人は終に相捨てず」と。是の如く、須菩提よ、若し善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、信・忍・淨心・深心・欲・捨・精進有らば、般若波羅蜜(多)の方便力の守護する所と爲り、乃至一切種智の護る所と爲る。當に知るべし、是の人は、中道にして、聲聞辟支佛地に墮せず、能く是の處、所謂、阿耨多羅三藐三菩提に到ることな」と。

論

【三七】 菩薩に二種有り。

一には諸法實相を得、二には未だ實相を得ずと雖も、佛道の中に於いて、信あり、忍あり、淨心あり、深心あり、欲あり、解あり、捨あり、精進あり。二八(八) 信とは、罪(業)、福業の因縁、果報を信じ、六波羅蜜(多)を信行し、阿耨多羅三藐三菩提を得。有人は佛道を信せずと雖

【七】 二種の菩薩

【八】 信の義解。

【九】 忍ありと説く理由。

も、思惟し籌量して、心に忍ずると能はず、是の故に忍有りと説くなり。有人は二〇忍ずと雖も、邪  
 疑未だ斷せざるが故に、心濁りて不淨なり。是の故に淨有りと説く。有人は二一信忍にして、心淨な  
 りと雖も、而も淺あり、深あり。是の故に、深心を説く。二三四事の因縁の故に、一心に無上道を得ん  
 と欲し、餘事を欲せず、是の故に欲ありと説く。二二了了に決定して無上道を大と爲し、世間の餘事を  
 小と爲すことを知る。是の故に解ありと説く。二四欲解・定心を以ての故に、財を捨て、及び諸の惡心  
 慳恚等の煩惱を捨つ。是の故に捨を説く。捨の爲の故に能く精進す。是の  
 如き等の諸の功德有り。若くは般若波羅蜜多を得ず。若くは人身を壞し  
 て命終る時、若くは惡知識沮壞すれば、則ち菩薩道を失す。世間の功德の  
 故に世間の果報を受け、然る後に聲聞辟支佛地に墮し、無上道に至ること  
 能はず。此の中に佛は、五の譬喩を説きたまへり。般若は是れ行者の身な  
 り。浮囊等の物は、即ち是れ般若の方便なり。瓶は是れ菩薩道なり。般若の方便は是れ水なり。未だ  
 般若の方便と和合せざるが故に、六波羅蜜多の功德の水を受持して、無上道に至ること能はず。船  
 を補治せざるは、是れ菩薩の方便無きなり。信等の功德は寶物なり。是の五波羅蜜多等の諸の善法  
 は船なり。船と寶と處を異にするは、本願と乖異して、或は人天の樂を受け、或は二乘に墮す。二五大  
 利とは、所謂一切智等の佛法の寶なり。老病人は是れ信等の功德ある菩薩なり。六十二の邪見を斷せ

- 【一〇】 淨ありと説く理由。
- 【一一】 深心を説く理由。
- 【一二】 欲ありと説く理由。
- 【一三】 解ありと説く理由。
- 【一四】 捨を説く理由。
- 【一五】 大利の義解。

ざるが故に老と名け、百八等の諸の煩惱を斷せざるが故に病と名く。牀より起つとは、「三界の牀より起つて、我れ當に佛と作るべし」と。「而も」邪見煩惱の因縁の故に、菩薩道を成ずること能はざるなり。二人とは、般若及び方便なり。般若波羅蜜(多)は、能く諸の邪見煩惱の戲論を滅し、將に畢竟空の中に至らんとし、方便して將に畢竟空を出でんとするなり。

經

爾の時に、佛、須菩提に語り言はく、「善い哉、善い哉、須菩提よ、汝は諸の菩薩摩訶薩の爲に、佛に是の事を問ふ。須菩提よ、若し佛道を求むる善男子善女人有り、初發意より已來、「我が所の心を以て、布施し、持戒し、忍辱し、精進し、禪定し、智慧す。是の善男子善女人は布施の時、是の念を作す、我は是れ施主なり。我は是の人に施し、我は是の物を施す。我は戒を持し、我は忍を修し、我は精進し、我は禪に入り、我は智慧を修すと。是の善男子善女人は、是の施あり、是れ我が施なりと念す。乃至、是の慧あり、是れ我が慧なりと念す。何となれば檀那(波羅蜜(多))の中には、是の如き分別(無ければなり。此(岸)彼岸を遠離するは、是れ檀(那)波羅蜜(多))の相なり。尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多))の中には、是の如き分別無し。何となれば此(岸)彼岸を遠離すればなり。是れ般若波羅蜜(多)の相なり。是の人は此岸を知らず、彼岸を知らず。是の人は檀那波羅蜜(多)を爲さず、乃至一切種智の護る所と爲らざるが故に、聲聞辟支佛地に墮し、薩婆若に到ること能はず。

【三】我我所の心とは、我は是れ施主なり、是れ我が施す所なりとの心を懷くをいふ。

須菩提よ、云何が佛道を求むる人は方便無きや。須菩提よ、佛道を求むる人は初發心より已來、方便無くして布施、持戒、忍辱、精進、禪定を行ひ、智慧を修す。是の人は、是の如き念を作す、我は布施し、是の人に施し、是の物を以て施す。我は



至般若波羅蜜(多)も亦是の如し。

是の菩薩は我布施すと念ぜず、我は是の人に施し、是の物を用ふと念ぜず、我は戒を持す、是の戒ありと念ぜず、我は忍辱す、是の忍辱ありと念ぜず、我は精進す、是の精進有りと念ぜず、我は禪定す、是の禪定ありと念ぜず、我は智慧を修す、是の智慧ありと念ぜず。何となれば是の檀波羅蜜(多)の中には是の如きの分別無ければなり。此彼の岸を遠離するは、是れ檀(那)波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ尸羅波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ羼提波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ毗梨耶波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ尸羅波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ禪(那)波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ禪(那)波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ羼提波羅蜜(多)の相なり。此彼の岸を遠離するは、是れ毗梨耶波羅蜜(多)の相なり。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中には、是の如き分別無ければなり。

是の菩薩摩訶薩は此岸を知り、彼岸を知り、是の人は檀(那)波羅蜜(多)の護る所となり、尸羅波羅蜜(多)の護る所となり、羼提波羅蜜(多)の護る所となり、毗梨耶波羅蜜(多)の護る所となり、禪(那)波羅蜜(多)の護る所となり、般若波羅蜜(多)の護る所となり、乃至一切種智の護る所となるが故に、聲聞辟支佛地に墮せず、薩婆若に到ることを得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の方便力の護る所と爲るが故に、聲聞辟支佛地に墮せず、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得しと。

論

爾の時に、佛、須菩提の意を可とし、更に失を説きたまふ。因縁を行する菩薩は、信等の善法を行すと雖も、亦無上道を得ず。所謂、我我所の心を以て、六波羅蜜(多)を行するが故なり。是の中には此岸・彼岸を分別すること無く、遠離の相を以てす、是れ般若波羅蜜(多)なり。而も分別し著行

す、是を失と爲す。上に佛は無方便の義を説き給ふと雖も、無方便の名を説きたまはず。是の事をし  
て明了ならしめんと欲するが故に、須菩提に命じたまはく、「云何が方便有り、方便無きや」と。内に  
我が所の心無く、外に一切法の空を觀じ、相を取らず、般若の方便、乃至一切種智、菩薩を守護する  
が故に方便有りと名く。守護とは、五波羅蜜「多」の邊は功德力を得、般若波羅蜜「多」の邊は智慧力を  
得、二因縁を以ての故に道を失せざるなり。

(三七) 知識品第五十二を釋す。

釋

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、新學の菩薩摩訶薩は、云何が應に般若波羅蜜「多」・禪「那」波羅蜜「多」・毗梨耶波羅蜜「多」・廣提波羅蜜「多」・尸羅波羅蜜「多」・檀「那」波羅蜜「多」を學すべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「新學の菩薩摩訶薩、若し般若波羅蜜「多」・禪「那」・精進・忍・戒・檀「那」の諸の波羅蜜「多」を學せんと欲せば、先づ當に善知識の、能く是の深般若波羅蜜「多」を説く者に、親近し供養すべし。是の人は是の教を作す、「汝、善男子よ、所有る布施を一切阿耨多羅三藐三菩提に廻向せよ。善男子よ、所有る持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を一切阿耨多羅三藐三菩提に廻向せよ。汝は色を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提とすること莫れ。尸羅波羅蜜「多」・廣提波羅蜜「多」・毗梨耶波羅蜜「多」・檀「那」波羅蜜「多」を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとすること莫れ。尸羅波羅蜜「多」・廣提波羅蜜「多」・毗梨耶波羅蜜「多」・檀「那」波羅蜜「多」を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提とすること莫れ、內空、乃至無法有法空を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提

【三七】 新學の人は、般若に通ずる善知識に近づくべきを明し、知識の教説を示す、是れ此の品の眼目なり。

なりとする、こと莫れ。四念處・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとする、こと莫れ。四禪・四無量心・四無色定・五神通を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとする、こと莫れ。佛の十力、乃至十八不共法を以て、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとする、こと莫れ。何となれば、色を取らざれば、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、受想行識を取らざれば、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、檀(那)波羅蜜(多)。乃至般若波羅蜜(多)を取らざれば、便ち般若波羅蜜(多)を得、内空、乃至無法有法空、四念處より、乃至十八不共法を取らざれば、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。

善男子よ、是の深般若波羅蜜(多)を行ずる時、色を食ふこと莫れ。何となれば、善男子よ、是の色は食ふべき者に非ざればなり。受想行識を食ふこと莫れ、何となれば、受想行識は食ふべき者に非ざればなり。

善男子よ、檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を食ふこと莫れ。内空、乃至無法有法空を食ふこと莫れ。四念處、乃至八聖道分を食ふこと莫れ。四禪・四無量心・四無色定・五神通を食ふこと莫れ。佛の十力、乃至一切種智を食ふこと莫れ。何となれば、一切種智は食ふべき者に非ざればなり。善男子よ、須陀洹果、乃至阿羅漢果を食ふこと莫れ。辟支佛道を食ふこと莫れ。菩薩法位を食ふこと莫れ。阿耨多羅三藐三菩提を食ふこと莫れ。何を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提は食ふべき者に非ざればなり。所以は何となれば、諸法の自性は空なればなり」と。

【二八】 等五問、須菩提の新學の所行如何を問へるに對して、佛が菩薩の久行する微妙の事を以て答へ給ひし理由如何。

【二九】 二種の性空。

論

問うて曰く、(二六) 須菩提は新學の所行を問へるに、佛は何を以てか乃ち菩薩の久しく行する微妙の事、所謂一切法を取らず、一切法の性は空なるが故にと答へたまひしや。答へて曰く、諸法の性

空に二種有り、一には大菩薩の得る所、二には小菩薩の學する所、柔順忍にして智慧を以て心を發す。此の中には、但小菩薩の學する所の空を説けり。

復次に、實智慧の氣分有るを佛は數菩薩と爲し、若し「是」無き者は久しく餘の功德を行すと雖も、數菩薩と爲さず。譬へば、佛は聲聞法の中の頂法の相を説きたまへるが如し。三寶の中に於いて少信有る、是を頂法と名け、是の信は煖法に過ぎ、禪定を修して以て色界の心を生じ、佛の無礙解脱を得。是を小と爲すも凡夫の人に於いては大と爲す。是の如く、新發意の菩薩は、般若波羅蜜「多」の氣味を得るが故に、能く化を受け、名けて新學と爲し、五波羅蜜「多」の功德を過ぎ、凡夫に於いては大と爲すも、佛に於いては小と爲す。

復次に、佛は直に諸法の性空を説きたまはず。先づ善知識に供養し親近することを教へたまへり。善知識は爲に五波羅蜜「多」の功德を説く。善知識は種種に教化すと雖も、佛は但其の法を壊せざることを説きたまへり。所謂、色等の諸法に於いて貪らず、著せず、取らざるなり。譬へば、金翅鳥の子の始めて生るるや、一須彌より一須彌に至るが如し。菩薩も亦是の如く、初學より能く是の如き深智を生ず。何に況んや、久しく學するをや。又小火の能く燒くが如し、何に況んや、大なる者をや。菩薩も亦是の如く、新學の時、能く般若を以て、世間の法を轉じて、畢竟空ならしめ、諸の煩惱を燒く、何に況んや、力を具足することを得るをや。

經

【三〇】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は、能く難事を爲す。一切性空法の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を求め、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、能く難事を爲す。一切性空法の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を求めて、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。」

須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩は、世間を安隱にせんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、世間を安樂にせんが爲の故に、世間を救はんが爲の故に、世間に歸するが爲の故に、世間の依處たらんが爲の故に、世間の洲の爲の故に、世間の將導たらんが爲の故に、世間の究竟道の爲の故に、世間に趣くが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、世間を安隱にせんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、六道の衆生を拔出して、無畏の岸、涅槃の處に著く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、世間を安隱にせんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、世間を安樂にせんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の種種の憂苦愁惱を拔出して、無畏の岸、涅槃の處に著く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、世間を安樂にせんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、世間を救はんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生を生死の中の種種の苦より救ひ、亦是の苦を斷ぜんが爲の故に、而も爲に法を説く。衆生は法を聞き、漸く三乘を以て、而も度脫するを得。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は世間を救はんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提

【三〇】 菩薩の性空を知り、無上道の心を發すこと、甚だ希有なるを説く。

の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、世間に歸する爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の生老病死の相、憂悲愁惱の法を拔出し、無畏の岸、涅槃の處に著く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は世間に歸する爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、世間の依處たらんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に一切法の無依處なることを説く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、世間の依處たらんが爲の故に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が一切法は無依處なりや」と。佛の言はく、「色相續せざるは、即ち是れ色無生なり。色の無生なるは即ち是れ色不滅なり。色不滅なれば即ち是れ色無依處なり。受想行識、乃至一切種智も亦是の如し。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、世間の依處たらんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、世間の究竟道の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に、是の如き法を説く、色究竟相、是れ色に非ず、受想行識、乃至一切種智究竟相、是れ一切種智に非ず」と。須菩提よ、究竟相の如く、一切法相も亦是の如し」と。

須菩提言さく、「世尊よ、若し一切法は、究竟相の如くならば、諸の菩薩摩訶薩は、皆應に阿耨多羅三藐三菩提を行すべし。何となれば、世尊よ、色究竟相の中には、分別有ること無く、受想行識究竟相の中には、分別あること無く、乃至一切種智究竟相の中には、分別有ること無ければなり。所謂、是れ色なり、是れ受想行識、乃至是れ一切種智なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。色の究竟相の中には、分別あること無く、受想行識、乃至一切種智、究竟相の中

には、分別有ること無し。所謂、是れ色なり、乃至是れ一切種智なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の難事と爲す。

是の如く諸法寂滅の相を觀じて、而も心没せず、法ます。何となれば、菩薩摩訶薩は、是の念を作さく、是の諸の深法を我れ應に是の如く知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の如き寂滅微妙の法を當に衆生の爲に説くべしと。是を菩薩摩訶薩は、世間の究竟道の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は、世間の洲の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、若し江河、大海の四邊の水を斷するは、是を洲と爲す。須菩提よ、色も亦是の如く前後の際を斷じ、受想行識も前後の際を斷じ、乃至一切種智も前後の際を斷す。是の前後の際を斷するを以ての故に、一切法も亦斷す。須菩提よ、是の一切法は前後の際を斷するが故に、即ち是れ寂滅、即ち是れ妙寶なり。所謂空にして所得無く、愛盡きて餘無く、欲を離れて涅槃す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、寂滅微妙の法を以て、衆生の爲に説く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、世間の洲の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すと爲す。

云何が菩薩摩訶薩は世間の將導たらんが爲に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に色の不生・不滅・不垢・不淨を説き、受想行識の不生・不滅・不垢・不淨を説き、十二處・十八界・四念處、乃至八聖道、四禪・四無量心・四無色定・五神通の不生・不滅・不垢・不淨を説き、須陀洹果、阿羅漢果、辟支佛道の不生・不滅・不垢・不淨を説き、佛の十力、乃至一切種智の不生・不滅・不垢・不淨を説く。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、世間の將導たらんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すと爲す。

論

釋して曰く、須菩提は希有の心を發して、佛に白して言さく、「諸の菩薩は未だ煩惱を斷せず、大悲未だ具せず、未だ阿鞞跋致を得ず、諸法の本性空なることを知りて、而して能く無上道の心を發

す、是の事は甚だ難し」と。佛、其の言を、「是の如し」と可し、更に菩薩の希有の因縁を讀じたまへり。所謂、菩薩は世間を安隱にせんが故に發心す。(三) 安隱とは、能く一切の煩惱を破し、究竟して、變失せず。譬へば良薬は能く病を破し、甘苦を問はず、以て能く究竟して、病を除いて安隱なるが如し。故に佛は能く衆生をして、常に安隱ならしめたまふ。一世、二世の世間の樂を期せざる者は、法ありて安隱なりと雖も、而も樂しからず。有法は今世に苦にして、後世に樂なり。苦薬を服すれば、腹中安隱にして、口中は美ならざるが如し。是の故に説く、「佛は能く今世、後世の樂を與へたまふ」と。六道は無常の相なるが故に、安隱に非ず。是の故に「六道を出づるを安隱と名く」と説く。(四) 世間の樂とは、因縁に著するが故に、久しうして後必ず憂惱を生じ、名けて樂を爲さず。涅槃の樂は始終變ずること無きが故に、憂苦を離るるを樂と爲すと説く。(五) 世間を救ふとは、人の怨賊の爲に逐はれ、若くは親戚、若くに官力の能く救ふが如し。衆生も亦是の如く、惡罪、諸の煩惱の因縁、及び魔民に逐はるるに、唯諸佛のみ能く法を説いて救護したまふ。(六) 世間に歸すとは、人の暴風、疾雨に遇へば、必ず房舎に歸するが如く、世間の種種の邪見煩惱等、身心の内外の苦惱、老病死、諸の憂苦等、若し佛に歸すれば、佛は種種の因縁を以て、其の憂悲苦惱を拔きたまふ。(七) 依處とは、一切の有爲法は和合の因縁より生ずるが故に自力無く、依止すべからず。衆生は苦

- 【三】 安隱の義解。
- 【四】 世間の樂と出世間の樂。
- 【五】 世間を救ふの義解。
- 【六】 世間に歸すの義解。
- 【七】 依處の義解。

の爲に逼られ、來つて佛に依止す。佛は爲に無依止の法を説きたまへり。無依止の法とは、是れ眞實にして、所謂無餘涅槃なり。色等の五衆は滅して更に相續せず。相續せざれば、即ち是れ不生、不滅なり。不生、不滅なれば、即ち是れ畢竟空にして依止する處無きなり。

問うて曰く、若し依止する處無ければ、何を以てか依止を説くや。答へて曰く、依止に二種

有り。一には愛見等の諸の煩惱を以て、有爲法に依止す、二には、清淨の智慧は涅槃に依止すと説き、煩惱の見る故に依止無しと説く。究竟道とは、所謂、諸法實相、畢

竟空なり。色等の法は、前際の中も無く、後際の中も亦無く、現在の中も亦無し。凡夫の人は、業果報の、諸の情力を憶想分別するが故に、顛倒の

見あり。聖人は、智慧の眼を以て之を観るに、皆虚誑不實なり。前後中の如きも亦爾なり。若し先後無くんば、云何が中有らん。能く是の如く衆生

の爲に法を説いて、則ち衆生を究竟第一道中に安處す。世間の洲とは、洲の四邊に地無きが如く、色等の法も亦是の如し。前後皆不可得なり。中間は究竟道の中に破するが如く、前後空に入るが故に

中間も亦空なり。水とは三漏四流なり。諸の煩惱及び業果報の中には、一切法は畢竟空にして、取る所無く、所謂、涅槃なり。是を洲と爲す。衆生は四流の水中に没在し、佛は八正道の船を以て、涅槃

の洲上に引き著けたまふ。是の如き種種の因縁もて、衆生を接度するを名けて、將導と爲す。

- 【三六】 無依止の法の義解。
- 【三七】 第六問、若し依止處なくんば、何故に依止を説くか。
- 【三八】 二種の依止。
- 【三九】 究竟道の義解。
- 【四〇】 世間の洲の義解。

云何が菩薩摩訶薩は、世間に趣く爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に、色は空に趣くと説き、受想行識は空に趣くと説き、乃至一切種智は空に趣くと説く。衆生の爲に色は非趣、非不趣を説く。何となれば、是の色は空相にして趣にも非ず、不趣にも非ざればなり。受想行識は趣に非ず、不趣に非ずと説く。何となれば、是の受想行識は、空相にして、趣に非ず、不趣に非ざればなり。乃至一切種智は趣に非ず、不趣に非ず、何となれば、此の一切種智は、空相にして趣に非ず、不趣に非ざればなり。

是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、世間の趣の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。何となれば、一切法は空に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、空中には趣も不趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は無相に趣き、是の趣過ぎず、何となれば、無相の中には、趣も非趣も不可得なればなり。

須菩提よ、一切法は、無作に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、無作の中には趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は無起に趣き、是の趣過ぎず。何となれば無起の中には趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は無所有、不生、不滅、不垢、不淨に趣き、是の趣過ぎず。何となれば無所有、不生、不滅、不垢、不淨の中には趣も非趣も不可得なればなり。

須菩提よ、一切法は夢の如くに趣き、是の趣過ぎず。何となれば、夢中には、趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は幻に趣き、響に趣き、影に趣き、化に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、是の化等の中には、趣も非趣も不可得なればなり。

須菩提よ、一切法は無量無邊に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、無量無邊の中には、趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は不與不取に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、不與不取の中には、趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は不舉不下に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、不舉不下の中には、趣も非趣も不可得なればなり。

須菩提よ、一切法は不増不減に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、無増無減の中には、趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は不來不去に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、不來不去の中には、趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は不入・不出・不散・不著・不斷に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、不著・不斷の中には、趣も非趣も不可得なればなり。

須菩提よ、我・衆生・壽命・人・起者・使起者・作者・知者・見者に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、我乃至知者見者は畢竟不可得なればなり。何に況んや、趣と非趣と有らんや。須菩提よ、一切法は此の常に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、常に畢竟不可得なればなり。云何が當に趣と非趣と有るべけんや。

須菩提よ、一切法は淨・樂・我に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、淨・樂・我は、畢竟不可得なればなり。云何が趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、無常・苦・不淨・無我に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、無常・苦・不淨・無我は畢竟不可得なればなり。云何が當に趣と非趣と有るべけんや。

須菩提よ、一切法は、欲事に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、欲事は畢竟不可得なればなり。何に況んや、當に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、瞋事・癡事・見事に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、瞋事・癡事・見事は畢竟不可得なればなり。何に況んや、當に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は如に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、如の中には、來無く、去無ければなり。

須菩提よ、一切法は、法性・實際・不可思議性に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、法性・實際・不可思議の中には來無く、去無ければなり。須菩提よ、一切法は、平等に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、平等の中には、趣も非趣も不可得なればなり。須菩提よ、一切法は不動相に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、不動相の中には、趣も非趣も不可得なればなり。

須菩提よ、一切法は色に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、色は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、受想行識に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、受想行識は畢竟不可得なり。云何が常に趣と非趣と有るべけんや。十二處、十八界も亦是の如し。

須菩提よ、一切法は檀(那)波羅蜜(多)に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、檀(那)は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、尸羅波羅蜜(多)に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、尸羅は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。

須菩提よ、一切法は、廣提波羅蜜(多)に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、廣提は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は毗梨耶波羅蜜(多)に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、毗梨耶は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は禪(那)波羅蜜(多)に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、禪(那)は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。

須菩提よ、一切法は、般若波羅蜜(多)に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、般若は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、内空に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、内空は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、外空に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、外空は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。

須菩提よ、一切法は内外空に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、内外空は畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。乃至一切法は、無法有法空に趣き、是の趣過ぎず。何となれば、無法有法空は、畢竟不可得なるが故に、云何が常に趣と非趣と有るべけんや。

須菩提よ、一切法は、四念處、乃至八正道分に趣き、是の趣過さず。何となれば、四念處、乃至八正道分は畢竟不可得なるが故に、云何が趣と非趣と有るべけんや。須菩提よ、一切法は、佛の十力、乃至一切種智に趣き、是の趣過さず。何となれば、一切種智の中には、趣と非趣とは得べからざればなり。

須菩提よ、一切法は須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道に趣き、是の趣過さず。何となれば、須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提に趣き、是の趣過さず。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提の中には、趣と非趣とは得べからざればなり。須菩提よ、一切法は阿耨多羅三藐三菩提に趣き、是の趣過さず。至辟支佛道の中には、趣と非趣とは得べからざればなり。須菩提よ、一切法は阿耨多羅三藐三菩提に趣き、是の趣過さず。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提の中には、趣と非趣とは得べからざればなり。須菩提よ、一切法は、須陀洹、乃至佛に趣き、是の趣過さず。何となれば、須陀洹、乃至佛の中には、趣と非趣とは得べからざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)は、誰か能く信解する者ぞと。佛、須菩提に告げたまはく、有る菩薩摩訶薩は、先づ諸佛の所に於て、久しく六波羅蜜(多)を行じ、善根純熟して無數百千萬億の諸佛を供養したてまつり、善知識と相隨ふ。是の輩の人は能く深般若波羅蜜(多)を信解す」と。須菩提、佛に白して言さく、世尊よ、能く是の深般若波羅蜜(多)を信解する者は、何等の性、何等の相、何等の貌有りやと。佛の言はく、「欲圖・縁を斷じ離るるは、足れ性・相・貌にして、是の菩薩摩訶薩は、則ち能く深般若波羅蜜(多)を信解す」と。

【四】第七問、上には諸事の中に略説し、今、趣中に廣説する理由如何。

論 問うて曰く、上には諸事の中に略説し、今は趣中に何を以てか廣説するや。答へて曰く、趣は是れ總て、上の九事の會歸なり。是の故に多く説けり。

復次に、安樂等及び趣は皆同じく一義にして、俱に衆生に出で、涅槃に著するが故なり。若し事

を廣説せば、則ち盡くべからず。趣は最も後に在るが故に廣説す。當に知るべし、餘の者も亦應に廣く説くべきことを。色等の法は空に趣くとは、虚空の但名のみ有りて而も法無きが如く、色等の法も亦爾なり、終に空に歸す。諸法の究竟相は、必ず空なるが故に、餘は皆虚妄なり。人の初に善言ありと雖も、久久しければ乃ち情實を知るが如く、色等の諸法も亦是の如し。無餘涅槃に入る時、虚空と異なること無し。當に知るべし、先にも亦是の如きことを。但だ凡夫は、顛倒の果報の故に、異を見るのみ。一切法は空等の諸相を過出すること有ること無し。人の虚空を過出せんと欲するに得べからざるが如し。我等の十六の名は、皆五衆の和合に因る。假に此の名有りて、實法あること無し。云何が當に趣と非趣と有るべけんや。若し常・淨・樂我等の四顛倒は、四聖行を破し、常等の四法の如きは得べからず。顛倒なるを以ての故なり。色等の諸法も亦是の如し。常等の得べからざるが故に、無常等は常等より出づるが故に亦不可得なり。是の故に一切法は常等に趣き、無常等に趣くと説く。須菩提、佛に問ふ。「是の法は甚深微妙なり。誰か當に信解すべき者ぞ」と。佛答へて説きたまはく、「久行等の因縁もて能く信す」と。更に問ふ、「久行等の人は、何等の相ありや」と。佛答へたまはく、「是の人は三毒の心を離れ、亦是の離れたるをも見ず。深く諸法實相に入るが故なり」と。

問うて曰く、是の人は未だ無生法忍を得ず、云何が三毒を斷ずと言ふや。答へて曰く、斷に二

【四二】 色等の法は空に趣くの義解。  
 【四三】 第八問、未だ無生法忍を得ず、如何が三毒を離るといふか。  
 【四四】 二種の斷。



波羅蜜(多)を壞修と爲すと。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、色を壞するが故に、般若波羅蜜(多)を壞修と爲し、乃至一切種智を壞するが故に、般若波羅蜜(多)を壞修と爲すと。爾の時に、佛、須菩提に告げたまはく、「是の深般若波羅蜜(多)の中に、阿耨跋致の菩薩摩訶薩は、應當に驗知すべし。若し若薩摩訶薩、是の深般若波羅蜜(多)の中に著せざれば、當に知るべし、是れ阿耨跋致なり。禪(那)波羅蜜(多)、乃至、檀(那)波羅蜜(多)の中に著せず、四念處より乃至一切種智に著せざるは、當に知るべし、是れ阿耨跋致なり」と。

論

問うて曰く、(四六)般若波羅蜜(多)は趣に非ず、不趣に非ず。須菩提は何を以ての故に、般若を行ずる者は、何處に趣き去るやと問ひ、又佛は何を以てか、薩婆若に趣くと答へたまひしや。答へて曰く、(四七)外道の言はく、「諸法は因より果に趣き、先世より今世に入り、今世より後世に趣く」と。是の常顛倒を破するが故に、趣と不趣は無しと言ふ。此の中に須菩提は無著の心を以て問ひ、佛は無著の心を以て答へたまへり。般若波羅蜜(多)は畢竟空にして、無障無礙なり。無障無礙解脱を得るが故なり。無障無礙の因果相似するが故に、深般若を解する者は一切種智に趣くと言ふ。須菩提言さく、菩薩の般若波羅蜜(多)を知る者を、一切衆生の歸趣する所と爲す。子の苦惱の爲に逼らるれば、則ち父母に趣くが如しと。

問うて曰く、(四八)何を以ての故に、但だ菩薩の深般若波羅蜜(多)を解するを、衆生の歸趣する所と爲

【四六】 第九問、智度は趣に非ず、不趣に非ず。今それ須菩提が般若の行者は何處に趣き去るやと問ひし理由如何。  
【四七】 外道の常見を破せんが爲に無趣といふ。  
【四八】 第一〇問、深般若波羅蜜多を解する菩薩を衆生の歸趣する所と爲す理由如何。

すや。答へて曰く、菩薩は、衆生の中に於いて、大悲心有るが故に、常に般若波羅蜜〔多〕を修習し、修するを以ての故に、能く一切諸法を解して、皆般若波羅蜜〔多〕に入る。是の故に、般若波羅蜜〔多〕を修すれば、即ち一切法を修す。般若は定實の法の得べきもの無きが故に、經中に説く、「修する所無きは、是れ般若波羅蜜〔多〕を修するなり」と。般若波羅蜜〔多〕の中には、一切の諸觀は、過有るが故に受けず、是を修を受けずと名く。壞修とは、一切の法は、無常にして散壞するが故に、壞修と名く。壞壞すべき法とは、所謂色等、乃至一切種智なり。佛は須菩提の所説を可としたまふ。上品には未だ阿鞞跋致の菩薩の性・相貌を説かず。今應に験試して、深般若波羅蜜〔多〕の中に於て、著するや不やを知るべし。若し著すれば、則ち非なり。若し著せざれば、則ち是れ其の相なり。吾般若波羅蜜〔多〕を行ずる菩薩に二種有り。一には般若波羅蜜〔多〕に因りて、一切法の畢竟空を觀じ、般若も亦自ら空なり、二には般若も亦空なることを觀すること能はず。是の故に經中には、試みて著不知る。

【四九】 壞修の義解。  
 【五〇】 智度を行ずる菩薩に二種あり。  
 【五一】 不退轉の菩薩の般若に習熟せる相を明す。

經

五二 若し有る阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、深般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、他人の語を以て堅要と爲さず亦他の教に隨つて行ぜず。阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、欲心・瞋心・癡心の爲に牽かれず。若し阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、六波羅蜜〔多〕を遠離せず。

若し阿耨跋致の菩薩摩訶薩は、深般若波羅蜜(多)を説くを聞く時、心に驚かず、没せず、怖かず、畏れず、悔いず、歡喜し、樂  
しんで聞き、受持し、讀誦し、正憶念し、説の如く行す。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩は、先世に已に是の深般若波  
羅蜜(多)の中の事を聞き、已て受持し、讀誦し、説き、正憶念せしことを。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、大威徳ある  
が故に、是の深般若波羅蜜(多)を聞いて、心に驚かず、怖かず、畏れず、没せず、悔いず、歡喜し、樂しんで聞き、受持し、  
讀誦し、正憶念すればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、深般若波羅蜜(多)を聞いて驚かず、怖かず、乃至正憶念せば、  
世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜(多)を行すや」と。佛の言はく、「一切種智に隨順する心もて、是の菩薩摩  
訶薩は、應に是の如く般若波羅蜜(多)を行すべし」と。「世尊よ、云何が、一切種智に隨順する心もて、是の菩薩摩訶薩は、  
應に是の如く般若波羅蜜(多)を行すべしと名くるや」と。佛の言はく、「空を以て隨順する、是を菩薩摩訶薩は、深般若波羅  
蜜(多)を行すと爲す。無相・無作・無所有・不生・不滅・不垢・不淨を以て、隨順して、是の菩薩摩訶薩は、應に是の如く般若波  
羅蜜(多)を行すべし。夢・幻・焰・響・化の如きを以て、隨順するは是れ般若波羅蜜(多)を行するなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「佛の説きたまはく、空を以て隨順し、乃至夢の如き、幻の如きに隨順する、是れ般若波羅  
蜜(多)を行するなり」と。世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、何の法、若くは色、若くは受想行識、乃至一切種智を行するや」と。  
佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は色を行ぜず、受想行識を行ぜず、乃至一切種智を行ぜず。何となれば、是の菩  
薩の行處には、作法無く、壞法無く、從來する所無く、亦去る所無く、住する處無く、是の法は數ふべからず、量あること  
無し。若くは數無く、量無し、是の法は得べからず、色を以て得べからず、乃至一切種智を以て得べからず。何となれば、  
色は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ色なり。乃至一切種智は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ一切種智な

り。色の如相、乃至一切種智の如相、皆是れ一如にして二無く別無ければなり」と。

論

釋して曰く、阿鞞跋致の菩薩の試みる所の事は、他の語言中に於いて念を生ぜず、是の中に、實と不實と有り。何となれば、他人に二種有り。在家の人は、五欲に著し、虚誑、不淨を樂しみ、出家の外道は、諸の邪見、不實に著す、此等の所説は皆實事無し。是の故に信せず。自ら諸法實相を得るが故に、乃ち佛身來りて説くに至るとも、諸法實相を破する者を亦信せず。無爲法を得るが故に、

心則ち安重にして、復た移轉せず。是の菩薩は未だ佛道を得ずと雖も、貪欲等の諸の煩惱を折薄するが故に爲に牽れず。心常に六波羅蜜〔多〕を離れず。善法の果報の味を知るが故に、心常に愛樂して六波羅蜜〔多〕を離れず。是の如き等の種種の因縁の故に、深般若を聞くも怖かす、畏れず、歡喜して聞き、讀誦せんと欲し、義を問ひ修習す。雷霆には小鳥は則ち怖畏し悶死し、孔雀の大鳥は歡喜し儼戲するが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦是の如し。邪見の凡夫は聞いて則ち恐怖し、阿鞞跋致の菩薩は聞いて則ち歡喜し、心に厭足なく、是の故に歡喜し樂しんで聞くと説く。是の中に佛、因縁を説きたまはく、「是の菩薩は過去世に於いて、已に深般若波羅蜜〔多〕を問ひ、多く諸の福德智慧を集むるが故に大威徳あり。大威徳有るが故に怖畏せず」と。須菩提問ふ、「是の菩薩は深般若波羅蜜〔多〕を聞いて怖畏せずと雖も、是の般若には定相無し。云何が應に行すべき」と。佛の言はく、「一切種

【五】雷霆は小鳥これを聞けば怖畏し悶死すれども、孔雀は歡喜す。邪見の人と不退の菩薩の般若に於けるも亦是の如し。

智に隨順する心なり」と。

問うて曰く、「是の菩薩は未だ一切種智を得ず、云何が能く順するや。答へて曰く、是の故に説く、「畢竟空心に順すれば、則ち一切種智心に順す」と。一切種智は是れ寂滅の相なり。佛、後品の中に説きたまはく、「一切寂滅の相は是れ一切種智なり」と。是の故に、「畢竟空心に順すれば、則ち一切種智に順す」と言ふ。無相・無作・虚空・無生・無滅・無垢・無淨・如夢も、亦是の如し。爾の時に、須菩提問ふ、「畢竟空に順する心は、何等の法を觀するや」と。佛答へたまはく、「色、乃至一切種智を觀せず。何となれば、智慧もて實事を求めんと欲するに、色等の有爲の作法は皆虚妄にして、一切種智は是れ實法なり。實法なるが故に有爲法を過ぎ、有爲法を過ぐるが故に是の法は無作なりと説く。無作とは無壞法なり。無壞とは、是の法は六波羅蜜(多)より來らざるが故に從來する所無しと言ひ、佛法の中に入らざるが故に去る所無しと言ひ、有爲にして虚誑なるが故に無爲法の中に住せず。憶想分別無きが故に亦住せず、五衆の和合の故に六道は數壞すると有り。五衆相續するが故に則ち無數無量なり。無數無量なるが故に則ち語言の道斷え、語言の道斷ゆるが故に、以て色等の諸法を行じて得べからず。佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、「色等の諸法は即ち是れ薩婆若なり、薩婆若は即ち是れ色等の諸法なり」と。何となれば色等の諸法の如は、即ち是れ薩婆若の如なり。薩婆若の如し、即ち是れ色等の諸法の如なり

【五】第一一問、未だ一切種智を得ざる菩薩は、如何にして能く順するか。

ればなり。是を以ての故に、「是の如は無二無別なり」と説く。

大正九年七月十五日  
昭和二年七月十五日  
發行  
再發行  
刷

# 著作權所有

國譯大藏經 論部第三卷

【非賣品】

(岡山製本)

編輯者兼  
行輯者

國民文庫刊行會

東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作

東京市本郷區西片町十番地

印刷者

君島潔

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

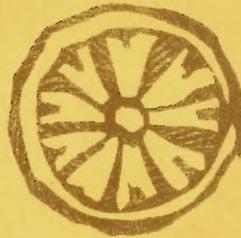
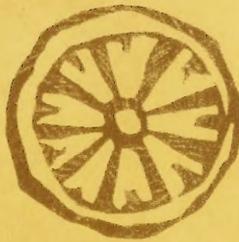
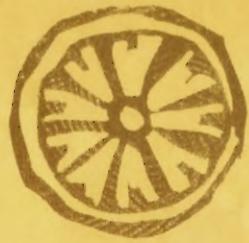
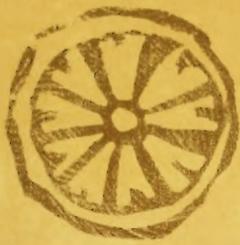
## 發行所

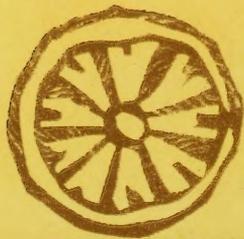
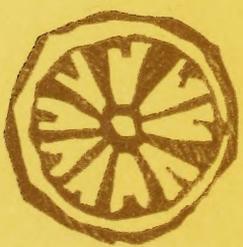
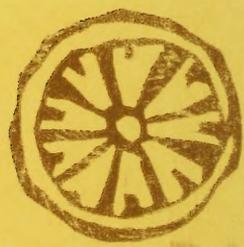
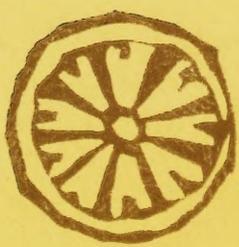
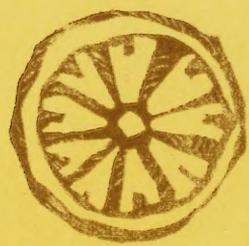
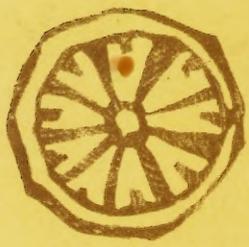
電話神田(五三三八)番  
振替東京一八五七二番

## 國民文庫刊行會









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3712

